

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文藝誌 ■

7
月
号



7

July-'68

奇譚クラブ

昭和四十三年七月号

定価三五〇円

THE KIBAN CLUB

Published Monthly by the Kibansha Club

Kansai, Japan



7月号 ¥ 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

前篇 続篇 合編

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齢の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の饗宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によつて「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘つて本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」収録内容見出し一覧

- 前篇
- 第一章 発端(静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
 - 第二章 陥穽(二度の嫌がらせ)
 - 第三章 美人探偵(落花粉々)
 - 第四章 洗腸図(強制屈伏)
 - 第五章 救援者(羞恥地獄一親念の座)
 - 第六章 救援の失敗(逆転一瞬)
- りもの
- 第七章 好餌(京子の屈伏淫獣の餌)
 - 第八章 悪魔の哄笑(毒牙は迫る)
 - 第九章 地下室(悪鬼の饗宴)
 - 第十章 翻弄(屈辱と羞恥一身体に立つ夫人)
 - 第十一章 蛇の執念(裸踊りおしめ使う夫人)

- 第十二章 姉妹危し(屈辱の狼ぐつわ)
 - 第十三章 調教師(遂に京子も)
 - 第十四章 美津子受難(二人の美女)
 - 第十五章 結末(美津子の屈伏)
- 続篇
- 第一章 密室の秘密(洗面)
 - 第二章 脱走の失敗(美津子の脱走)
 - 第三章 華やかな饗宴(悪魔の計画)
 - 第四章 地獄屋敷へ新顔(新たな獲物)
 - 第五章 翻弄されるカップル(美少年と美少女)
 - 第六章 一千万円の身代金(正気づいた小夜子)
 - 第七章 身代金奪取の失敗(小夜子の受難)
 - 第八章 涙の宣誓文(美女と木馬)
 - 第九章 恐怖の逆転劇(悪魔の相談)
 - 第十章 奇妙な三々九度(鬼女の囁き)
 - 第十一章 飼育される白い動物(美しき敗北者)
 - 第十二章 悪魔と悪女の悪業(恐ろしい仕事)
 - 第十三章 屈辱の地獄図(猫とねずみ)
 - 第十四章 逃走の恐怖と失敗(子の結末)
 - 第十五章 悪魔達の残忍な所業(朝の酒)
 - 第十六章 落花無残の修羅場(白いコンビーロ)
 - 第十七章 淫らな美女の調教(嵐の後)
 - 第十八章 すさまじいシヨ(の展開)
 - 第十九章 汚水にまみれた宝石(流血の心)
 - 第二十章 華々しき美女の屈伏(一躍去つて)
 - 第二十一章 対峙する美女と美女(嵐に立つ)
 - 第二十二章 あくどい陥穽(修羅図)
 - 第二十三章 羞恥図の展開(復讐の生)

直接お申込み 定価五〇〇円 略号「花特」

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第七集

山原清子 妖艶緊縛 **刺青の魅力を探ぐる** 写真集

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集 **刺青の女王** 山原清子の魅力の隅から隅までを抉り出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄じいポーズ満載)

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子 **女斗と緊縛競艶写真特集**

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開 ◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第九集

「女性刑罰拷問特集」 **西洋篇**

革具に拘束される女 七十二葉

モデル 清楚な美女乃々子 グラマーで美貌の大塚啓子 真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によつて厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによつてグラビア写真集として、ここに提供します。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生地のかきかき豊富な写真資料によつてマニアの非お申込み願います。

女性愛読者の初々しい緊縛フォト紹介

「長井葉津子さん」

四月号の一六四頁で懸賞「告白」を手記体験入選作品「白い肌の告白」を掲載して一躍有名になった。長井葉津子さんは五月号でも山本一章氏の「カメラ・ルポ」に登場して、その初々しい緊縛裸身を登場当りの諒解のもとに数度に亘って彼女との解の撮影、特に彼女のエネマシリンジ、イルリガートルなどを活用して浣腸フォトの撮影にも成功しました。極鮮明な印刷紙に焼付けた長井葉津子嬢の飾り気のない美しい緊縛フォトと浣腸フォトを是非ご覧下さい。まるで直接彼女と逢っているような楽しい気持ちにさせてくれることと思います。

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
小柄だがピチピチとした若肌が首縄と股間縛りで映えている。

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそV
両手首をX型に吊られて無防備の白い肌が擦り責めを待っている。

全裸高手小手麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よのV
一糸まとわぬ麗わしの肌が厳し

全裸股間縛り媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よやV
始めて受ける羞恥の媚目に巧まざる媚が魅惑的に全身に漲る。

強烈変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よいV
柔軟な肢体は首が膝頭に喰い込む程屈曲されても全裸美を保つ。

正座猿ぐつわ仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふV
豆絞りの猿ぐつわで全裸のハツコは正座させられてうなだれる。

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえV
海老責めにされた全裸の女体は僅かに脚をばたつかせてもがく。

女体一つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬV
白いお尻を高々と空に突き立てて二つ折りに縛られ女体は狂う。

あぐら縛り全裸晒

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあV
強制されたアグラは若い彼女にとっては死よりも辛い仕置だ。

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よたV
イルリの嘴管から浣腸液は迫ってくるが縛られている身は。

エネマと縛の恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よてV
可憐な臀部にエネマの管は不気味だが縛られた全裸の身が。

浣腸器を愛撫する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よるV
身はたとえ全裸で縛られていても、いとしい浣腸器の管を口に。

襲いくる嘴管の先

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よりV
お尻をつき出した浣腸ポーズの裸身に今まさに襲いくる嘴管。

エネマ責めの恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よるV
豆絞りの猿、強烈な縛り。エネマのゴム管は情容赦なく迫る。

強制浣腸責め序曲

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よかV
浣腸に興味があるのだと告白したのだけど、この責めには？

中河恵子の臨月腹

出産を目前に控えて愈々最後の

チャンスの一日、便々たる太鼓腹をレンズの前に晒してくれた。

見事な臨月腹妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よちV
彼女が一番大きなお腹と乳房を中心に焦点を合せた見事な大写真。

臨月妊婦全裸鑑賞

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よへV
便々たる臨月腹を晒すのも露出癖の彼女には一つの快楽だった。

転された緊縛妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よほV
胎動する太鼓腹をどきりと投げだして縛られた裸身がうごめく。

臨月妊婦革紐縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よにV
柔肌に喰い込む革紐が臨月の妊婦なるが故に一層痛々しいのだ。

臨月妊婦麻縄縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よらV
むごたらしい麻縄で荒々しく縛られて尚昂まる臨月の妊婦腹。

麻縄でくびった腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よはV
トゲトゲしい麻縄が臨月の腹部をくびって一層巨大に見せる。

◎お申込みは大阪阿倍野局私書箱第十四号箕田京二宛へ願います。

〈本 文〉

本誌自粛の徹底……………	編集部……………(9)
〈創作〉俺にも一言『情痴の記』に依り予世場良三……………	(10)
あぶ・らぶす・こんと……………	水沢 登……………(16)
SMカメラ・ハント増田みゆき・木村洋子の巻……………	
『連縛無残像』……………	辻村 隆……………(18)
谷崎文学「少年」について……………	夢野 洋……………(36)
フェチ・ストーリー ちいさな奔流……………	香川 泳三……………(38)
縛り映画のことなど……………	千草 忠夫……………(46)
連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄(第三回)……………	白鳥 大蔵……………(48)
異論『腰元物語』……………	牧 高志……………(58)
体験告白 パンティ愛用について……………	岩崎 正行……………(67)
探奇考料 〈娼業と性具〉……………	斎藤 夜居……………(70)
訪欧土産 マリアンの思い出……………	佐野 寿……………(80)



奇クサロン……………編集部構成……………(23)

マゾ女性に憧れ……………	園田 隆……………(1)
サロン楽我記 〈第四十九回〉……………	辻村 高志……………(2)
美人コンテストに思う……………	板橋 淳……………(3)
SM漫画「なにの跡?」〈ある夫婦〉……………	九美 淳……………(4)
感想文「SMエッセイ」……………	加藤真佐夫……………(5)
編集部だより……………	編 集 部……………(6)
あるポーズ……………	愛知 葉子……………(7)
最近の縛り演劇、映画から……………	東山 映史……………(8)
寸感 サックバラン時評……………	マニアテング……………(9)
僕のイメージ画集……………	
「最 期?」……………	室井亜砂路……………(10)
「落し責め」……………	幻 幸三郎……………(11)
〈詩〉ある檻慾……………	菊地 淳子……………(12)
夫婦プレイフォト寸感……………	野田 進……………(13)
憧れの妊婦ヌード……………	瀬沼 四郎……………(14)
緑魔子の引廻し……………	佐原陽一郎……………(15)
手記・告白について思う……………	太田 三郎……………(16)
〈詩〉公園……………	青井 松造……………(17)
夫婦プレイなど支持する……………	三木 谷三……………(18)
雑誌 紹介……………	和田 平助……………(19)
「小さな目」など……………	麻生 保……………(20)
イメージ画「鬼ゴッコ」……………	遠藤 春一……………(21)
趣味の合成フォト……………	桐葉 功生……………(22)
考案実験レボ「8文字方式」……………	芝 利好……………(23)
M日記 街中での受感……………	押敷 好三……………(24)

漫談千一夜物語『薔薇と蜜蜂』……………	田代 俊夫……………(84)
戦国秘話 紅花のよそおい……………	朱倉 敬生……………(94)
「新分野開拓」に望む……………	江川 詩二……………(110)
濡れにぞ濡れし 〈浮気のすすめ〉……………	芳野 眉美……………(116)
SM映画感想 『足立正生の作品について』……………	辻 雪男……………(125)
懸賞入選作品 理恵女献身(第三回)……………	沢潟 しの……………(128)
浪花放談 データーと籠抜けのはなし……………	能美 積……………(143)
連載S小説『花と蛇』(続編第四十四回)……………	団 鬼六……………(166)
「未知の願望」に寄す 〈河上ユリ嬢へ〉……………	橘 雅美……………(162)
ガンベッタ 〃復 讐〃 (完結)……………	千葉 青鬼……………(166)
机上籠郭 法律雑考……………	井上 俊彦……………(175)
S・C・R 〈性問題相談室〉案内……………	弓削 達人……………(181)
創作—妖郷記 (ようごうき)—……………	梓 蕩也……………(182)
体験談 「フンドシ愛好記」……………	文田 利子……………(202)
ピンク映画シナリオ『肉の飼育』……………	団 鬼六……………(212)
読者通信……………	編集部選……………(252)
「カット漫画」ビックリさすなよ……………	九美 淳……………(252)

☆新しい女性の華麗な責めフォト紹介

最近の誌上を賑わした美しい女性達の、惚々とする素晴しい緊縛体と、めめめ悦びムード溢れる印刷紙焼付の極めて鮮明なる写真をマニアのために提供します。

全裸後手柔肌縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こよ
垢ぬけした近代のフェイイスを持つ伸びやかな全裸の肢体に、後手の細目がむごたらしく絡む。

乳房強烈膨隆責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こわ
すべすべとした丸味を持つ乳房を上下左右から締め上げてむくむくと盛り上げた後手縛りの全裸。

海老責めに苦悶す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こお
長身の柔軟な肢体は、無防備な裸目によって重ね餅となり、無防備の裸身を晒したまま美貌の顔で仰ぐ。

全裸の全身を晒す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こる
高々と後手首を背中に掲げて縛られた均整のとれた裸身は、その全身を晒して惚々とする眺めだ。

煙草責めに喘ぐ女

大手札二枚 一組 略号 三〇〇円
佐々木真弓 略号 八こぬ
身動きの出来ない後手縛りで美しい裸身を曝した女に火のついた煙草をくわえさせて責める。

麗姿に映える光彩

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こほ
強烈なトップライトに浮かび上がった縛られた全裸身は、素晴らしい美しさで輝くように映えている。

臀部強調後手縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こる
笑窪をもった豊かな臀部をこれみよがしに突き出させられて後手縛りの女体は、いたくはにかむ。

羞恥に悶える全裸

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こに
膝頭が口にくくまで二つ折りに縛られた女体は、その無防備を羞らって足指先をくの字に曲げる。

ホステスの緊縛体

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こち
全裸で後手に縛られた女体を晒してホステス稼業の微笑を洩らし、美しい表情と肢体を捧げる。

二つ折りで責める

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こへ
後手縛りの細と膝頭とを連絡して二つ折りとした女体の流し目の表情と反りかえった足指の表情。

脈打つ全裸臨月腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八こふ
月満ちた便々たる妊婦腹が麻縄できつく締め上げられて怒張した血管がドキドキと脈打っている。

革紐の臨月股間縛

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八こや
まんまるく膨れ上った臨月腹の中央を皮紐が股間縛りとなつて締めつける臨月妊婦責めの醍醐味。

猿轡の臨月妊婦腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八ここの
豆絞りの猿ぐつわを噛まされた臨月の妊婦は、厳しい麻縄縛りで大きく喘ぎつつ被虐の境地に浸る。

卓上の股間しばり

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八こそ
テーブルの上で置かれた股間縛りの人形は、どのような動いても豊満な臀部をさらけ出すのだ。

羞恥の足挙げ責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八これ
豆絞りの猿ぐつわで柱に縛られ

た女体は固く閉じた足首を縄で柱に吊り上げられて羞恥に悶える。

悦虐責めの終着駅

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八こた
身動き出来ない後手縛りで両の足首には、それぞれ縄を掛けられて思いきり左右に引っ張ってさんざんにいたぶられた挙句の果て。

片足挙げて鞭打ち

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八こら
ムチ打ちに徹した美貌の夫人の片足を張り裂けるばかりに引き上げてムチで責めた新しいフォト。

柔肌に答は弾ける

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八こな
真白い柔肌に実際に力まかせにムチを揮って、その時の全身の表情をストロボにてキャッチした。

あぐら縛りで観賞

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八こえ
鬼六先生の趣向で全裸の麻里子をアグラに坐らせて縛りあげた鬼六対談の際のプレイフォト。

対談用に縛られる

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八こて
二者対談のあとで二人によって縛られる左近嬢の肢体をスナップした珍しい緊縛フォト。

◎お申込みは大阪阿倍野局私書箱第十四号箕田京二宛へ願います。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 43 年 7 月 号

(1968年・7月号<第22巻第8号・通刊第242号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

創作

——昨年十一月号「憎繩の記」に依りて——

俺にも一言

予 世 場 良 三

期待を以って待つこと久しい。いや、実際には、私のセツカチと甘さ故に勝手にいらいらしたような気になっただけのハナシだろうが、待つ身になるなという言が実感として身に沁みる想い。そして、私の期待は5月号に於てもまた裏切られた。もう待ち切れない。よってここに、きつと当りはしないだろうが私が代理をつとめよう。おこがましいのは万も承知で、インスタント・ミスター寺宇治として、好き勝手なことをいわせていただこう、という気になった。

そのまえに、かく思い立つまでのことをチ

ヨット。私も昨年十一月号の『憎繩の記』に各氏と同じくショックを受けた一人である。その直後の同記の反響文も、それぞれの味わいを以て同感させられるものを受けとった。そして、私なりに、いろいろと想像し推察したものだ。

何よりも私は一読後、無意識のうちに、夫なる者の発言が当然あるものと独りぎめしていた。

久美夫人は、あれ以来、本誌を読んではいられないだろう（と考えて置くのが普通と思ふ）が夫たる彼は、妻に去られて心の余裕は

ないかも知れないが、まず読んでみるとみるべきであろうから、反論？ あってしかるべきだと思ったのだ。しかるに一向にない。期待している私としては実にくたびれる。

だがしかし、本誌は調停の場ではないのだから、アレはそういうが、僕としては……などという反論？ を、期待しているほうがどうにかしている。そんな児童に等しい口争いを、面白半分に高見の座席を得たつもりになった私自身の愚かしさ。ご当人にとっては、死に準じるともいえるべき深刻な重大問題に違いないことを……。などと自己反省して恥

じ入った次第。

瞬けれども、本誌は、その本筋として娯楽が優先だろう。満されぬ者の切実なる訴え。社会慣習に溶け込んだだけでは喰い足りない人間の唯一の救い。本誌を見付けて孤独から救われ、生きるハリが出来た。等々の幾多の読者からの讃美が、本誌をして何時の間にかその道のバイブル的な印象を感じとれるものにしてしまったとはいえないか。

私は、思うのだ。その方向の可否はともかく、世間一般に受け容れられるかどうかともかく、更に読者の希望するところは奈辺かということともかくとして、先ず優先は読んで面白いことが絶対に必要なのだ……と。

その面白さの内容、方向は……などといったすとキリがないが、要するに私がこんな前提を引き合いに出すのは、寺宇治夫妻の真剣な問題を肴にして、我田引水的な面白さを味わいたいと思う私自体のいやしいヤジウマ根性を弁護したいヘリクツなのだ。彼、寺宇治某氏が若く純情な新妻に対して設けた口実の如く、まことにエテ勝手な主張であることは承知の上で反対のための反対をデッチ上げ、心ひかれる才媛、久美夫人を、チョットばかりいじめさせてもらいたいと思うのである。

筋違いの最後ツペをお嗅ぎになってお気の毒だった上に、尚、犬も喰わぬ式のグチを聞かされるのはたまらないことだとは思ふ。しかし小生としては、同好者なら理解して貰えろと思ひこんでいたのに、なんとまあ、かくも見事にヤツツケられるとは……。

小生も昔から、貴誌上に往々訴えておられる多くの同好者同様、疎外感、孤独感、そして、不満感に味気なき想いを耐えてきたつもりである。社会の一員である自覚と、自分独りきりの悩みではないという連帯感を唯一の慰めとして……。

しかるにだ。小生はいまや、その同好者の一部の人から、アブチストならず、狂人として、その所属分野を変更せしめられんとしている。しかも、その判定基礎は、たった一通の一方的な手紙。これに対して反論などとは大人気ない……と澄ましていられる程、小生は修養を積んではいないのだ。夫婦の間で起ったトラブルは、夫婦間で解決すべきもの。たとえ破局結果に終わろうと、それが責任というものだ。第三者に訴えるべき性質のもではないと思うのだが、凡人、いや狂人の悲しさで、かくも見事にハジキ出されると頭を搔

くだけでは済まされない。そこで詮ない反バクを記してみる。

小生が結婚したのは、月並ではないが、貧しくとも楽しく、愛の満ちたよい家庭を創り上げたいと願ったからで、決して、百貨店で売ってでもいるような、万人向き規格品的な家庭を目標にしていたのではない。

見合い後の交際期間中、彼女は二十一才に似合わぬ優雅な物腰と謙虚な態度をみせ、信じてついて行く以上、食事の好みすら小生に合わすといって嫌いだだった筈のビフテキの脂身まで口にしていたのだ。今となってこういうことをいうのも妙なものだが、確かに美人の部類に属す婚約者から、こういう態度で接しられて悪い気をする筈はない。ベタ惚れという言葉は、本人から直接聞いたことは一度もない。例の手記？ を読んで初めて知ったが、そうであつたらうとは充分に思い当る。

たしかに当時、小生は彼女に「女を縛る」云々に関しての話を持ち出した覚えはない。しかし、同様に「就寝の時、女は衣類をまとわぬもの」などという話題を持ち出したこともない。しかるに、しかるにだ。彼女は、新婚旅行の第一夜に於て、ごく当然のごとく、自らそうなっていた。婚前の交際中には、手

を握ることにすら躊躇の態をみせていた彼女が……だ。

挙式と同時に、娘は嫁と名がかわり、秘めていた肌をさらけ出し、他人だった男に委ねて自由にさせる……までは何らの約束も確認もなかってよろしい、ごく当然のこととあります。しかし、その、どうぞご自由に、と差し出された肌に、腰紐の一本でも巻きつかせるには、事前に承認が必要でありますという微妙なとりきめは、どこに発表されているのだ？ 誰がそう決めたのだ？

もし仮りに、小生のように「女房の肌に触れそれを縛る」ことが、世間からみて罪悪というのなら、正反対の例ならどうなるのだろうか。実例を知らないから大きなことは云えないが、仮りに、政略的に資産のため、或いはその人間の持つ労働力のため、頭脳、知識だけの対象のために、結婚したような場合は……だ。映画などに扱われそうなもので、男女を問わず、人間としては要らないが、その人間が持っている何かだけを対象に……というのなら指一本触れ合うこともないだろう。清潔この上ない夫婦？ だ。名目だけの夫婦、名ばかりの処女妻、として世間から絶讃の賞詞が与えられる筈だが……。

小生は、彼女のように筆マメではない。いきおい日記などは敬遠、必要事項を手帳に暗号よろしくメモするぐらいが関の山だから、挙式後四月目ぐらいという手記を、そのまま信用する他はないが、同記の印象からは、小生が、彼女を縛るために、わざとこの種の写真をみせつけた如きであるが、これはいささか心外である。その夜、夕刊に小さな強盗事件報道が載っていたのがキッカだった。たしかに二十代の女性が二人縛られたとのことから話が進んだと記憶する。

なる程、小生は、対象が彼女とは限らず、「縛られた女」というものに、若い頃から異常な魅力を感じる。従って、一度は妻となつた彼女を縛ってみたいとは、見合直後から思っていたぐらいだから、その時まで絶えず頭の中にあったといっている。だから、彼女の「縛られたなんて恐しかったでしょうネ。電気コードなんかで縛られたら、キット痛くてタマンないでしょうネ」という同情詞に、火を点けられた恰好で発展したのだと思う。

もっとも彼女としても、日中とはいえ一人きりで、初めて住むセメント長屋住いでの小生の留守中、鉄扉一枚で、密室になる中では、強盗などの不安は縁切りという訳にはい

かなかったことはわかる。そういう意味からの話題だっただろうが、彼女の口から、小生の常々頭にあるだけにドキッとする「縛られる」という言葉が、たて続けにとび出して来たのだからたまらない。堤の切れた感じで小生は弁じた。彼女は、小生の多少飛躍的な話し振りに、否定なく相槌を打った。調子づいて、思い切って持ち出してやった分譲フォトに、眼を輝かして？ しげしげと見入っていた。

同記によると彼女はあの時、驚いていたらしい。しかし、小生には「好奇の眼」と受けとれ、二人だけにしかわからないだろうと思えるその日までの生活振りからして、少なくとも嫌悪を感じているとは受けとらなかつたのである。こういう解釈のしかたが、コッピドク叩かれ、狂人扱いされても仕方のないひとりがやりだつたのだろうか、彼女の熱心？ な聞き上手に、一筋の突破口を見出したような気になった小生のその時の行動が、それほど非常識と指弾されねばならないものだろうか。その時には彼女は、結婚後四カ月を経た小生のレッキとした妻なのだ。

小生は、その夜だったような気がするが、同記によると翌日だ、彼女にいいよ繩をか

けたのは。

いよいよ、念願成就のチャンス到来とワクワクドキドキの小生の前に、多少のハジライをみせながらもはや見慣れた白い肌をさらし自ら両手を背に廻して細紐を受ける彼女の姿に、彼女の言葉通りの可愛いさと、愛情の奔流を覚えたのは事実だ。そしてその夢のような掌中の珠玉によって、それまで、かぶせられていることが当然のように、うとましく思いながらも、とり立てて除く努力も必要としない程に慣れきっていた眼前の黒幕が一举に取り除かれたような気持と共に、かつて覚えなかった激情と歓喜の渦にキリキリ舞いさせられたような感激？に脳がしびれた想いだったことも事実であったのだ。

手記によれば、彼女は最初から嫌悪を感じている。そして、遂に「苦痛」からの脱皮なしに終わっている。あの抗議文の一字毎の持つ力は、小生の胸に強力なミサイルにも優る威力を覚えさせ、突き刺さる。

しかし、しかしだ。あれは結果論に近い。少くとも最初は余程のマゾ性の強い者でない以上、嫌悪を覚え苦痛を苦痛としか感じとれないのは当然のことだろう。酒でもたばこでも最初からうまいと思う者がどれほど居る？

登山の妙味、スポーツ競技でも、その行程、レッスンの苦しみだけを目標に出来る人間ばかりか？小生は魚釣りも好きだ。しかし、喰いついてくれるかどうか分からない魚を待つ妙味を覚えるまでに随分な日時を必要とした。ようやくわかったような気になった今でも、一夜で出来た水溜りに竿を下すこと出来ない。釣り上げたときの満足を、絶対に期待出来ないかわかっているからだ。ある目標があってこそ出来る忍苦であり、慣れることによってそれが忍苦から普通、普通から希望に変わり、更に歓喜に連なるのではないか。

小生はそういう意味で、悦んではないと感じとりながらも彼女の肌に紐を噛ましたのだ。勿論、小生の歓びを追うためには違いがないが、一面、どうせの夫婦和合なら、自分が没入出来た上、彼女も共に悦べる境地に至って欲しいという悲願めいたものもあったのである。一瞬でも彼女自身が被縛の苦痛を上廻る歓喜を覚えてくれるようになれば、という願いだ。

結果的には飼育の恰好ではあるが、小生はそういう気持はなかった。ただ、小生の責任において小生の営む憩いの場で心から解放感を味わいたいことをしてみたいと願っただけだ。

けだ。その休息場所経営の協力者である彼女に、共欲の境地に至って貰うための縛りだったのだ。ある程度の苦痛は、通り越して欲しい。最終の歓喜を得るために……そう思っただけで、愛しい彼女を縛ったのだ。痛かったろう。だが、世の多く？のマゾ女性でも、ぎりぎりに縛られれば、やはり痛いのは痛いだろうし、苦しいのは苦しいだろうと思う。

こういう考え方がエゴだといわれるのだろうが、小生は、彼女をたしかに連夜のように縛りはしたが、めくらめくという形容詞に該当する感激に浸り切れたのは、最初の一夜だけだったといって過言ではない。

彼女のマゾを引出せるまでには日時がかかる。それまでは彼女は忍苦だけだ、と考えれば、小生としても酔いきれるものではない。この点は彼女の手記にある「彼が嬉しそう。彼が夢中。彼がすぐく」という表現は、彼女の観察不足という以外にない。

掲載された手紙に戻ろう。

小生が彼女を縛りたいという欲望を打開けていなかったという件については認める。理由としては既に書いたような考え方と今一つは、ずばりいって羞しかった。幾度か、女房なんだから構うもんかと思いはしたが、やは

り、はっきりとは云えなかった。これはずっと後々まで尾を曳いた。いいそびれ、しそびれの始末をつけるのは難しいと悟らしめられたことの一つである。

詭弁。詐術。卑怯。……いやな言葉だが、意図があるなしに拘らず、結果的にそうなったことは否定出来ないだろう。不本意ながらこれも認めよう。ただ一言、彼女が繰り返し書いて書いているように、縛られる自分の気持ちを察しなかったと訴えるのと同様に、どうしてかくも執拗に縛りにとりつかれたのかと、内心自己嫌悪に歯ざしりしている小生の気持も察して欲しいと云わざるを得ないのである。

他のものには疑惑の眼で、縛り関係のもののみは総べて真実化する云々の件は、前記のような希望と願望のものと小生の意識的行為だ。なにも彼女をだます積りではない。そうした方が、願望の達成に少しでも役立ちはないかと思っただけだ。小生が、いくらまじめくさってこじつけても、100%真に受けるほど、彼女はバカではないことぐらいは承知の上の座興のつもりだった。彼女自身がそういつているではないか。

彼女の怒りは、縛られることの苦痛やみじめさより、精神的な面の比重にある。自分は

嫌でたまらないけれど、あなたが妙なことを望むらしいから我慢して与えて上げているのですよ、という自己優位の満足感が欲しかったらしい。その約束？　がないから玩具視されていると思えた。自分が犠牲的に与えているという意志表示を、改まってハッキリさせていないから、絶えず一方的に弄ばれている感じが抜けない。だから不満だ。だからバカにされていると思う。……小生は過度？　の自己嫌悪から話し合いを逃げ素直に要求しなかった報いとして、夫でありながら第三者の手を経た活字によって、その真意をはじめて知るという結果になったことを恥じる。まことにお羞しい。

しかし、負けおしみではなく、そういう心理であつたかどうかは、想像していた。全然、縛りとは関係のない事柄、彼女の性質、口振り、行為などから推察は出来たのだ。何も、悩み抜いたのは彼女だけではない。彼女の女として妻として思いもよらなかった壁にぶち当たった悩みと、性というものを意識し始めてからこちら、十数年間に亘って悩み抜いて来た小生のそれと、どちらが苦しみが大きかったことか。尤も、これは彼女には関係ないことだろうが……。それはそれで置くとし

ても、冷戦？　中の悩みは、小生といえども自分が撒いた種とはいえ大きなものだった。想像した通りだったのだ。彼女は「与える」優位？　が欲しかったのだ。

厄介極まるはなしだが小生としては、その推察の違っていないことが確信出来ただけに余計に怖かったのだ。何度も云うが、小生は自己弁護的なリクツにすがりつきたい気持は山々だが、女を縛って何が悪い、と居直る気持にはなり切れない。自分自身にどういい聞かせようが、それこそ「正解を見出し得なかったクイズ」的シコリが残るのだ。そのくせ惹かれる。その自己嫌悪は、激しい、情けない、みじめな気持……などという程度のものではない。それにだ。折角、愛を誓い合う対象者に恵まれ、その伴侶が曲りなりにも縄を受け、被縛体を晒してくれるようになった時に、その芽を育てたいと願っている行程さ中に、これは種でも芽でもありません。いくら丹精しても花が咲くわけではないけれど、おまえの為に形だけ与えてあげるのだよ、といわれたら、小生のみじめさは何倍にふくれ上ることだろう。小生の怖かったのはそこだ。

怖かったから逃げた……。ことはいくら指弾されても、今となっては仕方がない。事実、

恐れていた幾層倍かのハネ返りが来た。

彼女にも、読者にも理解してくれとはいわないが、詭弁とか詐術を用いて、欺瞞の上で彼女を連夜縛っていたのではない積りだし、話し合えば筋が通らぬから逃げていたのではない。まだその時期ではないと思ったことだけを強調して置きたい。小生も悩みに悩んだのだ。午前様を続けたのは、確かに作戦的でもあった。けれど、これも顔を合せれば、心ならずも設定したヘリクツを正当化するため努力を重ねねばならない気重さの方が強かった。人間、一度嘘を云えば、更に嘘を重ねる結果になることを身を以って知った。

酒は悩みを流すとかで、小説や映画の直似して飲み歩いてみたがあれもまた嘘と知らしめられた。よくもまあ酒屋か酒場かしらないがデタラメな宣伝を利かしてくれたものだ。幾日かそうしたのは、流すどころか嘔みしめるために飲んだのだ。口にも心にもにがく、刺すような酒は胸底に入り込んで突き立つ。同記中の土曜の夜？、彼女が素裸で、思いつめた態度の出迎えには、ギクツとなって逃げ出したい衝動に駆られた。

来るべきものが来た！　そういう感じで、気が動転してしまった。何とかしなくては……

……。ここで下手をすると、一番恐れていたことがハッキリと表面化するだろう。今後、彼女を縛るなど考えられない。自分のみじめさをさらけ出して「縛らせてもらう」穴が、俺を引き込もうとしてパツクリ口を開けた感じだった。落ちては駄目だ！　直感的にそう思ったのだ。小生が、彼女の必死の計画？　をまるで受けつけず、図々しく先手をとって逆説をぶち、失望させたのではない。いや、結果的にはさせたのだが、その時の小生の精神的なウロタエ方は、おそらく想像して貰えないと思う。オイオイと泣く彼女を見降す小生も、胸の裡で、いや、全身で、共に滂沱の涙にむせんでいたのだ。

翌日、気をしずめる為に近くの釣堀でウキを見詰めようとしたが、気持の落ちつく筈はない。出しなに、彼女の目につくように写真を出しておいた。これは小生の口に出して云い難いことの代弁の積りだった。——口では奇妙な正当化論をデッチ上げているが本当はキミを縛らせて欲しいのだ。変態とわらわれようが、嫌な性癖と蔑まれようが、縛らせて欲しいのだから仕方がないのだ。妻よ、察してくれ、たのむ。——その悲願をこめて置いていった写真だったのだが……。

今思い返せば、虫がよすぎるとお羞しいきわみだが、直後の暴力行為？　も、思い切つて苦痛に喘がせてみたら、或いは萌芽の助けにも……と思いついた意識的な行動だったのである。あの時の状況として、愛の縛りに導ける一方法となる近道と考えた。そして、眼をつむる想いで敢行した悲願の拷問？　は成功した……ように思えた。

同記によれば、小生の解釈と行為はすべてが彼女の思いと逆行している。独善独行の鼻持ちならぬ変質者、いや、奇クを読む資格のない狂人……と酷評されても仕方がないかも知れない。しかし、小生は小生なりに考え、悩み、そして……。

止そう。ここで如何に気張ってみても、弁解だけで覆水を盆にかえすことにはなるまいし、正当な理由とはなるまい。人生はフィルム逆回転のような具合には行かないのだ。未練といわれようが、今でも小生は、小箱の中に彼女の「抗議の品」を納めて持っている。そしてこのズタズタの細紐が、痛く小生の胸を刺し通し、しばき上げ、縛り上げる力を持って迫ってくる想いなのだ。愛戯のそれではなく、処罰のためのものとして……。

(寺宇治氏、御寛容の程を。……筆者)

あ
ぶ

ら

ぶ
すこ
ん
と水
沢
登

先日、夜遅く帰宅したら、ピアノの上に白封筒がのっている。女房は女名前の封書でも絶対に開封しない。日本国憲法、信書の秘密を遵守していることに感謝しながら、開けてみると、日曜日にデートしたフロイラインからのもの。鼻筋の通った、細面の色の白い、首筋の細い私好みの顔が浮かんでくる。成人式を去年終え、短大を卒業したばかりの正真正銘の処女。紳士的な一日を過ごしたので、文面にはそこはかとない慕情がうかがえる。(なに、うぬぼれるなって)

さて明後日の金曜は、エンジのスーツがよく似合う、顔を埋めたくなくなるような長い髪を持った可愛い子ちゃんと約束がある。去年、日比谷スカラ座で「昼顔」をいっしょに見たのがデートの初め。ひよっとすれば、ひよっとするので、ポケットには蒿張らない程度に用意して行こう。(首尾は神様だけが、御存知)その間、仕事の合間にコントを考える。深夜放送聞きながら、喫茶店でコーヒースすりながら、煙草をやたらにふかしながら、思いつきを書き取ってゆく。まる一日で十ばか

りできた。玉も石も混り合っているに違いない。どれが玉で、どれが石かは諸者が決めること。

×

×

○春がきた

春の宵、亭主の居ぬ間の洗濯と、しっぽり濡れるスプリング。

異常な愛撫にうっとりした女の顔から、そつと猿ぐつわを取ってやると、赤く濡れた唇は燃え上って、喘いでいる。

「スプリングハズカム」

低く呻くと、スプリングは次に移ろうとした。

その刹那、女の鞭のような鋭い声がとんできた。

「スプリングハズカム」

仰天したスプリング、取るものも取りあえず、裸のまま、窓からとびだしていった。

×

×

○私にも……

外出先から忘れ物を思い出し、大急ぎで帰宅した奥さん。女中部屋から尻打ちの音と、悲鳴とも嬌声ともつかぬ声が聞こえてくるので息子のジョンに尋ねた。

「女中のマリーがお皿をこわしたので、パパがお仕置きしてるの」

それを聞いたママ、近くの豪華な花瓶を床に叩きつけるとジョンに言った。

「パパに、今ママが大切な花瓶を割ってしま
ったって、言っておいで」

○凌辱

誘拐犯人から取り戻された娘。しくしくと
泣くのを見た母親、心配そうに、

「……で、何もなかったんだろね」

娘、うつむいたまま、顔を横にふって、

「私、あそこで、猿轡と目かくしを取られた
けれど、後手に縛られたままで辱しめを受け
たの」

「……………」

「犯人が言ったわ——身代金さえ頂けば満足
だよ。お前の体には指一本触れないから、安
心しろ——って。私、そんなに魅力ないのか
しら」

○レス的サジスチン

「こんどの事件、無事人質が助けられてよか
ったわね」

「男の人質なんて興味ないわ。かわいい娘な
ら、私、もっとスリルをおぼえたのに」

○トリプル・クロス

ゲイ・バーで

「男一人に女二人が惚れたら三角関係ね。男
と女が同じ男に惚れたら、どんな関係になる
の？」

「それは前後のことがはっきりしなけりやな
んとも言えないわ」

○地獄の沙汰も……

前衛芸術を気取る若手写真家。全裸、逆エ
ビ、乳枷、後手錠、股間縛りのモデルのフォ
ト多数をものした後、顔のギャグをはずしな
がら

「君、こんなこと、ノーマルかい、それとも
アブノーマルと思うかい」

モデル喘ぎ喘ぎ、

「お金次第よ」

○結婚

「私、結婚なんかいや。一生、男に縛られて
男に奉仕するなんて、まっぴらよ」

「まあ、一生なんて、オーバーね。せいぜい
一週間に一回よ」

○バナナ

通りすがりの隣の奥さん、母親に取りすが
って、泣いているジョーを見て、声をかける
と、

「メリーがこの子のバナナを無理に取り上げ
たんですのよ」

「ひどい子ね」

「皮をむいて、かじらなかつたんだけど、し
ゃぶつたらしいの」

「まあ、いやらしい」

○無惨

「いや、いや、やめて、はなして」

「そんなに、あばれるんじゃないよ。すぐに
いい思いをさせてやるって」

「助けて……、アッ」

……………

「……………」

「さあ、このキスが終わったら、その亭主の
縄と猿ぐつわを解いてやんな」

○プライバシー

英国人はプライバシーを重視する。自分の
眼に入らなければ、たとえ側で情事の気配が
あろうと、絶対あつたとは言わないし、認め
ようもしない。

エリザベス「トマス、あなたが私にどんな
ことをしたいか、よくわかってるわ。でも駄
目、私達は婚約中ですもの」

トマス「……………」

エリザベス「可哀想なトマス」

トマス「……………」

エリザベス「いいわ、あんたの好きにして
ちょうだい。だけど私にしっかり目かくしだ
けはしておくのよ」



S Mカメラ・ハント

△増田みゆき・木村洋子の巻▽

連縛無残像

辻村 隆

昨年の暮、増田喜代司氏の、強っての懇望もだしがたく、M女性として定評のある木村洋子さんを彼に紹介したのであった。

思い掛けなくも、可愛い女の子の双生児の出産で、テンヤワナンだった増田喜代司も、子供達がどうやら乳離れしてくるようになるそろそろプレイの虫が疼き始めてきたと見える。今迄は愛妻のみゆきさん一辺倒の彼であったが、彼女が二人の子供にすっかり手をと

られるので、夫婦プレイの機会が仲々ないところで、焦れ始めた彼は、みゆきさんの諒解を得て、かくは木村洋子紹介的一幕となったのではあるが、最初二回許りはホテルへ行って木村洋子と二人で、夢中でプレイを行なったらしい様子であった。

しかし、彼が最も好む鼻責めのプレイに対しては所詮、愛妻みゆきさんの様には行かない。鼻責めとても、当然SMのプレイに繋が

る一過程であるとしても、木村洋子にとっては余りにも鼻責めに徹する彼に、いささか辟易したらしい。彼女は、フト悪魔めいた心から、みゆきさんとのWプレイを提案したそうである。彼女にとっては、増田喜代司が、自分の面前で、妻をどのように扱うかということに、ひどく興味をそそられたらしいのであった。

奥さんと一緒にプレイするのなら、鼻責め

も甘受しましょうということになって、彼はやっとみゆき夫人を口説き落したというのであった。自分のアパートでWプレイの連縛をやるから、是非一役買って貰いたいと、昂奮した口調で彼から電話がかかってきたという次第。

「よく奥さん、承諾したね」

「ええ、却って刺激があつて面白いといつてますよ。恰度、私の母が上阪してきますのでその機会にと思つて……」

「どんな構想があるの？」

「木村洋子に妻を縛らせたり、妻に彼女を縛らせたり、二人を雁字搦目に縛りつけて、お互いを、最も羞かしい位置において、曝しものにしたたり、二人を並べて逆吊りにしたりとまあ、夢はいくらでも、拡がって行くんですよ。幸い木村さんも家内とのプレイを歓迎している様子ですので、キットうまくいくと思いますよ。唯、私一人では、縛ったり、フォト撮ったりでは、大分、荷が勝ちすぎますので、辻村さんの御協力を得たいと思ひましてね。来て戴けるでしょうか？」

「そう面白そうだね。御兩人とも得心の上なら、私も気がラクだ。御邪魔しましょう」

私は彼が指定したプレイの当日、車で彼の

アパートを訪れたのであるが、どうも増田喜代司が思っている程状況はよくない。彼の判断は少しは甘かったようである。木村洋子は既に先に到着していた。彼のお母さんが上阪された機会を捉えて、二人の子供のお守りを頼んでの僅か一時間半足らずの間である。これでは気掛りで、どうも気分が乗らない。

大型の乳母車に二人の赤ちゃんをのせて、お母さんが出ていかれたあと、寸暇を惜しんで、直ちにプレイに取り掛つた。意馬心猿の彼は、既にプレイの構想があつたのか、私にはお構いなく、さっさと始め出した。二人を縛るのに一向に手伝ってくれともいわない。私はそれをよいことに、おもむろに見学の態勢をとっている。

彼は先ず最初、愛妻のみゆきさんを全裸にする、手馴れた縄捌きで、例の緊縛拘束機に雁字搦目に縛り上げ、コンパスのような鼻孔開拡器で、彼女の両鼻孔の穴を一杯に拡大させた。彼の場合、いつもの事ながら、必ずといってよいほど、鼻責めがともなう。スウスイとみゆきさんは眉をしかめて、苦しげな呼吸をする。委細かまわず、みとれている木村洋子に近づくと、スルスルと手早く服を脱がせて行く。彼と木村洋子とは、既に二回許り

ホテルでプレイをした仲であるから、お互いに気心も分っている様子であつた。私は手を拱ねいての傍観である。増田みゆきさんの女体はすっかり変貌してしまつた。かつて最初出会った時の、あの楚々たる可憐さは、もはや彼女の何処を探しても見当らなかつた。双生児の赤ちゃんに、吸われに吸われた両の乳房は、見事な豊満さをたたえて大きく垂れ、おヘソがノッペラボーになるまで、膨張しきつた腹部は、出産してから、容易に復原せず、偉大にたゆたう如く優に妊娠六、七カ月位の膨らみを保持していたのである。緊縛拘束機で、思いきり開股された、その露わな花芯に、双つの魂を生み出した変化はいちじるしかった。若き母としての女体の変貌は余りにも鮮明であつた。

木村洋子の方に眼をやると、彼は腰掛けにみゆきと同じポーズをとらせて、懸命に緊縛の作業中であつた。愛妻とモデルを等しく緊縛して、その耐久度や、苦悶、羞恥の反応を見くらべてみようとする所存らしかった。恐らくこの構図は、彼が長い間、抱き続けていた念願のポーズではなからうか。

「写していいかしら」

私の心は急速に燃えてきつつあつた。いつ

しかカメラを構えていたのだ。一応、彼に敬意を表して声をかけた次第。

「ああ勿論いいですとも。もっと早くから撮っていいだけばよかったのに」

彼は息を弾ませながら、私の方も振り向かず、洋子緊縛の作業をつづけながら応えた。

私は彼等の周りをぐるぐる廻って、緊縛の過程にストロボの閃光を走らせた。

「ああ、やっと出来た」

彼は大きく息をついて、縛り終った二つの女体をしみじみと見つめていた。完成した女体相対するその眺めを、私は熱い想いで凡ゆる角度から撮りまくった。どこからとっても露出蔽うべくもない、強烈きわまる開股責めのポーズである。

「あッ、一寸待って下さい。肝心なことを忘れていた」

増田喜代司は何を思い出したのか、袋をゴソゴソいわせて白く光るものを取り出した。

成程鼻責めの好きな彼にとって、それは肝心なものに違いなかった。彼はその鼻孔開拡器を、木村洋子の、小じんまりとした左右の鼻孔にあてがい、ネジを廻して、ジワジワと鼻孔を拡大していったのである。

「あッ、痛いわ。もっと、そっとして。あッ

あーあ、もうそれ以上、無理……鼻が千切れそうだわ」

鼻責めに馴れていない洋子は、苦悶の声を洩らしながら、深々と眉をしかめ、白い歯を剥き出しにして喘いだ。

私は増田喜代司に縛らせてよかったと思った。私なら恐らく二人一緒に縛るとか、いつもの如く、背中合わせとか、まあそんなようなインスタントな縛り方でお茶を濁していたに違いなかった。犇々とこんな充分な時間をかけての緊縛は、恐らくなし得なかったであろう。木村洋子が純粋なマゾであり、みゆきも又、彼の飼育をうけて、ありとあらゆる緊縛にたえてきた女性なればこそ、いきなり冒頭からこの様な、相手の羞恥を否定なく確かめねばならぬようなポーズもとれたというものの。私なら、矢張り気兼ねして、いきなりこんな互いの羞恥をより一層かき立てる様なポーズは思いもつかなかったであろう。

増田喜代司は、果し終えた満足の笑みを浮かべて、二つの女体の位置を転換しようとした時、入口の扉に人の気配がして微かな呼び声と共に、赤ン坊の泣声が、一同の耳をついた。一斉にハッとした顔を見合わせる。

「お母さんですわ、どうしましょう」

「私、わたし困ったわ。はずかしいわ」
みゆきは半べそをかくし、洋子は羞恥に身悶え始めた。二人共、全裸の羞恥の最高のポーズをとって、どうしようもない極限にあった。困惑を絵に描いた様な顔になって、詮方なく増田喜代司は、狭い四畳半の座敷の襖をしめ、出てゆく時は、唇に指を当てて、シートと静止を頼んで扉をあけにいった。狭いアパートのこと、入口での母と息子のやりとりが手にとるようにきこえる。

「あのね、この子が泣いて仕方ないんだよ。お腹すかしてるんじゃないだろうかね」
「そんなことないよ。ウンとのませであるんだよ。困るなあ（つつけんどんな声）」
「でもね、泣いて泣いて——。それに外は寒くてね」
「じゃあ、仕方ない。一寸そこで待っててくれよ。今ミルクつくるから」

私は胸をドキドキさせて息を殺している。みゆきも洋子も、見るも無残な破廉恥のポーズで、拘束機と椅子に緊縛されているのだ。お母さんが何気なく入って来られたら、驚愕の余り卒倒するかも知れない。ジツトリと私のひたいに冷汗がにじんでいた。

「さあ、ミルク。もう一寸、頼むよ。今友達

二人来ていて、重大な仕事の話中なんだから。(成程、重大なコトである)一階のUさんの家にでも寄って遊ばせたらどう。あの奥さん子供をいつも可愛がってくれから、連れてゆけば喜ぶよ、きつと……いいな」

母親は、私達のプレイの犠牲となつて気の毒にも二人の子を抱いて、又、コトンコトンと三階から下へ降りていった。

「ああ、驚いた」

彼は汗ビッシヨリになって戻ってきた。冬というのに流れている。冷汗三斗とは、このことだろう。忘れられぬショックの瞬間だった。何か盛り上って来た雰囲気、急に冷水をかけられたようで、私の嗜虐に燃え上った熱が、急激な下降線を辿り始めたのである。

「増田さん、この調子だと、あまりこみ入った、手間のかかる緊縛プレイは無理ですよ」「そうですね」

「第一、いつお母さんが又帰ってくるんじゃないかと思うと、気が気じゃない」

「こんな浅ましい姿、見られたら私、もうお母さんに合わせる顔ないと思って、本当に消



えてしまいたくなつたわ」

みゆきさんも、盛り上りかけたMの氣勢をそがれて、妙に白けた顔になった。早く解いてくれといわん許りである。

「どうも拙いですね」

彼は元氣のない返事をした。私達以上に、彼のショックは大きかったに違いない。

「でも、時間をかけて緊縛したのだから、早いとこ、もう少しとりましょう。位置を換えてみたいんです。手伝ってくださいますか」

「ああ、いいとも。それじゃ」

私と増田喜代司は、二人掛かりで、縛りつけてある洋子の椅子をかいて正面に向け、つ

いでみゆきさんの拘束機を、その前面に向きかえた。犇々と縛られた、二人の被虐女性の赤裸々なポーズを、私達は手早く撮りまくった。ついで、再び彼女達二人を相対する位置に向きかえて、椅子と拘束機をピッタリ密接させ、二人の女性のお互いの腿と腿が接触した。否応なく、彼女達は、相手の羞恥のポーズを見る羽目を余儀なくされていた。木村洋子は先に眼を閉じ、増田みゆきは、まじまじと相手を観察していた。フト夫の方に顔を向け、二人の視線が空間であった時は、みゆき夫人の頬に、ニヤリと淫蕩めいたかげりが走った。女体正視のこの勝負、どうやらみゆき夫人に軍配が上った様であった。

彼は慌しく、二本のローソクを持ち出してくると、その両方にライターで火を点じた。

二本のローソクを左右の手に持ち換え、みゆきと洋子の開かれた辺りへ、等しく傾斜させていった。蠟涙は二人の肉体に、ポタリポタリと速度を速めて落下してゆく。

「ああッ、熱ッウ……」

「ウウ……ああ」

二人の呻きが交錯して、焦熱の責め競争が始まっていた。

「ああ、もう許してエ……」

木村洋子が、先に悲鳴をあげてしまった。彼の顔にニヤリと会心の笑みが浮かぶ。

「縄を解くの手伝ってくださいませんか」

ローソクを吹き消して、私に声をかける。

「私は、どちらの方？」

「洋子さんの方が、少し簡単だから、そちらの方をどうぞ」

やはり愛妻の縄は、彼自身の手で解いてやりたいという所か。

解き放ったあと、私達四人はしばらく空白状態にあってボンヤリとしていた。

「もう少しやりたいですが、又帰ってくるといけないから、諦めてよろしうか。折角わざわざ来て貰った木村さんに悪いけど、いつかきつと、この穴埋めしますから」

「気になさらないで、私なら構いませんわ」

木村洋子は状況を察してか、案外淡泊だった。私達男二人は、手分けして直ちにその場を片付け、女二人は着るものを着終った。

木村洋子のその後の様子や、みゆき夫人の育児談などきいていると、又しても遠慮し勝ちな扉を叩く音——。彼は今度はすぐ立っていった。

「あのね、この子の方のおシメが濡れているんだよ。一寸変えてやろうと思ってね」

双生児二人の世話は、成程、大変だと思った。預っている母親も並大抵ではあるまい。

「じゃあ帰って来てよ。もういいから」

「本当にいいのかい」

「ああ」

私は出ていって、お母さんに声を掛ける。

「大変ですね。私達ならいいんです。寒いでしょうから、どうぞどうぞ」

みゆきさんが走っていった。手首にくつき

りついた縄跡を意に介した風もないが、お母さんの眼にとまったらどうだろうと、そんなプレイする者独特の気の廻しようで、私は彼女の姿を見送った。

「わざわざお呼びしながら、御免なさいね。」

こんな筈じゃなかったんだけど」

増田喜代司が、頭を掻き乍ら苦笑した。

（以上が、三月号の楽我記八第四十五回Vに紹介した、連縛プレイ第一回の顛末である）

× × ×

夢よもう一度というわけか、増田喜代司から電話のあったのは、三月の末であった。

「お袋が孫の顔を見たがりましてね、有給休暇をとってクニに帰っていたんですが、お袋の強つての望みで、子供二人を暫らく田舎へ預けてきたんです。実は、チャンスなんです

よ。昨夜それで、猛烈にスゴイプレイをやったのですが、暫らく溜りに溜っていましたからね、夜っぴてです。その時みゆきが、もう一度、今度はゆっくりと木村さんと辻村さんに来て貰って、去年のWプレイのやり直しをやりたいと言うのですが如何でしょう」

「おやおや、あんたもよくよく御執心だね。」

しかし急に言い出して、木村洋子の方の都合どうかしら」

「それは大丈夫です。先程電話しましたら、

O・Kなんです」

「ウーンまあ手廻しのよい。それでいつ？」

「明日の日曜日」

「おいおい、明日の日曜日は月末だよ。私が

おらなくちゃ、債鬼共は逃げたと思うよ」

「奥様にお任せして、そこを何とか……お願

いしますよ。来て下さいよ」

「私が行ったって所詮ゲストでしょう。主役

はあんた方だから」

「ハントのタネになりますよ。ニューフェイ

スじゃないが、皆さんおなじみの連縛という

点で交っているんじゃないませんかね」

「負けましたよ。じゃあ、何とか都合をつけ

て参りますよ」

私は彼の熱心さと、根気強さに、結局負け

てしまった。根は矢張り好きなんだろう、私
って男は——。

午前中に、家の方の用件を済ませ、段取り
をしておいて出掛ける。いつも乍ら家内のS
Mプレイに対しての理解ある協力は嬉しい。
月末というのに別段厭な顔もせず、さらりと
見送ってくれる。それだけに尚更、心苦しい
が、私が他人様から愛妻家といわれるゆえん
は、或いはこの妻の理解ある態度に対する、
せめてもの償いではなからうか。

二日許りつづいた菜種梅雨もからりと晴れ
上り、暑くなく寒くない、絶好の行楽日和で
ある。白ナンバーの洪水で、彼のアパートを
訪れるのに、車は予定より、三十分以上も遅
くなってしまった。

静まった団地周辺。どっと団地の人々は、
郊外や催しものへ繰り出していったに違いな
い。チラホラと、のどかに散歩するサラリー
マンタイプの人々が散在するだけであった。
木村洋子は約束の時間に来ていたらしく、私
が増田喜代司の部屋の扉を叩いた時、狭い内
部では、待ち草臥れてか、既にプレイは始ま
っていた。

「やあ、お待ちしていたんですが、あんまり
遅いものですから、時間が惜しくなっちゃっ

て、ほんのさき程始めた許りなんです」

彼は申訳けない様な口振りで弁解した。勇
ましい恰好の、パンツと半袖シャツ一枚の姿
である。

手土産の菓子箱を彼に渡して、部屋に入る
と、熱気がムーンと頬を撫でた。密室のプレ
イは最早、部屋の空気を五月中旬ぐらいの温
度上昇させていた。

何しろ、狭い二DKの団地の一室である。
一步入って靴を脱ぎ、仕切りのカーテンをく
ぐると、もうそこはじかにプレイの場と化し
ていた。四帖半と三帖の境は取り除かれ、責
めの道具が、足の踏み場もない程に雑然とち
らかっていた。

カーテンを背に、ハリツケ柱が巧みに天井
からタタミに支えられて立っていた。今そこ
に、みゆきの手によって、犇々と雁字搦目に
縛られつつあるのは、被虐の愉悦と緊縛の陶
酔にひたっている木村洋子の無残な立ち縛り
の姿であった。

みゆきは洋子を縛る手をやめて、縄を握っ
たまま、はにかんで私にそっと会釈した。波
打つ乳房は、豊かに実って、握りしめれば、
ジュッと乳液がほとばしりそうであった。全
裸のみゆきの頬は紅潮し、息は弾んでいた。

今迄数限りなく、みゆき自体の柔肌を締め
上げてきた黒革の全身拘束帯が、今、みゆき
自身の手で、洋子の体を、強くしめつけてい
た。その上から更に又、白いロープが足首ま
でぎりぎり洋子の体と十重二十重にしめ上
げていた。白布の猿轡がかまされ、顔面は、
両眼を縄が蔽い、鼻孔をへしゃげて押しつぶ
して、猿轡の上から縄は更に圧迫していた。
「みゆきに好きな様に縛れといったら、こん
なに縛り上げたんですよ。どうですか？」

見てやってくれ、妻のS性も万更じゃない
でしょうといわん許りの彼の口吻であった。
私は柱の後ろに廻ってみた。気配と私達の
会話で、木村洋子は私の来訪を察したらしい
が、微かな身動きすら出来ぬ、極限の激しさ
であった。後手は別の細引のような縄で、指
の先が真白く変色する程に力任せに手首をき
つく縛り上げてあった。

「洋子ちゃん、苦しい？」

私は彼女の耳許へ口をよせてきく。両耳も
又、縄が強く耳孕を押しつぶしている。

彼女は微かに首を振ったようであった。し
なやかな女人の手で、今こうして微塵の身動
きすら出来ぬくらいに、柱に強縛されたこと
が、洋子にとっては耐らない快楽となつて、

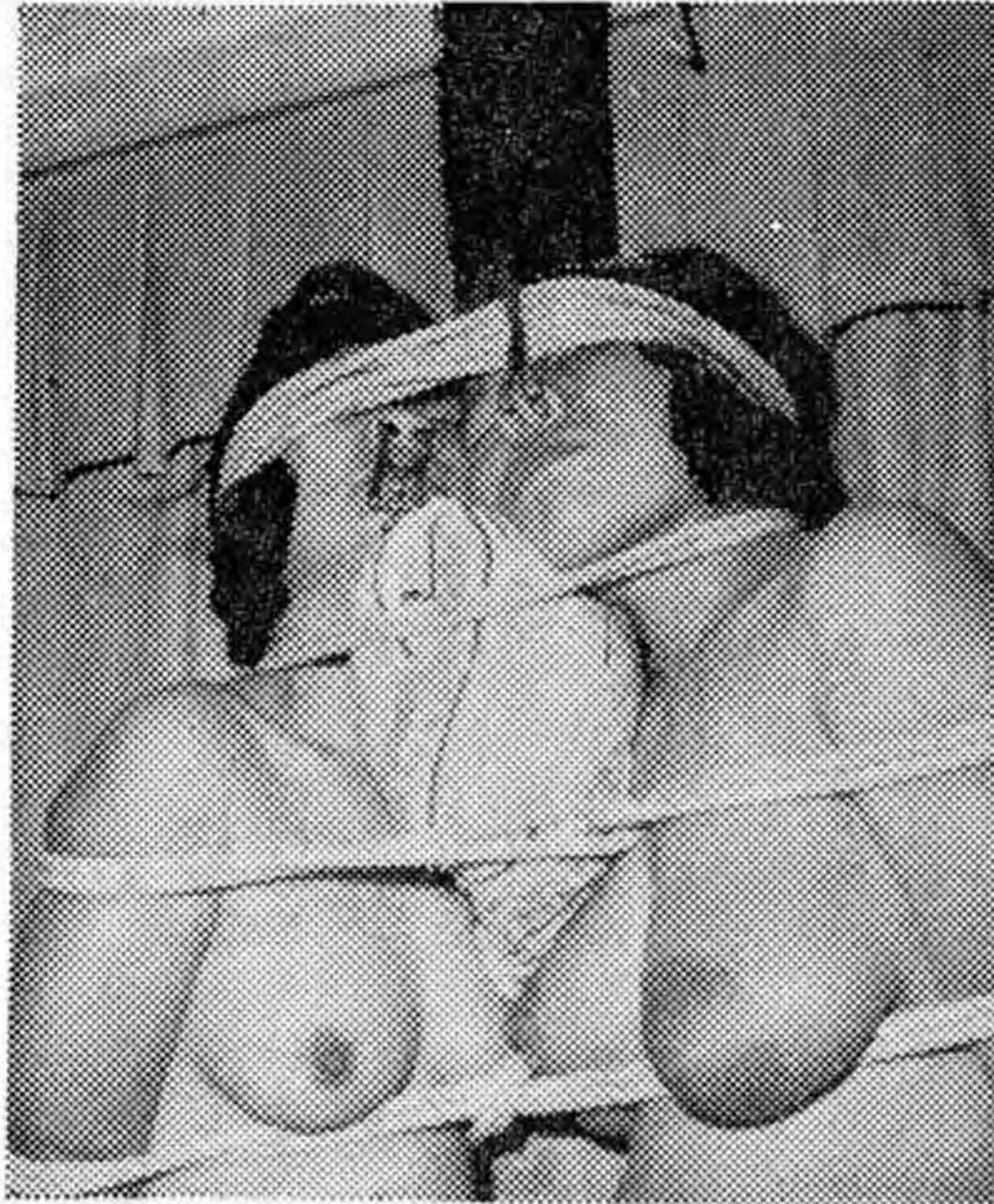
被虐の陶醉と悦楽にひたり切っているようであった。辛うじて鼻孔の片穴から、スウスウと激しい呼吸音が洩れてくるのみである。

私は手を止めて、私の様子を見守っているみゆきを、緊縛の作業を続行するように眼で促がして一歩退いた。大急ぎでカメラの準備にかかる。

「暑かったら辻村さんも脱いで下さい」

言われる俚に、私は背広の上下をぬぎ、カッターをとって身軽になる。

みゆきはこの上に尚も、緑の斑点のある、太いロープをぐるぐる巻きに縛りつけていっ



た。もうこれ以上は縄のかけようもないといった強烈きわまるポーズがそこに出来上る。

洋子のひたいに、じっとりとした脂汗がにじんでくる。吐く息吸う息が苦しいのだろうか。押しつぶされた胸許が大きく喘いでいた。聞きとれぬような呻きが洩れ始めた。

増田喜代司は、この緊縛の完成女体にやおら近附くと、尖端の円いピンセットのような金具を、開いている鼻孔へ挿入し、しきりに鼻責めを始めた。彼は鼻責めの作業中が、最もいきいきとした人間に見えた。

ピンセットの作業をやっと止めると、ピースを一本とり出して火をつけ、二、三服、深く吸い、紫煙の立ちのぼるタバコを、洋子の鼻孔にさし込んだのである。猿轡の奥で、激しくむせた咽喉の高鳴り、息詰る刹那の苦悶が、必死の形相となって洋子の顔をけいれんさせた。

彼はスッとピースを引抜くと、うつすり鼻孔の粘液で濡れた煙草を、さも旨そうに啣えてふかした。そこには最早、私の介在など必要とせぬ彼の耽溺の世界があり、被虐の極限の苦悶と陶醉の交錯した、洋子の無

残像があるのであった。

（これからどうしましょう?）」

みゆきは夫に、そっと訊ねている。

「例のものをかけてやれよ」

夫は計画があるのか事もなげに応える。例のもので既に分っているらしい。みゆきは堂々たる裸身を曝して、私の傍らをよぎると、整理タンスの、一番上の段を開いてバイブレーターをとり出してきた。顔面マッサージ用のスポンジの円い器具がとりつけてあった。電源を入れて、スイッチを押すと、じじじと微かな電撃音を響かせて、みゆきは洋子の前に立ちはだかった。

縄をかきわけて、ぽくりと盛り上った乳房にバイブレーターの戦慄が感染した。ビクリとうごめいて洋子の鼻息は粗くなり始め、ヒィヒィと歓喜の押しこらされた呻きが、猿轡を洩れて流れ始めた。

みゆきは、女体の縄で蔽われぬ部分を選んで脇腹から腹部へ、そして下腹部へと、電撃の戦慄を押しつけてゆき、果ては鼻の先端に飛んで、異様な響きを、女体に震わせていった。彼女自身、夫のこの洗礼を幾度となく受けているのか、まるで女体のツボを心得ているかのように、あちこちへかけ続けていた。

洋子の全身にわななきがおこり、吐息は更に大きくなっていった。

みゆきは猿轡をずらして、その歓喜の声を惜しげもなく吐かせようと試みた。

女体の最も敏感な、みゆき自身当てたくて堪らぬ箇所は、黒い拘束帯が、禪のようにしめ上げて、幾重にも縄が巻かれていて果せなかった。スイッチを切る。洋子の喘ぎは未だ続行を促すように続いていた。縄の眼隠しの暗黒の世界の中で、洋子は独り、この悦虐の極致を惜しげもなく愉しんでいるかのようであった。眼隠しが彼女にとっては、歓喜をぶちまける何よりの羞恥へのヴェールであったに違いない。私は洋子の悦楽のさまを、息をのむ思いで見守っていたのである。

やっと許されて、長い時間かかって束縛を解きほぐされた時、洋子は恥も外聞もなく、裸体をのけぞらして、ぐったりと仰向けに伸びていた。それを見降す増田喜代司の眼に、悦虐に耽溺する者のみが見せる満悦感が泛び上っていた。私のハントがプレイが、いかにお座なりのものか。そこにプレイの真髓を、まざまざと見せつけられた思いであった。

「辻村さん、ひとつ連縛をやって下さい」

増田喜代司は陶醉の醒めやらぬ表情で、全裸の二人を見下しながら、やっと私の存在に敬意を表してくれた。

「あんたの方がずっと凄いのをやりますよ。なにしろ、今日のプレイについては、ずっと以前から、いろいろと構想を温めていたのでしょう」

「ええ、考えていることもあるのですが、先ずベテランのを見せていただかなくちゃ」

「じゃあ、少しお茶を濁そうか」

とはいったものの、咄嗟に面白いアイデアも浮かんで来ない。ぶっつけ本番で、兎も角二人を背中合わせに縛ることにした。

「辻村さんに縛られるの、久り振りだわね」
木村洋子はのろのろと立ち上ると、未だに歓喜の漂よう紅潮した顔で、私を見つめた。

その眼に微かな淫靡の翳があった。きっと、激しい緊縛の期待を抱いていたに違いない。二人の背恰好は殆んど同じくらいである。

プレイの連縛の条件が揃っている。二人の背と背、豊かな臀部と臀部をピッタリとへばりつけるようにして立たせると、それぞれの体の前で後手に組ませ、木村洋子の後手をみゆきの腹の前で縛り合わせると、二人の体を合わせて縄を巻きつけ、ついでみゆきの両手を洋

子の膝の処で縛る。腹から腿、腿から足首まで、ぐるぐると素早く巻きつけていった。

足首で結えると、もう一本の縄で、首から口辺にかけて縄を廻す。

「辻村さん、遠慮せずにやって下さいよ。何だか縄がゆるいようですね」

言われて見て、なる程、二人が体を擦すったのか、縄は縛ったというより、単にぐるぐる巻きつけた程度にゆるんでいる。

私は折角、縛ったのだから、兎も角、二、三枚撮ることにした。増田喜代司は、もっと強烈な緊縛を期待していたのか、私のこの連縛に対して、も一つの関心を示す様子はなかった。この程度かといわん許りである。確かにこれはもひとつパツとしない、緊縛とは縁遠い縛りに違いなかった。

「いやどうも、すっかりあんたや、みゆきさんに圧倒されちゃって何だか日頃のかんが狂ってしまいましたよ。やっぱり任しますよ。私は撮らせて下さいよ。手伝いますから」

「でも折角、縛ったのだから惜しい。何かこのポーズで——」

彼はしばらく考えていたが、何かいい案が浮かんだらしく、ニヤリとして、

「そうだ、底抜け脱線ゲームをやりましょう」

か。太腿ぐらいまで解いて、足を歩けるように自由にして、この立っている位置から、一米ぐらい離して線を引くんです。どちらが先に駆けつくか、背中合わせの連縛で、これは面白いですよ」

彼はニタニタしながら、二人の位置から、それぞれ一米ぐらいずつ離して、紐をタタミに引いた。

「負けた方が、次のプレイで首枷ですよ。さあ、頑張って歩いて。みゆき負けるなッ」

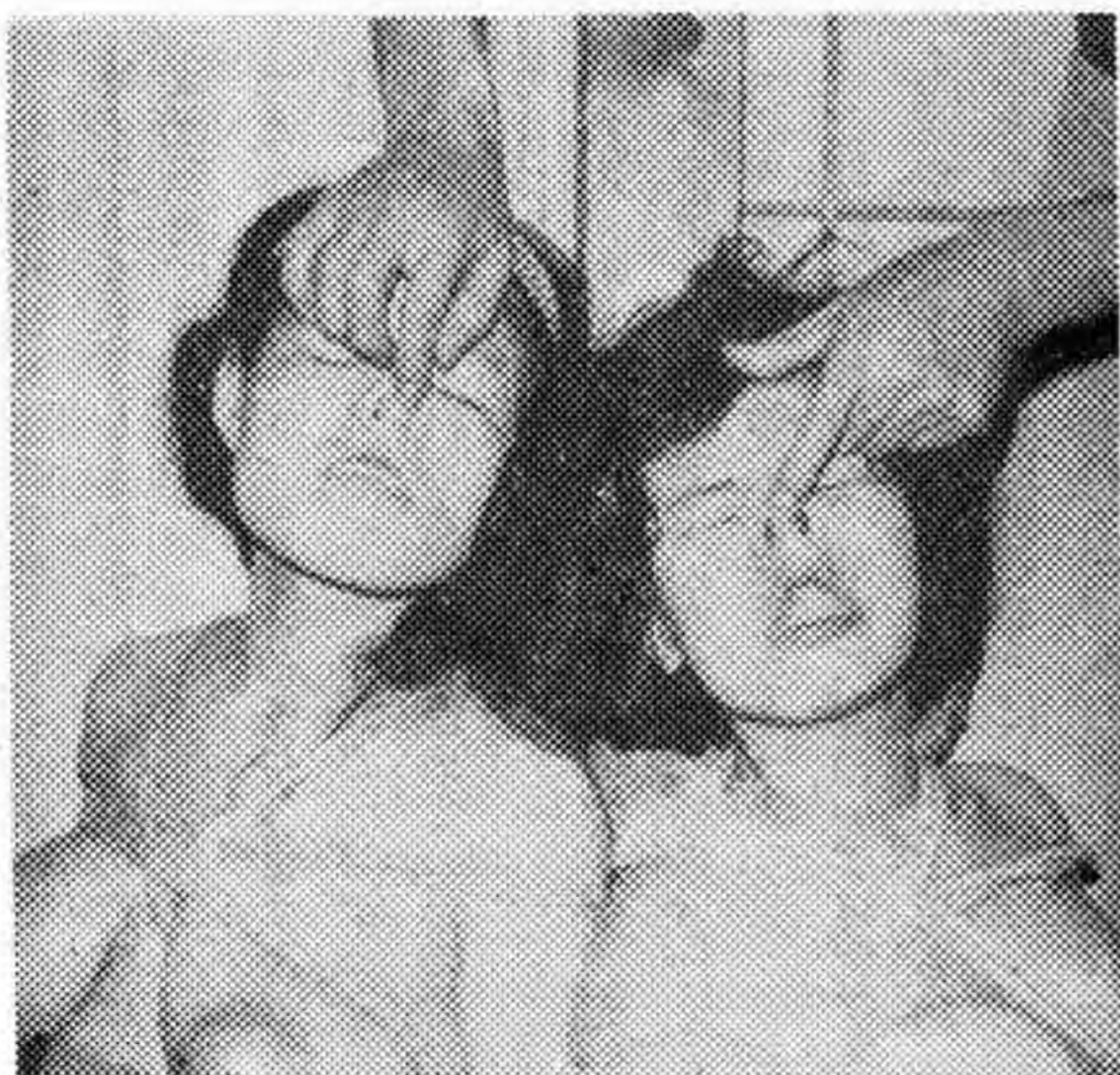
これは確かに愉快であった。彼のヨイイドンという掛け声で、洋子とみゆきは相反する前面にヨタヨタと歩もうとして、二人のお尻が互いに押し合って激しく揺れ、手首が相手の腹をしめ上げた。洋子が一、二歩前進してみゆきが、ヨタヨタ後退し、踵に力を入れて踏ん張ったため、二人の上半身のバランスがくずれて、正に横に倒れようとする。私はあわて二人の体を受け止めて中心を保たせる。今度は、みゆきが洋子の体をぐっと吊り上げるようにして数歩あるく。洋子の両足が宙に浮く。必死にもがいて彼女は足をつけようとする。ヨロヨロとよろめいたみゆきは、けんめいに両脚を拡げてふんばった。壮大なボインがブルンブルンと激しくゆれて、ハアハア

と二人の呼吸は激しくなる。

「みゆき、もう一息だッ」

増田喜代司が精一杯、応援する。首枷を洋子にはめたくて、ウズウズしているに違いない。形勢上、私は洋子に声援を送る。

一呼吸いれて、みゆきは偉大なお尻をぐいと持ち上げるようにすると、洋子のヒップが、みゆきの双丘にのっかったポーズになった。その俤、ガクッと膝を崩して、みゆきは、紐の線ストレスに体を倒した。打ち伏せになったみゆきの背で、洋子は亀の甲の裏返しのように、



うに、空しく足をバタバタさせて、豊満な肉布団の上で腰を振っていたのである。

「勝負あったッ」

彼は嬉しそうに叫ぶ。

「あッ、手が痛い。く、くびがしまるわ。早く起こして……」

のっかかられたみゆきは、苦しげに訴えている。首縄がかなり深く、みゆきののどに喰い込んでいた。考えてみれば危険きわまりないゲームであったのだ。私はしかし、咄嗟にこうした責めを伴ったプレイのアイデアの浮かぶ彼に、フト空恐しい畏怖を感じた。

私達男共で、やっと二人を抱き起すと、早々に縄をといてゆく。

「じゃあ、辻村さん。私やって構いませんでしょう？」

「ああ、どうぞどうぞ。是非やって下さい」一応、彼は私に敬意を表したのだが、内心はプレイしたくてウズウズしているのが、彼の意馬心猿の表情や口吻から、すぐ察しられた。或は私に対して、自らのアイデアの卓抜さを誇示したかったのかも知れない。

「実は長い間の懸案ですけど、ハリツケをやりたいんです」

「えッ、この狭い部屋で？」

「ええ、やれるんです。そのため、いろいろと準備しましたから、まあみていて下さい」彼は少々得意そうに言って、立柱を取り外した。柱の下部に掛金がとりつけてあり、それを押入れの敷居にはめて止めるようにしてある。掛金を外して、ブラスと柱は容易に抜けて倒れた。天井の壁の横木に、柱にピッタリ合わせたコの字型の金具がネジ止めされてあって、それが柱を固定させていた。彼は常人の及びもつかぬSMの構想の下に、この密室を、着々と責めとプレイの部屋にしつらえていたのだった。金具の右手の壁に、麗々しくかかげてあるパネルの引伸しの美女は、何を隠そう彼の、秘かに愛する女性に外ならぬのだった。妻をはりつけにして、背面に秘かなる愛人のフォトを飾りつけ、妄想を逞ましくし乍らプレイする不逞ぶてしさが彼にあった。その妄想が、ともすればマンネリになり勝ちな、妻との夫婦プレイをいつも新鮮にし、次々と新しい悪魔めいたアイデアを生む根源でもあったのだ。

飽氣にとられる私を尻目に、彼は着々と準備をととのえていった。ハリツケ柱として変様させるため、立柱と等しい太さのやや短い横木が、運び込まれてきた。これらの材木は

普段は一階の、共用のガレージの奥の、物置に格納されてあるのだった。立柱、横柱共、合致する部分が、綺麗に半分えぐられてあった。嵌め込むと、横木は出張らない。交叉した部分を縄でしめて、忽ちのうちに見事な十字架が完成する。

本命は十字架へ縛りつける方にあつたので一方の人は十字架の下で、次の自分の来るべき処刑を待機するポーズになる。

「首枷の責めは後廻しにして、さてどちらからやるかな。そうだジャンケンできめよう。負けた方が十字架だよ」

女二人は、かなり真剣な表情でジャンケンをした。みゆきがチョキで洋子がカミ。

「洋子さんの方だわ」

みゆきは少しでも後になるのを喜ぶように、一寸声を挙げて叫んだ。幾度となく彼女は、夫婦プレイの合間にこの十字架の洗礼を受けて、数々の責苦を受けているに違いなかったのだ。洋子が十字架の上で、果してどのような反応を示すか？ それによって、自分の順番の廻った時の、被虐の限界を、きめようとしたかったのではなからうか。妻とモデルと、二人が同じ責苦を受ける時、妻の立場として、被虐モデルの限界を知りたいと思うの

は当然であつた。

その間――増田喜代司は、股受けの木に布団を巻きつけ、手拭をかぶせて、直接に皮肉に当る苦痛を回避させる作業をしていた。十字架にハリツケにした場合、股に当る個所がどの辺りになるか、すべて計算された上の股木の嵌め込みである。ここにおいても、彼女等二人が、ほぼよく似た体格であることが誠に都合だったわけである。

「辻村さん、簡単でいいから、みゆきを縛って下さい。私は木村さんをやりますから」

私は心得て、縞目の太縄をとって、簡単にみゆきの体にぐるぐると巻きつける。私の意思は既に、みゆきの緊縛になかった。今、正に始まろうとする完璧な全裸のハリツケに、心は飛んでいたからであつた。

「辛抱、出来るかしら、私……」

木村洋子は自信なさげに独り呟やいた。

「大丈夫だよ、家内は二十分ぐらい辛抱したんだから」

増田喜代司は、洋子の肩を抱くようにして柱にそわせた腰掛の上へ、追いあげるように昇らせる。

「そう、一寸背伸びして、その鞍を跨ぐのだよ。抱いてあげるからいいね。ああ、辻村さ

ん、済みませんが、少し手を貸して下さい」
私は、あわてて洋子を少し抱き上げる。股を拡げて彼女は鞍木にのっかった。増田喜代司はカーテンの奥から、自家製の特別の脚立をとり出すと、手拭と縄をもってそれに立った。普通の既製品にくらべて、倍も脚が長い踏台である。手首に手拭を巻きつけて、素早く強くぐるぐる巻きに片手を縛り終ると、すぐさま踏台の位置を変えて、一方の手も同じようにして縛ってゆく。余った縄を胸許で巻きつけ、ついで別の縄で、腰の辺りから太腿にかけて、しっかり柱に固定させる。ダラリと下に伸びた両脚を膝で屈折させると、嵌木のうしろに突き出た部分に、足首を縛りつけてしまった。数分の間に、見事に完成された十字架の縛女が出来上ったのである。私は惚れればれと彼の作業に見とれていた。余りにも鮮かな手際だったからである。既にみゆきによって、このポーズは幾度となく実験されたものであるということが、彼の手際によさから、歴々と窺いとれた。この立派なる十字架を作り、妻を対象としてのみ、幾度か架上に曝した挙句、遂に、第三者をこの架上に、はりつけにしたくなった欲求は、彼ならずともそれが可能ならば、誰しもが持つ願望であっ

たに違いない。今、そこへ妻以外の女性を縛々と縛り終えて、増田喜代司の嗜虐の欲求は完全に果されたといってよかった。苦心してつくり上げた十字架であるだけに、その甲斐があったといってよかった。私はいつか京都で、美木乃々子の拷問刑罰史のフォトを撮った時、その数々の刑具を孜孜営々として作り上げたT氏が、美女を得て、始めて思い達した喜こびに、欣喜雀躍していたことを改めて思い出していた。T氏の場合は、一種の刑具マニアであったが、増田喜代司は妻を対象としてこれをつくり、その結果、この製作品を他者に、使用してみたい欲求にかられ、それが達成したのであった。欲びは等しくても、その感懐には、おのずから相違があった筈である。

縛り終えた時、彼はチラリとダンス上の時計の針に眼をやった。必然的に働く、はりつけの限界の時間観念であろうか。

私は、そっと彼に囁いた。Sの血がたぎり出したのだ。

「鞭打ちしないの？」

「私は余りやらないんです」

「やったっていいんでしょう」

「彼女、大丈夫でしょうか」

「反って欲ぶよ。経験済みだから……。私がやってみよう。革バンドない？」

「ああ、ありますよ。でも猿轡してないけど。彼女大声、立てないかしら」

「いいよ。少々立てても、聞えないんでしょう、近所へ」

「ええ、各室、防音装置の壁ですから」

「声を立てた方が実感が湧くよ」

私は燃えてきた。主客転倒しはなしじゃ辻村隆としても些かコケンにかかわる。ここらでプレイの見せ場を作らずばなるまい。

「余り強くぶたないでね、痛い方に気が走るとムード壊れるから……」

聞えていたのか、木村洋子は高くから私に声をかけた。

「いいや、容赦しないよ。前に鞭打ちプレイした時、あとであんた、編集長にいったそうじゃないか。辻村さんのは少し頼りなかったって、知っているんだよ。だから今日はピシピシやったげる」

「イヤーン、かんにん……」

甘え声とは反比例して、既に木村洋子の眸は妖しく燃えていた。全裸を曝した、この架上のはりつけの緊縛が、被虐を求める洋子にとっては、すぐくお気に召したポーズでもあ

ったらしい。

鼻責めに対しては、執拗なまでのネチネチした時間をかける彼が、鞭打ちに対しては、左程の関心がないのか、幾分索漠とした顔付で、私の動静を見守っていた。

「奥さん、少し離れて下さい。トパッチリが当たってもいけませんから」

私は、みゆき夫人に声をかけた。彼女は、あわてて数歩下る。洋子の頬がピクリとけいれんし、表情は少々硬ばって、私の手に握りしめられた黒い革バンドを凝っとみつめていた。もう敢えて彼女は言い訳も弁解もなかった。鞭が甘く肌に飛び交う時、急激に彼女の悦虐の快楽は高潮するからであった。既に数十分前、一度悦虐に悶絶した洋子に、二度めの私の鞭が、再び悦楽の琴線を掻き立てようとしていた。

風を切ってヒューツとなった一発は激しかった。脇腹に発止となる。

「あっ、ウーッ」

呻きをぐっと耐えて、洋子は唇を噛んだ。鞭の洗礼を余りうけた例のないみゆきは、この場の様子を、眉をひそめて恐怖のまなざしで、見守っていた。

続いて二閃、三閃——、バンドは空に風を



切ってなり響いた。女体が震え、肌はピクリとケイレンし、なる瞬間、しぼり出すような悲鳴が断続した。腿に、腹に、胸に、手の届くところ、ところ嫌わずムチは飛び交った。条々たる鞭痕が、紅を刷いたように洋子の下半身のあちこちを、歴々と彩り出した。

おえつがこみ上げて、クククツとのどがなり、疼く激痛の歓喜が、洋子の小さい瞳をぬらし始めていた。苦しみの涙か、歓喜に震える悦びのしずくか。唯、雁字搦目に縛りつけられた手首から洩れた指先が、掻きむしるように、柱を掴んでのたうっていた。

私は未だ止めようとしなない。みゆきは顔を白けさせて眉をよせて凝視していた。

バンドを巻きつけた手を、一呼吸ののち、振り上げた刹那、背後からその手が、しっかりと掴まれた。

「もう、このくらいで、どうなんです」

怒ったような増田喜代司の声であった。見るに見兼ねたといった態度が、彼の言葉からありありとにじんできた。SMのプレイと一概に言っても、所詮は多種多様であることを私はこの時、判っきり意識した。

私は彼の延々とつづく鼻責めに、過去、幾度か制止したくなったか知れなかった。その都度、人みなそれぞれの好みがあるのだと、自分に言いひかせて、その言葉をのみ込んできたのである。今私の鞭打ち行為に対して、彼は自制心をなくしていた。それは一口に言って好みの違いとしか言い様がなかった。好まぬプレイを続けられた場合、第三者は往々にして、嗜虐変じて、嫌悪とも受取りかねないのであった。

これでもか、これでもかという鞭打ちは、少くとも増田夫妻の趣好には合わなかったようである。これは夫婦の面前ですべきではな

かったのだと、私は咄嗟に反省した。折角、盛り上ってきたプレイの空気を気拙くしてはいけない。増田喜代司はその点、未だ若いし一徹なのだ、ぐっと来た感情を押し殺して私は、この場をうまく通れる思いを瞬時に走らせていた。寸刻をおいて、私は振り返ってニヤリと笑ってみせた。

「ああ、恰度よかった、止めてもらって——でないとプレイのつもりが、つい真剣になるところでしたよ。よかったね、洋子さん」
 十字架上の洋子は我に返ったようだった。
 「辻村さん、真剣な眼付きなんで怖かった」と同調する。

「そうです。だから引き止めたんです」
 我が意を得たりと彼は、糞真面目な表情で答えた。

「あんたの大切なお客さんだものネ。もっと丁寧に扱かわないといけませんよネ。彼女、鼻責めをお待ち兼ねのようだから、これからバッテリー交替しましょう」

増田喜代司は冷静に返り、私を咎めた大人気なさに幾分照れていた。その癖、いよいよ鼻責めの本番が廻って来たことにイソイソとしだったが、十字架上の洋子が、チラリと眉をひそめたことに気付かなかった。人は往々

にして、自分の排泄物に対してはさして臭気を感じないが、他人のものは矢鱈に臭いというあの心理である。

彼の制止も、もとを質せば、鼻責めを伴わない責めに焦々した結果である。とみた私のカンは、矢張り当たっていたようである。

十字架上より降された洋子は、私にそっと囁やいた。

「私だけハリツケにされて、みゆきさんがされないの不公平だわ。辻村さん、仰有いよ」
 「ええ、何といったの？」

聞き答めて、増田喜代司は、詰問する。

「いや何ね、みゆきさんのハリツケを見てみたいって彼女いうのさ。勿論、私もだがネ」
 「そうですね、これはうっかりしていましたよ。私はしょっちゅうやってるもんですからつい、木村さん本位になってしまったんですよ。辻村さん、ひとつやって下さいよ」
 「じゃあ、お言葉に甘えて増田さんのやった通りにやってみようかな」

私は先刻、彼が行なった通りの方法を反覆する。洋子は下にあって、簡単に後手に縛られていた。私は猿轡を加えて一寸、変化を試みしてみた。

「辻村さん、鞭打ちだけは勘弁してやって下

さい。妻は痛がるだけで、快感が伴わない様なんです。むしろやるなら、乳房を責めるとか、ローソク責めならこらえるんですよ」

「いやなものは止めますよ。しかしいいネ。

ハリツケは私の夢でしたよ。それが今、相次いで二人のハリツケがみられるなんて想像もしませんでした。広ければ、二つのハリツケなんて、もっとイカすでしょうにね」

「近々、もう少し広いところへ移ります。きっと実現させてみますよ」

彼はやや得意げに、昂然と胸を張った。

「解きますかね」

「いや、しばらくこのままにしておきましょう。二人の縛りをこうして眼前に見乍ら、一杯やるのもいいですよ。私はそれを考えていたんです。ビール一本、のみませんか」

恰度のども乾いていた私、早速承諾する。

彼は冷蔵庫よりビールをとり出し、コップ二個を持って、ドツかとハリツケ柱の前に坐ると栓を抜いた。正にプレイの醍醐味というか、私達は悠々とビールを舐めずりながら、緊縛の裸女の姿を見上げていたのである。

× × ×

座布団を巻いた鞍木に顎をのせた二人が、今ぴったりと頬と頬を押しつけて、しっかり

と頭と首をぐるぐる巻きの縄でしめつけられていた。みゆきのボインのオッパイと、洋子のその四分の一にも充たぬ乳房が触れ合って二人は正対するようなポーズで後手に縛られている。圧倒されそうなみゆきの乳房は豊かに垂れ、乳暈は大椀を伏せたように拡大していた。その乳房の下を二条の縄が、洋子とみゆきの体を連結させていた。

いよいよ増田喜代司待望の鼻責めが始まるうとしている。ゴムの尖端が鉤型に曲った鼻孔吊上具が、みゆきの両孔に挿入される。ぐいとゴムを引き上げると、彼女の鼻孔が一杯に拡大される。その際、立柱の上にとりつけてあるヒートンにつなぐ。みゆきの体全体が鼻孔の痛みに耐えかねて、のけぞるように数回伸びる。つられて、洋子の体も心持ち浮き上った。

私というゲストを迎えて、鼻責めのプレイに耽溺する彼の表情は、急速にひきしまっていく。ついで、洋子の鼻に、コンパス型の鼻孔拡大器が嵌めこまれ、ネジによって鼻翼が横にぐいぐい広げられていく。

「あッ、痛ッ、いたいわ。あッッ」
鼻責めに馴れていない洋子は、かなり苦しげに呻き声を上げた。

みゆきは、観念したように、鼻孔を吊り上げられた際、眼を閉じてプレイの経過を待ち望んでいる様子であった。正直にいった私にとっては、一向に面白くもオカしくもないプレイであった。しかし、それを実施する彼の態度は、さながら陶醉に浸りきっているようであった。みゆきの鼻孔の奥まで覗いてみえる鼻粘膜は、度重なる鼻責めによってか、ピンク色にテカテカと光り、鼻毛を抜いたのか、剃ったのか、一本の毛も残っていないかった。それに引換え、洋子の鼻孔は、黒い繁みに蔽われて、その奥もサダカでなかった。

私は唯、彼の為すが尽に、鼻責めのプレイの一部始終を見守っているだけであった。思い出したように、一、二枚その有様をカメラに納めたに過ぎなかった。

彼は私に背中を向けて、一〇〇〇cc用の計量カップを受けて、自らの体から液体を絞り出していた。エネマシリンジが、みゆきの左鼻孔に深々とたやすく押し込まれた。液体の入った計量カップを掲げて、彼はプッシュする。鼻孔から注入された飴色の液体は、咽喉を通過してみゆきの口中から、溢れ出した。その一部は恐らく食道を通過していったことであろう。唇から流出する液体は、再び受け

止めた計量カップに還元される。激しくむせて、彼女はゲーゲーとのどをならした。咳込む激しさと共に、密着した洋子の頬がそれにつれて歪んだ。

「わたしはいやよ、いやよ。ダメ……」

洋子は必死に叫んでいた。みゆきについて巡りくる洗礼を恐れて、思わず叫んだのであろうか。みゆきの顎を伝って流れる液体は胸から乳房へと、尾を曳いて落下していったのである。こうした汚穢にまみれた鼻責めの行為を、みゆき自身、過去に幾度となく受けていたらしく、咳込み、喘ぎながら、彼女は夫の行為を許容するかのよう、止めてくれとは叫ばなかった。私にとっては、もうそれはグロ以外の何ものでもない感じであったが、吐気を催おしながらも、憑かれたようにエネマをプッシュする彼の真剣な様相に気圧されたか、一言も口を挟まず、唯、傍観するのみであった。

妻の体をしとどに濡らして、この行為はやっと終りを告げた。

鼻責めの器具が除去されると、この緊縛は私と同様、さして変哲もないものに過ぎなかった。手早く解いて一息入れる間もなく、新たな縛りが始まった。洋子から始めた縛りは

胸でX字に廻して乳房の下で締めたオーソドックスなものであったが、よく似た縛り方を二人にし終ると、後手縛りの縄尻を一緒にして柱の根元に縛りつける。二人は腿を接して並んだ恰好で坐っていた。二人の左右の脚下を一本の縄で縛り合すと、二人三脚のように脚首で固定させた。彼は、みゆきの右足に縄をかけると、部屋の片隅まで、ピンと張りつめて、思い切り開股したポーズをとらせ、ついで洋子の左足にも縄が纏いついて、みゆきと同様のポーズをとらした。今二人の女体は増田喜代司と私の眼前に、赤裸々な羞恥の極限を曝しているのだった。

彼はその羞恥の女体を確めるように近づいてしげしげと眺め、そしていつしか両指は、二人の鼻をしきりにいじくり廻していた。人差指で、ぐいと押し上げられた二人の女の鼻孔を見較べては怖い奇怪な笑みを洩らし、ぐりぐりと小指を穴に押し込んで、しきりにこね廻していた。このプレイは私の範疇にならなかった。こうした動作によって得る快樂自体、私にとっては得体の知れない、およそ自己の持つSプレイとは縁遠いものであったが、鼻責めのプレイヤーにとっては、醍醐味を満喫しているに違いなかった。増田喜代

司は自らも鼻障子を穿孔して、種々の責めを受けることを欲び、且つは相手に対しても鼻虐めすることを望んでいた。鼻責めに関する限り、SとMの両面を持ち合わせ、しかもそれはどちらも強烈きわまるものだったのだ。

「未だ構いませんか？」

彼はフト醒めたように私に訊ねた。流石に自分のみの悦楽の行為に走り過ぎていゝ事に気付いたのであろう。その訊ね方には、鼻責めを尚も続けたい意志が働いていた。

「ああ、いいですよ。もっと何か……」

「ええ、最初約束した様に、首枷を使ってみたいと思うんです」

「いいですね、やりましょう」

「それじゃ、辻村さんは、みゆきを革の拘束具で縛ってやって下さい。私は木村さんの方をやりますから」

もう嗜虐に盲いた彼は女体の疲労など一向にお構いなしである。二人の縄をとくや、易々と次の行為に移り始めたのであった。若さがものをいうプレイのタフさであった。

私は、みゆき夫人の体を柱から離して、いよいよ私自身の手で、拘束具をつけることになった。

バストもヒップも膨張したみゆき夫人にと

って、妊娠前に造られた拘束具はかなり窮屈なものになっていた。

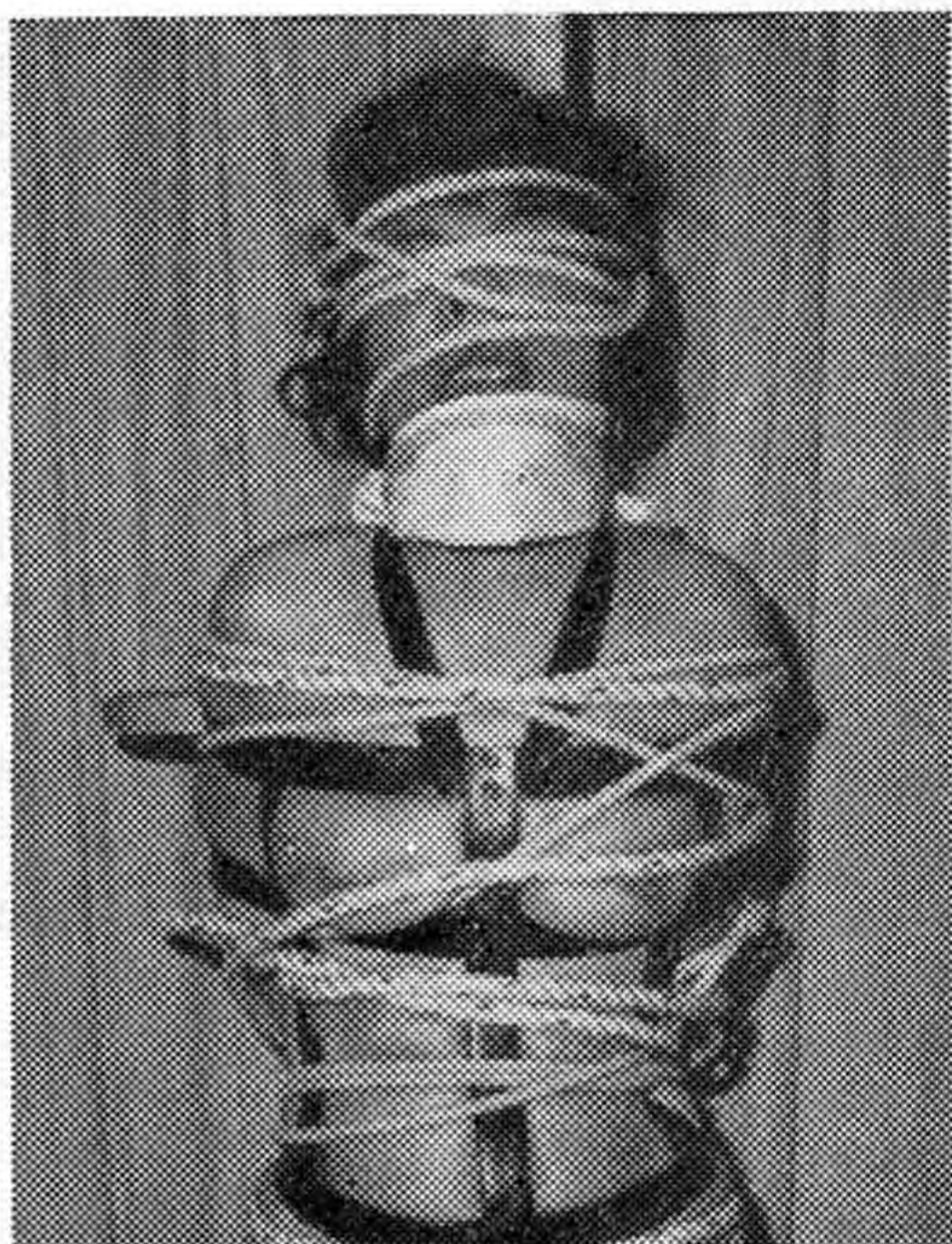
彼は洋子を柱のところで両脚を拡げさせた筈、首枷の作業にかかっている。

「疲れたでしょう？」

小声でみゆきに訊ねると微かにうなずく。

洋子に夢中になっている夫をチラリと見返り心なしか淋しい翳がみゆきの頬をかすめた。今迄は責具のすべてが、只管彼女自身本位につくられたものであっただけに、そのすべてに、みゆきの汗と体臭と涙がしみ込んでいる筈であった。それが今、他の女に使用されることは、夫のS性をすべて易々と許容してきただけに、佻しいことであつたに違ひなかった。反面、木村洋子にひけをとってなるかという反撥が、洋子以上の被虐心を彼女に植えつける結果にもなっていたことは事実であつた。

みゆきに教えて貰い乍ら、私は黒革の拘束帯をつけ始める。胸の帯革を背で尾錠止めして、首を挟んで二本の帯革を背で、それに連結させる。ついで乳房をぎゅうぎゅう圧迫して、やつのことで、ぎりぎりの穴に尾錠をはめこむ。見事としかいいようのない乳房は圧迫によって、乳首がプツンと張り切って上



から——」

飼育された悲しい性^{さが}が、諦観の念となって喘ぎながら笑みをたたえていた。

「あの人が大変でしょう。こんなことに馴れていないから」みゆきの小声で、振返ると、既に洋子の首枷責めは完成していた。

鉄板を鉋止めした首枷はかなり重く、両手首も首枷の両側に穿たれた手枷にはめられて洋子は白布で眼隠しされていた。一米近いジュラルミン棒の両尖端にとりつけられた鉄の足枷が重々しく脚首にはまって、彼女が否応なく全開の股を左右に開ききっていた。

ガニ股になって歩くみゆき夫人を柱の側に連れてくると、待ち兼ねていた彼は、私の拘束具のつけ工合を点検しニヤリと笑った。

例のゴム紐のついた鼻孔吊上具を洋子の両穴にさし込むと、ぐいとゴムを引きしぼって頭を通して背後で、首枷の環につなぐ。洋子の吊上った鼻孔は、上唇をも吊り上げて、歯ぐきが覗き、鼻下はピンと張りつめていた。

首枷の重みを支えるように鞍木に首枷を縄で結びつける。如何にも手のこんだやり方であった。縄の余りが、みゆきの頬をへしゃげさせ鼻下を通して柱に二廻り巻きつける。二人に対する責めの扱いは残酷をきわめていた。

更にコンパス型の鼻翼伸展器が洋子の吊り上って一杯に開いた鼻孔に押し込まれ、ギリギリとネジの巻き上げと共に左右に拡大されてゆく。洋子の小じんまりした鼻孔が、これ以上、拡大出来ぬくらいまでに大きく開かれる。息もたえだえの、ヒューヒューという悲鳴が洋子の唇をついて洩れ、苦悶に刻々に手首と鼻孔に折りかさなって襲ってきつつあった。

「止めて……ああ、く、くるしい。もう、ああ……」

彼のひたいは脂汁でベツトリと光り、眼光はいよいよ残忍さを増強していた。彼は細いピカピカ光る毛抜きをとり出すと、開ききった洋子の鼻孔に押し込み、一本ずつ鼻毛を抜き出したのである。二重の痛苦に洋子の悲鳴は絶叫となり、声に涙が交った。抜いた鼻毛を吊り上ってめくれた上唇にそっとおくと、毛根は白く粘っていて、いきものの様に直立した。数十本の鼻毛が、洋子の上唇の上に植えられ、それは薄いひげのように、奇妙な残

を向いて触慙をそそる。双生児をうんだ腹部は、未だ納まりきらず、優に七カ月位の膨らみを保っていた。腰部の帯革の尾錠も精一杯であった。最後の股に通ずる革帯をしめ上げて私の作業は終りをつける。背で別に垂れた二本の革帯が、みゆきの両手をしっかりとしめつけていた。

「大分、苦しそうだね」

思わず、いたわりの言葉をかけた。微かに笑って、

「ええ、お産してから、すっかり体がふとっちゃって、きついですわ。でも馴れています

酷のユーモアをかもし出していた。

私はそっと彼に耳打ちする。えっと叫んで彼は眼を落した。激痛に耐えかねて、思わず洩らした洋子のしずくが、いつしか、しとどにたたみを濡らしていたのである。洞穴の周辺がバラ色に染まり、その赤味はやがて、鼻全体を薄赤く彩どっていった、ゴム紐で吊り上げた掛具は引きしめることがあっても、ゆるむことはなかった。白布にしみ込んだ涙のつぶが、すっと一滴、頬に流れ出した。

(もう、やめてくれッ!)と今度は私が叫びたい気持ちにかられていた。辛うじてその衝動を押さえたが、洋子に限界がきていることは確かであった。これ以上、手ひどくすると、妻でない女性は二度と彼とのプレイを承諾せぬかも知れないと、そんな予感がかすめた。

私が黙然と佇立しているので、鼻責めにうつつをぬかしていた彼も、やっと行為の行き過ぎに気付いたらしい。お互いに自分がその立場になると、夢中になって、人の考えなんてテンデ分らなくなってしまうものらしい。

コンパス型を外し、ゴム紐を引っ張って、鼻掛けを外す。洋子の鼻孔はしばらく縮小せず、開き放しになっていた。神経が弛緩したのかも知れない。

鼻責めに対する余憤めいたものを、彼はみゆきに持っていた。粗々しく柱から縛ったみゆきの顔を外すと、布団を丸く円めて、仰向けに、体が弓なりにそるよう寝かしつける。彼女の頭部が下って、鼻孔が上を白く。彼は、みゆきに眼隠しした。何をするのかと私は、胸をしめつけられる思いで、黙ってその様子を見ている。増田喜代司の責めの対象が、今度は自分の妻だから、恐らく洋子以上の強烈無残なさいなみが始まるに違いないと私は予想していた。首枷、手枷、足枷の無慚な羞恥のポーズで、眼隠しの洋子は、急に静かになった異様な空気を、耳と鼻で判別しようとするかの様に首をがくりと垂れて身じろぎもしなかった。彼の手に二本の太いローソクが握られていた。

こうべを垂れたみゆきに近寄ると、手馴れた手付で、小さく丸めた脱脂綿をピンセットで鼻孔の奥深く挿入した。白い綿の姿は洞穴の奥深くかくれてしまう。指輪のようなリングを鼻穴にはめ、ローソクに点火しては彼はしばらく蠟の融けるのを待つかの様に直立させていたが、やがて左右の手に一本宛持ち分けると、実にあざやかな手捌きで、みゆきの鼻孔に適確に左右の手にしたローソクを傾け

て、蠟涙を垂らし込んでいった。鼻粘膜の敏感なピンクの孔内に、みるみる蠟涙は堆積して行く。「フウウ、ウーン」と微かな呻きを洩らして、みゆきは懸命にこの鼻孔の鼻責めに耐えていた。とろとろとした蠟涙は、間もなく溢れ出てきた。彼はフツと火を吹き消すと、傾けていたローソクを立てて、横に置いた。じっと反応を見るかのように、蠟滴によってすっかり埋めつくされた鼻孔を、まじまじと凝視している。急速に蠟滴は固型化していた。みゆきの両の鼻穴はすっかり灰白色の団型に寸分のすきもなく埋まっていた。ハアハアと呼吸は告げた舌端を覗かせ乍ら、紅唇をパクパクさせてつづけていた。

彼は、いとおしいものに触れるように鼻をさすっていたが、鼻翼を押して巧みにリングを除去し、体を起させて鼻柱を押えるようにして揉むうち、コロリと鼻の穴の内部の、鼻腔をそっくり型どった蠟骸が、ホコリととり出された。まるで変型の壺形のような鼻腔のかたちが生々しく彼の掌中で転がっていた。つづいてもう一個、そして、綿花を除去し終って、やっと彼の恐るべき鼻責めの作業は終りを告げた。充実した鼻責めのこれが仕上ともいふべきものであろうか。しかし彼のプレ

イはこれで終らなかつた。飽くなき執念は、尚も、鼻責めによって、彼自身の歡喜を、誘導しようとしていた。舌端にクリップが挟まれて、みゆきの紅舌は、長く唇から洩れて垂れた。しかも、大型のコンパス式の開孔器により、鼻孔は更に超拡大されて、拘束帯の股をしめるバンドが外された。彼は私をチラリと見やると片眼をつぶり、或る種のサインを送って来た。彼の人差指は数度上下して、カメラのシャッターを押すしぐさをした。これから行なおうとする行為に対して撮れということか。その行為は最早、私には分っていた夫婦プレイの数々の鼻責めという、前戯につづく、緊縛体の二人の秘戯があるのみであった。

珍らしく彼が、木村洋子に施した眼隠しの目的がここにあったのか。その洋子は依然として首枷の苦しげなポーズで、両足を思いきり開かされて、喘いでいたのである。

激しい増田喜代司の本命がそこにあった。拘束帯と強烈な鼻責め。それなくては、今の彼にはハッスルするだけの欲望が起らないというのであろうか――。

× × ×
充分な休息をとったあと、今も三人の異様

ともいえるプレイは延々として続いている筈であった。

狂宴果てて、私はプレイの終局を思ったがそうでなかった。増田喜代司にとっては、先ず妻のみゆきとのプレイの第一段階を終えたに過ぎなかつたのであった。この日のために彼は活力の蓄積を心掛けていたのだった。

「みゆきの眼前で、木村洋子とね。これが私のもう一つの楽しみですよ。もう少しいて撮って下さいよ」

「そうはいっても、もう三時間以上になるんだよ。私のスタミナじゃ、とてもとても」

「そうですか、残念ですねえ」

「木村さんO・Kするだろうかね？」

「ええ、先日よく頼んでおきましたから大丈夫の筈です。いいだろう、洋子さん」

彼女は黙然とした俤、うつむいていた。諾否はきけなくても、帰るといわない処をみると、その気らしかった。木村洋子のM性は定評があつたし、若い増田喜代司の綿々と続くプレイに、或いは癡酔にかかったかのように溺れていたのかも知れない。そして被虐の悦楽の果ての仕上げが、増田喜代司の愛妻みゆきの眼前で行なわれるとするならば、彼女にとって、求めて己まぬ女同志の残忍な妖しい

虜になつていたのも知れなかつた。夫を寝取られる妻の苦渋のさまを、洋子は自分の眼でしっかりと確かめたかつたに違いないのであった。

私が夢中で二人の激しい悦虐をとりまくっていた時、気配で洋子は夫と妻の状態を察していた。燃えた欲情の心を、次は妻の眼前で存分にはかそうと復讐めいた女心がありはしなかつたであらうか。所詮は私の空想であるかも知れぬが、私と帰ろうとせず、敢えて残つた木村洋子の心を憶測する時、私の心に去来するのは、こうした彼女の被虐の残忍性であつた。

陽は未だ高かつた。疲れ果てて、クタクタになつた体一つを持ち扱いかねて、運転する私の帰心は矢の如しであつた。散々見せつけられた連縛のハントの果てに、私は無性に妻が恋しくなつていた。今夜あたり久し振りにハッスルしてみたい欲望が、ムラムラと湧き上つてきたのであった。

（よしッ、何カ月振りかで女房を思いきり縛り上げてやろう）

それが私の、妖しいムードに憑かれた欲情をはかす、唯一つの手段の様に思えたのである。



谷崎文学

「少年」について

夢 野 洋

五月号読物紹介で、丸鬼土佐渡氏が、谷崎文学「少年」の中のサド・マゾ的な描写について、疑問を提起しておられる。

マゾ人間、それも女性がサド化すると云う点について、谷崎氏の創作に、多少矛盾があるように思うとのことである。

「少年」を私はじめて読んだのは、中学二年生の頃のことだ、たまたま父の書棚にあったのを手に取って見たのだが、当時私は、思春期の性に対する好奇心が旺盛になってきていた年頃で、大人の読む、未知の世界を求めて、片っ端から父の書棚を漁ったのである。

その本は今私の手許にあるが、春陽堂発行の大正八年四月十五日七版で、刺青、外九篇をおさめた岩波文庫と同形の、五〇一頁ものである。

装釘は布表紙に地獄の釜茹での異様な光景

を描き出してあり、紅蓮の焰の中で男が釜の中から頭と両手を伸して救いを求めており、牛面をした鬼が、左手に鉄棒を持ち、右手で全裸の女の両足を、丁度、母親が赤ん坊の両足を持ってぶらさげるところに掴んで、頭から釜の中へつき込んでいるところが、サジスチックに、紺色の濃淡で描かれている。また、何を象徴するのか、波浪と焰の上を、一羽の小鳥が、釜に向って飛んでいると云う表紙である。

ついで目次を見ると、

刺青、麒麟、少年、幫間、秘密、悪魔、続悪魔、信西、象、法成寺物語と並んでいる。

この本は、母が嫁入りのとき持ってきたもので、高山樗牛の「滝口入道」などと一緒に

書棚に並んでいたのを思い出す。大阪の女学校へ通った母が、紫の袴に、大きいリボンを髪に結えて、此の本を小脇に抱えて谷崎文学の耽美主義に酔ったであろうロマンチックな時代が、あれこれと想像される。

それはさておき、少年時代の私はこの本を熟読したのではなく、性の好奇心を満たしてくれる箇所を拾い読みしたように思う。其後私の性向が、SMの世界に定着するにつれて何度か読み返していった記憶がある。

丸鬼土氏の文章を読まして戴いて、私なりの意見を書いてみたいと思ったのは、此のような経緯からである。

私は、今再び、此の本を取出して読んでみた。

丸鬼土氏は、この物語を、光子という美し

い娘が縛られ、折檻されることを悦び、数々のいたづらを受け、マゾの境地に遊ぶのであるが、意外などんでん返しをみせ、それまでとはまるで逆に、いじめられていた光子が、傲慢であった信一、仙吉の両少年を奴隷同様に扱い始め、遂に、サド的な女王となるという物語として紹介され、マゾ人間光子が、サド化することへの疑問を述べておられる。

先ずこの物語は、幼い頃の主人公の遊び友達、光子、信一、仙吉という三人の少年、少女の特異な性格を描き、遊びの中で、幼心に主人公が受けた不思議な陶酔の世界が、主人公の性格を方向づけて行く過程を、書いていく。

特に、主人公は、草双紙の奇怪な殺人の光景に魅せられるというような、特異な感覚を持っていたことが、物語を展開させる序章にでてくる。そして、狼遊びで狼になった信一が、主人公の胸の上へ跨って喰ってゆくのだが、その時、主人公の五感が奇怪にも恐ろしいという念を打消して、魅するように主人公の心を征服してゆき、果ては愉悦を感じ、顔を激しく蹂みじられても愉悦に感じて、いつの間にか心も体も全く信一の傀儡となってしまうのである。

これは主人公が、同性に対する被虐感を、屈服の中に味った過程を描写したものであるが、やがて、この受身の感覚が一層進んで、

異性光子に対する被虐感に移行してゆく心理状態が、刻明に書かれている。この主人公の異常な感覚は、其後の谷崎文学に様々の形で現出し、次第に成育して痴人の愛、鍵などにつながってくるのである。

この物語で、光子、信一、仙吉の果す役割りは、主人公のM的感覚発生の過程を描く脇役として使われている。

信一は内弁慶で、学校では一人ぼっちでいじけている子だが、家ではその鬱憤^{うつげん}を発散させるために、姉(妾の子)や仙吉に我尽一杯にふるまう少年として登場し、仙吉は学校では餓鬼大将だが、信一の宅では、両親に命じられているのかも知れないが、お屋敷の坊ちゃん^{やん}の御機嫌取りをする暫間的な子供に描かれている。

そして光子は、妾の子故に弟の信一の我尽に泣かされる少女として描かれるが、私の読んだところでは、光子は決してマゾとしては書かれていない。十三、四の女の子に、大人が考えるマゾ性をあてはめること自体が無理な話である。女性本来、受動的な存在であって、信一の我尽を受身の立場で甘受していたというに過ぎない。光子が被虐の態度をとる描写があるが、遊びで少女が此のような受身の態度をとったとしても、それはマゾ性とは関係のないことではなからうか。

光子は少年達より三つ四つ年長で、女性は

早熟だから、主人公達が二階の部屋に好奇心を持っていくので、いたずらから面白がって暗闇の中で、二階の部屋で少年達に様々の幻想^{げん}を見せ、催眠術にかかった主人公達を屈服させるのである。光子が少年達に行ったことは、加虐的な描写になってはいるが、これは光子がサド女性になったということではなく遊びの中で少年達を征服したというに過ぎない。勝気な光子は、始めから信一に泣かされることを、潔しとしていなかったのである。

光子はSでもMでもないし、信一も仙吉もSでもMでもないが、主人公は、此の物語の中で、明らかにそのマゾ性の萌芽をみせている。主人公は同性によって最初被虐の感覚を知り、ついで其の同じ感触を求めて異性からのより強い被虐に陶酔してゆくのである。

此の小説の中で文豪谷崎氏が書きたかった主題は、光子のSM性ではない。

中央公論社の「日本の文学(23)」の口絵「少年」で、光子の被縛姿態が描かれているというが、この小説の主題とは関係のない絵のような気がしてならない。

天国で谷崎氏は商魂に苦笑いしておられるのではあるまいか。

なお私も丸鬼土氏と同様に、マゾ女性がサド女性に転化してゆくことがあるのかどうかについて、特に女性の方の御意見が伺いたいと思っています。

—以上—

＝ 読切・フェチ・ストーリー ＝

ちいさな奔流

香川 泳 三



(カット・春川ナミオ)

雨のように

「やっぱりオマエの、しわざだったんだね。エー、にくらしい！」

栄子の押しこらした鋭い声とともに、信吉の頬っぺたが、

「ピシッ！」

と鳴った。

冷え冷えするタイルの土間に、キリキリと両手をうしろしぼりにしぼられ、ころがされているので、雨のように降ってくる、ちからのこもった平手打ちをよけようもなく、ここたま横つらにうける信吉だった。

―駅前商店街の中ほど、ラーメンが売りものの「乙女屋」は、このあたりでは、タッター軒、本格的なサッポロラーメンが評判で、店はよくはやった。

なにしろ小さい店で、客が十人もくればもう満員。時間ときには五、六人の客が順番を待って、道路にまでハミだす始末。

その繁昌ぶりをうらやんで、つい最近、乙女屋の並びの四、五軒はなれた下駄屋のあとに、乙女屋に挑戦するかのようになり、もう一軒「サッポロラーメン」の、赤ノレンがあがった。

こちらは、「美女ラーメン」というのが屋号。露骨に、乙女屋と対抗しようという感情がムキだしだった。

乙女屋のラーメンは、一三〇円。

美女ラーメンは、おなじくらいのポリウムで、一〇〇円。そのうえ、乙女屋はいついっても混雑で待たされるのだが、美女ラーメンは、イスも三十はあり、そのうえ威勢のよい職人が、あざやかな手さばきで、そばをサツと仕上げ、まず待たされることがない。ムリはなかった。

乙女屋は、ママの尾形栄子が、なれない若い女店員とタツタ二人でテンテコマイするけど、男の職人のように手ぎわよくゆかず、そのうえ手をぬくことを知らないのだった。

栄子は、じぶんのつくるラーメンの味には自信タップリ。

「あんな、チャカチャカしたキカイ打ちは、ラーメンじゃないわ。それにくらべて、ウチのはツユからしてちがうんだから」

と、常連客を相手に気炎をあげた。

くらべれば、たしかに乙女屋のほうがうまい。そのうえ、ママの栄子がすばらしい美人というので、美女ラーメンができてからも、客足のへりは、ほとんど目立たなかった。

おかしなうわさ

ところが、いつからともなく、乙女屋のラーメンについて、妙なうわさが流れはじめたのである。

うわさというのは、

「乙女屋のラーメンは、ダシ汁にヘビのホネをつかうそうだ……」

そんなうわさが、人々の口から口へ伝わりだして、いまではもう町で知らない人はないほどになっていた。

ヘビ……ときくだけで、あのグロテスクな、ニョロニョロした、うす気味わるいすがたが連想され、食べにくいのをためらう客が日まにふえはじめた。

ヘビのダシくらいなら、まだよかった。

それがやがて、「ネコの肉」を使っていると、ラーメンをゆでる大ナベに、ドブネズミの死んだのがプカプカ浮いてるのを、

「たしかに駅員さんが見ちまったそうだ」

というまでに発展し、はては、

「乙女屋では味つけに、マダムが自分のからだからでるモノを、調味料代りにたらしこむそうだ」

と、いう極端なうわさまで、まことしやか

に、ささやかれるようになった。

しかし、面とむかってママの栄子に、そんなうわさが流れていることを告げる人はなかった。

誰も三十二の女ざかりの、町でも一、二をあらそう美ぼうの未亡人には、遠慮が先に立つのか、そんなうわさをおしえる人はなかった。

誰もかれも、店へきては、そんなうわさはおくびにもださない。

「乙女屋の勝手口のポリバケツをのぞいたらヘビのホネが山のようにすててある」

こんな子供じみたうわさも、好奇心のマトになった。

「栄子というおんなは、トイレへいったことがないらしい。そんなものは全部ナベの中に流しこむから、その必要がないのだろう」

「どうりで、あすこの塩ラーメンは、よそにない妙な味がすると思ったよ」

「そういえば、ときどきアムモニアのにおいが、ツーンとくるときがある。ひでえモノをつかいやがるな」

といった面白半分の、まことしやかなうわさが、町の話話を賑わせた。

食べ物商売に、こんなうわさは禁物だ。

おまけに、こんな悪質のデマの発信地がどこだか、さっぱりわからないのだから、たまにたまの耳に、こんなデマがはいっても、打消しようもなく、営業妨害で告訴しようにも、つかまえてこがないのだった。

常 連

石川信吉は、昼間は近くのゴム印工場に社員として働き、夜は公立の商業学校に通うマジメな青年である。

三畳ひと間、四千円の安アパートに住み、自炊生活を送っている。郷里には、年老いた母が病気で、施療病院の厄介になっている。疲れて帰ってきて、めしの支度をするのも毎日のこととなると、めんどりでこたえた。つい二日にいちどは、食堂ですませてしまふ。

安サラーリーにあえぐ信吉にとって、一三〇円のラーメンは重荷だった。しかし乙女屋一軒のころは、しかたなく利用してきたが、一〇〇円の美女ラーメンが開店すると、これさいわいと、こちらにきりかえた。

ほとんど毎日のように顔をみせる信吉を、美女ラーメンの店主の八十虎三は、たちまちおぼえてしまった。かれが安サラーリーで夜間

の学校へ通っていることを知ると、こっそりソバの盛りを特別よくしたり、チャシューをふんばつて思いきり厚めにしてやったり、何かと気をくばってくれ、そうした好意が信吉にも感ぜられ、いつしか夜おそく調理場でサラ洗いの手伝いをしたり、虎三の自室で半日もステレオを聞かせてもらうような、親しい間柄になっていた。

客と店主との立場以上に、二人のあいだには、はたでみるのも、うらましいものがあった。

「あの二人は、ホモじゃねえのかな」

などと、かげ口をたたく客もあるほどだった。でも、それはデマのようだ。

ある日、虎三が、

「ちょっと、重大な相談があるから……」

と声をひそめ、客の目をぬすんで自室へ信吉を呼んだ。

「信吉くん、何もいわないで、このオレに力を貸してくれ」

いつになく真剣な口調でいいながら、信吉のひざの上に部厚い封筒をおいた。

共 同 謀 議

封筒の口から、何枚かの一万円札がのぞい

ている。

信吉は、うす気味わるくなった。

何か悪事を手伝わされるみたいで、不安だった。が虎三の目もとには、有無をいわさない鋭い光りがあった。

「このさい、乙女屋を徹底的に叩きのめしてやろうと思って……」

虎三は云った。

というのはじつは、れいの数々のデマも、虎三が乙女屋のノレンにキズをつけようとしたしごとだったが、かれの計算通りに運ばないどころか、乙女屋も銀行の融資に成功、店を拡張し、うでのよい職人をやとい、おまけにラーメンも八〇円に値下げという、積極的な経営に転じたから、今度は逆に虎三の店のほうが、苦境にたたされる羽目に追いこまれたのだった。

デマの創作

苦しまぎれに虎三は、つぎつぎとデマをこしらえ、手あたり次第に町の連中に、さもじぶんは、銭湯などで聞いてきた、というフリで、ニュースをふりまいた。

「乙女屋のママは、以前から悪質な性病をわずらってるそうだ。そんなのを調味料につか

われたんじゃ、まるでバイキンを食わされるようなもんだ」

こんな根も葉もないデマを創作し、夜おそく自分の名は隠して、町内の人々へ片っぱしから電話を使って放送する。

人々の好奇心をそそる、たくみな作り声の話術が、コソコソと耳から耳へ伝わる。

しかし物ずきな客や、ママの栄子の美ぼうにいかれてる連中には逆効果で、

「へびや、ネコの肉なんかじゃ、まっぴらだが、マダムの味つけに使うなんかは、味がよくなるんだから、いいじゃないか」

こんなデマが、かえって評判をよび、マダムあての連中で乙女屋は繁昌する始末。

たまりかねた虎三が、大金を与えて信吉に一と役買わせ、実力手段に訴えようとしたのは、こんなときであったのだ。

重石

「スキをみて、乙女屋の調理場に忍びこみ、ナベのなかに放り込んでほしいモノがあるんだ」

ドブネズミの死がいのハラのなかに、重石を詰めこみ、それをナベのなかに放り込んでこいという、相談というより命令だった。

死がいを、そのまま放り込んだのでは、直ぐ表面に浮かび上ってしまう。重石を詰めこめば、一週間でも十日でも、ナベの底に沈んでいるだろう。なにしろ、ナベといってもドラム缶ほどあるでかいヤツだから、沈んだらさいご、わかりっこない。いずれ保健所の抜き打ち検査で、ナベの底からそのドロドロに溶けかかった死がいが発見されて、大さわざになり、そうなればガッツと客足は落ちるだろうし、営業許可も取り消されて、さすがの乙女屋もザ・エンドだろう。

おまけに、ネズミのハラの石が、「ダシをとるためにワザといれて、沈めることをねらった」

という証拠となり、当局の心証を悪くするっぽうだ――。

虎三は、そんなことまで、計算にいれていた。

「キミは未成年だから、万一その場でつかまったとしても罪にやならん。うまく営業取消しまで成功したら……ボーナスとして別に五万円あげよう」

虎三は、決心をうながすようにいった。

封筒の中には、三万円はまっている。

これだけでも大助かりなのに、そのうえ、

五万円。それだけあればオフクロに、お小遣いも送ってやれる。そう考えたとき、信吉のハラはきまったのだった。

忍びこみ

夜ふけの町を、信吉は、フラフラ歩いていった。

手にもった紙袋の中には、ハラに重石を詰めこんだネズミの死体が、ビニールの袋に包まれてはいっている。

乙女屋の栄子は、駅の東側のアパートに住み、店をしまうとろくにカギもかけずに店をからっぽにし、アパートに帰ってしまう。

店には、盗まれては困るような品物は置いていない。だから戸締りの必要はないのだった。

ぬけ目のない虎三は、そんな習慣まで調べあげてあった。

……おそろおそろ信吉は、ガラス戸をあけ、まっくらな調理場に足を踏み入れた。

足もとから飼いネコが、

「ウ、ウ、ウ……」

と、唸りながら、すりよってくるのにキモを冷やしながら、手ばやく紙袋を開き、ブヨのビニール袋を取りだした。

一刻もはやく、こいつをナベに放りこんで逃げだせば、前払いの三万円は完全にじぶんの自由になる――。

あたりを見まわし、思いきって重たいナベのフタをはずす。

そのときだった。

「ダレ、そこにいるのは？」

鋭い女の声が、出入口でした。

わるいことに、そこには防犯ベルがあり、万一それを押されると町内一帯のベルが鳴り響き、たちまちパトカーがくる筈だから、忍びこんだらまず、そのコードを切ってしまうと、虎三に教えられていたのに、あわてていたので、すっかり忘れていたのだった。

「しまった！」

信吉は、全身の血が凍りつく思いで、その場に立ちすくんだ。

声のぬしは、栄子だった。

今夜にかぎって、売り上げ金をいれたバッグを店に置きわすれたので、こうしてこの夜ふけに、取りに戻ったのだった。

信吉にとっては、まことに不運な忘れ物だった。

寝ころがされて

女とはいえ、栄子は空手の心得があった。ちからには、自信もある。

未亡人が、女手一つで店をやっているのは、メソメソしてはいられない。

町に巣くうヨタモノのいやがらせを封ずるのにも、実力がいる。

彼女は二、三年前から、近くの空手道場に通って護身術を身につけてきた。

年下の、小柄で非力な信吉の首根っこをつかまえるくらい、朝めし前だった。

×

信吉は、冷んやりするタイルの土間に、魚河岸のマグロのようにころがされ、両手をうしろにまわして、彼女の腰紐でキリキリと縛られた、みじめなすがたであった。

しかし、口は割らなかった。

「誰にいわれて、こんなことにきたの？」

白状おし！」

栄子は、にくしげに、はき古したサンダルもぬがずに、土足の片あしを容赦なく信吉のミゾオチのあたりにあてて、半身をかけグイと踏みにじった。

「グググ！」

信吉の胃ぶくろが悲鳴をあげた。

「まだ強情はるんだね。ヨ―シ、それならカ

ラダにきいてやる！」

栄子は、いきなり信吉の胸に、その豊かな尻をのせ、馬乗りに跨った。

勝ち誇った、上気して美しいサクラ色の顔が、真上から信吉を見下ろす。

信吉は、強い圧迫感を胸ぜんたいに覚え、息がつまりそうになりながら、でもまだ口を開くことを拒んだ。

「空手で、おとしてやろう」

習いおぼえた、首しめの術を使ってみようと、栄子は信吉の首に両手をまわした。

信吉の顔が恐怖にゆがんだ。

次第次第に力がこめられる。

栄子のうでは、大したものだった。

この手で、あばれるところを掴まえられ、力いっぱい首を締めあげられて、絶息したグレン隊の若い衆も二人や三人ではきかない。食い逃げなどしようものなら、ドツカと胸に跨がり、

「オマエみたいな、虫ケラにや、手を使っちゃ、もったいない」

と、いいながら、たくましいじぶんの太腿で、

「エーイ」

とばかり、首を締める。

容赦なく、両足のウラを合わせて、つかまえたヤツの両頬を、ヤットコの要領で、したたかにはさみあげ、ギューツとしめつけて、奥歯を二、三本折ったこともある。

術にたけているうえに、生来の大力なからだ、活殺自由なのだ。

信吉のことなど、あたりを飛ぶハエくらいにしか思っていない。

信吉は、馬のりにのしかかる彼女の、肉体の下じきになり、首をしめられて一種の恍惚とした表情であった。

金 火 バ シ

「コイツ、うれしそうなツラして！」

栄子は、容易に口を割ろうともしない信吉の、太々しい表情にジリジリしてきた。

まるで、ネコがネズミにじやれるように、信吉の息の根をとめてみたり、また活をいれて息を吹きかえさせたり、思いのままにオモチャにした。

「まだ、痛い目が足りないんだね。コイツ、どうしてくれよう……」

絶対、口を開こうとしない信吉に、栄子は次第にジリジリしだした。

ひどい目にあわせるほど、うれしそうな表

情さえみせる信吉が意外だった。

フト思いついて、金ヒバシを固く閉じるくちびるにあてがい、

「ウーム！」

と、力をふりしぼり、無理矢理にちよつとのぞいている白い歯をコジあげた。

その、あいた口の中へ思いきりコショウの粉でもこぼしこんでやったら、どんな顔をするかしら。

しかし、あいにく手近にコショウがない。

「コショウのかわりに、コレでもおのみ！」

いきなり、じぶんのどの奥まで大きく息を吸いこみ、こんどは反動をつけて、

「カーッ！」

のどの奥から、痰のかたまりをコキだし、口の中でツバキと充分ミックスしてダンゴにしたのを、小気味よくその歯のあいだから口の中へ発射した。

信吉ののどがゴクン！ と鳴ってそのダンゴは、奥の方へ送りこまれたようすだった。

「チョッ！ まるでブタだね、おまえは。そんなモノ、うまそうにのんじまって！」

栄子は、大声で笑った。

食 べ も の

栄子は意地になった。どうしても、このブタの口を割らなけりゃ胸がおさまらない。どうしてくれようか。

サロン・エプロンのポケットから、かぜ気味で、さきほどから二度も三度も鼻汁をかんだ落し紙の丸めたのを取りだし、

「おなかすいたろ？ これでも食べな」

と、いいながら、口の中に無理矢理、押しこむ。

ブタとよばれても不自然ではない。

信吉は、さも美味しそうに、与えられたその紙を、モグモグと食べた。

紙は、異様な舌ざわりで、かすかに塩辛かった。

「くたびれた。少し休もう」

栄子は、グラマラスなからだを、完全に信吉の上にのせた。

平然と、さながら座ぶとんの上にも坐るような態度だった。

推 理

「どうも、おかしいと思ったら、その通りだわ。ウチのタレの材料のことで、おかしなデマをふりまいたのもオマエだね」

栄子の推理は、みごとだった。

ネズミの死がい、ナベにほうりこもうとした今夜の信吉の行動と、町に流れる悪質なデマをむすびつけると、どうも乙女屋のキャンパンにケチをつけようと、たくらむヤツがいるような気がする——。

ウワサの出どころは、大体見当がついてるが、かつては店へもよく食べにきた信吉が、当の下手人とは。

「ねえ、いいかげんに、おいしいよ！ こんなこと、誰にたのまれたのさ？」

胸の上から、信吉の顔に、じぶんの顔を近づけていう。

信吉の鼻に、栄子の口臭がただよった。

それは、ニンニクのようにもあり、チーズのような気もする。

手ひどい圧迫が続いて、息も絶えそうだがそんな口臭をかいでいると、苦痛がむしろたのしくさえある。

しかし、ここで、うっかり虎三の名をだそうものなら、たいへんなことになる。

もらった三万円には、もう手をつけてしまったので、怒った虎三が、

「その三万円を返せ」

と迫っても、返すあてはないのだ——。

×

「強情っぱり！ たのまないわ、こうなりやカラダにきくまでだわ。覚悟おし！」

どうやら栄子は、本気でおこりだしたらしかった。

しかし暴力をふるいすぎて、万が一、信吉のからだにキズでもつけたら、あべこべに、こちらが傷害罪でやられる。

だから、からだにキズなどのこさずに、上手に苦しめてやらなければいけない——。

栄子は、名案を思いついた。

いきなり立ちあがり、着物の下へ手をいれて、ゴソゴソとなにか白い布きれを引っぱりだした。

下ばきだった。

まだぬくもりが残ってるみたいなのを、かまわずスッポリとブタのあたまから、かぶせた。

「うまい具合に、それは外人プロレスラーがリングの上でかぶる、覆面のマスクのような案配に、頭のとっぺんからヒタイ、目の下までスッポリとおおった。

あたりに、かすかに、よいにおいがただよった。

そのままの恰好で、栄子はジリジリとからだを前に進めた。

体重が、胸からのど、のどからあご、あごから口、口から鼻へと移った。

「フッフ、苦しいかい」

うつくしい顔に残忍な笑みをうかべ、いき全身の重みを、ブタの顔面いっぱいにかけてつぶした——。

タレの味

「ウチのタレにや、とんでもない材料がはいってる、なんてフレまわったやつがいるけどまさか、おまえじゃないだろね」

たのしそうな、笑いを浮かべながらいう。

「いいの、いいの。どんな味だか、ためさせてやるから」

あわれなブタは、こんな言葉もろくに耳に入らぬらしく、じっとして、動こうともしない。

「参考までに、どんなだか、ためしてみるかい。そして店へ帰ったら、おまえに、こんなしごとを、カネのちからにモノ云わせて、無理に強いたヤツに話してやるんだね」

×

くらやみの中で、調理場の流し台の、しめわすれた水道のコックからでも、おちる水のしずくの音でもあろうか、かすかな水の音

が、とぎれては、思いだしたように続く。

信吉ののどが、ゴクンと鳴った。

もう恐怖感や、まして不潔感は無かった。

のどがかわいて、ただその水がのみたいだけだった。ふしぎな、しかし妖しいまでに甘美な「お仕置」に、信吉の意識は次第に薄れていく。

流しの水道からしたたり落ちる水の音は、トタン板の上にポタリポタリと、垂れては止まり、止まっては垂れ、いつ果てる様子もなく続いた。

信吉は必死になって、その流しの水のしずくを受け止めようと焦った。

のどが、口が灼けるようだった。

「もっと、もっと飲みたい！」

自由奔放なせせらぎは、流し台の上の方から流れては止まり、止まっては流れた。

住みこみ

どこでくめんしたのだろうか、その翌日に三万円の金を虎三に返し、つとめ先のゴム印工場に辞表をだし、学校までやめてしまった信吉が、コックすがたに早がわり、乙女屋の住み込み店員になって、町の人たちをアッといわせたのは、あの事件いらい三日目の、四

月半ばのことだった。

美女ラーメンは、経営不振で店をしめ、店主の虎三は、どこへ消えてしまったのか行くえがわからなくなった。

信吉は、よく働いた。

ただ、ときどき出前に行く先で、

「信さん、そのアザはどうしたワケ？ 自動車にでも当てられたのかい？」

親切に大ごえで、かれの腕や首すじにのこる、ひどいアザや引っかけキズのあとに、おどろいてきいてくれる客がある。

（このアザは、ボクとご主人さまを結ぶ、みえないツナ。このアザが続くかぎり、ボクは一生、乙女屋をやめられそうもないんです）

信吉は、いたわってくれる客に、無言ではほえみ返すと、心のなかでそうつぶやきながら、いとしそうに、そのアザを愛撫するのだった。

「信さんが、雇われてから、乙女屋のママは、ますます若く美しくなったし、塩味ラーメンは、いちだんと旨くなった。」

まさかヘビのホネや、ネコの肉なんかじゃないんだろうけど、いったいナニを使ってるんだろう——。

そんなうわさが、町の人々のあいだで、さ

さやかれる。

うわさはうわさを産んで、いろいろと取り沙汰されはしたが、以前のようなとんでもないデマがとぶようなことはなかった。

この町へ商用や仕事でやって来た他の土地の人々で、うわさを知る人も知らない人もあったけれど、一度乙女屋のラーメンを喰べた者は、殆んどがその旨さに感心し、ファンになった。

店はますます繁昌し、人手も更に必要になってきたが、主人の栄子は他の者を雇おうとはしなかった。

「フフフ……。それはヒミツ。ナニが、ちょっぴりはいってるか、知ってるのは、あたしと信吉、あんただけネ」

まわりまわって、町のうわさが耳にはいると、主人の栄子は、いたずらっぽく信吉にほほえみかける。そんなとき信吉は、

『ああ、美しいな』

と、心の中でつぶやき、ホレボレと、栄子の表情に見入りながら、でも「材料」というコトバがとてもまぶしく感ぜられ、返事にこまってしまうのだった。

（完）

縛り映画のことなど

千 草 忠 夫

先だって機会があつて、「鞭と肌」と「密通刑罰史」を見た。

私は決してピンク映画の熱心な観客ではなく、年間せいぜい二、三回見る程度なのだがこの二本、ことに「鞭と肌」の方を是非見た



かつたわけである。理由はもちろん、昨年の奇ク八月号に、団鬼六氏が「鞭と肌」のロケ先で起こった事件をユーモラスに書いておられたのを読んだからである。

私は団氏が白羽の矢を立てた美津子役の女優美川恵子をゼヒ見たかった。(ついでながら、団氏がミスミス長蛇を逸したあのカメラピンボケの話はどうも嘘のような気がしてならない。氏は読者にあまり垂涎の思いをさせないためにああ書いたので、実は彼女のオールヌードを机上に並べて、ひとりニヤニヤしているのではないかと私はカングツている)なぜそんなに見たかったかという、十七歳という年令と、奇クにのっていた三葉のストールが、いかにも私の好みに合ったからだ。特に三枚目のものなど、すばらしいと思つた。なかなか、これだけの体の女優はいない。

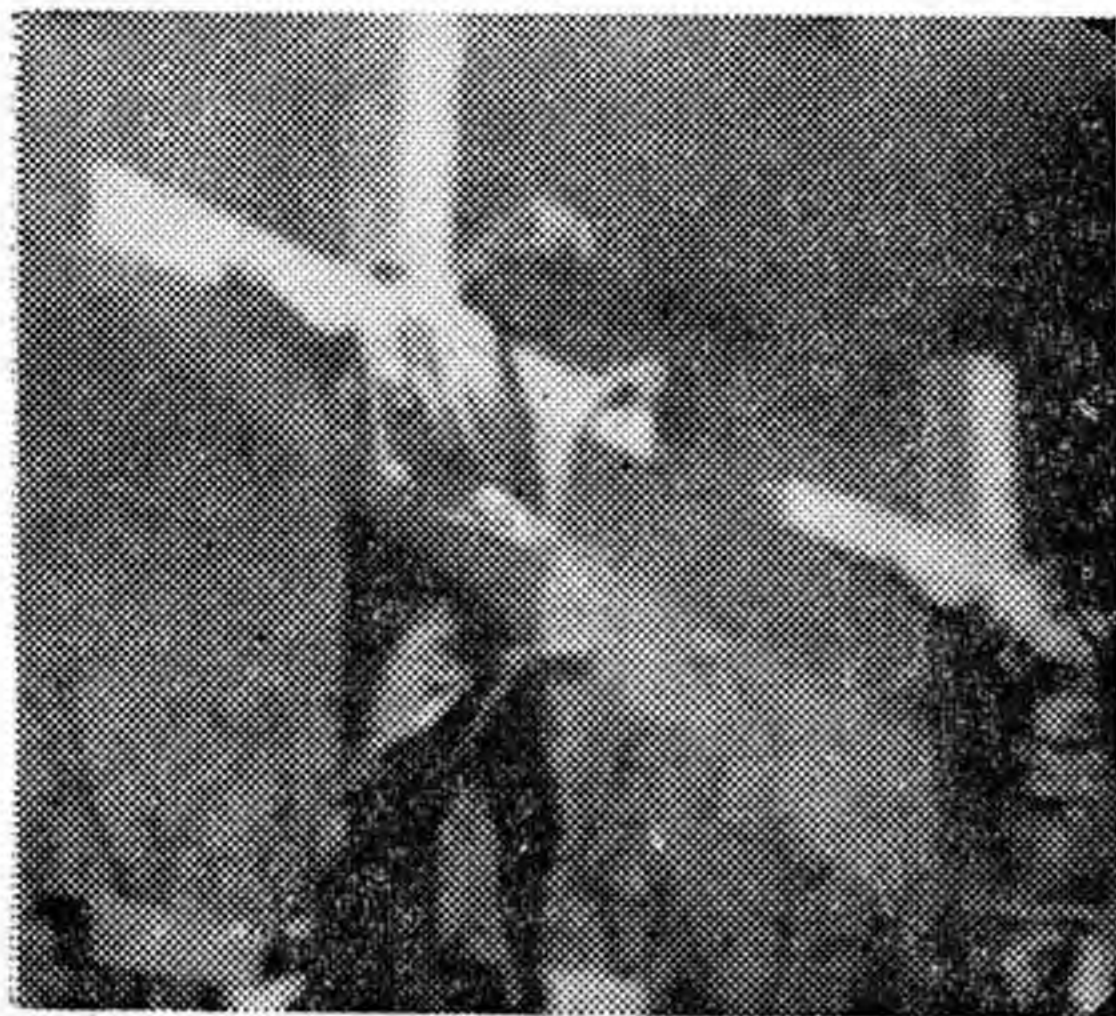
で、実際映画を見た感想は、どうかというと、期待は裏切られず、大いに眼を楽しませ

てくれた。勿論、演技の方は学芸会なみだし登場するシーンも多くはないのだが、若さにハチ切れんばかりの肉体は、一般のピンク女優の疲れた感じのそれとは全くちがう。傍に並べて縛られた女優さんが可哀そうなくらいだった。美貌というのではないが、吊りあがつた眼と肉感的な唇が印象的だった。

それはいいのだが、緊縛度となると、例によって例の如しで、団氏のいわれる不器用なのか、その筋を考慮してなのか、極めてなまぬるく、お義理程度。津村たちが寄つてたかつて美津子を裸にするシーンにしても、キャーキャーとじゃれあっている感じ。(もっとも乳房がプリプリする所はミモノではあったが)切迫感とかリアルには、ほど遠いものがある。

その点、「密通刑罰史」の江戸篇で、女房が夫に折檻されるシーンは、よほどリアルだった。そこらあたりが女優の演技力なのかもしれない。

ところで、私がピンク映画を見ていつも苦笑してしまうのは、スクリーンを見ていながら、その楽屋裏がのぞけることである。人里はなれた一軒家である筈なのに、ふと表を見ると裏家があったり、富豪の奥座敷が連れ込み旅館の一室に見えたりする。ピンク映画はたいてい三本だてだから、その三本に登場する俳優が同一の場合が多く、一篇では刑事だ



ったのがもう一篇ではギャングのボスだった
りして頭がコングラカッてくる。

更に退屈で愉快なのはベッドシーンで、ピ
ンク映画の条件として上映時間のほぼ三分の
一は男女のからみあいを見せられるわけなの
だが、時間の長い割にただモタモタゴソゴソ
やるだけで、いっこうにラチがあかない。熱
演される俳優さんがたには悪いけれど、つい
吹き出したくなってくる。団氏の楽屋話を折
々読むから尚更こっけいさが増してくる。

しかし、私はここでひとつの重大な発見を
したように思う。ピンク映画に対してその筋
が比較的寛大なのは、結局ピンク映画の退屈

さ、こっけいさのためなのではないだろうか
——ということである。これが妙にリアルだ
ったら忽ちバツサリやられるに違いない。要
するに想像力の入りこむスキのないクソリア
リズムの退屈さが、かえってピンク映画にさ
いわいしている、と考えるのである。

もしこれが大いに想像力を刺戟する作り方
をされていたなら、たちまちピンク映画はそ
の筋の圧力で逼塞しなければならぬことに
なるだろう。あたかも奇巧が写真ページをカ
ットせざるを得なくなったように。

縛り映画に話をもどすが、ピンク映画の縛
りシーンでもの足りなく思うのは、縄のしま
り具合があまいのもさることながら、そのム
ードのなさである。万事安上がりになけれ
ばならないんだから、そこら辺は大目に——
というのは製作者の怠慢である。これほどピ
ンク映画の中で責めの要素が重要視されて来
ていることを考えれば、ベッドシーン同様な
んらかの工夫がなされて然るべきと思うがど
うであろう。ベッドシーンのみカットカラー
になって、縛りは白黒というのは不公平であ
る。「刺青」のある鮮烈な印象を思い出して
いただければ、なにもムードにして縛らなく
ても、充分に（工夫次第で）ムードを高める
事はできると思うのである。

最後に縛り映画のムードというものが、決
してそのシーンの長短や露出度に関係がない

という例として、前述の「刺青」の外に、も
う一本、溝口健二監督の「近松物語」をあげ
ておきたい。（ピンク映画と比較するのが無
茶だと言わなければ、あくまでも一例です）

この映画は、冬場にNHKテレビで年一度
は放映されるから、たいてい御覧になってい
ると思うが、姦通した男女の引き廻しシー
ンが二回、その磔のシーンが一回ある。合計し
て五分にもならない時間である。が、その印
象の鮮烈なこと、感動の強烈なことは、御覧
になったかたは、よく御承知の筈である。か
つての「拷問刑罰史」はえんえん二時間にわ
たって、責めのシーンをくり返したが、極言
すれば、それらの全量をもってしても「近松
物語」の僅々五分に満たぬ数カットに及ばな
い。私のいうムードという意味を少しでもお
わかりいただけたであろうか。

この「近松物語」に対する私の傾倒ぶりは
（もう何回見たことだろう）遂にあの数カッ
トをカメラにおさめることを思い立たせ、そ
れを実行するにいたったのだが。残念なこと
に、テレビの画面は、どんなに工夫してみ
てもボヤけたものにしかうつらないのである。
とても実際の印象とは、ほど遠いものなのだ
が、参考までにと同封した。原板でそ
うだから、印刷したとなるとまるで幽霊みた
いなものになってしまうだろうけれど、私の
熱のあげかたの証しとして御笑覧ください。

ひ 緋

ちり 縮

めん 緬

じ 地

ごく 獄

(第三回)

白鳥大蔵

可憐な花

八木沢左内は、かなり遊び慣れた男で、自分でもそれを自覚している。

町奉行所同心の役目をカサにきて、これまで、ずい分、あくどいことをやってきて、江戸の町民を泣かせている。

なにをやろうと、自分のふところは痛ましいのだから、左内にとっては、こんなおもしろいことはない。

欲望のおもむくままに、好き放題、やりた放題のことをやっている。

おれのやる悪事なんか、たかが知れてる。

もっと上のほうのえらい役人は、おれなんかがいいたら、目の玉がでんぐり返るほどのひでえことを、堂々とやってるんだ。おれみたいな下ッ端役人が何をやろうと、悪事のうちになんか、はいるもんけえ……と、思っている。

そのしたたかな左内が、大津屋の姉嬢お絹の、苦悶にゆがむ白い肉塊を眼下にみおろして、思わず「ううむ」と、咽喉をふさがれたような声で、うなったのである。

それほど、お絹のその姿態は奇怪であり、華麗なものであった。

いや、お絹の身にとっては、華麗どころか羞恥この上ない、屈辱のきわみであった。

心理的な屈辱の上に、さらに筋肉のあちこちに、複雑な苦痛が加わっていた。

お絹の両腕は、うしろ手にかく縛りあげられ、その縄は、肩のあたりの白い肉に、むごたらしく食いこんでいる。左右の手首を、ひとつにぎっちりくくりあげた縄は、ふたたび前へまわって乳房をしめつけ、さらに、ぴいんと張ったまま、お絹の足もとへのびていた。

足は、極端に両膝を折られたまま、あぐら縛りにされている。

両手は背中、そして、両足は恥ずかしいあぐら縛りにされて、その縄じりをさらに首のうしろにまわされて締めつけられ、海老のような形にくぐられたまま、夜具の上に、仰向けにころがされているのだ。

動かせるのは、左右の足の指さきだけであつた。

どこもかも、むきだされていた。無慈悲に、くいこんでいる縄の力によって、強くねじられ、ゆがみながらも、花が咲くように、みごとにひらいていた。

これ以上のあさましい羞恥はないだろう。

花は若々しかった。左内の吸う息、吐く息におののきながら、微妙な色彩の変化をしめし、羞恥の表情にもだえていた。

かすれた呼吸が、十九歳のお絹の細い咽喉から、きれぎれにふきでていた。血のどるほどに唇をかんでいるのだが、それでも悲鳴がもれてしまうのだ。

両眼をかたくとじていた。どんなにしたたかな女でも、これほどの屈辱を、目をひらいたまままで受けとめることはできないだろう。

まして、廻米問屋大津屋の箱入り娘であつた。死ぬ勇氣と力があつたら、おそらく自分で舌を噛みきるにちがいない。

お絹は、くくツと声をもらし、大きく胸をあえがせたが、三巻き、四巻きと乳房の上下に、くいこんでいる縄が、そのあえぎすら束縛していた。

うす紅色の乳首だけが、縄目の間から頭をだし、かすかにふるえている。

悪徳役人の視線が、いま自分のどこをみつめているか、お絹は知っていた。箱入り娘とはいえ、女の本能で、直感的にわかるのだ。

どんなにかたく目をとじていてもわかる。そこが、燃えるように熱かった。締めようと努力した、無駄だった。

左右の膝をべつべつに縛った縄は、お絹の脇腹を締めつけるようにして、そのまま、背中の手首へひっぱられていたのだ。みじめにひらかれ、固定された姿だった。

自分のからだのくせに、もうどこも自由になるところはないのだ。

ぬけるような白い肌が、時間がたつにつれて、じわじわと桃色にそまっていく。羞恥と同時に、苦痛が全身を襲うのである。その上に、胸をしめつけるような恐怖があつた。

このお侍は、自分をこんなひどい形に縛りあげておいて、これから何をしようというのだろうか。

お絹は、それを知っている。それを思うと、気の遠くなるような絶望におちいる。

だからお絹は、このお侍は悪い人にはちがいないけれど、そこまでのひどいことはしない、と信じている。

信じるのが、いまのお絹にとって、たったひとつの救いだった。

悪徳役人は、十九歳の心身のせつない悶えを、じつくりと楽しみながら凝視していた。

いくら眺めていても飽きなかった。飽きるどころか、ますます味わいが深くなっていくような気がする。口中にふくんだ美酒を、咽喉へおとさずに、いつまでも舌の上で味を楽しんでいる気持ちに似ている。

濃い一部分のほかは、一点の汚れもない、すきとおるような肌であつた。娘として、いまが一番きよらかで、この世の不浄を知らないと、きなのだ。

大津屋彦兵衛が、どんなにいつくしんで、この器量のよい娘を育てあげたか、妻も子供もない左内にも、わかるような気がする。

悪徳役人は、舌なめずりをくりかえす。唾液がたまってきた、うすい唇をぴちゃぴちやと鳴らす。

そろそろ料理をはじめようか、と思う。

鯉はもう、マナイタの上に横たわっているのだ。なにもかもさらけだして、観念しているのだ。いや、観念させられているのだ。

ふふふ……これがこの世の極楽というやつか。これだから役人はやめられねえ。

あらゆる抵抗を封じられた十九歳の、どこへでも手をのばせば、触れることができるのだ。

八木沢左内は、もうあせらなかつた。あせる必要はないのだ。あと残っている仕事は、この可憐な、ういういしい花を摘みとることだけである。

いつもはガツガツと女をあさるこの意地汚ない悪徳役人が、こうして手も足もださずにくつろぎと観賞をつづけているのは、珍しいことであつた。

お絹の姿態の、あまりにも凄絶な美しさにあるいは、おじけづいたのかも知れない。

「なにも、あせることはねえんだ」

と、左内は声にだしてつぶやいた。

ここは、拘摸の親分立花屋久六の、だれにも知られていない別宅の地下部屋だ。

仲間うちでは、花屋敷などと呼ばれているが、その実態は地獄屋敷の、しかも最も奥ぶかいところにある一室である。

大津屋の美しい姉妹が誘拐されて、こんな所に監禁されているとは、立花屋一家のほかは、だれも知らないのだ。

美しい魚

大津屋の娘お絹が、八木沢左内の毒牙にその清純な柔肌を噛み裂かれようとしているとき、妹娘のお雪もまた、おぞましい羞恥の危機にあえいでいた。

お絹が責めなぶられている部屋の向かい側に、暗くせまい廊下をはさんで、その密室はあつた。

立花屋久六のめかけのお仙が、もうかれこれ半刻あまり、お雪の心身をなめつくしているのだ。

お仙は女だけに、左内よりもさらにねばつくく、執拗だった。猫がネズミをとらえて遊ぶ姿に似ていた。

妙になまあたたかく、べとべとした、飽くことをしらないお仙の接触がつづき、羞恥と嫌悪に、息もたえだえのお雪であつた。

いくどか救いをもとめる必死の金切り声をあげたが、この地下部屋では、外へきこえるどころか、姉が捕われているはずの、廊下を

はさんだ向い側の部屋までも、声はとどかないのである。

この大きな地下部屋は、いくつもの仕切りになわけているが、各部屋の出入り口は、障子のかわりに、頑丈な檜で作った板襖をはめこんである。

もっとも、お雪の声がとどいたところで、姉のお絹が助けにこられるはずもなかつた。「かわいいねえ。なんてかわいいんだらう。食べてしまいたいくらいだよ……」

お仙は、とろんとした目で、ぐったりしたお雪の全身を眺めている。

さすがのお仙も、ようやく疲れて、いま、一服しているところなのだ。

煙草盆を手もとにひき寄せ、立て膝になつて、きせるに粉煙草をつめる。

すばすば吸いながら、視線はお雪のもっともかわいらしい部分を眺めている。いかにもうまさうに目を細めて、鼻の穴から煙草のけむりを吐きだす。

女ざかりの、しかも人一倍熟れきつた肉体をもつお仙が、同じ女の、まだ十六歳の小娘を相手に、なめたり吸ったりして夢中になっているのだから、これも変っている。

この部屋の四隅の欄間には、直径三寸ほど

の鉄の環がぶちこんである。

左右の手首と、左右の足首を、べつべつに縄で縛られたお雪は、仰向けにされて、そのやや細めの四肢をいっぱいひろげられ、動くことができない。

手足を縛った四本の縄は、それぞれ四隅の鉄の環につなぎとめられているのだ。縄は、ぴいんと張りつめている。

畳に触れているのは、わずかに背中のおあたりだけで、手足はもちろんのこと、肩も尻もなかば宙に浮いていた。半吊りの形にされているのだ。

大きな網ですくいあげられた魚のようである。白くなめらかな、清潔な肌をもった、美しい魚であった。

お雪が羞恥の涙をながし、嫌悪の悲鳴をあげたのも当然である。自分がこんなに恥ずかしい、あさましい姿にされることなど、いままでに一度でも空想したであろうか。

しかもお雪は、お仙の舌と唇による、思いもよらぬ不潔な攻撃をうけたのである。

網にすくわれた魚が、なんとか漁師の手から逃がれようとしてぴんぴんはねるように、お雪の全身の筋肉は、お仙の唇を避けて、激しく躍動した。

しかし、縄で縛られ、大きくひろげられている四肢を、それぞれの方角の斜め上方に吊られている身では、むなしい抵抗でしかなかった。痛々しいあがきでしかなかった。

そのはかない抵抗の姿がまた、お仙にとっては、よだれのでるほどうれしいのだから、始末におえない。

旦那の立花屋久六が、多田薬師の暗い境内で、大津屋の用心棒寺尾半九郎に片腕を斬り落とされたことなど、お仙は知る由もない。もっとも、たとえ久六が殺されたとしてもこの女はあまりおどろかないだろう。

久六の悪事の数々をお仙は知っている。どうせ畳の上では死ねない男だと、日頃から思っている。

第一、お仙は久六に対して、はじめから惚れてもいないし、毎晩抱かれたからといって愛情が湧きでてきたという覚えもない。

しょせん、あたしは金で囲われている女だと、割り切っている。

どうしたわけか、この半年ばかりのうちに久六のあっちのほうの力が、きゅうに衰えてきている。あまり遊びすぎたせいだよ、とお仙は久六をからかう。

花屋敷とよばれているのだっぴろい別

宅に尻をおちつけていれば、毎日うまい酒がのめるお仙だ。

旦那の久六に不満はあっても、お仙には結構ここが極楽なのである。

お仙の癖を知っている久六が、ときどき若い女をつれこんできては、お仙に与える。

猫に鯉節を与えるように、お仙に女をあてがうのだ。

お仙が執拗に女をいたぶって、ひいひい泣かせるのを、隣の部屋でのぞき見をして、よろこんでいる久六だ。この地下部屋には、そんなのぞきの仕掛けまで巧妙にこしらえてある。

久六が、八木沢左内に、「あっしはこのところ、すこしばかり趣向を変えましてね」

といったのは、つまり、このことである。ひっそらってきた若い女を、あられもないやり方でお仙がひいひい泣かせているのを、隣の部屋でのぞき見しながら、久六は夢中で息をはずませる。

のぞき窓に目玉を貼りつかせながら、久六がなにをこそそやっているか、お仙はちゃんと知っている。もう四十の半分をこして、そろそろ五十に手のとどこうという巾着切り

の親分のやることではない。

お仙は、ますます久六に嫌気がさして、近頃では顔をみるのもわずらわしい。

しかし、いまこの花屋敷をでたところで、ほかに行くあてもないから、辛抱しているのだ。働くのは、もうばかばかしい。ぜいたくの味を知ってしまったから、いまさら両国の出合茶屋なんかの女中にもどる気はしない。行燈の灯影がゆれて、死んだようになっていたお雪の白い肌が、ほのかに息づいた。さっきまでお仙の唾液にぬれて光っていた肌が、もう乾いている。

「ゆ、ゆるして……」

かぼそい、きれぎれの声で、お雪が哀願した。

縄で吊られっぱなしの手首と足首が痛いのだろう。胸と腰を、よじるようにして動かしただ。胸のふくらみも、腰のまるみも、成熟とよぶにはあとひと息という、お雪のからだである。

そのみずみずしさ、清潔さに、お仙は夢中になっているのだ。

「お、お願いです、もう、ゆるして……」

可憐な声である。その声に挑発されて、お仙の胸に、またむらむらと、熱くぬれるもの

がこみあげてくる。

火のついていいるきせるの雁首を左足の一番ふといところの内側へ、ついッと寄せる。

「あ、熱ッ……」

小さな悲鳴をあげて、お雪は反射的にけいれんする。脛の筋肉がこわばり、足の指が虫のようにそりかえった。

お仙は、けらけら笑う。煙草をあたらしくつめかえて、火をつける。きせるの先を、またそこへ近づける。

「ひいッ、ああッ……」

ぎくんッと、お雪のからだがりかえる。

胴をねじるようにして、お仙の悪戯を避けようとする。

くく、くく……とお仙は、いかにもうれしそうに咽喉のおくで笑いながら、なおもきせるの攻撃をやめない。

「も、もう、ゆるしてください……」

齒をかむような声で、お雪はむせび泣いている。手首から先が、縄に吊られているために白っぽくなっている。その苦痛から、すこしでも逃げようとする、背中や腰が、あさましい姿でうごめくのだ。

「あたしのいうことを、これからなんでもきいてくれるかい、え、お雪ちゃん？」

うつとりと目を細めながら、お仙がいう。

一服吸った吸いがらを、ポンと煙草盆の中へ落としてから、

「ほんとうに、あたしのものになってくれるかい？」

にんまりと、もう一度お仙は笑ったが、あたしのものになるということの意味が、お雪にわかるはずがない。

「いやだと言ったって、あたしゃもう、お雪ちゃんを手放しやしないからね」

煙草盆を膝頭でわきへどけておいてから、お仙はまた顔を寄せてきた。

「ひいッ……」

と、お雪の悲鳴が、ながく尾をひいてとまらない。白い咽喉首の肉が、ひくッ、ひくッとうごめく。

欄間の四隅からのびている縄が、お雪のけいれんにいっそう強く張りつめ、びいんという音をたてた。

お雪の神経はふたたび一点に集中して、もう目の前のことが、一切わからなくなる。

こんなことがあっていいものだろうか。

全身のすみずみにまで、戦慄が走り、髪の毛が逆立つ。

ああ、こんな、こんな破廉恥な、おぞまし

いことが、この世にあって……ああ……いいものだろうか……。

ああ、いやッ、もう、いやッ……。

おとつぁん、おつかさん、助けて……ああ……た、た、たすけてえッ……。

ああ、も、もう……。

「しずかにおしよ。なにも、そんなに恥ずかしがることはないじゃないか。すぐに慣れてこんどはあたしのことが、恋しくて恋しくてたまらないようになってくるさ。……それにしても、なんていうきれいな肌をしているんだらうねえ……」

まるで見世物のろくろ首のように首をのばし、お仙はお雪の顔をのぞきこんだ。

お雪のまつ毛のあいだから、涙の粒があふれでる。いっそう固く目をとじると、涙はほろりとこぼれ落ちる。

お仙はそれを見ると、ひひひと笑い、ぬれた舌をぺろりとだして上唇をなめ、それからまた、ぺろりと下唇をなめた。

お仙の顔が、また沈んだ。

ひいッ、ひいッという悲しげな否定のうめき声が、お雪の齒のあいだから、また、あがった。

狐 と 狸

お京は、柱を背にして、うしろ手に縛りつけられていた。

下半身がしびれていて、自分のものでないように思えた。いや、しびれているのは下半身だけではない。どこもかも雑巾のように疲れ、手足の指のさきまでがしびれていた。

ここも、地下部屋の一室である。地上の土蔵の床板をめくりあげて階段をおりてくるとすぐ左側の部屋が、ここである。

この部屋で、お京は、犬にさせられた新助のために、さんさんの恥ずかしめをうけたのだ。

あのととき、お京は犬にもてあそばれる人形だった。人形には、意志も抵抗もない。だから、みんなの見ている前で、あんなひどい目にあわされたお京だったが、心はそれほど傷ついてもいなかった。傷つくほどの余裕もなかった。どうともなりやがれ、という気持ちになっっていた。

むしろ、肉体的な疲労のほうがこたえた。

八木沢左内、立花屋久六、めかけのお仙、子分の銀三、そしてお絹とお雪の姉妹のみて

いる前で、犬にされた新助は、お京を襲ったのだ。

みんなの前で犬の真似をしたら、てめえの罪はゆるしてやる、と左内にいわれたのだ。

その新助も、ほかの部屋にぶちこまれたらしく、ここには居ない。

静かだ。激しい疲労に、お京は縛られたまま、うとうとと居眠りをはじめていた。

乳房の上下に、あいかわらず縄がきびしくくいこんでいて、とても眠れるような状態ではなかったが、お京という女は十三歳のときから、もう八年も拘摸をやっている、くそ度胸がある。

柱に縛りつけられたまま、しだいに深い眠りのなかへひきこまれていく。

犬になった新助に責められる前にも、まむしの源次のために、土蔵のなかで、さんさん仕置きをうけてきたお京である。からだが疲労して頭が重いのも、無理ではない。

どのくらいの時刻がすぎたろうか。

ハッと気づいて目をあけたとき、すぐ鼻のさきに、まむしの源次の狼のように精悍な顔があった。

お京が目を見ましたのを見て、源次はにや

りと笑った。しどけないお京の寝顔を、だまって眺めていたのだろう。

いや、寝顔だけでなく、お京のからだのあちこちを見つめていたのかも知れない。

身に布きれ一枚つけていないお京なのだ。

肌につけているものといえば、胸にくいこんでいる数本の縄だけである。

この男は、さっき久六親分と外へ出ていったはずだけど、いつ戻ってきたんだろう、とお京は、まだぼんやりしている頭で思った。

「あいかわらず、いい度胸だな、お京。そんな恰好で、よく居眠りができるな」

縄のあいだからとびだしている乳首をつまみながら、源次がいった。つまんだだけでなく、源次はそれを強くひねった。

敏感な痛みに、お京はようやくはつきりと目がさめた。源次の手を払いのけたくても、両手は背中に縛りつけられている。

「あ、源次さん、いつ帰ってきたんだい？」

「なに、ついさっきよ。おどろいたぜ、親分が殺されたっていうのに、八木沢の旦那も、お仙姐御も、小娘を相手にうつつをぬかしていやがる」

源次は顔をゆがめ、大げさに舌うちした。

「えッ、親分が、こ、殺された？」

さすがに、お京はおどろいた。

「しッ、大きな声をだすんじゃない。おれはいま、このことを一家の者に知らせたものかどうか、思案しているところなんだ。おめえにしゃべるのが一番はじめなんだぜ」

恩着せがましい口ぶりで、源次はいった。

日本橋伊勢町の廻米問屋、大津屋彦兵衛の懷中からすりとったオランダ歌留多の半片。

これを、抜け荷買い仲間の割り符とにらんだ悪徳役人八木沢左内は、久六に命じて、大津屋の娘ふたりを誘拐させた。

そして、大津屋の家へ矢文を放って、オランダ歌留多の謎を、彦兵衛自身の口から吐かせようと計った。

大川べりの多田薬師の境内で、久六は彦兵衛と会い、取り引きすることになったが、久六は大津屋の用心棒らしい男に、いきなり肩さきを斬られて死んだ……と、源次はそこまでするお京に話してきかせた。

が、かんじんのオランダ歌留多の半片を、自分がまんまと抜きとって持っていることはお京にも言わない。

このへんが、まむしと異名をとる源次の、思慮の深いところだ。

しかし、いかに狡猾な源次とはいえ、寺尾

半九郎に斬られた久六が、片腕だけを斬り落とされただけで、じつは生きていて、大津屋方につかまっているということまでは知らない。

「ふうん、おどろいたねえ。……でも、その話が本当だとしたら、いかにもあの親分らしい死に方だねえ……」

あまりのことに、お京も半信半疑である。

「けッ、なにを言やがる。こんなこと、うそや冗談でいえるかよ」

源次は、むくれた。

「ところで、あの犬野郎はどうしたんだい、え、源次さん」

お京は、話を変えた。久六が死のうが生きようが、なんとかこの縄から逃がれねばならない。

「ふん、新助のことが、そんなに気になるのか」

また強く源次の手が、うす紅色の乳首をひねった。

「あッ、痛いじゃないか。もう悪戯はやめておくれよッ」

いくら肩をふっても、源次の指から逃げられない。いっそうおもしろがって、ひねりまわす。

「……土蔵の裏に、水の涸れた古井戸があるだろう。新助は、あの井戸のなかへ叩ッこんだ。首をしめてな」

蛙を踏んずけたほどにも感じていないらしい源次の顔つきだ。

「なにも、殺さなくたって、よかったじゃないか」

敏感なところをもまれる苦痛に、お京は眉をしかめながらいった。

「なに、生きていても仕方なのえやつよ。早く往生させちまったほうが、当人のためだ。……ところで、銀三からきいたんだが、新助のやつ、この部屋で、さんざんおめえを楽しんだっていうじゃねえか」

源次の瞳の底に、チラッと、この男らしくない嫉妬の光りがよぎった。

「楽しめるもんかね。ご見物衆が大勢いるなかでやらされたんだ。死ぬよりつらい思いだったろうよ」

吐きすてるように、お京はいった。胸の奥のほうに、また疼痛がよみがえった。

「お京、おめえはどうだった。よかったか」

卑しい好奇心と嫉妬を顔にあらわし、顎をつきだして源次がいった。

「いいも悪いもありゃしないよ。お前にさん

ざんいじめまわされた後じゃないか。こっちはぬけがらみたいなものさ」

ふふふ……と源次は安心したように片頬をゆがめて笑った。

あの、土蔵の中での仕置きを思いだす。あのときのお京は、ぬけがらでもなければ、人形でもなかった。まぎれもなく、女だった。

女そのものの反応があった。男としての、動物的な優越感が、源次の胸を満たす。

おれのことを、いままで嫌いだったかなんだとかぬかしやがったが、とどのつまりは、噛じりついてきやがった……。

「そんなことより、源次さん、この縄をとい

ておくれよ。痛くて痛くてたまらないんだ」

お京は、鼻にかかった声をあげて、男ごころを誘うように、ゆっくりと腰をまわすようにくねらせた。

「ねえ、源次さん、あたしゃ、さっきお前にあんな結構なお仕置きをしてもらってから、すっかりお前にまいっちゃったんだよ。いいえ、嘘じゃないんだ。本当なんだ。だらしないねえ、女のからだなんてものは……」

「ふふふ……縄をといってもらおうと思って、調子のいいことを言やがる。ふふふ……」

もったいぶって、ふくみ笑いなんかしてい

るが、もうとつくに、お京の縄を解く気になっっている源次だ。源次こそ、さっきの土蔵のなかでのことが忘れられないのだ。

親分の久六が殺されてしまった以上、源次にとって、この立花屋一家でこわいものは居ない。お京を殺そうが生かそうが、まむしの源次の心のままだ。

器量といい、拘摸の腕といい、度胸といい、気っぷといい、お京は殺すにはもったいないいい女だ。

もともと、源次はお京に惚れていた。いつかはモノにしてやろうと、その機会を狙っていたが、まさかこんな形で念願がかなうとは思ってもみなかった。

おれにもようやく運がむいてきたらしい。きゅうに五体に力が満ちてくる思いだ。

お京は情婦にして、この立花屋一家の縄張り、思いのままにしてやる。それから、このオランダ歌留多の半片だ。

源次は、自分の腹巻きの中に手をつっこんで、オランダ歌留多をさぐってみる。手拭いに包んで、大切にあなたためであるのだ。

この異国の花札の切れっぱしが、どんな金儲けのネタになるかはわからねえけど、ああやって大津屋彦兵衛が、わざわざ用心棒まで

つれて取り引きに現われるしろものだ。
うまく利用すれば、どれくらい儲けになるに
ちげえねえ。

それには、すこしばかり邪魔になるやつが
いる。八木沢左内と、お仙だ。

この二人をなんとか始末しないと、立花屋
の実権が、完全におれのものになったと言
えねえ。さて、その方法だが……。

源次の夢は、どんどんふくれていき、とど
まるところを知らない。

その夢を、お京の声が破った。

「ねえ、源次さん、早く縄を……この縄をと
いておくれよう……」

身もだえして、しきりに訴えている。

裸身にくいこむ縄目のきびしさは、もう切
実な苦痛になっているのだ。疲労が濃いせい
か、お京の目の下が青黒くなって、いっそう
凄艶な容貌である。

「待て、待て。いま解いてやる」

源次は、柱のうしろへまわって、縄に手を
かけた。

すぐに解こうとしたが気が変って、うしろ
から両手をまわすと、もう一度たっぷりと、
お京の左右の乳房をいたずらした。

さんざん黄色い声をあげさせてから、やっ

と縄の結び目に手をかけた。源次のあくどい
なぶり方に、お京の額の生え際には、じっと
りと、あぶら汗がにじみでている。

「だれが縛りやがったのか、やけに結び目が
固いぜ」

と、ぼやいたが、それでもようやく縄がと
けて、お京の両腕が自由になった。

胸から縄がはずされると、きゅうに乳房が
ふくらむ思いで、お京は思わず、ふうッと大
きな息を吐いた。

「あぶねえところを助かったんだ。恩に着ろ
よ」

と、源次は片手で、お京の尻をなでながらい
った。二十一歳の尻は、白くてまるくて形が
いい。

お京は身をよじって、

「わかってるよ」

くどい人だねえ、と言おうとしたが、いま
はだまっている。とにかく縄目の地獄からは
逃がれたのだ。縄が肌から離れるときには、
みしみしという音がした。それほど固く食い
こんでいたのだ。

腕から胸にかけて、縄目のあとが、赤い縞
模様になっている。

からだが自由になると、お京は自分の裸身

を意識した。この数刻のあいだに、凌辱につ
ぐ凌辱を肌身に受けたお京は、羞恥心という
ものを忘れていた。

「ねえ、源次さん、こんな恰好じゃ、きまり
が悪くて、立つことも歩くこともできやしな
いよ。そのへんで、女の着るものをさがして
きておくれよ」

両腕で自分の乳房をかくし、背中をまげて
太腿をよじり合わせるようにして、お京はい
った。

「ちえッ、世話のやける女だ。お仙の部屋へ
いけば、着替えの一枚や二枚はあるだろう。
頂戴してこよう」

「お仙姐さんは、この地下部屋のおくで、大
津屋の小娘を、ぴちゃぴちゃなめているよ」

「知ってるよ。だからそのすきに、上の部屋
へいって、だまって頂いてくるのさ」

「そうだったね、お前さんは盗ッ人だったね
え。うっかりしてたよ」

「なにを言やがる」

いまお仙に会うことは、源次にとって、ま
ずい。久六が殺されたときけば、お仙はまず
だまっていはいない。

気の強い女だから、案外、この先はあたし
が久六の跡目を継ぐなどと言いだすかも知れ

ない。そのくらいのことは、やりかねない女だ。

そうになったら面倒だから、やっぱりお仙を先になんとか片づけなければ……。

と、そんなことを考えながら、源次は地下部屋の階段をのぼっていく。

お京がひとり、残された。

このすきに逃げてやろうと思ったが、すっ裸では、どうにもならない。

仕方がない。とにかく、なにごと着物をきてからだ。

縄目のあとを両手でこすっているうちに、お京の疲労も、しだいにとれてきた。回復の早いのは、やはり若さのせいであろう。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

どうやら、源次は本気であたしに惚れているらしい。

だけど、あたしはあんな、まむし野郎なんか大嫌いだ。

新助と二人で拘摸の一家から逃げだし、源次のために千住の手前で捕まってからは、ずいぶん、ひどい目にあわされた。この恨みは忘れられない。

いつかは仕返しをしてやるんだ。そのために、いまはおとなしく、あいつの言うなりになっていてやる。だけど、いつかきつと、このかたきはとってやる。

まむしめ、おぼえているがいい！

お京の腹のなかは、煮えくり返っている。しかし、それを顔にださないとこが、さすがに年期をつんだ女中着切りだ。

源次のやつだって、いまはあたしに親切心をみせているが、ああいう男だ、いつまた、くるりと心変わりするか、わかりやしない。

あたしの本心を、案外いまでも承知していて、そらッとぼけているのかも知れない。

——狐と狸の化かしあいだ。

地下部屋への階段を、足音を殺しておりてくる気配がした。源次らしい。

お京は、あわててまた腰をくねらし、媚態

をつくった。

がらりと戸があいて、おりてきたのは、やっぱり源次だった。

「お仙のあま、とんだ衣裳道楽だぜ。みる、こんなにあらあ。よりどり見どり、好きなを着ろよ」

ひとかかえもある着物を、無雑作にお京の前へ投げだす。

感心なことに、襦袢も腰巻も、帯紐のたぐいまで、ちゃんとそろえてある。

「源次さん、あたしゃ本当に、お前が好きになりそうだよ」

うるんだ目で源次をみあげ、腹のなかで、ぺろりと赤い舌をだすお京である。

「こうなったら、いい思いをするのも、地獄へおちるのも、おれと一緒にだぜ、お京」

いいながら源次の手が、まだ腰巻をつけ終えたばかりのお京のからだへ、しつこくのびてくる。

「わかってるよ、源次さん。とにかく、着物を着るまでは待っておくれな」

まむしの手を、ぴしゃりと叩きたいのを我慢しているお京である。

(つづく)

表題を「物語」とうたったのは便宜上言葉尻に花を添えたまでであって一っぱしの作家らしく大いに気取ってやろうなどという了簡ではさらさらなく、例によって無責任な口から出まかせの駒切り放談をやたらと放り込む「塵箱」^{ちり}とでも思って頂けば幸いである。私はどう云うものか昔からこの「腰元」と



チャイニーズキヤラクター
いう文字つまり字画と姿態の全部——云うなれば頭の頂^てっぺんから、爪さきに至るまでがむしろように好きで、多分その主因は裾を曳くその裾さばきも優美にそしてあの目にも鮮やかな紫矢絰に黒一色の立矢帯、白丸ぐけの帯締め、緋の長襦袢真紅の湯文字に黒髪の高島田と云った一連のなかば制服的な衣裳に限りな

い愛着を感じるあたりにどうも帰着するようである。そもそも一体誰が開発したコスチュームなのかいまだに識る由もないが、多分徳川三百年の泰平に慣れて、ああでもない、こうでもない年代を重ねているうちに自然と完成したものらしい。

当時は想像するに城中またはお屋敷内にはきまって一人のきわめてうるさ型の御家老役がまず居るもので、専ら^{もっぱら}殿さまの身边にまつわりついて生活の一切をお世話するやや高級な女共は台所や掃除洗濯と云ったじんじんばしよりのしもじもの一般女中どもとは一見して区別しなければならぬハメと相成り、このような独特なユニホームを思いつきその作成を督促したのではあるまいか。

「殿も殊の外お気に召したようで、腰元どもにこのたびの思い切った矢絰衣裳の制服採用の件は誠に御同慶に堪えない。大きな声では申されぬが、あのよう^{うえさま}にわざと長がめに裾を曳かせたのは、万一、上様のお目がねにかなって伽を仰せつかった時でもたやすく逃げにくく即座に捕まることを考えてのことじゃった。

また寝ても起きても朝から晩まで高めの高島田を結わせたのも同じ理屈で、ちよいとあ

の髻を握めばたちどころに一コロと相成る。それからゆっくりと思う存分に髻を乱せばよいではないか。それからまたわしは腰元どもがぜひ守らなければならぬ殿中服務憲法とも云うべきものを大急ぎで起草したのだ。詳しいことは避けるが要するに上様絶対至上主義で上様からのご命令に対しては一切の雑音まかり通らず、ことの如何を問わず直ちに服従しなければならぬ。例えば余の面前で逆立ちをせよと云われて内心大いに不服としその伝達にもし服従しない場合は前もってそれ相当の死にまさる重いお仕置を覚悟せよとあるが如しである。どうじゃな……このように万事抜け目がないであろうが。実はこれ位蟻の出すすき間もなく腰元憲法を作って置かぬと、およそ家老職なものは終生勤まらんのじゃ……て。お判りかな」

さて、邸内十数人居る腰元の中に最近一人の町娘が御奉公に召し抱えられたと思われた。名前は、確かおさよかおさととか申したが、この女はひととき美しい顔に似ず、どう云うものか挙動が定まらない。つまり、しめし合わせて何やら意中の男と逢い引をしているらしい素振があるのだ。残念ながらそれが真実であろうと無理からぬ齡頃でもあり、こ

こは一番大目に見てやりたいところだが、どっこいそれでは他の同じ齡頃の腰元達に對してみせしめが効かなくなる。で、早速殿に申上げる、と常日頃仕事もなく、どちらかと云えば身体をもて余し過ぎておられる殿にはもちろん異存はなく「思い切り演^やって見ろ、それでも泣かぬなら余の新刀で試めし斬りしてもよいぞ。かく申す余より三太夫そちの方が万事遙かにベテランじゃ。ウム、面白いぞ……」と仰せられた。

このような場合感極まって、それでは家老直々の詮義立を……などと、昔上映された新東宝作品の「危し伊達六十二万石」の、嵐寛扮する原田甲斐みたいなお調べは、本当はよくない。自分がのどから手が出るようにやりたくとも、そこはちゃんと壺^{つば}を心得えたその道のベテランに一切まかせせるもの。何んせ世をあげて、泰平の頃故、せめて男對女の關係は、一発即発物見遊さんの花火をどかーんと打上げなくっちゃ一事が万事意気消沈するばかり。されば甘くも辛くも、直接酒の肴にはなるまいが、事と次第によっては責め折檻の一つや二つはまた乙^{おつ}じゃねえかって云うことに相成る。

こう云うことは昔の帝国軍隊もそうであっ

たが、先き程の映画「危し伊達六十二万石」で、北沢典子扮する腰元お糸が後ろ手に縛られ、松の枝から吊るされて折れ弓で白状せよと打たれる情景などは、ご多聞に洩れずともども一方的な権力の行使であつたが、映画の場合は金兵衛というベテランの用人が、密偵である腰元を責めたからまだよかった。ご家老さまはただそれを煙草を吹かせながら、のんびりと見て居れば事が済んだのだ。このように直々のお調べにも色々と段階があるものだ。

ただ私はどんな場合でも、口はばつたいようなこと云うようだけど、責め役も責められる方も乞い願くばともに絵のように在って欲しいと思う。場合によっては息がつまることもあるろう、身体中がジーンとして震えることもあるかも知れない。中には途中、中坐しトイレットへ行きたくなることだってあるだろう。けれども絵中の人物が血みどろになっては困る。この世界は決して今はやりのベトナム戦争ではないのだ。もっと存分に色気があつて、静的の中にも動物的でひどく官能がゆすぶられ、終局的にはたとえそれがセックスに結びつこうともそれはあくまで見世物的シヨウであつて欲しい。言葉を替えて申せば近

代文明に反し大時代的なもの程よろしいと云うことになる。

江戸と云ってもピンからキリまで大小さまざまな録高をはむ大名旗本屋敷があり、豪勢に五百坪から数千坪？の庭を持ったものも居れば僅かに数坪に足らない庭の武家屋敷もあったに違いない。池あり噴水あり築山ありの大邸宅の庭なら、どんな場処に問題の腰元を曳きずり出して如何ように吟味しようとも可ならざることはないであろうが、数坪に柿の木一本というお寒い庭では、樹に吊るせば摒越しに衆人環視となり絵どころではなくなる。これに俳句ではないが季が加わるとすれば、どうしても池あり築山のある大邸宅の庭内に軍配があがる——つまり恰好の折檻場が立ちどころに出来上るという寸法だ。

まず春である。春と申しても早春から晩春までであるが、そのうちでも桜花爛漫と咲く陽春の頃は、何んとかく男と女が仲よくなりたくなるシーズンでもあり、浮世絵師伊藤晴雨氏が好んで描いた肉筆画が暗示するように、美しい腰元の責め折檻は、先き程の町娘おさよをすっぽり桜の樹に縛りつけても、吊るしても、豪華絢爛として観る者の心を即座に奪うかも知れない。

明治の文豪夏目漱石の、猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れるというのが彼岸過ぎの春のことだとすれば、女の膝小僧があらわに出る位裾が乱れても散りかかる桜花を背景に打擲する鈍い物音は心地良く殿のお部屋にも聞こえて「うふふふ……三太夫ら、じわじわとやり居るわい」と云う情景に引継されるだろう。

ここで眼を転じ、京の竜安寺の石庭とやらで白砂に配する庭石に向ってしばし黙想すると、どなたも禅の世界が近くにあるような境地になります、と、ガイドブックに誌されているが、どなたも禅坊主になる前に問題は何んと云っても白砂に点在する苔の生えた庭石だろう。創建者細川勝元に尋ねるまでもなくこれはあるリズムを考えて配置されたと云われている。

丁度これと全く同様に、腰元を折檻する場合は発声法などの、もっぱら音の世界から云ってもタイミングのよいリズムが粗相なく伴奏されなければならない。これは季節が春だから何んとかく浮わついてくるとか、秋だからいやに沈んでくるといふものではなくて常時、同時録音上、必要欠くべからざる基本的な、刺身に例えるならばワサビのきいたツマ

みたいなものである。

季節感を少し離れて、ちょっと触れてみたい。恰好な例としてまた「危し伊達六十二万石」を引き出すが、僅か四、五分足らずの上映時間にも拘わらず、例の用人金兵衛が、間者として屋敷内に入り込んだ腰元を、御家老原田甲斐の命令によって庭内の松の木に無残に吊るし折弓で苛なむシーンは、私はあまたある腰元折檻の場面の中でもこれだけは秀逸だと思っている。こと程左様に音の効果はまた素晴らしい。誌上ではうまく再現出来ないが譜のない譜を仮りに綴ってみると次のようになろう。

まずシーンは遠景から近景になるにつれて女を打擲する音が次第に大きくなるのは当然だが、よく耳を澄まして聴いてみると、折れ弓で後ろ手に吊るしあげた女の丁度帯か尻のあたりを打つと間髪を入れず腰元の悲鳴ともつかぬ鳴咽、または絶叫が続く。つまり反響するのである。金兵衛はよっぽどこの種の責めが好物と見えて、最初に一打、続いて二番打、三番打という風に計六回打、たっぷりと打ちのめしてから憎くたらしいセリフを一発浴びせかけている。

へ こりゃ、女。きさま、松前鉄之助に頼

まれて、この屋敷へ、秘密を探りに来たのだらう。云えッ（声が上る）云わぬか（下る）。

云わぬと……（尻上りに上る）

で再び大きく折弓を振り上げて、次の打擲が開始されることになるが、このセリフのすぐあとの折檻は女にとっては余程辛かったと見えて、腰元の声にならぬ悲愴な絶叫と絹を裂く一沫の悲鳴は、けだし歴巻であった。最近のピンク映画でよく縛られる女優さんはアフレコにせよ本物の地声だと云うが、この映画の場合、たとえ吹き替えにしても名人級の貫録十分で、金兵衛が一打すると腰元お糸は髪をふり乱して一段と大きく悲鳴をあげ、続いて二回目の折れ弓が飛ぶと、ギャァ……とスクリーンを震わす大声をあげると同時に、言葉で云うなら、ああ辛いワ、とてもせつないワ、いっそのこと死んで^{しま}いたい……となる^{さなみ}ところが押しつぶされて、寄せては返えす小波型に、何度も何度も尾を曳いて哀れさの漂う嗚咽と化すあたりは、視覚よりも聴覚でズバリ今様セックスに結びついているようにも受取れる。どうせ折檻映画を制作するのだったら、少くともこれ位なものを目標とすべきではあるまいか。兎もあれ、用人金兵衛は続いて三回目の打擲をやって女に白状を強い

るセリフを云うが、これまた芝居事にはせよなかなかの迫力満点である。

へ 云えッ、白状せいッ（早口に上る）云われんとあらば生かして置けん……（早口に上る）

このあと続けさまに計五回の打擲を浴びせかける。実はこのシーンは映画があくまで公開性であることをおもんばかりで直接打つ打たれるの責め場はカットし折弓の音と女のやかすかな悲鳴だけにして、責めの最高責任者である家老職原田甲斐の、冷静な観賞振りをスクリーンに映し出す……という、山田達雄監督に限らずどの監督も、このようにして一応逃げて置くのが映画の常法なのである。

しかしこの責場の大詰めともなると、そうはいかんと見えて用人金兵衛が最後のとどめに似たセリフ

へ えいッ、強情なやつ……（ラストだから一際かん高い声）

と云い放つての第一打は、半分夢現つになつていた吊られた腰元の感覚を咄嗟に呼び戻したらしく、続けざまにあと三打擲して、女は完全に死の一步手前の悲鳴を一段と長く残したまま、遂に失心して了うのである。勘定高いファンは、この責場がスクリーンに映し

出されてから総合計十八回の打擲を女に加わえれば、大抵の女は参つて了うものだと錯覚されそうだが、何事にも前篇とか誘因だのがあるように、ここまで来る前には、つまり脚本に載らない責めのシーンが省略されていると見るべきであって、当の腰元は相当長い時間になたつて、じわじわと責めの世界へと引き込まれたものと解釈しなければ、つじつまが合わない。

ご家老さまが呼びでございますの声を、襖越しに聴いてから、丹精こめてしたためた密書をかくし、恐る恐る原田甲斐の部屋に入ると、

「先日は何ゆえ、そちは余の部屋を伺うたのじゃ、ここで素直に申し開きしてみい。余は見るとおりの悪人とは申せ、どめくらではないぞ。申せぬか、申せぬとあらば情けは無用じゃ。即刻用人に引渡して、吟味方を申付け。それでもよいか、よいな。本当によいな……念のためもう一度申渡すが、もしそのようになった場合は、そちはも早や人間腰元ではなく、一介の女肉となつて責めさいなまれるのだぞ……」

「どのようになれましようとも、覚悟の上でござります、御一同さまのよろしいように存

分に……」

などのように、万事前向きの正攻法でいくか、さもないければ

「余はそちを責めねばならぬ」

「嫌やでございます、そのような理不尽な真似は……」

「問答無用じゃ」……と強制的に踏切るか、いずれにせよ家老直々の行動にはブレーキがかかっているものとすれば、手をたたいて待機する用人衆をまず呼んで凄惨な実演にかからねばならない。極くありふれた順序から云えば、ご家老のこの拍手に答えるように、何処からか屈強な家来衆、または用人衆が三人ほど、バラバラ……と現われて、腰元を囲み、ウムを云わせず後肩を掴んで一先ず庭先きへと曳きずり出すであろう。残念ながら、こういう処は多分に徳義上遠慮しなければならぬものと見えて、映画ではしばしば省略されるがもしリアルに観客をエキサイトさせようとすれば、曾つて東京新橋演舞場において武智鉄二演出によるドラマ「青山播磨」のように、一般観客の見ているまん前で、これから折檻される腰元お菊（長谷川季子扮）を曳きずり出し、着物を脱がせ、長襦袢（この場合刺激のないようにわざと白の長襦袢に白

の蹴出しであった）一枚に剥いて、これからまるで縛りの講習会でもおッ始めるかのように、二人のご内儀派の腰元が観客にもよく判るようにお菊の両腕を後ろに廻わし、精一杯の憎くたらしさを顔面に浮かばせながら、念入りに縛りあげていくといったような所作事が、どうしても必要となってくるであろう。

ただ、余計なことだがこの芝居の時は、どういふものか女性観客が圧倒的に多かったので、同性のお菊がこれまた同性の敵役によって縛られ、次第に凄惨な折檻がつぎつぎと舞台上で演出されていくにつれて、場内は異様な雰囲気包まれたことは事実で、多分女性であつてもいろいろな心理現象がもし出されたためでもあろう。

さて、ご家老の命に依つて庭に曳きずり出されたさい前の腰元は舞台のお菊同様、も早や腰元役を剝奪されたも同然な形で取扱われる。しかし中身は別に変らないから前官待遇をするような、しないような恰好で、云わば三匹の猫に弄ばれる仔鼠みたいなものと化して丁う。用人衆の一人は密偵腰元の白い頬にビンタを喰らわせ、今一人の男はそのすきにサツと帯を解こうとするが簡単に解けない。それを見た三人目の男は、面倒とばかりいき

なり脚かけにして腰元をその場に倒し、両腕を後ろに捻じ廻わして「即刻縄を……」と云った。

群衆心理とは恐ろしいもので、受身がすっかり観念した腰元であればある程、相手方は馬鹿力が入り、矢絣の着物を通して肉体がまるで飛び出すかのようにガンジガラメに縛りあげてしまうものだ。さながら二の腕が黒い立矢の帯の背後で折れ曲るように、くくしあげられた腰元は、時間をかけてやつこらさと車井戸の隣りの松の枝に吊り下げられた。長い裾がダラリと垂れ下つても、地面との間が半米か一米位は優に離れている。責め役のベテランの一人は、このままでは永久に色彩効果が薄いことをよく識っているから、折れ弓の先きで腰元の長い裳裾を思い切つて左右に開け、同時に白い胫といかぬまでも両白足袋位が判つきり見えるように、緋の長襦袢から真紅の湯文字まで、あらわに出させる。これを空は青空、お庭は万木総緑というバックの中で、ご存知のものを演じようと云うのだから変な見方かも知れないが、しゃくに触る位昔の人は恵まれていたと思う。吊られた一匹の女肉は、そばに寄れば寄る程、伽羅の匂いがして、すえた匂いの野郎共はその都度鼻を

くんくん鳴らせてつめ寄り、ああでもない、こうでもない、女が一番嫌やがるような嫌やがらせを強行して「ご家老さま、如何でございましょう？　まず小手調べにこの辺からボチボチ始めましては……」などと、ぬかし

結婚式の時の花嫁ではないが、列席の女性がわざと醜女風に粧って居れば居る程、さ程美人ではない花嫁もその式場ではピカ一となるように、責め役の男衆が醜男であればある程……と云うよりは、そういう必須的条件下で、行なうのがそもそも責めの原則ではなからうか。由来大井川の渡し人夫や箱根山中の駕籠かき野郎共に浮世絵から抜け出たような美男子は一人も居ないことになっている。揃いも揃って、鼻柱の欠けたような醜男だから捕まった女は、立ちどころに美女化してくるという寸法。これに絹を裂くような声でも加われば鬼に金棒。筋はどうあろうと満点である。

それにしても昔は繰り返し繰り返し、よくもこりずに腰元だの、下働きの女どもをひっくくっては、白状せよだの、意に従えだのと一方的に責め折檻したものだと思ひしる感心したくなるが、裏の裏から考えてみると姫

路城内に今でもあるお菊井戸のように、吊られた惨めな姿をそれとなく、第三者的な感情で支配し、みずからはうっとりとした何とも形容のできない陶醉感に浸りたいというのではあるまいか……などと半ば女性の方をそねみたくもなる。天守閣に昇る通路にあたるお

菊井戸は、吊られたら最後、通行者は嫌がもうでも、眺めざるを得まい。どうせ晒し者にされた以上、ここでも見せしめということがあるであろうから、その姿態は目を覆うばかりのサジステイックなエロで一杯と見てよからう。ただ何度も申す通り、やたらと血なまぐさいのは敬遠したい。芳年の惨酷絵はその道の愛好者に譲って、ここでは血の吹き出し、あっさりムードでなければあと味がよくないのではなからうか。だがもちろん、女を裸にして縛れば腕や腿の肉に縄のあとがしばし残るように、鞭や折矢で打たれると白い脛の部分なにかにそれと判るみみずばれするような現象は、むしろ進んで甘受すべきであって、そのために失心するような腰元では到底絵にはなるまい。

声と云えばつい先頃封切された「日本拷問刑罰史」の中でも倉の中から責められる女の悲鳴を聴かせている。

それを江戸中のおよそお屋敷と名のつくお屋敷内で鳴かないうぐいすを無理にでも鳴かすかのよう

「昨日は麹町の何々さまのお屋敷であつたそうな……」

「いや、今日はまた、なんだよ赤坂の何々さまのお屋敷で腰元が後ろ手にくくられましてね、お庭の車井戸……ならまだよいところを余っ程物好きな殿さまじゃ御座んせんか、あろうことか三尺高い白木の磔柱を、わざわざお庭のど真ん中におッ建てられての俄か刑場……と云ったって、ありやどう見てもていのよい折檻場でさあ」

「ウム、それでどうしたい？」

「どうもこうもありやしませんよ。まるで虫けらだねえ、ああなっちゃ。嫌やだ嫌やだと尻ごみして哀願する齡の頃なら十九、はたちになるかならぬかの美しい腰元を手取り足取りにして、庭のど真ん中に曳きずり出したと思ひねえ」

「うん成る程」

「何んでもその腰元が殿さまの手文庫の中をちよいと見たと云う、ただそれだけの理由でさ……お手製の磔柱にかかるなんて、非道も非道、極非道だぜ、全く……」

「手前が一人で感心してばかり居たって始まらねえ。もっと有態ありていに話してみろよ」

「到底正面切って向いちゃ居られねえから俺らは生垣の蔭にかくれていたが、その内ににぶい何やら座布団でも叩くような音がして例の腰元の悲鳴が、とぎれとぎれに聞こえてきた。いやその哀れっぱいこと……子供の頃真夜中に谷中の墓地で盗人ぬすに襲われる女の叫び声を聞いたことがあるが、そんな生やさしいもんじゃねえ。で……怖る怖る茂みの間から覗いてみると、いや、もうその無残なこと。三尺高いと云ったって、どの道、本式の礫柱

じゃないんだから、低い一本柱に丁度人という字をそのまま押し立ったような恰好で腰元が縛りつけられている。左右に脚が広げられて、両方の脛の下を地面の杭に縛り、おまけに後ろ手の上からまた柱に二重にびったりと縛りつけられているから、身動きはまず出来ない……この生人形を少し低い芝生で仁王立ちの家来衆が、細めの青割竹で叩いているんだ。高島田の鬘は崩れ、帯揚げや帯締めはダラリと垂れ下って、海棠が雨に濡れているような恰好にもっていつて裾が真正面切っ

て開いているから、緋の長襦袢からそのまた下の真赤な湯文字まで丸見えでさア……。

あとは知らねえ、どうなったかねえ。どうせあの分じゃなぶり殺されたのに違えねえ。

処がそれから三カ月たった今度は夏のある日またまた見ちまったんだよ。単衣の矢絰衣裳で……そうだなア、桃色の薄っぺらな襦袢がペロリと押っぴろげられて、それも真びるまでさア。青姦じゃねえが青いお天とうさまの下で腰元を折檻するんだから余っ程あのお屋敷は交り者ばかり居る屋敷だべ。俺れも正直なところ死ぬ迄一っぺん、あんなお屋敷で殿様ちうものになってみてえ……」

飛んだ野郎が居るもので、どうやら本音ほんねを吐いたようだが、季節のうちに秋を背景にすると精々紅葉位なもので、下手に演じようものなら腰元の衣裳が燃えるような紅葉の中に融け込んで、色盲的になり兼ねない……そのこと、また引合いに引用するが伊藤晴雨氏のように、白一色の冬——それも責めの極地と云われる雪一ってん張りの静まり返った境地はどうやら物心ともに春の季節以上になりそうである。伊藤画伯は黒髪、白い女の肌に赤か柄模様の湯文字の三者一体を雪中にしばしば転がせたが、ただこれだけでは色彩学的には、なお不充分であった。これには幸か不幸か、青味の強い大柄の紫矢絰の腰元衣裳

は、白一色の雪にぐんと映えるし、一方持前の緋色の長襦袢、純赤色の湯文字、解けた帯は黒一色だからたとえ白い脛が雪にうずもれようとも、一見して腰元を何にして何んとかやらの場面だと判る。絵空事とは別に、故人晴雨画伯はこのような雪責めで、女の顔に次第に苦痛のにじみ出てくるところを特に注目されたようである。

さて話はがらりと変るが、歌舞伎界の何代目かに当る中村歌右衛門丈は、別に贅ぜいを尽くした訳でもあるまいが多数の腰元、すなわち身の廻りのものをする侍女を邸内に抱えておられたと伝えられる。これは一夫多妻的なことを目的としたのではなくて、要は常時若いピチピチとした女性を身近かに侍はべらせることによって、残り少ない青春を充分楽しむと同時に、女性の生態を積極的に観察し、ご自身の舞台上の演技の参考に供したと云う話だ。真疑の点はさることながら何んせ商売が女形であるだけに家老職以上に、箸のあげおろしまで、いちいちうるさかったに違いない。「いけねえな……そんな野暮くさい足さばきでは土台、女ではない。本当の女ちうものは股の間に薄紙をはさんでも根輪際落さぬものだ。第一廊下から部屋に入って坐る時の坐り

方が、気に入らねえ。何んだって、そんなに
 パアパアするんだ。裾に一寸手を添えるだけ
 で、下の赤い長襦袢がうろこ形にびたつと出
 るようにしなくっちゃ……。それに襟を取っ
 て歩かせれば裾の中まで覗かせる、女の雲助
 みたいな奴がまだいる。絶対に湯文字までで
 押さえなくっちゃいけねえ……」

誠に結構なご身分で御座んした。

これに似た話は、これも多分に伝説的な
 りそうだが、明治の元勲何の何某公は、家憲
 として妻をめとらない掟があったため、兎も
 角腰元と名のつくあまたの女性をめぐる終
 生珍談が絶えなかったと云う。およそこのよ
 うな御仁達は、また揃りも揃って八十何才
 だのとご長命なところを見ると、女性ホルモ
 ンの影響は誠に大きく見逃せない。十何年か
 前のアサヒグラフで報導された某家のご主人
 は、天下御免の女装で、罷り通っているそう
 な。つまり歴々とした奥さんは勿論女装で
 少しもおかしくないが、同じ屋根の下にもう
 一人の女が居て本当の主人役を勤めていらっ
 しゃる。その理由は、健康保持上女装するこ
 とが誠によろしいことが判ったので、爾来敢
 えて実行しているとのことだった。殺風景な
 男のシャツなどを着ると、とたんに風邪を引

いて寝込むんだと云う。だから、たまに奥さ
 んの方が床に臥せったりすると、旦那の方が
 まめまめしく腰元兼細君兼下女と云った一人
 何役かの女形で、大活躍をしたりするという
 もっぱらの噂話。

もっとも、江戸時代に駿河町の呉服問屋の
 次男坊が、一方的な片想いで見染めたお光某
 が腰元としてさるお屋敷へ奉公するようにな
 ったので、日ましに恋しさもつって奴さん
 ジリジリし、何を思ったか、三日三晩自室に
 籠って、みずからの茎と囊を切断した。つま
 り羅切である。そして家人の止めるのもきか
 ず、持前の腰元衣裳を蔵の中から持出し狂乱
 したかのようになって、お光坊の後をひたす
 ら追ったという話があるが、身も心も本式に
 性の転化を図ろうとするためには、うわべば
 かりの女装ではなくして、このような思い切
 った外科手術が時代を問わず必要となってい
 るだろう。生意気云うようだが、一度女性化
 して、都合が悪くなったので、今度は元の男
 性へ戻ろうと思っても、どっこいこれは大変
 だ。江戸時代ならずとも、やっぱり持つ物は
 永久に棄てずに、随時女装するところに何ん
 とも云われぬ醍醐味があるのではないだろう
 か。

さてこの哀れな腰元達を放り込む話の「塵
 箱」も、思わず長談義になってしまったが、
 愚にもつかぬ塵屑で箱の中が一杯にならぬ前
 に、ぜひともこれを放り込んで置きたい。

江戸小伝馬町には、諸兄姉御存知の牢屋敷
 があるが、この中に一つ女牢が設けられてい
 た。十五畳敷の薄暗い、じめじめした部屋に
 三十人以上の女囚がひしめいていたと云うか
 ら、まさに旧陸軍の内務班以上の苛酷さであ
 る。しかも、女囚と云っても大半が刑のきま
 らぬ未決囚ばかりだったそうだから、さなが
 ら娼婆気を壓縮して方幾丈かの小部屋へ無理
 矢理に突込んだみたいで、肌と肌が触れあい
 経臭、汚れ臭、その他形容の出来ぬ異臭……
 一ことに云う女臭でプンプンし、徹底した欲
 求不満から男性以上の残酷さが常時演ぜられ
 たと物の本に書き誌るされてあるが、丁度こ
 れと同じように程度こそ違え、兎角設備一切
 の緻密が集中すると云われる腰元部屋は、母
 屋のお屋敷が貧相であればある程、おんな牢
 的な情景を帯びてくる。四畳半に五人も詰め
 たら、どんなことになるか。同性だからと云
 って安心するのは、まだ早い。否それどころ
 か、女の世界にあり勝ちな嫉妬、憎悪などが
 次第に嵩じてくると、公然と殿さまにゴマす

りをおッ始める者まで出てきて、物情騒然たる女護島がたちまち出来上ってくるのだ。その結果、この部屋で起きたためごとを片や男性がカッコよく裁くのであったら、多少のえこひいきはあろうが丸く治まるところを、女性に女性どもを裁くとなると、不思議とそうは参らなくなるものだ。つまりいつの世も徹底した残酷さがつきまとうということになっている。

例えば高橋鉄著「おとこごろし」(有光書房発行)の口絵を御覧になると——私はどうも好まないけれども、腰元の一人とおぼしき若い女が素裸にされて、大マナイタ台の上へ仰向けに大の字に両手両足を縛りつけられ、その両脚を押し開くように乗り出して、一人の年配層の奥女中頭のような女が、短刀で腰元の下腹部を割腹している図である。切り開かれる腰元は、その苦痛を豆しぼりの猿轡で封じられたままあらぬ方向を凝視している。これが冬枯れならぬボンボリの霞む桜の庭内なのだから事は悲惨だ。

曾つて私が提唱したように、今演じられている芝居や映画、しかもそれらが手の届かぬ確めようのない時代物であればある程、何故そうなったかの、おかしいじゃないかと詰寄

るのは、およそ詰寄る方がおかしいのであって、私は特に時代劇については一切理屈は云ってはならないと自分に云い聴かせている。だから理屈抜きに見るのは嬉しいものだ。

女を縛る時には時間がかかった(と思われる)筈なのに、救い主の男が後ろに廻わった瞬間に縄が解けてしまうのは毎回いやと云う程観せつけられるが、これも、そんなものだと思えば腹も立たない。女性が本来惨忍性の甚しいものであるなら、それもよからう。何故そうなんだと理屈を云うのは外科医にまかせて置けばよい。

話がまたまた血なまぐさくなったが、本論に戻して、要するに昔から腰元が、凶作で女衒に売られた娘のように二束三文的な扱いを受けるのは、身分が余りにも低いことにも依るが、基本的な人権は家老職連中と少しも交わらないのだから、直接殿と交渉する、すなわち直談判するには道草喰って廻り道し少々遅かったけれども、今様「腰元組合」を即刻作るに越したことはない。仮りに千代田城を始め大小大名旗本屋敷に、こんな物騒なものが出来たものとする、ちよいと面白かった……のではあるまいか(などと愚につかぬことを考えたりする)

労使双方で、ちゃんとした契約が結ばれると、流石の殿ものどころから手が出そうな腰元苛めも、一切無届では、執行することが出来ない。よしんば因果を含めて、屋敷奉公に上がった町娘おさよをこっそり、松の木に吊るしたとしても、組合が探知したらただでは済まず、大変なことになる。腰元憲法を作った威張りちらした家老も今や右往左往、青くなってもっぱら逃げ廻っている。夜の伽は超過勤務だから倍額賃金支払か、ないしは初めから拒否されること必定……。万事理詰め合理化は、このようにして大奥にまで進展浸透してきたが、さてこうなると、果たしてどんなものだろうか？

筆者は本文中およそ時代劇ドラマには一切理屈を云わないことを提案した。理屈が邪魔なのではない。塩っぱくなることを、恐れたからである。世の旅人が終日立ち尽くして眺め、陽の暮れるのを忘れるのが日光東照宮の陽明門(一名陽暮の門)と云うなら、さしずめ人工の衣裳に包まれ、愛撫(——敢て愛撫と云いたい)の責めを受ける腰元像を、暮色の迫るまで飽かず眺めた……いな、進んでこの眼で確と眺めたいのである。それが異論「腰元物語」の主旨なのである。(完)

体験告白記

パンティ愛用について

岩崎正行

僕は女性のパンティ愛用家である。いろいろのパンティを店から買って着用しているが色柄のもの、模様のないもの、ビキニ、透明のもの、様々で多種多様である。

世の若い娘、B G等が眺めればきつと欲しがること請合。僕はいつ頃からこんな趣味になったかと振り返ってみると、小学校を卒業した昭和十五年の秋頃からであったと思う。現在合併している江津市のK町に父親と出かけた時、ある家の竹垣に洗たくして干してあるズロースや朱の腰巻等を見てからである。女はいいな色々の美しい衣類を着用できるのだからと思っていた矢先のこと。帰りに思わず知らず、ズロースだけをポケットに入れたしまった。

家に帰って裏山に登り裸になってズロースを着用してみると、太腿にやわらかく喰い込むゴム紐の部分の感触。何んともいえぬ心地よしである。しかし戦争は苛烈になり、物は不足となり、女性はモンペ姿となり、美しい着物を着て歩く機会は少なくなったし、僕も働かなくてはならなくなったしで、いつなく忘れてしまっていた。

二年余り前から、少し生活にもゆとりが出来、色々の週刊誌等も買って読み出してから

忘れていた趣味が、頭をもたげて来たのである。しかし社会人である今日、他人のものを失敬するようなことはしない。衣料店、デパート等を歩いて探し、気に入ったパンティや肌着、シャツ、その他女性の下着類を集めて楽しんでゐる。ズロースもあるが、最近ではパンティと呼んでいる。時代も変わったものである。

パンティの下端部分が、太腿に接触する感じ、やわらかく締めつける感じは何んとも言えぬよい気持である。こんな状態のとき、僕は最大の幸福を感じている。知らぬ間に汚れていることに気がつかないこともあるが、いつも二枚着用している。下に着用するのは、洗たくしたとき汚れのシミが残らないもの、又は少ないものでやわらかい生地のもの。上はピンクや水色、又は白に花の模様入り等のものを着用している。

バー等に飲みに出かけるときは三、四枚は身につけて行く。ホステスとかげごとで、パンティの一枚々々が脱がされたり脱がせて楽しむときによいものであるし、または多くのホステスとパンティを脱がせて交換するときにも都合がよい。

現在は四十枚余りのパンティが集っている

が、毎日交代で着用している。休日などは三回ぐらい取替えて楽しんでいる。休日はシュミーズ等、上から下まで女装してみることもある。やはりピンクものが一番いい。色気狂って言う人もいるかもしれないが、そんなことはどうでもよい。眼中にない。人の口には戸はたてられない。好きなように言わせておけばよい。気にしない気にしない。

色気狂と言っても道行く娘を襲って奪うわけではなし、他人の家で盗んで来るわけではなし、自分の金で買って楽しむのだから、誰からも文句を言われる筋はない。

男性が女性の肌を着て悪いという法律はどこにもないし、パンティ一枚のストリップで道を歩くわけではない。きっと何世紀か後にはパンティ一枚で、男も女も平気で道行くことができるだろう、南洋の住民のように。早く生きているうちにならないものかと気をもんでいる。そうなたら街中は、男性も女性もお互いにすばらしい眺めになることだろう。また美しいものが考案されて、これ見よがしにハッスルすることになるだろう。

僕の家は地下室が女装部屋になっており、鍵をかけておけば誰も入らない。寝るときは勿論パンティ一枚。シュミーズ一枚で転がる

こともある。机で事務をとるとき等は洋服を着ているときもある(洋服も女性もの特に若い女性向きの色柄製のもの)し、女性の和服のときもある。パットをつけて胸をふくらませ、そっと手をあててみると、何んともいえぬ幸福で一ぱいである。

小用その他のとき、不便であろうと言う人もあるかもしれないが、女性と同様立小用はしないし、ズボンで急ぐ野良等では結構ずらせられる(ゴム紐だから)ので別に不便ではない。だが女性と同様、便所の中でヒザの方までずらせてするのが一番気分がでるし、パンティの色等もときどき眺めて悦に入ることができる。

女房も最初は色気狂いだのドン助兵衛などと言っていたが、まあ人のものを盗って着用するではなし知らぬ顔をしているが、やはりきれいな色のパンティなどにはムードを感じるらしく、最近は私の趣味で買ったものを着用して若返っている。申し遅れたが私達夫婦は共に四十才。中年弱りを気分的にカバーすることができるので、むしろパンティに感謝している次第である。わが家ではパンティ祭りしようとして計画している。

老体化に向っている世の中年の男女の方、

色ものによって若返って下さい。そしてハッスルすることによって不満勝ちの夫婦生活も円満になると思います。

最近は道行く女性の服装も華かであり、私を見る目も肥えてきた。衣料品店に入れば、必ず女ものの売場を一度は見てまわる。最初はパンティ等手にとって見るのがテレクサクあったが、この頃は平気である。女房や娘の比如说えばすむし、店員もなんとも思わない年配でもある。私も変ったものである。下着等洗たくしたことの無いものが、下着だけは自分で洗たくするようになったので女房も喜んでる。

パンティ一枚、又はシュミーズ姿で洗たくしてみるのも又楽しいものである。

最近は女性の裸体美にも探研をすすめている。若い娘のパンティまで脱いだ姿はなかなか見られそうもないが、モデルを探してカメラにしたいと思っているし、又、自分の手に入れた下着等を着用させた姿もカメラにしたいと野望に燃えている。ヌード写真は多少手に入れているが、やはり自分で撮影したいものである。

いろいろなパンティ愛用のお嬢さん方、パンティ姿をカメラにとらせてくれませんか？

モデル料は支払うだけの用意はしています。又、パンティを愛用している僕の姿を、あらゆる角度から撮影してくれる女性カメラマンを探しています。希望者は連絡願います。それに、世の女性の方、御使用中のもの又は不要になったパンティ、特に変わったパンティその他肌着類、和服等何んでもゆずって下さいませんか。代価はお払います。

やわらかく脚にくいこむパンティの感触は幸福の女神。

今はまだ寒いので、ときどき風呂場で鏡の前に立って、自分のパンティ姿をうっとり眺める程度だが、夏になるとパンティ一枚でいても風邪をひくこともないだろう。夏が来るのが待ちどろしく仕方がない。

仕事などにも何時も下に女性の肌着をつけているので、旅先で病気や交通事故等で病院へ運ばれたりすると困りはしないかと考えら

れるが、一向気にしない。女装が趣味でしてねと言う覚悟はできている。笑う看護婦等がいれば却って幸い。でも旅先へは色ものは使用せず、純白のものを身につけて出る。一見して女性のパンティとはわからない。尤も全部脱げばわかるけれど……。

二、三枚重ねるときは、上程寸法のやや大きいのをつけ、そのときは下のものは柄ものや色ものをつけることにしている。

こんな楽しい趣味、何故もっと早く思い出さなかったのかと後悔している。終戦後の青壮年時代に着用して娘に話せば、娘達も大いにはしゃいだらうと思われると残念。

フンドシやパンツはすき間があつて風が入り涼すぎるが、パンティや長ズロースは上下ともゴム紐等で密着するので暖い。こんないいもの忘れられない、離せない。死ぬまで着用する考え。死んで多くのパンティが不要

になれば、世の女性で希望があれば無料でゆずるし、希望者なくば一緒に墓に入れて貰う考えである。

やがて夏が来る。パンティ姿で海に飛び込むことができる。今から楽しみにして待っている。美しい水着姿の娘さん達に混じって泳げる、と思ってみるだけで胸はわくわくするのである。

女装に興味のある方も多いと思います。特にパンティ愛用家の出現を強く期待します。

パンティ愛用は若返り

健全な家庭を持続します。

次の事項について協力して下さい方はおられますか。

一、パンティモデルその他一般モデルになって戴ける女性の方、又は僕の女装姿をカメラにして戴ける女性カメラマン。

一、緊縛モデル等、一般と変わったモデル希望の方、又は趣味の方。

一、世の女性の方で、不用となった女性衣類（下着その他一切不問。何んでも可）有料でおゆずり下さい。

一、モデルの方、女学生アルバイト可。十八才〜二十五才まで。但し肉体美に自信のある方はこの限りにあらず。

〔伝言板〕○分譲品目録は作成が大変遅れておりますが予約お申し込み下さった方には出来次第間違いなく発送申し上げます。○分譲品のお申し込みは大阪阿倍野郵便局私書箱第14号箕田京二宛に願います。○従来本誌上に広告しておりました代理分譲品は、ここ二年乃至三年ぐらい以前のものは在庫

しておりますから未入手の方はお申し込み下さい。○尚御注文はすべて△略号▽にてお願いいたします。○切手代用にての御送金も結構ですが高額切手や紙に貼りつけたものはお断りいたします。○本誌旧号の在庫は漸次減少しておりますから、御希望の方はお早目にお願います。第二希望品がございましたら、お書き添え下されば幸いです。

探

奇

考

料

媚 薬 と 性 具

齋

藤

夜

居

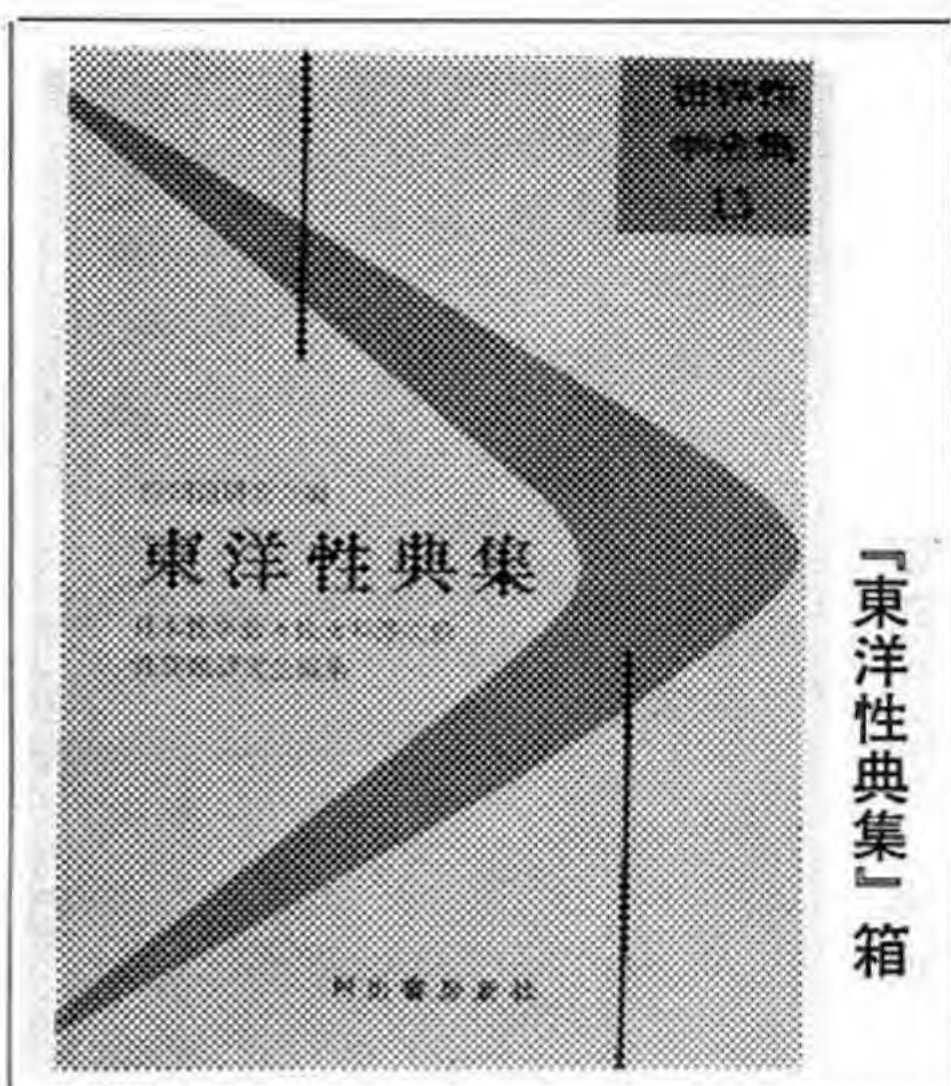
黄素妙論という房術書は、「明朝文字を日本^{やわ}の言の葉に和らげて人として陰陽和合の道を知り易く婚姻交合の理を行い易からしめんとする也。強ち淫情を催し遊興の事とするに非ず、是れ只だ天真の至宝を保たしめ、寿算を永久ならしめんとのみ。」と奥書にもあるように、原典は、支那の房術書で、黄帝が問い、素女（西王母の侍女だといわれている）が答えるという交合生理に関する問答形式の文体となっている。天文二十一年というから今日を隔ること四百十数年も以前に、医師道三が松永弾正の下命によって、奉ったという

性愛術書である。△その他、古典房術書には「医心方廿八房内」。「衛生秘要抄」。「古代養性論」。「延寿撮要」などがあり『世界性学全集第十三巻・東洋性典集』（昭和33・2）に収めてある。いずれも有益な文字に富んでいる。▽例えば、女人の淫心いまだ至らざるうちは、男子は強いて交ってはいけない。然らば、女人の淫慾の情念がすでにきざしている徴候たるや如何に、と問う。五つありと答えて、次の如く記載されている。

一、男女しづかに対面し物語りなどするに女の面赤くなるは、心中に淫念気さす印な

り、その時男子の玉茎を女人の玉門にあてがうべし。二、女人鼻をすすらば慾念肝の臓に動くと知れるべし、即ち玉茎を少し入るべし。三、女人目をふさぎ、口を開き舌をさし交へ息使ひ荒くなるは淫情脾の臓に至ると知るべし、其時ゆるゆると玉茎を出入すべし、深く入るべからず。四、女の玉門の中暖かにうるほい、豊かにして津液外に流るれば腎氣の至ると心得て玉門の中より玉茎を抜き出して左右を横につくべし。五、女の足にて男の脛をはさみ、女の手にて男の背を抱き占め口を吸はん事を求めば

『東洋性典集』箱



肝の臓に氣至ると心得て玉茎を深く玉門の奥に差し詰めて静かに左右につくべし。簡潔に記載されているが、詞意ゆたかに表現されている。こうした房術書というのは、交為の説明、交合の得失、性交体位の法と種類、そして閨薬の説明というのが定まった順序となっているようだ。黄素妙論にも、

黄帝問ふて曰。

房中に薬術を持って、奇妙を得ることありや。素女答へて曰。

老ひたるを若やかしめ、弱きを強からしめ乾けるを湿ほす事、之皆薬の効能なり、何ぞ房中に於て薬なからむや。

と問答するくだりもあって△媚薬△の必要なることを力説して、秘薬の製法六種が載せ

である。緑鶯膏は、丁香三粒・山椒四粒・細辛・竜骨・海漂蛸・明礬を少し許りずつ細末にして、生密でこね合せてつくり、これを男女交合の時に少量を玉門の奥にいれ、然る後に深淺の法（動作で、これにも仲々やかましい規則がある）を行う時は、陰中かゆくふくれ暖かにして、津液（女子の淫汁）を無限に流して、いくら慎み深い女でも、覚えず声を出して、美快極致の姿態をかくすことができ

ない。という結構な練薬の、処方と効果を記し、また、玉瑠丹というのは男子が長時間精液の射出を堪えられる妙薬で、竜骨一匁・詞子二分・縮紗二分・辰破五匁を細末にして、餅の糊にして、小豆粒程に丸めて、交接前に

七八粒を温酒にて服すべしというのだが、その効力たるや、女人三人五人に逢うといえども、精汁洩れざるべしということだ。次に処方方は省略するが、如意丹といのは玉茎にとりりと塗って行えば、老女たりとも誠に壮女の玉門の如くになるとか、壮腎丹というのは男の衰えたる精を補い、茎根を強くする、これは絶対に無妻の男は服用してはいけない、などと利き過ぎて鼻血が出そうなのや、百馬丹

というその名を聞いただけでも利き目がありそうな奇薬の製法と効能をも書いてある。

媚薬、補精薬、強壯剤、強力栄養剤、等々名称はいろいろだが、今日でも栄養剤といえは精力増強の効能書が必ずついているが、私たち素人には、黄素妙論の調合漢方薬の精分も、新薬の配合分析も解くことができない謎みたいなもので、そういうものを服用すべき必然的な理由があつて、信じれば利くものであるかも知れない。

△媚薬△は快楽に耽るいずれは老いてゆく男たちが、遠い昔から抱き続けて来た夢を養う靈薬であつて、実は△信仰△でもあつたようである——では、文献を追ってみよう。

○

古代東洋性慾教科書 秘薬方第一期発表

酒井潔（「変態資料」第五号 大正16・1）

古代東洋とは云つても、この筆者の得意としたアラビヤや印度の性典よりの媚薬研究ではなくて、江戸期艶本所載の秘薬に関する記事を抜書きしたもの。緒言の中で「医心方房内篇に就いて、まだこの本を一見する機を得ずとあるが、堂々と今日では公刊されていることを思えば、そこに時代のへだたりと先進研究者の苦心が察しられる。引用書目三四部

と秘薬方一八六種を探究した。二三引例すれば次の如きものである。

○ひろき開（つび）をせばくす薬 一、うりう四分 一、にんじん三分 これ二色を粉にしてすずしの袋に入て玉門に入るればかならずせばくなる物なり（女令川）。

○ほれ薬の方 子の日に干摺をかきその淫をあたらしき布にしめし乾して土器に入れよくぬりこめて黒焼となして女に吞まするとたとひ位ある女なりとも従ふ事奇妙なり若し吞ますることならずばふりかけても奇特あるべし（礼開節用集）。

○新玉門をとぼして、疵つかずいたまぬ方

一、菓子昆布 一、ふのり

右二味をよく細末にしてつばにてとき玉茎の首にぬりつけてとぼすべし。いかなるあらばちにてもいたむこと決してなし（文のまこと）。

○陰門かゆきを去る法 にんにくの煎汁にて度々洗ふべし、又杏仁を焼灰にし熱き処を陰中に入れをくべし（万宝智恵海）。

○陽物を大きくする方 蜂房を刻み酒にひたしあぶり使う事医書にしるせり、戯れにあらず。蜂を黒焼にして車前草をすりて汁をしぼり和して玉茎にぬれば年老ひなへたるものも忽ち陽氣発しておへ立つなり（春の若草）。

——など、熱心に採録したものである。

食膳春薬 才田礼門（「グロテスク」一ノ

二 昭和3・11）

中年肥りの戒めで、過飲過食すれば男は夫婦間の義務なんてことは忘れて了って、唯もう眠ること許り考える。そうなつては不可いから、春心をときめかし義務の遂行を完了させる食物の調理法を説いたもの。材料と料理十九種を解説してある。そのうち、ポタージュ・ア・ラ・トルチュウの作り方を紹介する

と——脂身のない牝牛の頭部の肉を一片、先ず塩を入れた水の中で半煮えに煮る。それから、此の肉を賽の目に切る。次に之を三葉、

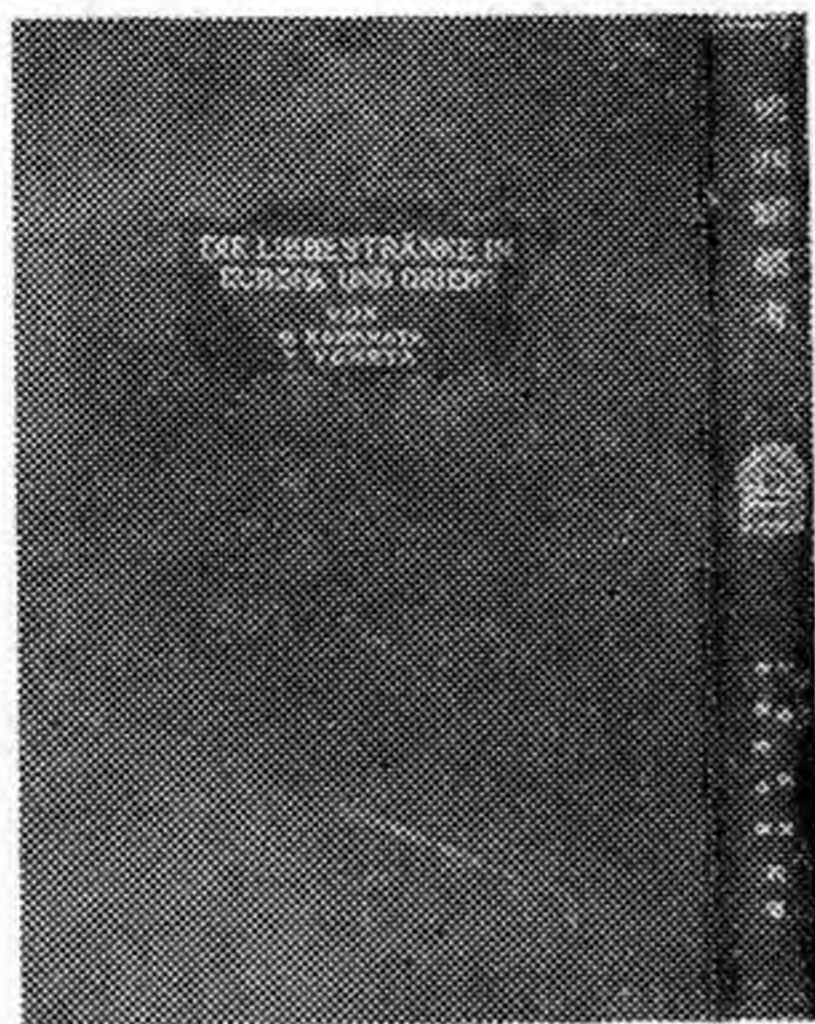
たちぢやこう草、めぼうき、月桂樹、小玉葱菌類、丁字の蕾、胡椒、肉豆蔻、生姜、ハム等の細く切ったのを入れたバターの中へ入れて煮る。肉がよく煮えた時とり出してバターソースを作る。それから、ポタージュを作るに用なだけ水を入れて、その中へ前の肉等を入れる。そしてレモン汁と辛子とを少し加えてこれを二時間煮え立たせた後ちよく泡立てから、一旦漉して、その中へ肉やハム、菌類を入れて出す——というのだが、如何なものであろうか……。一般庶民サラリーマン向きの補精食でないことだけは確かだ。

強精剤の座談会 徳永保・高田義一郎・酒井潔・梅原北明（「グロテスク」二ノ二 昭和4・2）

斯界のオーソリティが媚薬の種々相について、体験談や、奇聞を語り合った座談記録だが、特に面白いという程の話題はない。

——その他、手許にある雑誌記事を左に記すと、

東西毒薬綺談 高田義一郎（「グロテスク」二ノ七 昭和4・7）。東西毒薬考（二）（「グ



『東西媚薬考』表紙

ロテスク」二ノ八 昭和4・8。

支那靈藥發達史 井上進（「グロテスク」

二ノ九 昭和4・9）。

支那惡食考 上田恭輔（「グロテスク」二

ノ十 昭和4・11）。

回春料理と竜虱 酒井潔（「談奇」第四冊

昭和5・8）。同補遺（「談奇」第五冊）。

毒藥と魔術 巴陵宣祐（「犯罪科学」三ノ

七 昭和6・7）。

芳香類の史的考察 高橋惇（「犯罪科学」

二ノ十 昭和6・9）これは芳香と人生以下

の諸章で、匂の生物に及ぼす諸現象に就いて

の研究で七回連載した。

四ツ目屋漫談 竹浦樓主人（「匂へる園」

第五輯 昭和8・1）。

東都性具粹藥店打診 左右津良（右に同

じ）。

最近秘藥文献資料考 酒井潔（右に同じ）。

ドリアンと性慾 安藤盛（「犯罪公論」三

ノ十一 昭和8・11）。

性慾を旺盛にする飲食物 篠田義市（「性」

十四ノ八 昭和9・8）。

精力旺盛不老長寿の秘訣 林照寿（右同）

性に関する民間藥 伊沢凡人（性科学研究

一ノ三 昭和11・3）。

麻藥と媚藥 寺田文治郎（「人間探究」一

ノ二 昭和25・7）。

催淫料理漫筆 多田鉄之助（「人間探究」

第十五号 昭和26・8）。

媚藥エピソード 橋爪檳榔子（「人間探究」

第二十六号 昭和27・6）。

現代四ツ目屋藥屋ばなし 友愛堂主人（「あ

まとりあ」一ノ二 昭和26・4）。

催淫の媒材について 大隅為三（「あまと

りあ」二ノ六 昭和27・5）。

妙藥長命丸 白桃夢（「あまとりあ」二ノ

十一 昭和27・10）。

脳下垂体移植療法批判 関場一恵（「あま

とりあ」三ノ二 昭和28・2）。

インポテンツは藥で治るか 比企雄三（「あ

まとりあ」終刊号 昭和30・8）。

まだまだ沢山ある。直接間接に閨房内用に

備えた媚藥・精力食に関する記事をひろい出

したら際限がない。スタミナ食とか、ホルモ

ン料理などとよばれる、所謂「精のつくお料

理」の作り方まで研究していたら、話が益々

横道にそれてしまうので媚藥（含媚術）の概

要にのみ触れることとする。

○

媚藥というものは房技（房中術）をはなれ

ては存在しない。従って、男女の閨房内における態位の研究書などからも説明するべきだが、此处では省く。

人間はいつまでも、若くありたいものである。どうしたら老と死から逃れることができるのであろうか？ むづかしく云えば不老長寿ということ、これの思想が靈藥として形つくられたものだが、只氣息えんえんと生き長らえているだけの意味ではなくて、老いて尚身体強壯にして婦人を房内に於いて御すに足る淫念を旺んにしたいというのが王者の理想だった。これが今も昔も変わらぬ媚藥の精神である——。伝説によれば、秦の始皇帝が臣下の徐福に命じて、男女五百人と多くの財宝とを与えて、逢來の島に航せしめ、不老不死の靈藥を求めしめたことも、漢の武帝も始めは、逢來島の思想に惑っていたが、後には方士に命じ、藥草と砒石とを多く集めさせて、これによって仙藥を鍊ろうと考えたという。即ち、鍊丹術であって丹（赤色硫化水銀 HgS ）と種々の藥劑を混ぜて作ったものであって、それを服用すれば死なないと考えたと伝えられている。だから、新藥時代の今日では余り使われないが、仁丹・清心丹・宝丹など貴藥を意味する八丹Vという言葉がのこさ

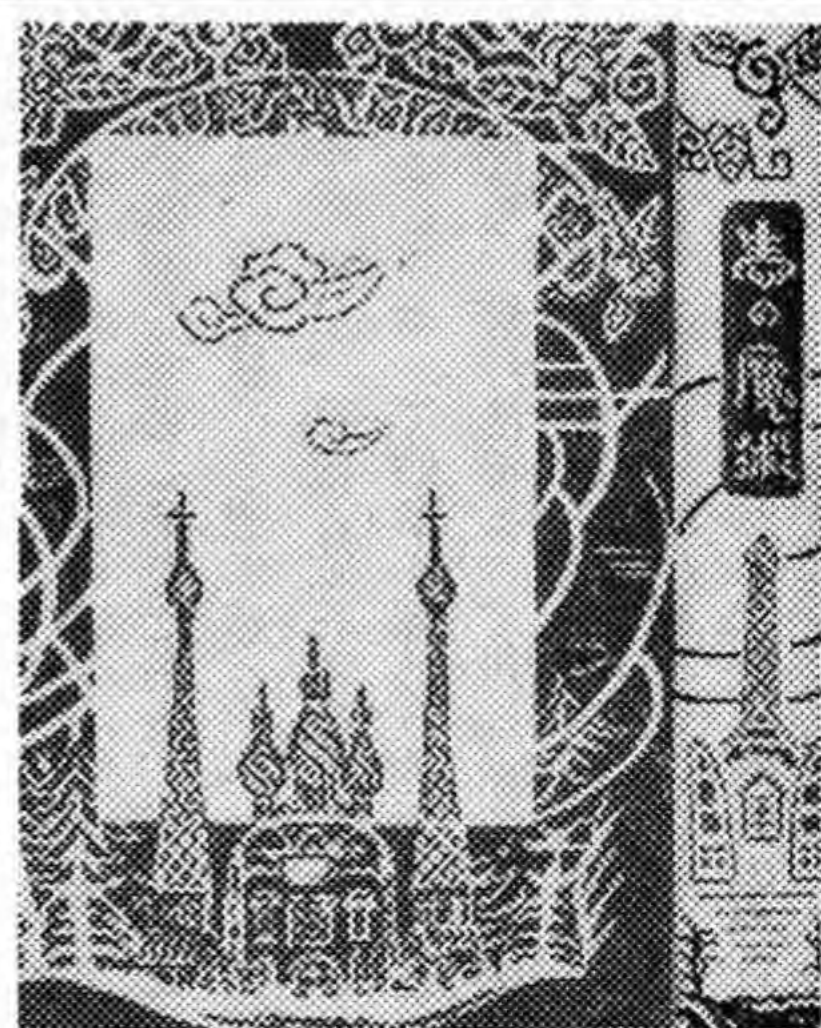
れている。丹は朱であって、防腐剤としての役目を果たすところから靈藥とされたい。

次に、寿命の定則をご参考までに記すと、成長限度の五倍ということになっている。犬は約三年半で成長の限度に達するので、その寿命は十七年半、猫は二年でその寿命は約十年。人間は、大体二十五歳位までは成長するので、本来は百二十五歳位までは生きなくてはならぬ、と主張した（大隈重信説）方もあるが、それ以前に死んだ……。若い頃から房事を激しく行った者ほど早く老いる、というのは俗説だが、老はやがて死に至ることの意味であるから、だれの口からも「年はとりたくない」という言葉が洩れるのである。昔からの長寿者を調べてみると、僧侶と学者が多かった点だけは一考を要すべきで、つまり補精・補益・回春に関することは保健術であって、知識をもって栄養と運動のバランスを考えていたからであろう。が、そう云ってしまえば身も蓋もない話になって、只の健康法を説くだけのことであって、本誌読者の退屈を招くことになる。主題に戻ろう。

媚薬を服用することの目的は——身体を丈夫にして長生きすることではない——強精ということよりも、男女の淫情をさそったり、

性行為のたのしみを延長することにあって、そこにあるものの味を一層ゆたかにうまく味わいたくて振りかける「味の素」の役目を果たすことである。判り易いいうならば、筆者が以前に読んだ春本の場面にも、亭主が夜勤で留守なので、何やら物足らぬ気持ちで枕草紙など読んで自ら慰めている年増女がいる。そこへ近所の少年がくる。まだ子供だが筆下ししてやるのも乙な味だとばかりたぶらかしてしまふ。その途中でチョット待ちなよもっとよくなるお薬をつけるから、と云って八四ツ目屋Vをつける、という場面があり明治末期の作品なのだが、江戸時代から知られている秘薬が登場してきて、どうもその薬の意味する事が長年理解できなかった、ということは筆者がそれを読んだのは十五六の頃だったから無理もないが、（もっとよくなる薬）というのは実に神秘であった……。このオブ・シーン・ストーリーの印象は強烈で、いつも性のことを考えると、色情にただれきったおぼさんが、ぬらめくような裸身で、妖しい眼ざしで、媚薬の壺をひき寄せるといふ空想に耽ったものだった。

とにかく、記事が多過ぎるので一々の説明はできないけれど、さきに記載した風俗雑誌

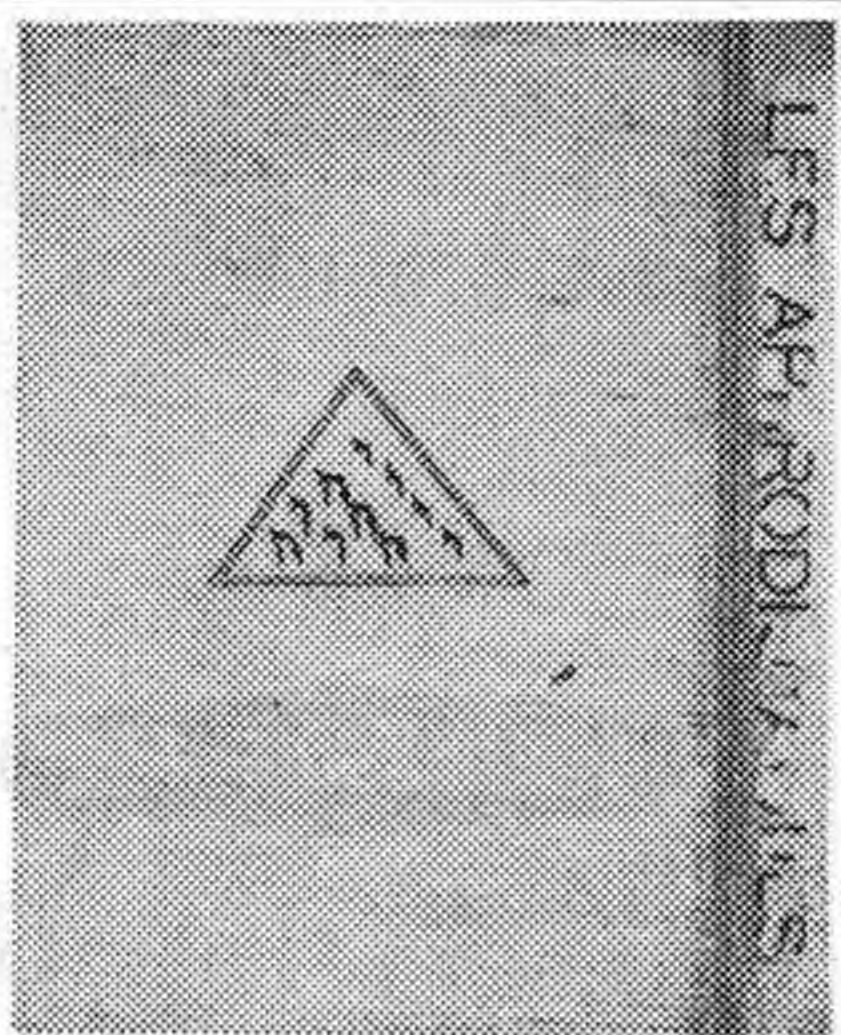


「愛の魔術」表紙

類の各論考にある媚薬およびそれに関連する事柄を読めば、王侯も未開の蛮人も愛用していることだけはよく分るが、媚薬を大別すると、伝説を伴ったものが実に多くて（迷信ともいふべきだろう）、実践用としての正確なものも少ないような気がする。艶笑文献のうちでも媚薬関係書は、「つまらない」というのが定評であって、単行本とし一冊にまとまったものは少なかった。

〔註〕媚薬として著名なヨヒンビンやカンタリスなど、いずれも劇薬であって、ごく少量の服用でも、確かに局所的にはいかなるインポであっても、ペニスは持続的に勃起

するが、疼痛が甚しく、時には血尿を洩らすことすらあると聴いた。従ってその実際に当ってはやはり医家の指示を仰ぐべきだと思う。尚、大場正史編の世界性語学事典の「媚薬」の項によれば、英語ではアフロディアク。ギリシャ語のアフロディシアコスから出ているが、もとは恋愛と美の女神アフロディテの、(ヴィナスの)という形容詞であって、要するに男女の性欲を増強させる動植物または薬を意味する、と記載されている。日本語でははれ薬、よがり薬などというのが俗称であろうか。



『補精学』表紙

次に単行本の書名のみで紹介すると、

支那の珍薬秘薬 中野江漢(大正15・1支那風物研究会 一四〇頁)。

東西媚薬考 川端勇男・米田祐太郎共著

(昭和3・4 三一四頁)。

愛の魔術 酒井潔(昭和3・12 国際文献刊行会 五二七頁)。

補精学 ウィリー原著 矢野目源一訳(昭和4・3 国際文献刊行会 一八四頁)。

らぶ・ひるたあ 酒井潔(昭和4・3 芸市場社 四三四頁)。

回春秘談(昭和4・7 国民新聞社会部編 広陽社発行 二二八頁)。

支那長生秘術 後藤朝太郎(昭和4・12 春陽堂 五六九頁)。

増訂延年益寿秘経 松本別道訳編(昭和7 霊学道場刊孔版)。

不老回春秘話 中野江漢(昭和5・12 万里閣 四〇〇頁)。

閨房秘薬90法の研究 矢野目源一(昭和27・5 あまとりあ社 二四二頁)。

川柳四目屋攷 未知庵主人(昭和31・9 近世風俗研究会 二五八頁)。

講座日本風俗史別巻 第二集(昭和34・3 雄山閣)のうちに「性具について」「媚薬秘

薬」の項目がある。

媚薬、回春術、補精術として一冊にまとめられたものとしては、大体以上だけ気付いたが、まだまだあることと思う。広い意味での(媚薬)的な事柄は必ずしも薬物のみではなくて日常の栄養食品は勿論のこと物理療法から心理分析に至るまで、愛の技術の全般にわたる程多岐にわたるから、マゾ、サド、あらゆるフェチシズムに至るまで、考えようでは一種の霊薬的效果が求められているとも思われる。艶本類などは読む媚薬、ブルーフイルムは見る媚薬であるとも云えよう。

筆者がある時みた数奇屋橋附近のショッピングセンターの薬店には、ユゲノール、フリジノン、アモールF、ハレム坐薬、ダンテルモンパスタF、ヨカールF、ミリスマ坐薬、トラジノール、トロン、ベラニン・バスタなどという女性用塗布剤があった。それらはいずれも、美しい小型容器に、納められてあった。実に、まったくその名称から受ける感じだけでも、夢幻の陶酔境に誘い込まれそうではないか。

性具類の製造と販売は薬事法の第26条により、厚生大臣の許可を要するという事にな

『閨房秘薬90法の研究』表紙

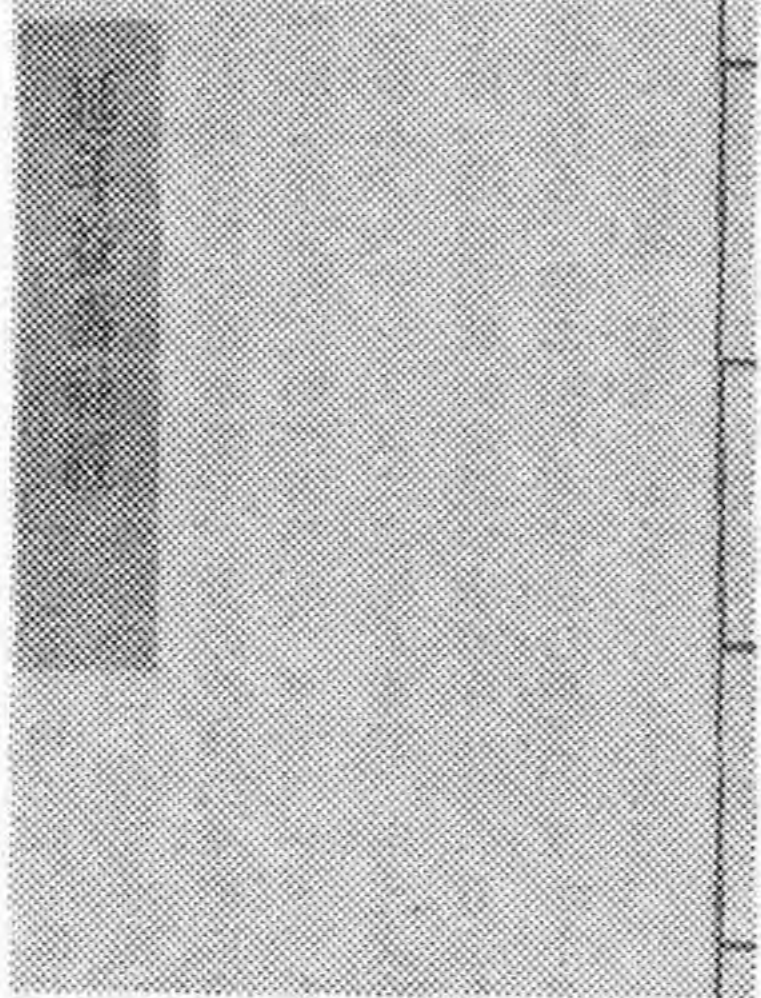


っているが、果たしてそれが律気を守られているかどうかと云うことは分らない。随分いかかわしい性器具が横行していることは昔も今も変りはない。避妊用のピンやリングに類するもの、医師が使用する以外の子宮内に挿入したり薬液を注入する器具、モーターを使用した通経器、性的快楽を刺激したり自瀆を目的とする性具類、等々は同法44条で製造・販売・陳列を禁止されているし、違反した場合には八年以下の懲役か三万円以下の罰金に処せられることとなっている。また薬事審議会から提出された避妊用具基準の答申（昭和24・8）には、家庭用膣内洗滌器類は長さは

6センチ以下、直径は太い部分で1・7センチ以下に規制されており、先端は必ず丸味をつけ、ガラスや陶器などの如く破損し易いもので作ったりしてはいけないことになっている。つまり、女性の自慰性具として見做されるような構造や形態や機能であってはならないとされているのだが、法律的にはそのようなのだが、現代性具の実態というのは実に多種多様であって、ビニールやポリエチレン加工が簡単に行われるし、ゴム、スポンジ、ビロードなどむかし乍らの資材を使用することは依然として意のままだし、観光地みやげのこけしに擬装したものなどと、数えきれない程の種類が存在している。従って通人のなかには△性具マニヤ△というのもあって、相当量のコレクションを誇る者もある。その棚は二段に分かれていて、蒐集品と使用済品とに分類されていて、資料としては器具の説明書や通販案内状、愛人や妻に使用した年月日時刻、効果、などの記録も保存されていたが、その妻も愛人も共に子宮をひどく患った体験があり、性具狂も程々にしなければ人命にかかわるから注意しなければならぬ。性具好きは性格的には、サディスムスの傾向が強いようだ。そして、実行派である。媚薬（性薬）好

きにはインテリ肌のタイプが多く、保守的である。次に、性具類を大別すると、

一般に一番よく知られている肥後ずいきがあつて、紐状・リングなどに加工されて小箱に納められ土産物として珍重されているが、使用上の説明を聞くとずいぶん手間がかかるものらしい。次に周知のものとしては鈴の玉があり、各種リング、羊のまぶたに、性器吸引具、ブレッサ（老人用助け舟）、膣内玩弄用指サック、変型サック、性器をかたどった保温器、避妊や、性病予防具と称する自慰用



『延年益寿秘経』表紙

これは珍本なり。性具類を解説する際に詳細に説明する。

具、真空式治療器具、等々……。

などがある。それらは粹人に愛玩されて、俗に八珍具とよばれている。珍具に関する風俗文献ものは、雑誌の記事に散見するものや、その製品が人体に有害で、製造販売を禁止されたという事件により話題として採り上げられた週刊誌の記事など二三あるが、一冊の書物としてまとめられたものは少い。そのうちの二点のみ紹介したい。

珍具考 中野栄三（昭和26・7 A5判

一九七頁 第一出版社 特製・並製の二種あり）。内容。一秘具の名称と歴史（秘具総名、秘具分類、秘具の歴史）。二張形系統の秘具（張型、その他の張型、代用及早拵、用法と名称）。三吾妻形系統の秘具。四コンドーム系統の秘具。五秘戯用秘具の種々。六貞操帯及処女帯。七洗器その他。八秘具と川柳。

性具について直接の論考は以上だが、ほかに性具店沿革考、和紙艶笑風俗誌、川柳月華考、桃源探春などが附載されている。珍具の全般について分り易く解説してあるから、江戸期の通俗文芸や艶本など読む場合に、参考資料としても役立つ。また海外艶笑文芸を読

む場合にも、用語が異なるだけで用途はまったく同じ秘具もあつたりして、古今東西、にんげんの考えることは似ているものだと思う。珍具なるものの实例を二三、次に記す。

張形 女子用独悦具として秘具中代表的存在。べつ甲や水牛の角で作られた偽茎であつた。現代ではスポンジ製で使用の際は表面を滑らかにするためサックで覆い、下端にゴム管がついていて、空気を送る仕掛けになっている。先端がその圧力でうごくのが流行っている。

吾妻形 女陰に擬した男子用自慰具で、革形ともよばれていた。

胴形 張型の茎部のみを分離したようなものであつた。茎胴にはめて用い補強と強大とを目的としている。

助け舟 これは舟形の台に肋骨のような押さえがついている秘具で老人の弱茎をのせて目的の場所に送り込むという仕掛。奇抜な考案だけに果して実用に供せられたかどうかは、昔から疑問視されている。タプトリ、ブレッサと称する近代形具もあつたが禁止された。

いりこ形 なまこの輪、りんの輪、姫泣輪などとも呼ばれ、粒状の輪で茎頭にはめて用いられる。ゴム製、ビニール製もある。本来は、なまこを輪切にして乾燥して作つたものだという。

肥後ずいき 芋の茎を乾して紐状にしただけの秘具。分り易く説明すれば稲荷寿しの胴を巻いているかんぴょうと同じだが、巻き方に秘伝がある由、使用中にこれから出る自然の粘液が女悦薬となる。

次は、先の媚薬の項に書名著者名を記した『川柳四目屋攷』（母袋未知庵著）である。

内容目次は次の通り、
川柳四目屋考



「珍具考」表紙

川柳媚薬考

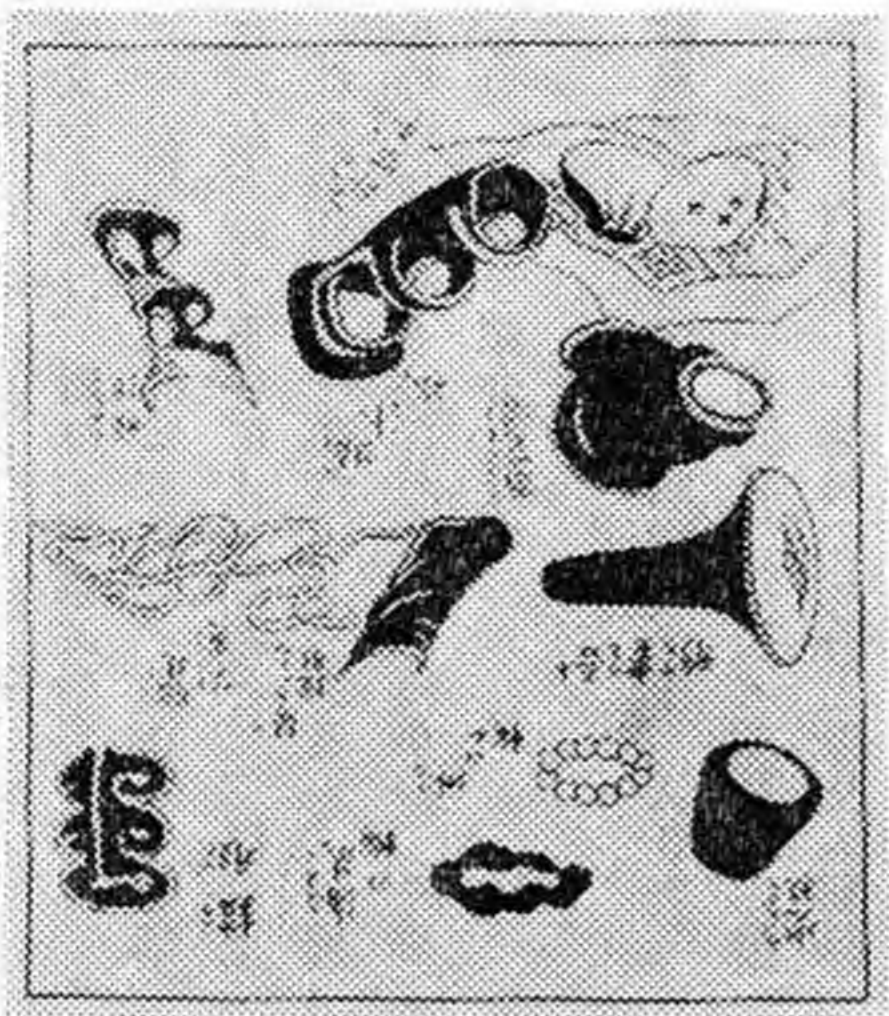
川柳通和散

川柳張形考

川柳芋茎考

川柳緬鈴考

となっており、著者はいまは故人となつてしまつたが、古川柳研究の篤学者であつて、その序文のうちにも、「近來の古川柳研究こそは専ら実証を重んじ、実証に基礎を置くところの、恰かも解剖学にも比すべき學問である。そしてこの古川柳研究は、文學そのもの



さまざまな性具類

『珍具考』口絵より

に對しては未だ価値ある寄与をなし得てはいないとしても、すくなくともこれを媒材とする人間性形成の考察と近世風俗史の解明という二つの面に於いては、最も有効な利用価値を発揮するところにまで到達している——その実例の一つとして、江戸の秘薬秘具専門店四ツ目屋と、その商品の秘薬及び秘具に関する、古川柳を中心として試みた一連の考証を提出することにした。」と述べている通り、旺盛な研究心の結果として、ほんとうに実証的な精密な記述であつて、勿論すぐれた江戸俗文芸研究書であるばかりではなく、性風俗研究書としても信頼できる著作であつた。余りにもくわし過ぎる点が、一時的ではあつた「発禁書」だという誤解が流布されたりしたが、五百部発行の限定版だが、発禁にはなっていない。文例を抄出すれば左の如きものである。

湯加減

張形は、その使用に先立って暫く熱湯の中に浸して置いたのを取り出して直ぐに用いるか、或は、熱湯をその胴の中に注ぎ入れて温めた後に、其湯を捨てて使うか、或はまた、温湯を含ませた綿か布片をその胴の中に詰めて、其俵使用するか、したものであ



『川柳四目屋攷』箱

る。冷たい俵の物ではその触感が大いに損われるからでもある。

○湯加減を見るうち局指を入れ

(局は大奥の女中で、男子禁制だったので

張形が愛玩された。筆者附記)

○張形が氣を遣り局アッアッアッ

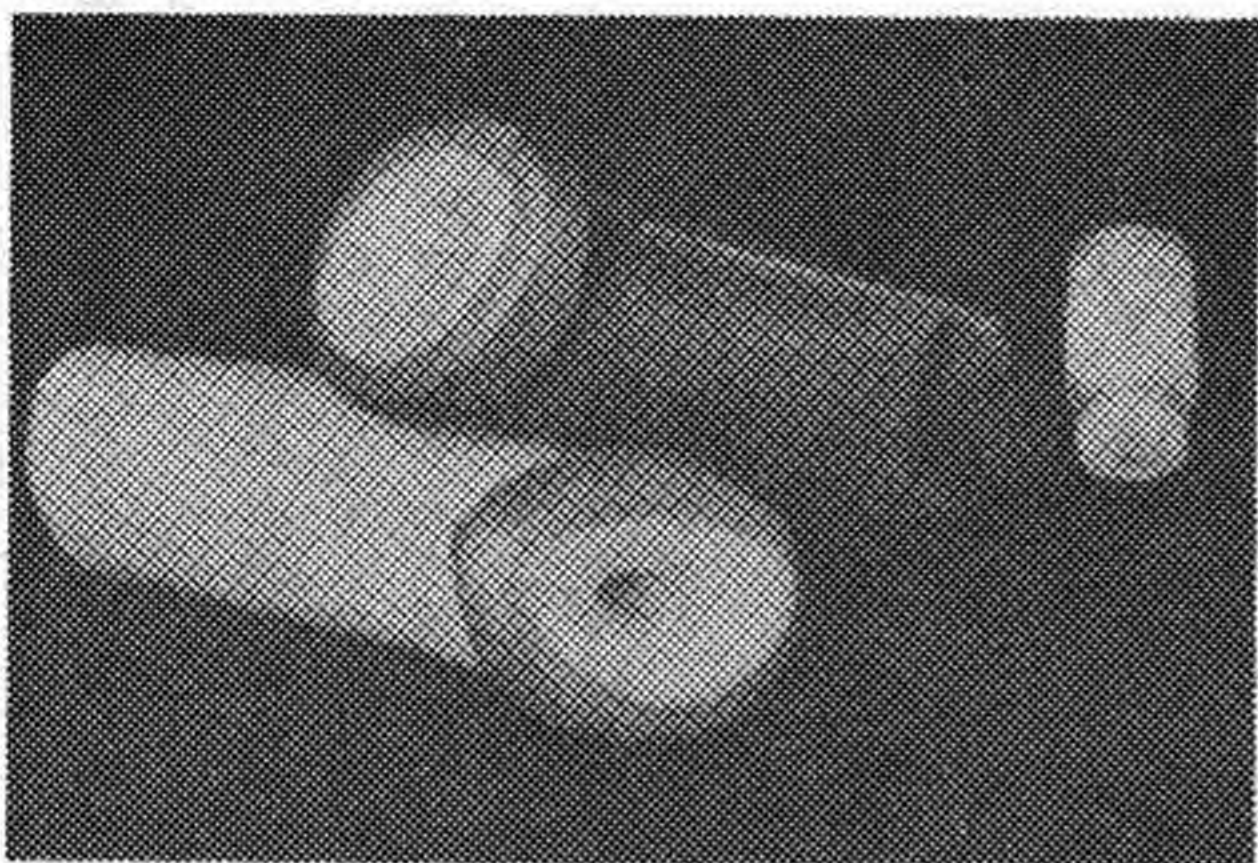
べっ甲か水牛角に割れ目でも出来たのである。

ろう。

○張形へ甘酒入れる馬鹿女中

甘酒は一寸見たところザーメン(精液)に似ているので、それを用いて湯加減をすると言つた句であるが仏蘭西には硝子製で基

シングル・フレンド



部にゴムの球をつけた、大きなスポイトのような偽茎があって、その中には牛乳を充たしておき、これを利用して絶頂に達した時にゴム球を握って、中のミルクを尖端の小穴からエジャキュレートするように搾えたものがあるという。残念ながら張形は左様なうまい仕掛に出来ていないので、折角甘酒を入れてみたところで何んにもならない。

○

張形を書いて「吾妻形」を説明しないのも片手落ちともなるので、この男子専用の性具を解説するために、少々長文で恐れ入るけれども特許出願中、実用新案の「シングル・フレンド」案内の全文をお伝えしよう。必ずしも淫具という意味ではなくて、多少だが人性のペーソスが感じられる節もあったから……。「シングル・フレンド」に就いて。人生の幸福は健康の保持と快楽な性生活にあります。明日の仕事への意欲も、性生活の満足が得られなければ、おのずから減じられるのであります。既に妻帯して家庭を持っておられる方でも、家庭内でのいざこざはその殆んどが性生活のアンバランスに因を為していると言っても敢えて過言ではないのであります。まして現在の独身男性の性生活は、女性の体面保持の為に赤線は廃止されたとは言え、求める男子があるからには、地下に潜った売春行為は後を絶たないのであります。然し乍らそれ等に依る莫大な浪費と、恐るべき性病の危険性については、日々の新聞紙上を見ても皆様ご承知のことと存じます。茲に思いを致しまして、私は既に老令の域に達した者といたしまして、何んとかこの面を完全理想的な方法に

依って解決し得ないか、と考え抜いた末に生れたのが、このシングル・フレンドであります。従来の手淫行為に依る事は過度におちいりて炎症を起し易く、ひいては不感症等になるおそれもあり、之が神経系統に及ぼす影響も考慮しまして、本器を使用するときは快感百倍にして、前記炎症の心配もなく、又包茎の方などは常時使用することに依って、徐々に龟头露出の状態にする事ができ、性器の完全な発育を助長することにもなり、使用後の不快感も全然なく、夜着やシーツの汚れる心配もありません。使用法は、ゴム器具に液を少々先にたまる位流し入れ、ペニスにも根本まで塗付して入れる。手動法、および布団に器具を挟んで使う。また男子二人で行う時はスマタ式とする。」

吾妻形というのは江戸時代のシングル・フレンドで、珍具考の挿画も案内状の実物写真も、まったく同じ形である。珍具というよりも秘具というよりも、△悲具▽というべきものであろうか。古川柳にも、落城の壕に浮いてる吾妻形、という句があって、討死した若武者のうちのたれが用いたものか、哀れ、夕日の水の上にうかんでいる……、絶唱である。

尚、用語および意味に就いて、大場正史氏の『世界性語学事典』のうち「張型」の項目を抄写させて戴く。

デイルドー dildoe [英] 張形、偽人陽、偽茎。語源は不明。エレクトした男性器のイミテーションで、角や石や皮革、金属、ゴム、ビニールなどでこしらえたもの。バビロン墳墓から発掘された女人の遺骨の手に

もこれが握られていたというから、太古から利用されたらしい。古代ギリシャ人が植民したイオニアのミレトスの女たちは皮製のデイルドーを用いたことが劇作家アリストファネスやスイダス(辞典編纂者)によって記録され、オリスボスVの項に「ミレトスの女人たちによって用いられた皮革製の男根」と解説してある。インドでも古くか

ら金属製や象牙作りの精妙な模造陽根があったことは、「カーマ・ストラ」に記述され、中近東のハレムでも、女子同性愛者の間で、あるいは独楽用に、古くはバナナやローソクが、近くは角製やゴム製のものが用いられた。云々。

小池創之介著『性具と性風俗』があるときいているが、未見。

△訪欧土産フォト便り▽

マリアンの思い出

佐野 寿

私がオスロで始めてマリアンを見たのは、もう初冬のさしせまった頃で、木の葉はすっかり落ちてしまっていた。

マリアンは当時二十一才で、身長は一メートル七十センチ以上あり、いかにもスポーツ

好きらしい引きしまったからだつきをしていて、鼻筋の高く整った顔は輝くばかり美しかった。

夏にはデンマークの田舎の親戚のところへ行き、毎日水泳と乗馬で楽しい休暇を過した

そうで、ついこの間までかすかに日焼けした跡が残っていたが、現在では元通りの、すき通るほどの白い肌になっていた。

マリアンは、生れつきの男まさりの気質があり、田舎では大きなトラクターを操縦して農業を手伝ったり家畜の世話を面倒がらずにした。勿論、乗馬は彼女が最も得意とした。馬小屋には普通五頭もあり、三頭はイギリスから輸入したもので、他の二頭はデンマーク産のものであった。

マリアンはオスロの、ある繊維貿易会社の秘書をしているが、勤勉で社長のお気に入りであり、貯金をして自分の馬を買おうと長い間、考えていた。

そして二年半も働かない中に貯金は六千クローネにもなり、デンマークの田舎の親戚の

人々にも助けってもらって、待望のデンマーク産の愛馬を買うことになった、それで夏の休暇にデンマークにおもむき、栗色の精かな乗用馬を買うことができ、名前をマロンと名づけ、毎日調教と飼育に余念がなかった。

田舎のその村では、彼女が美貌で気立てがよいために多くの若者が、夜となく昼となく関心を示しはじめたし、デートも何回か受けていたようだが、私はくわしいことは勿論、知らない。ただ確かなことは、マリ안의最大の興味は青年達よりも、むしろ愛馬にあった。

それを知ったハンスという三十才前後の青年実業家は、彼女にグローと呼ぶ白灰色のイギリス産の馬をプレゼントしたので、この時はさすがのマリアンもハンスの好意に大変喜こんで、キッスをもってそれにこたえた。ところがハンスはきわめて浮気者で、半年後には又どこか別の娘の方へ関心が移ってしまったが、マリアンは余りがっかりしなかったばかりか、これで彼女の愛用馬が二頭になったので喜こんだ。

彼女は直ぐコペンハーゲンへ行き、新品で良質な西独製の鞍や、轡、手綱などを買いに行った。マリアンはシックでとてもモダンな

部屋には一揃いの馬具が並べられ、皮革の心地よい香りが部屋にただよい、その一つ一つを丹念に手入れし、黒く光った長靴を手にとったマリアンは悦に入った。乗馬ズボンもドイツ製の新品で、きれいなクリム色でマリアンは気に入った。マリアンは一瞬、王女様になったような幸福感に浸って呟いた。

「さあ、今日から私は二頭の馬の主人よ。私の思う通り調教し、もし反抗的になったら存分に責めてしまおう。私って生れつきのアマゾンなのよ」

マリアンは午前中にマロンを四時間、午後の三時間と夕食後の二時間は、灰色の馬グロを調教する日程をきめた。それから豪華な夕食をとり、入浴後清潔でシックなベッドにもぐり込んでからも、明日から調教する馬のことで頭が一杯だった。

北欧の夏は夜が明けるのが早い。五時に目を覚ましたマリアンは、直ぐシャワーを浴び大急ぎでコーヒールとサンドイッチで朝食を済ませると、着換え室にとび込んで行き完璧な乗馬用の服装に着換え、乗馬用の長靴を穿いた。すべて新調した彼女の全身の姿は凛々しく、ひととき美しくかった。下僕は暗い内から起きて馬の世話をし、マリアンがいつきても

馬に乗れるように鞍や手綱、轡をとりつけておいた。又、馬の血行をよくするため、ブラシでよくこすり、抜毛がつかないようにすっかりきれいにしてやった。

マリアンは朝露の下りた若草を踏むようにして馬小屋へやってきた。五頭の馬は一斉にいななき、頭を上下に振って女主人に挨拶した。マリアンは栗色のマロンに近づき、たてがみを軽くたたいて馬にちょっとキッスしてやった。これからマロンは昼まで、彼女の幸福なお供をするのである。

下僕が乗馬用の台をもってきたので、マリアンはそれを馬に近づけるや否や、マロンの背中にとび乗って鞍に深く腰を下ろしてしばし深呼吸すると、鎧の左右の長さを調節し手綱をとった。そして長靴のかかとで馬腹を押すと、ゆっくり馬は歩みはじめ、彼女は森に向って馬を進めた。

ひずめの音が気持よくこだまし、田舎の新鮮な空気と飼葉の匂いが、心持よかった。マリアンは、やや手綱を長めにし、左手には一メートルもある調教用の鞭を握っていた。女騎手も馬も完全に調和し、彼女の安定した腰と長い足で充分馬腹をかこむようにしめ、征服する姿勢をとった。馬は最早、彼女のお



もむくままに服従を余儀なくされた。

稲妻のような素早さで、彼女の長靴についた拍車が鈍い音をたてて、左右の馬腹に喰い入った。たちまち馬は速歩に変わり、砂塵をあげて埃っぽい道を森に向かって走り出した。向うから年寄りの百姓がきたが、騎馬の姿を見ると、あわてて道をあけてびっくりするように

眺めていた。三、四分も乗ると、もう森の中の道に入ってしまった。マリアンは未だ樹木が密生していないのを見きわめると、手綱を短くしぼって馬腹を更に激しく蹴り、ギャロップをした。乗り手も馬もかすかに汗ばんで息もかなり荒くなった。五分ほど続けてギャロップした後、清水が音をたてていたので馬を止め、水を飲ませ水際の若草を喰べさせてやった。マリアンは馬に乗ったまま乗馬ズボンからタバコをとり出し、ライターで火をつけ一ぷくした。彼女の乗る鞍の下には、かなり馬の汗がぐっしょりしていた。マリアンは時々あえぐ馬のたてがみを軽くたたいてやった。あたりは他に誰もおらず、微かに鳥のさえずりのみが聞こえる。馬はできるだけ首を下へ曲げて、草を喰いつづけた。しばらくすると、マリアンは馬首を起こして、足で馬に進むよううながしたが、直ぐにいうことをきかないので、かなり強く拍車を入れたら又動き出した。森の木立の間から日光が洩れてマリアンの金髪をかがやかせた。馬のテンポが心持よくマリアン

の体に伝わった。

森を出ると、少し沼沢地があり、そこを過ぎると白く塗った木の簡単な囲いをした牧場があつて、そこでいつも乗用馬の調教がされる。その牧場は、中央に二、三本の大きな木があつて、縦横共に四百メートルはあるようで、広々としていて夏草がよく均一に生えていた。

マロンは、そこで二時間以上も続けて彼女に乗り廻され調教された。時々鞭の音が夏の空にこだまし、マロンは矢のようにギャロップするが、それでもマリアンの両足は馬腹を蹴りつづけた。馬の背は幾分、騎手の重みでしなっているように見え、四つの足は大体三拍子にタクトを合わせていた。はみを噛まされた馬の口は白い泡を立てていた。思い出すようにマリアンの鞭が、たてがみのあたりへあてられた。けれどマリアンは、マロンの方が灰色のグローより敏感で従順であり、又すぐ汗を出してしまうのを知っていたので、間もなく放免してやった。

そして午後からはグローを一層はげしく調馬した。マロンより倍も時間をかけて乗り廻し、きりきり舞いさせてしまうのである。グローはマロンより強情で鈍感なので、ひどい

罰をあたえ、ひどいときは四時間以上も立続けに乗り廻すこともある。彼女は、馬がグロッキーになった時、マロンに対しては直ぐ下りてやるが、強情なグローは容赦なく跨ったまま馬小屋へ連れ戻した。それから馬丁に馬を世話をさせた。鞍を取り除くと馬の背中汗が粒になって吹き出ており、下腹部は拍車の跡が生々しく残っていた。

夏休みの間中、マリアンはデンマークの田舎で毎日、馬を責めて日々を過ごした。特に頑固なグローを征服し数時間も乗った後は、勝利感に浸ったように高貴な顔をほころばせこう囁くのである。

「私もう絶対、乗馬は止められないわ。死ぬまで馬を乗り廻して奴隷にしてやりたいわ。だって私、馬を愛してますもの」

さて次の朝、彼女はシャワーを浴びてから水着をつけた。今日は二頭の馬を農家のそばの湖に連れて行って、昨日あんなに調教して汗をかいたので、浅瀬に乗り入れ洗ってやることにした。先ずマロンとグローに轡と手綱をつけ、鞍はつけずに裸の背のままマロンに跨って、湖のそばへグローをも引っぱっていった。そしてグローを木蔭につないでおきマリアンは赤い水着姿のままマロンに跨り、湖

の葦の生えた辺りへ乗り入れた。はじめ馬は水を恐れたが、くり返しマリアンが馬腹を蹴り込むと案外おとなしく水の中に入った。水温はやや冷いが、乗り手にも馬にも爽かだった。波を立てて少し深いところへ馬を乗り入れると、マリアンは馬に跨ったまま首や背を洗ってやる。洗い終ると今度はグローの番である。

同様にマリアンはグローの背に跨るや、湖の中へ突進し、大きな水しぶきを上げる。二度、水中へくぐらせ水深二米のあたりで跨ったまま葦の穂でこすって洗ってやった。午後の太陽がキラキラ輝き、時々水面がゆれ、カモメが下りてきた。水中でも馬の背の運動が水着姿のマリアンの太腿や腰に、くすぐるように伝ってきた。時々マリアンは、ぐいっ

と馬腹を蹴り、馬を水中でも服従させた。そして陸上と大体同じように、御すことができた。水は冷いが、灰色の馬の背から微かに暖か味と快感がマリアンに感じられた。

二十分ほどして水浴びを終えたマリアンはマロンを連れて馬小屋に向うため帰途についた。幸福そうに征服感に満ちた顔をほころばせて、馬を急がせた。馬も段々マリアンを理解し尊敬し、水着姿でも馬を充分あやつれる

ようになった。

夏が終りマリアンはオスロへ戻り、貿易会社で秘書として働くが、今でも少くとも週二回は馬場でマロンかグローに跨ることになっている。

彼女が誰と婚約したか知らぬが、ダイヤの指輪が左の手に光り、今も上品で完全な乗馬服と長靴をはき、頭に絹のスカーフをかぶって乗馬の猛練習に励み、もうすでに新しい障害跳びも始めているとのことである。マリアンほど生々して健康そうな娘は、いないであろう。

この間、朝方にオスロ郊外を散歩していた私は、突然、馬蹄の響きがするので振り返ると、マリアンが上等な毛皮のコートに長靴をはいた姿で、馬を走らせてくるのが目に入った。ふんわりした上等の毛の帽子の下から金髪をのぞかせて……。

もうオスロもすっかり冬になり、霜が下りはじめた。私は今後も、マリアンの馬を走らせている、凛々しい姿を忘れないだろうと思う。そして馬の蹄の音がだんだん遠ざかるのを聞いていた。

(おわり)

漫 談 千 一 夜 物 語

薔 薇 と 蜜 蜂

(7)

第三章 ベにさそり△▽

田 代 俊 夫

26

本節は第24節末尾に接続します。

聞き覚えのある声に首をねじ向けると、足もとにサファイヤが立っています。メロンは夢かと我が目を疑いました。サファイヤはプツと吹き出し、その笑声に夢は破れます。あまりに珍妙な形態に固定されてあるので、思わず笑い出さずにいらなかったのです。「こういうやり方は、わたしにはできませんけど……」

そう、からかうように言って、また笑い始める。こんなあさましい姿を細君に見せつけ

るものだから、第42節以下で、もっとひどいいたずらをされるのです。狼狽と羞恥に真赤になって身悶えるのですが、縛めはびくともしない。

「お、お願い。早く早く解いておくれ」

さっき出ていったボンヘットがいつ帰ってくるか分らないのでメロンは気が気でない。手短かに事情を話して、切迫した情勢を伝えます。腕に自信のある姉さん女房は、一向に動じない。相変らず笑っているだけです。

「そう？ 危機一発というところだったわけね。でももう大丈夫、わたしがついていきますから」

そして何を思ったのか、いきなりメロンの裸の背中に逆馬乗りに跨ってしまいました。

メロンは羞しそうに体をゆする。その白く丸い尻に赤いみみずばれの跡が数条はっきり見えます。昨夜のお馬ごっこの際つけられたのに相違ない。ぽんぽん。サファイヤは軽く平手で亭主の尻を叩きました。

「ひどいことするのね、ボンネットとかいうヤツ。あとで仇をとってあげるわ」

「……………」

ストライクから奪回した結婚記念の指輪を元の持主の指にはめてやる。そして、ゴールデン・バット団に捕われてからの事情の説明

をメロンに求めました。

「あとで全部、話すからさ、早く解いとくれよ、サファイヤ」

ぶざまな恰好から解放してほしいと懇願するのですが、くすくす笑って一向に聞き入れてくれそうありません。メロンは、しぶしぶ捕虜生活の毎日を説明しはじめました。サファイヤとすれば、大体のことはストライクに白状させてあっても、美しい女首領紅さそりとの関係をもっと詳しく知りたいのです。第17節のお仕置で懲りているメロンは、何もかも正直にしゃべります。コシマ婆さんの助手として料理、洗濯、掃除にコキ使われている段の説明で、また一しきりサファイヤは笑いくずれました。だが、妖艶な紅さそりとの一件の解説になると、そうはいかない。

「じゃこの傷あとも、そのお馬ごっこでつけられたのね」

そう言って、平手でばんばんと叩く。さっきより少し強い。

「わたしは一度だって、そんなひどいことをしなかったのに……でも狼達から守ってくれたんだから案外、親切な女らしいわ」

自分が第17節でやったことなどとくに忘れていようです。とってつけたような感謝

の念を表明しても、胸の中は煮えくり返っています。だが事情が事情だけにメロンを責めるわけにもいかず、持って行き場のない憤怒の情の発露を抑圧するのが精一杯のところですよ。何に手間どっているのか、ボンヘッド先生なかなか帰ってきません。

「……その女に夢中になって、わたしのことなど、とくに忘れていたのでしょうね」
そらきた。メロンはここぞとばかり、自己の立場の特殊性を強調し、その真意を主張しはじめる。

一日として夢に見ぬ日なく、寝ては夢、起きてはうつつ幻の……、わが思い永遠に交わじ……。紅さそりなんか顔を見るのもいやだが、サービスしないと人間狼の餌食にすると脅されて……まこと八分、うそ二分くらいの割合で、さかんに熱弁をふるいます。あまり調子のいいことばかり言うのでサファイヤは腹を立て、平手で思いつきメロンの臀部を打撃しました。ぱしん、と鋭い破裂音が空気を引き裂く。

「うそいいなさい！ 自分だって、さんざん楽しんでくせに」

そしてメロンの柔らかい内腿を、忿懣やる方ない表情で力一杯、つねり上げました。

「ひいっ、いたあい……ごめんなさい」

痴話げんかの最中に入ってきたのが、ボンヘッドです。酒樽の栓を元に押しこむのに大骨を折ったらしく、全身から酒の香りが発散しています。見知らぬ女が西洋便器使用方式の姿勢で、メロンの上に坐っている。先生、一瞬ポカンとなりました。

「何だ、お前は。おれの部屋へ断りもなく入りこんで！」

「自分だけズル休みしちゃ、だめじゃないのさ。他の連中は、まじめに働いてるんだよ」
質問には答えず、ズバリと急所を衝く。ボンヘッドは、かっとなりました。だが、見れば、水のしたたるような美人、改めてニヤリと笑います。

何故ここへ来たのか知らないが、若僧の細君とかいう女にちがいない。こいつあ、おかしらよりいい女だ。すごいキング・サイズ・グラマーじゃねえか。鴨がねぎを背おってるとは、まさしくこの光景だ。まず小僧をぶち抜いたうえで、女の方にも、所有宣言の実印を押すとするか。

ボンヘッドは部屋に鍵をかけると、サファイヤに近づきました。

「おい、そこをどけ、女」

「いやですね。どういうやり方をするのか、一つ後学のためにとつくりと見物させてもらうわ」

細君の尻に敷かれた亭主は大恐慌です。

「なめたこと、ぬかすんじゃない！ やい女、一体だれの許しを得て、おれさまの持物に尻を乗せてやがるんだ！」

「持物？ なるほどわかったよ。貴様だね、この子を誘拐したのは」

サファイヤの頭に血が上りました。もう絶対に許せない、この赤鬼は。

ボンヘッドはメロンの顔前に突き立ててある刀を手にとり、不法占拠者を追い出そうとしました。人間狼、最後の科白です。

「さっさと降りろ、さもないと……」

白刃が閃き、首が胴体を離れました。さっと立上ったサファイヤが腰の刀に手をかけたとみるや、抜き手も見せずに切り落したので、血煙がすさまじく噴出して天井にぶつか、裸のメロンに降りかかる。自分が斬られたわけでもないのに、メロンはあっと一声挙げて気絶しました。

気がつく、いつの間にか縛めは解かれて衣服を着せられていました。冷いタオルでサファイヤが顔を拭いてくれている。二つに分

割された故・ボンヘッド氏の遺骸は部屋に見当らないが、おびただしい血痕が兇行の生々しさを物語っています。メロンは、また青くなりました。

「何ですね、だらしない。仇を討ってあげたんじゃないの」

何でもないとよという風に白い歯を見せて笑っているのですが、憶病なメロンは身体の震えが止まりません。でも平然たるサファイヤは、ストライクを連れてくるようメロンに言い付けました。

「その間に婆さんを擱えて、何か食べ物でも用意しておくわ」

「いえ、料理ならばくが作るから……」

ストライクがこわい。連れてくるときに逃げられるかも知れないし、それにまた処刑の現場を見せつけられたらどうしよう……。

「後手に縛ってあるから大丈夫よ。……あなたを誘拐した張本人じゃないの、これで少し懲らしめてやりなさい」

そう言って細身の手頃な鞭を手渡す。拷問室から、失敬してきたものでしょう。先端が二つに裂けています。強い細君に激励されてメロンは鬼退治に出発しました。

洞窟の入口は、むろん閉っています。

「開け、人参！」

岩戸は、するすると開く。外から開ける場合と内から開ける場合とでは、呪文がちがうのです。

この点に注意を払うことに手抜かりがあったので、先年某団体はアリババ氏にしてやられたというわけです。

目的の場所に到着すると、サファイヤの教えてくれたとおりの状態です。全ストのストライクは、ぎっちり後手に縛られた上、木の根元にあぐらをかくような姿勢でくくりつけられていました。両足首も、きちんと揃えて縛ってある。これなら安心です。

メロンの姿を認めたストライクは、口惜しそうに歯を噛み鳴らし、恐ろしい表情で睨みつけました。一瞬怯んだものの、現時点における客観的、力関係を冷静に認識すれば、絶対優位の地位を、占めていることは明らかです。檻の中のライオンなんか、少しも恐くない。

「やい、ストライク。よくもぼくをひどい目に合わせたな。うんと懲しめてやるから覚悟しろ！」

と断然、高姿勢になる。とるに足らない若僧に決めつけられた全スト氏は、憤怒の唸り

声を発しました。

「う、ううむ、青二才め！ 身体さえ自由なら貴様など……」

その吠え面めがけて、ペツとつばを吐きつける。

「いい気味だ。へん、何だい、そのざまは。人前での丸裸を羞かしいとは思わないのか、礼儀知らずの山猿め！」

つい先刻まで自分が展示していた屈辱体位など、まるで念頭にありません。頭にきた全スト氏は木の幹をがたがた揺するが、どうすることもできない。メロンは木の幹に縛ってある縄だけを解いて、ストライクを地面へ引き倒す。両腕両足、緊縛体制の大男は抵抗するすべもなく横転しました。

「こら、三べん回ってワンと言え」

これは、できない相談です。度重なる侮辱に我を忘れたストライクが、自己の立場を弁えず悪態をつきはじめると、待ってましたとばかりメロンは、鞭を振り下ろしました。力は、あまりない。だが鞭打の効果は、案外ある。

復讐の好機ですから、メロンはめちやくちやに乱打しました。丸裸のストライクは、全身打擲されざる箇所なしという惨状です。こ

ろごろと炭俵のようにころがる。自慢の胸毛が土と汗にまみれます。うつぶせのときは背中と尻を、おおむけになれば胸と腹を打つ。時には顔面や股間にまで飛んでくるが、避けようがありません。

メロンがいかにかに非力でも、また、ストイクがどれほどタフネスを誇っても、こう見境いもなくやられてはたまらない。さすが頑健な大男も痛みに耐えかね、ついに悲鳴を挙げて許しを乞うのでした。

「ゆ、ゆるせ、わしが悪かった。ゆるしてくれい……」

片足で首筋を踏んづけ、メロンは大見得を切ります。

「そんな謝り方があるか！」

「おゆるしを。メロン様、どうかお慈悲をもっておゆるし下さい」

メロンは一層、居丈高になります。

「ぼくを誘拐したことをどう思ってるんだ、アーン」

「深く、深く反省しております」

「二度と不埒な考えを起すと命はないぞよ」

「はっ。もう決していたしません」

メロンは得意満面です。ストライクは屈辱のきわみです。

「よし、今回だけは許す。どうだ、山猿。ぼくのきびしさを思い知ったであろうな？」

「身に染みましたでございます」

いちいち相槌を打つ必要があるから、これだけでも大変だ。

「やい、何か言いたいことがあるんなら言ってみろ」

「水を、水を一杯所望いたしたく……」

「いいとも。……そら、これを飲め！」

行儀悪く、やにわに自家用ホースで放水する。ストライクは、わっと叫んで地面を跳ねまわりました。顔がびしょびしょに濡れる。

「あ、あり、ありがとうございます」

全スト先生散々です。思う存分、腹いせしたメロンは、これくらいでよかうとストライクの引き立てにかかります。それも一風変わった方法です。首に縄を巻きつけ足首の縛めを解いてから、綱引きの要領で地面を引きずります。立って歩かせると、縄尻を振り切つて逃げられたり、足蹴にされる危険があるから、万全を期したのです。

ストライクは、人間かたつむりの行進を演じます。膝と胸を使って身体ごと、地面を摺って、前進しなければならぬ。少しでもなまけると、首に巻きつけた縄をメロンが引張

る。おいちに、おいちにと膝を立てたり伸ばしたり、この上もない難行苦行です。超鈍足スピードで、やっと洞窟の入口までたどり着いたときには、精根つき果て死んだようにぐったり伸びてしまいました。

中ではサファイヤが、食事の仕度を整えて待っておりました。コシマ婆さんが、しゅんとしてその傍に控えている。

「少し遅かったけど、何をしていたの」

メロンは胸を張りました。

「なに、この山猿が傲慢な態度をとるもんだからね。うんと懲め、ぼくの恐しさを思い知らせてやったのさ。もう決していたしませんと泣いて謝ったよ」

と、まるで自分一人の力でなし遂げたかのように吹聴するのです。哀れストライク、すっかり鼻白んで悄然とうなだれています。サファイヤは、全スト氏を柱にくくりつけました。

「どんなやり方で懲しめたのか、聞かせて頂戴」

メロンは、また大威張りで話し出す。サファイヤは、笑いながら聞いていましたが、内心に思うよう、どうも増長している気配だから少しとちめておく必要がありそうだわ。

「それは大変、結構でしたわね。すごくいいかっこうで……でもそれくらいで、あなたの腹の虫が収まるかしら？」

サファイヤは、腰の力を抜いてメロンに手渡す。そして焚きつけます。

「こんな悪漢、生かしておくことないわ。世の中のためよ、一思いに、さっぱりとそれで成敗してしまったら？」

ずしりと手にくる刀の重みに、メロンは困惑の表情を浮かべました。血を見ただけで気絶するくらいだから、自分で斬るなどとは到底できない。第一、今まで刀を持ったことさえない。

「う、うん。だが、こんなやつ刀の錆びになるばかりだし、ぼくが斬るまでもなく……」
「じゃ、お貸しなさい。わたしがやりますから」

そう言ってメロンの手から拔身を引ったく。ストライクは生きた心地なくがたがた震え、メロンも仲良く真青になりました。虚勢は瞬時に崩壊して、慌てて女房の腕にとりすがります。

「い、いや、何もそこまでしなくても、充分懲めてあることだし、こ、こいつも深く改悛してるようだから……。な、ストライク、そ

うだろ？」

メロンは、にわかに同情的になりました。微妙な三角関係とはこういう状態を指すのでしょうか。なかなか鋭い寸劇です。サファイヤは変な風に笑っていましたが、やおらきびしい表情でストライクに向き直ります。

「この人が許すといっても、まだ不充分だからね。わたしの前でもう一度、主人に詫びを入れるんだ。分ったかい、ひげ面」

「へ、へい。それはもう、どのようなことでもいたします、奥方様」

命さえ助かれれば、いかなる醜態をも演じてみせますと、ますます卑屈な態度をとるストライクです。サファイヤは刀身でぶすりとその縄を切って捨て、完全に自由にしてやりました。縛めからすっかり解放されても、腕はしびれ切ってしばらく用をなしません。小水を浴びせたにつくきジャリが眼前にいるのだが、美貌のアマゾンが、その傍に守っているので手が出せない。

「謝り方がわたしの気に入らないと、残った耳をそぎ落すからね」

毛むじらけの大男が四つん這いで近づいてきたので、メロンは慌てました。守護神がついていても、檻から出たライオンは、やは

り恐い。ストライクが眼前に平伏したとき、虎の威を借りる狐君、ついにたまらず、さつとサファイヤの後に身を隠し、姉さん女房の腰にしがみつきました。

一時間ほどしてから、団員二名を地下牢に閉じこめ、何の気がねもなく二人水入らずとなりました。サファイヤは今夜この山荘に泊っていくと言い出して、一刻も早く逃げ出そうと主張する、メロンの意見をはねつけました。

「毎日、楽しい思いをしてきた人たちがってわたしは疲れてるんですからね」

「連中、明日の昼に帰ってくるんだよ」

「朝、出発すればいいじゃないの。……ああもうくたくた。おとついの晩から一睡もしてないのよ、わたし」

と、女体の脆弱性を誇大に宣伝しました。

夕食が済むと二人で分捕品の高級ウイスキーを酌み交しましたが、メロンの方が先に、くたくたになってしまいました。サファイヤは酔い潰れた亭主を軽々と腕に抱き上げ、女首領紅さそりの3DK室まで運搬します。入口の頑丈な桎梏の戸に鍵をかけてある。メロンを胸に抱いたまま、サファイヤはその戸を蹴破りました。

寝室に闖入すると、果して昨夜の戦争の形跡が生々しく残っている。予期していたとはいえ、このゲンゼンたる有様を認識すれば頭に血が上る。フィクションならぬ事実の重みです。逆上したサファイヤは、いきなり寝台の上にメロンを投げつけ、若鹿を襲う牝豹のような勢いで、飛びかかり押えこみました。二日間の不眠など問題ではないらしい。

「あなたっ！ この女にしたという過剰サービス、全部わたしにもやってもらいますからねっ！」

27

午前八時、メロン起床。

昨夜はドえらいことでした。百日間の遅れを一気に取り戻す意気込みすさまじく、サファイヤは特有の強靱性を極限まで発揮して、飽くことを知らぬ氣に夫としての義務の履行を強要したので、メロンは自己の脆弱性を努力で補充するのに、くたくたになってしまったのでした。

女房のやつはと見ると、傍にすやすや寝息を立てています。昨夜は心ゆくまで久しぶりの愉楽で空白を埋めたとみえ、口許に満ち足りた妖しい微笑をすら浮かべている。きれいな

にセットしてあった金髪が、しどけなく白い肩に振り乱れて、えもいわれぬ美しさです。だが、気分を出してモーニングサービスをというわけにはいかない。

「起きろよ。おい、早く起きろったら」

肩に手をかけて、ゆさぶり起す。これは、いつもとあべこべの異常な現象といわねばなりません。普段は、こうではない。朝寝坊のメロンが毎日、叩き起されて、やれスープが冷えるとか、それ生ジュースの鮮度が落ちるとかで叱られてばかりいるのでした。しかし今朝は少しちがう。昼すぎには、紅さそりの一隊が帰還してくる。それが念頭にあって昨夜の奮闘努力で心身共疲労困憊に達しているにもかかわらず、早く目覚めた理由でした。「うるさいわねえ。睡眠不足は美容と健康に悪いのよ」

と、自分の都合のいいときだけ勝手なことをいう。そして、あと一時間ほどで起きるから、その間に出発準備をやっておけという指示を与えます。仕方なく、先に起きたメロンは、リスのようにすばしく動きまわりました。コシマ婆さんは、地下牢に監禁してあるので、自分一人で諸事万端をやらねばならぬ。

財宝室へ入って一味が長年かけて貯めこんだ金銀その他の宝物を頂戴する。金貨、金の延べ棒、金の燭台、金のしびん等々、ゴールドばかり選り分け、麻袋へ内容別につめてむ。何十袋もできました。

武器貯蔵庫へ入って手頃な槍と刀を数本ずつ失敬する。これはサファイアの命令です。それを一まとめにして、くくっておく。

娯楽室へ入って面白そうな物を物色する。今日から、また砂漠の長旅がつづくから、旅の無聊を慰めるべく、ギター、三味線(?)、スゴロク、ビー玉、花火などを借用証なしに借用する。これも一まとめにして、袋に入れる。

その他、色々のことをする。一通り済ませて寝室に戻ると、細君のやつは平然として相も変らず、ぐうすかやっています。狸寝入りに決っている。腹を立てて、毛布を剥ぎとると、やっと観念したとみえ、しぶしぶ起き上りました。

「ああ、ねむい、ねむい。……わたしは、とても疲れやすい体質だから、早く起きるのがつらいのよ」

と、てれかくしを言い、とぼけた表情で、「何故そんなに急がせるの。もっとゆっくり

したっていいじゃない?」

と白ばくれました。メロンはムツとして、「連中は昼すぎに帰ってくると言ったら!」サファイアの態度が変わる。

「ああ、そのこと?……丁度いいわ。わたし紅さそりさんに少しお話しがあるの」

雲行きが怪しくなってきました。

「何を言うんだ! 話しなんかあるはずないじゃないか。それに……」

横目でジロリ、すごい目つきでメロンを黙らせる。それから、にわか仕立のポーカーフエイスを装って、

「あなたを親切にもてなしてくれた女ですもの、一言お礼をいわないと、礼儀に反しますわ……」

一晩くらいで亭主を寝取られた恨みは晴れそうもない。メロンは半泣きになりました。「でも、剣の達人で、ものすごく強い女なんだよ。それにナックルやスクイズなんていうおそろしい子分が九人もいるし……」

「二人は昨日、片づけたでしょ。あなたは、わたしの腕前を御存知ないのよ」

自信満々、泰然自若としています。血を見るのがいやだとか、万一の場合にどうするのだとか、いろいろゴタクを並べて必死に哀願

するのですが、強い女房は一向、聞き入れてくれません。かくなる上は泣き落しの一手あるのみ。早く一緒に逃げようと、かきくどいているうちに、だんだん胸が熱くなってきてメロンは、本当に泣き出してしまいました。「お前がやられたらボカア殺されちまう。……ワーン、ワーン……」

第16及、17節のようなときには、いくら泣いてもだめだが、この場合はかなり効果的です。泣く子と地頭には勝てぬとの格言が妥当する。サファイアは、げんなりして参ったという表情で、降参しました。

「分った、分った。あなたのおっしゃるとおりいたしますから、もう泣かないで。……ずるい人ねえ、いつもこうなんだから」

とたんにメロンはケロリと泣き止む。まことに変化自在、これも特技の一つでしょう。急にまた高姿勢になって、細君の仕度をせく。まるで詐欺じゃないの、そう思ったがどうしようもありません。サファイアは渋い顔で床を離れました。今度泣かせたら大変なことになる。まず一週間、夜のストライキを覚悟せねばなりません。

「貰っていく品物、ちゃんと用意してくれたの?」

「うん、金貨や金の延べ棒の袋をたくさんこしらえたよ。……それにスゴロクやビー玉なんかも」

「馬鹿ね、そんな重いものどうやって運んでいくのです。宝石だといったでしょ、宝石だと」

「だって、いくら探してもないんだ」

「じゃ、この部屋に、隠してあるのよ。いいわ、わたしが探すから」

馬の仕度をしておくように指示してメロンを部屋から追い出すと、サファイアは早速、搜索を開始しました。化粧室に隠してあるにちがいない、そう見当をつけてそのあたりを調べるうち、案の定、豪華総桐製衣裳ダンスの引出しが二重底になっているのを発見しました。力まかせにぶち破る。と、たちまちぼうとなつて目が眩んでしまいました。

すごい。完全に圧倒されます。仕切りの中に正真正銘の本物の宝石ばかり、ぎっしり詰まっているのです。赤・白・青・黄・緑・黒、燦然と輝く無限の色彩の乱舞です。ダイヤがある。エメラルドがある。自分の名前と同じ石もある、ルビー・オパール・瑪瑙・真珠・石榴石、十二カ月の誕生石は、みな揃っている。宝石辞典が手許にあれば、もっと出てく

る。それに、どの一つを取ってみても素晴らしい逸品ばかりです。貧乏王国の元姫君には、なかなか手の出ないようなものが多い。サファイアは、その光り輝く宝石類をゴッソリ革袋の中に移しました。ガッポリ儲かっちゃったわねえ、ニコタンニコタン……。

さて、こちらはメロン。準備は全部完了して、細君のお出ましを待っておりますが、いつまで待ってもやってこないの、しびれを切らし、再び部屋に取ってかえました。

予想通りです。紅さそり愛用の大きな三面鏡の前にデンと豊臀を鎮座まし、双肌脱ぎでクリームをべたべたすりこんでいます。

「だめじゃないの、男がこんなところへ入ってくるなんて」

「だってお前、こっちは全部用意できてるんだぜ。馬は茂みの中へ隠しておいたし……」

「じゃ、もう少し待って下さいね」

また悠然と、女のみだしなみ作業にとりかかる。メロンは、いらいらして時間が気になつてしょうがない。だが今までの経験で、こんなとき何を言ってもだめなのをよく知っているから、諦めて静観しているのです。

「伸びが悪いわねえ、このクリーム。一体どこの製品かしら」

びんの底にラベルが貼ってある。

「アナータ化粧品だって。ふん、この品質でこの値段なら暴利化粧品じゃないの。……あとで公取委員会に投書してやろう」

他人の所有物を勝手に消費しながら、言いたいことは全部言う。万事この調子ですから手間のかかること、おびただしい。やっとファンデーションが完成しました。

「あの、奥様。まことに恐縮ですが、お時間の方が……」

「もう少しよ。ふうん、キスミールHか。こっちは、迷色ファンデね。これも頂戴しよう」と

塗りたくるだけでは足りず、時折りびんと失敬する。また、紅さそりがこっそり貯めこんだ世界の最高級香水をみつけると、目の色が変わります。

「あら、素敵、シャネル六番よ。おや、ディオール・カルダン……ミニス・カートもあるわ」

宝石同様、手許に香水辞典のないのが残念です。高級化粧品は別の革袋に入れて失敬します。尚、鏡台の中には香水の他に、媚薬・秘薬・催淫剤のようなその種の代物も詰まっているのです。

「まあ、不潔！ 何て下等な女なんでしょうねえ……」

メロンの手前、大仰に顔をしかめて自分の上品さを披露するのですが、しかめているのは顔だけで、手の動きとは全然矛盾しております。

やっと顔の方は終わったが、髪型セットという最大の難事業が残っているのです。

「どうだっていいよ、髪型なんて」

「ふざけないで！ わたしがいやだいやだっというのに、ゆうべばらばらにほぐしたの、だれだったっけ！」

メロンは赤くなって、部屋を飛び出しました。この調子では何を言われるか分らないし君子危うきに近寄らずだ。そう思って洞窟内を時間潰しにぶらついていましたが、間がもてません。サファイヤのやつ、まだ大分かかりそうだし、何かすることがないかな。

メロンは、再び娯楽室に足を運びました。さっきはギターやスゴロクをパクってやったが、何か面白そうな本でも探そうと考えたのです。連中、普段娯楽室にとぐろを巻いて、漫画マNDERとか週刊読捨などを読みふけていたからです。

机の抽出しを開けると、各種のガラクタが

一杯、詰っています。アメ玉、こけし人形、栄養剤アンプルなどです。こんな物には用がない。「鍵」のかかっている抽出しを破壊すると、まず麻薬の錠剤、次に粉末の睡眠薬が現われました。とたんに靈感が閃く。

いつも明りを消したがるから、どんな風になっていくのかよく分らない。一度、真昼間にこいつをサファイヤに飲ませて、徹底的に実地検分してやろう。ニコニコ、ニタニタ。未成年者のくせに「某教授」のようなミダラなことを考えて悦に入りましたが、何が幸いするか分らないもので、第36節でメロンの命を救う作用をこの粉末がしたのでした。

睡眠剤を上衣のポケットにしまって次の机に移る。今のはブルペンの専用机だったが、これはピンチヒッターの所有物です。GB団随一のインテリだけに、抽出しの中には書物がぎっしりと詰まっている。学者先生、さてどんなものを読んでいるのかと拝見すると、一番上に置いてあるのが「科学から空想へ」という小冊子です。なるほど偉いものだと感じて、二番目の本を手にとると、これがケース入りで「中論理学」とある。著者は、むろん丙毛留です。先生のタネ本らしい。念のため中味をケースから出して改めると「性技

大観」となっています。三番目のカバーを外すと、いやに凝った標題の「匂える花園」が現われました。教養文庫を尚もよく調べていくと、あるわあるわ、その種の秘密出版物ばかりです。メロンは、すっかりうれしくなりました。

サファイヤにみつかると思いから、よさそうなものを一、二冊、持っていこう。絵入りのヤツはないかなあ……。

天然色の画集と覚しき、大型本が出てきました。これだ、これだ——茶酷剣・著「性生活の知識」。——わ、すごい。いいぞ、いいぞ。

すぐしまえばいいのに、立読みの悪癖が抜けきらぬとみえ、メロンはその場で閲読を始めた。ふうん、なるほど。だがこの第69図は実際は無理だな。第36図の左脚の角度をもう少し……。

「こんなところで、また油を売ってますね」ギクリとして顔を上げると、サファイヤです。満艦飾にめかしこんで立っています。実をいうと、入念きわまる御化粧をやっと完成して洞窟の出口まで行ったのですが、そこに待っているはずのメロンがいないので、おそろくここだろうと判断して娯楽室に顔を出し

たという次第です。メロンは狼狽して茶酷剣氏を背中の上しろに隠す。だが、もう遅い。

「何よ、その顔つき。見せなさいっ！」

「な、なんでもないっただけ……」

サファイヤは腕を伸ばして取上げようとする。メロンは必死に押さえる。力の強さが違います。とうとう力づくで引ったくってしまいました。しゅんとしてメロンはうつむく。「……まあ、いやらしい。何ですか、子供のくせに！」

ピシヤリと頬つぺたを張られ、メロンは鼻白む。サファイヤは、さもけがらわしいというように、「性生活の知識」を、びりびりに破り捨てました。それから、教育ママ的態度を露骨に示して、お説教を始めます。何を讀もうと勝手じゃないか、そう思ったが、むろん口答えなどはできません。メロンは仏頂面で聞いています。説教が終ると、サファイヤはメロンをせきたてました。

「出口は、そっちじゃありませんよ」

「へん。馬を取りにいくんのだ」

「外に待たせてあるはずでしょ」

「ぼくの乗る馬なんだよ」

女房の腰にしがみつく相乗りはもう御免だと言う。今叱られたのですねているのです。

サファイヤは、くすくす笑って、

「痛い目に会っただけだから、お止しなさい」

ますます面白くないメロン、女房の忠告を無視して洞窟内の厩舎の方角へ、ずんずん進む。肩をすくめ両腕を上げたサファイヤが、そのあとに従う。厩舎には故・ボンヘッドの持馬が一頭残っているのです。焦ったメロンは無謀にも、ひょいと身を躍らせてその背中に打ち跨りました。ヒヒンといなき、長顔四足動物は前足を高く上げる。あっという間に振り落されたメロンは、したたか腰を強打して目玉を白黒させるだけ。サファイヤは無遠慮に笑いくずれました。

「そらごらん、言わないことじゃない。本物の馬は、あなたには無理よ」

醜態を演じ、あっさりやりこめられたメロンは、ぐうの音も出ません。痛い腰をさすりつつ、すぐすぐ引揚げる。二人が出口まで来たとき、サファイヤは急に言いました。

「わたし、ちょっと、思い出したことがあるの。先に行って馬の場所で待っていて頂戴」

「化粧直しは、お断りだぜ！」

「忘れ物よ。すぐ済みますから」

そして通路をとってかえす。メロンは洞窟の外に出て、馬をつないである空地に足を運

びました。外気は、やはりすがすがしい。甘い空気を胸一杯に吸いこむ。だが、太陽は中天を過ぎて、すでにPM一時を回ったかと思われる。GB団の一味の帰還時刻は刻々と迫っています。

じりじりして待つことしばし、ようやくサファイヤが姿を現わす。両手に革袋を一つずつ、ぶら下げています。一つは宝石、もう一つは香水。その他化粧品です。腰には黄金造りの素晴らしく豪華な太刀を佩いているが、これも女首領室から失敬してきたものにちがいない。さすが、念入りにめかしこんだだけあって、白色光線の下、輝くばかりの美しさです。そのうえ、一分の隙なく身を固めた女武者のいでたちも颯爽と、ほれぼれする勇姿です。サファイヤはこれみよがしに尻を振りつつしゃなりしゃなりと近づいてきました。

「ね、どうかしら」

「うん。もうすぐ帰ってくるから、急がなくて……」

「ふん。なんてにぶいんだろ」

「あ、……すぐく勇ましいよ」

「馬鹿！ 髪の設定のことですよっ！」

(つづく)



●古文書「万騎の原軍記」より●

紅花のよそおい

——生首化粧役お雪の物語り——

朱 倉 敬 生

(一)

ここ、前線基地の通称楯山・小高い丘陵に一きわ目立ってそびえる大杉。その頂上に設けられているやぐらから、かん高いはずんだ声が凹地の残雪にまで響き渡りました。

「黒沢の方角に、土煙りと旗が見え始めます。お味方、勝利と存じます」

小国川沿い下流の川原から、かすかな馬蹄と歓声が風に送られて来たようです。お雪は

柵の広場に備えつけられてある大釜に、手桶から水を加え火加減を見やりました。

天正元年は、浅井、朝倉の連合軍が、織田信長軍のために敗退し、足利幕府の倒れた年に当たりますが、天下麻の如くに乱れた同時代に、未知の国と呼ばれていた東北地方は、伊達、最上、南部等の豪族も未だ抬頭するまでには至らず、戦国末期の様相を如実に呈しておりました。

各地の小勢力がしのぎを削って相争い、朝

に一城が抜かれると思えば、夕には数とりでの炎上する例は枚挙にいとまがありませんでした。

出羽の国、最上の郷は、長い埋雪の冬が終りを告げ、旧暦の三月ともなりますと丈余の雪がうその様に消え去り、見渡す限りの高原や連峰がもえ黄の衣をまとい始め、百花一時に乱れ咲く景觀に恵まれています。だが、絶佳な風土を賞するいとまとてなく、小国川沿いの太郎田附近に対峙した清水将源と小国日

向の両軍は、共に譲ることを知らず三度目の早春を迎えることになったのです。

私は、当時の戦い振りを記述した郷土の古文書、万騎^{まさき}の原軍記をひもといているのですが、その頃、中央から離れている遠隔の地ほど、武士の作法や道が、純粹に保持し続けられていたように思われてなりません。

みちのくも、奥地小豪族間の戦闘には未だ鉄砲の使用が記されてはおらず、昔ながらの弓矢と刀槍が用いられ、団体行動よりも対個人の武勇を競っていたようです。そして、槍や刀で相手を倒してから、又は、勝敗が長引いて、組打ちになることも多かったようです。敵に一太刀浴びせたとか、確かに手応えがあった等は、決して手柄にはならず、文字通り生首を持ち帰るのがしるしになっていました。勝負は時の運とも申し、首を得るも授けるのも武人最高の行為として、礼節を尽し合って行われましたのは勿論です。

戦場に捨てられている遺体は、敵味方の別なく、首をはねてやるのが儀礼とならわしになっておりました。死に首を与えることは、武者として恥ずべきものとされていたからです。手負いで動けなくなった場合とか、このまま帰陣しても、生命がおぼつかないと察し

た時には、静かに敵の近寄るのを待ち、呼吸の存するうちに自分の首すじへ刃の当てられるのを、最後を飾る奥ゆかしい栄与として称されました。

落城の際などで、捕虜になることを拒む高貴な女性は、自害と申しまして、味方勢の介錯を受けることなく、胸や首に浅く刃を入れたまま敵方の乱入するのを待ち、押し倒され組み伏せられて白いうなじを朱に染め、首切られる痛みにも最期の絶叫を発しながら立派に生首を渡したもののようです。

去^きぬる年、亀割り城主の奥ふじの方は、嫁して日浅く十九才の春を城に殉じ、天晴れ武人の妻ぞよともてはやされました。陸中へ出陣の夫や軍勢を送って、僅かばかりの手兵と共に城を守っていたのですが、佐伯勢の奇襲包囲にあったのです。激戦四昼夜にも及び、数十倍の敵に善闘これつとめましたが、衆寡敵せずして矢尽き刀折れて守兵ごとごとくが倒れ、残るのは夫人と六名の侍女のみとなりました。

寄手の将佐伯甚左衛門は、奮戦した城兵の働きにいたく感じ入り、ふじの方の統卒を称讃して、これ以上無益な殺生を止めたい、城明け渡しさえすれば、立ち去るも構いなし、

男子も及ばぬ程、勇敢に戦って後のことなれば、世人も讃辞を惜まないであろうと、暗に助命の取り計らいを致しました。

軍使の口上を静かに聞き終ったふじの方は「ご厚志には感謝しますが、城と運命を共にするのは、武人の妻として当然のつとめ。家来の全員を討死させ、守将一人だけ生き延びて何の面目がございましょう。いさぎよく首級をお渡し申し上げる所存ですから、願わくは準備のため、しばしのご猶予を」と、いんぎんに謝絶しました。

最期の模様は、こう記されています。城中に入った左伯の軍勢が見守る中に、葉桜の香りが快く鼻につき、広い芝草の馬場には大きな白布が敷きのべられ、七人の若い女性が白い肌着に朱の袴をまとい、無造作にも長い髪を背に流した姿で現われました。先程までのりりしい女武者振りとは全く違った、風にもそよぐ女らしさが、誰にもものの哀れを感じさせずにおきませんでした。

ふじの方を除いた侍女達は、白布に着座してからしばらく瞑目して後、静かに肌着を脱しますと、白磁な形よい乙女の上半身が初夏の陽光にまぶしく映じました。六名の屈強な若武者が、陣太刀を抜き放って彼女達の背後

に廻りますと、緋袴のひもを解き、丸やかな腹部が充分露出するまでに押し下げ、長い黒髪を裸身の前にひるがえしました。申し合せたように、愛らしいこんもりした右の乳房が乱れ髪に、見え隠れしているのが印象的でした。

うら若い女性が、汚れを知らぬ我が肌を衆人環視のもとに晒すことは、もとより恥ずかしいのに違いはありませんが、それよりも女武者として立派に最期を飾るため、着衣と髪が邪魔になって、首落す者の太刀先が少しでも狂うのを恐れた故の心づかいなのです。

ふじの方に会釈した侍女達は、一斉に中腰の姿勢になって、布片を捲き付けた小刀を弾力ある若々しい左腹部に突き立てました。これと言った切腹の様式も定まっていなかった時代でしたが、戦い敗れた武士は、上半身を晒して腹切ることが最も潔いと喧伝されていたからに外なりません。

女人の腹切りは、見苦しい態を見せぬよう浅く切るが良しと、言い伝えられていましたが、柔肌に突き刺した刃を左に回し始めますと、熱い鉄に身を焼かれる痛さに、玉の汗を浮かばせた彼女達は、

「う、う、う」

苦しげなうめきを洩らしました。思う存分に下腹を引き回すと、反り返る毎に、裸身の双隆が切なくもあえいでいるようでした。小刀を抜いて右膝前におき、中腰のまま血にまみれた右手で、頭の後方の散髪を高く差し上げますと、かくれていた青い程ほっそりした震えるうなじが、介錯人の目にあやしくもなまめかしく映じました。刃を受けるために、せい一杯全身を延び切った可れんな風情は、ひとしお哀れをもよおしました。

髪の生え際を狙って、振り落とされる陣刀が、初夏の陽にきらめいたと思うと、長い黒髪を風に泳がせた六つの生首が三間も前方に飛んで転がり、首を失った裸身群は敷きしめられた白布に、切り口から虹のように朱を吹き上げながらゆっくりと倒れました。

白の布地は、主に殉じた乙女の純血で、鮮かにも色どられました。流れ走る朱も止まり、緋袴だけの裸身を示し、微動だもせず横たわっている首のない侍女達に囲まれて、黙とうを続けていたふじの方は、やおらなみいる軍勢に向い、

「妾も自害致します。首かき落す者、いずこにおわすや」

朗々たる鈴の音声は、組伏せられ、城主の

生首を授ける相手が、むつけきおのこならざるを祈ったことでしたが、おうと、応じて立ち上ったのは、佐伯勢でも武勇の誉れ高い美丈夫の若武者でした。

端座しているふじの方の前に、目釘を外した腹切り刀が運ばれました。当時、小刀を三宝にのせる風習は行われなかったようです。かたずを飲んで見守る一同に、軽く会釈した夫人は、肌着を脱することなく細帯をほどいて袴をゆるめ、無言で夫の出陣している陸中の方角を拝していました。戦国の習いとは申せ、留守の落城のお詫びにか、最愛の顔を見ずして散る無念さか、満場には声一つなく、心情をおしはかる武者の間にはすすり泣きすら聞えて来ました。長い時間に感じられませんでした。

やがて、たかぶりを見せ、紅潮した顔のふじの方は、中腰にもならずして軽く下腹をさすっていました。小刀を右手に持ち、切先を浅く左腹部に入れ、声にもならぬうめきと共にそのまま引き回したようです。巾の広いもとどりから垂れた髪が激しく左右に揺れているのは、苦痛を押さえている様子にも思われましたが、りりしくも叫びました。

「城主の首級申し受ける者、名のり候らえ」

「佐伯の臣、大沼正之進おしるし頂戴仕る」

と走り寄った具足を着した若者は、

「ごめん」

一礼を返しざま、腹を召したふじの方を、しっかりと組み伏せました。

両の腕は盤石の重みで膝下に押さえられ馬のりになって見射る若武者の目に、絹羽二重の肌着が左右に大きく開き、女らしさを増し始めた円やかな肩と乳房を持つ玉の肌が、息づく毎に動悸を打って遠慮や惜し気もなく晒されました。えも言われぬ妙なるお色気がただよっている風情です。夫以外に見せることのなかった素肌の香りを逞しい異性に堪能させながらの最期を飾り得るふじの方は、しっかりと押さえられながらも嫁して以来味わったことのない女の喜びを初めて覚えました。

女城主の首級を申し受けるという栄与はともかく、組み伏せた女体からの例えようもないかぐわしい色香に軽いめまいすらおぼえましたが、かくてはならじと、

「お覚悟召されい。いまわの言葉は」

と問いますと、首かかれる最期をも忘れ、しばし恍惚の境に浸っている如くで、長いまつ毛の目を閉じ口を半開きにしたままのふじの方は、

「念入りの首化粧を」

と、消えいる体で、あえぎ答えました。

長い髪の毛根が力強い手で握られ、延ばせるだけ延びた、か細い首の右耳下あたりに、ひやりと鎧通しの当てられるのを感じた夫人は、体中の力を抜きながらも両の手首をふるわせ、敷きしめている白布を、握りました。

「ああ、あ、きえーい」

ふじの方の絶叫が葉桜の梢に響き渡りました。みちのくでは、首切られる間際の女武者は、悲鳴大なるほど哀れにもよしと、教えられていました。存分に声をあげるのが、相手に対する礼儀でもあったのです。

如何に鋭利な打物でも、一気に首切ること出来ません。皮を裂いて肉を切り、骨を断ずるのには数呼吸を要します。寸前まで痛さにのた打った首の失せた胴体からはおびただしい血潮が吹き続け、正之進の左手に掲げられたさんばら髪の毛のふじの方の首級は、首すじは申すに及ばず、朱に染まり切って、かっと半眼を向いた無念の形相に変わっていました。

奇く愛読者の僕は、生首の記事に注意してありますが、既にこと切れた死者の首をはねたものなら別として、生体切断の場合には、本人が気付かぬうちに、不意打ちに首を落した

ような時でも、微笑をたたえた眠るが如き顔であった、と言うようなことは、決してあり得ません。目はつり上って、開くか白眼になり、口元はゆがみ、すさまじい形相に変わってしまうものです。このことは法医学関係の方にも問い合せて確かめました。愛らしい美人であるほど、痛ましくもせいそうな感じが面に現われるそうです。

さて、城に殉じたふじの方を始め侍女達の生首は、白絹の小袖に包まれて槍の穂先にいわえられ、凱旋の佐伯勢によって羽後十文字に運ばれましたが、雄勝川の河原に急造された高さ五尺程の晒し台には、手弁当を持って見んとする群集で賑わいました。

地面に垂れ届かんとする黒髪はていねいくしけずられ、まぶたを閉じてゆがみを直し朱唇をはいた七個の美女の生首は、この世のものとは思えない位、入念に化粧されていて輝く美しさでした。後世ならいざ知らず、当時は武運つたなく打ち取られた末に晒し台に上ることは、最高の名誉と称されていました。いや、それだけの価値を認められたからなのです。

なみいる群集は、ふじの方達の最後を伝え聞いて感激をあらたにしました。それは、傷

改めを行った際、すべての女性が緋の袴の下に、固く下帯を締めていたことを知ったからです。

出陣中の天正時代ころの武士は、鎧の一番下に、いくさふんどしと言う下帯を締めているのが多かった、と聞いています。越中禪の変形したもので、片端にひもが出ていて腰を回して前で結ぶのは同じですが、前に垂れる部分が、反対のあごのところまで、上に延びて、更にもう一組の短かい細ひもで、首の後方に結ばれます。幼児の金太郎腹掛けを兼用したものと考えればよい訳です。

女武者だけは違いました。みちのくでは、太腿に薄く墨を流す腿化粧は、俗悪なる趣味といわれて行われることなく、必ず、八寸幅にせまくし、長さ七尺五寸のふんどしを締めるのが定法になっていました。男女の差こそあれ、旧海軍兵学校生徒が水泳訓練中に用いるふんどしと同様のものを、数百年も以前に、東北地方の可憐な女武者達によって愛用されていた事実こそ、考えて見るほどに愉快になって参ります。

現代のようにパンティ類の無かった時代ですから、思う存分武闘するための下ばきは、それ以外には考えられなかったのです。組打

ちになっても力一杯働けます。そして首かかれた遺体を改められても、見苦しい様を現わすことはありません。

愛娘が出陣する時には、母の丹精こめたふんどしが、門出の贈り物として、授けられる風習でした。城主の奥方や腰元、侍大将夫人に雑兵の娘、身分や年令により異ってはいても、色とりどりのふんどしを締めた女武者達が、いさぎよく戦い、かつ散って行ったのです。

物こそ言わねど、見事な首化粧によって生きるが如き朱唇をはいた、晒し台のふじの方達の生首に見とれていた群集は、首切り落されて横たわった白磁の肌の豊かな腰部が、きっちり細身のふんどしに、なまめかしく締められていた肢体を頭に描き直して、えも言われぬ感慨にふけり、どよめきの波が人々の間に伝って行きました。

(二)

さて、お話しを楯山に移しましょう。お雪が大釜の湯加減を試みしたのは、飲料用ではなく首化粧に使う白湯です。最初に説明しましたが、太郎田附近に対峙した両軍は、大規模な戦いこそなくとも、絶えず小競り合い

が続く、その都度、幾人かの味方勢が失われると同時に、戦果のしるしとして敵方の首級が持ち込まれました。

東北の武人らしく、長い間ねばり抜いて戦い通した両軍には、おびただしい犠牲者が出て、ようやく戦士にも不足を来たし、最近では女人の戦死者も多くなってきました。

馬鞍に吊し下げられたのや、双手に抱えられたもの、中には槍先に貫かれたものもありましたが、申し合せたようにすさまじい形相の上に泥や砂にまみれている生首ばかりで、組打ちは水田の中や川原の砂地でも行われたことを物語っているようでした。

お雪は、小国勢の陣中であって、戦果のしるしとして持ち帰られる首級を、首実検に供するため、きれいに洗い清め化粧をほどこす役目を受持つ、化粧のものと称する従軍女性の一人でした。味方は勿論、お雪の名は、近りに知られていました。首化粧に関して、第一級の技術を持っていたのに相違ありません。

いくさが始まりますと、あらゆる武装兵力が動員されるのでしたが、女子の従軍者も少くはなかったのです。手元にある郷土古軍記には、炊事や下働きの雑用などをする婦人の

名が出て参ります。陣地戦になって戦いが長期にわたりますと、彼女達は滞陣中の将士をなぐさめる奉仕者になる場合も多かったようです。

化粧のものは別でした。女ながら武芸に秀いでた者が選ばれ、決して気持ちの良からうはずのない仕事なので、胆力も坐っていて、お化粧に関する高度の技術者であることも兼ねて要求されていました。

小国郡日山郷土の娘お雪は、愛らしい顔だちと雪国育ちにふさわしい餅肌の所有者で、誰からも愛される、魅力にあふれていました。が、深山で鍛えた軽やかな身のこなしと小太刀とやわらをよくする、戦国の乙女でもありました。

さて、楯山に近づく馬蹄の響きが大きくなり、一団の武者達が柵に入ってきました。三つのしるしがお雪のところまで運ばれます。一個は長い髪で、それと分る婦人の生首ですが、泥と黒ずんだ血にまみれ、容貌も定かではありません。

野戦陣地における首化粧の順序は、こうでした。奇ク誌上で、生首ファン黒田さんの記述を、しばしば拝見していますが、私の集めたその方面の古文書の内容とは、多少食い違

っている点も見られます。要は首実検に際し見苦しくないよう、又、武人の最期を飾るにふさわしく、洗いきよめて軽い化粧をほどこすことなのです。

まず、持ち帰えられた首級は洗い台に置かれます。洗い台について一寸説明を致しますと、手前の反対側に僅かばかり傾斜している三尺に四尺ほどの部厚い杉板で、高さ二尺程度の頑丈な脚がついています。水はけをよくするために、敢えてかたむかせた廻板に、足が生えているとの例えが、ぴったりしています。廻板と交っている点は、真中辺に直径一センチ位の三つの穴があって、上面に出る部分の長さが三寸以内に定められて取りはずしの出来る竹串が、差し込まれる仕掛けになっています。これは、首級を洗ったり化粧する場合、切口を竹串に刺して動かぬよう固定するのに必要なのです。

化粧のものには、介ぞいのものと称する助手がおりました。洗い台の竹串の据え置かれた生首は、介ぞいのものが髪にお湯をやってこびり付いている物を洗っているうちに、化粧のものはていねいに首級の汚れをふきながらまぶたをとじ、ゆがんでいる顔と口元を直します。

お湯は人肌位が適温とされました。それより高すぎますと顔の変形する恐れがあり、低温では附着物が取れにくいからです。又、首級には敬意を表して丁重にもてなし、器物を洗う如きぞんざいな取扱い方は、決して許されませんでした。

最近号の奇クで読みましたが、大根のようにごしごし洗い、口元に水を注いだりすることとは礼を失するものはなだしく、到底考えられません。竹串に刺されている切口の部分に湯水を加えるのや、洗うこともなく、首実検の際にも切断面を誇示するのは、首級をないがしろにする行為として、武人のなすべきことではなかったようです。名ある武士には、あごから下の方を白布にて襲い、見苦しき風を見せずして、首実検に供した例が残っております。

介ぞいのものが髪をゆすいで水気を去り、くしけずっているうちに、洗顔された生首はマッサージによって、暖められた後に、うす化粧がほどこされます。僕は、お化粧に関する知識を持っていませんが、化粧材料としては、当時の精白した穀粉や雨岩と称する水成岩をくだいた白い粉に、赤銅色を表わす“この”がございました。

階級や男女別によって、まゆ毛を描くことやアイシャドウ式の化粧法も、ありました。多種類の複雑なものではなく、菜種油などに浸した染料だったようです。くまどりを作って荒々しさを強調するのに、油煙と植物性油脂をまぜ合せたのを用いて、役にも立たぬ混合率を変えて秘伝としたらしいですが、要は大した化粧材ではなかったのです。

口紅だけは、例外でした。創意と研究がこらされていきました。古来から、自然の草花を原料にして造り上げられた我が国の口紅は、世界に誇り得る逸品を数多く生んでいるのですが、お雪の編み出した口紅は、みちのくの高原に咲く紅花から創られたもので、当時の最高級品であったものを、更に改良精製した口紅だったそうです。

素人の僕には、製造工程など全く分りませんが、温泉旅館の女あるじから、現存している紅花製口紅を見せてもらいましたところ、成程とうなずかれるものがあります。生首のかたちによって、種々濃淡の度を変えながら朱唇に合せ、ほほ紅にも、使われたのです。『於雪は、紅花流のよそおいを、よくし』と記されてあるのは、首化粧にも、独自の流儀のあったことを推定させます。

楯山の柵に運ばれた三個の首級のうち、最初に化粧されましたのは年配者らしい雑兵のものでした。お湯を掛けて、髪をすすぎ洗顔が終りますと、介ぞいのものはすいた髪が洗い台に触れないよう、元結で軽く結びます。主役である化粧のものは、顔のゆがみを直しますとすぐ化粧に掛ります。淡い「この」を塗り、下ごしらえをやって乾くのを待ち、まゆ毛を書いて紅をはたきます。首すじにまで塗ったと言われています。くまどりは最後に描くのです。軽い化粧ですが生首の主にふさわしく、城主や部将は威厳を保ち、侍大將や名ある武士はそれらしく、雑兵共は如何にも精悍な兵らしく作るのがこつになっていました。

最初のものは簡単に済みました。化粧が終りますと、介ぞいのものは元結を外して髪をさんばらに返します。化粧首の髪はゆわないのが普通で、婦人といえども例外はありませんでした。又、化粧をほどこされた女武者の数尺にも及ぶ黒髪を乱れるままにひるがえした生首は、哀愁のうちにもえもいわれぬ色香がただよっているものです。討たれる女性側でも、晒し台に集まるおのこ達へ、これ見よがしにほのかなお色気を表したくて、あえて

結髪を望まなかったと伝えられております。

同じような順序で次のも終わりますと、最後に婦人の生首が洗い台に据えられました。二十才台の若い女人でした。しかるべき武士の妻女とも察せられました。お雪は、無情な戦国の習いとは申せ、何時の日にか自分もかかる運命になるやも計り知れないものをと、人ごとならず不びんに思われて、女武者には特に念入りな化粧をほどこすのが常でした。彼女の紅花よそおいの技術を、十二分に発揮出来るせいもあります。介ぞいのお静は、元結でたばねた長い髪の余りを注意深く両手に持って、忙がしく動くお雪の入神の手先を見詰めていました。

肌がなめらかで、おしろいが良くのびました。幾度も白粉がすりこまれてほほ紅がたたかれ、形のとのった唇に真赤な紅花の口紅が塗られますと、

「ほほ、花嫁御寮じゃのう」

のぞきこんだ武者の一人が嘆声をあげました。ゆがんだ顔は直されていて、長いまつ毛のある瞼こそ閉じていますが、如何にも人妻らしいしっとりと落ちついた羞いを示しながらも、あふれるばかりの色香が周囲をぱっと明るくさせました。武者の言う通り、戦い敗

れて無念や生首とはなりましたが、お雪の化粧により、花嫁とも見違ふあでやかさで、見事にも女性としての最後を飾り得たと言えましょう。

化粧の終わった三箇の首級は白布で覆われ、この楯山陣地から本城に送られて首実検を受け、城下の河原に晒されるのですが、さぞや群集の目を楽しませ、男達の胸をも沸きさわがせることでございました。お雪の神技とも称すべき手並みに、人々はあらためて感嘆の声を惜しまないのです。

(三)

舞台は、太郎田戦線から約五里も清水側に入った瀬見の湯に移ります。現在の、閑静な山峡の湯どころとして知られている山形県瀬見温泉です。戦いが休戦特態になり、お雪とお静が、楯山の柵から姿を消して間もなくのことでした。旧暦三月の晴れたのどかな昼過ぎ、何時もなら戦塵を洗い負傷をいやすもののふ達が目に付くはずの瀬見の湯には、探そうにも人影が見当りません。

いいえ、うららかな小国川の清流が軒下を通る傾いたわらぶき屋には、満開の桜がほころびかけ、板囲いの中からは、和らいだ湯の

煙りと共にみやこざれ歌を口ずさむ女性の鼻歌が聞え、少しく離れた炊事溜りに緊張した別の顔が現われました。お雪なのです。

何故、瀬見の湯に彼女が出現したのでしょう。首化粧上手のものとして、お雪の名は敵清水勢のうちでも誰一人知らぬ者はおりませんでした。お雪なる名手に、最後の生首を洗わせれば武人の本望ぞよと、語り合うのも多かったと言いますが、実際に彼女の顔を見た者はおりませんので、化粧の術に精通している相当の年配者であろうと信じられていたのです。

お雪は、同僚のお静と一しょに深山で身を試みた「出羽らっぱ」でもあり、ひそかに野頭山の峻険を越えては、敵の背後深い瀬見の湯で、湯女として働きながら情報探知に活躍していたのです。

いで湯に浸っている女性は、本合海城主清水十左衛門の奥で松の方と言い、当年二十八才の女盛り。夫に代って太郎田の最前線で指揮を取り、既に首級二十四をあげて、首供養まで務めた清水勢のエースでした。自慢の長刀で相手を倒し、幾十度か、組伏せられた武者達を重量感あふれる臀部で圧倒しつつ、首すじに刃を当てては凱歌をあげた豪の者なのです。

です。

戦いが小康を保っているのを利用して、四人の腰元と瀬見の湯に、憩いを楽しんでいました。城主の奥方に敬意を表してか、むつきおのこ共も、しばし温泉から姿を消しており、北国の春を賞しながら人影絶えた湯槽に身を沈めますと、おのずから花やいだ女人にも返って、鼻歌の一つも出る上きげんになった次第でした。

戦闘は終わっていません。戦線遥かな後方とは申せ不意の敵襲でもあったらとの懸念は、松の方にとって、何の心配もいらぬことなのです。野頭山を越える業は、常人の考えも及ばぬことで、例え小数者の奇襲があっても得意の長刀を振うだけで充分でしょう。腰元達は、夕餉の菜にする早わらびを求めに近くの高原へ出掛けたばかりです。案内人はお雪同様、湯女に変じたお静とは露知らずに。余りにもものどかな春の昼下りでした。

ですが、松の方も、たるみっ放しでいた訳ではありません。さすがは暦戦の女勇者。手の届く乱れかごには、素早く締める下帯と、自慢の陣太刀を忍ばせてあったのです。

「ああ、いい気分でありましたぞよ。妾も上ることになりました。誰かある。浴衣を取っ

てたもれ」

湯屋の中から命令口調の声が掛かりました。お雪は、応諾の代りに高らかに名乗りをあげました。

「あいや、本合海城の松の方と見受けたり。

我れは小国日山郷の雪と申す者。尋常に勝負召されよ。頃は桜花の乱れ時、単衣は不粹とも覚えれば、裸かにて出合い候え。我れも同じくまとわずに見参せん。いざ」

と言わざ、変装の湯女衣装をかなぐり捨てました。

女ばかりの敵では、情報を得る術がありません。さりながら、松の方のために、お雪の同郷の者は幾人か苦杯をなめています。ここで討ち果せば、これからも出るであろう首取られる武者を救うことができるのです。お雪は、相手の武勇振りを聞いていますが、腰元達を遠ざけての一对一の格闘なら、ある種の成算がありました。但し入浴中のやみ討ちでは卑怯のそしりは免れません。松の方が入浴直後の裸か姿なら、こちらと同じ条件で、けなげにも衣類を脱したのでした。

身にまとうものは、髪を押さえている鉢巻の外は紅花をうすく染め抜いた出陣中に使う女ふんどし一本。花恥かしい乙女の、こんも

りとして形良い双の乳房が緊張で張り出し、かわいらしいお尻をピンクに似た紅花色ふんどしが、柔肌へ食い込まんばかりにきりりと締められていて、固い後の結び目が、雪肌と称された牡鹿を思わせる肢体に余りにも似つかわしくて、愛らしいリボンの役目を果しているようでした。右手には尺二寸の小太刀を持ち、六寸程の短刀を、固く回したふんどしにたばさんでいます。松の方を待ち受け屋外の庭に走り出ますと、山影に咲く桜木が道具として色どり、小太刀持つ若い女性のふんどし姿は、例えようのない何ものかを醸し出し、一幅の名画ともなり得る風情でした。

松の方は、上きげんで山のいで湯を楽しんでいたのに突然の名乗りを受けて、おのれの油断を悔い啞然たる思いでしたが、たかが小娘如きが尋常に勝負とはおこがましい限り、いでや、刀の錆にと、乱れかごに手をやりました。素早く紫のふんどしを締め上げ、せわし気に大刀を握んで、戸外に飛び出したのです。

湯上りで、桜色に上気した体を拭きもせずに着した紫の下帯は、これも又、まことに女丈夫らしい貫録を示していました。お雪とは対象的に何も彼も大柄で、現代人好みの偉大

なるグラマーなのですが、合戦を経た古強者だけに無駄な脂肪を持たない体は、女盛りのあでやかさをむんむんと振りまいていて、豊満さの形容が、誰よりもびったりと評して良く、盛り上る成熟し切った腰部を、濃い紫で二つに分けられる悩ましさは、男ならずとも目まいを起しそうな妖気すら、ただよわせている風でした。

僕は日本古来からの、男性専用下着と称されているふんどしこそは、元来は女性の裸体美を強調するために存在していたのを、これ以上魅力あらしめては野郎共の脳中に日夜住みついて、仕事も碌に出来なくなるので、涙を飲み横取りしたのではないだろうかとの推理さえ試みる必要があります。とにかく、ぶるんぶるんとキングサイズの、バストにおヒップをふるわせた松の方は、お雪の待っている庭先へと走り出しました。

黒髪を春風になぶらせて、あでやかなふんどし姿の二人の女性が、敵意をたぎらせつつ大刀を取り、黙ってにらみ合いました。のどかな山に湯煙りがものうげに立ち昇り、谷間の鶯が我が世の春に合唱しています。忽ちこのあたりが修羅場と化するのも知らぬ氣に。三尺五寸もありましょうか。大の男すら持

て余す陣太刀を振りかざし、松の方は相手を目指しましたが、身軽なお雪は一間もとび走って庭石に裸身を移しました。意外な敏捷さについて行けず、暖風を流した磨擦音だけを残す空しさ。怒りを覚えた松の方は、しゃに無二斬り掛かります。その都度、木から木へとび移った山中での鍛練が物を言い、お雪は軽やかに移動し続けます。

具足を付けていたら、かくも素早い動作は出来なかったかも知れません。考え抜いた作戦の第一項が成功したようです。そして、お雪の小刀が春の陽光にきらめく度に、相手の小手や肩先に浅手を負わせるらしく、松の方の豊満な体からは、鮮血がほとぼしり始めました。

たかが小娘と侮ってはいたものの、歴戦の松の方でも、いまだかつてこのような戦い振りを見せた敵を経験したことはありません。軽傷ながら数箇所も斬られています。いらだち焦って振る太刀風と共に、迫力のある双隆と悩殺の円形こそ少しも崩れていませんでしたが、次第に目がかすみ息使いも荒らくなつて参りました。

このままでは、つかれ果てた末に討ち取られてしまいます。そう直感するや否や、大刀

を捨てざま、

「勝負の長引き候えば、いでや、存分に組まん」

と、叫びました。

お雪は直ぐに応じました。そして、二つの肉塊ががっぷりと組まれました。敷きしめられた苔むす庭園で、互いに組み伏せようと秘術を尽して、上になり下になってのもみ合うさまは、若し傍観者があるとしても、夢の精達が最も魅力を見せるふんどし姿に化身して黒髪を流しながら、桃源境でのたわむれとして考えられないでしょう。しかし老桜樹は知っていました。食うか食われるか、いや、生首を賭しての、女武者同志の死闘なのですから。

やがて、大勢は定まったようです。悲しげな叫びが洩れて来ました。手傷を負い、つかれ切ってはいたものの、組打ちともなると矢張り松の方が一枚だけ役者が上でした。お雪の両腕は、頑健な松の方の脚力に押えられてせい一杯左右に伸ばされました。すんなりとくびれた胴体の上には、勝ち誇った偉大な重量ががっしりと重みを加えて動かばこそ。こもりとした乳房は、押しつぶされるばかりに没して見えません。汗にまみれた濃紫のふ

んどしが、お雪の苦痛をこらえる顔面に迫る思いです。

「かわいい顔立ちの小娘と侮ったのが妾の不覚じゃったが、本合海城の松と知って勝負を挑んで来やったのは、天晴れな女武者振りぞえ。首取らずに放してやりたいが、そなたも侍の娘。痛い目を見せずに首落し、たんと化粧してやる所存につき覚悟しやれや」

松の方はお雪の首すじに散る髪を払って、首かき切る用意をしましたが、はっと気が付きました。

浴室からは、大刀しか持ち出しておらず、それも組打ちを始める際に捨ててしまい、何時もの合戦のように、鎧通しを持っています。太刀を取っての戦いで散々ほんろうされましたが、組打ちでは苦もなく相手を捻じ伏せて見下した安心感が油断を呼びおこしたのでしょうか。お雪に当て身を食わせておく要があったのですが。

捨てた太刀を見ようとして、ひょいと後方に目をやり、両脚の力を抜いた瞬間、しだ類の苔は弾力性のあるマットにも似ていて、組打ちの場所をここに選んだのも、お雪の計算に入れておいたことでしたが、手首に力を加えて、アクロバットの如く反転しざま、彼女

はたばさんでいた短刀を抜いて、松の方の量感を誇る左乳下をタイミング良く刺していました。

形勢は正に逆転。さすがの女荒武者も致命傷に堪えかねて、しばしもみ合いはしましたが、今度はお雪が馬乗りになってしっかりと組み伏せてしまいました。何のこれしきと、幾度もはね返そうとしましたが力及ばず。松の方は、妾ともあろう者がと、名も知れぬ小娘に討たれる口惜しさに歯ぎしりしながら、次第に弱り行く視力を意識し、

「無念じゃが、これも時の運。首授けるほどに、城主の妻女にふさわしき化粧こそ、たのみますぞ」

と、すっかり観念して、まなこを閉じました。お雪は、

「何をかくそう、妾こそ、小国勢の化粧のもの、雪と申す者にございます。お方様のいまわの願い、きつと承知しました」

「おお、そなたが紅花の名手、お雪殿か。武勇の数々、さもあらん。しかと、よろしく」

お雪の手によって紅花化粧をほどこされた己の生首が、晒し台にのぼり荒武者達に注目されるのを想起してか、松の方は顔を紅潮させました。只今までの戦い振りから一転し

て、そのような女人の色っぽさにお雪の方でたじろぐ程でした。

豊かな髪の毛が、お雪の手に握られ、六寸の鋭利な刃が、松の方の延び切った首すじに寝かされました。

「あ、あっ、ひえーい」

如何にも清水勢最強の勇者にふさわしく、首かき切られる痛さに身をもだえさせながら我が首を渡しました。

日本の刀剣は、冠たる切れ味であることをどなたも承知しておりますが、打ちおろす大刀の場合とはかくとして、女の細首であっても、短刀や小刀で一気にかき切ることはむずかしいものです。それで、組打ちになって相手の首を落すには、二呼吸が最も良しと、教えられていました。二呼吸で一直線ではなしに、例え話としては一寸ふさわしくありませんが、庖丁で大きな西瓜を割る要領で、刃を回しながら斬り落すのです。又、右利きの場合ですとどうしても刃が左上りに向き易いもので、切断面が斜めになり、首実検の際の台上に置かれる首級が、前後左右どちらかに傾いて直視出来なくなってしまうます。次に、耳のすぐ下に刃を当てれば頭だけの生首になって、品を失った無細工なものに変わって

しまいます。乱戦中に敵を倒して首かき切る時でも、そんなことを充分考慮して、肩の真上近くの首すじに鎧通しを当て、水平に回すよう心掛けたものだと言えられています。首授ける者に対する礼儀でも、あったのでしょうか。

説明申し上げたように、いまだ呼吸の存する己が首を、瞬時ではなく、二呼吸でかき落される身になれば、痛くならうはずがありません。後世になると変わったようですが、当時の風潮としては、女武者ほど大げさな声をあげるのが最期を飾るにふさわしいとされ、組伏せた、多分は異性の心を十二分にそそり沸き立たせて、色香をまき散らしながら首授けたものよとも、語りつがれているのです。

切口からは、噴水のように朱が吹き出して池を染めました。しばらくはそのままの姿勢で息をついていましたが、やおら立ち上り、重い松の方の生首を手にしたお雪は、そばの湧き水で、髪の毛の生え際までも真赤に染められた首級を洗い始めました。

首を失った裸身は、緑の苔地に、大の字になって横たわっていましたが、しっかりと締めこまれている細身の紫色ふんどしだけは飛び散る鮮血のあとも見せず、いさぎ良く散っ

た女武者の身だしなみを保っている様子が、成熟し切った女体を誇示しているだけにいちまつの哀れすら覚えるのでした。

洗い終った松の方の首は、生首となっても男心をたぎらすに足るあでやかで、瞼を閉じ唇を半開きにしたまま、勝利の感激に酔う紅花ふんどしの乙女の手にかかげられました。が、遠見すればブロンズの女体像が、今を盛りに咲き狂う百花の下に微動だもせず直立している風情にも眺められ、正に情緒画の趣きと思われる位でした。

やがて、早わらびを採って帰る若い腰元達の、はずんだ歌声が聞えて参りました。深い眠りを誘う程のひなびた音律でしたが、いで湯のある庭面の光景が目に入ると同時に、悲劇は繰り返されました。女主人が討たれて生首となり、あられもないふんどしだけの裸形を晒しているのを発見して、何でおめおめ生き逃れることが出来ましょう。又、自分達だけが着衣のまま後を追うことは許されるはずがありません。

一斉に腰元達は、最後の肌着までかなぐり捨てました。雪国女性の玉の肌は、しっとりとした湿りと香気を、放つと言われていますが、いとしい思いこがした主に抱かれる多幸

をも振り切り、ここが最後までと定め、めいめいが懐剣を抜いて、お雪とお静に斬り掛かりました。

勇名近隣に響いた松の方を討ち取った程の大敵に、太刀さばきも碌に知らない彼女達が束になっても、しょせん火中に入る夏虫の運命になるのは必定なのですが、戦国の無情さは、女子と言えども例外は認められなかったのです。

お静も裸身になりました。お雪と同じくうす紅色の下帯を締めていましたが、より若いだけに、紅花の布で、分けられているお尻には、少女の面影がうかがわれる可憐さを思ばせていました。

一方、肌着まで脱した腰元達は、真紅の二布を捨てますと、申し合せたように晒のふんどしが、目にしむ白さを感じさせるのでした。湯どころへの湯治とは言え、城外に一步出れば戦場であるとの覚悟を失わなかったものと申せます。

何時敵に奇襲され組み伏せられて、生首を与えないとも限りません。武芸は出来ずとも最後をとげて体を改められる際に、腰のものだけだったと伝えられては醜名を後世にまで残してしまいます。

僕は、彼女達の用意怠りないふんどし姿であつたことに、奥ゆかしさを思わずにはいられません。まことに良き時代であつたぞよと羨望すら覚えて来るのです。

四対二で数の上では優勢ですが技倆に格段の差があります。最初にうつ伏せになったのは、お雪に肩先を切られた若い腰元でした。悲鳴が、又続きます。今度はお静の小刀が、大人しそうな小柄の腰元を倒しました。四回の悲しげな声と共に、挑戦した全員が手傷を負って倒れました。晒木綿六尺一本だけの勇ましいスタイルで、空中を泳ぐ女蝶とも見まがう美しさで短剣をかざしながら、裸身をひるがえしはしましたが、ただそれだけのことで、白い肉塊群は数度の跳躍を見せたまま、もろくも崩れてしまったのです。

悲しい叫びは同数だけ繰り返さなければなりません。武人の情けとして、死に首をかいでは戦死者に恥辱を与えることになります。その辺を心得えたお雪達は、決してこと切れまでの傷を加えてはいなかったのです。

「うーん、きえーい」

「あ、あっ」

「いたい、うっ」

「む、むねーん、あーっ」

庭岩の揺れる程の大仰な絶叫が起きるたびに、腰元の一人一人が女主人に殉じて生首を授けました。首を失った四箇の胴体からは、噴水よりも高く、血潮を吹き続けていました。が、やがてうそのような静けさがあたりを包んで参りました。白いうなじは勿論、ひたいまですおうに染めた新しいしるしは、きれいに洗われて松の方の首級と一しよに、桜樹の根本にある大岩に置かれました。

二百坪ばかりの古式庭園に、首のない裸身が、思い思いの恰好で横たわっていました。ある者は松の方同様大の字になり、又は昼寝姿でうずくまっていたり、豊かな腰部を盛り上げたままで伏し、己の首を探している態のものもありました。

一きわ哀れをもよおしましたのは最後に首切られたお秀と呼ばれる腰元で、洗いさらしたふんどしの一端に、「忠より」と黒糸の縫い付けられていたのは、武運を祈った許婚者が、自分の締めていた下帯を贈ったものと思われ、一抹の涙が注がれたのです。お秀だけは双手で虚空を掴むのを止め、贈られたであろう下帯をしっかりと握っていました。

夕闇が迫って参りました。松の方をはじめ女主従五箇の戦い敗れた裸身が、微動だもせ

ずに投げ出され、紫と白の固く締めたふんどしだけが夜光虫で照らされた如く浮き上って映じ、妖しい情感をそそらずにおきませんでした。夜風がひとしきり桜花を散らせ、無心の花びらはゆっくり舞いながら春の終りを告げている風情でした。

その夜半、野頭山の峻険を越えるお雪達は秘術を尽して首化粧をほどくべく、松の方だけの首級を背負い、楯山の柵に急いだのです。

(四)

楯山の陣地には久し振りで勝ちどきの声が響き渡りました。名だたる敵方の勇婦、松の方を討ち取ったお雪の手柄は、最高の殊勲に価するものとして絶讃されました。大釜の湯を何度も汲み湧かし、念入りな手数を掛けて松の方の化粧首が完成しました。本城に持ち帰るまでの間、七尺の台に晒された生首はすっかり化粧がほどかれて、清水城主の室らしく、氣品を示しているうちにも、男心をうずかせずにはおかぬ女盛りの色香さをむんむんと発しているのです。

勇ましい女武者だった彼女は、晒し台の生首になって、女の特権に初めて満足している

ようでした。お雪は立派に約束を果たしたと言ふべきでしょう。

「ほほう」

柵にたむろする髯もじゃ共、すべての男達は魂を抜かれた如く晒し台に吸い寄せられ、動こうともせずに仰視し続けるのでした。

ところが、世は何たる皮肉な劇を演ずるものでしょう。飽きもせず長い対峙を繰り返していた小国、清水両軍首脳部では、出羽の国村山地方に興った最上義光の勢力が日々に強大となり、触手が北上するにつれ、局地戦にこだわってはいられなくなったのです。それどころか共同して対抗する必要に迫られ、秘かに和議の成立する直前だったのです。近頃の戦線が不活潑だったのも、そう言えば思い当たる節がありました。

お雪の武功はまれに見る成果。でも、清水勢としては和議交渉の最中。しかも成立せんとしている時に城主の妻女が討たれたとあってはまさに大事件。このまま引き下るには余りにも大きな支障です。面目を失ってしまします。松の方の首級が持参され、お雪のりりしい姿が、本城の控間に待たされているうちに、小国城に来ていた清水側の軍使と、当城重役の間であわただしい取り引きが行われて

いました。和議は成りました。但し、松の方を討ったお雪の首級は即刻渡すべきことと決まったのです。

味方のすべての男女が、彼女を惜しみました。城中では、はしため下僕に致るまで涙を流しました。誰からも愛されていたに違いありません。お雪は城主の奥方から、まれなる武勇を称えられましたが、又、今宵中に首打たれる旨の申し渡しを受けました。

「お雪や。この度の戦功、男子も及ばぬ程に天晴れでありましたぞ。さりながら、よんどころなき事情により、何の報いることも出来ず、そなたの首引き渡す破目に至りしは、よくよく武運に恵まれぬこと。妾も腸の千切れる思いなれども、これも乱世の定め。厚く葬むり、そなたの跡を絶やさぬ所存なれば、城兵に代って立派に最後を飾ってたもれ」

熱涙と共に、最期どころにて着する白絹の単衣と、奥方手作りの晒木綿ふんどしが渡されました。お雪もはらはらと涙を散らし、「私如きにかくも御丁重な言葉を賜り、ご厚恩には感謝あるのみでございます。お家のために命を捨てるのは武士にも勝る栄与こそあれ、何の異存がございましょう。願わくば、私も武具取る身のはしくれ。存分にはらわた

かき切って刃に伏しとう存じます」

と、引き下りました。

生死を共にし、姉とも慕うお雪を失って生甲斐のあらうはずがない。一しよに、と、お静は泣きじゃくりましたが、双方没しては、化粧の秘術が消えてしまふとなだめすかし、一刻ほどの間に、お雪のもつ紅化粧の奥儀を余すところなく、伝授されたのでした。

お雪が、生害の地として選んだのは楯山の柵でした。十三夜の月が山際に顔を現わしてから、もうかなりの時刻が過ぎ去ったようです。澄んだ青白い月光が、新緑に包まれた小国盆地の和らいだ春景を浮きぼりにしながら、限なく照らしていました。太平の頃なれば、夜桜を賞する人々で素朴な酒盛り歌でも聞えるはずなのですが、楯山の柵はしわぶきすら無く、静まり返っていました。

薪のはぜる音だけが響きます。萌黄から新緑に移ろうとしている若草の上に、夜目にもくっきり映ずる二畳ほどの白布が、手頃な間隔に植えられている桜樹の中央に敷かれ、十数個のかがり火が燃え続けていました。はぜる音は、かがり火の薪なのです。

男も女も遠く離れた物影から白布の周囲を取りまいて、お雪の最期を見守る風に小集団

を作つてうづくまり、白布のそばに置かれた床几には柵の部将や清水勢の検視人が坐し、介錯の者と世話人達も所定の位置についたようです。

少しくはなれた梅の咲いている樹の根元には、青ざめた顔のお静が黙念として釜の湯加減を見詰めていました。紅化粧の秘伝を会得した、彼女の初めての首化粧を試みる相手が、人もあらうに姉とも慕うお雪なのですから、冷静に保っていること自体が不思議な位でございます。

屯所の方からお雪が現われました。案内者の後についての落ちついた足取りでしたが、よく見ると歩行に高ぶりを示しているようでした。奥方より拝領の小袖をまとい、自慢の黒髪は長い元結で、一箇所を頭上高く結ばれて背に流していました。

うつむいて歩いていましたが、最期どころの白布の方にちらりと目をやり、再び視線を足元に落して歩き続けます。中程の位置まで歩を進めたころ、馳け寄ったお静がしがみつかれました。双方無言、しばしの時刻が過ぎ去りました。言葉はなくともすべてが胸の動悸の中に入りこんで通ずるのです。ややあつてお雪は涙をふるい、

「かくては時刻に遅れるばかり。お静や、先程授けた紅花化粧の秘術を尽し、私の首化粧を、しかと頼みますぞ」

「はい」

二人の胸中を察してか、闇に光る人々の目が一斉に伏せられました。こぎざみに歩を運んだお雪は、白布の中央よりやや後気味のところに坐りました。すべての準備は出来ていて型通りの言い渡しに済みますと、お雪は目を伏せながらも、

「妾如きに腹召されよとおぼしめし、有難度くお受け致します。か弱き女人の身でもあれば見苦しき態あるやも計り知りませぬが、武勇高き侍にも劣らず、存分にはらわた現わす程に掻き切る所存でございます故、会図あるまでは、何とぞ太刀落さざるようお願い致します」

と、悪びれずに言上しました。

前にも述べましたが、切腹に関する一応の諸式が整いましたのはずっと後世になってからのことで、当時みちのくのものふ達に喧伝されていた腹を切る作法は、はらわたを十二分に露出するまでに切り、切る型などについては定まったものがなかったのです。いまわの絶叫が大なるほど壮絶な最期ぞよと

も伝えられ、落城に際しての女人腹切りも、組み伏せられて、首与える風に浅く刃を廻す場合は別として、誇大に言いふらされたにせよ、何れも柔らかな白磁の肌を存分にかさばき、仰山な音声を発して後に首筋へ大刀や長刀を受け、天晴れ女丈夫よと嘆じさせたものです。己の肉体と色香を、誇らしげにも表現し得る女人の切腹こそは、戦うみちのくの女性達にとって、異性の胸底を最大限にゆさぶり得るものと信じられていました。

お雪は、並いる諸士に軽く会釈してから、白布の中央よりやや後方に坐しました。かがり火が一きわ勢いを盛り返して、お雪とかたずを飲む将兵を浮き彫りにしました。神々しいばかりに美しい横顔を見せている彼女も、汚れない乙女の腹部を懸命に切り終って一陣の太刀風がきらめけば、瞬時にして、黒髪にからんだ痛ましい生首が飛び、血潮を吹き安定を失った裸身の胴体は、前のめりに倒れて白布を染め横たわってしまうのです。人々はこんな情景を頭に描いてか、まばたきすら止めたようです。

万騎の原軍記には「清らかなもろはだを脱し、はらわた現わるるまでに腹切り、首打たれたり。武人も及ばぬ最後ぞよと、なみいる

人々皆袖をしぼりけり」と、簡単に記されていますが、僕の想像では、衆人環視の中に恥じらいを見せて上半身をさらしながら、存分に刃を柔肌に裂き入れ回したものと思われまゝ。女性の切腹は、えも言われぬ哀愁となまめかしさをまき散らすものですが、常人の堪えられぬ程にむずかしいもので、脂肪の豊かな腹部を割るのには、中腰の反り身の姿勢を保ち下腹を張り出すようにしなければ切れるものではありません。

細帯をゆるめ、単衣を思い切り下にずらして充分腹部を露出することになりますと、二布では見苦しい体を見せることになり、別の方に気が取られていさぎよく最期を飾るなどは、考えられもしません。勿論、緋のもの等は着用せず、奥方より拝領の白ふんどしだけを、腹切る際に切り口を圧迫せぬよう腰下に固く食い込ませていたに相違ありません。

介錯の者は、幾度か太刀をおろそうとしてお雪に制されました。左腹に、立てられた刃は、苦痛にゆがみ玉の汗を流すお雪渾身の力をもってしても、一気に引き廻すことは困難で、じりじりと右に移動して行きます。臍の真下を切り裂くころ、

「ああ、うーん」

彼女の悲痛な叫びと共に上半身が大きく揺れ、桜色に上気した形良い乳房がせつなく喘ぐのすら、誰もが目を伏せたまま直視しない風でした。思い通りに、はらわたを出すまでには苦しい絶叫が幾度か発せられました。

己れの肌を切り終り、腹切り刀を右膝元に置いた彼女が背後に会釈すると同時に、細く延びた首すじを指して陣太刀が打ちおろされ、かっつと、頸骨を両断する音が沈んでひびき、若い女人の頭部は差しのべた位置から、ゆっくり宙を舞って二間も前方に転がり、長いさんばらの黒髪が、うなじまで朱に染めたすざましい生首を中心にして大きな輪を描きました。

細帯の解かれた上衣は、刃を受けようとして腰高になった際地表にずれ落ちて、首を失った裸身は、肩上の切断面から虹の血潮を吹き上げながらゆっくり傾きました。やや横倒し気味になり、右腕を伸ばし、娘盛りの豊かな臀部をちょこなんと盛り上らせていましたが、それを二つに分ける如くに、きっちり締められている純白のふんどしが、将兵の感動を深めている風情とも思われました。かがり火の照射に、春の終りを告げる落花が中空から降って参りますが、誰も動かず、誰も声せ

ず、立ちすくみ続けるのでした。

瀬見の湯、老桜樹下の激斗で、堂々敵の強者松の方を打ち取ったお雪は、戦国の習いとは申せ、花のつぼみのまま同じ様にふんどし姿で最期を遂げ、己の生首を渡すことになったのです。ほどなくお静の手によって、紅花の首化粧がほどこされるべく洗い台に据えられなければなりません。紅花のよそおいが始まるのです。

(後記)

昭和四十二年九月、一面のすすきに覆われていて、荒れ果てた草原に化している、山形県最上町赤倉温泉附近の万騎の原で、開墾に鉤を振るっていた一農夫が、土中に埋もれている小さな瓶を、発見しました。素焼きの瓶の外側には、於雪と彫られている文字が見られ、中には、女性と思われる一箇の頭蓋骨だけが、入っていました。

これを聞いた郷土史研究グループは、若しやお雪の首級ではあるまいか、との期待をいだき、早速、東北大の権威者に、鑑定を依頼しました。その結果、発掘された土瓶は、凡そ四百年程度以前のもものと推定され、頭蓋骨の主は、二十才前後の若い女性で、鋭利な刃

物によって、頸骨が切断されていることと、紅花染料とおぼしきものが、多量に検出されたとのことでした。

眩しいばかりの化粧をなし、清水勢に持ち去られたお雪の生首は、三日後に返還されたとありますが、この地へ丁重に葬られたものと考えても、間違いなさそうです。

早速、慰霊の祭典が行われ、地元の温泉協会では、お雪を称えて、遺跡の一つにすべく記念碑の設立が、急がれています。桜花の散り際と同じように、いさぎよく果てた戦国女性お雪は、以って冥すべきでしょう。

お雪の生んだ日山郷は、赤倉温泉至近の地にある日山温泉になっています。古来からの伝承として、旧暦三月の中ごろ、部落の乙女達が、白や朱の六尺褌を締めて、温泉に浸たるしきたりがあり、週刊誌の注目するところとなって、ネタ写真にとカメラマン達の殺到したことがあります。僕は、これもお雪と何らかの関連がありそうに考えられてなりません。女性ふんどしファンには、こたえられない風情でございましょう。





「新分野開拓」に望む

—文献紹介なども入れて—

江 川 詩 二

グラビヤ及び口絵が廃止になって、「読む雑誌」の聲が、耳にされて久くし、その間、

花と蛇の作者、団鬼六氏やカメラ・ハントの辻村隆氏のハッスルぶりなど、編集部、寄稿家、投稿者等の一心同体の努力は、ようやくこの五月号あたりから「読みごたえある奇譚クラブ」の線に近づいた。そこから特に新分野開拓の要望が、一層クローズアップされてきたわけだろう。もともと本誌は、S並にMが中心性格であり、そこからフェチ、切腹、禪美、女相撲、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、風俗文献紹介、同性愛、アブラブ、浣腸、神酒趣味などの分野が連帯開拓されてきたのだが、ここに『実話と体験』原稿募集が発表されてから、大きく飛躍脱皮

しようと、火ぶたを切った、という感を受ける。

では具体的に我が奇譚クラブはいったいどのような「内容充実」が理想の方向なのであろうか。以下、読者の一人として文献紹介なども取り入れて、私なりの「新分野開拓」論を述べてみたいと思う。

本誌、四月号の「性風俗資料入門」中に、「犯罪科学」についてふれられているが、この稿によれば「学術と猟奇趣味の握手成る」とあり、「人間発達史と社会文明史の背景に巣喰う、エロチシズムとグロテシズムの探求。それは正しく赤裸々とした人間の研究」と、その性格を紹介している。猟奇趣味を味付けし

た所に、またバタ臭さが当時の読者を完全に魅了した。現在の奇譚クラブの性格に、かつての犯罪科学の特殊性を新しい角度で、再評価、ミックスさせればそのまま、「実話と体験」の内容方向が暗示されるものがあると思う。「犯罪科学」誌が単なる実話雑誌でなく、現在の視野から風俗文献誌と評価されるものがふくまれていく点に注目したい。試みとして昭和七年三月号の同誌の主な目次を見よう。

○日本文学に現われたエロチシズムの階級性・大宅壮一○性に関する南国の民謡○犬神・金城朝水○有島武郎遺骨の行方・小人行夫○糞尿の神秘・晴屋草二○ジャック・ダイヤモンド・暗殺の前夜・木村毅。

この中で「犬神」——憑物叢譚の——の記事は、本誌の実話と体験の募集、（妖怪変化が私を苦しめている）の内容にも、（私の見聞した怪奇譚或は珍妙な実話）などにもあてはまり、奇譚でもあれば、異常な世界の話でもある。

——犬神なるものが、如何なるものであるかに就いては、これから追々掲げる報告資料が自ら語るに委せる事にするが、この犬神の本源は四国であつたらしく、其処から一方では瀬戸内海を渡って山陽一帯に伝はり、更に北上して中国山脈を越して山陰の一部にまで拡がり、他方では四国に接する九州の東部へと移り、南端の種子ヶ島にもそれらしいのが報告されてゐて、——

——大正十年八月十一日の大分新聞に、次の様な「犬神騒ぎ」の実話が載せてある。大分県南郡地方の沿海部落各町村に伝へられる、犬神なる系統に属する家庭に対する世間の圧迫に至つては、時に識者の涙を吞ましむるものがある。南郡東中浦字梶寄部落では、特にこの犬神系の家庭を擯斥する風習が甚だしかった。ここに同部落の漁夫村上喜太郎の長女キヌエ（十六）という娘があつたが、彼女は数年前から発作的に精神異状を呈する癖があつた。そのキヌエが去る七月（大正十年）二十三日の夜、突然寝巻姿のまま一目散に戸外へかけ出して、自宅から数町をはなれる永谷

源十方（十）の軒の下に行き、其処にバツタリ倒れて人事不省に陥つたのである。喜太郎及び妻ヤスは直に娘の跡を追かけて行つたが、この有様を見てびっくりし「これは正しく犬神の永谷源十が憑いてゐるからだ」と断定を下して「コリヤ永谷の犬神、早く娘の軀から逃げ失せぬと近所の犬を集めて噛み殺させるぞ」と大声に叫びながら、キヌエの背を激しく殴打したのである。——

この作者は、憑物について「斯様な家族のことを地方の人々は普通、物持筋と称してゐる様で、この筋——血統——の者には一種の靈物といふよりはむしろ邪靈、いわゆる『憑物』が身に着いてゐて、これは容易に離脱することなく子々孫々永久に伝はるばかりでなく、こんな家族に属する子女と結婚するとその當時者にまで憑きまゝとてくるものと信じられてゐる」。また「或は憑物なるものが、現今の科学の光に照して既に妄説に過ぎぬとすれば、何故迷信打破の見地から之を論じないかと反問するかも知れないので、その人に言つて置きたい。その点なら左程難しい御用ではない。と言ふのは少しばかりの変態心理学と医学の知識がありさへすれば、或はた易く解決の出来る仕事に違ひなからう。——吾々の抱いてゐる俗信が如何なる経路をとって發生傳播したものであるか、又、その俗信なるも

のと実生活との交渉と、そして出来得るならば、現在識者の一笑に附してかへりみない俗信が、人間の生活史上に於て如何なる役割を演じて来たかといふ事を知りたい為に、その一例として——と書いてゐる。

これらその道の研究家の人々のそれに対する考え方は、本誌の「実話と体験」募集の内容、取り上げ方にも参考にならうと、少し引用させてもらった。

ここで私の強調したいのは「単なる実話」という言葉であるが、新聞記事をそのままとか、そこに少し色を付けて、または一つの事柄を第三者から、耳にしたままといふのでなく、あくまでも個人が実際に目撃した体験した世界を、また伝説的な物なら、個人の考えも入れるという意味が必要で、二番センジュやキリヌキでなく独自の内容が、生きた文章が要望されるのである。巷間、実話物と評されるネタはおおむねは編集記者が、適当に新聞雑誌のたぐいを走りよみして、ハサミとノリで、デッチあげたものが少なくないといわれている。ホントらしいウソでなく、本誌の開拓路線の実話物は、新鮮な戦慄をもたらすものを望みたい。そして誌名通りの「奇譚」であること。「犬神」という伝説が、実生活にまで怪奇な事件をまき散らして行く。現代の秘められた倒錯した世界、新興宗教のかくれた部分、「邪教」の内部の問題もまた共通

した怪奇を提供する可能性はあると思う。

◇ (私は人間の靈魂の存在を信じている) という実話と体験募集の項をみて、私はすぐ江戸川乱歩の惜しくも中絶した「悪霊」という小説を思い浮かべた。これは昭和8年11月号より翌1月号にかけて、当時の探偵小説専門誌「新青年」に連載。本誌が採り上げる靈の境界となれば、どうしても未だ神秘の彼方にある心靈術の黒い世界にメスを入れることを期待したいのだ。

——「どうも、今度の犯罪は、この心靈研究会に、深い因縁がありそうだわい。臭い。わしにはその匂いが、プンと来るような気がする。靈魂不滅を信仰して、あの世の魂と遊んでいると、生命なんて三文の値打もなくなるんだ。ウフフフフ……、どうだい槌野君、そうじゃないか」——呼びかけられた一寸法師の槌野君は、彼の癖で、パツと赤面して、広いおでこの下から、上眼使いに一座をキョロキョロ見廻して、居たたまらない様子ををした。——「実に絶好の実験だからね。心靈学者が死ねば、すぐさま靈界通信の実験が始められるのだからね。みんな姉崎夫人のスピリットを呼び出したくてウズウズしているんじゃないかい」いつも実験の時のほかはまったく沈黙を守っている熊浦氏が、どうしてこん

なにお喋りになったのかと不思議であった。

——君は恐らく降霊会というものに出席した経験がないであろうが、それは一般に輕蔑されていいるほどつまらないものではない。暗闇の中で、幾人かの人間が死のように静まり返って、どこからともなく聞こえて来る幽冥界の声を聞く時、或いは朦朧と現われて来るエクト・プラスムのこの世のものならぬ放射光を目にする時、人々は名状しがたき歓喜を味わうのだ。如何なる科学者も、唯物論者も一度この不可思議な声を聞き、光を見たならば彼らの科学を裏切つて、冥界の信者とならないではいられぬのだ。アルフレッド・ラッセル・オレース、ウィリアム・ジェームス、ウィリアム・クルックスのような純正科学者をさえ冥界の信者たらしめた力が何であつたかを考えて見なければならぬ。奇術師的な降霊トリックの如きものと、混同してはいけない。あれは靈界交通の外道に過ぎないのだ。そんな子供だましのトリックが、トリックの専門家である探偵小説家を——コナン・ドイルを欺き得たとは考えられないではないか。

◇ (私はこんな珍奇な研究をしている)の項。実話ではないが、『小説現代』43・3月号に鬼才・野坂昭如が「女陰探求に憑れた男の荒亡悲哀な生涯——色即回歸」という小説を発表しているのだ。

——「まず、これをみてごらん」碎花老は奥の三疊間、障子の向うに毛布のようなカーテンがかけられて——大きな茶箱をひっぱり出し——もったいぶってとり出したものは、掌ほどのうす汚れた白いかたまりで、とっさにわからなかったが、よくみればまごう方なき石膏でとった女陰の形。「ほとんどは、いき当りばったり頼みこんでとらしてもらったんだが、よくごらんよ、一つ一つみんなちがってるんだから」裏をかえすと、かすれかかった墨で、年齢と体つき、女の種類、味わいが記してあつて茶箱にぎっしりと、まず二、三百もあるだろうか——つづいて「美汀包錦」これはまた美しい名前前で、いくらか見当はつくが「すなわち行儀よき開、かりそめにも肉をあらわさず、年ふれども相は一線をなし」これも極上の部類であつて、えてして醜女によくみられ、全体的にいつて美女はその女陰うらはらなる相をしめすことが多いそう。

文芸資料研究会発行の当時の好き者の間で好評であつた「変態十二史シリーズ」附録第三巻の中に昭和三年一月十九日発行の齊藤昌三著「変態蒐癖志」がある。いわゆるコレクショ・マニア列伝集というふうなもので、この序説に「意識活動の時間的連続によって起される反射運動が無我に殆んど近い形となつて頭はれる人類本能の還元作用の一つであ

る”として、蒐集癖の誘導的客体は、これを

一概に限定することは出来ないが、まず、

一、性欲的興奮から来るもの（例・責め、強姦、残虐等）

一、自己の生年に因める動物愛好から来るもの（例・鶏、寅、馬、猿、猪等）

一、特殊な環境にある動物愛好から来るもの（例・象、猫、犬、木兎等）

一、伝説的興味から来るもの（例・人魚、鯨犬、木兎等）

一、信仰的興味から来るもの（例・おみくじ御紋章のついたもの、天神、お守札等）

一、知識的興味から来るもの（例・明治文学読本、百人一首、細見物、往来物等）

一、歴史的興味から来るもの（例・宝船、瓦際物、交通券、藩札、名刺等）

一、骨董的興味から来るもの（例・鈴手拭包メタル、奇石等）

一、好奇的興味から来るもの（ボタン、クラウン、汽車弁当のかけ紙、ルーデサックの袋等）

一、投機的興味から来るもの（例・書留番号“一から千まで”）

「個人篇」の中に「猥褻袋蒐集」——故砂山岳紅氏。

紅氏。

——どんな下らぬ物でも二十、三十、やがて五十と集って来ると、コレクション趣味は大いに油が乗って来るものだ。自分の古い友人

に大蔵省の技師をしてゐた〇といふ、コンク

リート電柱の創始的、履歴を有する男があっ

た。自分のところへ、夜分などよくやって来て、ある時五、六枚のルーデサックの空袋を

与へたのが動機になって、こいつは面白い、一つこのコレクションをやってみようと言ひ

出した。それから集めた集めた。しかめつらしいお役人に似ず、家へ帰れば種別を分類し

たり、帖に貼ったりして、温厚な美女にまで手伝はすこともあった。——単なる性欲袋の

その保護袋と笑つてはいけない。こんな物にも統一的に見れば変遷もあり、進歩もあり、

社会の流行も判り、袋の一枚によって当時の世相を窺ひ知る貴重な文献ともなる。——

なおこの誌に、文芸資料研究会が発行の風俗雑誌の広告が折り込まれてある。少しは実話と体験募集に参考にもなるうと思うので次に抜書してみる。「変態資料」誌（昭和三年

新年特大号）。目次によると、玩具に顕はれた性の研究（五）・梳弄堂山人。世界変態性欲画譜（一）・加藤小夢。巴里売笑嵐繁昌記（二）・かわ

せみ。世界性的犯罪志・宮本良。「特別附録三篇」として、青春の懊悩（男色文学）・綿貫六助。或る色情狂の蒐集品・山岸鷹男（出品）。変態趣味家名簿・文芸資料研究会編。

○「変態癖志」には写真入りで「責め」の蒐集として天下に名高いとして伊藤晴雨の章

がある。

◇ ◇

奇譚クラブと「犯罪科学」をミックスしたような、それが実話と体験という新分野開拓路線のアイデアと、この稿のはじめの方に述べたが、この犯罪科学では別巻としての大冊（四百七頁）を発行している。「異状風俗資料研究号」昭和六年七月刊（武俠社）。その

内容は、無撫の園（岡田三郎助氏蔵）……原色版など口絵・写真があつて、舞踊考、服装考、建築考、肉体の近代美考、兵器考、湯殿考、便所考、芸術に現れた、風俗考、浮世絵と特殊風俗、日本古代犯罪、原始時代の性生

活、本朝変態葬礼史、社会史綺談、布哇物語服飾のグロ、無罪の宣告を受けて不服を唱へた話、変態賭博考、世界変態葬礼史、日本文

学に現れたる性欲描写、支那演劇のエロシズム、性的な娯楽舞踊、虚心慢録、一円が六

千円になる西班牙の富籤、ルンペン生活の解剖、カード・ひすとりい、媚学考、結婚奇習

行脚、ヴェーナスの神祭、ソドムの百二十日支那人心理は、賭博から、神秘の印度建築、

刺青、支那のグロテスク料理、女形の異端者者、割烹怪奇談、支那の売笑と買笑、神の娼婦。

◇ ◇

実話というと、オールドファンはすぐ戦前

発行されていた文字だけ花の地の表紙、非凡

発行されていた文字だけ花の地の表紙、非凡

発行されていた文字だけ花の地の表紙、非凡

発行されていた文字だけ花の地の表紙、非凡

発行されていた文字だけ花の地の表紙、非凡

閣から出していた「実話雑誌」を回想するだろうか。現在でもこの名称は継続されて出版されているようだが、昔のこの誌は特色ある編集で風格もあった。頁数も四百頁前後でドッシリとした物である。しかも、その当時の編集モットーは「読者の編集する雑誌」として、大衆の人気を得た。試みに昭和八年四月号をめくると、「職業婦人・恋愛市場探訪」として、半襟を穿う謎の客—女店員、アネモネの花は語る—看護婦、禁制を破った、天罰—ダンス、裏から見た、女給稼業—女給。とか、「エロ奇聞ナンセンス」。「グロ犯罪現場集」に「松沢の老婆殺し（昭和三年六月十五日）」、「矢口妻子殺し（昭和四年五月二十八日）」、「本行徳一家心中」（昭和七年七月十四日）。または「美女を呪う吸血鬼—変態性欲者の犯罪—などの読物。当時流行？のかの三原山心中物もあり「噴煙も悲し三原山・地軸を歩む処女」で本郷駒込千駄木町一四、松本太郎の娘で実践女学校専門部国文科二年生、松本貴代子と同行の死の案内者、同級生忍町富田杉太郎の娘昌子の死を「椿咲く島・常春の島大島よ、三原山の情熱の炎はどうして乙女の心を引き寄せてその青春を焼いたのであろう。謎を秘めた御神火は日となく夜となく燃えつづけている」と心中讃歌で結んでいる。

実話と体験の募集の中に「自殺未遂者の告

白」とか「心中未遂者の手記」などの分野も展開させたい。人間にとって最もショックな世界でもあるからだ。

◇ ◇

昭和十年当時、ニュース・よみもの・演芸・映画・文芸・スポーツ・行楽・流行と銘打った大衆的な大判十六頁ばかりの写真が豊富な「東京写真新聞」が発行されていた。この七月二十五日号の表紙は「フロリダー（おそらく当時のダンサーか？）美女の顔が飾られてあり、（私は、このような奇妙な探訪をした）」というような「新橋芸妓学校評判記」—生徒さんはエロっぽい日本髪、恋のABCからお座敷ダンス、お惚気も聴いてくれる粋な先生—と歌っている。

—時代は移る。金春しん道の細い通りをパツと開いた牡丹の花のような艶かな麗人が三々五々に連れだって燕かなんぞのように、囁り交はして通り過ぎる。若い芸妓の派手な浴衣すがたや愛くるしい半玉の赤い帯が艶にこぼれて！ ウルトラ・モダンを誇る銀座の裏に、こうした粋な仇姿が見られるのも懐しい大江戸の名残である。—と冒頭があつて◇創立六年の努力、◇廿四畳の大教室、◇ABCの勉強、◇イットとは何か、◇演説芸妓の繁昌、◇ダンスのお時間と続き、「ねー○○家の丸子さんとても○○ホールの先生に夢中な

のよ。ダンスも面白いけどやっぱり岡ぼれのダンスの先生がなければ面白くないわ」なんて、とかくお里の見えすいた報告にやって来るものもある。だが、制服の処女ならぬ学生達を相手にする先生のこと、さすがにさばけたもの「そんなものかね」と微笑裡に軽くあしらっている。これはまさしく芸妓学校教育の雰囲気、これが普通の女学校だったら忽ち大騒動—。

なお、この新聞八月二十五日号には、数百年来「秘密の扉」に閉ざされた香具師の社会を覗く・祭り縁日を逐ふて移動する日本のジプシーとして和田信義の研究文がある。いま昭和も四十三年、世はフリー・セックス。フーテン族の全盛期。まさに複雑怪奇な世相であり、秘められた奇妙な世界は、多々あると思う。そう、われと知る方々は、早速現地ルポを。なお、「週刊大衆」42・12月28日号には「セックス・ピエロの泣き笑い人生記」として、ひとさまには、大きな声でいえないこの道二十年選手の手記があるが、このような珍技、珍芸ウラオモテの演じられる巷をあるけば、まだあまりひとさまに知られてない異常なドラマもあろうし、又、未開拓部落に世界にも秘められた風習が発見されるのでは。「異常」を求めて旅と伝説。マニアが実際に見たルポも期待されようか。

戦前の、探偵小説誌の名門、博文館発行の「新青年」も、昭和十三年あたりからか？

実話物に力こぶを、入れはじめてきたようだが、さすがこの誌は、独自のカラーを持って成功している。この年代の七月号を見ると、

「実話」と「体験」懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお願いいたします。

- 一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されれば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。
- 一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。
- 一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。
- 一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として「応募原稿」の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

「危機一発・冒険・怪奇」として、「窮飛逸落」、「爆破前二十五分」、「呪いのアイゼン」など。また、「奇蹟の断食女・珍話図書館」や、懸賞当選作品として、「仙人から聞いた話」、「破戒のモラル」、「湖底の話」などがある。

何によらず、実話ほど迫力と興味あるものはないと思うが、一面、読ませる程の価値ある実話となると、そうザラにあるとは思えない。だからこそ編集部でも賞を懸けて募集するのだと思うが、ムキになって、読むに耐える実話を求めるより、一挿話的な軽い気持ちで求めるもののほうが成功度合いが強いのではないかという気がするのだ。

終りに、本誌「奇クサロン」五月号の北山読人氏の「苦言と要望」にもあるように「最近の本誌の傾向は、緊縛、鞭打ち、妊婦が大半を占めているようだが、もっと違った読物や写真を採り上げることは出来ないかと思うのです」という声も上っている折から、この度の「実話と体験」募集が、新風を吹き込むことを願い、その成功を祈るものだ。といってそれだけになってしまっただけでは、マニアとは注文がハッキリしてるので行過ぎもどうかと思う。くどいようだが、あくまでも一つの分野として発展されることを期待したいのである。この一文、少しでも新しい分野開拓のために応用、投稿の刺激ともなれば幸いだ。



濡れにぞ濡れし

浮気のすすめ

芳野眉美

谷ナオミさんのカメラハントが五月号に発表されていたが、六本木のクラブで一目お会いしているだけに、実感がある。辻村さんはしきりに「高嶺の花」だと谷ナオミさんの顔ばかり見つめて讚美していた。ミニドレスといい、サングラスといい、六本木あたりでもこれほどの美しい人にはお目にかかれない。

この頃土曜日曜と、銀座でハントしては店に連れてくるのが多く、女の子が吸っているタバコや噛んでいるスルメを強奪したり、女の子のオッパイをちよいといたずらするとう特権を、この店の法律であるとか何とか

いってせつせとやらせて頂いているのだが、この手で谷ナオミさんの豊かなオッパイ（失礼）を、とも考えたが、辻村さんや団先生の前では残念ながら手がでず、賀山社長に「マユミサン遅かったよ」といわれて、ただ呻るばかりであった。

「そのうちお目にかからせていただきます」と谷ナオミさんにいったら、白い歯をみせて微笑み、死にたい気持になった。

外車で谷ナオミさんを送る賀山社長が、別れぎわになって「ネクタールが飲めませんでしたね」と、またまた死にたくなるようなこ

とをおっしゃった。

谷ナオミさんののをめたら、本当に心臓麻痺をおこして、おらは死んじまっただ、になりかねない。ウン。全く抜群の美女である。

辰巳典子、谷ナオミと続いたカメラハントに刺激されてか、「サロン楽我記」に書いてあったように、S氏が、森山美歌夫人が辻村さんに会いたいといっているから連絡をとってくれ、とバーにみえられ、喜んで辻村さんに承諾を得たのだが、運の悪いことに美歌夫人が急病で入院し、今年の旅行は中止せざるを得なくなってしまう。せっかく辻村さん

宅を訪問できて、また二人で全ストでも見られるかと、楽しみにしていたのだが残念なことであった。美歌夫人の快復を祈る。健康を害してはプレイどころの話ではない。くれぐれも大切にして頂きたいものである。

全ストといえば、団先生の「狐の話」を読んでいた笑いだしてしまった。「感激して、舞台のストリップパーに千円札を渡した」というしだいである。よくまあ辻村さんはおぼえていらっしまったもので、あれは二年前の話である。

私はスケベだから全ストはよく見るが、舞台のストリップ嬢にチップをはずむなんていう勇氣もなく、また私に年中たかられている誌友諸氏は、ケチなマユミがそんなことをするものかと、絶対信じないと思うのだが、たしかにそんなことが一度だけありました。

何故そんなだいたいそれた気持ちになってしまったのか今だにわからないが、たしかあの時、観客よりストリップ嬢の方が多く、閑散とした小屋のカブリツキに二人でどかっと坐り、御開帳に鼻をくっつけていたのである。

着物姿の一人が、裾をひろげてから、三本ばかり、ネ、「あげる」二人にくれたのである。辻村さんが二本で私が一本だったのか、

どうかは忘れてしまったが、「バクチのお守りだ」とかなんとか、大切に鼻紙に包んだのである。（そうでしたね、辻村さん。アレ、どうしたのかしら）

全ストを見ていて、過去に私がもらったものは、タバコと酒はともかくゴム製品にあと始末した紙という、えげつないのがある。しかし、いただいたからといって、お礼をやったことはなく、この時は、どうしたとか、ついうれしくなり、ポケットに手を突っ込んで、百円じゃみみっちいし、五百円札はないかとさがしたが見当たらず、えいめんどうだと千円札を一枚（ああもったいない）ストリップ嬢にわたしてしまっただけである。

彼女より、むしろ童女のようにキレイにした子のほうがサービス満点で、チップをやるなら童女にすべきだったと辻村さんは主張したが、ケチな私はポケットに残金をしまっただけで済ましていた。

とまあ、こんな調子だったはず。念のため追加させて頂きました。

私の商売なんかは年中遊んでいるようなもので、体内にウイスキーをきらしたことがないというあんばいで、歌の文句じゃないけれど、酒にタバコに女好き、なのである。

水商売はどうしても女に関係あり、ちょくちょく朝帰りをさせて頂いているけれど、これに加えて、馬の新聞を話の種にと読んでいると、酒もタバコもやらない大家さんから見ると、まったくもっての道楽者だとうつるらしく、本当はバクチはきらいなのだけど「奥さん苦勞しますなあ」などといわれているらしいが、誰からなんといわれようと、遊ぶときは少しでも遊び上手になれば人生これまた楽しいではないかと思うのである。

まったく遊びの下手なのは見えていても腹が立つてくる。若い頃は、生真面目で、ただ仕事だけが生き甲斐という、酒も女遊びもやらず、ただ金をためるばかりの人が中年になつて、子供も大きくなり、ゆとりがでて、はじめて遊びをおぼえると、これが大変なことになってしまふことが多いのである。

はじめて女に惚れ、女も自分に惚れていると思ひ込み、二号にしてアパートに住せたものの、夜昼となくいりびたりで仕事をそっちのけ。あぐくの果、奥さんが迎えにきたなんてえのは、下の下でお話にもならない。

こんな男に惚れられた女も災難で、男が来ても寝るばかりで話もなく、男のいないときは適当に若い男とボーリングやバーを飲み歩

き、男の金でホテルにとまってきたりするのである。そんなことは露知らず、

「女のひとといつも寝ていれば、私とはその気も起こらないし、余力も残っていないのはあたりまえでしょうが、私が強引にリードしなければ、私を相手にしてくれませんの」

と堅気の奥さんから相談されたときには本当に驚いた。水商売の女でもこんな話はしない。意外に露骨である。

昼までもいりびたりとなり、仕事をしなければ使用人から見限られるのが当然で、夜も家に落ち着かないオヤジを子供が批判するのもまた当然のことであり、オヤジの威信は暴落し、家においても面白くなく、不愉快でまたぞろ女のアパートに足が向いてしまう。

悪循環は本人の心持次第でいくらでも解決できるのに、総スカンを食うと、たちまちでれでれとくずれ落ち、世の中がいやになったとか、子供が馬鹿にするとか、生きていく氣力を失ったとか泣きごとを並べ、心中しうなどと、小企業とはいえ会社を経営している中年男のいうことかよ、と馬鹿々々しくてこっちのほうが本当に泣きたくなくなってしまふのである。

家族や会社をほうりだしてまで、惚れる価

値のある女なんかこの世にいるわけがない。プラトニッククラブの赤ん坊でもあるまいに、中年男が心中心中とさかいだって、ただ醜いだけで、勝手に死んじまえ、というのが相談された私の答であった。

死ねるものなら死んでみな。奥さんは二日も三日も男が帰宅しないと女のアパートにくるが、アパートも二人不在となると、どうせどこかの温泉にでも遊びにいつているのだと思うのだが、心中しやしないでしょうかと、くだらない心配ばかりしているのである。

奥さんも、二人の関係を認めているのだから、会社の仕事をしてから一週間に二三度、軽い気持で女のアパートに遊びにくる気にならないのだろうか。

困ってしまえば本妻と同じで、妻を二人持ったことにもなり、飽きてしまうのが本当だと思ふのだが、女に惚れたことのない男は、女に免疫がないのだから、それこそ夢中になつて何も見えなくなってしまうのである。

当人は、悲劇だと思っているかもしれないが、第三考から見たらこんな阿呆らしい喜劇はまたとない。だから若い時から適当に遊んでおいたほうが身の為ですよ、遊びの下手な客には、年上が多いけれど、づけづけいう

のである。若いときにいくら女や酒で失敗してもとりかえしがつくけれど、一家を成した中年男が前後の見境なくくずれると、これはもうどうしようもなく、完全なお手上げとなるのである。

どうしてこうも女にだらしくなってしまうのか、理解出来ない。そんなにもほしかったら、パチンコでも、はじめていればいいのに。沢山穴があるよ。

私も三年ばかり続いた若い女の子がいたけれど、カアチャンにみつかつて、乗り込まれ「だらしないオヤジですけど、よろしくお願いします」と頭を下げられたので、「奥様に悪いから」と会ってくれなくなってしまった。でしゃばりやがって。ソンシタ。

朝帰りしたときなど、氣持が悪くて身体をふく癖があるから、浮気はすぐバレてしまうのだ。バレるのはお人好しの見本みたいなものだが、カアチャンもまたかという顔をしているだけである。あきっぱい性格を知っているから、割に驚かないのである。

それが三年も続いて朝帰りがひんばんになったときだけはいささか怒った。怒りに怒って、体重が三貫目ばかりへり、美容的にも医学的にも貢献したから、やはり浮気はやめな

いよと、そんなわけで公認になってしまったのである。その結果、十年振りで子供にもめぐまれたのだから、世のオヤジは、どしどし浮気をしてカアチャンを痩せさせるとよろしい。太りすぎで妊娠しなかったのですね。それがヤキモチで痩せたものだから健康な状態に戻ったわけです。出産のおそまつ。

結婚したからといって、女一人だけで一生をすごすことなんかできるわけがない。(私は、ですよ)結婚制度として、一夫一婦制度は認めるけれど、ほかの女と浮気をしてはいけない、などというくだらない意見は認めるわけにはいかないのである。

男が女を好きになるのは本能で、カアチャン一人に縛りつけられるのは、理屈にあわない。いくらカアチャンが、世界一の美人であっても、持物が天下一品であっても、優しく貞淑であっても、男は浮気をする。そう断言する。妻を愛していることと、浮気をすることは、両立するのである。愛していないからほかの女と浮気をするのではなく、愛していても、スケベだからほかの女がほしくて、浮気をするのである。

こんな簡単なことを理解しないカアチャン連中が多いからいやになるのである。繰り返し返

しいう。カアチャンは愛している。しかし俺は浮気をする。俺はなるべく自然のままに、自己に忠実に生きたい。

浮気浮気と連呼してきたけれど、どの女と寝るときも、そのときは本気である。念の為追加しておく。本気です。

仕事を放棄し、家庭を破壊してまで一人の女に熱中するなどどう考えても馬鹿げたことで、どっちみち浮気をするなら、一人の女に夢中にならず、不特定多数の女と交渉を持てばいいのである。

特定の女をつくれば、本妻が不安を感じて憤怒するのは当然で、不特定であれば、また遊んできたの、と、笑ってすまされるのである。愛情問題に女の感覚は意外に鋭いし、本妻の座を守る女の執念はすさまじい。どうして女はこうも結婚したがるのだろうかと思うのである。惚れた女に店を持たせたが、家にまで乗り込まれて、離婚して私と結婚してくれと強談されて弱り切っていた中年男がいたけれど、こんな女にひっかかったら、それこそ世の中は目茶苦茶だ。

この中年男にしても、店など持たせずに、不特定多数の中の一人として、気軽につきあっていればいいものを、年がいもなく惚れて

愛人、いや、二号的存在にしてしまうから、とんだボロをだし、事件に引き込まれてしまうのである。結局、女と別れる破目になり、店もゆずってしまったが、家庭内のもやもやはその後もあとをひき、すっかり女遊びがいやになり、釣りにこってしまった。

私の場合は、妻子持ちであることを宣伝しているから、結婚してくれ、などといわれたことは一度もないけれど、金もうけが下手だから本当はいわれないのだろうが、私のスポンサーの独身野郎は、年中いわれてことわるのに苦労している。金もあっていい男だし、社会的地位もあれば、誰でも女は飛びつくがそれを利用して、あっちこっちと不特定多数と交渉している。

「あなたがいるから、結婚できないの」とか「私ではあなたの妻になる資格はないわね」とか「婚約を破棄したわ」とか、種々いわれるらしいが、こんなことをいう女に処女はいず、誰でもいいと尻軽で、あとで二人で苦笑しているのである。結婚したかったら、処女のままでもいいか、処女らしくしていなさい。遊びの相手と結婚の相手は違うのである。

結婚のことは一言もいわず、「あなたは奥様と赤ちゃんのところへ帰るのだからいいで

しょうが、残ったあたしは一人なのよ」などといわれると、ぐっときて、朝帰りが夜帰りになり、あわてて店を開くこともある。感情問題がもつれるから、特定の女とは関係しないほうがいいと言う例で、私がトクイになっているわけではありません。

不特定多数万才。そんなわけで、神酒拝受にしても、いくらすばらしい女神であっても通ったことはなく、一度拝受すれば次の女神をさがすという、こっちの水は甘いぞで、螢よろしく、あっちゃこっちゃ、うろちよろするのである。

本当の私は女に弱く、惚れっぽいので、くどいほど特定の女はヤバイから、不特定にしろと叫んでいるのだが、そんな心配のない方は、六号でも七号でもつくってかまわないのですよ。

女の匂いのする男のまわりにはわんさと女が集まるけれど、女の匂いがしない男は一人も集まらないから不思議である。二人でも三人でも女とよろしくやっている男は、女と別れてもまたすぐ外の女と関係しているが、やと女に惚れて関係を持った男は、心中さわぎをおこすようなことになるのである。

女と長く続くのは、女の持物が天下一品で

感受性が鋭いか、優しくて右といえ右という奴隷的なのか、せっせと金をみついでくれるのか、テクニックが抜群でどうしてもはなれられないか、いろいろあるだろうが、裏から見れば、新しい女ができないからいつまでも古い女と関係していることになる。

新しい女を次々に発見出来れば、古い女と会うひまがないから、自然に別れることができるし、一人に熱中して心中するようなこともない。飽きっぽいといわれようが、鶯の谷渡りでもしているほうがよほど健全なのではないだろうか。

理想の女性を求めて放浪するなどというていゝわけではない。放浪したって理想の女性なんか存在するわけがない。もっと単純で、様々な可愛いものを見るだけでも楽しいじゃないの。興奮するぞ。

だまされているのが 遊び

なかなか

だます お前の 手のうまさ

くいな 聞く夜の 酒のあじ

というのがあるそうだが、だましている積りがだまされて、本当に遊びは難かしい。

私のスポンサーの一人に、芸者遊びは好きだが、芸者と寝たことがないという、銅像の

ような男がいるけれど、それでは芸者サンに失礼だから、私がかわりにと、その男は三味線に酒、私といたしましてはオフトンということ、芸者さんと、ネ、チヨネチヨネすることもあるのだけど、

「あなた、好きよ」

「俺も、好きだよ」

「電話して」

マッチの中箱の裏に、口紅で置屋の電話番号をさらさらと。もらってきても一度も電話したことがない。日曜は休みで、いくらでも外で会えるのだが、一夜だけの「好きよ」でいいじゃないの。一夜だけだと、あとあとまで空想の中で残っていて、甘い思い出にひたれるよ。

それにしても、何故芸者と寝ないんだ、とその男に質問しても、裸になるのがいやだ、というばかり。

「裸にならなかつたていいじゃない。少しだけペロッと捲れば」

「そんなことまでしてやりたくない」

この男、人妻に十年も恋している。その人妻の主人とも友達なのだから、男の執念もすさまじい。まさか、愛人の人妻に操をたてているわけでもあるまい。こんなわけのわから

ない男と十数年も付合っているのは、同年輩というだけでなく、やはり、俺もおかしいからかな。

上京された誌友は、すべてスポンサーにされて、甚大なる被害を受けてしまったことだろうから、連絡先の不明な方もいらっしゃるので、誌上を借りてお詫び致します。ずうずうしくて申し訳ありません。

その節は有難う御座居ました。

ケチなマユミサンといたしましては、すべてスポンサーにしていましては、そのつもりでバーにいらっしゃって下さい。

ここまで、一息に書いて、読み返してみたら、だいぶ支離滅裂で、俺がモテルようなことをいい気になって書いていたようだが、浮気をするなら不特定多数、ということを書くどど書いていたのである。おわかり下さい。たいこもちよろしく尻馬にのって、ホイホイ乗馬の訓練をしているから、女との付き合いは多いがモテルわけではない。

どうせ遊ぶなら楽しんだほうが得で、バーでもお座敷でもトルコでも、サービスするほうは女でなく、遊びにきた御当人で、女とホテルへしけこんだって、女はただ寝ていればいいので、男は酔ってくだびれてだらしない

なった自分をたたきおこし、女にいたれりつくせりのサービスをするのだから、女にもてるなんてことは考え違いだったことがわかるような気がするのである。

青山でも赤坂でも、穴倉のようなスナックが多くなったが、(辻村さんとオニ六先生と鼎読した六本木のスナックも穴倉みたいだった)男も女も、本当に穴が、好きなんだなあと、妙なところで感心しているのである。

地下のサパークラブで、ピアノを弾いている酔客(女でアル)と、ごちゃごちゃの客どもが合唱したのは、

「あなたが囃んだオ……ンがいたい」

というヒデエものであった。もっとも、いつもこんな卑猥な歌をうたっているわけではないが、深夜の穴倉で、高級な芸術の話や、不可解な政治の話などしてもつまらない。深夜は深夜らしく、ネ、連れの女の子のミニスカートの下にでもいたずらしてればいい。

卑猥な歌のおかげで、その夜はスムーズにハントに成功したが、女はやはりムードに弱いとみえる。浅草でもいいものを、わざわざ赤坂くんだりまで足を運ぶのは、くどくど手間をはぶくためである。女のほうでその気になってくれば、いろいろとお世辞をいって

くだびれなくてもすむというものだ。

さて、二十そこそこの女にイカレて家出してしまった中年男、奥さんの話だと、二十万ばかり持ち出したようで、一週間たってもまだ戻らない。帰らないとこの原稿が終らないので、首を長くして待っているのだけど、人の気持も知らないで、二人仲良く遊んでいるらしい。そろそろ二十万ぐらい、消えてスカンピンになる頃なんだがなあ。

毎日何回となく、ひでえときには一時間おきに、夫はまだ戻りませんか、電話がかかってくるので大家さんもうとう家を出てしまった。息子を連れて、オジイちゃんのところにも避難しているらしい。

奥さんは父親や、男の親友まで引っぱってきては、二人のアパートを覗きにくる。とうとう、女が勤めていたバーのママさんまでもかりだした。ということは、奥さん、御自分の御亭主の世にもなさない、だらしない、いたらくを、皆さんに発表し宣伝して歩いているようなもので、恥ずかしくないのかなあと不思議でならないのである。

妻だったら、いくら馬鹿な夫でも、隠すのが常識じゃないのかしら。夫婦間のことに、他人を動員することはない。迷惑がっている

のがわからないのか。

夫の仕打ちをくどくどと他人にしゃべったって、みじめになるのは奥さん本人だという事や、夫の悪口をいう奥さんを軽蔑するだけなのに、こんな簡単なことが理解出来ないのだろうか。亭主なんてものは、そんなにもてるわけがないのだから、浮気したって、黙っていても女にふられて帰ってくるさ。帰るところは一つしかないのだから、安心してテレビでも見ていればいいのである。

こんな事件は、さわげばさわぐほど阿呆らしくなるものだ。

女にもてたことのない亭主だから、たまたま若い女にもてると、まるっきり子供に下落して、大人の知恵を働かすこともできず、頭がボアンとしてしまうのだろう。女にもてない亭主を持った身の不運を、一人淋しくなげいていけば、そのうち事件はすんでしまう。

この夫にしてこの妻あり、五分五分で、現在の私は国連なみの中立になってしまった。どっちもどっちだ、まったく。と憤慨したってしょうがないのだけど、奥さんの話の相手になっっているのがくたびれた。

M派の諸氏よ、すばらしい女王さまに会っても、あまり惚れないで下さいね。女王さ

まも、不特定多数でいきましようよ。惚れない人はかまいませんけど。

十日たった月末、女だけが、アパートに帰り、荷物はもともと少いから、引越しも簡単で、あつという間に綺麗さっぱり無くなってしまった。オヤジがどうしても家に帰りたくなかったのよ、というのが女の話で、女の言葉信じれば、新世帯でも、持つつもりなのかしら。でかけたときの着たきりすずめで、女の着物はだいぶ汚れていた。

アパートを借りたら、二十万ぐらい、十日の生活費を含めて、これもまた綺麗さっぱり無くなってしまったのだろうが、女は働くつもりらしい。

が、まてよ。一年間、女の生活を見て来たが、部屋でごろごろしていたほうが多く、たまに勤めても、一週間ぐらいで鹹になる。というのは、客の接待も知らず、ビールをつぐどころか話もせず、本当に話題のない女で、一日千五百円以上も支払う価値のない女と、ホステスが少いの、どこでもあっさり鹹にされてしまうらしいのだ。親切に、知人のバーに紹介して、こちらが赤恥をかいたのだから、真実である。

それに加えて、オヤジを呼び、バーでいち

やつくものだから、他のホステスの反感を買ったらしい。彼女の特技は、オヤジと寝るときはオオゲサな声をあげるのだが、他の男と寝るときは、それこそウンでもなければスンでもなく、おおよそ味の無い女と見受けられた。何も知らないオヤジサン、女の演技にまどわされたらしい。

彼女の私生活は、オヤジサンがパンと牛乳を買ってきて、ボソボソたべている事実でもわかるのだが、アパートで食事の支度をしたところを見たことはなく、米がきらいだからと、何をたべているのかあまり食事もせず、従って栄養失調きみで歯茎が紫色に変わり、歯も黒く、あれで接吻する男がいるのかいなどと心配するほど、とても昼の顔は見られたもんじゃない。

洗濯もしているのかしないのか、たまにすると、四日も五日も乾しっぱなし、雨が降ってもとりこまず、いいのよ、てな調子で、乾く頃にはまたドロドロ、それを平気で穿いたり着たりしているのだから、だらしないのを通り越して、母親の顔が見たくなる。

その母親、娘に金をせびりにきた時を一度だけ拝聴したが、オヤジと別れて手切金を、こちらに廻せという話だった。あんな金のな

い男となんてつきあってんだよ。

オヤジの本当の奥さんの話だと、手切金を

用意したらしいが、オヤジがもう首ったけで
こんな具合に発展してしまったとか。手切金

総天然色美女緊縛極鮮明写真

柱縛り強烈ムチ打ち	三枚	略号△みあ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みこ▽
臀部に炸裂するムチ	三枚	略号△みけ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みみ▽
ムチにのけぞる女体	三枚	略号△みみ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みみ▽
苦悶する女の表情	三枚	略号△みみ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みみ▽
鞭に泣く美貌の女	三枚	略号△みみ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みみ▽
転がり回って泣く女	三枚	略号△みみ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みみ▽
鞭に喘ぐ全身の表情	三枚	略号△みみ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みみ▽
高手小手の全裸身	三枚	略号△みみ▽
中河 恵子	三枚	略号△みみ▽
豆絞りに輝く美貌	三枚	略号△みみ▽
中河 恵子	三枚	略号△みみ▽
赤い絨氈に悶える	三枚	略号△みみ▽
中河 恵子	三枚	略号△みみ▽
豊満な臀部を晒す	三枚	略号△みみ▽
中河 恵子	三枚	略号△みみ▽
美しき緊縛の立像	三枚	略号△みみ▽
左近麻里子	三枚	略号△みみ▽
転落寸前の緊縛女体	三枚	略号△みみ▽
左近麻里子	三枚	略号△みみ▽
椅子に羞らう美女	三枚	略号△みみ▽
左近麻里子	三枚	略号△みみ▽

緊縛裸身を横たえる	三枚	略号△みみ▽
左近麻里子	三枚	略号△みみ▽
湖畔砂上の四つ相撲	六枚	略号△みみ▽
大塚・東浦	六枚	略号△みみ▽
大自然の中で取組む	六枚	略号△みみ▽
大塚・東浦	六枚	略号△みみ▽
吊りと投げの応酬	六枚	略号△みみ▽
大塚・東浦	六枚	略号△みみ▽
砂まみれの大相撲	六枚	略号△みみ▽
大塚・東浦	六枚	略号△みみ▽
極彩色の刺青女体	六枚	略号△みみ▽
山原 清子	六枚	略号△みみ▽
華麗な刺青絵模様	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
全裸の刺青女体	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
刺青女体の奔放姿態	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
三面鏡に映す刺青肌	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
化粧中の全裸刺青女	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
刺青の豊満さをさらす	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
大鏡に写す刺青全裸	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
刺青女性前面の魅力	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽
刺青女性性の全貌を曝く	三枚	略号△みみ▽
山原 清子	三枚	略号△みみ▽

をもらって別れたほうが、彼女も、男も、幸
福だったのではないかと思うのだが。

とにかく、二人で新しい生活にはいったと
ころで、社会や家族を放棄したスカンピンの
中年男が、どうやって収入を得るつもりなの
だろう。自分の会社だから、仕事をしなくて
も、昼から女と寝ていても、家に帰れば金が
ある。飛び出してしまえば、その収入源さえ
無くなってしまう。女に二人の生活を支える
ほどの能力がないとすれば、目に見えて破局
はくる。

愛だとか、惚れたなんていっていったって、
金がなければ喧嘩しか残らない。たべるのが
先決問題。恋愛結婚の破局は、経済上の破綻
に依るものが多い。性格の不一致なんてもの
は、金のある奴のいうことさ。満足できる金
があれば、性格不一致もなんとなく結婚（同
棲）生活を続けていられるものである。

いい年をして、女のヒモになるつもりなの
かしら。どうせヒモになるなら、経済力のあ
る、というより生活力のあるというのかな、
月収十万以上、二十万、というトルコサンの
ヒモになればいいのに。

金の切れ目が縁の切れ目。はじめの約束は
一年だったのよ、と彼女がボヤいていたから

あつさり捨てられる公算も大。わかれようと
いったって、くつついてくるんだから。案外
これが、彼女の本心じゃないのかな。二十も
年の違う、若い女と不惑の中年男。沢山感っ
て、これからどうなることやら。そのうちど
こからか、また情報がはいってくるだろう。

奥さんが心配していた心中など、起るはずがない。女に未練があつて死ねっこない。
ただし、女に捨てられたとわかり、家に帰る
勇気がない場合、無理心中ということは考え
られる。が、気の小さな男だから、のめのめ
と頭を下げて、また元の鞘におさまるさ、き
っと。

中学生の長男がいるとのことだが、こんな
親父を最高に軽蔑しているだろうな。

好きだわ、と、たまに会って一緒に遊んで
いた頃が、一番楽しかったわ。彼女、しみじ
みいっていた。そんなものだよ。

夏などは、薄いパンティ一枚でごろごろし
ていた彼女だから、栄養失調みたいな身体だ
ったけれど、目を楽しませてもらったし、飲
み歩いたこともあり、チョイいたずらしたこ
ともあり、急に引越していなくなると、ま
たなんとなくさびしいから、おかしいもので
ある。

私生活を見すぎて、とても惚れるようなタ
イプの女じゃないけれど、常識はずれの女と
いうものは、また違ったムードがあつて面白
いものなのである。

彼女とつきあう男は、化粧をした彼女だけ
を見るほうがいい。ということとは、たまに会
って、夢、同棲とか、二号なんかにしないこ
とだ。表面だけ見て、楽しいほうが、二人と
も幸福だろう。

一年契約でも、男に囲われたことは、彼女
も失敗だった。自由に遊び廻って、不特定多
数の男から、ガッポリ金をしぼれば、すべて
は万々才だったはずである。女の武器をみす
みす捨てることはない。

女が引越したから、こちらもこのヘンテ
コリンな事件から解放されたと思ったら、な
かなかネバリがあつて、また奥さんの話の
相手にされてしまった。

もう帰って来なくてもいいから、連絡場所
ぐらい知らせておいてくれないものか、とい
うのである。養子でもないのに、老いた両親
まで捨ててしまったのだから、病気になつた
り死んだときに困るというのが、その理由な
のである。

子供たちもオヤジのいない異常な雰囲気

気がついて、留守宅の雲ゆきもあやしくなっ
たらしい。妻子に両親、会社まで捨てて、惚
れるだけの価値のある女とはどうしても考え
られない。

くたびれました、と奥さん。

引越しをしている疲れ切った女があわれに
も見えてくる。中年男のすさまじい執念にと
りつかれて、ただらうろろしているだけの、
それだけの女だから、どろどろの着物のまま
十日も男のあとに従っていたのだろう。逃げ
たくても、逃げられないのかなと妙な勘繰り
もしてみなくなる。

自分で自分の首を締めている。そんな状態
で女と寝たつて少しも楽しくないだろうと思
うのだが。

遊びは、仕事は順調だし、家庭は円満で平
和で、銃後の憂いがなく安心して酒と女を楽
しんでこそ、本当の快楽があるのだと思う。
「何もかもいやになった」といって家出した
そうだが、いやになったのはこっちのほうで
ある。くだらない。

浮気をするなら、明かるく、人様に迷惑を
かけないで遊びましょう。浮気に対して失礼
ですよ。

(おわり)

足立正生の作品について

S M 映画 感想

辻 雪 男

諸兄は「アンダーグラウンド」あるいはその略号である「アングラ」という言葉を御存知だろうか？ ああ、「帰って来たヨッパライ」や「ケメ子の歌」の事だろうって、まあそれらも「アングラ」なのだが、実はこの言葉は最初、映画について、即ち「アングラ映画」として使われたのだ。

「アンダーグラウンド（地下）映画」という言葉には、何か秘密クラブで作られた映画のような響きがあって、凄くぼくらを引きつけ

る。「アングラ映画」はアメリカに発生した映画の運動、あるいは風俗である。これらの映画の特長は映画の作者が完全に企業（一般の大映画会社）から独立している事だ。だから、完全に自分の好みで映画が制作出来るのだ。そういう訳で、ポップ・アートの雄アンディ・ウォーホルの『ビニール』のようにS・Mを真正面から描いたものや、（僕は見る事が出来たのですが、この映画に縄、ロウの他にテレビがS・Mの材料に使われていたの

には本当に驚きました。そのテレビには、たぶんもの凄い責め場面があるようで、それを無理矢理、現実責められている男が見せられているのですから、この責められている男の苦しみは二乗に強いのでしょうか）ケネス・アンガーのような、ホモ・セクシャルを堂々と描いたものもあるのだ。

そういう「映倫」を通らない「アングラ映画」を、常設している新宿の映画館蜷座で去年、足立正生の映画『銀河系』（42年）を見ていた時、僕は彼の映画には明らかに二つの作品がある事がわかった。それは全く十八世紀の、その半生を獄につながれて生きたフランスの作家ドナチアン・アルフォンス・フラソワ・ド・サド（俗にマルキ・ド・サドと呼ばれている）の小説に「新ジュスチヌ」「ジュリエット物語」の系列と「アリエヌとヴァルクウル」「恋の罪」へと到る系列の二つがあったのと奇妙に合一する。いや、正確を期す為に、サディズム哲学の発明者マルキ・ド・サドの小説にサディスト「ジュスチヌ」系列と、マゾヒズムの好みのあるその姉「ジュリエット」系列があったのと、足立正生の映画の二系列は合一する、と書こう。

さて、その足立の作品系列であるが、第一の系列は、足立の日大芸術学部在学中に作っ

た処女作『枕』(36)から最新作『銀河系』に続くものであり、第二の系列とは『鎖陰』(38年・日大在学中)から若松プロに入ってから脚本を書いた『胎児が密猟する時』(41年・これは当初、東京のエロダク映画館がその内容のもの凄さに驚いて上映を拒み、去年ようやく日本アングラ・センターの手で初めて東京で公開されました)、『墮胎』(41年・若松プロ)、『避妊革命』(41年・若松プロ)、『白い人造美女』(41年・脚本のみ)へと続くものである。

そして、この論の副題にあるM(マゾヒズム)はその第一の系列を表わし、S(サディズム)は第二の系列を表わしていると考えて貰いたい。また、マゾヒズムは、「死への悦楽」「内部の探求」、そして、サディズムは「生への執念」「外への反逆」と各、書き換える事も出来るだろう。これは一般的にも当てはめる事が出来て、サディズム哲学の開拓者マルキ・ド・サドは、常に女郎達を鞭打つて、スキヤンダルをまき起こしていたし、マゾヒズムの開拓者である小説家のザッヘル・マゾッホが生涯、毛皮を着た貴婦人による鞭打ちを待っていた事も事実なのだ。

それではまず、具体的に足立正生の映画の第一の系列、即ちマゾヒズムについて、説明

しよう。この系列での足立の特異性、あるいは魅力はまず、その陰うつさ、母親の子宮へ帰ろうとするどろどろした衝動であろう。これを心理学者は、胎内回歸願望と名付けているが、この事は、ジャン・コクトーのやはり「心」を扱った『オルフェの遺言』の、あのおおらかさと比べてみれば、はっきりするだろう。

『銀河系』の主人公M(たぶん作者はマゾヒストを頭に描いて、こう名付けたのでしようが)は「死」と完全に向かいあい、ハイウェイの車中で、あるいは誰もいないレストランで、自分の過去(N)と出会い、唯一途に母親の子宮に降りたがる。しかし、そこに彼の願いをさえぎるMの分身である僧が現われ、Mに悪戯をしかける。映画では、Mの幼児期の記憶である時計や自転車等をMの前に出しては消してしまうトリック撮影の部分がそれである。

しかしMは、僧の悪戯をそれ程嫌がっていない様なのだ。いやむしろMは喜んでいような表情さえ示すのである。ここに僕は主人公Mのマゾヒズム志向、即ち『銀河系』のマゾヒズム志向を見るのである。これは『枕』の主人公の男が、体の内に覚えるマゾヒズム志向と同質のものである。このように考えると、足立正生のマゾヒズムⅡ「内部への探

求」は、はなはだ迫力のない厭世思想のように思えるのだが(そしてそれは多くの自称マゾヒストには当てはまるのでしようが)。事実、足立は書いている。——「現在、ここにこうして在る私たち自身が、△反逆△だの、△超越△だのと叫んだところで、私たち自身が、私たち以外の何かに成ることが出来るとも思われない……」——と。しかし、僕は彼のこの言葉をそのまま信じる事は出来ない。なんとすれば、彼は紛れもなく第二の系列、即ちSの作品なのであるから……。それは恰もマルキ・ド・サドが一生「ジュスチヌ」の作者は俺ではない、と言っていたのと同じアリバイ(不在証明)のようである。

第二の系列の説明は『鎖陰』から観よう。これは大変にスキヤンダラスな事件を起こしたので、諸兄の中には知っている人も多いと思うが、それは、ポスターがいけないとか、主婦の会のオバサン達が鎖陰という題が良くないとか言って、色々な場所で上映出来なかった事である。題名の「鎖陰」とは「医学的には、膣欠損症と呼ばれる、女子外性器の欠損症状の一種を、言う」という事で、早い話が「開いていない」と言う事らしい。このさいんというイメージはどこかでお目にかかった、と思って探してみたらあった。

先述のサドの、心理学の宝庫と呼ばれる小説「ソドムの百二十日」の中に出てくる女衞の一人、マルテーヌという五十二才のおばさんがそうだったのである。

さて、この主人公さいんのユラさんは本来のものが無い為に仕方なく背後で代行しているのだが、「こんな犬みたいな真似はやだ」とばかりに、自らナイフを、突き刺すのである。これをしてマゾヒズムと見るのは大間違。これは「犬みたいな真似」から足を洗う為の、自意識に基づいたサディズム的行為なのである。このユラさんはすぐに本式に手術して貰うのだが、死んでしまう。ついに主体性を、生きて持つ事が出来なかったわけである。この映画は全く素晴らしいもので、色々な性向を持った人物が登場した。

次の傑作『胎児が密猟する時』は、全篇鞭がなり、カミソリが肌を引き裂き、女を犬みたいにひもで結わき、四つんばいに歩かせ、ワンワンとはえつかせたりする映画である。

この変てこりんな題名は、この女の苦しみ、子供を産む母親の苦しみと、同質のものである所から来ているようだ。(作者の言)僕はいろいろと映画を観て来たが、どれが一番サディスティックでショッキングか? と友人にきかれると、いつもこの『胎児が密猟する時』と、R・L・フロストの『情欲の暴

走』(大蔵映画配給)が凄いと答える事になっている。これらの映画に比べれば、吉村公三郎の『墮落する女』や小森白の『肉刑』や向井寛の『夜の悦び』等のサディスティックなシーンなんか全く比べ物にならない、と思われる。

この前者と後者の違いは、その描写の強烈さもさる事ながら、そのサディズム行為を行う動機にあると思われる。即ち、前者は唯、自分の快楽の為に女を誘拐し、それを鞭打つのであるが、後者即ち、そこらの便所臭い映画館で上映されている、自称サディズムを描いた、と称している映画は何らかの因果関係(時には女が他の男とイイ仲になったとか、大切な物をなくしたとか……)を、男のサディズム行為に持たせているだけのことだ。

こんな時、いつも思い出すのが、マルキ・ド・サドの「悪徳の栄え」の登場人物、クレアウイルです。彼女はジュリエットとレスビアンの関係を持っているのだが、彼女はなにも悪い事をしていない召使いに濡れ衣を着せて、唯自分の快楽の為に彼女達を鞭打つのだ。これが本当のサディズムである、と僕は考えている。

この映画のサディスト丸木戸定男(マルキ・ド・サド)のもじりで、足立には『銀河系』の主人公Mとともに、こういう遊びの精神が

大変、あります)も「悪徳の栄え」と同じ動機であった。

『墮胎』の主人公丸木戸定男は眼鏡をかけた医者で、人工胎盤を作る実験をする。この人工胎盤の中でだんだんと精子がぶくぶくとあわを吹き出して大きくなるところは、S・Mと関係ないが傑作であった。この丸木戸医師の実験は、昭和三十五年に人工胎盤を本当に作って、生きた母胎を借りずに精子を二十九日間生かす事に成功したイタリアの医者、ダニエロ・ペトルッチ博士のそれをモデルにしたものであろうか?

次の『避妊革命』は、現今の避妊具がどうもうまく行かないというので、丸木戸博士が最高の避妊具を作る。しかし彼は、医師法とかにひっかかり、権力をカサに着た警察に捕えられ、裁判にかけられる事になり、肩から選挙の立候補者のようにタスキ(自分の正当性を世間に訴える為)をかけ、妻(足立はサドの妻の貞淑さをイメージしている)と共に、車で社会にアピールして歩くところで終る。これについては、僕は、先のペトルッチ博士の事実と共に、「ローマ法王ピオ十二世が荻野式を認可したというのに、何たる不合理!」というに止めよう。

足立正生は映画『絞死刑』に俳優として出演しているので、顔が見たい方はどうぞ。

懸賞入選作品

(五回分割連載第三回)

創作

理 恵 女 献 身



△りえ女、国表護送に際し

作法通りに黒髪を切られ

血縄、足枷のまま編籠で

重罪人送りを受けること△

沢 潟 し の

「りえ、この者に覚えがあらう」

あたしは、あらためて七郎どのを見る。知
っているとすれば、家にいた頃に違いない。

近所の遊び相手を一人一人あてはめてみてい
る中に、ようやく思い出した。あの七郎さん
だった。

「深見七郎忠近さまで、ごさいましょうか」
相手もにっこり笑って、

「樹上のお嬢さまでしたな」

やっぱり、そうだった。

「お久しゅうございます。ご立派になられま
して。その節はいろいろと……」

「悪いことばかりお教えしましたなあ」

と引きとっていわれる。

そうそう、お仕置を見せに連れて行って下
さったのは、この人だったわけ。

この間は、あたしはすっかり固くなってい
たもので、まるっきり気づかなかったのだ。

「先日はあたくし、すっかり取り乱しており
ましてお見それいたし、大変失礼いたしまし
た」

「ご尤もです。私は役目柄、多くのめしうど
を手がけて参りましたが、先日のりえ殿は、
お見事でした。罪人というものは、あのよう

な場合、大半は氣を失って白洲からかつぎ出すもので、その外の者ととも、囲りから支えられて、ようやく歩いて行くものでございませうが、お嬢さまは先に立って縄とりを曳いてこられました。このことは末代までの語り草にさせていただくつもりです」

七郎どのは、そんなに詳しく見ていらっしやったのかと思うと、きまりが悪くて困ってしまう。

「そのようにお褒めいただいては、恥かしゅうございます。いつぞやお仕置場に連れて行っていたいたのが、大層役に立ちました。でもあの時は、家に戻ってから母にきつう叱られました」

「いや、それはどうも……。しかし、連れて行けと言ってせがまれたのは、お嬢さまですぞ。目付役の子なら、お仕置のことはくわしい筈だ。沢山見られる時に案内せい」と、言われたので、お仕置日を父から聞き出すのに、えらい骨を折りましたが、あの時ご覧になったのがお役に立つとは……。いや、骨折り甲斐がありました」

そばで聞いておられた殿様は、お笑いになつて、

「ねんねのいさかいの続きは、そのぐらゐに

いたしておけ」

と仰せられるので、二人とも大笑いになつてしまふ。

「お嬢さまは、よして下さいませ。つい先だってまで御中臈を勤めておりましたのに」

「いや、これはどうも。つい、あの頃を思い出しまして」

「誠に早いものでござります。あの竹矢來の間から覗き見しておりました私が、お仕置に上る番になりました。浅からぬ縁でございます。今後ともよろしく、お願い申し上げまします」

「いや、私もりえ殿に焼印を当てる役を勤めることになるとは思ひもありませんでした」

殿様は、

「りえ、深見は生胴の名手だが、そちのめがね通り刑のことには詳しい者じゃ。このたびのことについても格別に働いてくれたのだが、りえのことについては万事、七郎に指図いたさせることにしたによって、国表へもそちと同道いたす故、安心してまかせるがよい」とおっしゃった。

「それはまた、ご苦労をおかけいたします」

「時に七郎、りえの仕置は串刺しにきめた。

それについて、りえが願ひごとがあると申し

ておる。先ず、りえの申すには、串刺しの刑は、罪人が刺し串と契りを結んで果てること故、苦しみもだえる姿のまま死ぬのは恥かしといふのだ。それ故、磔柱は特に堅固に作らせ、手足が動かぬよう結え方にも十分、留意いたしてくれよと申すのだ。そちは磔など度々見ておろうが、よい思案があるか」

どうせ殿様はお忘れになつてしまふだろうと思つていたら、それでもちゃんと覚えていて下さつた。七郎どのは一寸、考えていらつしたがつたが、

「如何にも承知仕りました。りえどのの言ひ出しそうなことでございます。磔柱は私が差図して作らせます故、ご放念下さい。また罪囚の腕は肩口、肘、手首と三箇処括りますゆえ、常法にても動くのを見たことはございませぬが、指は動きます故、様々に狂おしく動かしますが、事切れると垂れるものでございます。それに反し、足は足首一箇処より括りませぬ故、これは何とかいたさねばなりません。されば、おなごの身体は柔らかいものでござれば、この図でも見ゆる、下の横木に腕と同様、一文字に結びつけることに致しましょう。太腿、膝頭、足首と括れば、如何にもだえるとも動くことではございませぬ。

それにまた、きつく結えよとお申し出になればとてもことに手足とも血の通わぬほど堅く縛りつけたる上に、柱を立てぬ内に皮田に申しつけて、両の手首と足首は斬り払ってしましましょう。さすれば、もはや動くところはなくなりますから、りえどのにも十分ご満足いただけますよう」

あたしは身体中が、ぞーっとする。殿様もおすてさんも七郎どのも、皆揃ってあたしに辛い目を見せる方へばかり話を持って行こうとなさる。

七郎どのは、絵図をあたしの前に持ってきて見せて下さりながら、

「お手はこの通りですが、おみ足もお手と同様、この横木にしかと結わえて差し上げましょう。お腰骨の番いは皮田の者が外すか折るかいたします。ですからご自身は何もなされるにはおよびませぬ。その後、お手足とも弓弦を用いて血の通わぬように、きつく結わえた上に更に荒縄にて化粧結びをいたします。それ故、たちまち痺れて、感じがなくなります。その時分を見計らって、お手足とも、ここから」

と言って、あたしの腕の中ほどと向う脛に指を当てて見せながら、

「斬り払ってしまいますから、柱が立った後りえどののままになるのは、お首だけです。その後、刺し串がお口まで通れば、お首も動かぬようになりますから、それまでどのようなお苦しみになってもだえられても、最後は正しく磔られたお姿のままお仕置殿になります」

あたしは特別なお役を勤める女中で、終身元服せず、また如何ようなるご錠にも不服を申さず、身命を殿様にお預けいたしますと言いつ切った手前、仕方がないから承知したお役なのに、皆様はあたしが本心嬉しがってでもいるように、ご満足だろうとか、お心安くとか言いながら、実際はお魚なみに扱って下さると思っていたが、それでも物足らぬのか、料理の前に尾ひれを取り除くように、あたしの手足を斬り払うとおっしゃる。

七郎どのは矢立の筆をとり出し、絵図の手首のところを塗りつぶして見せて下さる。

「それは何で斬るのでございますか」

あたしが聞くと、七郎どのは澄ました顔で「係りの者が大鍼を持って参ります。面白いもので、人の身体と申しますと細首一つ斬るのも並大抵ではございませぬが、魚や鳥を料理すると思えば、足の骨など軽く叩き斬れる

ものでございます」

七郎どのがこういうのだから、これから先人足や下人たちからも、鳥やけだもののように手荒くされることだけは間違いない。

さすがに殿様も見かねられて

「すると、仕置の前に手足を斬るのか。さぞ痛がることであろうの」

と、おっしゃる。なにしろ、あたしは奥方様からご寵愛いただいているのだし、女小姓役で、かれこれ二十年近くもおそばに仕えているのだから、少しはお氣にかけていただかねば、お奉公の甲斐がない。しかし七郎どのは平然として、

「ご尤もでございますが、このような極刑の本意は、遅死でございます。私の家に伝わる書き物には、仕置の五日以前に両の乳房を太き竹の串にて横に刺し連ね、そのまま晒しておき、車裂きに申しつけたる例がございます」

と、また、あたしをおどかされる。

「このたびの罪囚も、上を恐れざる重々不屈至極の罪人故、逆磔か串刺し、磔、格別軽くいたしても生吊胴までにて、生胴にては相済まざるおもむきにお仕置申されしほどのこと故、少しも差し支えございませぬ。また、仕

置場に入りし罪囚は、正氣を失いやすいものでございますから、りえどのにも、よい氣付けになりますよう。足につきましても、常の拷問の折など一文字にいたしますと躰になりますが、このたびはお仕置の身仕度故、かまいませんぬ」

「いったい、あたしの罪というのはどんな悪事なのかしら。極刑にかけられるほどだからよくよくの大罪なのでしょうけど、処刑される本人が前にいるのだから、少しは物のいい方に氣をつけて下さってもよさそうなもの。」

「もっとも七郎どのは、あの頃からお仕置の真似をして、人をいじめるのが好きだったから、今更無理だろうけど。」

「お小さい時から、お仕置がお好きでしたなあ」

と、あたしが少し皮肉を言うと、

「覚えておいででしたか。しかし、りえどのは一度も私の言うことを聞いて下さいませんでした。あの頃は何とかして、りえどのを泣かしてみたいと思っておりましたが、果たさずじまいでした」

七郎どのは、昔を思い出しながら懷しそうにおっしゃるので、

「このたびのことは何も申しませぬ」

と言って差し上げると、殿様は、

「いやとは申さぬそうだ。わしも許す故、存分にいたせ」

と真顔で仰せられるので仕方ないから、

「よろしくお願い申します」

と頭を下げると、七郎どのはあたしの身体を、あらためて眺めていらっしゃる。余りいい氣持じゃない。そして焼印の跡をしげしげと眺めながら、

「その焼印にしても押す相手が畜生だと思えばこそ押せるので、生身の人間と思っていては、とても当てられるものではありませんぬ。」

そのお背なの印は、すてどのの時に作り、りえどのお使い申して先日つぶしてしまいましたが、常のより二倍も大きいので両肩の上に立って押したため、十分深く押せましたが、りえどののだなどと思っていれば、第一身体の上に土足で乗ることもできませんぬ」

「さようでございますようねえ。私は、囚われの身になってから日も浅うございますが、仰せのとおりでございます。めしうどは、人がましき心にては、勤まらぬものと覚えまして。人身の畜生と思えばこそ、このような姿で皆様の前に出ても、恥ずかしい思いをせず済むのでございます。先程、殿様には申し

上げましたがお仕置をお受け申しましたる上は、肌えの恥はいとませぬ。どうかご存分になされて下さりませ。私は先日、御焼印をいただきましたが、最初背中に当てられました時は、熱いのなんのと申して、とても言葉につくせないほどのもので、背中を刃物で突き刺されるような痛みに、自分の肌が焼け焦げる煙にむせかえりながら、氣を失ってしまいました。けれども額に押していただいた時は、熱くて痛い中に何となく自分が苦しめられて嬉しいような氣持がいたしました。お仕置にされるのが待ち遠しゅうございます」

言わずともよいことと思ひながらも、すっかり申し上げてしまった。七郎どのは、しきりにうなずいておられたが、

「なるほど、よく聞かせて下さいました。しかし、そのようにお心のどこかにお勤めになられますのは、りえどのが常の罪囚と異り、後暗いところのないお身代りのめしうどだからでございます。常の罪囚と申すものは、そのように悟られぬものです。りえどのは、お果てなされて後も畜生道に送られることはご承知でございますか」

今更、何と言われようと驚くものですか。あたしは、

「はい、すてどのからうかがいました。私は出来ますなら来世はお魚に生れ変って、いく度でも串刺しになりとうございます」

と申し上げると、殿様は、

「七郎、そちの負けに見ゆる。そのぐらいいたしておけ」

とおっしゃる。あたしは、

「失礼いたしました。お縄を」

と言って両手を後へ回すと、七郎どのは慣れた手つきで素早く括られる。

「先ほど拝見いたしましたお轡をつけさせて下さりませ」

と、おねだりすると、殿さまが七郎どのに渡され、七郎どのがつけて下さる。

二つ輪の金具を口に咥えさせられ、鍵を後に回してきつく引き寄せガシャリと掛け金をかけられると、少し口を開いたまま唇が切れそうで物もいえないし、舌も噛むこともできないだろうけど、あまり工合のいいものじゃない。

足枷を外していただいて立とうとするけどすっかり足が痺れてしまっただうにもならない。土の上に坐るのにも少しは慣れたつもりでいたけど、足枷がついてちっとも動かせなかったものだから仕方がない。七郎どのが揉

んで下さる。やっと立ち上ると、後手のお縄に竹筒を通して曳き立てられ、外にでると殿様もこられる。すっかり暗い。

矢来の所の番士たちが殿様に気づいて、あわてて下座する前を先に立って入って行く。

くぐり戸を入って格子の前に坐ると、轡と縄を外して下さり、殿様の御前なので、さすがに二布のまま入牢。ぴーんと錠の音を聞いてから、正面に向き直って平伏する。

「大切な囚人じゃ弱らせぬよう気をつけい」

おしのびながら下知をして行かれ、くぐり戸がしまると、奥で平伏していたおすてさんが、つっと寄って腰布をといひ引きぬく。布一枚と置いていても急に、うそ寒くなる。

ここに入れたら当座は寒くてふるえていたのに、いつの間にかお花見も済んでしまっただし、まごまごしていると梅雨になってしまいかもしれない。お印の火傷もすっかり楽になったし、無衣にも慣れて御番衆の女房たちに見られても平気でいられるようになったのだから、何事も修行が第一。

「先程うかがいましたら、二、三日中にお国表へお出立だそうです。お供の衆など、それぞれ仰せつけられたそうですから、そのつもりでいらして下さいませ」

「それは、わざわざお知らせ下さいましてありがとうございます。お役の方々は忙しいこととでございます。でも囚人というものには全く気楽なものでございますね、何から何まですっかりしていただけるんですもの。何だかもうたいたいだきます。それに、お縄というものは、もったきつくて辛いものかと思っておりますが、手が使えないだけでちっともきゅうくつではございませんのですねえ。道中はずっとお縄でしょうけど、ゆるりと参れますでしょう」

おすてさんの気性も少しは呑みこめたので、少し先手に聞いてみると、

「おりえ様は何も後暗いことがございませんので、のどかにしておられるのでございますよ。これが本当に悪いことをした罪人でしたら、生きた心地もなくおびえて過すのでございます。お焼印にしても、並の罪人の小さなお印形でも、夏も素肌を出さずに隠しておりますし、額の印形者など、人の姿を見れば後を向いたり、こそそこそと陰にかくれたり、それはそれは、みじめなものでございますよ。それに引きかえ、私どもは何も悪いことをしたわけではなし、義理で罪人に下ったのですから、こうして背中のお印も、わざわざ特別

に大きいものを作っていたいて、この姿でどこへでも参れますし、人に後指をさされても、ちっとも恥かしいとは思いませんから、結構なものでございます。ことに、おりえ様は、お国へお戻りになって国中を見物なさるのですから、お仕合わせです。第一、お仕置にしても、泥棒などと同じ生胴や磔ではなく串刺しにおなりですから、国守の姫様と同じ格式でございます」

とにかく、おすてさんは余ほどお仕置が好きらしい。殿様も「たいした者」と言われたけれど、つき合わされる方は楽じゃない。お焼印だって本来なら額だけでよかったというのに、背中にまで特別大きいのを押されてしまった、今だにうずく。お仕置にしたって百年ぶりとかいう極刑になるというのに、姫様並みだの、うらやましいだのと結構にいうのだからかなわない。

「道中は目簾とか、うかがいましたけれど、唐丸簾とか申すものでございましょうか」

「はい、さようでございます。竹の簾の中に囚人を坐らせ、青竹を通して担ぎます。横に合器口があって、お召上り物はそこから食べさせて下さいますし、下には糞落しが開いておりますから何のご不自由もありません」

「それでは先日のお網の袋よりは楽でございますねえ」

「ああ、あれは特別でございます。あんなものに何日も入れられていたら死んでしまいます。網の袋には、今少し大きいのもございますけど、それはお簾の時、お縄のかわりに使うのです。この袋は、普段は斬殺を片づけるのに使います。あれはバラバラに斬った首や手足をまとめておくものでございますよ」

「どおりで、出てから拝見しましたら余り小さいので、びっくりいたしました。入っている間中、それはきゅうくつで苦しくて本当に辛うございました」

「そうでございます。でも、もうあんなものにおはいりになることはございせん。唐丸の時は、お召物もちゃんと下さいますし、雨の時や夜の間は油桐をすっぽりかけますから、よくお休みになれます。ただ二十日余りもかかりますから、お尻が擦れてきます。ですからお簾の中では始終体を動かして簾に当たるところを変えていらっしゃらなければいけません」

「よいことをお教え下さいました。でも足枷などで身動きできますかしら」

「もちろん、そう勝手にはなりませんでしよ

うけど、送りの時のお縄や枷は、ちゃんと加減して、いつもほどきつくはないようにつけて下さいます。それに坐り方も、尻を落して足を前に組んで足首を枷で止めるのですから、痺れがきれることもありません」

「まあ、あぐらを組むのですか」

女だてらに、あられもない。どうせ短い着物にきまっているのだから、せめてちゃんと坐らなければやり切れないと思うと、

「殿方は、まだようござんすけど、女がきつちり坐っているのは、用が足せません。だから女は足を組むか立膝にさせられるんです。しかし長い道中には、足を菱に組んでおかないと、向うに着くまでにお尻がただれて、ひどいことになってしまいます」

あたしは、思わず顔が赤くなってしまふ。「それで用を足す時には、どういたせばよいのでしょうか」

「いつでも、そのままでもよろしゅうございます。何も気がねは無用、誰も、何も申しません。牛馬と同様でございます」

おすてさんは、きっぱりと言い切る。取りつく島がない。身体中が、かーっとなって物も言えない。

「いつでもと申しましたが、なるべく出立の

前になさった方がよろしいでしょう。その他途中で休む時になさればよろしゅうございます。しかし定めは垂れ流しが掟ですから、でも、ご遠慮にはおよびません」

それにしても、おすてさんは普通の女には羞かしくて言えないようなことを、澄ました顔でずけずけ言ってしまう。同じことを言うにしても、もう少し相手の心中を考えてもらえればよいものと思うが、もっともこのおすてさんは、そんな目にあわされるあたしが羨ましいのだから手におえない。

まだ夜が明けない暗い中から、牢の外で人の気配がする。そして牢の入口が開いたのであたしは土の上に坐り直す。「出ませいっ」と声がかかるのを待って入口より這い出ると直ぐ立たされて両手を鉄につなされ、糠袋をつかって身体を念入りに洗われる。おすてさんが剃刀と鎌を持ってきたので、あたしはまた身体がぞくつとする。おすてさんは女達に手伝わせて身体中をすっかり眉まで剃ってしまう。今度は髻を解いて鎌を逆手に持つと、髪の毛をぶつりぶつりと引き切ってしまう。あたしは涙が出てとまらない。女の誇りの髪の毛を無造作に切り払われてしまった。使わ

れなくなったお馬は、たてがみも尻尾の毛もすっかり切り払い下げられるけれど、あたしも同じ姿にされてしまった。お馬の毛は厭仲間の役得だと聞いたけど、あたしの髪の毛はどうするのかしら。おすてさんが、やさしく涙をふいて下さる。桶をとって簀を敷いた上に立っていると、新しい着物がくる。薄い浅葱っぽい色の木綿のを、肌着と上着を重ねてから、片手ずつ鉄からはずして、袖を通される。先ず肌着をきっちり左前に合わせると天竺木綿が一反きて、腰から胸元まで念入りに巻きつけられ、それをまた、糸ですっかり止めてしまう。なるほど、こうして胴締めをしておけば籠入りの長旅でも大丈夫でしょう。上着の前を合わせると、それでも膝のあたりまであるので、ほっとする。いくら努めても恥かしいものは、やっぱり恥かしい。これも左前に合わせて、荒縄を腰に四回、巻いて前で男結びにしている。荷物並みらしい。

おすてさんが牢の外へ声をかけると、牢役人が七郎どのと入ってくる。あたしの囲りに立って、あたしの両手を鉄から外して後に回し、お縄をかけ始める。締め具合を試しながら、一々結び目を作って丁寧に括り、編んだように縛り上げられる。七丈ぐらいもあった

かと思われる長い赤茶色の細引が、二筋並びに上半身をきっちり巻き締めて、両腕を背中に組みつけている。おすてさんが小声で、「このお縄は、りえ様のお世話で縛り首になられたお女中の血で染めたお縄で、深見様が特にご縁の深いものだからと申されてお使い下さったのでございます。この血縄と申しますのは、常の細引きにくらべ大変丈夫で、しかも決して解けたりゆるんだりせぬものだからでございます」

と教えて下さる。

先に死んだ罪人の執念のこもった血で染めたお縄で縛られれば、あたしもとても助かりっこはないでしょう。おすてさんは、二十日も縛られ放しになるあたしに、そんなことをくわしく聞かせるとは、少しひどすぎるでしょう。

後へ回って結び目を調べていらした七郎どのは、ゆっくり前に回って今一度、胸元の締め具合を見て一足下ると、横の役人が、

「お見事でございます」

と声をかけ、七郎どのがうなずかれる。これは、きまりの挨拶らしい。それから七郎どのは、あたしに面と向って、
「りえ殿には今般重きお役を勤めさせられま

すること、祝着至極に存じます。道中は我等がお供つかまつりまするによって、いささかのご懸念にもおよびませぬ。また、国表において、すでにご下知により万端の用意をととのえております故、一切おまかせいただきますとござります」

と、あらためて挨拶されたので、あたしはちよつとまごついてしまつたけど、

「おねんどろなるお言葉、痛み入ります。君のご諛により特に選ばれました上は、立派に勤めさせていただく所存でございます。このたびのお役は、百年ぶりの女のお仕置とかうかがっておりますが、おなごと生れし身には、このような晴れがましいお役はまたとあるまいと存じられます。なにとぞ最後まで、よろしくお引き廻しのほど、あらためて願ひ上げます」

と挨拶する。七郎どのは、

「承知仕った。殿にもお言葉通り言上いたします。では、外にお乗物の支度がととのつております故、お出まし下されませ」

と一礼して歩き出す。くぐりを出る時、あたしはまた、髻のあるつもりで頭を低くして通つてしまふ。まったく習性となるとは、このことでしょう。

それにしても、髪の毛を今少し切り揃えて下さればよいものを、左の目の上に後れ毛が下っているのに、右のあたりは短かく切つてすうすうしている。

矢来の中の筵の上に安座に坐らされて、両足首の重なったところへ、いかめしい足枷をとりつけていただく。けやきの木に二カ所、くぼみをつけたもので、両足首を挟んで二つの角材を鉄のたがでとじ合わせ、さらに釘で打ちつけてしまふ。足枷の穴の中は、とてもなめらかにできているけど、少しのゆるみもなく両足首を締めつけているので、組んだ足は、どっちにも動かせなくなつてしまつた。

矢来の外に竹の籠がある。なるほど編みかけで、割竹の先が上を向いて花びらのように突っ立っている。下には短い足がつけてあつて、籠の底は地面から五寸ぐらい上つており真中は穴があいて、その周りは別の極く細い竹で籠目に編んだものが張っており、小者が割竹を左右に分けて持っている間から抱え込まれて穴の上に尻を下ろす。

「轡をつけます」

と後から声がしたので口を開くと、この間の金具を啞えさせられ、後へ引き寄せて止められる。次に着物の裾を後へ引いて捲り上げ

お尻を出され、「ここを止めて」と、女子衆に裾を縫いつけさせる。裾を汚すのもいやだけど、捲られてしまふのも、あまり嬉しくない。

「よし、編み上げませい」

の声に、向うに控えていた職人たちが進み出て、仕事を始める。たちまち籠の上を、きれいに編み上げてしまふ。頭の上のところに太い丸竹を乗せ、口のない竹籠の中に編み込まれている。割竹の表を内へ向けてあるから中に入っているあたしは危くない。

七郎どのは、籠目をあらためておられたが木の札を二枚、籠の左右にとりつけられる。そして小声で「ご直筆です」と言つて、ちよつと見せて下さる。「逆罪、理恵」と立派に書いてある。何とも晴れがましくて気恥かしい。とにかく人様に見せびらかす姿じゃございません。

「油単をかけて見よ」

ばさばさと油紙を拡げて籠の上からかけ、切れ目のところから長柄を出すと、すっぽり包まれる。これなら雨の日にも漏れないでしょう。

陸尺がきて籠が上り、お馬場を抜けると、裏木戸のところに供の衆が列を組んで待つて

いて、列の中ほどに籠が入ると、直ぐ出立する。間道を通ってお馬場の先のあたりで東海道へ入る。子供たちが「罪人だ、罪人が通るぞ」と大声でわめきながら寄ってくる。あたしは、あらためて我が姿に気がつく。足首を固めた枷は籠の前の方にとりつけられ、上半身の縄尻は籠の後へ出して外の親骨に結えつけられ、口に噛んだ轡で、顔を上げたまま身動きもできないように後へつながれているから、女だてらに大あぐらで反身になったままどうすることもできないので、仕方なく正面を見据えている。

「お仲間だ、見ておきな」

誰かの声に、ふと気がつく。いつの間にかうとうととしていたらしい。そして左手を見てハッとする。磔がかかっている。鈴が森だ。列は足をゆるめ、籠をお仕置場の方へ向けてゆっくり歩く。罪人は、まだ若い男だけど、一丈ほどの柱に、大の字に括られて死んでいる。お腹の両側からはらわたが出て、はえがとび回っている。頭を落しているので顔がよく見えないが、お腹があんなになるまで槍で突かれるのは、どのぐらいかかるでしょう。その間、ずい分と苦しいことでしょう。あたしも、あんな風になるのだから、よく見てお

きましよう。手は開いたまま下っている。急所急所を括られているから、どんなにもがいても最後は体の力を抜いただけの姿になるらしい。顔は、だらしなく口をあけたままになっていくけど、あたしは串刺しだから上を向いて果てるんだし、お腹を突かれるんじゃないから、あんなに見苦しくはならないはずだし、本当に磔にきめないでよかった。隅の方を見るとお仕置敷がちらかっている。あらかた骨になったのもあるし、まだ新しいものもあるけど、胴ばかりで首は見当らない。それにしても白骨になるまでには、幾月ぐらいかかるものかしら。半年以上は、こうして放り出されたままになるのでしょうか。まあ、死んだ先のことまで心配したって始まらない。生きている間だけでも恥かしさや苦しさは、十分たんのうさせられるんだから。

行列はまた、元どおりに歩き出す。こうして行列を組んで歩いていると、一人旅の人たちはどんどん追い越して行くから、あまりはかどらないでしょう。箱根は明後日、越せばよいところか。

だいぶん下腹が張ってきた。今朝の薬湯は随分、多かったから無理もない。何とか一休みするところまで、堪えなければならぬけ

ど辛抱できるかどうかかわからない。休まずに神奈川の宿まで行くのかしら。

やっと宿場の少し手前の茶屋で一休みになり、並木の間の草地へ籠を下され陸尺が向うへ行くと、もう恥かしさも何もなく一気に用を足してしまう。なるほど、これは便利なお籠だ。けれど二十日もこのまま過ごしたら、下はさぞ見苦しくなるでしょう。しかし天下晴れての唐丸送りの罪人なのだから、誰に遠慮もいりゃしない。

役人の方がこられて、轡を外してお茶を飲ませて下さる。轡をはめられ口をあけているせいか喉がかわく。お代りをいただいてからまた、轡をつけていただく。人様は、どうぞ覧になるか知らないけれど、この姿は、どうひいき目に見ても畜生だ。もっとも畜生だって四つ足は自由に動かせるのに、あたしは手足を縛られているのだから、それ以下にちがいない。あたしは今では、こうして大勢の人に見物されても何とも思わなくなり、鈴が森のお仕置場を見ても平気でいられるようになったのは、どうもおすてさんの感化に違いない。以前のあたしだったら、あんなお仕置を見せられたら、気を失ってしまったでしょうに。まったく、おすてさんのようにお仕置の

好きな人はめずらしい。

行列は、ゆっくり歩いていようでも、日暮れには戸塚の宿場に着く。小さな宿に入り簀は庭に下ろされる。どうやら藩の定宿らしい。馬小屋の隣の物置の戸を開けて、中へかづぎ込まれ外へ向けて据えられる。一しきり騒がしくなつて、入口に高張提灯をかけたたり番人の腰かけなど持ち込んだり、忙しそうに立ち働いている。

宿の者たちが出て行って見張りの足輕だけになると、七郎どのと医者の本道様が入つてこられ、あたしの轡を外され、「気分は、いかがかな」と言いながら、簀目の間から手を入れて脈をとられる。七郎どのが「直答いたせ」と言われるが、口の中がねばつて声が出ない。唇をなめたり唾を呑み込んだりして、やつと、

「お蔭をもちまして、ゆるりと過ごさせていだきました」

と答えたけれど、変な声になつてしまふ。本道様は直ぐ前に回つて合器口ごきぐちからのぞいて「喉を痛めたのう」と、ひとり言のようにつぶやくと、七郎どのが、

「轡のせいでござろう」と言われたので、あたしは、

「未だつけ慣れませぬ故、お恥かしゅうございます」

と、お答えする。馬じゃあるまいし、轡をつけ慣れた御殿女中など、どこの世界にだっているものじゃない。

本道様が、うなずきながら出て行くのと入れ違いに、年寄りの足輕が盆を持って入つてきて、一口で食べられるように小さく握つたお握りを食べさせて下さる。お茶まで飲ませていただき、あたしはホッとくつろぐ。

轡というものは窮屈なもので、舌も動かせず、口をあんぐりあいたままにされて、頬は裂けそうだし唇はカラカラになるし、まったく人の身につけるものじゃない。

ぼんやり考えている中に、外はすっかり暗くなつて、いつの間にか高張提灯に火が入っている。そして、あたりも大分、静かになつてきた。見張役人が交替するのと一緒に本道様が土瓶を下げてこられる。お薬は口当りは悪くないが、大きな湯吞で三杯も飲まされると少々辟易してしまふ。

今頃こんなに飲んだら、夜中に何回も用に立たなくてはならないと思つて、ああ、あたしは唐丸簀の中だつて、このまま用を足せばいいのだ。誰に気がねもないのだ。それ

に簀の下には穴が掘つてあつて砂をおいてあつたから、すっかり人まかせの砂雪隠さ。

暗い中から忙しそうに人の動く気配がして出立の準備をしているらしい。

昨夜の足輕が朝飯を食べさせて下さる。食べ終ると、お薬がきてどつき飲まされる。今ごろこんなに飲んだら道中が恥かしいけれど、口書にはちゃんと男の格式で書き判して罪人になつたのだから仕方がないと思つて、だまつて飲み干す。

今日は、いよいよ箱根越えだけど生憎朝から小雨で、すっぱり油單を被されて、何も見えない。それでも陸尺の息使いと、下から吹き込んでくる冷気で、行列がお山にかかつているのがわかる。

あたしが十二の年に殿様のお目にとまつて江戸表へお供して上つた時には、お関所もお駕籠の格子をあけて通り抜けただけだったけれど、こうして罪人になつて下る時には、どんなことをして通るのでしょうか。身体改めというのをされそうな気がして、心がさわいで仕方がない。あたしは罪人だから、どんなことをされても、いやとはいえない。けれど当藩の手切れなら、お役の中だけだと思える

が、他所者に何かされるのは恥かしい。

行列が止って先の方で声がする。お関所らしい。ゆっくり歩き出す。また、止ると籠は石だたみに下ろされ、カサカサと油単のつけ紐をといてまくられる。お役所の中から役人と一しょにお婆さんが出てくると、合器口から手を入れてあたしの胸もとをさぐる。あたしは思わず身体を固くするけど、お婆さんはそんなことに向かまわず、左の乳をゴツゴツした手でギュウとひねるので「アッ」と声を立てると「イヒヒッ」と、いやらしい笑顔を立てて、今度は右の乳をつかんで、あたしの顔を見ながらねじあげ、あたしが眉をよせてこらえるのを、さも面白そうに眺めて、ようやく手を引く。そして、さもけがらわしいというように手をはたいてから、役人に向かって「確かに女でござります」と言うと、役人は上座に向かって、

「搦みの女。唐丸籠一個」

と呼びあげ直ぐ籠が上ってお役所を出る。ふと見ると、木戸のそばに三道具が立っている。そうそう関所破りも磔だったけ。でもいかつい役人たちに、あんな道具で押さえられたら、さぞ悲しいでしょう。

小雨が、顔や組んだ足にかかって冷たい。

油単もかけずに、さっさと行くけど、お供や目付衆まで、雨具を外したままだ。関所から一刻も早く立ち去りたいのでしょう。

やがて茶店などのあるところに止って、雨具をつけ、あたしにも油単をかけて下さる。

山の雨は冷たかったのでホツとする。

よい案配に、大井川も何ごともなく越えて明日あたり、見付から天竜川を渡るらしい。しかし、あたしは箱根で雨にあたって身体が冷えたせいとか、どうも昨日あたりからお腹の具合が悪くなって、まだ午前中なのに、もう二度も小用してしまった。行列が止まるまでこらえようと思ったが、苦しくて恥も外聞もなく、歩いていく時に用を足してしまった。それに、お腹の具合が悪いのは胃腸ばかりではなかった。昨日から始まっているのだ。気分であっていいけど仕方がない。でも、道中とこころかまわず汚れていると思うと、恥かしくて顔が火照ってくる。

舟で桑名へ渡って鈴鹿を越えるのかと思っていたら、青墓赤坂を通過して琵琶湖に出て、木之元へ抜けるらしい。なるべく裏街道を通過していただいた方が、ありがたい。もう大分慣れてしまったけど、やっぱりこんな姿を人目に晒されるのは恥かしい。それでも、お腹

の具合がよくなったので助かった。お薬湯が変ったら、吉田に着く頃には、すっかり普通の身体になり、その上、今切の関所を通るときは「搦みの女、一人」と読み上げただけで素通りできたし、あたしも道中は、大分なれてきた。最初、お尻が傷になると心配されたが、少しづつ、身体を動かすことも呑みこめた。あたしは大体、一日中じっと坐っているのが役目みたいなものだったから、身体が動かせないのは大して苦にならない。

見覚えのある山が見えてきたと思ったら、もうお国入りしていた。お城が見えたけど、町には入らず川伝いにお牢屋敷に入った。こんなところにお牢屋敷があるとは、ちっとも知らなんだ。長屋門に入って横手から木戸を通り奥へ行くと、直ぐに木戸を閉めている。ご用心のよろしいこと。

籠のまま格子戸の中に昇り入れられて、陸尺と入れ替えに丸腰の者達が周りに立つと、籠をとき始める。あたしは足枷のまま抱え出されて土間に下ろされ、道具を使って足枷を外されたので坐り直そうと思ったら、さすがに十七日間も坐ったままでいたので、まるつきりいうことをきかない。少しづつ足をのばしている中に、お縄をとかれ着物まですっか

りとられ、そのまま土の上に仰向けに寝かされ、両手は頭の上にのぼして押さえられ、本道様の診察を受ける。介添の二人と二人がかりで頭から足の先までくわしくご覧になる。

本道様が立たれると、またあたしの身体は持ち上げられ、馬盥か湯灌盥のような大きな桶の中に入れられて、髪まで一緒に丸洗いに洗われる。小者どもは、女の身体が珍しいのか、面白そうに雑巾でゴシゴシ洗ってくれるけどあたしは身体中が強ばって固くなっているから、身動きもままならず、手足を動かされるたびに、痛いやらきまりが悪いやらで、お湯のせいでなく、身体中が赤くなってしまう。あたしは轡をつけられたままなので口に入った湯を吐き出すこともできずに飲んでしまいうけど、いくら自分の身体を洗ったお湯でも、飲まされるのはかなわない。

やがて皆の手で立たされると、三人がかりですっかり拭いて下さる。お乳だの、どうでもよいところばかり丁寧に拭かれて、すり切れそうにピリピリする。いずれにしても、女の罪人は表向きのお仕置だけでは済まないのだそうだから、好きなようになされ。

間もなく拭き終り、着る物を出されたので見ると腰巻の長いらしい。手をあげて腋の

下に当てて巻かれると膝の下まであるのでホツとする。つけ紐もちゃんとついていて、前へ廻して乳の上で結ばれ、続いてお縄をかけられる。後手かと思ったら、肩から胸を縛ったお縄にひじをくぐられただけで、小手はそのままだ。轡を外ずされてから牢屋口まで抱え込まれて、後で錠が下りる。

さて、一度立ち上ってからきちんと坐ろうと思っただけ、まるっきり身体がいうことを聞かない。

「そのまんま、楽においはい」

気がつく、奥にお婆さんが一人坐っていて立ちかける。見ると額に小さい畜生の御印がついている。身巾のせまい白い単衣に荒縄を腰に巻いて、髪は大分白くなったのを後に小さく束ね、後れ毛をかき上げながら立ってきて、背中に手を回して起してくれて、

「おぞいもんじゃけど、蒲団を下されましたでええ、早うお入りなされとこと」

と、向うへいざらせる。なるほど蒲団が敷いてある。浅葱色の薄い小さな蒲団だけども馬小屋の土間の敷藁に比べれば、板の間の上のお蒲団なら極楽だ。それに、国訛りを聞くのも十幾年ぶりでしょう。江戸屋敷でも、内輪では皆お国訛り丸出しで、おしゃべりして

いたつもりだけど、やはり江戸言葉がまじるし、ことにあたしは上意で江戸女の家来ばかりつけられたから、すっかり江戸言葉に染まってしまう、屋敷の国訛りはこのお婆さんのような調子にならない。

蒲団に入るのを手伝ってもらって、横になる。おや、枕は材木の切れ端だ。それでもないよりはましだから、頭を当てるに掛け蒲団を着せかけて下さる。足を伸ばしたら爪先が出たので、そっと引っ込める。半月余りも籠の鳥で、身動きも出来ずに坐っていたので、疲れが身体中におおいかぶさってくるような感じがして、何だか疲れの波に押し流されてしまいそうな気がして心細い。

相囚のお婆さんは枕元に坐って、自己紹介やら何やら小言で話を始めたので、相槌を打っていたけど、たちまちうとうととして、お婆さんの声が遠くの謡いのように聞こえる。文の段のようだと思っていると、柏崎のようでもあり、それともお経か知らんと思っっている中に聞こえなくなってしまう。

肩のあたりが冷や冷やすると思ったら、目が覚めた。どのぐらい寝ていたんだろう。畜生じろしのお婆さんが覗き込んでいます。

「お目えが覚めなはったかいの」

あたしは「はい」と返事をしたが、次の言葉が出ない。お腹に力を入れて大きく息を吸い込んだら、あくびになってしまったので、急いで口に手を当てようとしたら、細引きに肘を引き止められる。そうそう縛られていたんだっけ。息をととのえてから、

「寝過ぎてしまつて」

と言つて起きようとする、お婆さんは、

「二、三日は寝ておいたほうがいいこと」

と言いながら蒲団を直して下さるので、あたしはまた、枕を当てる。身体中の精がつきたように、けだるい。

ここへ運び込まれてから、今日で五日目らしい。最初の晩は本当にぐっすり寝込んでしまったので、一晩たったのか二晩たったのかよくわからない。とにかく朝夕二回、本道様が脈を取り薬を下さるし、二度の食事、見かけは粗末なお結びだけど、中には色々なものが沢山入っている、日に日に元氣をとり戻して、今日は半日、坐っていられた。

お婆さんは問はず語りに色々なことを聞かせて下さったので、大体の様子も呑み込めてきた。ここは死囚牢といって、生胴や獄門、磔など死罪の囚人ばかりが入れられる牢屋で三房ある中の一つを、特にあたしのために空

けていただいたとのこと。あたしの世話をすするため、この永牢者のお婆さんをつけられたこと。この屋根の下、あたしの入っている牢の真正面のところは冬の首斬場で、雪囲いをめぐらした中で色々な斬首や生胴、それに試し斬りなどが行なわれ、前に見える窪みが血の溜りで、向うに半分見えるのが、生胴や試し斬りの場所になっているので、冬の間は、この牢の罪人は月に何回かは身を斬られる思いで過ごすこと。お調べ中の者や並の囚人のお仕着せは、このお婆さんのような白木綿の獄屋衣ひとやぎぬで年二回、下されること。また、打首より重いお仕置になる者には、首が斬りやすいように縛ったまま着物を脱がせられるように、着物でなく男も女も、あたしのように白木綿の湯もじ、一具を着せられるという話。確かにこれはよいことです。こうして肩を出した姿なら、一々肌脱ぎにさせたり襟なしの着物に着かえさせなくても、いつでも直ぐ斬れるでしょう。

あたしのお仕置は江戸表へ無事到着の飛脚が届いて、折返しお仕置付がかえってくるので、多分二十五日ぐらいかかり、それから十日間ぐらい領内の主な村々へ晒しに出され、その後、お城下一円を引き廻されて、海に近

い下のお仕置場で処刑されるはずだということまで、すっかり聞いてしまった。

食事は、あたしの分はずっとごちそうで、色々のおかずの入った小さなお結びが五つか六つずつくるけど、お婆さんの分は、香の物の入った大きいのが二つだけなので、あたしのものが羨ましいらしい。

「重罪人のくせに、ぜいたくをしていると、後生でろくなことはない」

と、いやみを言うから、

「お仕置に上った罪人が直ぐ死んでしまったら、ご見物の衆がっかりなさります。あたしは身体に太い木串を通して、生きながら地獄の苦しみを受ける有様を、皆様にご覧いただかなければならないのでございます。こうして今おいしいものをいただくのも、決して楽をするためではなくて、お仕置柱の上で少しでも長い間、恥かしい姿でもだえ苦しむための、生地獄の身仕度なのでございますから、いただく者の心の中を察して下さいまし」

と御殿女中にくまれ口を聞かせておいてから、おいしそうな匂いのする鳥肉の入ったお結びを一つ、

「どうぞ、ご召し上り下さい」

と、にっこり笑って差し出すと、一度手を出しかけてから、急におそろしそうに引っ込めて首を横に振る。あたしは、おかしいのをこらえて、

「そうでございますか」

と言って、食べてしまう。いい気味だ。自分の方が軽い罪で古参だというので、妙に人を見下して威張っていた仕返しできて、す

っかりよい気分になる。

このお牢屋は、あたしのいるのが真中で、間口九尺の奥行も九尺ぐらいだから、畳にすると四畳半ということになるはずだけれど、江戸の四畳半と比べると、本間だから大分広い。入牢の時は夢中だったから気がつかなかったけれども、お婆さんの話だと、両隣は物置で、入牢中に死んだ重罪人だの、重いお仕

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しましては

枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、安井喜久子夫人が夫婦プレイの緊縛アイデアを募っておられますから、同好の方は御遠慮なく編集部気付にて御投稿下さい。投稿者全員に対して喜久子夫人のプレイフォトを贈呈いたします。アイデアの参考には、四月号の「安井喜久子夫人を訪ねて」／SM一〇〇問／をお読み下さい。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下さい、折返しお返事差上げます。

置になった罪人のお仕置敷を塩漬にしてありその両隣が、ここよりずっと大きい三間間口のお牢になっていて。その向かって左の方が男牢で、右の方が女牢になっていて、相対の罪人がきた時や、あたしのように他の囚人と一緒にできない、特別悪い重罪人（お婆さんは、わざわざ註をつけた）などは、この小さな牢に入れられ、死罪より軽い、普通の罪人や、お調べ中の罪人は、築地の外のお牢へ入れられているそう。だから普段は、ここには男も女も二、三人ずつぐらいしかいないのだけれども、このところ年会のご法事が続いたので、男牢には二十人ほどいるそう。木戸口は左手だから、男囚の出入は見えないけれど、昨日はあたしと同じ湯もじ一具の女が前を引かれて通った。格子の前は七、八尺の土間で、その向うも格子になっており、外側に敷居がついている。冬の夜と嵐の時だけは、戸を立てるそうだけれど、それ以外は年中、吹きっ晒しのままだそう。その外はずっと広く、三間ぐらい屋根になっていて底がついており、五十坪ぐらいあるそうで、そこが冬のお斬場で、その先の築地で囲まれた中庭が、普段のお斬場だそう。

（未完）



浪花放談

データーと籠抜けのはなし

能 美 積

データーの話

今回から、少し文体を変えさせて貰う。別に他意はないが、要するに文章の簡素化と諒解して下さい。

さて先日、同僚二人と酔っ払って空車を求めていた時の事である、私のような模範運転者は例外として？ 最近のように不良運転手が多いと、タクシーに乗るにも随分骨が折れるものである。一寸はなしが横道にそれるが、この間、ホステスとおぼしき女性を拾って乗せた時、
「この頃の女給さんは、随分威張って、それで結構、儲かるんですネ」

と嫌味を言ったら、

「そうでもないわよ。ホステス扱いの上手い客なら、うんとサービスしてんのよ」

と、ほざきやがった。冗談ではない。客扱いが上手いホステス、というのなら話も解るが、ホステス扱いの上手い客なんて、高い金を払って、なんで気を使う必要があるのだろう。こんな野郎がいるから、女上位時代なんと言われるんだと、情けなくなってしまった事がある。酔っ払って車を拾うとなると、道路の真ん中に寝ころびでもない限り、容易に乗せてはくれないものである。だからといって横になっては命が危いから、車道にはみ出て、一生懸命手を振っていたら、鼻の先を

かすめて通り過ぎた小型車がある。かすめただけなら問題はないが、この車、前に出していた右足の上を踏んずけて走り去った。商売柄、ナンバアは読み取れなくとも車の識別ぐらいはちゃんと出来る。翌る日、右足が二倍ぐらいにふくれあがったので、乗車拒否、並びに轢き逃げの罪で訴えてやる、と電話したら、事故係が飛んで来て、平身低頭するもんだから、同業のよしみで勘弁してやる事にした。が、脚が腫れたのでは仕事にも行けず、しばらく振りに、休養が取れる身とは相成った。女房に気兼ねして、朝っぱらから奇譚クラブでもあるまいと、女性週刊誌なんかをひもといてみたのであるが、も一つ、面白くな

い。ここらで一杯欲しい処であるが、傷に良くない、という医師の御託宣で、一升瓶は洋服ダンスにしまわれて、鍵が掛けられている始末。女房が、洗濯に夢中の隙に、キユウス（湯沸かし）を持って隣家へ貰い酒をする事にした。壁伝いに、ようやく入口まで匍つていった時、会社から使いの者がやって来て、「遊んでいて月給貰うのは辛いやろおもうて仕事、持って来てやったんや」

そうである。仕事というのは組合員全部から政治、社会、趣味、娯楽等々のアンケートを取りたいから、その原文を作れ、というものの。参考資料もちゃんとあるし、誰にも出来る簡単な物であるから嫌とも言えず、片脚を投げ出して鉛筆を握ったのであるが、その内に私は、痛くない方の膝をハッタと叩いた。素晴らしい事を思いついたからである。

① 悪書について

一、奇譚クラブという雑誌を知っているか。

二、知っている人は、読んだ事の有無。

三、読んだ人は、その感想及意見。

とやったのである。このアンケートは労組で集計されて、上層部、つまり全×労に報告し、選挙かなにかの参考にされるのであろうが、私がその任にある処から、提出する際に

その部分を削除する事は容易なのである。もし組合役員から文句が出て、始めから削られて元々のはなし。

翌朝、事務所に電話して、専従の事務員であるS子をやんだ。一刻も早く結果を知りたいがためであった。

この辺で、お断りをしておく必要がある。前の回で紹介した、房代と私との変ないきさつ、決して忘れた訳けではない。後述する。

S子について少し書かねばならない。はなしが例に依って前後するが。

或る日、トイレに入った。みると便器に鮮血が飛び散っている。使用者が殆んど男性に限定されているから、S子の仕業に違いない。綺麗な綺麗なS子が跡始末もやらんとはなんたる事か、と事務所に戻ったがいない。探すと、更衣室に青くなってへたっている。

アレかっとなぞねると、否、という。それ以上、きく訳けも行かず、車で送り返す事にした。車の中で、もう一辺病名を尋ねたら覚悟を決めたか、小さな声で、痔ですと言った。そんなら私も経験がある。もう一年近くも出血が続いているが、恥かしくて医者にかかった事がない、というのである。俺ならとも

かく医者に見せるのに、なにが恥かしい事があるかっとなぞ鳴って、そのまま病院に直行した。

実は彼女、四国の高松から単身上阪して独身寮に住み込み、夜学に通っているほどのしっかり者だが、ケツをまくるとなると、矢張り辛いらしいのだ。洩るS子をおせっかいな私は、強引に診察室に押し込んだ。結果は脱肛がひどく、手術の必要がある、という事になった。S子は家族に連絡して付添いに来て貰った上で、と言うのだが、多寡が痔の手術ぐらいで、その必要はない、と私は私の意見を通した。愚妻とは知り合っているので付き添い婦を命じたのである。処がいざ手術のだんになって血液が不足しているから、輸血が必要というのである。輸血の場合、大阪ではあらかじめ血液銀行に預血をせねばならないから、私を含めて三人が預血にいった。手術完了。

二日目に見舞いに行った。扉をあけると、看護婦が病人の裾をまくって、これから治療を始めようとしていたが、私をみて、ちゅうちよした。

「どや、ちっとは楽になったか」

私は、付き添いとして傍らにいた愚妻に声

をかけたのだが、看護婦は、勘違いしたらしい。というのも、S子の性は能美といって、つまり私のペンネームと同じなのである。もつとくわしくいうと、私が初めて奇クに投稿する際にペンネームがほしくて、あれこれ思案している時、偶然S子が眼の前に現われたので、無断でその姓名を拝借したという、いきさつがあり、S子の病状を医師に尋ねる時も、能美さんですね、と尋ねられて、そうですと答えていたので親戚か、もっと近い、つまりS子の夫だと思い込んでしまっていたのであろう。

S子は、真っ赤なフンドシをしていた。フンドシとは言わずに、なんでもT字帯と呼ぶらしいが、私は今更出て行くのも変な気がして、黙って見ている結果になってしまった。

看護婦がフンドシを取ると、そこにはあるべき物がある。女房が、めくばせしていたのだが、私は素知らぬ振りをしていた。あおむけに寝ていて尻の治療が出来るのかいな、と思っているとは違っていた。看護婦は細いビニールの筒をあてがった、とみる間にスルスルと筒が内部へ入って行く。流石に正視出来なくて、私は目を管の一方の端に移動させる。そっちの端にはシビン（尿をとる硝子瓶）が付

いている。あつという間にそのシビンが満タムになってしまった。

我が愛する奇クファンに、こういう状況を憧憬される人もあったなあ、とその時、私は考えていたか……どうか。

話を元に戻そう。

三日目にアンケートの集計が出来あがり、S子が届けに来てくれた。女房の眼を盗んで素早く布団の隅に、ある物を忍ばせる。ウィスキーのポケット瓶である。同僚の口から女房にトクリとられて貰い酒。の一件を聞いてきたものとみえる。ここところが尻合ひ？の仲の有難いゆえんだ。

アンケートに、答えを寄せた組合員百五十八名。

その一の奇譚クラブを知っている者、八十三名。五十%の成績である。ただし、この数字は余り当てにならない。というのは、私の目算では真面目に協力してくれそうもないやから、約半数はいるだろうと踏んでいたから、強制した訳けではないが、どれにしようか？ なんて面白半分印をつけた者が半数いるとみた方が無難なのである。問題は読んだ事のある者にしぼられる。すなわち、その

二である。数、十六名。がたん、とへったが私は失望しなかった。むしろ感激したぐらいなものである。そして、その三の意見と感想を記した者は、たったの七名になってしまった。

その感想を読んだ上で、七名中、三人を選出した。一人は、悪書ではあるが、別に有害とは思わないし、この種のを批判する前に、もっとしなければならぬ事は沢山あるのではないか、といった意味の事を書いていた。今一人は、悪いかなにか知らないが、車の中で始終読んでるし、客にも見せた。書記長、お前も読んでみるや。という物凄いのが現われた。後の一人は、どうやらM傾向らしい、風俗奇譚の方が面白いし、他にも一冊、知っているとしていた。

六日目、出社すると、私はただちに「組合名簿を整理する」という理由をつけて、全員に本籍地や住所氏名を提出させる手はずを進めた。くだんのアンケートは無記名であったから、筆跡を鑑定し、同僚百六十数名中、僅か三人とおぼしき我が同志を探し出すためのものである。

その内の一人は直ぐに見つかった。仮にN

君と呼ぼう。本来だと、サジズムを好む者は小心者が多いとされている。が彼は違っていた。おまけに小心者どころか、二日酔い常習者で、社のお偉方からは不良運転者として眼をつけられていたのである。もっとも社から睨まれるような人間に、えてして好人物が多いもので、N君は、同僚間の評判は上々だった。私は種々なデーターを調べて彼に近寄った。一つ会社で働いていて、お互いに顔を知らない者というのは案外、多い。

「N君、今夜一杯つき合えよ」

彼は驚いた風で私をみつめた。

「なんで又、なんのコンタンかいな」

「別に、ただ一緒に飲みたいだけや」

「嘘やろっ。さてはデラに頼まれたな」

デラというのは配車係のあだ名である。凄いいホラ吹きで、大分前、本土を襲ったデラ台風にひっかけたんだそう。な。(こういう事を書くと、社内の何人かは私の正体を知るだろうな。それが楽しみ)つまり彼は、社の幹部から素行について注意するよう、私が頼まれて来た、と曲解したらしいのであるが、私は強引に南のバーへ誘った。成程、噂に違わず良く呑む奴である。一軒だけでは満足せず彼は、二軒目を行きつけのスタンドバーに逆に

私を案内してくれた。その店の三沢あけみにそっくりな女の子と、どうやら出来ているらしい、と私は、踏んだ。帰路、オリオン座の前を通ったら、終夜興行というのをやっている。縛りのスチール写真を覗いているので、「観るか？」と言ったら、黙って財布を取り出した。

「最近のは、さっぱり面白くないな。ベッドシーンよりも残酷ムードが多くて」

「なにいうてんねん。そこんところが受けるんやでえ。俺は好きなんやがなあ」

なんとも開けっぴろげな奴であった。

所で、そのN君が、S子と二人で歩いているのを偶然発見した私は、ひどく慌ててしまった。最近のS子は私を兄のように慕ってくれているのである。N君には、美人の彼女もいることだし、ましてや私同様に少々あの子があるとなれば、人事ならず心配になる。私は、私の女房を決して不幸な女とは思っていない。それでも時々、普通の男性のように愛してやりたいと思う事があるように、自分の性癖について、反省する事があるのだが、最近では女房の方が、それでは承知してくれず、

「くくってくれなくっちゃあ、嫌」

なんて仰有るから、いい気になって反省したことを、反省することにしてるのであるが、ことS子となると、矢張り普通の男性と添わしてやりたい、と思うのである。

ここんところは、少し変だが、要するにS子と縛りが、どうしても、結び付いてはくれないのである。N君の性癖については、その後、数度の交際で既に解ってしまった。しかも私のように優しいサジスト？と違って、相当強烈な模様であるから、尚更であった。思い余って、或る日、S子をお茶に誘った。

「俺に嘘を吐いても駄目だ、いいな」

「なんのこと？ お兄さん」

「お前、N君と交際してるんやろ」

「……」

「好きなんか……」

「うん、少し……」

「ホテルに泊ったことあるのか」

「いややわあ、変な想像せんといて」

「うーむ、とするとだな、あいつの事なんか

なんとも思っちゃあいないんだな」

「そうでもないけど」

「求婚されたら、一緒になる気か……」

「かもしれない」

「求婚されたことは、……あるの」

「ええ、しょっちゅう」

「なぜ俺に黙ってた……」

「だって、その内に相談しようと思って」

「よし、相談に乗ってやる」

私はS子を、三沢あけみに似た娘のいるスタンドバーへ連れていった。

「この店、知ってるわ」

「……………」

「ほら、あの端の子、Nさんに惚れてるんですって？」

「奴にきいたんだな。それを承知で、好きなのか」

「だってえ男の人って皆そうなんですよ。」

お兄さんだって、童貞なんかじゃあなかったって、姉さん言っていたわよ。フッフッ」

「つまり純潔なんて関係なしって訳けだな」

「あら、そうやないわ。あたしこれでも童貞なんよ」

「女の場合は童貞とは言わんよ」

「そうそう、処女っていうんです」

「その処女、おれに呉れないか」

「ううんと、困っちゃうなあ」

「俺よりもNにやりたいのだろう」

「そ、そうなるわね。御免なさい」

「これから映画、観に連れてってやろうか」

「あら本当っ。ネッ、お兄様。スエーデン映画の素晴らしいのがやってんのよ」

「エロ映画が好きなのかい」

「なにいつてんの。そんなんじゃないわ」

「しかし、スエーデンの映画は猛烈なエロが売り物なんだぜ」

「呆れた認識不足ね。短くも美しく燃えっていう純愛映画をやってるの知らないの」

「もう、みたよ」

「なあんだ、意地悪っ」

「ピンク映画、観た事あるか？」

「嫌よ、そんなん観たくない」

「Nの好きな奴を観せてやる。そんなら観るだろう？ 相談に乗るって約束したんだからな。嫌でも観せてやる」

こんな場合は、鬼六先生の映画に限る。少し遠い処だが「リンチと縛り」に連れて行った。看板を観ただけでS子はすくんでしまったが、私はさっさと中へ入った。こっちだっ

て顔の火照る思いがしているのだ。観賞後、

「どうだい、面白かったかい？」

「あれ、本当に映画なの？」

「どういう意味だい」

「信じられない、あんな映画が沢山の人に観られてるなんて……」

「……………」

「裸になって、その上あんな姿に括られて。ひどいわ、あたしには信じられない」

余程のショックだったらしい。私達が平気で観ているこの種の映画が、純心な処女の心には別世界の次元の出来事でもあるように受

取られたのに違いなかった。

「あの目玉のギョロツとした男がN君なんだよ。もっとも役の男は妻を憎しみで責めていたね。N君の場合は少し違うだろう」

「……………」

「愛情で君を縛る、つまり君がN君と結婚した場合、君の知らない方法で君を愛するだろうネ。それを承知なら私は、何も言わない。良いかね、結婚した後でN君は変態だったのよ、なんて騒いでも、もう遅いのだ。N君が

変態である事を私は責めない。何故なら私もそうなんだからね。ただ問題は君のような娘が、そんな愛情に耐えられるか、どうかだ」

「……………」

「そうだな、N君がだよ、真面目な変態なのだったら私は黙っていたかもしれない。しかし彼は、女のある事を自慢して逆に君の心を

魅き付けようとした、不真面目な恋をしている。ちがうかな」

「お兄さまは、どうだっていうの。真面目な変態だっていうの」

「……」

「あたしと彼との関係を、こんな形で引き裂いて、それでこれからどうするの」

「……」

「ホテルに誘っても無駄よ。私は行かない。

あんな汚らしい物をあたしに観せて、卑怯なやり方をしないでよ」

「S子、勘違いするな、俺には女房がいる」

「もう嫌っ。二度と口をきかないで」

その後の会話、その一

「書記長、今日は思いきり呑むでえ」

「いつも呑んでるやんか」

「今日は特別や。彼女に振られてなあ」

「へえっ、彼女って、バーのあれか」

「違うがな。ほら、組合事ム所の」

「Sちゃんか、……」

「あれっ、なんで知ってる？」

「だって事ム所には一人しか女はいない」

「あっ、そうか」

「惚れてたんかいな、……」

「そんなんと違うけどなあ、もう少しで戴きやったんや。それがコロッと変りよった」

「どう変ったい」

「昨日、ホテルに行ったんや、内諸やでえ。それも向うから連れて行け言いよってなあ。

……いざという時になって、あんた変な趣味あるって本当、って言いよった」

「なんの事やねん？」

「ほら例のあれや。どうやら奴（バーの女）

にきいたんやろうが。変てこりんな癖があるんやったら言えっていうんでなあ。あの女は

別や、お前には何もせえへん。そういうたんやが、あっという間に消えよった」

「そいつあ、惜しい事をしてもうたなあ」

「全くや。シミーズ一枚にまでなあってなあ、俺がシャワー浴びてる間に、（あんたが真面目な変態やったらいいけど、そうやないから絶交やっ）て訳けの分らん事言てなあ」

「諦めろや、女なんてそんなもんさ」

「あん畜生（バーの女）くだらん事をしゃべりよって。今夜は、ぎゅうと言わしたる」

「止めとけ。今夜は、おれんちで呑み明かそう。（一足先に会って相談の必要あり）」

その後の会話、その二

「あんた、Sちゃんに何かしたんと違う？」

「馬鹿言え、俺がなにをした？」

「だって変よ、可笑しな事ばかり聴くんだもん。兄さんの趣味はなんだとか、嫌らしいことをしないか、だって……変だよ」

「成程、そいつあ変だな」

「とぼけてんのネ。いっとくけどね、いくら隠しても私には解るのよ、あんたの事は」

「ははーん、まさかS子と俺が変な関係だなんだとは言わんだらうなあ」

「そんな馬鹿なこと、ないでしょうねえ」

「止せ、Nが起きるじゃあないか」

「よく眠ってるわよ。この人、家を間違えてるのかしら。呑んだら泊って帰るのね」

「可哀想に失恋したそうだよ。泊めてやるぐらいの義務はあるさ」

「それ、なんの事？」

「S子に聞けよ。ああー眠い」

籠抜けの話

もう一度お断りする房代との一件は、決して忘れてはおりません。でもね、ホットニュースが多くてねえ。SMオナリーの奇クにもたまには、こういう息ぬきの落書もいいのではなからうかと、勝手に思ってるんですが、

如何なもんでっしゃるか。

大阪で代表的な御堂筋を走っていた時である。和服の令夫人が手を振っていた。丁度、御堂筋の中間あたりであったから、客は駅前までと相場が決まっている。つまり、せいぜい二百円以内の客で、こういう客を我々は、桁落ち、という呼び方をしている。その桁落ちは黙って乗り込んで来て「どちらへ」と尋ねても応えがない。序でに一言するが、よく車の外から「何処々々まで行ってくれるか？」なんて伺っているお客があるが、あれはいけない。先ず強引に乗り込む事なり。自動扉を開けてくれない時には、思いつ限り遠方、例えば京都あたりを言ってやれば良いのである。目的地へ着いたら、いかにも急用を思い出した態で、さっさと降りちまえばよろしい。少々毒づかれるかも知れないが、舌の一つも出してやれば、この勝負は客の勝ち。ただし行先を告げぬ事には開けてくれぬ不良運転者に限るのは言うまでもない。私の車では、やらないでチョウダイ。私は大抵、日に平均して四、五百円のチップがあるから、客席に袋を提げて種々な雑誌を放り込む資金にしているし、前記のホステスと違って、客扱いの上手い方だから、こういう思いはしない方であっ

た。処である。件の婦人は、黙って壹万円札をニューウーと鼻先に突き付けた。

「お客さん、細かいのありませんか」

「あなた、お商売さんしょ」

「へっ？」

「お釣金ぐらい御用意あってしかるべし、だと思えますけど」

こん畜生、と思ったが、お客様は王様である。車庫を出る時、会社から支給されるのは参百円のコゼニだけ。薄給の悲しさで自分の財布には参千なにがしか持ち合わせがない旨、説明して許しを乞うたのである。

「仕方ないわね。じゃあ、その〇〇銀行の横の宝石店に停めて頂戴。待っているわね」

「勿論、お待ちします」

「久し振りに顔を出せば、欲しくない物まで押し付けられちゃうんだから」

ぶつぶつ言いながら婦人は店内に消えた。

以前の話だが矢張りお金持の婦人を乗せた時の事である。その時も壹万円札であった。釣がない、という、いくら持っているというくから、全部で、六千なにがしです、という、じゃあそれだけでよろしい、という返事である。参百円そこそこの料金で、こんな結構なはないが、根がお人好しだからそ

の札を預かって、近くの酒屋にくずして貰いに行った。酒屋は、当店は両替屋に非ず、とけんもほろろのいい方である。私は、むっとして、ポケットを探る振りをして、小銭があったから一杯お呉れ、と注いで貰った。キューと呑んで銭を出したら、二拾円足りないという。それでおもむろに大札を出してやったね。ここんところが私の変っている点と思し召せ。ところがである。車に戻ったら客がいない。私の大きな営業用の鞆から六千円を持っていてはいるのだが？……

宝石店の方をぼんやりみている内に、私ははっとなった。予感も当たった。見事に一杯喰ったのである。支配人らしい人物がユックリ近寄って来て、今の御婦人は裏口から帰られたが、若しや、というのである。そこまで解っていたら何故捕まえてくれんだ、と目を剥いたが、客はあくまで客であり、非礼な態度は取れないのです、と仰有る。もっともな話で。もうどうでも良かったが、行き掛かり上、その人に同行して近くの派出所へ届けを出した。

腹が立つやら、情けないやら。

朝、社の車は一斉にスタートする。が同じ

社の車でも広い大阪の街へ飛び出すと、一日中走り回っている筈なのに滅多に出遭う事はないのだ。まして一回乗せた竈抜けの女などいくらか口惜しがっても二度と出遭う可能性は皆無である。

その日も御堂筋であった。鼻唄をうたいながら信号待ちをしていた私は、反対側の車道で車を待っているらしい和服の令夫人に気が付いた。この商売で一番辛いのは生理現象だというのは前にかいたが、一番楽しいのは、なんととっても美しい女がふんだんに拝めるという事である。少くとも私はそうだ。だからその婦人をボンヤリみていた私は、ギョッとなった。まぎれもない、あの竈抜け女なのである。大阪の方は周知の如く御堂筋は全面右折禁止である。おまけに中央分離帯に、いかめしい顔のお巡りさんがいた。

「お、お巡りさん、ちょっと」と

「なんだ、どうした？」

「む、向うに盗っ人がいるんです。右折させて下さい」

「なに、本当か」

「証人がいます。ああ、間に合わない」

「よし」

決断力の早いお巡りさんである。出来る事

ならお名前を紹介したいのですが、とにかく一切の車をストップしてくれ、私は、素早くUターンしました。運転手の誰もが何事ならん、と不審に思った事でしょうが、幸いにして信号が変わって走り出す車ばかりを物色していた女は、この異変に気付きませんでした。車を止めると女は、例に依って無言で乗り込んで来ました。

「お客さん、どちらに行きましょう」

「馬券売場へやって頂戴」

「バケンウリバツてなんです」

「あんた新米なの……」

「へえ、おととい九州から来たばかりで」

「ふーん、それで良く運転手が務まるわね」

「どうもすみません……」

「駅の裏の新阪急ホテル、知ってるでしょうそのくらい」

「知りません、そぎゃんここで競馬がありますと」

「馬鹿ねえ、あんた。とにかく真っ直ぐ」

目的地で、女は壱万円札を出しました。

「大阪ではね、釣銭ぐらい誰でも用意してるのよ。本当に詰らない車に乗り合わせたわ。とにかく此処で待ってなさい」

この阿魔あ、誰が待ってなぞいるもんか。

場外馬券売場（作者註、競馬場で馬券は買うものと田舎者の私は思っていたのですが、こういう風な、つまり場外で競馬を見ずに券だけ買う処があるんです）の混雑に女がまぎれ込むのを待って、私は車を飛び出しました。

数分後、私は女を車の中にひきずり込んでやりました。助手席に坐らせて、先ずこれから宝石店に行き、支配人の協力を得て、お世話になったお巡りさんの手柄にしてやろう、と考えたのです。女は当然の事ながら蒼い顔をしています。

「そんなに震えるぐらいなら、なんであんな馬鹿な真似をしたんだい」

「お、お願いです、出来心なの見逃がして」

「出来心でやられちゃあ叶わねえな」

「助けて下さい、お金は弁償します」

「たった二百八十円だ。一級酒三杯ぐらいのぜになんか欲しくねえよ」

「そ、そうなのよ。あたしだって損得ずくでした訳じゃあないんです。ねっ助けて」

「それもそうだな、あんたは壱万円持ってるんだからなあ。じゃあ、なんのために……」

「お、お金はこの通りもってます」

女は、バッグの口金を開いて見せた。成程仰山、持ってやがる。

「だから、何のために、したんですか？」

「ス、スリルがあったんです」

「ひでえ話だ。遊び半分にそんな事をされちゃあ、運転手はたまらねえですよ」

「これが初めてなんです。もう二度としませんから助けて下さい」

「おくさん、あたしの顔、良くみて下さい」

「……」

「まだ一カ月もなってない筈です。ほら〇〇宝石店まで、もうすぐですよ」

「た、助けて」

女は、ひとと、すがりついて来ました。

「累犯って言葉知ってますか？」

「お願い、警察にだけは行かないで下さい。」

そ、その代り助けて下さったら……」

こういう時、大抵の男は、ドッキンコとなります。況んや、ましてこの私。私は宝石店の前を素通りしました。女は、ほっとしたように、

「許して下さい。ね、お願い。この通り」

両手を合わせて拝むのです。

「助けたら、あんたは又やるんでしょう」

「決して、神様に誓います」

「どうだかな」

「ねえっ、何処かに行きましょう」

「何処かって、何処です」

「……」

「ホテルへでも行きますか」

「警察に行かないと約束して下さいさる？」

「あんた、本職はパンパンか」

「とんでもない、あたしには主人もいますし子供も三人、いるんです」

「信じられねえなあ、全くの話」

「本当に助けてくれますか」

「今、考えているよ」

「約束して下さいさるなら身分証明書をお見せしますわ」

「ホテルに行くだけですか」

「解っています、あなたの好きなように」

「俺は、パンパンに興味はないんだが」

「……ホテルから主人の会社に電話します。それで私がそんな女でないという事は証明出来ると思います」

「……」

「でも一度っ限りです、それで許して」

「よしっ、決まった」

なんだか私の方が悪党みたいな感じです。

ホテルへ行くのはいったのですが、流石の私も、彼女をものにする気はありませんでした。

た。万一という事があります。箆脱け常習と思われる彼女が警察へ捕まった場合、それこそえらい事になります。しゃべられたら、いい面の皮です。だから適当に忠告して素直に別れるつもりでしたが、急にふてぶてしくなった彼女の態度が、ひどく癪に触ってしま

た。

「もう四時だわ、あなた長い方なの」

「……」

「夕食の仕度もありますし、なるべく手短かで解放して下さいな」

「おくさん、この方がスリルがあるでしょうが。どうなんです」

「嫌だわ。第一、主人にすまなくて」

「裸になるんですか？」

「あらっ、だってそうなんです。この着物、高いのよ。指輪だって時計だって汚したくないわ」

「汚すって別に？」

「主人に買って貰ったものです。だから全部はずさせて貰います」

つまり運転手風情の相手には、勿体ないと

言いたいのだ。

「そうですね、全部脱いで下さい。そしてここに重ねて下さい」

「なぜ」

「いざとなつて逃げ出されちゃあ叶わんからです。あんたは筆ぬけの名人だから」

「解ったわ。向うむいて下さいな」

「折角だが拝見するよ。嫌なら結構」

女は、鼻の頭にシワを寄せて、それでも観念したかのように、一枚々々脱いでいった。

女が裸になったのをみて、正直、私はうんざりした。まるで若秩父のような、ずんどうである。顔はきれいなのに、よくもまあ肥ったものである。たしかに悪道魔十年とかいう映画で観た、山本富士子に似ているというあれである。(ただし、この事件は一年前の事であるから悪道魔十年は、現在執筆中に思い出した事である)それでも肌は美しかった。

「それも脱いで下さい」

と言った時、肌が桜色に火照ったのだけが

僅かに美しいと言えは言えたらう。

一重ねに積まれたものを、驚嘆みにすると私は、さっと入口へ走った。

「なにすんのよっ」

その叫声が、はっきりと女の正体を現わしていた。

「裸で待ってろ。お巡りを呼んで来てやる」

「ちっ畜生。だ、だましたのね」

「へっ、始めからその積りさ。てめえみてえな豚野郎と寝たら、それこそ、かあちゃんに殺されらあ」

ホテルの者に、声をかけようと思ったが止めた。裏口から駐車場に飛び出すと、そこから五分と離れていない、御堂筋へ一目散。交番所に戻っていた、お巡りを連れて、引き返したのは、二十分も経っていない筈であったが、裸の豚は消えていた。

「財布を残したのは、あんたの手落ちだ」

豚は、女中に普段着を分けて貰って帰ったらしい。盗っ人にやられたと言ったげな。

一週間前、房代とのいきさつを原稿に仕様とされている朝、警察に出頭してきた女房が戻って来た。一応遺失物として保管されていた物が、私の手元に戻った訳けである。裸にただけで何もなかったという私の言を、信じようとせずに手古ずらし女房としては、何としても手にしてみたかったに相違なからう。

「わあ、いい品やわあ。あんたなんか、新しい紐は買ってもこんな着物、とても買ってはくれへんわねえ」

それを私は小脇にして、知り合いの質屋のおっさんに預けて来た。委託販売に出していったのが、今日ぜになつたそうである。いくらあったのか、女房は、いわない。

「美味しいでしょう、そのお酒」

「上手いなあ、あんときの白い肌が眼先にちらついてくるよ。なあ」

「いやっ、助平っ。きらい」

「いてっ、ててっ」

正に、世は泰平である。

天星社刊 〆限定版グラビア写真集 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

二女緊縛「女斗緊縛競艶写真持集」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美9」

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

義雄は、小夜子が最も辛く感じる屈辱を腿と腿とで、必死に隠そうと努力しているのが愉快でもあり、また、いじらしくもなり、そんな事をいって、からかうのだ。

「ハハハ、無駄な努力はしない方がいいね。君は、これから、このWベッドに、堂々と大の字になって縛りつけられる事になっているのだからね」

それを聞くと小夜子は、びったり閉ざしている太腿をガタガタ小刻みに慄わせ、一層、身をすくませるのだったが、急に、きっとした表情を上にあげた。

「津、津村さんっ」

「何だね。急におっかない顔をして」

「こ、このような地獄の底に、私を突き落して、それでも貴方は、飽き足らないの。この上、この上、貴方は私に、何をなさろうというのですっ」

自分をこの地獄屋敷から救出すると騙して処女を奪い、その上、田代達に身柄をもと通り引渡してしまう、というようなことを平気でした卑劣な男——数々のいたがりを受けた身だが、義雄の北叟笑むニヤケた顔を眼にした小夜子は、たまらなくなつたよう反抗を表情に示すのだった。

涙のしずくを一杯浮かべた小夜子の睫毛は怒りのためか慄えている。

「鬼源さんや銀子達の調教を受け、お嬢さんはこの所、随分と成長したそうじゃないか。それで今日は、僕が一つ、彼等の代理を務めて、お嬢さんの進況ぶりを拝見しようと思うのさ」

「嫌っ、嫌です！」

小夜子は狂つたように首を振って、
「たとえ身体は、貴方達の自由になつても、こ、心は——」

「内村春雄のものだというのかい」

義雄は、相変らず、口元に微笑を浮かべながら、大理石のように綺麗な小夜子の表情を楽しんでゐる。

「その内村君だが、君からの心よりのプレゼントを受取り、腰を抜かさんばかりに驚いたようだぜ」

それを聞くと、小夜子は狼狽のあまり、さっと顔面蒼白になつてしまった。わななく口をつぐみ、がっくり、首を落して、再び、すすり上げる小夜子を、義雄は小気味良さそうに見て、

「葉桜団のエリを彼の家の近くへ偵察にやつたんだが、あの小包みを受取ってから彼は、

気が狂つたようにうろたえ出したらしい。勿論、その筋にも捜査を依頼したし、あちこちの探偵社にも頼んで廻つたようだ。だが、ここがわかる筈はないさ」

気持良さそうに義雄は、そういつて笑つたが、小夜子は、全く血の気が失せたように蒼白になつた額をベッドの脚に押しつけて号泣し始めた。

あのような羞かしいものが春雄のもとへ実際に送られたのだと思うと、一そ、天も地も消えてくれぬものかとばかり、小夜子は魂も炸裂せんばかりの屈辱と羞恥に身悶えして泣きじゃくるのだ。

「貴方は、何という、ああ、何という恐しい人なの」

房々と耳元を覆う柔い髪を打ち振りながら身も世もないよう泣きじゃくる小夜子の白磁の肩を義雄は、うしろからそっと抱きしめるようにして、

「ね、それに君は、もう昔の恋人の前に出られぬ体にもなっているんだ。昔の事はさっぱり忘れて、現在の運命に従うより方法はないんだよ。わかつたね」

わなわな慄える小夜子の雪のように白い背や肩に優しく口吻した義雄は、ふと立ち上る

と壁にかけてある上衣のポケットから、小型拳銃を取出して、それで、嗚咽しつづける小夜子の縄に締め上げられた乳房の上を面白そうにたたいた。冷たい金属の感触にふと顔を上げた小夜子は、

「お願い、津村さん。それで、一思いに、小夜子を殺してっ。射って頂戴っ」

と、義雄の持つ拳銃に身を押しつけるようにし、

「もうこれ以上、小夜子は、生恥をかく気力は、ありません。後生ですっ、小夜子を射ってっ」

「冗談じゃない。お嬢さんは、静子夫人にっぐ森田組のドル箱スターなんだよ。忘れて貰っちゃあ困るぜ。大事な商品を自分で破壊する馬鹿がいるもんか」

義雄は、せせら笑って、拳銃を手の上ですくろく廻しながら、

「これを使わなきゃならない相手は、お嬢さんの昔の恋人さ。内村に一発、お見舞いしてやるんだよ。殺し屋の手筈もとのえたからな」

「えっ」

小夜子は、ひきつったような顔つきになって、義雄の顔を見上げた。

「そりゃ恋人を誘拐されたんでうろたえるのは当然だが、少し、執拗に動き過ぎてやがるんだよ。金に糸目をつけず、腕ききの探偵を動員してるようだが、下手な鉄砲も数うてばで、こっちとしても、安閑としているわけにはいかない、と田代社長もいうんだ。お嬢さんだって、今となりゃ、むしろ、恋人が消えてくれた方が気が楽と違いかい。ああいう羞かしいものまで見られた恋人なんか——」

「待、待って、津村さんっ」

小夜子は、驚きと狼狽のため、頬をひきつけながら、必死な声をあげた。

「お願いです。そんな、そんな怖しい事は、やめてっ。内村さんを、内村さんを射たないで！」

恐怖の戦慄に組み合わせた太腿をブルブル震わせながら、狂ったように哀願する小夜子を義雄は、ふと意地の悪い眼で眺めて、

「というとかね。お嬢さんは、まだ、あの若造に惚れているという事か。いっとくけどあんたは、もう俺の女で、森田組の商品なんだよ」

「——わ、わかってます。でも、お願い、内村さんを射つような事はなさらないで。小夜子は、どのような調教でもお受け致します。」

で、ですから——」
「よし、わかった」

義雄は、うなずいて立ち上ったが、その表情には、苦々しい嫉妬の色がありありと浮かんでいる。

くそ、この女、まだ、心の中では、内村の事を——そう思うと、義雄は、急に腹立たしくなってきたのである。

「じゃ、今後、つまらない考えは捨てて、お座敷ショーの修業に励むというんだね」

「——はい」

小夜子は、消え入るようになすくのだ。

「よし、それなら、殺し屋を雇う事は見合わせよう」

義雄は、みせびらかしていた拳銃を、元通り上衣のポケットにしまうと、小夜子の縄尻をベッドの脚から解き、小夜子の肩に手をかけて立ち上らせた。

義雄は、片手で小夜子の肩を抱き、片手でベッドのシーツを剥ぐ。四隅に皮ベルトが、生贅を大の字に引き裂くため、取りつけてあった。

「それじゃ、素直にこの台の上に乗ってくれるね」

義雄は、悲しげな視線を台の上に向けてい

る小夜子の耳もとに口をつけ、念を押すようにいった。

「僕は、君の昔の恋人の命を救ってあげたんだ。そのかわり、君は、これから、僕の命令には絶対服従して頂く。いいね」

「——ハ、ハイ」

小夜子は、ベッドから顔をそらせ、かすかにうなずくのだ。

「じゃ、ベッドの上に乗ってもらおうか」

——それから、数分後には、小夜子の白磁の麗身は、ベッドの上に、大の字に固定されていた。小夜子は、自分の運命を察知したよう上の空のような力のない瞳を上に向けたまま、義雄の手で足首に皮紐をかけられるままになっている。

仕事を終えた義雄は、品位を帯びた艶やかな小夜子の裸身と、その大胆なポーズを満ちに眺めながら、

「まだ開き足りないって顔つきだね。もう少し、開かせてあげようか。小夜子」

義雄は含み笑いでいうと、最初の計画を実行に移すべく、ベッドの下に身をかがめ、そこに取り付けてある金属製のハンドルを廻し始めた。

小夜子の足首を縛った皮紐はそのまま、ベ

ッドの裏側につながっていて、ハンドルの操作で伸び縮み出来るように細工されていたのである。

義雄が力をこめて、ハンドルを廻転させると、ベッドの裏側に通じている皮紐はピーンと張り、更に小夜子の体を極端なまで引き裂いていこうとするのだった。

「あっ、嫌っ、嫌っ」

小夜子は思わず、背をそり返らせて、悲鳴を上げたが、優美で繊細な小夜子の下肢は、皮紐の軋む音と共に、容赦なくキリキリ左右へ割られて行く、太腿の付け根の筋肉に激痛が走る。

「ハハハ、これだけ開きゃ充分だろ」

義雄は、ハンドルを止めて、動きを固定させると、ベッドに腰をかけ、わなわな唇を震わせ、固く眼を閉ざしている小夜子の表情を面白そうに見た。

「昨夜、森田組の若い衆と考え合って、こういうベッドを作ってみたんだが、どうだい。乗り心地は？」

義雄は、小夜子の可愛い臍を指ではじいて笑うと、

「それから、こういう仕掛けも、考えてみたんだよ」

義雄は、立ち上って、壁にそって垂れている太いロープを引くと、丁度、ベッドの真上の天井を覆っていた白いカーテンがさっと左右に割れた。

ふと、天井へ視線を走らせた小夜子は、あっと小さく声をあげ、反射的に紅を散らして顔をそむけたが、そこには、大きな鏡が横に取付けてあり、大の字に小夜子を固定したベッドを、そのままはっきりと写し出していたのである。

「ま、美しいスター達を調教するため、色々工夫したよ。どうだい、こうすりゃ自分のポーズが、調教される小夜子の眼にも、はっきりと写るわけだ」

小夜子は、左右に開けた両腕の中へ顔を隠そうとでもするよう、モジモジ身悶えをくり返している。

「見るんだ。天井の鏡をはっきりと見ろ」

義雄は、急に鋭い声でとなりつけ、小夜子の鼻を指でつまみ上げ、顔を正面に向けさせる。

「服従しないとどういふ事になるか、わかってるだろうね、小夜子」

義雄に陰険な口調でおどされた小夜子は、泣き濡れた瞳を、そっと開き、天井の大鏡に

写る、みじめな、あられもない自分の姿を眺めるのである。

「秘密の扉を開いた自分を、はっきり見るんだ。そして、男がそれをどういう風にして、料理するか、最後まで、はっきりと眺めているんだよ。わかったね」

義雄は、遠い幻でも眺めているよう物悲しげな視線を天井の鏡に向けている小夜子を気持良さそうに眺めながら、パジャマを脱ぎ出したのである。その間、小夜子が耐えられなくなったよう鏡から眼をそらしたり、瞼を閉ざしたりすると、義雄は忽ち大声で、

「眼を離すなといったろう」

と、語気を強めて、小夜子を叱咤する。

「鬼源や銀子達にいわせると小夜子は、調教し甲斐のある名器の持主だというんだが、僕はあの時は夢中になっていて、はっきりそれを認識する事が出来なかった。しかし、今日は徹底的に調べあげ、生涯、僕が忘れられないよう、小夜子の心と肉にとどめを刺すつもりなんだ」

義雄は、ニヤニヤしながら、ベッドの上に乗りこむのだ。

義雄がぴったりと頬をすりつけて、隣に横たわると、小夜子は遂に耐え兼ねて、鏡より

眼をそらせ、さっと反対側に顔をそむけた。

「駄目じゃないか、眼をそらしちゃ」

義雄は、小夜子の顎に手をかけて、顔を再び、鏡に向けさせる。

「僕も小夜子と同じポーズをとってみよう。そら」

義雄は、小夜子の首の下に左手を差しこんで、小夜子の顔を固定させると、自分も小夜子と同じよう、鏡に眼を向けるのだ。

「ああ——」

「そら、しっかり見るんだよ、小夜子」

小夜子が、耐え切れず、眼を閉じ合わせると、義雄は、腿をつねり上げたり、耳を引っぱったりして、叱りつけるのだった。

小夜子は、再び、眼を見開く。天井の大鏡に向けた小夜子のしっとり潤んだような情動的な美しい瞳と白桃のような優美な乳房、そして、露骨なまでに伸張させてしまっている……義雄は鏡の中に見て、気もそぞろになってくるのだった。

「ねえ、小夜子、こうして見ると、男の体と女の体ってのは良く出来ているじゃないか。そうは思わないかい」

義雄は、鏡の中の小夜子に向って、そんな事をいい、

「じゃ、これから、僕流の調教を始めるけどいいね」

義雄は、そっと上体を起こし、二つの胸のふくらみの赤い蕾を交互に……ながら、優しく両手で……めるのだった。

「いいんだね、小夜子」

「——いいいわ、どうとも、お好きなようになさって」

小夜子は、巧妙に二つの乳房を……れて次第に諦感が募って来たらしく、その鏡を見る小夜子の瞳には上の空のような、やるせなさや浮かび、ねっとり潤んでくる。

義雄は北叟笑むと、小夜子の熱くなった耳元に口を寄せ、こんな事をいい出した。

「僕の狙いは、君の感情教育だ。僕は人一倍嫉妬深い性質なんですね、小夜子の身体は征服したけれど、まだ小夜子の心は、内村を求めているのじゃないかと腹立たしくて仕方がないんだ。そこで今日という今日は、小夜子の心から完全に内村を取り去り、僕と森田組に対する忠誠を誓わすための調教を開始する。いいね」

義雄は、小夜子の耳たぶに柔い口吻をしてから、枕の下に手をのばし、あらかじめ用意しておいた小型のテープレーコードを取り出

した。

「これから始まる小夜子と僕との対話をすっかりこれに録音し、内村に送ってやるんだ。奴がカッカと頭に来るような、濃厚なやつをね。内村の命を助けたければ、君は僕に協力しなけりゃいけない。いいね」

義雄は、そんな事をいいながらも、小夜子の乳房や頸筋あたりに羽毛のように柔い口吻をそそぎつつける。義雄のそうした手管に煽られて、小夜子は裡から衝き上げてくる羞恥に耐えられなくなったよう八の字に固定された両肢をモジモジ動かし始めた。

「お、おっしゃる通りにいたしますわ。ですから、お願い、内村さんを、内村さんを助けて——」

小夜子は、うわ言のようにそういつて、その身悶えは一層露^{あらわ}なものになっていく。

「よし、わかった。じゃ、どういう風に録音して、内村の神経をいらつかせるか、二人でよく相談しようじゃないか」

義雄は、小夜子の上気した頬へ鼻をすり寄せるようにして、根気よくその方法について小夜子を説き出すのであった。

「ああ、そ、そんな——」

小夜子が、その卑劣で残忍な義雄の着想に

美しい眉を寄せると、

「この方法を小夜子が承認しないと、内村に對し、殺し屋を使わねばならなくなる。つまり、僕としては、小夜子と内村とを完全に訣別させたいための手段を用いるわけなんだ。それ程、僕は嫉妬深い男なんだよ。よく覚えておくことだな、ハハハ」

義雄は、そらせた小夜子の顔を自分の方へ引戻すと、眼にふと残忍な色を浮かべた。

「最後にもう一度聞こう。僕の命令に従うのか従わないのか」

「ああ——」

「どうなんだよ。はっきり返事するんだ」

「——従います」

消え入るように小さくうなずいた小夜子の瞳から大粒の涙がポロポロと白い頬を伝わって流れ落ちた。

卑劣な録音

それから、二十分近くもかかって、義雄は小夜子に、内村に聞かせるための録音の方法をネチネチと教示し、ベッドに上体を起こすと、ニヤニヤしながら、レコーダのマイクを手を持った。

「まず、僕が先に、奴を一寸からかってやるからね」

義雄は、レコーダのボタンを押した。

「内村君かね。どうだい、最近の景気は？ハハハ」

義雄は、マイクを口に当てながら、ベッドの上の小夜子をちらと見、愉快そうにウインクして見せる。大の字に固定されている小夜子は、涙も涸れ果てた空虚な瞳をボンヤリと物悲しげに見開いて天井を見上げている。

「小夜子嬢の調教もこの所順調に進んでいるよ。最初、ここへ来た時に比べると今じゃ、めっきり女っぽくなり、腰にも肉がのって、一段と美しくなったようだね。今から、朝のトレーニングを開始するわけだが、今日は一つ、その実況を、君の耳にお入れしようと思つてね。それは、小夜子嬢からの希望なんだよ。今、彼女は僕の隣のベッドに、大の字になって固定されているんだ。勿論、素っ裸だよ。しかも、彼女の希望で天井には大鏡が取り付けてある。どういう風に自分の身体が調教されるのか、はっきり自分の眼で眺めて見たいというんだ。いやはや、彼女も、相当な域に到達したもんだよ。何か、小夜子嬢が君に告げたい事があるそうさ。マイクを代る事

にしよう」

義雄は、口元を歪めて、マイクを小夜子の唇に近づける。

「さ、どうぞ、小夜子嬢」

義雄は、小夜子の美しい横顔を凝視しながら、催促するように指で小夜子の脛をはじいた。小夜子は、眼を閉ざし静かに唇を開く。

「内村さん。小夜子は、今、とても幸せな毎日を過ごしているの。ですから、お願い、探偵などを使って小夜子の行方を探すような真似は絶対なさらないで下さい。以前、貴方に対し、現在の小夜子の心境と人の眼には見せられない、ああいう羞かしいものまでお送りして、小夜子の覚悟を知って頂こうとしたのに貴方は、やっぱり小夜子の行方を探そうとなさっている。はっきりいって、今の小夜子は、貴方なんか大嫌い。小夜子を女にして下さり日夜、調教して下さる現在の夫を小夜子は死ぬ程、愛してしまっているの。二人がどれ程仲がいいか、これから、貴方にお聞かせするわ。これをお聞きになれば、小夜子が現在、どういう女に変貌してしまっているか、はっきり、おわかりになると思います」

小夜子が口ごもったりすると、義雄は、彼女の耳もとに口をつけて科白を教示し、やっ

と、ここまでいわせて、一旦、テープを止めた。

「その調子だ。ハハハ、これを聞きや内村の奴、相当、頭に来るぜ。さて、これから追討ちをかけ、奴の神経をうんと昂ぶらせてやるうじゃないか。要領はわかってるね」

義雄は、ほくほくした顔つきになって、小夜子の白い額に垂れかかっている髪を耳元の方へかけわけてやる。小夜子は、キラキラと涙で輝く美しい黒眼をそっと義雄に向けた。

「——小夜子の気持も、これで、はっきりとしたわ」

悲しい諦めを自分自身にいい聞かせたよう小夜子は、そういうと、義雄の腕に頬ずりするようにして眼を伏せた。そんな小夜子がたまらなく可愛くなって、義雄は小夜子の両頬を手で押さえ、唇をぴったり合わす。

小夜子は、熱い吐息を混ぜて、義雄の口の中に死ぬ思いで舌を差し入れ、完全な屈伏を示したのである。

「テープを廻すよ。いいね」

小夜子は、義雄に頬ずりしながら、羞かしげに小さくうなずく。

枕元に置かれたテープが廻転し始めると、義雄は、先程とは違った積極さで、小夜子の

肉体を……始め、教えこまれた通り小夜子も背を反り返らせ、大きく悶えて見せ、舌足らずのうめきをくり返すのだった。

「小夜子は、小夜子は、あなたのものよ。お願い、小夜子を捨てないでっ」

「二度と内村春雄の事を思ったりしないだろうね」

「嫌っ、あんな人の名をもういわないで。小夜子は永久にあなたのものですわ」

そんな言葉をかわしつつ義雄に強要された小夜子は、自分でも気づかなかった肉体の悪魔性が蛇のように体内から鎌首をもたげ出した事に気づき出し、華奢だがしなやかに緊った美しい肢体を悶えさせ、慄然となった。

「春雄さんっ、小夜子は今、夫に抱かれて宇頂天になっているのよ。おわかりになって。もう私の事など忘れて、早く、新しい恋人を——」

小夜子は合図の責手で、両乳房を強く激しく……れ始めると、固定された全身を右へ左へよじらせて、声を慄わせて泣き始めた。

「ハハハ、どうだい、内村君。お嬢さんは、今、僕の愛情で、全身火のように燃えたたせて泣きじゃくっておいでだ。しばらく、聞いて頂こう」

なおもしつこく乳房を揺さぶり、柔かくて敏感な耳たぶ、頸筋、咽喉首などを激しく責めたて、絹糸のような小夜子のすすり泣きをしばらく続けさせてから、次に、火のように熱くなった小夜子の頬に口吻して、

「次に責めて欲しい所はどこだい、小夜子」
小夜子は、もどかしげに身悶えし、義雄から反対側に顔をそむけると、真っ赤な顔で、「よく御存知のくせに——ねえ、お願い」と、云われた通りに催促するような甘い声を出すのであった。

「これかい」

義雄が、マイクに小声で吹込むと、小夜子は、ねっとりとし、ぞっとする程美しい瞳を義雄に注いで、甘えるようにうなずくのだ。「そのかわり、僕がどういう風にして、可愛がるか。小夜子は、大きな眼を開いて、天井の鏡をはっきり見ているんだよ。いいね」

「——わ、わかったわ」

小夜子は、再び、潤んだ美しい瞳を上に向ける。

それを見ると、義雄は満足げにうなずいて小夜子の下半身の方へ身体を移向させて行った。

極端なまでに開かされ、今や、何のためら

いもなく薄紅く上気した色まですっかり………している下肢に眼を近づけた義雄は、両手を近づけてゆるやかな責めを開始した。

小夜子の割られた太腿の筋肉は忽ち脈打ち始めたが、上気した小夜子の美しい瞳は、釘づけされたよう天井の大鏡に注がれている。

「そら、これが小夜子の——フッフ、わかるかい」

義雄も、時折、天井を見上げながら、責めつつける。小夜子は、夢の中をさまよう力のない眼つきになり、耐えかねたように顔をそむけ、優美な悲鳴を、その口から洩らし始めたが、すぐにまた、そっと盗み見でもするうちに、屈辱に潤む美しい瞳を天井に向けるのだ。

完全に小夜子を自分のペースに引きずりこんだ事を知った義雄は、嬉々として、笠にかかって吹込みをつづけながら、

「成程、鬼源のいう通り、小夜子は、すばらしい宝の持主らしいよ」

義雄は、ベッドの下から素早く桐の箱を取り出して、蓋を開けた。

「さ、小夜子、よく鏡を見ているんだよ」

義雄がそう云うと、小夜子は、火のように上気した顔をパッと鏡からそらせ、いうに

えない悲しさと屈辱をからませた昂ぶった声で、

「そ、そんな、ああ」

「鏡を見なきゃ駄目じゃないか、小夜子」

「だって、だって——」

「見るんだよ」

世にも哀しげな顔を鏡に向けた小夜子を義雄は楽しそうに見つめた。

うっと電気にでも触れたような声をはりあげる小夜子。そして、義雄の開始した責めにつれて、小夜子は、これまで一度もあげた事のない昂ぶった声音で涕泣し始めた。

「こりゃ、素ばらしいよ、小夜子。君は、男達に珍重される」

義雄は吹込みをつづけながら、吸いつくように粘りのある小夜子の甘美な悲鳴と、ポーズに舌を巻くのだった。

「そら、いい気分浸ってばかりいちゃ駄目じゃないか、小夜子。内村君に何かいう事があったろう」

義雄は、ブルブル痙攣する小夜子の絹餅のように白い腿を指でつねって命令する。

小夜子は、熱い耐苦の戦慄に、むせび泣きながら、自棄になったよう口を開いた。

「春、春雄さん。今、小夜子が夫にどのよう

な事をされているか御存知？　口では一寸、申せせんわ。ですから、耳で、耳で、御想像になって下さいまし」

そして、小夜子は、ニヤニヤしながら、ゆっくりと……づけている義雄に、甘く、ささやくようにいうのだ。

「——ねえ、あなた。小夜子がどんなに今、悦んでいるか、それを、春雄さんに教えてあげたいの。ですから、マイクを——」

「よし来た」

義雄は、レコーダーのマイクを片手をのばしてとると、それを丁度、小夜子の臍の上あたりに置くのだった。

「どうだい、内村君。レコーダーのマイクは小夜子嬢の臍の上だ。彼女の演奏する素ばらしいセレナードが聞えるだろう」

義雄は、マイクに向かってそういうと、一段と調子をあげて、小夜子に一層、激しい泣泣を、その口から洩らさせるのだった。

「——ああ、春、春雄さんっ」

小夜子は、遂に演技に耐え切れず、魂も消え入るような生々しい声をはりあげると、うう、と齒を噛みしめ、美しい眉を寄せて、首をのけぞらせた。大きく……内腿の筋肉がピーンと張る。

「ゆるして！」

獣が絶息するようにそう一声大きくうめくと、がっくり首を横に伏せた小夜子。

全身、脂汗にまみれて、小夜子が遂に……入った事を見とどけた義雄は、鼻の下を指でこすりながら、マイクを手にとった。

「今、お嬢さんは、遂にゴールインなさったよ。わかったかね。ハハハ。とにかく、こういう具合に、かつての御令嬢は、日々、女としての御修業に励んでおいでだ。本人もそれを喜こんでいるんだから、あまり、しつこく行方を探してもらいたくはないね。——それにしても、全くこりや凄いぜ。俺も色々女遊びをしたが、こんなに、いい——女に出喰わしたのは始めてだ。離れようとする、嫌だとはかり吸いついて来やがるんだから。ハハハ、じゃ、一旦、お嬢さんのお手当をしてやらなきゃならないから、テープを一まず切る事にしよう」

義雄は、レコーダーのスイッチを押して、テープを止めると、ほっとして、ベッドの上に大の字のまま、ぐったりと頬をシーツに押し当てている小夜子を小気味良さそうに見つめるのだった。

小夜子は、耐苦の余韻で、まだ、ひくひく

と割られた太腿や乳房のあたりを波打たせている。見栄も体裁もなく、義雄の眼前に、濃厚な甘い体臭と一緒に……一切を露出させてしまっている小夜子を義雄は、眼を細めて凝視する。

「これが美人で評判の村瀬小夜子の成れの果てか」

義雄は唄うようにそういって、洋酒棚からブランドイをとりグラスに注いで、一息に飲んだが、その時、ようやく筋肉が弛緩し、小夜子は放心状態から自分を取戻したらしく、夢見るようにぼんやりと瞳を開いた。ふと、眼に写った天井の大鏡。小夜子は、義雄の残忍な攻撃に敗北し、口惜しくも術中に陥った浅ましい自分の姿をそこに見て、忽ち、羞恥の紅を全身に走らせ、さっと顔をそむける。

「すさまじかったね、お嬢さん」

義雄は、ベッドの隅に転がっている責具を取り上げ、丁寧に……いて桐の箱へしまうと、ベッドに乗り、犬のように四つん這いになって動き出すと、膝小僧を、左右へ開いている小夜子の両腕の関節あたりにそっとな乗せた。

「あっ、な、何をするの。津村さん」

小夜子は、義雄が鼻先へ押しつけて来たも

のを眼にした途端、狼狽して、二度三度、ウエーブのかかった黒髪を振って、義雄が……
 ……てようとするのを避けるのだ。
 「どうしたんだい。小夜子、自分ばかり世話

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々、御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分

になって、僕には何のお礼も与えてくれないのかい」

「だ、だって、そんな——ああ、お願い、そんな事はさせないで——」

十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お申し込み願います。継続のお申し込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

義雄は、小夜子の哀願する美しい顔を眺めながら、さも意外なことを聞くかのよう、わざとびくりした顔付になって、近々と薄桃色に上気した小夜子の耳もとに口を寄せた。

「僕の命令が聞けないというのかい。夫婦なら、当然の事じゃないか」

「でも、でも——」

小夜子は不安と恐怖におびえ、悲しげな表情をして、ぶるぶる肩のあたりを慄わせるのだった。

義雄は、意地になったように小夜子の頬を両手で押さえこみ、柔い枕の上へ小夜子の顔を押しつけ、固定させると、

「さ、キッスするんだ」

「ああ、津村さん」

「あなたと呼べ。僕は君の亭主なんだぞ」

「あ、あなた、それだけは勘忍して——」

「何をいってるんだ。君の尊敬する静子夫人は昨夜、捨太郎という薄馬鹿野郎の——。一時間近くもかかって続けたんだぞ。君に出来ない筈はない。——僕を怒らせる気かい、小夜子」

義雄は、懊悩する小夜子の表情を心地良さにそうに眺めながら、彼女の花のように優美な紅唇に一層近づけて行った。



河上ユリ嬢へ……

「未知の願望」

に寄す

橘 雅 美

『世間知らずの私が、なぜこんな夢に溺れるのか不思議でなりません』と告白された河上ユリさん。私は、貴女と全く正反対のS人種ですが、やはり、そうした不安なり疑問をいつも抱いている者です。

医者や薬では治す事の出来ない病いにとりつかれ、これから先、結婚なり家庭なりを考えると、何か恐しい感じさえます。

妄想・空想に身をまかせ、ふと現実に戻った時のわびしさとか、自己嫌悪等になやまされる——S・Mの世界ではプラトニック・ラブは通用しないのでしょうか。

しかし、受け身である貴女やその他のM女性には、いつも良き理解者が現われ、悩みを消し飛ばしてくれるのです。私がこうしてペンを走らせる間にも、貴女の見た白日夢は、

もう実現されているかも知れません。

誠にうらやましいかぎりです。実際には縄を手にした事もない様なS男性は、モデル志願をされたM女性に、達人の手により飼育をされ、一、二カ月後に、冷たいロープを纏って誌上に写真で紹介される間、それぞれ自分勝手に、ああして責めてやりたい、こうして泣かせてやりたいとかなわぬ願いを胸の中でまっ赤に燃やし続けているのです。

来月あたり、貴女のハントされた姿が見られる事でしょう。唐獅子をあしらった壁画をバックに、高手小手のまま椅子に縛りつけられ、羞恥責めにあっている一人の女——見覚えのあるだんだらのロープに、喰いちぎられるばかりにくびれた乳房があえぎ、必死の抵抗もむなしく、思いつき羞恥地獄に叩き込

まれてしまった肢体も痛々しい——皆、誰かさんの好み通りなのですが、あまりのはずかしさと、激しい痛みにも、思わず涙を浮かべて許しを乞うている「河上ユリ嬢」。

ある種のジュラシーと、好奇心でもってその写真を、私の様なだらしなないS男性は見つめる訳けです。果たして、これが健康な状態と言えるかどうか。

ところで奇ク五月号を手にした日（つまり『未知の願望』を読ませて頂いた時）の夜、私はとんでもない夢を見てしまいました。貴女と同様、日常の生活の中で、ひよんな事からS・Mプレイを頭の中で浮かべる事はありませんでしたが、夢の中での体験は、初めての様な気がします。

夢の中で、貴女は『告白』以来、すっかり奇クの売れっ子モデルになっているのです。縛って良し、吊って良し、打っても良しという、野球に例えて言えば三冠王の、関谷夫人を始めとして、二年目のジंकスを吹き飛ばしそうな中河恵子さん、そして実戦的な強みを持つローズ秋山さん、今年の新人王を目指す安井夫人や左近麻里子さん達と肩を並べているのです。

その貴女を、私は一生けん命追っているのです。そう、あれは確か「盛り場ブルース」だったと思います。カラーなので、ネオンの点滅がとてもきれいだった所です。場所は何

処か解りませんが、人ごみの中に、スポットライトを浴びて浮かび上った貴女を、私は発見したのです。

私は、大声で呼び止めたい気持ちを押さえ、貴女の後をつけて行くのです。誇らし気にセーターの胸を突き上げ、ミニ・スカートで街をかつ歩いていた貴女が、今は、見るもあでやかな和服姿で、私の前を何やらメモらしい白い紙きれに目をやりながら、歩いているのです。

やがて、人通りの少ない路地ウラに面したビルの地下へ通じる階段の所で、貴女の姿はフツとかき消されてしまいました。

あわてて地下へ降り、黒いアクリルのドアを私は押します。中へ入ると、むせ返る様なタバコの煙で、目をしばつかせ、視界をふさがれました。(ここはバーだな)

カウンターで言葉をかわす貴女の姿が写ります。ホステスの一人が、店の隅を黙って指さしました。店の人もお客も、私が見えないらしく、誰も見つめたり話しかけて来ないので、私は安心して貴女のそばにくっついていきます。

「いらっしやい。お待ちしましたのよ。きれいな方ね、社長さん。相い交らずお早いのね。にくらしい」

見るからに、どぎつい化粧をした年増の女が、これ見よがしに男の横にへばりついてい

ます。男は、小聲でその女に耳打ちします。

「まあ、これはこれは。分りましたよ、さあお嬢さん、こちらへどうぞ」

マダムらしきその女は、イヤ味たっぷりの作り笑いを残して、席を離れました。

五十を越した感じの男は、白髪まじりの頭にポマードをこってりとつけ、見るからに金太りの、もて余す様な体をしています。

「よう来られましたな」

大きな体を折り曲げて、男は貴女を迎えるのです。(この男、どこかで見た事がある様な……思い出せません)

「さあ、ここへおかけなさい」

「失礼します」

貴女は腰をおろして、形ばかりの挨拶が交わされます。顔中をシワクチャにして、男はいそ笑いをしました。周囲は暗く、一向に私の居る事など気がつかないふうでした。

「あっ」

短い悲鳴。飢えたオオカミの様な男の手がやにわに、細い手首を握みます。白い肌を黒い手がさえぎりました。不意をつかれた貴女は、酒くさい男の息を吹きつけられ、顔をしかめます。

「いけませんわ、こんな所で」

「逃げなくても良いだろう。これから、お望み通りに心ゆくまで責めまくってやろうと言うんだ。音を上げて、許してはやらんぞ。」

今のうちに、アルコールでこのきれいな肌をマヒさせておくといひ

肩に廻された男の手に気付き、あわてて貴女は腰を浮かせますが、そのまま、きつく押さえ据えられてしまいます。いやらしい手がしきりに貴女の理性をうかがい続けます。貴女の身体に少しでもスキが出来れば、堤を切ってウズ巻く激流の中に、身も心も引きずり込んでしまふにちがいありません。

私は、気が気でありません。でも、私は声を出す事が出来ずに、じっと傍観しているのです。

止むなく、貴女はテーブルのグラスに手をさしのべます。ひと息に、飲みほすカクテル——いけない——私は叫びましたが、もう遅かった様です。貴女は、手にしたグラスを置く事も忘れ、ぐったりと私のひざに倒れてしまいました。

これからがちょっとおかしいのです。河上さんに乗せた車が、ネオンの海を走りぬけ、眼下に太平洋の荒波を覗む街道を突っ走っているのですが、何と、その車を運転しているのが、この私なんです。

運転席のミラーに写る河上さんは、シートに背をもたせ、細かな車の振動に快い安らぎを感じているかの様に、うっとりとした表情で私を見つめているのです。

振り向くと、私の目には、先程のマダムが

半ば破れかけた着物の上から、太い荒ナワでぐるぐる縛られ、髪を振り乱してうなっていました。あまりにも見苦しい光景ではありませんでした。

やがて、海辺に面した静かなたたずまいを見せるホテルの前に、黒ぬりの車は滑り込みます。催眠術にでもかかった様な貴女を、私は軽々とかつぎ上げ、玄關の中へと運んで行きます。

すずらんの様な香りと、きめ細かい肌の感触にしばし酔っていると、後から、男のしゃがれた声が、強い口調で私に命令します。

フロントの人は、皆知らん顔をして背を向けています。出迎えの者も見えません。表の白く冷たいコンクリートの建て物とは場ちがいな感じのする日本庭園を通り抜けると、閑静な離れの一室にさがり込みます。

六畳ばかりの日本間に足を入れると、そこには、見た事もない様なあざやかな朱色のふとんが敷かれ、枕もとには、水さしまで用意されていました。

男の言葉にあやつられる様に、私は手ぎわよく、河上さんを寝かせるのです。

この場を立ち去る様に言われた私は、ま新しい敷布の白さが気にかかり、後髪を引かれる思いで外へ出て行くのです。

長々と身を横たえた貴女は、夢ごちで、少しもさわごうともせず、落着いています。

紫がかったかすりの着物は、少しも乱れる事なく、河上さんの肌をそっと包んでいるのです。

「どれ、じゃそろそろ本番ですよ」

変だ。どうも理解出来ない事なのですが、次の瞬間、私は黒メガネのふちを指で押し上げ、シナリオを片手に、映画のセットに立ち合っているのです。うだる様な暑さのライトの下で、演じているのは、相い交らず貴女と先程の男なんです。

（こりゃ、相当疲れてると思いました、ありのまま行きましょう）

「はい、スタート」

カチンコが鳴り、私が合図をします。ジョッとカメラがまわり始めました。

ユリさんの身体は、男の手でゆっくりと半転させられ、うつ伏せにされます。背の方でキヌズれの音がして聞もなく、スーッと一度持ち上った身体が、重心を失ったまま、今度はふんわりしたふとんの中で、コマの様に転がり回りました。

きりっと帯で締めつけていた胸元が、何か軽くなっていく気がして、ユリさんは顔をほころばせます。

腰ひもが解かれ、えりにかかった男の手が素早く、着物の前をはだけました。抵抗する事を知らないユリさんの身体は、男の思い通り、身につけていたものを奪われてしまいま

した。

「はい、縛って縛って！」

張り切った監督である私の声がします。芝居であって、しかし、演技ではありません。焦点の定まらぬユリさんの視界の中で、幾人もの男がニヤニヤ笑っています。

少し肌寒いのと胸の自由がきかない事で、とっさに縛られているのを知った貴女の表情は、悲しみと、わずかばかりの喜びで、例え様もなく色っぽいのです。

反射的に組んだ足には、健康そうな素肌をかくす布もなく、左右の腕は、それぞれ、肩と腋から背後にねじ曲げられ、引きしぼられて、頭のうしろで縛められていました。典型的な、鉄砲縛りです。

「物足りない縛り方じゃが、これで結構、楽しめるもんだ」

「どうなさるの」

あくまでも真っ白い肌の、そこだけがうっすらと色づき、ピンと張った乳房が、期待に大きく息づいています。

枕もとの水さしの中で、恥かしそうに、ユリさんの裸身が小さくまるまった時です。

「ううっ」

ひざをついた男の両手が、ユリさんの自信を持っていると云われる胸の隆起に襲いかかろうとするようです。

それは適度の弾力を持ち、しかも形がくず

れていないので、天井に向って突き出ている様でした。

宝石は、磨けば磨く程、その輝きは美しさを増します。女は宝物です。その美しさは、世の男の手によって創り出されるのが一番じゃないでしょうか。

「ユリ、どうした、迫力がないぞ」

私が大声でどなりまします。

これに答えるべく、男は大ハッスルで貴女におそいかかって行きました。

「あっ、いや、あー」

勝手のちがう、五十男のじわじわした責めが始まりました。貴女が日頃想像するハンサム青年の責めではありません。けれども、ユリさんはこらえなくてはなりません。

遠く潮騒のささやく様に、そして荒々しく岩へきに打ちあたる波の様に——ある時はゆるやかに、又、ある時は烈しく、時間をたっぷりかけ、男は貴女の心をかきむしる様に責めまくって行くのです。

「よして、お願い。うー」

低いうめき声は、それでもある種の欲びも交えていました。メガフォンを持つ私は、ウンと、うなずきます。

ムチ打ちや強烈な縛めとは異なり、それほど参らない様で、実は相当こたえるのが、案外このようないたぶりではないでしょうか。不自由な身であるが故に、熱いライトに肌

も汗ばみ、多くの人の見守る中で、張りつめた神経をいたがられると貴女は、どうするでしょうか。

「むっ、はー」

その責めの効果に満足した男は、更に貴女の形よく整った鼻から耳、唇と、所かまわずいたぶり続けます。

身もだえ、泣き叫ぶ貴女の様子に私は大いに満足しています。そして責め役の演技をする者は、男と私が何度も入れ替わっています。

ぐったりとなった貴女は責められ疲れたのでしょうか、撮影はまだ終わっていません。メガホンの合図で舞台の床や壁から一斉に幾条かの水が吹き出して貴女の意識を呼び戻すべく集中攻撃を始めます。

滝の白糸は、いつしか、真珠の首飾りとなり、舞台をうめつくすのですが……。

この先は、あまりにも失礼が過ぎる様ですので止めます。河上さん、勝手な事を書きましたがお許し下さい。

以上の様に、異常な妄想にとりつかれた私も、実際は平凡なサラリーマンです。毎日、仕事に追われ、フウフウやっている平均的な日本人だと思ふのです。人を恋する事もしたいです、実際には未知の世界であるS・Mについて、話す事の出来る友を得ようとひそかに願っています。

ユリさんの告白にヒントを得ましたが、又

ード・ランプならぬ、S・Mカルタなど出来ないものでしょうか。

一寸、横道にそれました。初めは「河上ユリさん」に公開ラブレターを出すつもりでいたのですが……。

しかし、読者全部のものである誌面を、公開とはいえず、ラブレターの如きもので占有するわけにもいかず、創作的匂いを持たせたりもりましたが、読み返してみると、やはりラブレターに違いありません。だが、貴女の告白に接して、私と同質の夢想にふけられた人達も、読者の中には少くないと確信します。

内心では、私一人の占有を望みたいのは山々ですが、私同様の気持を抱かれた多くの読者の代弁とウヌボレて、敢て投稿することにしました。

被縛のモデルとして、又はどなたかのペットとして過ごされるかどうかは別として、貴女はこれから先、M女性として開眼されて行くと思われませんが、そうした「河上さん」の様な未婚女性のひっそりとした願望を待ち望んでいる適令男性のいる事もお忘れなく。

実際のプレイには関係なく、誌上だけの付き合いとしても、又楽しいではありませんか。こういうほのかな思慕を抱いている、きわめておとなしい(?) 気弱なS男の存在もご承知の上で、今後のご活躍を望みたいものです。

【ガンペッタ】

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

転回

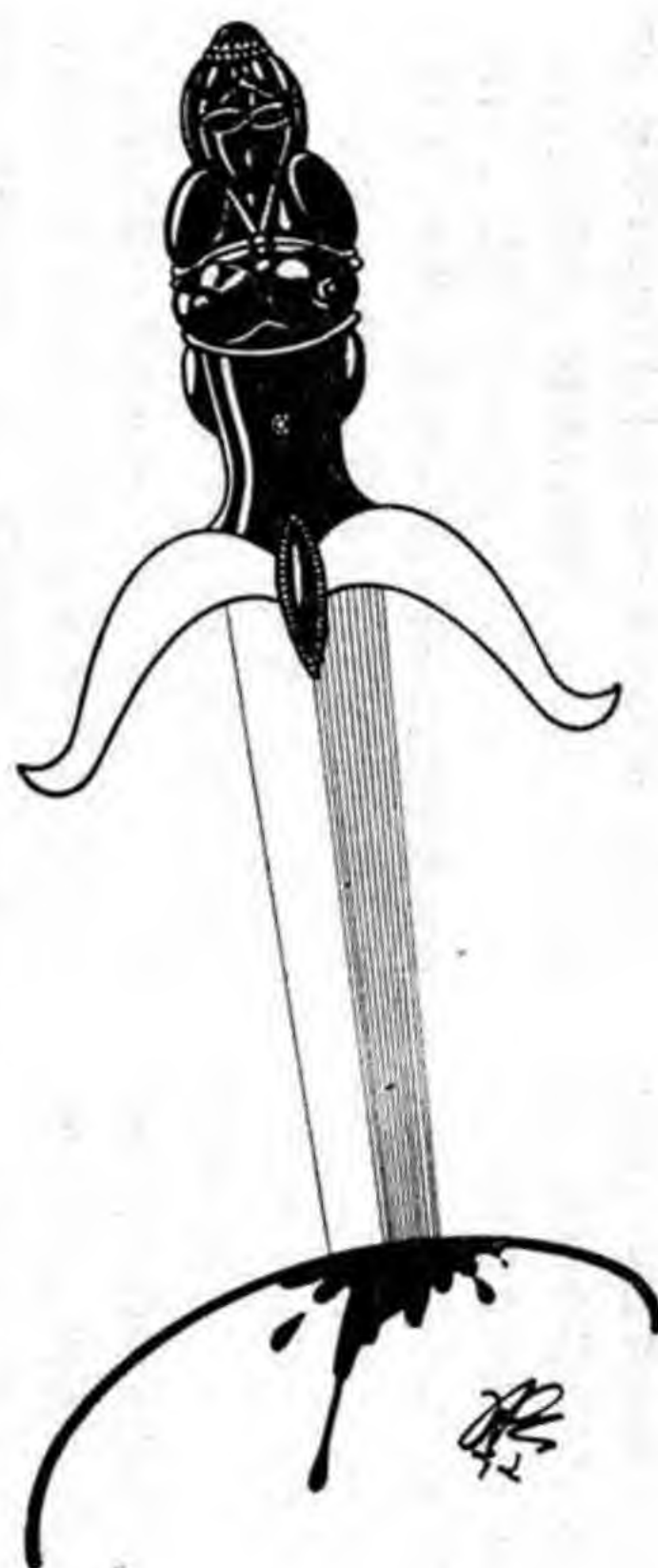
「もうやめなさい。すべては終わったんだ」
深い悔恨の色を表情に泛べながら、後藤は聞きとれない程の小声で言った。

恵利香は後藤の態度に、かえってドギマギして、躓きながら床に降りた。いつもの習慣から反射的に後藤の足下に膝を揃えて平伏する。驚いたことに、後藤の手が恵利香の後手錠を外して、やさしく立上がらせてくれる。そのまま浴室へ、一週間余りの難行苦行に

復

讐

(完結)



千葉青鬼

積み積った垢や汚れが程よい温度の湯で丁寧に洗い落される。恵利香は夢を見ているような気がしていた。それは、きたならしい石塊の中から、美しいダイヤモンドを磨き出していくような作業に見えた。数々の調教で鍛えあげられた恵利香の美事なプロポーションを包む絨のような艶肌が、輝くばかりに顕れてきたからである。四十五日間、陽の目を見なかった肌である。かつてあった日焼けした野性美こそ、少々失われてしまったような気がしないでもないが、その反面、それは軟化し

抜いたアスパラガスのように白く、触れればくずれてしまうかと思うばかり、なよなよして、それでいて腰の強い、爛熟した美しさににじみ出ていたのである。いいかえれば、以前のいささか子供っぽい生硬な美しさが、成熟した女としての色っぽい美しさに変貌したのだと言ってもよいのかも知れない。

このような美しさは当然後藤にも作用せずにはいなかった。後藤自体、今までの後藤ではなかった。神意の代行者であるといった狂信的な憑依は既におちて、一介の平凡な青年

に戻っていたからである。

赤いカーペットを敷きつめたC室に戻る。

恵利香の裸身は、赤い調度をバックにして、この世のものではないような美しさだった。さすがの後藤も息をのんだくらいだった。

いつの間にか、真新しい下着類と春物のブラウス、セーター、スカートなどが一揃い用意されていた。

昨夜、一応地下室を覗いたとき、一日の激しいトレーニングを終えた恵利香は、例の通りコンクリート床にゴロ寝ながら、疲労のためかぐっすりと寝入っていたのである。

そうした状態の彼女を起すのは可哀そうだと思ったので、後藤は再び住居に戻って一夜を過ごし、四日の朝からデパートで恵利香のための衣服を調べてきたのである。

恵利香にとっての朝には、はじめから時差があった。したがって恵利香の起きたのは、実際の時間ではもう正午に近かった。

「これ、気に入るかな？」

物も言わずに、恵利香は下着を掴んだ。恵利香には、それが光りを放った宝石のように思われた。清潔な白さが、目にしみる程だった。心臓がギュッと締めつけられるような歓

びだった。又取り上げられてしまったのは、大変だという風に、慌ててショーツを穿き、ブラジャーをつけ、スリッパをかぶった。ここで、ややおちついて、ブラウスとスカートを着る。何から何まで、彼女のサイズにピッタリだったばかりか、自分で選んだとしてもこれ以上には出来ない程彼女の好みに合っているのではないか。しかし、好みは兎に角、サイズについては隅から隅まで、余すところなく後藤に知られてしまっているのだということに、今更ながら気付いた恵利香は、羞恥に思わず顔を染めてしまうのだった。

二人は相対してストールに坐ったままじっと動かなかった。恵利香の膝には、両親の不幸な最期を伝える新聞の束がのせられてあった。今や恵利香は一切を覚えていた。涙が次から次へとこみあげてきて、ぬぐってもぬぐっても頬を濡らした。

「今はもう隠しても仕方のないこと……」

しみじみと新藤は語りかけた。

「あなたは忘れていくけれど、私はお父様の会社で秘書をやっている後藤です。母が亡くなってから、養父、後藤の名前に変わったのです。お父様もお母様も、私が新藤かねの忘れ

がたみだということに気がつかれなかったようでした。そうです、私はあなたの御両親に復讐しようとしてあなたを誘拐したのです。そして、あなたをはずかしめることによって母の恨みをはらそうとしたのです」

「私はもっと時間をかけて、ジワジワと苦しめて行く計画でした。しかし、思わぬことから、一切が急転直下、カタストロフに陥込んでしまいました。私の考え以上のものが、何か神意のようなものがそうさせたのでしょうか。今更ながら。今は御両親は遠く私の手の届かないところに行かれてしまいました。いくら私も死者までも鞭うつことは出来ません。つまり私の復讐は芝居なかばで幕をおろす他はなくなりました」

「私はあなたの御両親の死に直接の責任はありません。しかし、間接的にはその原因を作ったと言えます。私には、もはや思い残すことはありません。ですから、これから先の私の運命は、その一切をあなたの裁きに委ねます。警察へ訴えられても、いやそれより親の仇である私を殺そうとなさっても結構です。私は甘んじてそれに服します」

被告席に坐っているかのように首をうなだれた後藤は、ときれときれに、これだけのこ

とを言うとき黙って恵利香の言葉を待った。しばらくして、流れる涙を拭いてもせず顔をあげた恵利香はしばらく出すような声で言った。

「しばらく私を一人にしておいて下さい」
 気押されたように後藤は立ち上った。

赤い部屋に一人残された恵利香は、長い間身じろぎ一つせずに泣いた。

彼女にとって、ただ一つの救いだったことは、この地下室で互いに責め合った相手が母の緋沙絵夫人だったのを知らなかったことである。緋沙絵夫人が死んでしまった今、後藤が言わない限り、この秘密は闇の中に葬られてしまう。復讐の道具にされた恵利香が、心ならずのこととはいえ、若しことの真相を知らされたら、一生それを悔み、良心の呵責に悩まされなければならなかったであろう。

それにしても、哀れな恵利香だった。一時に両親の、それも非業の最期を知らされたのである。後藤が置いていった新聞も、見出しの上を空ろな目が走ったに過ぎない。事実、恵利香にはそれが父母の死を報じているというだけで、もう読むに耐えないのであった。それでも、新聞流のショッキングな見出しは、恵利香の思考の中に無遠慮に躍り込

んで来て手ひどいパンチを加えていた。射落された獲物の罠りを駆け廻っている狼犬の吠え声のように恵利香の頭の中で、ガンガン音を立てていた。

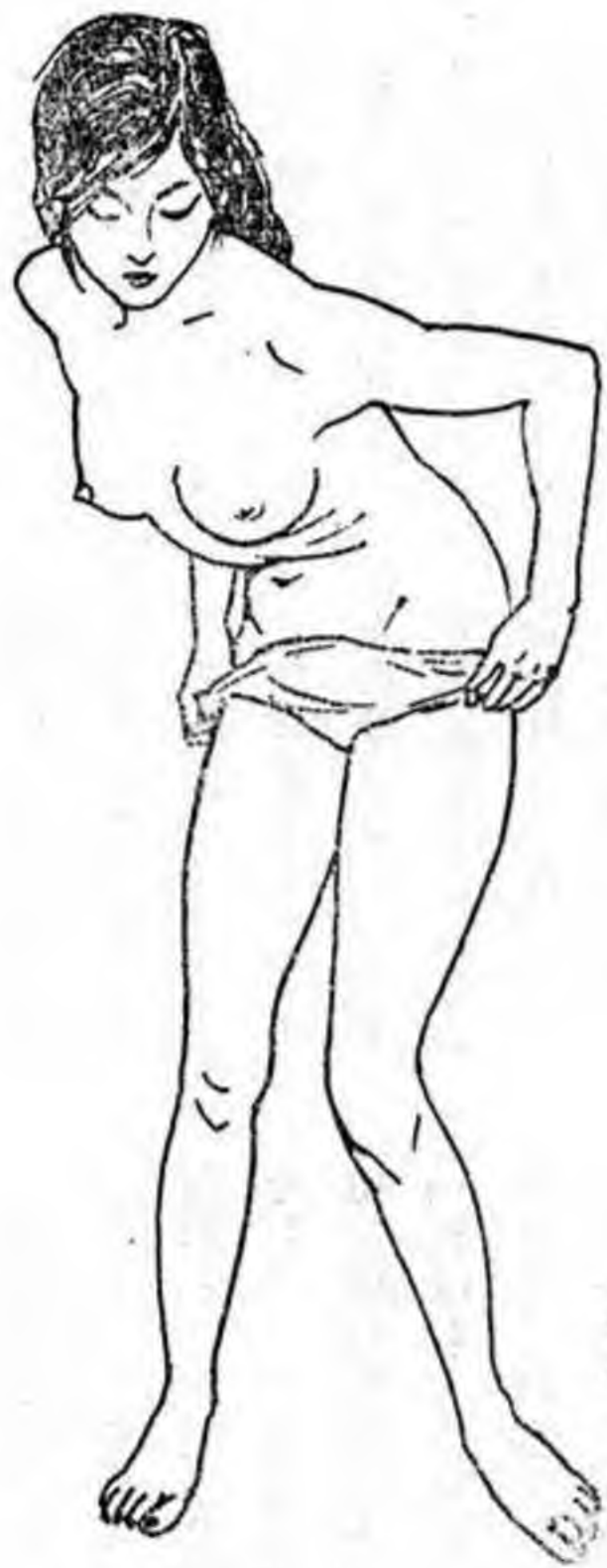
このとき突然襲いかかった激しいショックに、もとのままの彼女だったら、一たまりもなく打ち斃されてしまったかも知れない。この限りでは、一カ月余りにわたって、執拗に彼女を苦しめて来た調教は、こうした心の衝撃に対しても、或程度の免疫のようなものを作りあげていたのかもしれない。

溺れ死ぬことが出来たらと思うばかりに流しつづけて来た涙の洪水の中から、恵利香は暗夜にまたたく蠟燭の火のような、小さな光を認めていた。そして、その光は次第に輝き

を増し、大きくなって行った。さっき、後藤が示してくれた少しばかりのやさしさが、この灯に点火をしたのだということ。そして、この灯火こそ、悲歎のどん底に呻吟する彼女を狂気と自棄から救ってくれる灯台のようなもので、ということを恵利香はハッキリと信じた。恵利香の心の中で漠然としていた愛、後藤明をこがれる心が、歴然と形をなして来たからである。

心から憎んでいた筈の相手を恋するとは、恵利香自身でも不思議なくらいだった。何か得体の知れない獣めいたものが、猛然とあばれ出したようなもので、到底おさえようとしても押さえきれないことだった。その上、恵利香には後藤に対して隠すべき何ものも残されていなかっただけに、

羞恥の偽装をする余地さえも全く存在しなかったのである。皮を剥かれた白兎のような恵利香が、切羽つまった断崖に立つて、後藤にすがりつかざるを得なかったからといって、あながち無理からぬことと言わなければな



らない。

古来、最大の幸福を享受できるものは、又最大の忍苦を耐え抜いたものでなければならぬという。その意味で、恵利香は、今こそ最高の幸福を授けられるべき有資格者となった。そして、あれほど凄烈な被虐の日々を経たきたというのに、恵利香には乙女だけが持つ清らかさが、その心にも肉体にも依然として残されていた。人はそれを奇蹟と呼ぶかも知れぬ。しかし、失うことは又、得ることでもある。世俗的なものを何もかも喪った今となって、恵利香は、はじめて自分の深奥にかくされた財宝を知ったのである。わだつみの底深くかくされていた宝は、今、浮かび上って、後藤のものになろうとしている。

恵利香が立上ったのと、後藤が近寄ったのと殆んど同時だった。次の瞬間、二人は固く抱き合っていた。そこには愛し愛されるべき若い男女の姿が、一切の不純物をふりすてた状態できわめてシンプルに、それでいて力強くとり残されているだけであった。

恵利香は自分を閉じ込めていた厚い氷が、一時に溶け去って行くように覚えた。

今の今まで恵利香は、不安でたまらなかつ

た。帰って行くべき世界に、果して自由があるだろうか。人間性そのものですら諸々の羈絆に縛られている社会ではないのか。善悪といても、絶対的な地盤まで深く掘下げられていなかったのではなからうか。そんな社会で、自由といったところで何と頼りのないことだろう。それから見ればすっぱだかにされて、苦しければ泣き、痛ければ叫んで来た四十五日間の方が、もっと充実して「自由」であったようにさえ思えてくるのであった。

行っても止っても、氷の世界から逃れられないと諦めかけていたところへ、奇蹟のように開氷面があらわれて来た。後藤との愛を表現し確認し合ったことで、恵利香には生きる勇気が回復してきたのであった。

ファイナール

半年ほど経った秋晴れの或日、バンクーバーに向けて横浜を出帆しようとしているKラインの高速貨客船があった。その一等船室前のデッキで仲むつまじく並んでいるカップルが見える。二人の手には持ちきれない程のテープが握られて、名残を惜しむ大勢の見送り人の手にと繋がっていた。

この二人とは、いうまでもなく後藤明と恵

利香である。二人は一カ月ばかり前に結婚式をあげたばかりだった。

あの惨劇の直後、五月五日の朝になって、ヒョッコリ恵利香が帰って来たのには、家人ばかりか世間も吃驚させられたのである。昔だったら、神かくしだとか何とか言うのであろう。しかし、失踪中のことを固く口を閉ざして語らない恵利香は、かえって人々の同情を買った。家庭内の複雑な事情から家出をしたのだらうとか、母親の緋沙絵夫人が、娘をまきぞえにしないために他所へ隠したのだとか、色々な当て推量が行われたけれども、両親にかぶされたスキャンダルが晴らすすべもないことだっただけに、悲愁に耐える恵利香の楚々とした気なげさは余計哀れに映ったのである。

警察の調べでも、当の恵利香が監禁されたとも誘拐されたとも訴えなかったし、出入国の証拠も不十分で、その上圧倒的な世論もあって、問題にならないで済んでしまった。

真相は一切知られなかったが、恵利香と後藤の仲が急速に深まって行くことは、誰の目にも明らかだった。三島の後を襲って

社長になった叔父の次義も、寧ろこうした発展を好意的に見守っていた。これによって、恵利香が悲歎の淵から少しも早く立直ってくれたらと思っていたからでもある。

悲しみにくれているとはいっても、恵利香は見違えるほどシッカリした意思を示すことが多くなった。彼女が相続することになった莫大な財産のうち、会社の持株はアッサリ叔父に贈与してしまったし、不動産も処分してその金を施設に寄附してしまったし、要するに三島正義、緋沙絵に属する財産は殆ど受けとることを拒否してしまったのである。これだけは、誰が何といおうと、断乎として実行してしまった。勿論、これには後藤の積極的な支持があったことはいうまでもない。はじめは世間知らずの小娘の、将来を考えない衝動的な行動だとニガニガしく思っていた叔父社長も、三島の財産を目当にして恵利香に近づいたと思われないという後藤の気持を知って漸く納得したような次第であった。こうして、緋沙絵夫人が果さずに死んだ三島家の解体作業は、娘の恵利香によって成し遂げられたのである。

こんなことで、数カ月はまだ間に過ぎた。虚栄の空しさを知り、謙虚でつましや

かな女に生れ変わった恵利香は、質素な結婚式によって後藤と結ばれたのであった。その反面、彼女を知るあらゆる人達から心あたたまる祝福を受けたことはいうまでもない。

二人の人生の最初のプランは、三島の会社がカナダに新設する合併事業に参加することだった。二人共、触れようとしなかったが、いまわしい思い出の残る故郷を暫く去って、広大な大陸で存分に新生活を築きあげて行きたいという点では、暗黙のうちに一致していたのである。

そして漸くこの日の出発となった。大棧橋には叔父社長以下大勢の見送りが、二人の前途を祝していた。船は滑るように棧橋を離れた。それにつれてテープが灰色の岸壁に時ならぬ五色の花を咲かせて切れる。その最後の一本がプツンと切れたときには、岸の人々の顔もはつきり見えなくなっていた。恵利香には、それが遠くなった故か、あたたかい涙でかすんでしまった故かわからなかった。

船長主催の歓迎レセプションが、その晩に開かれた。僅か十数名の一等船客だけに、すぐに親しくなっていて、これから一週間余りの船旅の楽しさを暗示するかのようであった。

食事のあと、一等サロンでくつろいでいた

二人のところに、ボーイが寄ってきて「何かお飲みものは」と聞く。少し喉のかわいていた恵利香は何気なく、
「コーラがいいわ」

といってしまうと、ハッと顔に朱を散らしてしまった。周囲の誰もが気づかなかったことだけれども、後藤が恵利香にだけわかる幽かな微笑をうかべたからであった。

「ひどい方」
恵利香は小声でいいながら、後藤の膝をつねった。

結婚してから一、二週間。誰しもが経験する、あの熱病にかかったような期間が過ぎると、二人の生活も新しい秩序をととのえはじめてきた。

出発が異常であっただけに、秩序といっても常識的な夫婦のそれとは若干趣をことにしている。恵利香はむしろ積極的に責められることを欲するようになっていた。後藤の中にひそむサドと、恵利香の中によびさまされたマゾとが、うわつらの夫婦では考えも及ばない程深いところで、かえって琴瑟相和す効果をあらわしていたのである。

当座の新居は、いうまでもなく後藤のアパ

トの五階である。夜になると二人は、豎坑を降りて、地下の密室に降りることが多かった。休日などは、外出したようなフリをしながら終日ここに潜り込んで、二人だけの耽美の時を過ごして来た。

「こんな好きになったんじゃ、いじめようとしても、いじめられないよ」

真顔で後藤が問いかけるのに、その首をやさしく抱きしめて恵利香がいった。

「いいえ、ちがいますわ。いじめるのと責めるのでは意味がちがいます。好きだからこそ本当に責めたり責められたり、できるんじゃないませんか」

怨ずるような眼差しには、男の心を溶かすほどのなまめかしさがあった。

「ハハハハハ。そんなこと、どっちだっていいことだ。サア……」

後藤の手が恵利香のスカートをつかんで、それをぬがそうとする。

嬉々として恵利香は逃げる。身をよじって新藤の手を外すのである。赤い絨氈の上を、ふざけまわりながら二人は、声高く笑っていた。

やがて、男の力が勝って、恵利香は徐々に衣類をむかれてしまう。次いで懐しい後手縛



りの感触。後藤はいつものように、ドツカリとストールの間に胡坐をかく。後手の恵利香は平伏しながらニジリ寄って、後藤の膝に顔を埋める。若くたくましい後藤の足下にひれ

伏すことを楽しむかのようであった。

「誓うんだ、オイ」

わざと声をあらげていう。はじかれたように顔をあげた恵利香は再び平伏する。その口から歌うような口調が洩れる。

恵利香が即興で、英訳した詩である。しかし、その意味はあの密室に於て味わった境遇と苦痛の再現を希望するもので、当時の暗涙のうち誓わせられたものと少しも変わっていなかった。

同じ内容を、同じ姿で暗誦してはいても、声の響きの何とちがうことか。ひどい言葉が盛りこんであつても、それは全く甘美な抒情詩を朗読しているかのようであつた。

恵利香の恍惚とした態度、ネットリと耳に快よい声の調子には背徳のかげりすらなかった。愛縛の清め抜いた美しさは、かえって後藤の方が圧倒されるほどだった。

ニガ笑いをした後藤は、

「もういい。ずい分訓練が行届いたものだ」さて、と語調をかえて、

「だが一度もまだ調教しておかなかったことがある。どうかね。そろそろ始めようか」

ハッと身をかたくする恵利香、夫婦になったとはいえ日も浅く、愛情の形は歓喜という

より、寧ろ奉仕であり苦行であることの方が多かったのは当然のことである。反射的に拒もうとする肉体。しかし、すぐと思い直し却って渦の中にとび込んで、その中に活を求めようと思い定めるけなげさ。

「いつまでもコーラでもあるまい」

といいながら後藤が取り出したのは、小型の懐中アンマ器である。

「いやッ」と身をくねらせるのに、

「逃げると例の椅子に固定してしまうぞ」

さすがに、あきらめてジッとしてしまう恵利香だった。しかし、それもホンの束の間のこと。次々と襲ってくるバイブレーションにきれぎれに叫びながら七転八倒させられてしまう。真紅の花に舞う蝶のように、白い裸身をひらひらさせて、雄蜂の一撃をかわそうとする。したたり落ちる汗は露の雫か、陶酔の蜜か。

掴まえられた蝶の命には限りがある。やがて飲びとも苦しみともわからない羽ばたきも弱まり、蝶は椅子にとめられて静かになるのだった。

二人は限りなく幸福だった。ふと起き上った恵利香が、美しい真顔でこういった。

「まえに、ここにいらっしやった女の方は、どなたのですか」

いずれは質問されるだろうと覚悟していたことだったが、後藤は、この真相だけは絶対洩らすまいと固く決心していた。

「あのひとはね」

嘘だと悟られてはならない。大きく息をし、てから、声をひそめて、

「あのひとは、きみのお父様の愛人だった小淵トシ子だ」

みるみる顔色をかえた恵利香は、

「それなら、もっともって苦しめてやればよかった」

「オイオイ、そんなおそろしいことを言うんじゃない。とに角、死んでしまった人の悪口だけは止めようじゃないか」

「そうね。今の方が大切ですよものね」

素直に恵利香が答えた。

前から聞こう聞こうと思っていたことであつた。しかし、女らしい嫉妬心から、何となく聞くのがおそろしかったのも事実だった。今や恵利香の疑惑は氷解した。有頂天になった恵利香は、いきなり後藤にむしゃぶりついて、ところさらわず接吻の雨をふらせる。「くすぐったい。やめろ、やめてくれ」

攻守逆転である。後手に縛られていても、恵利香の動きは敏速だった。馬乗りになって後藤を押さえつけてしまう。この可愛い捕われの蝶の圧迫が下敷になった後藤をうっとりさせた。

アマゾンのように勝ち誇った恵利香は、

「あなたの復讐は終わりました。今度は私が復讐する番です。覚悟なさいませ」

笑いを含みながら、おどすように言う。

「それは？」

と、これも笑顔で問いかける。

「それは、つまり、私みたいなものを一生奥さんとしていなければならぬということ」

「こいつッ」

「ホ、ホ、ホ……」

スルリと逃げる恵利香は、まるでリスのようにすばしこかった。

再び一等サロンに戻ろう。

後藤は、何杯かのコニャックを空け、ほろ酔いかげんで、恵利香との一刻を回想していた。これからも、その繰返しは続けられるであらう。そして、それは彼の生きる力の源泉となってくれるであらう。

船室は密室に近い。誰はばかることもなく

し、イラストレーターでもない。平凡な一会社員を想像していただければ十分である。したがって、はじめから作品に自信を持っていな。人にカッコよく見せたいというエキジビジヨニズムもなかった。ただ、ホンの少し、今までの「奇ク」ではなかった新しい手法を提案してみたかっただけだったのである。私の半生を楽しませてくれた「奇ク」に対してこれがいささかでも恩がえしになってくれたら、これに越したことはないと思う。

そもそも「奇ク」のような雑誌は、ともすれば道学者風の者からの非難を蒙る危険にさらされている。私も一部分は、それを認めざるを得ないと思う。すくなくとも公刊されている雑誌である以上、わが国の現状では色々な制約に縛られるのも止むを得まい。縛る雑誌が縛られているというのは皮肉な話である。北欧三国のようになれば、もっと自由な表現が可能になるかもしれぬが、これには尠くとも今から十年の歳月を要するだろう。

そこで、「奇ク」の置かれている現状を肯定した上で、自粛する編集者の苦心に敬意を表しながら、尚、大方の読者を満足させる作品をものすることも又至難のわざといふべきであらうと考える。その意味で、「花と蛇」

の開拓した分野は、驚くべきものである。

「復響」で、私が志したことは、文章で表現し得ないところをイラストで、イラストで表現し得ないところを文章で、つまり文と画をより密接に補いあわせることによって、相乗効果をあげさせて見たい、ということであった。従って、われながら下手糞な画のだけれども、他の専門家を頼まずに掲載していただいた。幸い、大勢の読者から、この意図を理解していただけたような批評をいただいて嬉しい。

第二に、「復響」で取りあげた責めの方法では、特に奇抜な、或いは実行不能と思われるものを避け、誰でも日常容易に入手し、又は製作出来るものに限った点を気付かれた読者も多いと思う。このことによって物語りに一層の現実味を添えたいというのが作者としての狙いであった。それだけに、やや新鮮味を欠いたことも事実であらう。しかし、一つ一つ磨きをかけて、精密に説明した努力だけは認めていただきたい。

しかしこれとて、現実には即しているから容易に想像出来るだろうと思っただけのこと、何等の他意はないことを強調しておきたいと思う。

世に悪書追放などといって「奇ク」などもまき込まれる言論圧迫運動について、私は部分的に止むを得ない点を認めていると言ったけれど、このジャンルにおける表現の自由は決して青少年の非行化や道義の頹廢をもたらすものではないと信じている。それなら、推理小説の愛好者は殺人犯か強盗でなければならず、「奇ク」の愛読者はすべて変態性欲者でなければならなくなる。現実には、サスペンス小説や「奇ク」の愛読者の方が、かえって健全な市民であることの方が多い。これらは健康にして幸福な社会生活をしている常識人が、ある時間を、フト酔い痴れる美酒のような、リラックスの必需品なのである。これを読んで現実に、美女を誘拐してみようとか、人殺しをしようとか行動を起す者は、ドンキホーテ以外にあるまいと思う。若し、取締るとすれば、それは「奇ク」ではなくて、他の「なにか」(?)ではないだろうか。

最後に、上手でもない作品を一年間に亘って愛読して下さった読者に心からの感謝を捧げ、我儕な作品に貴重な誌面を割いて下さった編集者にお礼を申上げる。次作が又、多数の支持を得られれば幸せこの上もない。

机上籠郭

法律雑誌



— 井上俊彦 —

レイ国では先に婦女法（婦女を対象とした民事特別法）を施行致しましたが、このたび婦女刑法（犯罪の行為主体が婦女であることによる刑事特別法）を施行することになり、次の国会にその草案が提出される予定です。婦女刑法は従来男も女も同じ刑法で処罰されていた不合理を正す画期的な立法ということ

ができます。抑々、男と女とは同じ人格を有するものに非ず、女が古代より男の所有物として扱われてきた此国に於て、女に、男が適用される刑法を適用してきたのが間違いであり、婦女には婦女の特別な犯罪類型をも有するので、この立法は法曹界をはじめ一般世論の支持を得ることは疑いないでしょう。

幸いなことに婦女刑法の草案を入手することができましたので、ここに速報と共に解説を附し皆様にお知らせ致します。

この立法により婦女は明確に所有物と断定され、所有主の自由に処分することのできる価値を有する財産とされます。また先の婦女法と共に、この立法によって婦女と男子の身分格差を固定化し、よって国家と社会及び家庭の秩序を維持安定させることができるものと確信致します。

婦女刑法

（昭和〇〇年〇月〇日）
法七八

施行 未定

第一編 総則

第一条（主体）本法は婦女に対してのみ之を適用す。

（解説）婦女刑法であるから本条は当然のこととを注意的に明文化したものです。従って、たとえば男が婦女を唆かして各則の罪をおかさせた場合でも、男にはこの刑法は適用されません。男の各罪の処刑は一般法によって処断されます。

第二条（刑の種類） 死・破壊・姦・印・鞭・使用・晒・送・切・詰・浣を刑とす。

（解説）従来、慣習として行なわれていた各種の刑を、上記の十一種に限定し、もって過重な刑、残酷な刑を婦女に科することなく、婦女の人格を尊重するように務めたということができます。

第三条（死刑） 死刑は死刑場に於て、切腹、導火線・油焼・地獄門の適用によって之を執行す。

（解説）死刑は公設の死刑場で行なわれ、希望する国民は、一定の見学料を支払えば、自由に見学することが出来ます。また死刑前日までは無料で誰でも死刑囚と一夜を共にすることが許され、強姦罪等の罪責を負うことがありません。

切腹は名誉刑として普通、上級婦女に対してのみ行われます。導火線とは、婦女の身体に爆発物（ダイナマイト等）を仕掛け導火線を長目にして死に至る苦痛を十分に感じさせて行なう死刑執行です。導火線が次第に燃えつきてくる時の女囚の表情は、大変興味深いものです。

油焼とは、大きな釜に油を入れて煮たて、

死刑女囚を海老縛りにして、その上からつるし、時間をかけて序々に油の中に浸し込む方法による死刑執行です。

地獄門とは砂の上に婦女を大の字型に固定し、全身、特に胸や下半身に厚く蜜を塗り、蟻を放って死に至るまで放置する方法による死刑執行で、死刑の中では一番婦女にとって苦痛の伴うもので、極刑中の極刑といえるでしょう。入るまじき所へ蟻が侵入した時の婦女のあわて悶える様は、見学者の多くを喜ばせることと思います。

切腹以外の死刑執行は全裸で行なわれる規定になっています。

股裂き、火あぶり等による死刑執行も一応は案として考えられたようでしたが、草案では以上の四方法に限定されました。国会の審議の過程で加えられるか否かが楽しみです。私としては、見学料を支払って死刑執行を見せる以上、方法は無制限にした方が見学者のためかとも思っています。いずれにせよ、婦女の人格権と交差する、難しい問題と言えるでしょう。

第四条（破壊刑） 破壊刑は刑場に於て、乳房及び下半身を破壊することによって之を執

行す。

（解説）破壊刑は死刑の次に重い刑罰で、これも国民は見学することが許されます。（以下見学可能な刑罰は皆同様）、破壊とは身体の完全性を害うことで、単に乳房に切りつけることではなく、えぐり取ることを意味します。下半身も同様で女としての機能を害う程度まで破壊しなければなりません。乳房と下半身に限定したのは、婦女の人格を重んじた結果、外観は害うことを避けた為と、女としての証拠を現わす機能だからと解せます。

第五条（姦刑） 姦刑は刑場に於て婦女を姦させることにより之を執行す。但、相手方と為るは人間であることを得ず。

（解説）レイ国では大古時代、牛が神聖なものとされ毎年十名余の処女が神たる雄牛の世話を為し、自ら犠牲となって雄牛に体を捧げたという史実があります。しかしながら現在では正常なる道徳も発達し、また法も獣類を神聖視することは犯罪として処罰していますので、牛に捧げるなどということは行なわれていないと言えるでしょう。それでこそこの条文の意味があります。つまり刑罰として婦女に獣の犠牲になることを強いる価値は獣類を

婦女が忌み嫌うからこそ生じるのです。

普通獣刑は、婦女を逃げ得ぬように固定して、その場に雄牛、雄犬等を放ちます。婦女は一日中、刑場に固定されているのですが、その間に獣類が何もしなかったときは許されることになっています。すなわち、その機会があったことだけで婦女は苦痛を感じ罪を反省するからです。

第六条（印刑） 印刑は法律に規定ある場合、

本刑の附加刑として之を執行す。

（解説）印刑は法律に規定のある場合に、婦女の臀部に印を付け、よって一般人が、婦女の犯罪歴を容易に知り得られるようにするために認められた刑罰で、犯した犯罪名を臀部に焼きつけられれば、以後の累犯防止に役立ち、善導することが出来るでしょう。

第七条（鞭刑） 鞭刑は刑場に於て鞭打つこと

により之を執行す。

（解説）鞭は皮製のを用い、これで女体を規定回数だけ鞭打つことによって刑を執行します。鞭打ちは女体の背後のみに限られ前面を打つことは価値の滅失、婦女の人格権の保護等の理由により禁止されています。一般には宙ぶりの形で背中を、四つ這いの形で臀部を

打つようになっており、見学者も一定の金額を支払って鞭打ちの執行に参加することができます。

婦女が気絶したような時は、正気づかせてから再開し、規定回数だけは必ず打つことになっていますが、その刑執行の場合の日時の制限はありません。

第八条（使用） 使用刑は国営慰安所に於て、

一定期間、婦女を使用することによりて之を執行す。

（解説）経済生活が低く妻を買えない男子のために国は慰安所を設け廉価で婦女を一夜貸与していますが、使用刑は婦女をこの国営慰安所に収容して、その目的の労役に就かせることによりて執行します。刑としては大変に軽い方で、一定期間務め終わると競売に出品されることになっています。もちろんこの場合、所有権者は、国から使用料及び競売の競落価格を得ることができます。

第九条（晒刑） 晒刑は公開刑場に於て婦女を

晒すことによりて之を執行す。

（解説）公開刑場とは道路及び広場等のことで、人の多く集合する所を意味し、婦女をそ

の場で晒すことによりて刑を執行します。晒は必ず、全身裸体で行なわれ、立木縛り、ベッチ寝縛り、クズ籠またぎ縛り等、その場に存在する事物に婦女を縛りつけ、見物人は誰でも自由に、その罪人を嘲けり弄ぶことができます。罪人を悶えさすことにも時間内に限り制限はありません。

第十条（送刑） 送刑は婦女島に送ることによ

りて之を執行す。

（解説）婦女島は婦女のみが居住し自給自足の生活を営んでおり、送られた婦女は禁足生活をしなければなりません。現在数百名が送られておりますが、衣服などは無く、婦女たちは木の葉等を工夫して、それぞれ着用しなければならぬという野性の生活を過ごしています。男子はこの島へ上陸することを禁じられております。上陸した場合、どうなるかは国は保障しておりません。二、三の実例はありますが、生きて帰った男子は有史以来存在しないと言われており、近づかない方が無難です。

第十一条（切刑） 切刑は毛髪を除去すること

によりて之を執行す。

(解説) 婦女は刑場で毛髪類を全て剃り取られます。但し、むしり取ることは婦女に余計な苦痛を与えることになり、放免後の商品価値にも影響することから、許されません。

第十二条 (詰刑) 詰刑は婦女を一定期間隔離させることによりて之を執行す。

(解説) 詰刑として特殊なものに、直腸に凝固剤を注入することが慣習上行なわれていますが、立法としては隔離させることのみに落着いた様子です。その実行手段としては種々議論されたらしいのですが、結局、婦女に貞操帯が装着され、鍵は国が保管し、隔離期間中は所有者といえども脱着することを許されません。貞操帯は婦女の人格を尊重し、皮製の物を着用させ、鉄及び金属製のものは使用しません。

第十三条 (浣刑) 浣刑は浣腸することによりて之を執行す。

(解説) この刑罰だけは今までの刑罰と違って裁判を経ることを必要としません。故に軽い犯罪のしかも現行犯に対してのみ被害者が執行できます。浣腸は食塩水かグリセリン液のどちらかを婦女に選択させ二百CC以内で

施します。刑は罪を犯したその場で行なわれ(道路なら道路、公園なら公園で) 婦女はその場を動くことを禁じられており、後始末も自分自身でさせられます。またその恥しさに耐えられない婦女には、執行権者の許諾によりオシメをすることが許されますが、その姿のまま帰宅しなければなりません。

第十四条 (故意) 罪を犯す意なき行為は之を罰せず、但特別の場合は此限りに在らず。

(解説) これは責任要素としての故意を規定したものであって、罪を犯す意思のない行為は、たとえ構成要件に該当する違法な行為であっても、犯罪とはならないという意味を明文化したものです。

第十五条 (未成年者) 十二才に満たざる婦女の行為は之を罰せず。

(解説) 一般法では十四才に満たざる者となつていますが、婦女は早い者で十二才頃より胸が隆起し取引市場価値ある物として社会に流通するので、十二才以上を刑事責任者にしたのでしょう。

第十六条 (既遂) 犯罪を決意し実行の着手を

したる婦女は既遂犯人とす。

(解説) 一般法では未遂の段階といえることをも、婦女にとっては既遂とみなすことを示したもので、婦女と男子の身分を考えれば、妥当な規定といえるでしょう。

第十七条 (所有者) 正当なる権利に因りて他人の婦女を占有する者は所有者と看做す。

第十八条 (一般法の適用) 正当行為、正当防衛、緊急避難、教唆犯、従犯の規定は之を準用す。

第二編 罪

第一章 社会に対する罪

第十九条 (反乱罪) 社会秩序を乱すことを目的として法制度の改廃を要求し婦女の地位の向上を計り徒党を組んだ者は反乱の罪と為し左の区別に從つて処断す。

一、首魁は死刑に処す。

二、参謀は三年以上の晒刑に処し印刑を附加す。

三、参加者は五年以下の使用刑に処す。

第二十条 (反抗罪) 所有者を殺傷したる者は

死刑に処す。

(解説) 反乱罪、反抗罪はいずれも社会に重大な影響を与えるので、法は嚴罰主義をとっています。この反乱罪の規定によって婦人解放運動をする者を処罰することができ、一般婦女を動揺させ、男と女とが平等であるかのごとき悪影響を婦女たちに与えていた、婦人連盟の政治活動を封じることができるようになりました。これによって社会の秩序は平穩に守られると思います。

第二一条 (恋愛罪) 婦女審査前の婦女、恋愛したる時は審査期日まで詰刑に処す。

(解説) 婦女審査の前に恋愛すると処女でなくなるおそれが生じ、因って取引価値も下落するので、審査期日まで貞操帯を装着して、身の安全を保つように義務づけ、婦女を恋人の横暴から守ってやるための条文といえましよう。

第二二条 (処女喪失罪) 婦女審査前の婦女、処女を失いたる時は使用刑に処し、印刑を附加す。

(解説) 審査後行なわれる取引では処女であることが必要であり、審査前に処女を失った

者は売り物にならないので、一生国営慰安所に務めさせるようにしたものです。処女を失った理由は問われず、恋愛により、又は被暴力によっても、獸類との戯れによっても同一に解釈されます。

第二章 所有者に対する罪

第二三条 (逃走罪) 婦女、所有者より逃走したる時は鞭五十、徒党を組んで逃走したる時は三年以上の使用刑又は晒刑に処す。

(解説) 徒党を組んでとは、二人以上で同じ意味で、単純な逃走より刑が重くなっています。本章の罪は所有者に対するもので、所有されている婦女が犯罪の主体になります。また所有者に対する罪の性格上、本章の罪は全て所有者より告訴のあった場合にのみ罰せられます。

第二四条 (心神喪失罪) 心神を喪失したる婦女は送刑に処す。

(解説) 精神病患者となった婦女は価値がなく、取引も望めず、また社会的害悪を引き起すおそれもあるので、婦女島へ送られることになります。

第二五条 (墮胎罪) 懐胎の婦女、墮胎したるときは姦刑に処す。

(解説) 所有婦女に子供が生まれることは所有者にとって利益なので、婦女が墮胎した時は比較的重い刑を科せられます。

第二六条 (不貞罪) 婦女、不貞の行為を為したるときは不貞の罪と為し鞭七十又は五年以下の使用刑に処す。

(解説) いかなる行為が不貞の行為となり得るかは、非常に難しい問題ですが、刑の軽いことと後述の姦通罪との関係上、身体の接触(指の触れ合い) 見つめ合い、語り合い等を以って不貞の行為とみなすべきでしょう。所有者以外とそれらの行為をした場合に本条が適用されます。

第二七条 (姦通罪) 婦女、姦通したるときは姦刑又は三年以上の使用刑に処し、印刑を附加す。

(解説) 姦通とは所有者以外の者との姦淫、接吻、抱き合い等を行ったことを意味し、それは所有者への裏切りとなりますので、刑は重く科せられます。姦通は和合であることを確認する必要があります。

第二八条（露出罪） 婦女である証拠を露出したる婦女は鞭三十に処す。

（解説）いかなる原因に基ずいて露出したかは問いません。乳房、下半身を露出した時に適用されます。露出とは不特定もしくは多数が感知することのできる場に於て乳房、下半身を露わにすることであり、所有者だけに對していた時は含まれません。路上で他人にスカートをまくられた場合はおそらく本条が適用されるでしょう。

第二九条（被強姦罪等） 婦女、猥褻の行為を受け、もしくは強姦されたときは二年以上の使用刑に処す。

（解説）猥褻の行為を受けたり強姦されたりした婦女は、それだけ価値の下落を生じ、所有者の利益を害するので、一般法に於て強制猥褻、強姦は厳しく罰せられています。しかしながら、被害者たる婦女とても決して無過失とはかぎらず、むしろ心にすぎがあった場合が多々ありますので、被害を受けた婦女の責任もここで明確に規定されました。

第三十条（猥褻罪） 猥褻と戯れたる婦女は切刑の上送刑に処し、印刑を附加す。

（解説）忌み嫌われることが常識になったといえども、中には為す者がおり、特に一人の所有者に多数の妻妾が囲われている場合などに起りやすい。婦女に正しい倫理感覚を要求したいものです。

第三一条（淫乱罪） 所有者に對して請求したる婦女は破壊刑に処す。

（解説）おおよそ、婦女の方から請求するとは、全く道德を知らず、男子の都合、体調も考えない女としては情ない婦女なので、嚴罰に処するのは当然です。物事は全て男子の導きにより行なうものであって本条は正義の理念に適った正当の規定だといえるでしょう。

第三二条（同性愛罪） 婦女、婦女を愛したるときは共々鞭五十もしくは二年以下の使用刑に処し、印刑を附加す。

（解説）愛は男と女との間に生ずるものである。それでこそ美しく社会的に認められるものです。男がありながら男に満足せず、同性に手を出すとは、婦女としては最低であつて、私は本刑は輕すぎると思つています。

第三三条（嫉妬罪） 嫉妬して婦女を殺傷した

る婦女は破壊刑に処す。嫉妬して婦女の物品を強奪したる婦女は切刑に処す。同様にして婦女を脅迫し、又は權利を害し、もしくは義務なきことを行なわしめたる婦女は鞭三十に処す。

（解説）被害者たる婦女と行為者たる婦女が同一所有者に囲われていることが必要です。物品のうちには婦女の髪、体毛を含み、權利を害するとは、所有者に呼び出された婦女を行けないようにする事も含まれます。

第三章 個人に對する罪

第三四条（損害罪） 婦女、他人の物を損害したるときは被害者の選択したる刑によりて処断す。

（解説）他人とは所有者、及び所有者に属する婦女以外の者であつて、損害はあらゆる事象を含みます。それによつて法定刑も総則に記載された全てであつて、被害者が自由に選択できますが、いちじるしく公平の原則を破るときは、裁判所が裁判することになるでしょう。

第四章 道路交通規則違反の罪

第三五条（道路交通規則違反罪） 道路交通規

S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S. C. R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

則に違反したる婦女は浣刑に処す。

(解説) 婦女が道路を歩く時は一定のきまりが定められています。また、車を運転する時も同様で(男子運転の車を追い越してはならないとか、道で男子の妨げとなる歩きかたをしてはならないとかがあります)違反した時は、直ちにその場で浣腸が施されます。婦女には食塩水とグリセリンの選択権、衆人環視の面前での排泄かオシメの着用かの選択権が与えられます。いずれにしてもこの条文のおかげで交通が渋滞することは確かでしょう。

以上にてレイ国の婦女に関する草案全部の解説を終了致しました。これからの国会の審議で果してどれが除かれ、どんなものが新しく追加されるか、今から楽しみです。注目しつつ早くこの法律が施行されることを願って私のつたなき解説を終えたいと思います。

尚、これら一連の草案につきましては、支持団体と反対団体との間で、現在、舞台裏のかけひきが火花を散らして行なわれているようですが、大統領としては、次期選挙戦への布石の意味も含めて、強い態度で臨むものと思われまますので決議は時間の問題でしょう。



起 之 章

区画整理もされそうにない乱雑な下町の、迷路のような露地の突きあたりにその古本屋は在った。

随分と埃っぽい店で、その軒下には、何か勘違いして付けたのじゃないかと思ひそうな

創作

妖

よう

郷

ごう

記

き

秤

蕩

也

『本、金閣堂』と書いた板切れをぶらさげている。私は、近くに住むことでもあるし、また会社の帰りなどには殆ど毎日のように其処へ道草していた。

私の古本漁りは、総じて『責め』などに関連した小説や文献物ばかりである。この偏重的な古本漁りでは、この店は私にとって有難い『発掘場』であった。置き本の三分の一ほどはこの種のものだから、こたえられなかったのである。どのようにしてこうも次々と仕

入れてくるものやら、そんな事は私の知る限りではないが、三度に一度は目新しい本が書棚に差しこんであり、その度に私は高価なものも承知で財布を綺麗に^{きん}洗ってしまふけれど、やはりこの店へ通うことだけは止められなかった。どうせ大した望みもなく、毎日をアパートから会社までの間を、機械的ともいいうか惰性ともいいうのか、ボンヤリと行き戻りしている私のことである。同僚たちのように恋人も居なければ、外で一人遊びする術も知^{すべ}

カット・野江三郎

らないものだから、部屋でトグロを巻いていなければならぬ時ぐらい、密かな自分の夢を或る程度、虹色にしてくれるこの種の本にでもしがみついていたかったのだ。

——ところで、こんなわけだから、その金閣堂の主人とは、いつのまにやら可成り親しい間柄になっていた。

最初のうちこそ私も目的の本が本だから、なんとなく気羞かしくてコソコソした態度だったが、近ごろでは、亡くなった私の親爺の年令ぐらいのその主人に随分とぞんざいな口を利くようになっていたのだ。そしてその頃には、もう行きたびに茶菓子のひとつなど世話を掛け、くだらぬ世間話に時を過ぎてしまふほどになっていた。

彼は仲々の話好きで、私の顔さえ見れば嬉しそうに——方言には弱いからそれが何処の訛りか知らないが、特徴のある口調で——話し掛け、また私も相当悠長なところもある人間だから、ツイ愛想よく合い槌を打ったりして腰を据えてしまうことが多い。そんな私を彼は気に入ってくれていたのだろうか。いかにも好好爺といった感じで話しつづけ、彼の妻が奥のほうから注意するまでこちらを離そうとはしなかった。

昔、軍隊にいた時に負傷したとかで、左腕が少々不自由そうだったが、肩幅のひろい身体でどっしりと勘定場に構え、赤味がちの顔にまんまるい眼をきらつかせる様は、なかなかどうして、よく古本屋の亭主にありがちな深沈？ ぶったところは少しもない。

本当は至って活動好きな親爺なのだが、仕様ことなく商売のために我慢して坐っているのだ……といった風が、その姿から感じとられるのであったから愉快だった。私もツイ身の上話などをしたりして、甘えたような気持になってしまふ。そんな時の彼は、大げさな表情でうなずき、孤独な私にいかにも同情したような合い槌をうつ。するとそれが彼の人物徳というもののなか、私はますます話に熱が入り、まるでキリスト教の懺悔みたいなことになってしまふのだった。

他人に知られたくない筈の性癖にしても、別に顔を赤らめることもなく彼にはすらすと言えたのだから、それは大した「聞き手」なのかも知れない。鷹揚に頷き、最後に「それはわかりますよ、私も……」と言うのが彼の常であった。

……さて、そんな或る日のことであった。相も変らぬ世間話をくりひろげていた時、

彼はフト声をひそめたかと思うと、私にこんなことを言ったのである。

「——あんた、この辺で責め絵の古書を見たことは思わなかね？……」

彼の話ぶりはいつどこで途ぎれ、またいつどこから始まるのやら多分に自由奔放なところがあつたが、それにしても、不意に「責め絵の古書」と言われては面喰らわざるを得なかった。私は、

「え、なんだって？」

と思わず訊き直していた。すると彼は、

「——責草案というヤツなんだけどね」

と言って、何故か私を掬いあげるような眼をするのだった。

「セメソウアン？」

聞いたこともない名に小首をかしげると、
「——実はネ、その江戸時代は中期の頃の奉行配下与力、須藤伊吉という人物が著したという『責草案』なる肉筆の古書がさる処に所蔵されているんだが……どうだい？ あんた欲しいとは思わんか」

妙に声を低めたまま私の表情を窺った。

正直言つてこの時の私は、肉筆の古書などという語感から受けるものよりも、ただ「責め絵」と言った彼の言葉だけに身を乗り出し

ていたのかも知れない——まさしく、何かによってこの胸の深部を掻き立てられたような衝撃を受けたことだけは間違いなかった。

だから、私は、

「どういふことだい、それは——」

と慌てて訊いていた。

そこで彼の語ったことを総合すると。

少し以前のことになるが或る地方へ旅行する折りがあった。そのとき宿泊させて貰った農家のあるじから、偶然、さる山家の年寄りが「奇妙な古本」を所蔵している、ということを知った。勿論、こういう話は商売柄どうしても聞き流せるものではない。そこで早速その山家へ出むいて行った。ひどい山奥で、カラスこそ通ってはいいたが自動車など距離にして半分までのところしか通れない。辿り着いたところにはもうクタクタで、途中で幾度引き返してしまおうと思ったことか知れない。

が、しかし、その家の、本の所蔵主であるという老人に会い、丁寧に頼み入れて、間もなく手にしたその古書を見たとき、思わず疲れをも忘れて空睡をのみこんでしまった。そしてすぐに、これは来た甲斐があったな、と思った。

——それは見るからに古臭の立ちのぼって

そうな和綴じで、その表紙など色褪せもいところ。『責、草案』——『須藤伊吉』の文字も辛うじて判読できたシロモノだった。

だが、表紙さえ繰れば、変色こそあったが意外と虫喰いもなく、その図絵および細字の註釈字にいたるまで明確であった。そして、（勿論こんな露地裏の小さな古本屋の親爺でも、古書を検る眼は持っているつもりだ。眼を据えて、よく見たがそれは偽ものには映らなかった）と彼は言った。——

「で、内容は？……」

と私は訊いた。「図絵」と言った彼の言葉が、より深く私の胸に突きささっていた。

すると彼は、

「さあ、それが……微に入り細にわたる、とはあのことをいうのかねえ」

と、口唇もとに笑みを浮かべるのだった。

「なにしろ、その絵というのが……これはまた歴とした絵師が筆を揮ったのではないかと思うような、それはもう見事な描線で、そのう……無惨というか、凄まじい女性にょしょうの責め絵が、その一枚一枚に実に克明に描かれていたんだよ！」

「へえ！」

「——へえ、それでね、これがどういふつも

りなんでしょうね、その絵になってる女たちというのが、これまた実に色とりどりというやつで、例えば町家の娘や内儀風があるかと思えば、次には武家の奥方、おすべらかしの姫があり、娼妓らしい女もあるかと思えばナン・ト尼僧まであるという……まるで、当時の女の風俗を総ざらいにしたような絵ぶりで、ウン。そしてね、これらの様々な階層とみられる女たちが——」

そのとき客があったらしく店先に足音がしたが、彼は視線もちらつかせず、話をつづけた。聞いている私も、無論のことである。

「——こりゃなるほど、表紙の題字にふさわしいや。全部が全部、奇態な形で縛りあげられ、あたしが今まで、みたこともない小道具で拷問されているっていうんだから……サテ現在いまでいうなら、あれはさしずめ残酷のデザイン・ブックとでもいうかね。もちろん、あたしだって、題字の『責』というのを見たときに或る程度、内容は、察してしまったがね。まさか、そんな凄惨な絵の本だとは思ひもなかったよ。ウン……」

彼は自分で合点し、眼のまえの、私が飲みかけの茶をガブリと呑んだ——

「私ア何故そんなものが『草案』されなきや

ならないのか、そこところ、ちと判らなかつたが、ともかく正直な話が、あたしはその責め絵の醸し出す迫力とでもいうか、普通なら描くのを押さえてしまひそうな……くくられて責められている女のありのままを丹念に描きこんだ凄さに、そして、これまた丁寧な細字でぎっしりと書かれた小むつかしげな説明文らしいのを見て、こんな絵図帖を描き遺したその須藤ってさむらいの根氣のよさ、っていうかね、そいつに大いに感じ入ってしまったな。なにしろたつぷりとそんな絵を描きこんである「草案」の厚味というのが、これくらいもあるんで……」

眼のまえに伸びてきた彼の指先は、優に五センチほどは示していた。

単純な話だが私はゾクゾクしてしまった。

そんなに分厚い責め絵——彼の言葉を借りるならば「凄まじさ」をもって描かれてあるという絵——の本を、もしこの私が手にした時は、とフト思ったからだ。

「——で、その本は一体、どうなっちゃったの！」

意気込んで言うと、

「サアそれが、口惜しいね。汗まみれになつて駆けつけたというのに、譲ってくれといっ

たら、その爺さん「うっかりお前の口車に乗せられて見せちまつたが、そんなことは、出来ねえ。それにお前は、都会の本屋だと言つたが、僕は、この本で、お前に商売なんかさせたくなえや」なんていうんだよ、ハッキリと——」

「で、諦めたの？」

「仕方ないや。すつたもんだの末に、トボトボと引き返した。——麓を廻って爺さんの家が見えなくなったところ、その爺さんの娘とかいうのが追いかけて来て、失礼したと自分の事のように謝ってくれたがね」

「へえ、娘さんがいたの」

「何言ってるんだ、別にいたって不思議はないだろ。ところがこの娘——お前さんは爺さんの娘と言つたから相当年齢喰ってる女だと思ふだろうけど、これがとんでもない別嬪なんだ。あの爺さん、遅くにつくつた娘なんだろうよ。若くって可愛くって、本当にあんな山奥においとくのが残念なくらい……」

私はまた始まつたな、と思つた。うっかりすると彼の話はいつ横へ外れるか知れない。私は、いらいらした表情^{かお}をしてやつた。

すると彼は、まア聞けというように掌をひろげ、

「そしてその娘はね、貴方は気嫌が悪い時に訪ねて来て運がなかった。実は、父はあの本を手放したがってるんだ、しかし今日はもう駄目、今度おいでになったら本を持って帰つていただけるかもわからない、てな意味のことをペラペラ言うんだ。どうせ気休めに言つてくれると思つたからね、ありがとうとだけ言つて帰つて来てしまつたが……サテ話はそこだが、どうだい？ お前さんはそんな本を見たくないかい」

「——欲しいね、勿論！」

「じゃ、あたしはあれから行つてないけど、先日これを教えてくれた人に問い合わせてみたら、まだ爺さんはその本を持ってるらしいとの事だったから、お前さん、代りに行つてみるよ」

「えッ、ぼくが？——」

「そうだよ」

「うーん、それもそうだな。しかし、ぼくが行かせてもらうにしても、その本の事、もう少し詳しく教えてくれないかな」

「ああいいとも。あたしが覚えてる事は何なりともね」

この『責草案』（正しくは八責、草案Ⅴでもあろうか）に就いての金閣堂の主人の言葉を反芻しているうちに、やがて私が自分なりの不審点に気付いたのは当然だろう。

まず、この古書——というより絵図帖の、末尾に書かれてあったという年号の下の『奉行与力須藤、之を記す』のことである。彼はただ『奉行与力』とだけしか書いてなかったと言ったが、これではおかしい。

私は、『須藤』なる人物はナニ奉行の与力であったのやら、と思ったのだった。

浅学な私の知る限りでも、江戸時代といえは奉行といっても大別して中央職と遠国職があり、その繁累下に於いても当時は諸藩に、この幕府の職制度を真似した色んな奉行職を作っている。この『責草案』が現在所蔵する彼の老人へどのようなようにしてわたったか知る限りではないが、この場合、仮に中央職だとしても、それにもいわず、三大重職の「町」「勘定」「寺社」の奉行があり、その他の道中、作事、具足、蔵等々の奉行をも含めるとかなりの数だと言わねばなるまい。この『須藤』がナニ奉行に属していたかという事であるがこの人物が『責草案』という、如何にも尤もらしい題にしろ、そんなものを書き記し

たということから、これは多分中央、遠国職いずれにしても、町——牢奉行所などあたりに、所属していたのではないかとツイ思い勝ちになる。もっともそれなら、この「草案」なるものは役職の上から、必要のために作られたと解するのが妥当であろう。

がしかし、それなら、この『責草案』の図解？　ともいうべきものに、まさか絵描き職の写生でもあるまいに麗々しくも様々な身装りをした女性をもってきて、風俗のオンパレード式絵図を描きあげたりしているというのは何故だろう。ましてや、責められている女の隠しどころまで克明に描いてあるという事に措いてをや。「草案」とあるからには、やはり役目柄とは思いたい、しかしこれでは余りにも筆者の「趣味」染みてさえ見える。いかにも「絵」的過ぎていくということであつた。

——私はフト、この『須藤伊吉』なる人物は奉行所なんかと全く関係のない人物ではないか、と思った。

無論、この古書が本物であるという上に立っての考えではあるが。そこで——

この『須藤』という人物は、この絵図帖を全くの趣味としてつくったのであって、彼は

それが完成？　したとき、ただ冗談で『奉行与力』と署名したに過ぎない……

（その『責草案』こそ、彼が人知れず、密かにその趣味どころをもって「責め」を考案し楽しく筆にまかせて記し終えた、いわば『須藤』という人間の夢の控え帖なのだ）

とひとり推理気分を味ったことであつた。こうなると、私はもう『与力須藤』の疑問や、古書としての真偽の点は、どうでもよくなっていた。

素晴らしい責め絵？　が現存し、そしてこれには丁寧な解説まで付されているということから、充分胸を弾ませるだけの価値はある本だと思ったのだ。

——数日後。

私は金閣堂の主人に山家の老人を訪ねてみると言い切った。

金閣堂は、

「や、行ってくれるか！」

と言った。私は、

「ああ、ぼくにもまだそれ位の情熱や行動力はあつたさ——」

などと、たかが古本一冊に遠路をわざわざ出掛けることにちよつと照れ臭さを覚えながら、胸を張ったことであつた。

「行ってくれるか」と言っただけでも、私は出掛けなければならぬだろう。いま、この気炎の盛り上がった機会を逃せば、私は今後きつと悔むに決まっている——。

翌、早朝。

私は駅へと向った。

いつもなら、ひとり寝のわびしい空想のなかにだけ浮いていた女の受縛態が、その時は清冷な朝の大きに触れても、そして雑踏する駅のホームに登り立った時でも、次々に繰られる絵画そのままに美しく、また哀しく脳裡を彩っていたことであつた。

私は、単純な意気込みと、冷暗な、奥深い飲びめいたものに煽られるようにして旅路へと出立した——。

五月の、或る日曜日のことである。

訪 之 章

「わかつてる。だけど折角出掛けて行くからには、こちらの誠意をぶちまけて何とかウンと言つて貰うようにはするさ……もしそれが駄目だったとしても、一度でも拝見させてもらえれば、それで多くの気持もいくらかは済むだろうから——」

これは本心であつた。たとえ譲つて貰えなくても、現在では架空でしかないあのような拷問が、実際に行なわれていたという当時の「人物」が描いた女責めの一枚の絵、それが

かぶさってくるような、陽光も洩らさない雑木林がいつまでもつづく無聊感。とても新緑の匂いを楽しむといったわけにはいかなかった。やがて迂濶にも靴穿きだった足にマメが出来、それがつぶれはじめる。

都会人のひ弱さは一向に人眼のないのをさぐり返ってしまいたいと思つたことやら。

約三十分は歩きつづけたころ、——そんな頃になって、はじめて目ざす部落が予想をはるかに超えて、すごいほど深い山中に在ることを思い知り、ついに心細くさえなつてしまつた……。

こうして目あての部落が、その鬱蒼として茂る山林に囲まれた、それも猫の額のような狭い盆地に、点々としてその藁葺き屋根を見せはじめたころは、もう私は酔っぱらいのそのれのような歩きかたをしていたのであつた。

私は道端に坐りこむと数回目の憩いをとることにした。

腹の中では、こんな辛さをもっと詳しく話しておいてくれなかつた金閣堂を憎たらしき思い、こんな事ならもうちょっと実を入れて身支度してくるのだつたと悔んでいた。

そして、汗にまみれていた肌がすっかり冷

えてしまったところになって、私はやっと腰を上げると、眼のまえに在る部落へと近づいて行った。

——総数六、七戸ばかりの部落だから、これも当然だろうが、私の目的とする家はすぐに判った。

家の前では、野良着の老婆が、跨いで跳べそうな小さな畑を耕していた。

私は、きっと訪ねる人の妻であろうと思つて、その老婆に名刺と手みやげの菓子包みとを渡し、来意を告げた。

老婆はしばらくキョトンとしていたが、やがて手みやげをしっかりと抱え直すと、物も言わずに家に入ってしまった。

私はその場にのこされ、手持ち無沙汰に周囲を見廻しながら、よくこんな所に人が住めることだな、などとつまらないことを感心したりしていた。

五分ほども突つ立っていたとき、縁側に面した障子が開いて、皺くちの顔が覗いた。不意を突かれたようで、私は何も言わずにぺこりと頭を下げてしまったが、どうやら相手のその様子をみると、先刻からその障子の際に凝つと坐りこんでいたものようだ。「お邪魔させていただきます……」

私はゆっくり近づいていき、老婆に述べたのと同じ事を繰り返して、どうかお差支えなければ御所蔵の品を拝見させていただきたい、と丁寧に願い入れた。

——老人は、私が喋っている間、落ちくぼんだその眼で凝つとこちらを見つめていた、というより恐いほど動かぬ眼で、私をにらみつけていたが——用件を話し終えて一息したとき、始めて障子を開け切り、その姿を見せながら、

「そんなことで、あんたもわざわざこんな処まで来なされたか……」

と昆布でも噛んでいるような口の動かし方で言った。

「え、私も？——とおっしゃるは、他にも誰方がか？……」

私は縁側にそつと腰をおろし掛けていたが驚いて訊いた。

「来たな、一ト月ほど前に。たしか都会の本屋商売という男じゃったが」

「——ア、その男ですか。いや、その人なら……いま申しましたように、或る人から伺つてという、その人のことですよ」

自分でも判るほど、いかにもホツとした口調がついて出た。性来のろまな私がこの事に

関する限り慌てふためくものだから、馴れないこととは言え駄目な話だ。

「なんじゃ、その男に聞いたのかのオ」

「はい。親しくして貰っています。実はあの時も、私の希望で、あの人に此方こちらへ来て貰ったようなわけで——」

少々辻褄が合わなくても、すらすら嘘を吐いた。いや駄目引きも誠意のうちだと思つてから良心も咎めない。私が如何にしてその古書に執着心を抱いているかという事を印象付けるのが先決だった……

「——で、早速で失礼ですが、その古書を拝見させていただけるでしょうか？」

「それがのう」

老人は、小さな身体に似合わぬ、つい手で顔を撫で撫で言った。

「あれはもう、見せられんことになってしまつたワ」

「えッ、どうしてですか！」

「この前もな、あの本屋とかいった男にうっかり見せてしまつて、ある連中から散々に怒られてのオ」

「——」

「あれは、そんなに嬉しそうに、他人なんかに見せるもんじゃねえ、とな」

老人は俯向き、黒光りする短い煙管に刻みを詰めはじめた。

「それにな、あんたにや悪いがその本はもうこの家にないぞな——」

「なんですって」

「わざわざ来て貰うて済まんことしたが、まア諦めておくれ、のう？」

「ど、どうなさいました、その本は」

「……うん、娘がの、納めに行つてしもうたワ」

「む……娘さんが？」

「そう、儂の、娘でな」

私は眼をむいた。娘があゝの『責草案』を納めに？

「納めるって、一体何処へですか」

「まつりじゃ」

「え？」

「祭りじゃが。奥谷の村のな」

「奥谷の村の……祭り？ なんですか、それは」

「シラウチシキの、祭りじゃな」

「——？」

私は眼をむいたまま、纏まりのつきそうにない頭をゆるく振りつづけた。

（この老人の娘が、何故『祭り』にあの本を

「納め」に行かなきゃならないのだ）

（それに、シラウチシキの祭りたア？ 一体なんだよ、それは！）

「で、そのう、娘さんは何時戻つて来られるんですか」

「三日もすりゃ、帰つて来るワ」

「——ううむ、三日！」

「じゃがあんた、いま言うたように、あれは納めに行つたからの。娘が帰つて来てもそんな時ア手ぶらじゃ」

老人の横顔が、娘になんでお前が用があるんだ、と言つてるように思えた。

「しかし、娘さんに事訳を言つて何とか拝見させていただくか……いや、そこへお願いに上がって……」

私は夢中になつて言つた。

と、それが余ほど支離滅裂に思えたのだらうか、老人は、

「アレ、また儂は、どうやら喋り過ぎたようじゃ。こりゃいけない事をしたワイ」

大きなひとり言を呟き、身体ごと横を向いてしまったのである。私は慌てた——

「あ、お願いです、教えてください。いまから、その奥谷の村とかいう処へ行けば、その娘さんに会えますね」

「さア、それはどうだか」

「でも、そこへいらつしゃつたのは確かなんでしょ？」

「ああ本^た当だとも。今朝^た発つたからの……じゃがあんた、娘に会えても、本など見せねえに決まつとるぞ」

「私は頼んでみます」

「多分、駄目じゃな」

「しかし私は……」

折角ここまで来た以上は、と言おうとして止めた。そのかわり、急いで頭を下げた。

「お願いします。そこへ行けるように道を教えてください！」

「アレ、あんた、本気で行くつもりかい」

老人は私を見て、呆れたような顔をした。まさか、とでも思っていたのらしい。

「おねがいします」

「行くと言つても、その奥谷の部落までは二里近くもあるんじゃぞ。今からでは、あんたの足では行けんぞな！」

「どうしてですか。まだ陽は高いし、それに彼処に着いてしまえばもう……」

「いやお前さんは、ここへ着くまでも相当へばつていなさる風じゃ。この辺りの山道をそんなに甘く見ちゃいけねえ。——それにの

う、なんと言ってもお前さんは他国者。たとえ辿り着けてもあの村の衆が、快く入れてくれる筈がねえ。あきらめろや」

私はびっくりした。こんなところで「他国者」なんて言葉を聞こうとは思っていなかったからだ。

「言っておくが、あの村の祭り事というのは、昔からの古いしきたりがあって、お前さんのような他国者はおろか、麓の儂らでさえ一度も招かれたことア無いという……」

「しかし」

「いや、それでも出掛けるなら、神様のお怒りとか言うてどんな目にあわされるか、それは儂らの知った事じゃねえぞ」

「はい。決して御迷惑は掛けません！」

「じゃ、どうしても行くのか？」

「はい」

「——あきれたな、あんたは強情じゃ」

「すみません。……そこまでの地図を書いてくれますか」

私は胸ポケットから手帖をだしながら言った。老人は張っていた肩肘を大げさに落としてみせた。

「仕方のない人じゃなお前さんは。じゃアそんなに言うなら……せめて今夜はこの家に泊

って、明日にでも行ってみなされ。祭りは三日間もあるからう」

「いえ大丈夫です。いまから、行かせてもらいます」

「あきれたの、いやはや」

——数分後。私は老人に礼を述べ述べ、奥谷の部落にむかって発とうとしていた。

そのときは、誰れも招かれた事もないというその祭りにこの老人の娘が何故「責草案」持参で招かれていったのか？ というような当然の疑点にさえ気づいていない。ただ、娘が「責草案」を持って行った。だから私は追いかける——それだけの衝動に駆られていたのだ。すでに冷静さを欠いていたものか。

二、三歩行き掛けたとき、家の内より先刻の老婆が出て来て、私へだまって一足の草鞋を差しのべてくれた。私は礼を言い、穿き方を教わりながらそれを足につけた。

この時ふと、その老婆が妙な笑みを浮かべているのに気がついた。

子供がいたずらをした時のような、あんな眼をしていた。

私は何となく微笑み返しておいたが——。

やがて歩き始めたころになって、この老婆の笑みが気になった。が、しかし、それも私

の錯覚で、別に意味とてないことだろうと、すぐに忘れた。

転 之 章

道程は長かった。

私は背広の上衣もワイシャツも脱ぎ、靴の結び合わせたのも一緒に肩へ掛け、上半身は肌着一枚だけという勇ましい？ 恰好で歩きつづけた。

——田舎駅に降り立った昼過ぎ、その駅前の農家の副業らしい「めし屋」で腹枵えはしていた。が、それから三時間と経ってはいなのにもう空腹を感じている。こんなことなら大きなおムスビの二つも作って貰って、腰に下げて来るんだったな、と思った。

当然、たかが古本のために、どうしてもこんな苦勞をしなければならぬのか——といった考えはこの時もなかった。

それどころか、一度は驚かされた本の行方が、いま歩いているこの道の先にあるのだと思えば、重たい足に拘らず胸が躍るのであった。それに、ひとりになった時から頭を上げはじめた「シラウチシキ」の祭りとかいうものへの興味もあった。いずれにせよ、未知のものが私を魅き寄せているのに違いない。

——やがて、私は今日二度目の汗まみれになり始めた。

時折り私は、即席にひろった枯枝の杖で、密生して道の上にまで被ぶさっている木の枝をやケのようにぶっ叩いた。

「こん畜生！ 遠すぎるじゃないかッ」

誰にも見られていないという、そんな自由さからくる悪態でもあったが、事実ヤケクソの気分も混ってやっていたのかも知れない。

しかしそんな時でも、あの『責草案』に描かれていたという女の奇態な責め絵、凄まじい拷問の絵を自分流に勝手に想いながら脳裡に描いていたというんだから、大したものである。

そしてフト耳を澄ますと、四囲は、私のいる都会の生活からはとても想像できないような静謐の満ちた世界だ。私は足を停めていることのほうが何故か苦しくなり、また尻を振り振り山道を急ぐ……。

こうした遠い道と私の体力との根比べが、どれくらいつづいたのだろうか。

両側の山々が次第にせばまり、すでに地の絶界に辿り着いたような気持にさせられ、そして締まりのない話だが水気のなくなった舌がだらしなく伸び出てくるくらい参ってしまったところ——。

前方の山腹に、ふとたちのぼる煙を発見して、私は思わず歓声をあげた。

「——着いたッ」

我れながらどこにそんな余力があったのかと凝いたくなるような勢いで、足を早めていた。がすぐに、私は自分の装りに気づいて立ち止まった。

「初めての村を訪れるのに、これではあんまり無礼だよな」

下を見ると、二十メートルも傾斜を行ったところに幅狭い谷川がながれていた。私はせめて顔ぐらいいは洗って行こうと思い、足許の叢の上へ肩の「荷物」を置くと、立ち木を利用しながらソツと降りて行った。

太陽はすでに山の彼方にあり、山気は徐々に冷えている。今日のところは何とか村の何処かへお願いして一泊を請うより外ない。

老人は他国者はどうか言っていたが、いくらなんでも現代に他国者もへったくれもあるものか。旅人を夜の密林におっぴり出しておいて平気だなんて、人情のない奴がいるわけがなからう——。

傾斜の地肌は、まさか谷川が近くにあるからでもあるまいが、湿気があり、強く踏み出

すと今にも迂りそうだった。

「あ、きれいな水だなア……」

谷川が近くなつて、私は眼を細めた。

快いせせらぎが、すぐにでも疲れを洗い流してくれそうであった。

——その時である。

「なんじゃ、お前は！」

突然、後から声を掛けられ、思わずギクッとし振りかえろうとした……瞬間。

踏みだした足に何かが絡んで、前傾の姿勢になっていた私はなんでたまるう筈はなく、空間に一転するや谷川に頭から落ちていた。

周囲の樹立ちがぐるりと反転し、眼が眩んだとたん——頭に衝撃を受け、そのまま意識が遠のいていった。アッ、との声を上げる間もない出来事であった。

白 之 章

遠いところで太鼓が鳴っていた。

その太鼓の音は、悠長なひびきで次第に私のほうへ近づいてくるようであった。

私はそちらを見ようとするのだが、無雑作に地上に投げ出されて仰臥した身体は微塵も自由にはならなかった。

ふと気づくと、太鼓の音はただ近づいてく

るだけではないようだ。遠く、私を中心に円をつくりながら近づいてくるようだ。

やがて、それは見えはじめた。

そこだけが、何か照明を当てられたかのよう、闇の中に浮いて見えた。

輝ひとつの裸になった荒くれ男たちが、白っぽい着物の女たちの背中に張りずつ、大きな太鼓をくりつけて、それをゆるやかな踊りと共に打ち叩いているのだった。

女たちは一様にうなだれ、腰をかがめ、よろめきながら歩いていた。その牛歩の動きに女と女の間に踊っている男の大きな動きは際立ち、それはまるで狂ったかのである。

そのうちに、この太鼓の輪は間近くせままってきた――。

私は突然、恐怖を覚えた。

彼らは、輪をちぢめ、その中心で身動きもできないでいる私を、みんなして踏みつぶしてしまおうとしているのだ。その証拠には、彼らは誰ひとりとして私を見ていない。私なんか虫けらのように知らん顔して、ただ輪をせめてくるだけではないか。

助けてくれッ。踏みつぶさないでくれ！

私は絶叫した。いや、したつもりなのに、声が出なかった……

「――今度こそ、気がついたようね」

私の耳許で柔い女の声が出た。

ねばりつくような、重い瞼を開けてみるとびっくりするくらい大きな女の顔が、ぼやけて揺らいでいた。

「あ……」

私が唇を痙攣させたとき、その女の顔がすっと離れてわずかながらも焦点が定まった。

「心配しましたわよ。だって一度気がつき、またすぐに気を失ってしまうんだもの」

女の声が、まるで唄っているように聞こえる。私はボンヤリと周囲を見廻していたが、それは山家の納屋の中ぐらいにしか映らなかった。しかし女の声は、こんな処には意外と思われる洗練された都会のそれのように美しくひびいてくる……

「ここは、何処ですか？……」

しばらくして私は、失心者が気づいた時、大抵口にするようなことを呟いていた。

「――奥谷の村よ」

「えッ、奥谷？」

今度こそ私は、はっきりとして枕元の女の顔を見つめた。

「あら、そんなにびっくりしたような顔をし

て……貴方は、この村を訪ねて来られたのでしょう？」

「そ、そうですが、それをどうして」

「知っているのかとおっしゃるの？――だって、この村で谷は行き詰りよ。この村の下まで来た貴方なら、当然そう思うわよ」

女は、おかしそうに口に掌をあて笑いはじめた。私は何となく瞬きながら、それを見つめてしまった。

美しい女――いや娘だった。天井からの薄暗い灯りに、やや丸顔のそれは弾けるような赤味を帯びていた。が、それはきつと、太陽のもとで見たなら抜けるような白さに変化するかも知れなかった。

不思議なことには、私が映画などでしか見たことがないような白装束を着て髪もながく肩先のほうへ梳きながしている。しかし今コロコロと笑う彼女は、明かるくて、清純な風情の娘そのものであった。

私はそれに思わずつりこまれ、微笑^{わら}いながら言った。

「――すると、あのとき私は、谷川に落ちて気を失ってしまったものだから、それを貴女が助けて、ここまで運んでくれたというわけですね」

「いいえ、あたしは助けられないわ。昨夜からずっとこの小屋にいて、ただ貴方が担ぎこまれたから介抱しただけのことよ」

「……ありがとう」

私が目礼した——その時だった。

不意に太鼓の音がひびき始めた。寝たまま聞いた故か、それは遠くでもあり近くでもあり、判断がつかなかった。

「あ、あれは？」

いま何かを言おうとしていたのだが、この太鼓の音のために急遽きり替えて、娘に訊ねていた。

「シラウチシキが間もなく始まるのよ」

「え、なんだったって！」

私は薄っぺらな汚れた夜具をはねのけて上体を起こしていた。一瞬、頭がグラリとしたがそれどころではない。

「シラウチシキってなんですか？ どんな祭ですか？」

すると娘は、私の鼻先へ、そのしなやかそうな指先を伸ばしてきて、ゆっくり、白打式という字を描いてみせた。

「ともかく……貴方だってそのつもりなんでしょうから、式が始まったら陰からなりと御覧になればいいわ。もちろんそんなところを

村の人たちに見つかったら、飛んでもないことになるだろうけど」

娘は立ちあがろうとし、その白く映えた姿をゆらりとさせた。

「ま、待ってください。あなたは、この村の人ではないでしょう！」

「あら、どうして？」

「あの、麓だとか言ってる村から来られた娘さんですね」

「あら、よくお見透しだわ……美音です。よろしくね」

「あッ、待ってくださいよ。まだ訊きたいことが——」

娘が立ちあがってしまったので、私は四つん這いになってその裾を掴もうとさえした。

「まだ行かないわ。でも、すぐに此処へ人がやって来るの……フフ、あたしは、あの土間で、それを坐って待っていなければならぬことになっているのよ。ね、だから……」

娘——美音は囁くようにいって、チラリと視線をながした。あわててそのほうを見ると今まで気がつかなかったが、畳なら六帖ほどの狭い土間に、真新しそうな筵が一枚敷かれて、その四隅に塩らしいものを盛った竹脚の台が置かれていた。

「ど、どうしてあんな処に坐るのです」

「ホホ、どうしてだか間もなく人が来るからご覧になっていれば判るわ。これがこのお祭りにやって来た女の儀式なのよ」

美音はもう土間のほうを向き、あの唄うような、口調になっていたのだった。

「じゃ、もう一つだけ訊きます。あの本はどうしました？」

「——ほん？」

「そうです。納めに持って来られたというあの本です」

美音はこちらをふりむいた。つぶらな、綺麗な瞳がキラリと光った。

「ああ、あれの事ね……そう言えば、貴方の目的はあの本だったのね……」

「えッ、どうしてそれを」

「だって貴方は、あたしの事などを麓の村で聞いたでしょ、そしてこんな処までやって来ると言ったら、もうあの本のためにかと思えないじゃないの」

「——」

「あの本はね、きっと今ごろは、この村の男たちが首っ引きで見ていることでしょう」

「村の男が」

「そうよ。これから始まる、白打ち式のため

にね……ホホ、でもおかしいわね。それじゃアまるで泥縄的でもん」

私には彼女の言ってる事は一切わからなかった。蒲団の上で、ただ首をひねるだけであつた。(一体——これから何が始まるとしているんだ?) 自分がどのように行動すればいいのか判らないほど、腹立たしいことはない。その時の私は多分に噛みつきそうな顔になつていたことだろう。

「あら貴方、寝ているほうがいいわよ。人が……いえあの男が入って来たら、そんな貴方をみて、それこそ山の中にでも放り出してしまふかも知れなくてよ」

美音は土間に降りながら、ひやかすように微笑つて言った。

「なんだって? 男が?……フン、そんな事したら、こっちのほうが叩き出してやる」

彼女に逆らうのは何とも気がひけたが仕方ない。私は肩をそびやかして言っていた。

「でも、お芝居でもいいから、まだ睡っている風にしていれば、やがて貴方の知りたい事も判ってくると思うわ」

長い、純白の裾を曳きながら、彼女は筵の真ん中に坐りつつあつた。

「しかし、私は……」

思わず私が立ちあがろうとしたとき、戸口らしいあたりに人の足音がした。

気がつくと、太鼓の音は止んでいる。

(夢うつつに聞いた太鼓、そして今の先刻の太鼓——どうしてこう、いたずら叩きのよう中断させるのだろうか……)

その時、振りむいて凝つとにらみつけていた戸がガタン! と動いた。やはり心の何処かに得体の知れぬ怖れがあったのだろうか。同時に私は、素早く蒲団のなかにもぐりこんでいたのだった。

始之章

うつむき加減に、ひっそりと筵の上に正座している美音を中心に、男は片足で跳ねるような、こまかな動きで三度ばかり廻った。

それが終ると、彼女の背後に立ち、手にしていた白い房の付いたメートルばかりの細身の竹を振りかざし、やはり片足で一定のリズムをとりはじめた。

異様な扮装である。

顔は光沢のある黒布で包み、頭にはゆらゆらと伸縮する烏帽子のたたきつけたようなのを被ぶり、白い陣羽織の背に朱で『威』と大書したのを着て、金糸銀糸の、しかし古びて

みすばらしい袴を穿いている。腰には紅と白のまだらなロープを輪にしてぶら下げ、足もとをみると白足袋だけだ。

その時またも太鼓が、今までとは違った乱れ打ちの音をひびかせ始めた。

すると男は、これを待ってでもいたかのようにはじめた。そして、くねらしながら身体を小さくしたかと思うと、女の……それまで動きもせず坐りつづけていた美音の片手を背中へ捻り、いつのまに解きさばいていたのやら紅白撚りの縄を躍らせてその手首に巻きつけた。つづいて、のこる片手も捻り——。

これが乱れ打つ太鼓の音に合わせた動きのうちにである。

やがて手首が完全にくくり合わされ、縄が両肩越しに前に廻って、子供を背負うときの帯のような形をつくり、胸部を締めつけながら上膊部に戻ったとき、美音は、その横顔をのけぞらせて「あアッ——」と、声をはしらせた。

「——な、何をする!」

それまで烈しい心の動揺を抑えに抑えて、蒲団のなかから凝々と隠れ見していた私は、もうそのとき我慢しきれず、呻きのような声

をあげて起き上がっていた。びっくりしたのは男である。表情こそわからなかったが、いかにもキョトンとしたように動きを止めてこちらを見た。

が、次にびっくりしたのは私のほうだ。

男が突然、何やら大声をあげたかと思うと私めがけて飛びかかって来たからだ。

その怪体な姿に、私は今の威勢もどこへやら、思わずヒエッ！ といって、それでも横っ跳びに土間へと逃げていた。が男もさるもの急に私がいなくなったのでタタラを踏んでいたが、すぐに態勢をもち直すとクルリと向き返って、またも大手をひろげ迫ってきた。

だらしなくも私は恐怖に眼をむき、戸口にしがみついた。そのとき戸口の脇に、立てかけてあった瘤のある杖が手に触れた。人間急場に立つと、案外と身のこなしが敏捷になるものだ。同時に私は物も言わずにその杖を突き出していた。

二秒ほどして、ひっくり返ったのは男だ。

これまたびっくりするくらい派手にひっくり返った。——瞬時の出来事なのに、もう私は火のような息を吐き、やっと気づくと、金縛りにあったような身体をひきずり、縛りあげられている美音に近寄った。そしてその縄

を解こうとした。——すると、

「駄目、ほどこないで！」

彼女は私の手から逃れるように、後手の身体を烈しく揺すったのだった。

「どうしてッ！」

ムカツとした私は噛みつくように言った。

「……あたしはこうしてはなくてはならないのよ。それより、どうして貴方ったらあんなひどい事をするのよ」

私をふり仰いた美音の瞳は、意外にも非難の色をみなぎらせているではないか。

「ひどい事だって？ なに言ってるんだ。あいつは——」

「貴方は何も知らないのよ。知らないからそんな事が出来るのよ。あたしは寝ていてと言ったのに貴方ったら、それも聞かずに飛び出してきたりして——」

眼のいろだけではあきたりないのか、次は唇まで噛みしめるのだった。

（なんだ、こんな筈ではないのに！）

私は、呆然としてしまった。

「でもこうなったら、もう仕方ないわ。ちょっとこちらへいらっしやい……」

彼女は、不自由な身でよろよろと立ちあがると、戸口のところまで行き、膝をつく

そつと外の様子を窺うふりをした。

「さ、早く！」

私はふらふらと近づいていった。完全な縄止めこそしていなかったが、手首を背中たかく縛られている娘に、命令されて動いているのだから変な図であった。

「あまり時間がないようだけど……みんな貴方に話してあげるわ」

真似をして膝をついた私に、彼女は間近く顔を寄せてきて、話しはじめた。

「——そこに倒れている男のひとも含めて、この村の男はね、本当は、いたって気の弱い優し過ぎる人たちばかりなのよ。……いえ、だまって聞いて。そしてね、その男たちとは打って交ってこの村の女のひとは、ずいぶん気丈なことと知られているのよ。つまり、カア天下の村なのね。ところが、年に一度、その女房のお尻に敷かれて青息吐息の男たちが威厳を取り戻せるという日が、このお祭りのときだけなの」

……私の頭は、またぞろ混乱をはじめた。

「ここのお祭りは、一年中ご亭主を怒鳴りつけ、また腕力にしても勝ち誇ってきた女房たちが、この夜、男性としての威力を回復させた男たちによって、その権力の座からひきず

り降ろされ、散々に痛めつけられ、報復されて、この一年間にしてきた横暴の許しを乞うというお祭りなのよ」

「男が、その女房を痛めつけるのか？」

「いえ、昔はそうだったらしいけど現在では少し違うのよ。男同志と女同志の籤合わせにしてこの夜のカップルを決めるの」

——私の頭は、いよいよ乱れてきた。

「そしてね、これが決まったら、お祭りの夜三日間はこの行事に熱中するの。もちろんこの村にだって子供たちや足腰の立たない老人だっているわ。でもその人たちには、この夜は『悪魔の日』ということになっているの。息をこらして家で寝ているわけね」

「じゃ、貴女までもが、何故——」

「大したことじゃないけど、やはりこれにも理由はあるわ。でも原因として言えることは……あたしが……この祭りが、好き、だったということね——」

彼女の眼の廻りがポウツと赤くなるのがわかった。私は何となく瞬きをくりかえした。

「じゃア仕方がない、話すわ。あたしの家族のことからね……」

彼女はフト外の気配を窺ったのち、話しはじめた。

美音が生れ、育ったのは他ならぬこの村であつた。つまり彼女の家族はこの村の『出』であつたのだ。

彼女が十二のところに、父母はこの村を嫌って飛び出してしまった。彼女は成長するにつれ、なぜ父母が村を捨てたのかを知っていた。が理由は単純だった。父が、この村の男に以合わず余りに『強かった』男であり、母が、この女にしては余りにも『温和しい』女であつたからだ。

しかし夜逃げ同然な出奔者を出したというのは、この村にとっては実に不詳事なものであつた。あとに残された美音とその祖父母は間もなく村人の白眼視に堪えられず、村を去ることになる。といつても美音たちには他国の風は怖しく思え、遠くへ去る気にはなれずこの村の者が『麓』と称ぶ土地の片隅に移り住んだ。

美音が十六才のとき、その時には都会に安住していたという父母から「こちらへ来い」との誘いがあつた。彼女は、なんで今更と絶対に首を縦にふらない祖父母をのこして父母の許に走った。

親娘三人の都会生活はほぼ四年は続いた。

が——ようやく都会に馴染んだと思われた美音が、突然祖父母の許へ帰ってしまったのは今から丁度、一年前の事である。この無断の『家出』に驚いた父母は、それから幾度となく美音に戻って来てくれと頼んだが、彼女は何故か頑としてきかなかった。やがて父は、自分が秘蔵していた『責草案』という、責め絵の古書が失くなっているのに気づく。

——また元の村へ帰って来た美音のほうは、やがて奥谷の部落の一青年と親しくなった。一時はひどく白眼視されたが、これは別に彼女の罪ではない。時の流れもあって、その青年との結婚承認を前提に青年の親、つまりこの奥谷の部落長に招かれて出掛ける事になった。——それが今日の事であつた。

「あたしは、子供のころから、このお祭りの行事とはどのようなものか、秘かに見て知っていたのよ。大きくなつても、この事が忘れられずに、いえ、その度に何故か凝としていられないような気持になつて、ずいぶんと苦しんだものだわ。父と一緒に暮らすようになったとき、ふとあの本を見つけて……そうしたらもう、あたしには何故だか判らない、ただ見えない糸にたぐられるようにして村へ帰

ってしまったの。そして、自分からすすんで奥谷の……そこに倒れている人と親しくしたわ。今夜あたしがこうなったのも別に深いわけがあったからじゃなく、ただその人の嫁になるかも知れないという、それだけのことで……」

彼女の顔には、消え入りそうな羞恥のいろが妖しく交錯していた。

「そしてね、あの『責草案』というのは、昔この谷を通り掛かった神仕えのお婆さんがその時の一夜の宿の礼にと言って、置いて行った本だというの。もともとこの村が持ち主なんです。こんな行事もお婆さんが教えて行ったというのだけだね。——父は、この本を無断で持ち出したというわけ」

「そうか……では、先刻の話だけど、あの麓のお年寄り、貴女のお父さんじゃなかったのですね」

「祖父です。——それにもうひとつ。あたしは、貴方がここへいらっしゃることを知っていたのです」

「えッ」

「——父が、知らしてくれたのです」

その時、言ってから彼女は不意にキッとした表情になった。鳴りひびいていた太鼓の音

が一段と烈しくなったのだ。

「あ、いけない、人が来るわ、すぐに。——貴方ッ、早くその人の衣裳を着て！」

「な、なんでそんなことを……」

「化けるのよ、早くッ」

彼女の眼には、つきつめたものがあつた。

私はその様子を見て、逆らうことが出来なかった。もう彼女の意志に従って動くより他なかった。倒れている男の傍へかけ寄ると、その着ているものを剥がしはじめた。

炎 之 章

十二神が祭られてあるのか、朽ちたような神殿である。

拜殿の中央に著しく盛り高に饌^{けんせん}献された祭壇が設けられてあつて、いまや白の袍を着た宮司？ が修祓の最中であつた。

その神殿の前の広場に、巨大な火柱となつて燃えさかる薪の山があつた。その火が、広場の中央に仕組まれた白木の、まるで絞首台のようなものを、ゆらゆらと浮きあがらせていた。

社務所らしい古小屋の前では、ドッカーリ据えた太鼓を、上半身裸となった二人の男が狂ったような身振りで打ち叩いている。

そして、大きく輪となつてこの太鼓のリズムに合わせて踊っているのは、いま私が着ている身装りと同じ姿をした男たちであつた。

(もし、私の正体がばれたら……)

と、足がすくむ思いで、美音の後手縛りの縄尻を取る手も固くなって、私はそろそろとこの人の輪のなかに入つて行つた。

すると、私たちを迎えに来、ここまで案内役をつとめた二人の男が両手を上げたとき、太鼓が止み、みんなの視線がいつせいに私たちのほうへ注がれたのを知つた。

それが予期しないほどの静寂となつたので私は思わず棒立ちとなつてしまった。

「……！」

その時、美音が自分から縄を引っ張るようにして歩きはじめた。そして、短時間のうちに私と打ち合わせた通り、彼女は白木の、あの台に近づくと、立て掛けられてあつた生木^{なまき}拵の粗末な梯子を、いかにも危なげな様子で登っていくのだった。私は何度となく手を差しのべようとしたが、絶対にそんな事はしてはいけないと言われていたので、無理して放っておくより仕方なかった。

やがて二人が段上に立ったとき、周囲からわアッというような歓声があつた。

「さ、早く……」

美音の低声が、私を我れに返らせた。

私は縄尻を捌くと、打ち合わせ通りに、頭上を横に架けられた丸木にそれを掛けて縄止めた。

美音はのけぞるようにやや顔を傾け、私にらみつけている前でゆっくりと眼を閉じていった。

段上の台は可成りひろかった。美音が真空中に立ち、その廻りを私が駆けめぐるのが自分の広さがあった。

この時、太鼓が三拍子を高らかに打ち始めた。同時に人の輪が拍手してそれに合わせ、只ならぬ動きを示しだした。

(これが行事開始の合図だ！)

私は、すぐに判った。が、そんなにうまく行動に移れるものじゃない。上気したまま何となく周りの動きを見つめてしまった……

ふと気づくと、拍手しながら踊る男たちの後に、美音と同じような姿をした女たちが、これまた男たちと同じ輪をつくって——しかしこれは凝っとして、突っ立っているのに気がついた。よく見ると、やはり美音同様、その両腕は後手に、紅白まだらの縄で、縛られているようだった。ただ美音と違うのは、そ

の縄尻を、地に打ちこまれた柱にくくりつけられている風なのがそれであろう。

「……踊るのよッ」

ボンヤリしていると、美音の聲が私の耳をついた。私は、私の意志とは関係なく、反射的に手拍子を打っていた。

先刻まで拝殿にいた白袍の男が、尊大な歩き方で私たちの眼の下にやって来て、右腕だけでお枝いを始めた。が、それは随分と乱暴なお枝いであった。彼もまた。この熱し始めている人たちの煽りで高ぶっていたのかも知れない……

いつしか、リズムは私に乗り移ってきた。手を打ち、足を踏み鳴らして私は踊った。

にじみ出る汗が、呼吸の乱れが、次第に心を酔わせていくようであった。

「さ、いいわよ……!」

また美音の聲が聞こえた。

私は踊りながら、やにわに彼女の隆起する胸もとへ手を伸ばし、ここぞと思うところを力まかせにつかんだ。周囲の男たちは既に始めている。私のは単なる見様見真似ではあったが、なぜか加減する事が出来なかった。「ウッ!——」 喧噪の渦のなかに、彼女の呻き声は異様にするどく私をとらえた。

が、思わず手をゆるめると、

「……駄目、離さないで……続けて」

断続的な叱咤? の声だ。

この言葉で私の僅かにのこっていた平常心は完全に麻痺したのである。

荒々しく彼女の胸もとをひろげると、素晴らしい円味を帯びて飛びだしてきたその半球をわし掴みにし、五本の指に力をこめた。

そして、その痛みのためか、するどいさけびを上げながら錐揉み状に廻るのも構わず、おなじように廻りながら今度は顔を寄せ、その白肌に歯を当てた。すべて教えられた通りのことだ。

「ひい!……」

彼女は、私の唾液に濡れながら地団駄さえ踏んだ。上眼使いに見ると、その眼尻に薄っすらと涙さえ浮かべている。

私は歯を放すと眼を光らせた。いまさっき気がついたのだが、台上の隅の部分的な手すりに何やら小道具らしいのが掛かっている。私はそこへ駆け寄り、その中のひとつ、ゴム製のギザギザの付いた球型でしなやかな柄のあるのを取った。

——私はいつしか狂っていたのだ。この異常を極める『白打ち式』の、悪夢のような熱気を

に既に侵されてしまっていたのだ……

瞬きもない眼の焦点に、悲惨な白装束の緊縛姿で立つ美音をしっかりと捕えたとき、私は唸りをあげて駆けより、その球型を肩先めがけて振りおろしていた。

ゴムといっても固形だ。横にみた美音の顔はいびつに歪んだ。本能的に一步でも逃れようとするから、身体を吊った縄に曳かれて止どまりもなくよろける。手首もますます背中高くあがっていく――

私は手の球型を肩と言わず、腹と言わず、身体のいたるところへ打ち込んでいった。

「……あ、貴方アッ!」

美音が瞳をいっばいに見ひらき、私をとらえて絶叫したのは、手がしびれて道具を持ち直そうとした時であった。

その瞳は、絶望と恐怖のなかにも、明らかに燃え立った「欲び」の、妖しいいろがあった。瞬間、私の心に自制力がよみがえった。私はそこに、この美音という娘の本質を見極めたように思った。――が、これも束の間のことだ。

太鼓の音が、周囲に展開される思い思いの女責めに狂うその怒声や悲鳴が、私をそれ以上クギ付けにはしておかなかったのである。

「……せ、責めてやる。責めてやるぞ。心ゆくまで、責め抜いてやるぞ……」

私は彼女の頤をわし掴むと、毒々しく言い放って顔の黒布をずらせると、その紅唇にかぶりついた。

彼女は、私の唾液を飲みこみながら陶醉した表情で言った。

「……い、いじめて! ど、どんなことをしたっていいから、あたしを苛め抜いて」

私は球型の責め棒を捨て、また台上の隅へ走った。鞭、搔き棒、擦り板、指爪挟み……いろいろなものがある。私はキバをむいて、さでどれにしてやろうかと、にらみつけたことであった。

駆之章

――異変が起きたのは、私が美音をもう台上では飽き足らず、地にひきずりおろして輪をめぐりながら、男たちのような責め具を使ってやろうとしていた時だった。

薄汚れた褌ひとつの男が、狂乱する、この祭行事の真ん中へ飛び出して来て、なにやら絶叫しはじめたのである。

だが、最初はしばらく、誰もこれに気づかなかった。各個の責めに、余りにも熱中し過ぎていたからである。が、まず一段落ついていた、美音と私のカップルが気づいた。

つづいて、それまで拝殿を登ったところで仁王立ちとなっていたあの白袍の男が、これに気がついた。彼は顔の黒布をずりあげると

大手をひろげ、周囲に向ってなにやら喚きだした。

「――美音さんッ」

私は名を呼び、彼女の肩に手を掛けた。

男が、あの「気絶した男」であると判った時は、もう私の燃えさかっていた炎は半減していた。

「あの男だ!」

「……逃げてッ。あたしを連れてここから逃げて!」

「よし、まだ誰も気づいていない。逃げるとしよう。……しかし、貴女は」

「いやッ、あたしも連れて行って! この事はあたしが企んだことよ。もしそれが村の人たちにわかったら……」

「――わかった! 一緒に行こう」

「う、うれしい……」

私は彼女の縄を解こうとした。

「あ、駄目よ。いまここでそんなことをしたら、すぐに私たちだという事がわかってしま

うわ」

「でも、大丈夫かな？」

「貴方さえしっかり擱えていてくださったら

——アッ、あの男が話しはじめたわ！」

見ると、白袍の男と禪の男は、顔を突き合
わすようにして何やら言っている。

「……あの輪の切れ目から、何気ない振りを
しながら行こう」

私は彼女をのぞきこみ、眼で示した。

「いいわ……あ、でも貴方」

「なんです」

「あの本のことはどうするの！」

「……うむ、本か。……いや、もういい。あ
きらめるさ」

「あの祭壇にある筈だわ、きっと」

「いや、もういいったら！」

「本気なの？」

「本気だとも。だって……あんな本なんかよ
り、もっといい……美音さんがいる！」

そのとき彼女の顔にパッと歓びの色がひら
いたように見えたのは——私の勝手な観かた
の故であろうか……

「やい！ 行きやがれッ」

浮き上がってしまうような気持をグッと抑
えて、私は荒々しく、見た眼にはいかにも粗

暴に、彼女の背を突きながら歩きはじめた。

そしてこのまま静かに出て行くのも芸が足
らないと考え、縄尻を振ると前で揺らぐ彼女
の臀部をピシ！ ピシ！ 叩いた。

輪をつくっている「責め場」の、わずかな
隙間を通り抜けるとき、折しも——柱に縛り
つけられ、肌も露わにみだした体格のよい女
に向って、大の字に突ったち放尿していた男
が、フト私のほうを見て会釈した。私はドキ
リとし、思わずこちらもペコリと返すと、

「——歩けッ。さア歩け！」

と、あわてて美音を小突いていた。

脱出がうまくいって、広場から少し離れた
闇のなかで立ち止まったとき、

「さあ、どちらへ逃げる？」

と私は彼女に相談を持ち掛けた。

「奥山を越しませう！」

「え、奥山を？」

「そうよ、あの山を越すより他ないわ」

「だって、あんな山を越したところで」

「いえ、あの向う側は、すぐに駅の裏側にな
るのよ」

「駅？」

「そうよ、貴方が降りた駅」

「なんだって！」

私は大声をあげてしまった。別にだまされ
たということでもないのに、変な心境だ。

「叱ッ。そんな声を出したりして」

「……よし、それでは越そう！」

「ええ、でも急がなくては——向うの様子も
どうやら変ったようよ」

暗がりですり抜けなかったが、彼女は聞き耳を
立てていた風だ。

「この縄を、解いて貰おうと思ったけど、そ
の時間もなさそうね。苦しいけど仕方がない
わ、行きましよう！……貴方、しっかりあた
しをつかまえていてねッ」

「ああ、いいとも！」

「道にさえ降りてしまえば、急坂だけど後は
一本道だわ」

眼が馴れてきた。二人は、ボンヤリ浮きは
じめた村道を小走りに駆け降り出した。

「貴方、もっとつよく、擱まえていて……」

あ、それから先刻の小屋の前を通るから、あ
の中にあたしの服があるのよ、貴方の一緒
に取って来て！」

「よしッ」

二人は駆けながら、いそがしく話した。

小屋の前まで来ると、私はとびこんだ。

二人の衣類をひと抱えにすると表へ飛び出

し、また駆けながら――

「駅に着いても……ぼくは、従いて来るかい！」

「ええ、貴方さえよかったです……」

「も、もちろん、ぼくはもう！」

「あたしは貴方さえ、ウンと言ってくれたらもう何処へだって従いて行くわ」

「あ、ありがとう……」

「お父さんだって、きっと喜んで……」

「なんだって？――あっそうか。さっきも

そう言えばそんな事を言ってたね……ちょ、

ちょっと、待ってくれ」

「駄目、走らなくちゃ駄目よ！」

「よし走ってやる。そのかわりに正直に言わ

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞 金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要 項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の

別は問いません。奮て御応募下さい。

一、写真選考にパスした応募者の方全員に、対して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に発表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。

一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。

一、写真並に書類にて選考にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに発表の写真を撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに対する読者の投票については、いずれ誌上に発表します。

一、締切は昭和四十三年五月末。

一、本誌八月号誌上より漸次発表の予定。

ないと……」

「あら、言わないと、なァに？」

「その縄を絶対に解いてやらないぞ」

「いやんッ」

「じゃ、言ってくれ。そのお父さんというのは、あの金閣……」

「あッ、人が追って来るわよ！」

その真に迫ったいい方に、私は振り向くゆとりもなく走った。

抱えている彼女の重量は、その切迫した緊張感がなければ、とても私のヒ弱な力で支えられるものではなかっただろう。

――だがこの時、人の追いかけてくる気配なんか、全然なかった事に私は、気づかなかった。

彼女の言葉におどろき、ただこの「美しいイタズラ娘」の、厳しく縛められている身体を抱えて走る事だけに専念していた。

が、たとえ彼女の話に、まだ謎を感じても私はもうそれは訊かなかったかも知れない。

この妖しい魅力を持った美女と知り合えたという事実。

私がその時冷静であったなら、きっとあの「親爺」の、こんな奇妙な策略に、感謝さえしながら、夜の坂道を走りつづけていたことであろう――。



— 体験談 —

フンドシ愛好記

— (私の執着とヒロイズム) —

文 田 利 子

わたしは女ですが、フンドシを愛用しています。日本古来の由緒のある下着を使用するのに、何も遠慮をすることはないので、近頃は男性ですらフンドシをしめている人がほとんどいなくなったようですし、泳ぎに行ってもフンドシ姿で泳いでいる人はほとんど見かけなくなったのに、女性であるわたしがフンドシを愛用しているというのは貴重な存在ともいえるのではないのでしょうか。

何百年何千年前の昔、わが国で女性がフンドシをしめていた時代があったかどうか、調べたことはありませんのでよくは知りませんが、男性でも肉体労働をしない人は、女性のように腰巻をしめていたとかいうことを、物の本で読んだ記憶があります。もちろん肉体労働をする男性はみなフンドシをしめていたようです。女性でも海女の中には今日でもフンドシをしめている地方があるし、そんな地

方では、女性でも日常フンドシをしめている人達が少なくないようです。女相撲では男と同じ締込みをしめて行われて来ましたが、未開人の中には女性でもフンドシをしめている部族もいますから、おそらく女性でもフンドシをしめていた時代があったに違いないと思います。腰巻は、おしとやかかも知れませんが、およそ活動的ではありません。女性の人格が解放され、男女同権が叫ばれるようにな

って、服装にも変化が起ってきました。下着にしても、だぶだぶした空気袋のようなズロースから、ぴったり肌に密着した形のパンティになり、更に無駄をなくしたビキニパンティヘという風に、だんだんに機能的になると同時に、女性の肉体の美しさをも強調するようになつてきました。

わたしがフンドシをしめるようになったそもその動機は、兄がそのきっかけをつくつたのです。まだわたしがほんの子供の頃のあつた時、兄の部屋を何の気なしにのぞくと、兄が裸になつて細長い布——それは六尺フンドシでした——で何かしていました。まだ無邪気な年頃でしたから

『お兄ちゃん、何してんの?』

と遠慮もなく部屋の中へ入って行くと、兄はちょっと驚いて急いでフンドシを締め始めました。その時ちらっと見た兄のうろたえたが普通ではなかったのが、子供心にも不思議に思ったので、今でもはっきり覚えています。その時そのことについてはわたしも何か奇妙な気持ちで訊きませんでした、フンドシはそのとき始めて見ましたので、兄に尋ねました。

『それ、なあーに?』

『これか? これはフンドシさ』

『なにをするもの?』

『パンツと同じさ。よく大事なときにフンドシをしっかしめてかかれています。うしろ。そのフンドシさ』

『どうしてそんなことをいうの?』

『フンドシがゆるんでいたんでは、気持ちたるんでいふことさ』

『パンツならゆるんだらしないのに』

『昔はパンツなんかなかったもの』

『フンドシをしめると、気持ちしんとするの?』

『するさ』

『お相撲さんの同じ?』

『同じさ。お相撲さんのはマワシとかミツとか言つてね、あれを締めないと力が入らないんだよ』

『お相撲さんのはもっと太いわね』

『細いとかみにくいし、お相撲さんは力が強いから切れるかも知れないし、それにつかまると痛いから、あんな風に太くて巾が広くて丈夫にできているのさ』

『フンドシをしめるとどんな気持ち?』

『とてもいい気持ちだよ。下っ腹がしまつて気持ちひきしまるし、スカッとするよ』

それからそれへと、いろいろと根掘り葉掘りきくわたしの質問に、兄はやさしく答え、いろいろと教えてくれました。あまり熱心にわたしが聞くので兄は、

『お前もしめてみるよ。お前はお転婆だからきつとよく似合うよ』

『でも、しめ方を知らないわ』

『オレが教えてやるよ。さあ、裸になつてごらん』

兄が言う通り、その頃のわたしは本当に男の子みたいにあばれんぼうで、男の子のすることは何でもできました。中でも逆立ちが得意でした。言われるままに、兄の前ですっぽりとはだかになりました。始めてしめるフンドシってどんなものだろうと、なんだか胸がわくわくしていました。

『お前は女だから、赤いのがいいだろう』

と赤い巾の狭い布を出してきました。兄のフンドシはその時はたしか黒色だったと思います。

『どうやってしめるの?』

『いいからこっちへこい、しめてやるから』と兄はわたしを自分の前へひきよせると、『お前はまだ小さいからこれじゃ長すぎる』と布の長さを大体計って切りつめました。

そして、片方の端をわたしの肩にかけておいて、他の端を両足の間にくぐらせて後にまわし、細く丸めて、腰骨の上を横から前へまわし、お腹を横切って始めに肩へかけてある布を横に抑え、更に脇腹から後へまわし、ちょうどお腹のまわりを一周して、お尻の上のところで始めの部分に内側からひっかけて横に引き、後の形がT字型になるようにととのえてから、布の端を横ミツにはさみました。それから始めに肩にかけてあった一方の端を、一度上に引いて十分にひきしめてから前にたらし、お尻へとまわし、始めと同様に丸めて、横ミツにはさんでおいた一方の端を一度はずしてから、後へまわした端とからみ合せて左右にふりわけ、横ミツに何回かまきつけて固定しました。

『さあ、できたぞ。どうだい、感じは？』

『あまりきつくしめたから、すこし痛いわ』

『痛いくらいに、きつくしめるのがいいんだよ。オレのを見ろよ、こんなにきつくしめているんだよ』

見るとたしかにわたしよりずっと肌にくいこんでいました。それが何だかとても男らしく感じました。

『どうだ？ 痛いだけか？』

『ちょっとだけ痛いけど、いやな感じじゃないわ』

『とてもよく似合うよ、漁師かターザンの子供みたいだよ。どうだい、お前の得意の逆立ちをそこでやってみろよ』

『逆立ちをするの？ このかっこうで？』

『そうさ、とてもさっそうとして可愛いもの』

『はずかしいわ』

『はずかしいもんか。スカートやパンツならまくれたりずれたりするからはずかしいかも知れないけど、フンドシならどんなにあばれたって平気さ』

そう言われて見ると何だか思い切りあばれて見たい気持ちになってきました。そこで兄の前でフンドシ一本きりで、逆立ちやでんぐりかえしなど得意のアクロバット(?)をやって見せました。ひと息ついたとき兄は、

『ちょっと来てごらん』

と、わたしをひきよせると相撲の吊りの手で横ミツに手をかけると、わたしを高々と吊り上げました。細いフンドシが強く脇腹にくいこんで、裂けてしまいうでした。

『いたいッ！ やめて!!』

思わず大声をあげてしまいましたので、兄

はびっくりしてわたしをおろし、

『ばかだなあ、そんなに大声を出す奴があるか、大げさな』

と、わたしをにらみつけましたが、すぐ声をやわらげて

『どうだった？』

『乱暴ね。痛いわ、きつとどこか裂けちゃったのよ。フンドシをとって見てよ』

『どうもなりはしないよ』

『でも、とってよ』

『せっかくきっちりしめてやったのに、しょうがない奴だな』

と兄はぶつぶつ言いながらも、フンドシを解くと、わたしの肌に赤くフンドシをしめたあとがついていました。痛かったところをよく見ましたが別に何ともなっていないませんでしたので、安心しました。

『ほら、何ともなっていないじゃないか。ね。どうだった？ もういやか？』

『痛かった』

『痛いだけ？ ほかにどうだい。何も感じなかった？』

『うん』

でも本当はただ痛いだけではありませんでした。痛い中に何か不思議な感覚、言葉で言



い現わせないような気持ちがありました。
『これ、お前にやるから、自分でしめてごらん。いまにきつと好きになるよ』

と兄はその赤いフンドシをわたしにくれました。

その時の痛さの中にあつた神秘的な感じ、何とも言えない緊迫感が、いつのまにかわたしをとりこにできてしまったようでした。それからというものの、すっかりフンドシ・ファンになったのです。フンドシをしめて思い切りあばれて見たいという気持は、ただでさえお転婆なところへもってきて、益々お転婆になり、たちまち女のカキ大将になってしまいました。

負けず嫌いのわたしは他の人のできることは何でもできないと気がすみませんでした。

他人のできないことをやりたいのです。フンドシをしめるようになったのも、女性ではしめる人がほとんどいないからでもあります。水泳はわたしの得意の一つですが、水泳も夏だけ泳ぐのは誰でもやることなので、冬の寒い時に泳ぐのが好きです。フンドシをしめて泳ぎます。男

性でもこの頃はフンドシで泳ぐ人はごく少いので、人目があればその上にビキニ型の水着をつけます。でもフンドシをしめていることを、それとなく他の人に見てもらいたい気持ちもあるのです。そんなときは色のうすい、布地のうすい水着を着ます。一度水に濡れると、すけて見えるようになります。見えると言ってもほのかにうつる程度ですが、下に黒や赤などの色の濃いフンドシをしめていると、よく見るとそれがわかるという具合です。

人気のないときはもちろんフンドシだけの裸で泳ぎます。夜明け方とか、夜、特に月夜の海は素敵です。ボートで沖へ漕ぎ出し、誰もいない水のきれいな所で、思う存分泳ぎます。水中に潜ると無重力のような状態になりますから、どんな姿態でも自由自在にできま

す。人魚になったような気分です。潜水の練習のために、シンクロナイズド・スイミングのクラブに練習にも行きました。大抵の人は鼻から水が入ると痛いといって、ノーズクリップをはめたりしますが、あれをはめるとあまり恰好がよくないので、わたしは絶対に使いません。

これも例の負けず嫌いから、わざわざ鼻から水を吸って鍛練しました。始めは鼻の奥から頭まで、ズキンズキンと痛んでどうしようもありませんでしたが、しかし、毎日我慢して練習しているうちに、とうとう平気になってしまいました。水に慣れないうちは、顔に水がつくといちいち拭いたり、水の中で眼があけられなかったりしますが、慣れてしまふと何ともなくなるのと同じようなものです。

水着もこの頃はだんだんセパレート型やビキニ型を着る人が、特に若い人達に多くなってきましたが、胴が長くて脚が短い日本人にはワンピース型よりも、むしろビキニ型やセパレート型の方が似合うと思います。それも脚ができるだけ出るような、股ぐりの深い方が脚が長く見えるので、日本人向きだと思います。

それなのに、せっかくセパレート型やビキ

ニ型を着ていながら、裾を気にしてひっぱっている人がよくありますが、脚を短く見せようとするそんな人の気が知れません。ワンピース型でしたら、若くて体の線のきれいな年頃の人、股ぐりの深いシングルの着るべきです。スカートのついていないダブル型は、中年のゼイ肉が付いて、シングル型やビキニ型などが着れなくなったときのためにとっておきましょう。こうした素敵な型の水着は着たくても着れなくなる時代が、誰にでもやってくるのですから。

外国では若くて肉体の線がきれいなうちにビキニ型の水着姿の写真を撮っておいて、大切に持っているとかいうことです。若いくせにダブルの水着を着て、しかもその裾を気にしていつもひっぱってばかりいるのなどは、言語同断です。かえって男性の眼をひくための媚態のようで不潔な感じですよ。

水着姿の美しさのポイントの一つは、太腿から流れる線にあると思います。ショートのダンサーや、女優などのプロは、形をととのえるために、パッドを入れる人も、あるそうです。プロの着ている水着は同じダブル型であっても、スカートは短か目で、ポイントの美しさを十分に出せるようにデザインされている

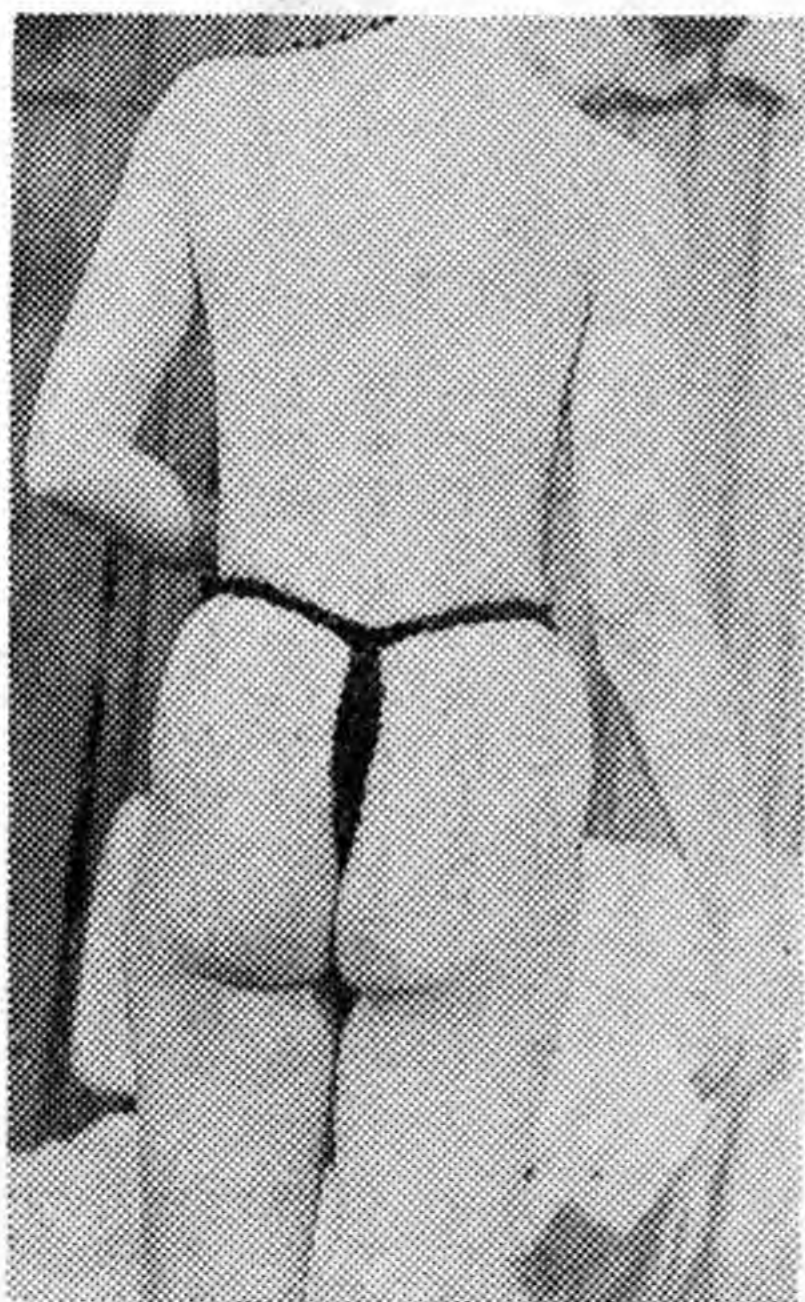
ます。後姿の魅力のポイントは何といってもお尻ですが、今の水着では全くそれが無視されているといっても言い過ぎではないでしょう。フンドシこそお尻の魅力を十分に発揮してくれませんが、せめてビキニパンツは股ぐりを深くして、お尻の美しさをできるだけ出すようなスタイルにしてほしいものです。外国の女性の水着や、体操や、バレエやスケートのユニホームや、アクロバットの衣裳には、これに近いタイプがだんだん見うけられるようになって来ました。

ダブル型の水着は、スカートがあるからというわけでしょうか、内側のパンツは意外に股ぐりが深く、ビキニパンティ型であることを見ました。そこで特に内側のパンツの

小さいものを選んで買って来て、着てみますと案外にセパレート型やビキニ型よりもかえってフンドシ的でした。

そこでわたしは、ダブルのワンピース型の水着の改造を思いつきました。内側のパンツを取り除き、つまり、底のないズン胴型のもの、ちょうどランニングシャツの長い形のものにしてしまっ、それをフンドシをしめた上から着るのです。外観はダブルのワンピース型の水着で、いたっておしとやかなお嬢さんスタイルですが、中味はフンドシ一本の颯爽たるスタイル。まくれ上がったては困るときは、ちょっと留めておきます。わたしの好みにピッタリで、いつも愛用しています。

スイミング・クラブでは飛び込みも練習しました。例によって誰にもできそうもないもの、ウルトラC、というところとオーバーですが、そんな高等なことはとてもできませんが、素人としての標準でのウルトラC。わたしだからこそ、できというようなものを練習しました。例えば、逆立ちの高飛び込みなど、男子ではそうむづかしくはないでしょうが、女性でやれる人はそう多くはないでしょう。みんなの注目を浴



びて高い飛込台に上がるだけでも、ちょっとしたいい気持です。そこで徐ろに倒立、体の平衡を保ちながら手をはなす。思いのほか長い時間がかかって、十米下の水面へ弾丸のように落下する。はげしい衝撃と水圧。目の前に立ちのぼる宝石のような無数の泡。やがて水底に達すると、水底を蹴って、水面に浮き上がる。耳に入ってくる噴声と拍手の音。当時の仲間でこれが出るのはわたしだけでした。わたしだけが出来るという優越感、ヒロイズムが、わたしをすっかり、有頂天にさせました。

高飛込みはまかり間違えば大怪我、命だって落とすかも知れません。油断は禁物です。文字通りいつもフンドシをしっかりとめてやったのは、言うまでもありません。

始めのうちは十米の飛込台に上がり下を見るだけで足がふるえました。低い所から練習して、だんだん高い所から飛込むようにしたのは当然ですが、今では十米では物足りません。もっと高い所から飛込んでみたいと思います。どの位の高さまでやれるかためて見たいと思います。恐怖心にうちかつ気持、自分の勇気をためず気分、辛苦に耐える快感に何とも言えないヒロイズムを感じます。飛込

みとはちょっと違いますが、スカイダイビングをやって見たいと思っています。それまできるならフンドシ一本だけで超高空から飛び下りたらどんなに素晴らしいだろうと、夢を見ております。

寒中水泳の大会にもよく参加します。身を切るような寒さの中、オーバーにマフラーを深々と巻いて、寒そうに震えて見ている見物人の注視の中に、颯爽と橋の上から飛込んだり、傘をさして泳いだりするのは、なかなか気分がよいものです。ソ連では、零下十度、二十度もの寒さの中で、雪と氷にとざされたモスクワの河で泳ぐグループがあるそうです。わたしもそんな寒さの中で一度泳いで見たいと思います。

トードダンスの魅力にひかれてバレエも習いました。これもわたし一流の行き方で、基礎を一通りやると、アクロバットの的なものばかりを練習しました。例えば何十回も連続して回転するピルエットやフェットなど、始めのうちは二、三回まわると、もう目がまわってどうしようもありませんでした。他の人より一回でも多く回われるように懸命に練習しました。トードで立って踊ることはなかなか辛いものです。これも長時間トードで立っていられ

るように鍛練しました。トードで立つとそれだけ脚が長く見えますし、スラリと伸びた脚線には何とも言えない魅力があります。トードシューズは爪先を保護するために、先が革で箱のようになっていますので、ともすると先が団子のようにふくらんであまり形がよくありません。そこで革はできるだけ薄いものにして形のよいものを使います。しかしそうすると爪先の痛さが増してきます。それに耐えて練習して行くところが、またわたしをバレエに引きつけました。バレエではよくネット・タイツをはきます。その下に同色のパンティをはくのが普通ですが、わたしはもちろんフンドシかフンドシ型のパンティをつけます。最近ネット・タイツの上に水着型の衣裳をつけた、いわゆるバニースタイルがはやってきました。が、せっかくチャームिंगなバニースタイルをしていながら、腿のところではネット・タイツの下にはいたパンティがのぞいているのをみかけたことがあります。無神経なのにあきれます。そんなときこそ、下ばきはフンドシ型にすべきだと思います。

またこの頃は、宣伝効果を上げる意味からか、冬にスキー場やスケート場などで水着のファッション・ショウをあちこちで行います

が、モデル嬢もすいぶん強くなったものと感心もしますが、わたしは以前から、フンドシ一本きりの裸で、よくスキーやスケートをやっています。誰もいない白銀の雪の中、足跡一つない処女雪の中を滑ったり、裸でころげまわったりする気分はまた格別のものです。特に白いウサギの毛皮で作ったフンドシをしながら、雪の中で遊んでいる姿は、われながらさぞ可愛いらしいのではないだろうか、うぬぼれまじりの得意な気持ちになります。

水上スキーは、また一段と爽快です。板子一枚下は地獄の言葉通り、猛スピードで飛ばして、もしふり落とされてスキーに頭でもぶつけたら命もおぼつかないでしょう。フンドシをしっかりしめて身も心もひきしめた上で、ビキニの水着だけでやります。寒い時はよくゴムの服を着てやっているのを見ますが、わたしはどんなに寒くてもビキニだけの裸でやります。そうでないとわたしのヒロイズムが許しません。

バイクの魅力も乗った人なら忘れられないものではないでしょうか。爆音を轟かせて疾風のように飛ばすスピード感とスリル。これもわたしはフンドシだけの裸か、その上に水着を着ただけで乗るのが好きです。裸の脚の

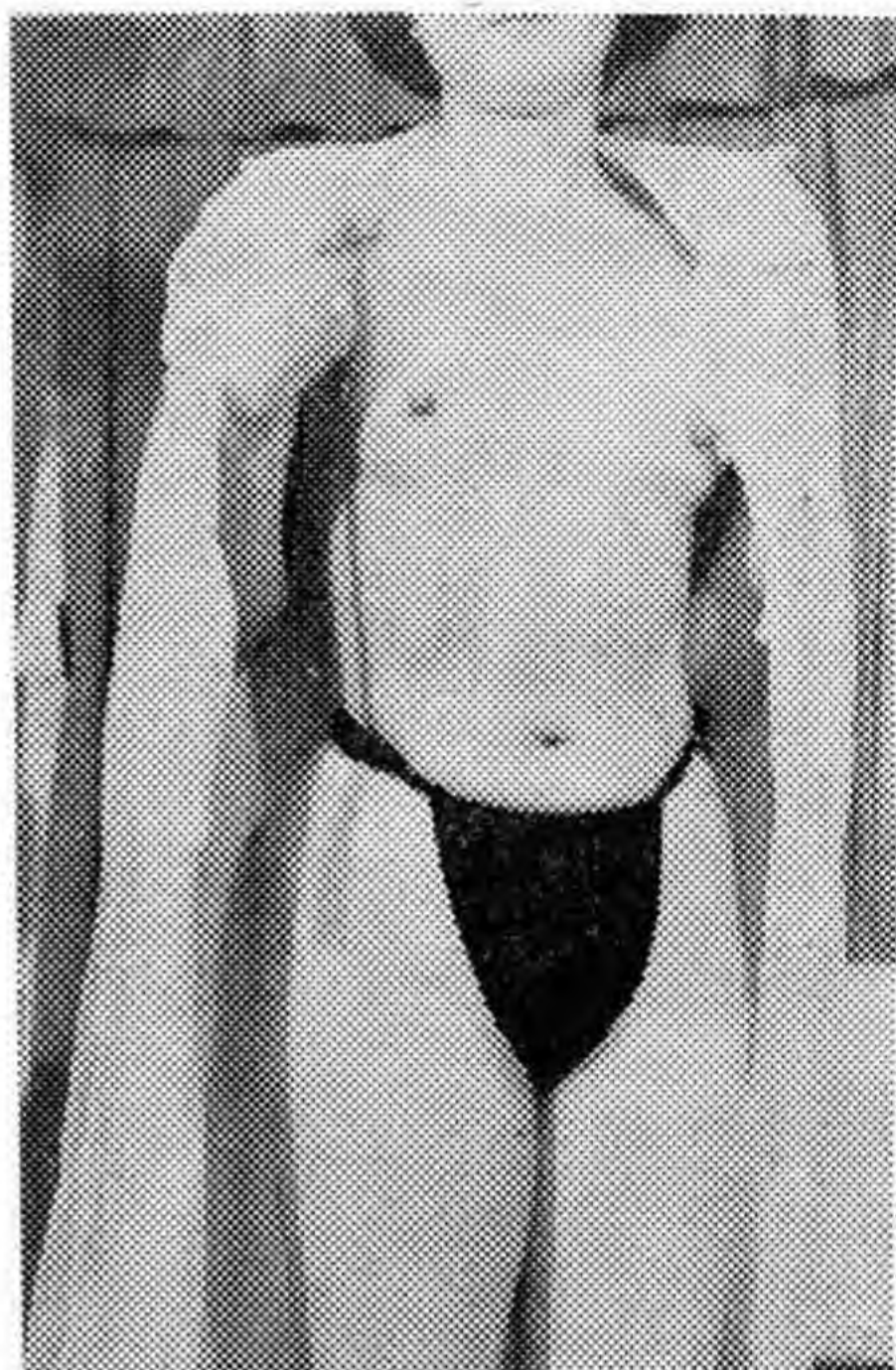
すぐ内側に露出したシリンドーが、次第に熱をもって来て、さわれれば火傷をします。もし転倒すれば命にかかわりましょう。いつも危険にさらされている緊張感、それがフンドシをしめてやることによって、倍加されるのです。ここでも困難に、懸命に挑戦してゆくヒロイズムを感じます。

ヒロイズムを如実に感じさせてくれるものにもう一つ乗馬があります。高い馬の背に乗って、あたりを見下ろすだけでその感じが得られます。わたしは裸馬が特に好きです。それにフンドシ一本きりの裸で乗るのです。馬が歩くたびに、筋肉の動きが直接太腿に伝わってきます。並足、はや足、駆足、それぞれ違った動きが全身を快く刺激してくれます。シーズン・オフになって人気のなくなった高原を、フンドシ一本で裸馬に乗って思い切り走らせ、人馬ともに汗ばんだところで、冷たい湖で泳いだことがあります。そうした大自然の中で何物にもとらわれず、思う存分のことをやるのは、何とも言えません。

わたしはフンドシを常用しているといいましたが、わたしの言うフンドシは広い意味のフンドシで、フンドシ型の下ばきをも含めています。従って一口にフンドシと言ってもい

ろいろの型のものがあるわけです。ですが、やはりフンドシの醍醐味は六尺フンドシの右に出るものではありません。わたしも六尺フンドシが一番好きです。長さは大体二メートルちょっとぐらいで巾は十センチから十五センチぐらいの、薄くて柔かく、そして強い生地のもので、よくしまるので好きです。

しめ方は始めに書いた通りです。六尺フンドシの変形として、前当ての部分で三角形に作り底辺の部分に輪にして、頂点に長さ一メートル三十センチぐらいのヒモか細い布をつけたものもよく用います。これは三角形の部分で底辺を上にして、細いヒモの部分を、お腹からお尻へまわして、さらに前にまわしてから前当ての三角形の輪の部分に通して、一周させお尻の上でからげて結びます。もう一つの形は、前当の三角形の布に二、三十センチの細い布かヒモをつけ、三角の前当の底辺の部分と、ヒモか細い布の先端の部分と、両端を輪にしてヒモを通したものです。このように前当を三角形に作る場合には、適当にダーツを入れてよく密着するようにしないと、スタイルが悪くなります。次はT字帯式のもので、T字型の部分を前にするのと、後の方にするのとがあります。どちらにして



も、前に当たる部分だけ巾を広くし、あとは細くしてお尻の魅力を十分に出すようにしています。

後から前にまわす方式のは、ヘクラ島の海女がしているサイズといれるフンドシがこれの一例と聞きました。後から前へまわした布を少したらし、ダブルの水着のスカートのように飾りにしたり、少し長く作って、六尺フンドシのようにまた後へ返して、お尻のところで結んだりすることもしてみました。

それから外国のストリッパーが用いているバタフライも持っています。三角かいろいろの形の布をヒモでT字帯式に固定するものです。わたしの好んで使うのは、主にT字型の

ヒモの下端に前布をつけたもので、T字の横の両端にカギホックをとりつけて、身つけた後前布の両端に接続出来るようにしてあります。このヒモをゴムにして、パンティのように出来上がった形のままで着用することが出来るのもこしらえました。あとは日本のストリッパーが用いているいわゆるツンパです。これには股ぐりの深さによってパ

ンティに近いものから、後になる部分は全部ヒモのようにしたフンドシ型のもので、いろいろと思いつくままに作りました。こうした広い意味のフンドシでは、形、材料、色、模様の変化を加えると、千変万化でそれぞれ無限大の種類ができます。いろいろとデザインを考え、その時々の気分に応じてとりかえてしめて見る気分は、フンドシ・ファンならでは味わえない楽しみというものでしょう。

フランスなどの映画で見ますと、ヒモの全く見えないバタフライをつけたのがよくあります。わたしもそういうバタフライが欲しくなって、自己流ですが、いろいろ研究しました。ノリとかテープとかで、貼りつける方法

は、すぐとれてしまっただめです。踊ったりなどとてもできません。それでも、わたしのクセで、意地になって考えたり、いろいろ苦心して試作をくりかえしたすえ、どうやら水泳や逆立ちぐらいなら落ちない程度のもので作り出すのに成功しました。どういふものかをお知らせしたいのですが、性質上ここでの公開は遠慮しておきます。

フンドシ・スタイルの映画は機会ある毎に見ています。女だからとヌードの多いものに気兼ねするような事は、わたしはしません。

ごく古いところで、わたしがまだフンドシを知って間もないほんの子供の頃、これは偶然見たのですが、それも戦後ですから封切ではもちろんありません、『ターザンの〇〇』というものです。戦前のずっと古いものですが、それにはターザンの妻のジェーンがターザンと同じ形の革のフンドシ姿で現われ、水中を泳ぎまわるシーンがとても素晴らしく、いまでもはっきり覚えています。題名を忘れてしまったのが残念ですがもう一度見たいと思っています。それに似たものに『ジャングルの裸女』とかいうものがありました。これは草で編んだ縄のフンドシでした。

大自然の中で、フンドシ一本の裸で、猛獣

どもを手足のように使う、ジャングルの王者ターザンのような生活を、一度でもよいからやって見たいなと思います。

縄フンドシ姿の映画には『イヴの砂』というのもありました。無人島で男女がフンドシ一本で何日間か生活するというものだったと思います。『悲しい奴』というフランス映画では、フンドシ形のパンツ一つの女性をいろいろいためつけるシーンがありました。その女性の容貌や肢体が日本人そっくりだったので、とても印象的でした。日本の映画では文化映画で『エラブの海』というのがありました。美しい南国の風景の中で、二人の姉妹がフンドシ姿で海に潜る姿は、幻想的な海底の光景とあいまって、最高の美しさを感じさせてくれました。日本にはせっかく伝統のフンドシというものがあるのですから、こうした映画をもっと作ってほしいものです。

日本に來たある外国の女優さんが、下着を着ていないということで話題になったことがあります。わたしも下着は特別の時以外は着ないことにしています。下着はフンドシだけです。今は亡きある外国の女優さんが、夜は香水のシャネルの五番を着て寝るといったことは有名な話です。日本の、フンドシ・

ファンでもある、ある著名な小説家は夜はパンツ一つの裸で寝るそうですが、わたしも夜はフンドシだけの裸で寝ます。朝、眼を覚まし、窓を明けはなつて新鮮な朝の空気を部屋一杯にとり入れた中で、フンドシ一つで美容体操をします。冬の身を切るような寒風の中でも、やがて汗ばんできます。そうしたところで、冷水のシャワーを浴び、水風呂で冷水浴をして肌をひきしめます。馴れてしまえば冬でも何でもありませんし、かえってそうしないと気分が悪いのです。水浴によって身も心もすがすがしくなつたところで、洗いたてのフンドシを身に着ける気持は何とも言えません。寒中に滝に打たれたり、水垢離する気分も同じようなものだと思います。

わたしは冬でも下着は着ません。イヴニング・ドレスは下着を着ないのが正式だそうです。裾は長くても背は大きく露出して女性の美しさを誇示しています。中にはウェスト・ラインの下までカットしてあって、あきらかに下着はつけていないとわかるものを、写真で見たことがあります。昔の江戸の辰巳芸者は伊達の薄着を自慢にし冬でも足袋をはかず、ぬきえもんにして美しい襟足をのぞかせて、意気を誇つたそうですが、常日頃絶えざ

る鍛練を積んでいるからこそ、そうした最高のおしゃれができたのでしょう。腰巻などの下着を着けないで和服を素肌の上にじかに着ると、歩くときに足さばきがよいので、つい洋装の時のくせで大腿まで脚が見えてしまうことがあります。歩いている右側から見ると左脚がそのように見えるのです。男性が右側にいると、その目の様子でどの程度まで脚が見えているか、およそ見当がきます。それがもし好ましい男性の場合は知らんふりをして済ませることもあります。いくらわたしのようなおてんばでも、男性に魅力ある存在として見られるのはちょっと嬉しいものです。

靴下もはきません。ノーストッキングでいるためには、脚の手入れには十分に気を付けますし脚にお化粧をします。下着や靴下をつけないと、ミニスカートの場合にとっても便利です。ガーターやスリッパなどがチラチラするような醜態をさらすことがないからです。

電車で腰をかけてミニスカートの裾を一生懸命にひっぱっている女性をよく見かけますが、そんなに短いのがいやなら長いスカートををはけばよいし、裾が気になるのなら立っていればよいと思います。ミニスカートの電車

で腰をかけると向い合わせに腰をかけている男性は、十人が九人までこちらを見ます。他に席が空いているのにわざわざ前に坐ってジロジロ見たりするのは、中年の男性に多いようです。そんな時はプイと立ってよそへ行ってしまうたりして、からかってやります。若いイカス男性で遠慮勝ちにチラチラと見たりするときは、脚を組んだりして、よく見えるようにしてやったりもします。

この頃の若い男性の腰から脚の線はずいぶんきれいになりました。ピッチリした細いズボンが、若々しい潑刺とした肢体ではちきれんばかりにはりきり、ブリーフの線を浮彫りにしてサラブレッドを思わせるお尻から太腿の線は、わたしにとって魅力的で、胸のときめきを覚えることがあります。男性のズボンの線が女性にとって魅力なら、女性のストラックスの腰の線も男性にとって魅力でしょう。パンティ・ラインは更に魅力を倍加するようにです。生地が薄いストラックスをはいて、腰を折って下を向くと、パンティの形はもちろんのこと、パンティの二重に厚くなっている形まで、そっくり手にとるように見えることがあります。が、さぞかし男性を喜ばせていることでしょう。わたしも気が向けばビキニ型の

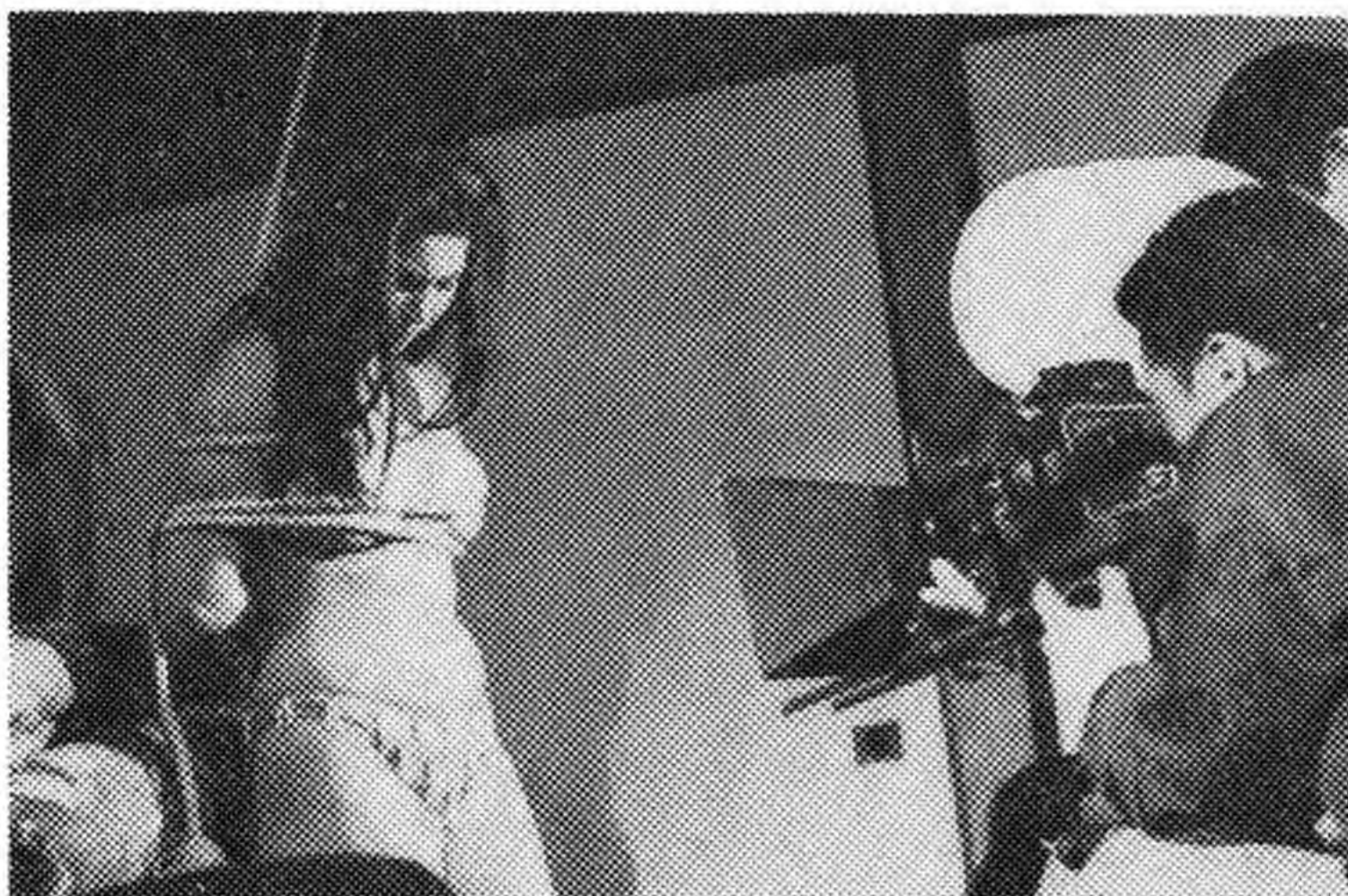
小さいパンティをはいてストラックスをはくこともあります。そんなときはサイズの小さな目の、そしてゴムのよくきいたものをはくようにしますと、パンティ・ラインがよりはっきり出ます。女のわたしが見ても惚れ惚れするような腰の線を持った女の子を、時々見かけることがあります。くりくりと丸く盛り上ったお尻の谷間に、ストラックスがぴっちり喰い込んでいる、ピチピチした可愛いお尻を見ると、そんな素敵なお尻にフンドシを締めさせたい衝動にかられます。

チャイナ服も下着がない方がはるかに具合がよいものです。魅力のポイントである裾の割れ目に下着がちらついていたのは興奮めです。冬の寒い時に毛皮のフンドシをしめただけの裸の上に、毛皮のオーバーだけを着て外出することもあります。皆が、寒がっているときに、外見はいかにも暖かそうにしている、毛皮一枚の下は裸、そしてノーストッキングの素足を出して、ハイヒールをはいて闊歩する姿は、皆がそれと知れば恐らく驚異の眼を見はるかも知れないという、わたしのヒロイズムを満喫させてくれるからです。

わたしのハイヒールはかかとが十五センチ位あります。普通のは高くても十センチぐら

いです。ハイヒールはそれだけ背が高くなりますし、脚も長く見えて素敵なお履物ですが、高いのをはきこなすのはなかなかむずかしいものです。膝が曲がったままでもちよこちよこ歩いたのでは、ハイヒールが泣きます。高いのをはきこなすには、柔かい足首と強い脚の筋肉がいります。わたしがそんな高いハイヒールをはけるのも、バレエで十分脚を鍛えているからこそで、わたしの自慢の一つです。

わたしはヌードリストではありません。女性の乳房は美しいと思いますが、全裸はいやです。フンドシは下着としても良いし、女性の魅力は余す所なく発揮し、しかも機能的でたとえ開脚倒立などの激しい動作をしても醜態をさらすこともなく、更にメンスの時も心配なく、しっかり締めていれば痴漢対策ともなるし、本当に素晴らしい衣服だと思います。トップレスの水着などは風紀上問題があります。それよりフンドシ型のパンツの水着の出現を望みたいと思います。少くともヌード・ショウでは、是非フンドシ姿の凛々しくも、可愛らしい美しさを発揮させてほしいものです。伝統あるフンドシが外国に先を越されては全く残念です。同性のフンドシ・ファンが一人でも多くなることを望んでやみません。



製作・ヤマベ・プロダクション
監督・松原 次郎・岸 信太郎

＝ピンク映画シナリオ＝

肉の飼育

脚本・団 鬼六

登場人物

岩	辰	森	菊	谷	耕	銀	定	節	朱	義	静
田	公	川	島	村	二	造	雄	子	美	江	江
岸	司	北	鶴	長	宮	瀬	山	浜	祝	乱	谷
信		村	岡	岡	瀬	川	本				ナ
太	健		八	丈	健	宏	昌	夏	真	孝	オ
郎		淳	郎	二	二		平	子	理	寿	ミ

1 山々の俯瞰
2 溪谷
小鳥の声。川のせせらぎ。
谷川の流れに添って、談笑しながら五人の男女がやってくる。
この連中、どういう種のグループか、すぐには判断出来ぬ。てんでばらばらな服装だが、撮影用のレフなど担いでいるところから、彼等の大体の職業が想像出来る。

一番先頭を歩いているのは田村銀造（五十才前後）で、垢づいたジャンパーにベレー帽、人生の底辺をさまよっている人間特有の狡猾さと気弱さが、表情の底に沈んでいる。

その後を歩くのは銀造の息子の定雄（30）安手のペラペラした背広を着ているが、やぐざぐずれらしく、頬に傷跡があり、精悍な顔つき。その後をびよんぴよん飛ぶようにして歩いているのは、学生服を肩にかけ角帽を頭に乗つけた耕次（19）。勿論、学生ではなくチンピラで、猿のようにこせつき、うしろからやって来る二人の女を何かからかっている。そのうしろを二人の女が肩を寄せ合い、手に花を持ち、仲良く歌を唄いながら歩いてくる。一人は義江（25）で、野暮ったい安手の色あせた和服を着、もう一人はその妹の朱美（19）、セーラ服を着ているが、それは舞台衣裳で勿論、女学生ではない。義江は定雄の女房だ。

3 林の中

木の枝に小鳥が止っている。

この林の中で、八ミリ映画の撮影が行なわれるわけだ。

叢の上には、学生服の耕次とセーラー服の朱美が、すでに抱き合い横になっている。

銀造が演出にかかっているのだ。

八ミリの撮影機を持って二人のモデルの周

囲を廻り、適当な場所を選んでいる定雄。

銀造 さあ、そろそろ始めっか。

耕次 （片手を朱美の首に巻き片手で自分の鼻毛を抜きながら、くしゃみ一つすると）あいよ。（大きなアクビをする）

銀造 朱美、ガムを捨てろよ。

朱美、顔をそむけて、ペッとガムを吐き出す。

耕次、ふと横を見て毛虫を見つけてつまむと、ふざけてそれを朱美のスカートの中へ入れる。

耕次 （ニヤニヤして）何だかわかるかいこれ……

朱美 何よ。

耕次 お前の好きなものだ。

朱美 何よ、一体。

耕次 毛虫だ。

朱美 キャ——

朱美、耕次を足で蹴とばす。

カメラをかまえていた定雄、舌打ちして、

定雄 おい、こらっ、何

してやがんだ。仕事だぞ。真面目にやれ。

4 山道



義江キョロキョロ四囲に気を配っている。

見張りに立っているわけだ。

向うから、リュックサックを背負ったアベックがやって来る。

それに気づいた義江、すばやく、林の中へ飛び込んでいく。

5 林の中

八ミリ映画撮影、正にクライマックス。

耕次と朱美、裸になって熱演している。角度変え、腹這いになってカメラをかまえ、撮影している定雄。レフを高々と差し上げている銀造。義江、かけこんで来る。

義江 （定雄に）あんた、誰か来たわ、早く。

定雄 （狼狽しながら）ちえっ、もうちょっとなんだよ。

銀造 一旦、中止した方がいい。定雄。

仕方なく定雄立ち上り、義江と一緒に荷物をかかえ、奥の方へ走り出した銀造のあとを追おうとして、ふと見ると、まだ抱き合っている耕次と朱美。

定雄 おい、こら、早くしないか。

定雄に蹴られて、耕次と朱美ようやく起き上り、毛布やタオルで前を押さえながらスタコラ走り出す。その逃走するアダムとイブの後姿がストップモーションとなって、タイトル——キャスト

6 温泉旅館・山東荘その正面（夜）

二階の窓から酒席の賑わいが流れてくる。

7 同・旅館地下の女中部屋

銀造、定雄、耕次、義江、朱美の五人、黙々と飯を食っている。

二階の酒席の三味線や客達の笑声が、この殺風景な部屋に流れこんでくる。

定雄 随分と景気よく騒いでやがるな。

銀造 菊島組の賭場が、お開きになったんだ。その祝い酒だろ。

耕次 親父さんお茶をとってくれねえか。

銀造 あいよ。

銀造、前の土瓶をとって耕次に渡す。

耕次 じゃ、今夜の仕事ってのは、その宴会の余興なんだな。

銀造 そうだ。菊島の親分さんはいい人だよ。俺達が住んでるこの部屋を、ずっと只で貸していて下さるんだから

な。

朱美 入りたい時にや温泉にも入れるし、考えりゃ結構な御身分ね、私達。

銀造 そうさ。それだけに、今夜は張り切

って仕事してくんな。

耕次 だがよ、親父さん。俺は昼間の映画で参っちゃったよ。体がいう事を聞かねえ。

朱美 ふん、だらしないのね。

銀造 今夜は耕次の出る幕じゃねえ。生身の舞台となりや何といっても、定雄

が抜かなきゃあな。（定雄の方を見て微笑し）頼むぜ、定雄。

定雄 （黙々と飯を食っている）

朱美 （耕次の顔を見て）あんたは実演スターじゃなく、映画スターってわけね。（笑う）

耕次 （鼻をピクピクさせて）そうさ。映画スターの方が格は上なんだぞ。

朱美 滅多に顔の方は写らないからね。

一同、笑い出す。

耕次 ちえっ、頭にきちゃったな。俺、パ

チンコでもやりに行こうっと。

朱美 待って、私も行くわ。

耕次のあとについて、朱美も部屋の外へ出て行く。

定雄の食事のすんだのを見て、彼の女房の義江が、茶を注ぎに行く。

義江 あんた、お茶。

定雄 うん、おめえ、体は大丈夫なのか。何なら今夜の仕事、断わったっていいんだぜ。

義江 大丈夫よ、あんた。風邪をひいたぐ

らいで、そんな——

定雄 風邪だってこじらせりゃ厄介だ。そうだ、さっき薬を買ったつけ。（ポケットから薬を出して）さ飲みな。

義江 すみません。

そんな仲むつまじい二人を、父親の銀造、眼を細めて眺めながら煙草を吸っている。襖が開いて、菊島組の幹部やくざ、森川が入ってくる。

森川 どうだね、景気は。

銀造 ああ、これは森川さん、さ、どうぞどうぞ。相変らず汚なくしておりますが。

銀造、座布団をすすめる。

義江 今、お茶を入れますから。

森川 いいんだ、いいんだ、かまわねえでくれ。これ親分からの差し入れだ。

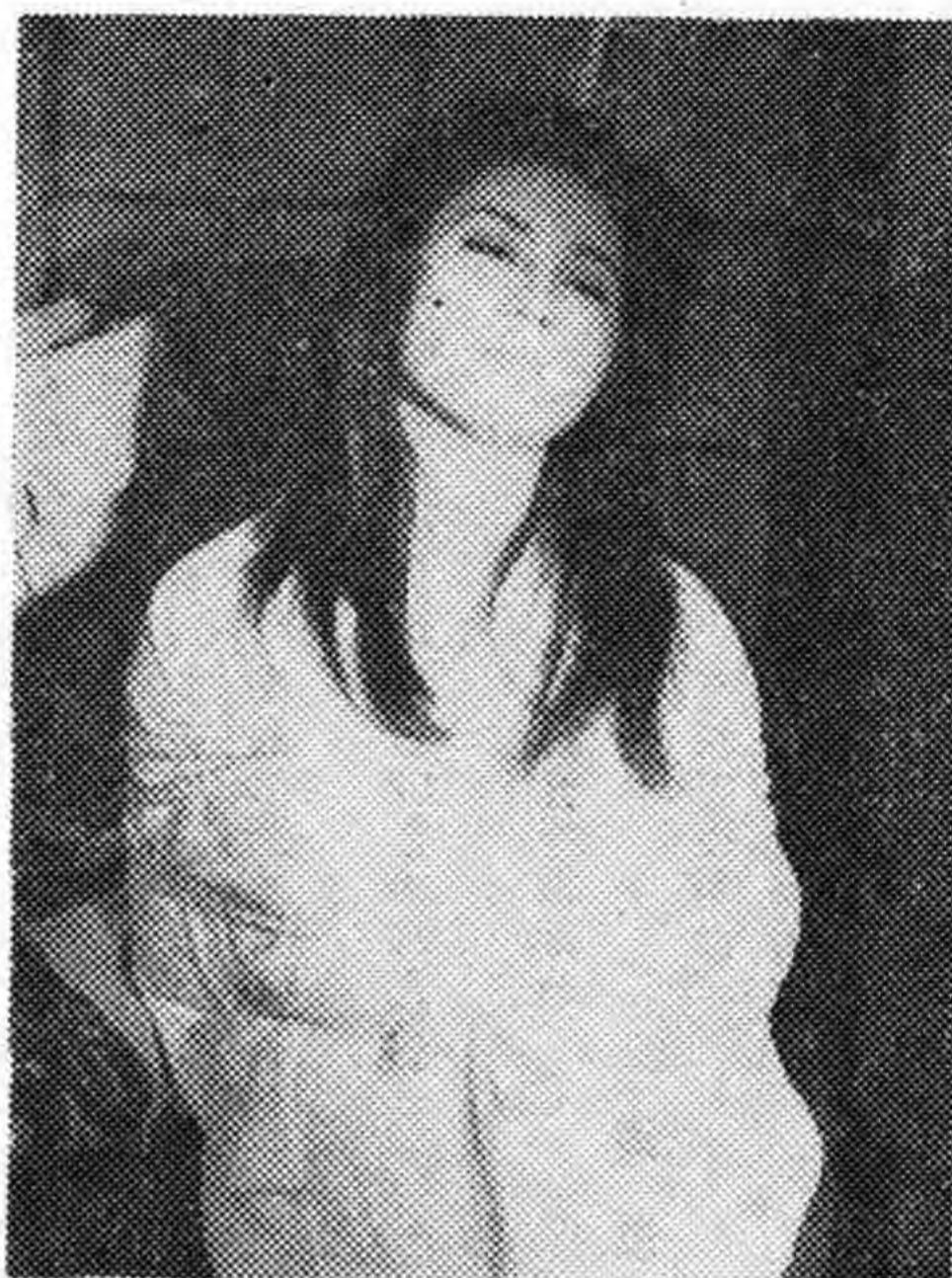
森川手にしていた一升壺を畳の上に置く。

定雄 どうもすいませんね、兄貴、いつもいつも。

銀造 それで森川さん、今夜のショーは大

体、何時頃から——

森川 うん、その事だが、一寸、親分が親



父さんに逢いたいといってるんだ。
親分の部屋へ来てくれねえか。
銀造 はい、わかりました。
森川 じゃ俺も親分の部屋へ行って待てるからな。

銀造 あ、一寸、森川さん。

外へ出て行こうとする森川を呼び止めた銀造、古ぼけた鞆の中から、古ぼけた財布を取り出し、千円札を二、三枚取り出してチリ紙に包んで立ち上ると、森川のポケットの中にそれを入れようとする。

森川 な、何だよ、親父さん。

銀造 ま、いいじゃありませんか、ほんの煙草代ですよ。

森川 困るな。そんな事してもらっちゃ。

銀造 ま、いいからいいから。

あんたには何時もお世話になりっぱなしで。(卑屈に笑う)

森川 すまねえな。——じゃ、

親分の部屋へ早いと頼むぜ。

銀造 へい。

8 同・旅館 遊技室

耕次と朱美、自動コリント・ゲームして遊んでいる。耕次のはじく玉を見つめていた朱美、ふと顔を上げると宿着を着た一組のアベック(谷村と節子)が入って来て、ミュージックボックスに金を入れ、ブルースに合わせて、頬と頬とをすり合わせ、踊り始める。それを、うっとりした表情で見つめている朱美。

朱美 いいなあ、若い人は。

耕次 若い人?

耕次、ゲーム台から顔を上げ、踊る二人を見て、

耕次 お前の方がずっと若いじゃないか、

おかしい事をいう奴だな。

朱美 (アベックを見つめながら) 私達の

どこに若さがあるっていうのよ。あ

あいう人達がうらやましいわ。ね、

耕次。あんた、女の人を好きになっ

た事がある?

耕次 (ゲームをつづけながら) 女の体を抱いてばかりいるんで、女を好きになる閑がねえんだよ。

朱美 (ダンスする二人を見ながら) うらやましいわね、全く——畜生、何だか腹が立って来た。耕次、踊ろう。(耕次の手を引っ張る)

耕次 一寸、一寸待てよ。今、いい線、いってるんだから。

朱美 ねえっ、踊ろうったら。

ゲーム台にかじりつく耕次を引っ張り出した朱美、踊っているアベックを突きつけるようにして、ミュージックボックスへ行き銅貨を入れる。

不快な表情で朱美達を見る谷村と節子。やがて、曲は激しいリズムのゴーゴーに変わり出す。

手ふり足ふり、腰を揺すり、我物顔に踊り出す朱美と耕次。

9 同・旅館 菊島の部屋

菊島、夜具の上にあぐらを組み、肩をチンピラの辰公に揉ませている。枕元には膳がおかれ、銚子が並んでいる。

菊島 酒だ。

辰公 へい。

辰公、揉む手をやめ、前へ廻って、菊島に酒の酌をする。

菊島 肩だ。

辰公 へい。

辰公、再び、うしろへ廻って、菊島の肩を揉み始める。その近くに坐って、八ミリフィルムを電気にすかして眺めている森川。

菊島 どうだ。面白そうなのがあるかい、森川。

森川 映写してみなきゃわかりませんね。

襖の向こうから銀造の声。

銀造 ごめん下さいまし、銀造ですが。

森川、フィルムを箱の中へしまい出す。

菊島 入って来な、銀造さん。

銀造 お邪魔致します。

銀造、古靴を抱えて入って来ると、畳の上に膝を折り、丁寧に頭を下げる。

菊島 何もそんなにかしこまる事はねえやな。こっちへ来なよ。

銀造 へい、有難うございます。

銀造、恐縮した足どりで、菊島の近くに坐る。

菊島 今日は山で撮影したらしいじゃねえか。

銀造 へい、(ニヤリとして)親分のおっしゃっていた例の、へへ……

菊島 ああ女学生ものか、それで役者は。

銀造 へい、女学生が朱美。大学生が耕次という具合で。

菊島 何だ、またあの二人か。

銀造 へい、でも、奴等、あれで恋人同志なんですからね。呼吸はぴったりなんですよ。

菊島 呼吸がねえ。その靴は？

銀造 九州へ流す御注文のスチール一千枚昨日、現像が出来まして。

菊島 少し、見せてみな。

銀造 へい。

銀造、靴の中から幾束かのフォートを取り出し、菊島に渡す。

菊島 (辰公に) もういい。銀造さんに酒をすすめな。

辰公 へい。

菊島、眼鏡をかけて、写真を見る。

辰公 (銚子をとって銀造にすすめる) さどうぞ。

銀造 そうですか。じゃ、一杯だけ。

菊島 (一枚一枚写真を見ながら) あんたの息子は出ちゃいないのかい。

銀造 へへへ、あいつはお尋ね者だけに、やはりそういうものじゃ。

菊島 成程。こいつから足がつくって事もあるからな。

銀造 奴はもっぱら実演スターで売り出しますよ、へへへ。(口をとがらせて酒を飲む)

菊島の写真を眺める顔が冴えないので、銀造、何となく気になる。

菊島 どうも変りばえがしねえな。ピーンとこねえよ。

銀造 へへへ、こういうものは、自分でやらかしてみねえ事にや味が出ねえもんで、写真なんてものは同じようなもんですよ、親分。

菊島 役者のいいのを抱えなよ銀造さん。

銀造 はあ？

菊島 こう何時も同じ顔ぶればかり見せられちゃ飽きちゃうぜ。

銀造 へえ、そりゃわかってるんですが、この種の役者は、募集して集まるってもんじゃなし——

菊島 そりゃそうだろうけどよ、そこが商売というもんじゃねえか。この商売も近頃は競争が激しいからな。たまにや毛色の変ったいい女を見つけ出して来ねえと段々世帯が苦しくなるぜ。

銀造 へえ、そいつもよくわかってるんですが——

菊島 あんたが品物を作る、俺が品物をさばく。こういう約束のもと、俺はあんたの腕を見込んで、あんた達一家を俺の手元におく事にしたんだ。家賃だっていらねえしよ、映画を作るにしたらって、これだけの旅館だ。仕事場に事かく事はねえしよ。

銀造

親分の御好意には心から感謝しております。それだけに、私達も一生懸命――

菊島

手持ちの女役者がたった二人じゃ、正直な所、商売にならねえぜ、銀造さん。

森川

名古屋の吉村が、何回も売り込みに来ているんだよ。フィルムまで持込んで、来ているんだ。

銀造

えッ、吉村が、――でも、親分、あんなのは、素人芸ですよ。ただ、カチャカチャやって見せているだけで。

菊島

だが割とはくい女を揃えているぜ。女さえ良けりゃ客は、喜ぶもんだ。(苦り切る)

菊島

来月の十日にゃ、横浜の岩田親分がこの地へ遊びにおいでになる。色々御機嫌をとらなきゃならねえが、それまでに生のいい女を仕入れといちゃくれねえか。

銀造

でも、親分、そりゃ。俺だって、あんたとは長い付き合いだ。吉村なんかには仕事を任したくはねえからな。

銀造

(悄然として) へえ、とにかく、まだ定雄と相談致しまして。



菊島

頼んだぜ。あ、それから今夜、二階の酒席で始めるショーは、一応、テストとして吉村達に任してみたからな。

銀造

え、吉村に――ハハハ、あんまり奴がせがむんで、一応、テストの形で奴の芸を見てやる事にしたよ。

森川

それで、親父さんの方は、菊の間で仕事してもらいたいんだ。

銀造

ど、どういう事なんです。金持のドラ息子が、東京から女連れでここへ遊びに来ているんだよ。こ

いつは博打のいい客なんだ。一つ、

機嫌をとってやってくれ。

(浮かぬ顔)

(威圧的に) 頼んだぜ。

銀造

10 地下の女中部屋

定雄、煙草をくゆらせながら、酸っぱい表情。

定雄

嫌だね、俺は。そういう女連れの部屋へ出たかねえよ。

銀造

親分さんのいいつけなんだ。さからうわけにゃいかねえよ。

部屋の隅で着物にアイロンを当てる義江、銀造と定雄のやりとりを気づかっている。

定雄

親分も親分だよ。何もこの酒席に名古屋の吉村を呼ぶ事はねえじゃねえか。奴は去年からのこの商売を始めた素人だぜ。雄と雌をくつつかせるだけで、客の機嫌をとってやがるんだ。技や手管はまるきし使わねえ。

銀造

菊島親分にいわすりゃそんなものは必要ねえんだよ。女の顔と体さえよけりゃ、客は満足するとおっしゃっているんだ。

定雄

じゃ、街の映画館へ行きゃいいじゃねえか。きれいな女優さんの裸が見られるぜ。俺達のやってるのはな、親父さん。客に女の抱き方を教えてやろうという商売なんだ。

銀造

(急にキツとした顔になって) 理屈をいうな、この野郎。手前、親分に楯つく気か。警察に追われている手前を、親分は今日までここにかくまうて下さったんだぞ。

定雄

そ、それはわかってるよ親父さん。手前も俺も、世の中のウジ虫だ。ウジ虫はウジ虫らしく、ゴミ箱にへばりついて生きてりゃいいんだ。人間らしい口をききやがると承知しねえぞ。

今まで卑屈なぐらいにニヤついていた銀造の表情はにわかに一変、蛇のように冷酷な眼つきになって息子を睨んでいる。アイロンを置いて、義江、おろおろしながらやって来る。

義江

ねあんた。お父さんのいう通りよ。親分さんのおっしゃるその座敷に出しましょうか。

定雄

だって、お前。

義江

あんたのいう理屈はおかしいわよ。こういう稼業なんだもの。どんな座敷へ出たって同じじゃない。私は平気よ。

義江、そういうと再び、部屋の隅へ戻り悲しげな表情で、着物にアイロンを当て始める。

そんな義江をぼんやり見つめる定雄。

11 同 菊 の 間

卓に並べられた酒、ビール。

谷村と節子、体を寄せ合うようにして飲んでいる。

節子

ああ、いい気持だわ。ね、そろそろお床へ行かない。

谷村

待て待て、その前に面白いショーを君に見せてやるよ

節子

何よ、面白いショーって。

谷村

ハハハ、ま、見りゃわかるさ。

谷村

「ごめん下さいまし」と襖が開いて、浴衣を着た義江が腰をかがめて入って来る。

谷村

よ、待ってました。

谷村

谷村、煙草を啜えて、パチパチ拍手する。

義江

小さくたたんで持って来た毛布を畳の上に敷いて、廊下の方を向いて合図すると、浴衣を着た定雄が入って来る。

定雄

ぶっさら棒に、谷村達の方へペコリと頭を下げ、口笛でも吹くような口つきで帯を解き始める。義江も帯を解く。

節子

コップを片手に持ったまま、ポカンと見ていたが、急にプーと吹き出し、谷村の肩に顔を隠すようにして、苦しそうに肩で笑い始める。

裸になった義江と定雄が毛布の上で実演を始めたのだ。

谷村

大口を開けて笑い出す。

義江

義江を抱擁している定雄、不快な顔して谷



村の方を見、

定雄

すみませんが、そう笑わねえで下さい。仕事がいやにうんです。

それを聞くと、ますます笑う谷村。顔を隠して、クスクス笑う節子。

むっとした顔になる定雄と義江。なだめるよう抱きしめて、

義江 駄目よ、駄目よ、怒っちゃ。商売な

義江 駄目よ、駄目よ、怒っちゃ。商売な



んだから、ね。

義江、微笑して、定雄に頼ずりする。

12 青い空に白いちぎれ雲が浮かんで

13 土手の下

草むらに仰向けに寝、気持良さそうに青空を眺めている銀造と定雄。

その近くの草むらで、箆を持ち、つくしをつんでいる義江。

定雄 何をしてるんだ、義江。

義江 (微笑して) つくしを、つんでるのよ。

銀造 ハハハ、義江はまるで子供だな。

義江、つくしをつみながら、唄い出す。

「旅のつばくろ、淋しくはないか、

俺も淋しいサーカス暮し——

銀造と定雄、空を見上げながら唄い出す。

銀造 へとんぼ返りで今年も暮れて——

定雄 へ知らぬ他国の夢を見た

銀造 ああ、いい気持だ。俺は、しばらく眠るからな、定雄。

銀造、気持良さそうにうとうとして眼を閉じる。

義江 気持良さそうに眠っちゃったわ、お父さん。

定雄 (微笑して) ああ、親父さんも年だな。へへへ、いびきをかいてらあ。

(草をむしり取って、面白そうに銀造の鼻をくすぐる)

義江 およしなさいよ、そんな事。

銀造、急に大きなくしゃみ。

定雄と義江、笑いこける。

14 温泉旅館山東荘 その玄関

谷村と節子、腕を組み合って出て来る。

ハッピを着た辰公、近づいて、

辰公 どうも、有難うございま

した。また(手で壺を振る真似して)この節はど

うぞ。

谷村 ああ、色々と、楽しかったよ。親分さんによろし

くな。

辰公 へい、どうも。

玄関脇に駐車してある自家用に、谷村と節子乗る。

ハンドルを握る谷村。車、走り出す。

15 走る車の中

運転する谷村の横に坐る節子、思い出し笑いをして。

節子 昨夜のショーは傑作ね。私、あんな

の初めて見たの。

谷村 ハハハ、おかげであのあと、俺達大

いにハッスルしたじゃないか。

節子 (クスクス笑う)

谷村 だが、ああいう手があるとは思わな

かったな。(ふと節子を見てニヤリ

とし)参考になったろう君も。

節子 (笑って) そらそら、そんな事ばっ

かりいってると、車がぶつかってし

まうわよ。でもおかしい商売もある

ものね。一体、あの人達、どういう

神経を持ってるのかしら。

谷村 案外、あれでまともなんだらうよ。

節子 ね、話は変わるけど、あなた、何時、

奥さんと別れてくれるの。

谷村 (笑って) 何だい、簾から棒に。気

になってるんだが、なかなか切り出しにくくてね。

節子 (笑って) やっぱり惚れてるんでしょ。

谷村 そうかも知れないな。容貌、スタイルと申し分はないんだがね。惜しい女だよ、あれで不感症とは。

節子 不感症じゃどうしようもないじゃない。お人形を抱いてるようなもんじゃない。

谷村 そうなんだ。昨夜の役者に教わったあの手を—ぺん、女房に使ってみるか。

節子 いやーん、馬鹿。(谷村にしがみつく)

谷村 ハハハ

16 土手の上
草むらの中から箒を持って出て来た義江、道の向う側に山百合が咲いているのを見つけて、微笑する。

義江 まあ、きれい。

義江、花を摘もうとして道路を横断して行く。そこへ谷村の運転する車、疾走して来る。

義江 あっッ!

箒の中のつくしが道路一面に飛び散る。

17 土手の下

銀造の横で同じように眠っていた定雄。ハッと思ひ、土手をかけ上る。

18 土手の上

道の中央に義江、倒れている。車の窓から青ざめた顔を出す谷村と節子。

谷村 (舌打ちして) しまった。

節子 あんた、誰か来るわよ、早く。谷村、血走った表情でハンドルを握り、車を走らせる。

定雄、土手下からかけ上って来る。倒れている義江を見、慄然とする。逆上したように定雄、走る車を追ったが、すぐ引返し、義江の体を抱き、必死に揺さぶる。

定雄 義江っ、おい、義江っ。

土手下から銀造がかけ上って来る。

定雄 (半狂乱になって) 親父さんっ、義江が、義江が今の車に——

銀造、眼をつり上げ、走ってくると、がっくりなっている義江の肩に手をかけ、胸のあたりに耳を当てる。

銀造 (慄然として) 死んだ。

定雄 な、なんだと。

定雄、銀造を押しつけ、狂ったように義江をゆさぶる。

定雄 義江っ、義江っ。

義江、反応なく、がっくり首を落とす。

定雄、ギョッとして、次に、大声をあげ、子供のように手離しで泣く。

定雄 (泣きながら) 義江が死んだ。義江が死んだ。うあ——義江が死んだ。

銀造、周囲をキョロキョロ見て、うしろから定雄の肩を押さえる。

銀造 お前は警察に追われている身だ。奴等が、ここへ検証に来るとまずい。一旦、旅館へ帰れ。ここは俺が何とかする。

定雄 (大声を張りあげて泣いている)

銀造 (おろおろして) おい定雄ったら。

定雄、狂乱したように暴れ、銀造をうしろへ突き飛ばすと、義江の死体に顔を埋め、全身慄わせて泣きじゃくる。

○地面に散乱しているつくし。

○道端に咲き、風に揺れる山百合。

○定雄の号泣。

19 東京盛り場の夜景

20 酒場

青ざめてスタンドに坐っている谷村。

隣に坐る節子、化粧鏡で顔を直している。

バーテン近づいて、ビールをとり、コップを注ぎながら微笑して

バーテン 今夜はどうしたんですか、谷村さん。

谷村 (間をおいて) ——うん?

バーテン 全然、元気がないですね。まるで

失恋でもしたようです。ハハハ。

谷村 少し悪酔いしたのかも知れないな。

谷村、コップのビールを一息に飲む。バーテンが向うへ去ると、



節子 そんなに沈みこんでいちゃ駄目よ。

人に怪しまれるじゃない。

谷村 (慄えながら) 俺は、俺は人間一匹

ひき殺してしまっただぞ。よくもお前は平気で――

節子 シー、声が高いわよ。すんじまった

もの、くよくよしたって仕様がな

節子、ビールを取って、谷村のコップに注ぐ。

谷村 俺は、東海物産社長の第三男だ。こ

んな不祥時が世間に知れたら――

節子 だから、あれは知らぬ顔して運を天に任すより方法はないじゃないの。

ひき逃げは迷宮入りになる率が多いのよ。

谷村 そううまくいくかな。

節子 (微笑して煙草の煙を吐く)

もし、うまくいったとしても私はその場の完全な目撃者。

貴方の死命を制した事になる

わね、フフフ

谷村 ど、どういう意味だ。

節子、艶然として、谷村に身をすり

寄せていく。

節子 ねえ、早く奥さんと別れて。

21 谷村の家、その寝室(朝)

谷村、ベッドの中で、うなされてい

る。

妻の静江、心配そうに寝室に入ってくる。

うなされている谷村を揺りながら、

静江 貴方、どうなさったの。貴方。

谷村、ハッと眼を開く。

静江 大変なうなされ方よ。まあ、汗でび

っしより。

静江、タオルをとって、谷村の額の汗をふ

く。

22 同・ダイニングルーム

谷村、パジャマ姿のまま、椅子に坐り、思

いつめた表情でコーヒーをすすっている。

静江、部屋に入ってきて来て、谷村の前に新聞

を置く。

静江 はい、朝刊。

谷村、こわいもののように新聞を手にする

が、急にパッと横へ捨てる。

静江、そんな谷村を不思議そうに見て、

静江 変だわ貴方、近頃。どこか体の具合

が悪いんじゃないの。

谷村 うるさいな、黙っている。

静江 今日で会社は三日もお休みになるし

新聞も読もうとなさらない。

谷村 うるさい黙っているといったら。

谷村、立ち上り、部屋の外へ出て行く。

とりつく島もなく、悲しげな表情をする静

江。

23 山東荘、地下の女中部屋

小机の上に義江の写真が飾られ、牛乳瓶に

小さな花が生けてある。

その前に、魂を失くした人間のように空虚

な顔つきで、坐りこんでいる定雄。

部屋の隅の方では、銀造、耕次、朱美の三

人、元氣なく、茶をすすり合っている。

銀造、淋しげに微笑して、

銀造 内縁の夫がいなかったのかとも警察で聞

かれて弱ったよ。まさか逃亡者のお

前を警察へ出頭させるわけにもいか

ねえしな。

耕次 警察の方じゃ真面目に調べてるんで

すかね。ひき逃げしやがった車を。

銀造 そりゃ調べてるにゃ調べてるだろう

よ、商売だから。

朱美

(急に両手で顔を覆って泣きじゃくり)いくら私達が日陰の人間だからって(泣く)犬か猫みたいに、姉さんをひき逃げする事はないだろう。(泣く)

耕次

あの時兄貴、車を目撃しなかったのかよ。

定雄

(黙ったまま、ゆっくり煙草の煙を吐く)

耕次

姉さんの葬式以来、兄貴は啞になっちまったぜ。

定雄

煙草を灰皿に押しこむと、

定雄

俺は義江を轢き殺した野郎の見当はついてるんだ。

耕次

ええ?

定雄

あの日俺は、はっきりとこの眼で車を見た。この旅館に駐車していた車に違えねえ。

銀造

じゃ、犯人は、あの日、この泊り客か。どうして、手前、それを今まで――

定雄

俺にや俺の考えがあったからよ。

耕次

(立ち上る)

定雄

(キツとした顔で)何処へ行くんだ手前。

耕次

きまつてるじゃねえか、警察だよ。俺も犯人の目星はついたぜ。



定雄

馬鹿野郎。警察にたれこむ位なら、馬鹿でも出来らあ。それ位で、俺のこの胸がおさまると思ってるやがんのか。

耕次

じゃ、兄貴、一体、どうしようてんだ。

定雄

野郎の居所も俺はつきとめた。あの野郎に俺と同じ思いを味あわせてやるんだよ。

24 谷村の家近く(夜)

谷村の運転する車、止る。

訝えない表情で車より降りる谷村。

25 谷村の家 玄関上り框

玄関の戸が開いて、谷村入って来る。靴をぬぐ。

谷村 静江、静江。

谷村、静江の姿を探して台所の方へ行き、再び、居間に戻って来る。ふと、前を見てギョツとする。サングラスをかけた定雄がソファに坐り、煙草をくゆらしている。

谷村 だ、誰だ、貴様!

定雄 お見忘れかね、旦那。

定雄、サングラスをとる。

定雄 そら、伊豆の山東荘さ。旦那の前で面白い実演を御覧に入れたじゃないか。

谷村 (気がつき)な、何の用でここへ来た。

定雄 旦那は、ひどいお人だぜ。犬のさかりを見たからって、何もその犬の女房を車でひき殺す事はねえだろ。

谷村 (さっと顔面蒼白)そ、それじゃ、あれは――

定雄 俺の恋女房だ。俺の宝物だったんでいっ。

谷村 (慄える)

定雄 調べてみりゃ、旦那は東海物産社長の息子だ。示談ですませるとすりゃ一千万が二千万でも吐

定 谷 定 谷
雄 村 雄 村

き出しやがるだろう。だが、金持にとっちゃそんな金は屁でもねえ。俺の腹の虫が収まらねえんだよ。
じゃ、ど、どうするっていうんだ。
お前さんの女房を殺す。
えっ！

何をうろたえてやがるんだ。それで

おあいこじゃねえか。俺は社会のゴミ箱にわいたウジ虫だが、女房にや死ぬ程惚れていたんだ。え、わかるかい、俺の氣持が。

定 谷
雄 村

それじゃお前はもう、静江を——俺達の隠れ屋に仲間の連中が連れこんだよ。旦那が大怪我をしたと、だまくらかしてな。

定 谷
雄 村

(ひきつった表情)

警察へたれこんでもいいぜ。すると旦那は俺に女房を殺らされた上、轢き逃げの一件でブタ箱行きだ。ハハハ、泣き面に蜂とは、この事だぜ。

定 谷
雄 村

俺はひき逃げするような卑怯者じゃねえ。逃げ隠れはしねえよ。居場所は山東荘だ。この取引に不服があるなら、何時でも警察に相談してやって来な。

定 雄

悠々と玄関の方へ歩き出す。
邪魔したな。

定雄、戸を開けて出て行く。

谷村、フラフラ電話の所へ行く。ダイヤルを廻す手が慄える。

谷村 もしもし、ああ、節子か。大変なんだ、静江が、静江が——

26 節子のアパート

ネグリジェ姿の節子、寝はらばって受話器を耳にしている。

節子 (電話)へえ、あんな事を商売にしている男なのに、なかなか骨があるじゃないの。こっちの女を殺して、

ひき逃げと相殺しようとはね。だめよ、警察なんか知らせりゃ。とにかく、私のアパートへすぐにいらっして。よく相談しましうよ、ね。

節子、電話を切ると、煙草を口にし、火をつける。ふーと煙を吐く。ふと口元に微笑が浮かぶ。

27 山東荘 地下の女中部屋

定雄、入って来る。義江の写真が飾ってある小机の前に坐る。

定雄 (写真に向かって)義江、お前の仇

は討ってやるからな。これから、谷村の女房を——いや、待てよ、ただ殺すだけじゃ面白くねえ。お前の生前の苦勞をあんな女房にも味あわせてやる。

ドアが開いて、銀造がおろおろして入って

来る。

銀造 何だ、定雄、帰ってたのか。

定雄 女をどうしたい、親父さん。

銀造 お前のいう通り、地下の倉庫へ監禁したが、一体、お前、どうする気なんだ。

定雄 (笑って立上る)あんな女は義江への生贄さ。

銀造 生贄？

28 地下倉庫

鉄柱を背にし、後手に縛り上げられている長襦袢姿の静江。

近くの椅子に坐って憎々しげに静江の顔を見、煙草をふかせている朱美。

耕次が、その辺でキョロキョロ何か探している。

朱美 何をしてんだよ、耕次。

耕次 毛虫が、どこかにいねえかと思ってよ。この女の鼻のてっぺんにくっつけてやろうと思うんだ。

朱美 変な趣味だね、全く。倉庫に毛虫がいる筈はないじゃないか。

耕次 それもそうだな。こりゃネズミの糞だ。

耕次、手をはたいて、次に緊縛されている静江に近づき。

耕次 へへ、よっ、一寸おっぱいでも触らしゃがれ。

耕次、静江の長襦袢の襟をはだけさせ、手を押し込もうとする。

静江 な、何するんです。やめて！

耕次 何をいいやがる。手前の亭主が、やらかした事にくらべりゃ、こんなもの。

静江 (狂ったように悶えて耕次の腕に噛みつく)

耕次 あいたっ——いてえっ——

笑って見ていた朱美も、ひきつっている耕次の顔を見ると、あわてて椅子から立ち上り、手を貸して耕次の手を静江の口から引き離す。顔を歪め、腕を押さえて、その場に腰をおとす耕次。

朱美 何するんだよ、この阿女っ。

朱美、静江の頬を二発三発、平手打する。

静江、口惜しげに唇を噛み、朱美を睨む。

朱美 何よっ、その顔。

扉が開いて、定雄が入って来る。

耕次 兄貴、この女、顔に似合わず、ジャ

ジャ馬だぜ。見てくれ、こんなに噛みつきやがって。

定雄、薄笑いして、静江に近づく。ふと、

静江の足元に花のように落下している静江の豪華な和服と帯に眼をやると、それを拾い上げ。

定雄 義江にも、せめて、一度ぐらい、こういう着物を着せてやりたかった。

静江

(精一杯の反抗を顔に表わして) 貴方達は、一体、一体、私をどうしようっていうの。

定雄

お前さんの亭主には、ちゃんとしてわってあるんだ。亭主のやらかした事の埋め合わせをつけてもらうぜ。

静江

主人が一体何をしたというのです。

定雄

俺の女房を殺したんだ。

静江

えっ——うそっ、うそです。

定雄

うそでこんな事が出来ると思っているのかい。

静江

(定雄の鋭い語氣に慄える)

定雄

(ニヤリとして) どうせお前さんは俺達に殺されるんだ。その前に一つ社会勉強させてやるぜ。義江は好色な連中の、見世物になって渡世してきた。女がこうした見世物になるのは、どんなに辛えかって事を教えてやる。

静江

(慄然とする)

定雄

今日は俺達が客だ。ハハハ、(耕次達の方を向いて) おい、この奥さんを丸裸にしちゃいな。

耕次

おっと待ってました。畜生。さっきの仕返しだ。

耕次、朱美と眼で合図し合い、二人で静江に近づく。静江、逆上して必死に悶える。

耕次と朱美、静江の縄を解くと、長襦袢を

剥ぎ取りにかかる。

静江 嫌っ、お願い、勘忍してっ。

静江、その場に身をかがめて、必死に抵抗する。

耕次 よっ脱ぐんだ。ガタガタすんねえ。

朱美 早くおしよ。そら。

耕次と朱美、静江から遂に長襦袢を剥ぎとる。両乳房を押さえて泣きじゃくる静江。

湯文字の紐に耕次の手がかかると静江、必死にそれを手で払いのける。

耕次 くそっ、おい、朱美、も一度、縄をとれ。

朱美 あいよ。

耕次 そら、手をうしろへ廻わすんだ。

朱美 強情な女だね、全く。

耕次と朱美、二人がかりで静江の両手をうしろへねじ曲げると、ひしひし縄をかけていく。

黒髪を懷かせて屈辱にすすり泣く静江。

そんな光景を定雄、煙草をくゆらしながら片頬を歪めて凝視している。

29 節子のアパート

ベッドの中に腹這いになり、煙草を吸っている谷村。眼は充血し、疲労と焦躁が顔面一杯に現われている。三面鏡の前から立ち上ったネグリジェ姿の節子、ベッドの中へ入って来る。

節子 ね、そんなに考えこむ事ないじゃな

谷村 節子
谷村 節子

(苦しい表情)
それとも、もう殺されちゃってるかな。
(煙草を灰皿にねじこむ)



節子 ねえ、文夫さん。

節子、谷村の体に頼りして、

節子 あなたの奥さんが、あの男に殺

されたとしたら、あのひき逃げ
は相殺されるわけなんですよ。

谷村 節子

その方が、すっきりするじゃない。
騒ぎ立てて奥さんを救い出
しても、ああいう男に汚された
奥さんと正直一緒に暮せると思
う。残酷なようだけど私は――

谷村 節子

文夫さん、お願い、しっかり私
を抱いて。嫌、嫌、そんなこわ
い顔しちゃ。

谷村、自棄になったように節子を抱き
しめる。

30 山東荘 地下の通路

配電盤などがある狭い通路を定雄、食
パン、牛乳びんなどを持って歩いて行く。

31 同・地下倉庫

扉が開き、定雄、入って来る。

定雄 奥さんの朝飯を持って来たぜ。

定雄、ふと前を見ると、湯文字一枚のまま
鉄柱に立縛りになっている静江の左右で、
耕次と朱美、何かクスクス笑っている。

定雄 どうしたんだよ。

耕次 だってよ兄貴、これに勝る拷問なし

だぜ。昨夜からこの奥さん、出した
いものを我慢なさってるんだ。

朱美 (口を押さえて笑いこけ) もう辛抱
が出来ないんだとさ。

定雄 (苦笑して) 仕方がねえや。連れて
行ってやんな。

耕次 (笑いながら) このままにしよう
ぜ、兄貴。どこまで持ちこたえられ
るか、こりゃ面白えや。

静江、苦しげにあえぎながら、

静江 後、後生です。この縄をといてっ。

耕次 駄目だよ。うんと吠面をかくがいい
や。

耕次と朱美、顔を見合せて大笑い。

苦しげに首を振り、齒を噛み合す静江。
扉がそっと開き銀造がおど顔を出す。

銀造 定雄、おめえに面会人だぜ。

定雄 俺に――

32 同・旅館の廊下

銀造が部屋の話声に聞き耳を立てている。

33 同旅館の一室

節子と定雄が卓を挟んで対峙している。

定雄 そんな事、お前さんに指図される事
はねえよ。

節子 そりゃそうよ。貴方の最初の方針通
り、事をすすめてくれればいいんで
すからね。私から念をおしておきた
い事は彼の女房と交換にあの事件の

事は、きっぱり忘れて頂きたいって事。

定雄 (皮肉な微笑)

節子 これで両方、恨みっこなしよ。

定雄 お前さんは奴の妾だな。奴の女房が

姿を消しや都合がいいってわけだ。

節子 そんな事どうだっていいじゃない。

節子、ハンドバッグから十万円、出して卓の上に置く。

節子 女の死体を始末するのに色々と手数料

がかかるでしょう。十万円あるわ。

定雄 成程なあ、世の中には人の悪事を利

用してのし上ろうっていう恐い奴もいるもんだ。

定雄、せせら笑って、煙草に火をつける。

節子 じゃ、私、これで帰るわ。(立ち上

りかける)

定雄 おっと、この銭は持って帰んな。

定雄、卓の上の金を節子の足もとへ投げつける。

定雄 手前は俺達より最低の人間だ。俺の

方からほどこしてやるよ。

節子

定雄 心配すんな。お前に念を押されなく

ても、あいつの女房は、こっちで始末する。

定雄、立ち上り、節子を突きつけるようにして外へ出て行く。

34 同・地下の女中部屋

定雄、小机の抽出しからノートを取り出し

て、その表紙に「静江の調教日誌」と書き

こむ。部屋の隅で落着きなく、煙草を吸っていた銀造。

銀造 話は大体、聞いたよ。どいつも、こ

いつも狂っていやがる。一体、これからどうする気なんだよ。まさか、

おめえ、あの人妻を――。

定雄 ありや、俺の女房ひき逃げの代償と

して、こっちが譲り受けたんだ。生かすも殺すも、こっちの自由さ。だ

が俺はあの女をこの道のスターに仕上げてやるつもりだ。

定雄、*「静江の調教日誌」*と書いたノートを銀造の前にポンと投げる。

銀造、ノートに眼を向ける。

銀造 おめえ、正気でいつてるのか。相手

は、おめえ、何の苦勞も知らねえ令夫人なんだぜ。

定雄 ああ、そのブルジョワ夫人を俺達の

レベルにまで引きずり落してやろうってんだ。面白えじゃねえか。

銀造 気狂い沙汰だ。

女ってのは生れ育ちがどうであれ、一皮むきゃ一匹の雌猫さ。仕込み次第で何とでもなる。俺がそれを証明してやるよ。



ドアが開いて、耕次が顔をのぞかせ、キャッキヤッと笑う。

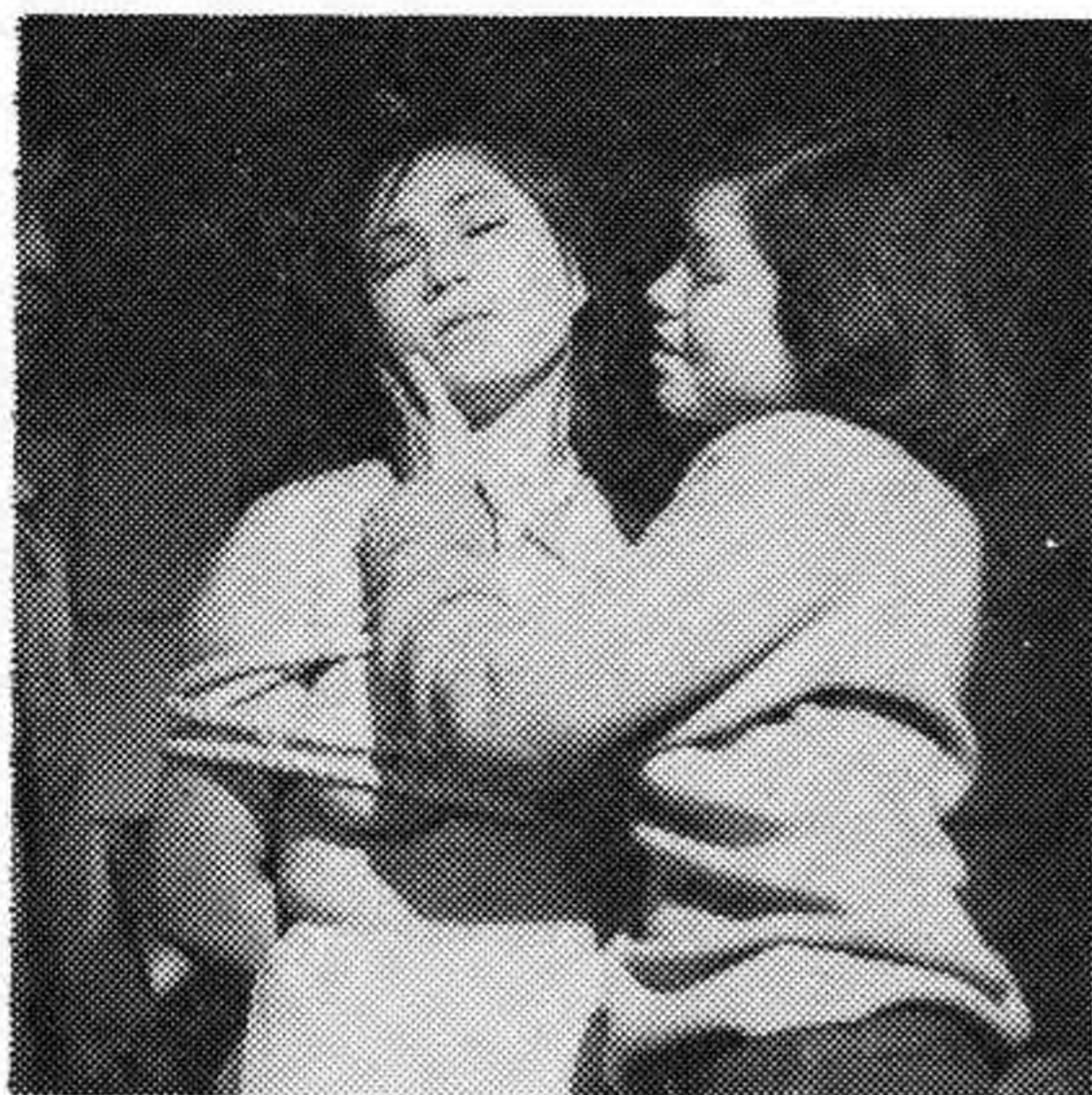
耕次 兄貴、そら。

耕次、手を出し、小さく丸めた布を定雄に示す。静江のしていた湯文字だ。

耕次 (笑いながら) 我慢出来ず、とうとうやらかしゃがった。こうなりや、

金持の奥様もまるで犬か猫だね。

定雄、銀造の顔を見て、口を歪める。



定雄 令夫人のメッキがそろそろ剥げ出してきたようだ。な、親父さん。ハハハ。

耕次、座敷へ上り、机の抽出しから西洋剃刀を取り出し、出て行こうとする。

定雄 何をする気だ。

耕次 (ニヤニヤして) 粗相をした折檻にこいつで一本残らず剃り上げてやるんだよ。へへへ、見に来りやどうだ兄貴。

定雄 馬鹿野郎。調子に乗って勝手な事をするんじゃない。あの奥様は商売物にするんだ。

耕次 ええ？ 商売もの？

定雄、立ち上ってタンスの抽出しから、キラキラ光る舞台用のビキニパンティを取り出す。

定雄 お座敷ショーで、義江がはいていたものだ。こいつを奥さんに、はかしてやんな。

定雄の投げた舞台用のパンティが、ぽかんとしている耕次の頭の上に乗っかる。

35 山東荘、玄関前

銀造、浮かぬ顔して、玄関前を簀ではいている。そこへ、愛犬を連れた菊島が朝の散歩から戻って来る。

銀造 あ、親分、お早ようございます。

菊島 なんだ親父さん。そんな事は若いもんにはせりゃいいじゃないか。

銀造 へい。少しは運動になるもんですから。

菊島 ところで親父さん、来月十日、予定通り横浜から大事な客人が来るんだが、義江の代りは見つかったかい。

銀造 (元氣なく) へい。義江が事故にあった早々に、こんな事いうのは、何だが、朱美一人じゃ商売にならねえよ。やっぱり来月には、名古屋の吉村の助っ人を――。

銀造 (思い切ったよう首をあげ) 待って下さいよ、親分。

菊島 ー。

銀造 いい玉が手に入ったんです、つい最近なんです。

菊島 ほう。

銀造 顔もいいし、体もきれいだ。その上まるで素人みてえに初心な所があるんですよ。お客人の氣に入る事は受け合いだ、親分の顔を潰すような事は致しやしません。

菊島 (ニヤリとして) そうかい。そう聞きゃ俺も安心だ。じゃ、任せたぜ。菊島、犬をひいて玄関へ入って行く。

37 同・地下倉庫
鉄柱を背にして立ち、縛りつけられている静江、腰にはキラキラ光る、ビキニパンティをつけている。

その周囲を椅子に坐って、取囲んでいる定雄、耕次、朱美。
椅子に跨がるような恰好で坐った定雄、鼻毛を抜きながら。

定雄 よっ、わかったのかい。どうなんだよっ。

静江 嫌っ嫌、嫌っ。(体を慄かせ鳴咽する)

定雄 おめえを生かすも殺すも、こっちの自由なんだぜ。殺された方がいいっ

てのか。

静江 (泣きじゃくる)

耕次 畜生、泣きやいいと思ってやがる。

その手にや乗らねえぞ。

耕次、椅子から立ち上って静江に近づくとポケットからジャックナイフを取り出しナイフの背で静江の乳房の上を軽くたたく。

耕次 このきれいな肌を、ズタズタに切り刻んでやろうか。それとも――。

耕次、身をかがめて、ナイフで、ビキニの上をたたき。

耕次 残らず剃り上げて、羞しい思いにさせてやろうか。え、どうなんだよ。

定雄 おい、耕次。

耕次 ええ。

定雄 口でガタガタいったって、この奥様にゃピンと、来ねえんだよ。俺達の舞台がどんなものか、朱美と演じて御覧に入れな。

耕次 仕様がねえな。

耕次、立ち上ると、静江の鼻先を指ではじき。

耕次 奥様の教育のためだ。一肌脱いでやるよ――朱美、来いよ。

耕次と朱美、静江の前に毛布を敷くと口笛を吹きながら、服を脱ぎ始める。

静江、ハッとして、顔をそむける。

定雄、静江の横に立って、横へ伏せようと

する静江の顎に手をかけ、正面に向ける。

定雄 見なきや駄目だよ。そら。

裸になり、毛布の上で演じ合っている耕次と朱美。

恐怖に顔を歪め、静江、固く眼を閉ざす。

定雄 眼を開け、はっきり見るんだ。

静江 狂ったように首を振る。

定雄 (大声で) 見ろっ。

静江、はじかれたよう眼を開き、わなわな



慄えながら、足元で抱擁し合う耕次と朱美を見る。

耕次と朱美。抱擁し合いながら、ニヤリと静江の方を見上げる。

朱美 フン、何もそっちが照れる事はないだろう。

耕次 人間、誰でもやってる事だぜ。ハハハ。

37 同・地下の女中部屋

八ミリ映画が映写されている。

あぐらを組み、センベイなど噛みながら画面に眼を向けている定雄、耕次、朱美、銀造、そうした四人の中心に置かれた椅子には、静江が麻縄で固定され猿轡された顔を伏せている。

朱美 (顔をそむけている静江に気づいて大腿をつねる) ちよいと、また、顔をそらして。見なきや駄目じゃないの

耕次 (立ち上って椅子のうしろに立ち、静江の頬を両手ではさんで正面に向ける) さ、よく見て、しっかり勉強するんだよ。

銀造 (焼酎を飲みながら画面を見て) 山の中で映画をとると耕次が狼に見えて仕様がねえ。(笑う)

定雄、朱美、笑い出す。耕次、悪かったね全く。と、ふくれる。

銀造

(画面を指さして) そら、朱美、あ
あいう所が、おめえいけねえんだよ
もっという顔を見せなきゃ。何だ、
笑ってるじゃねえか。

朱美 だって、あの時、耕次がくすぐった
んだもの。

静江、悲しげな視線を画面に注いでいたが
縄に締め上げられている胸のあたりが次第
に息づき始める。
それを横から凝視していた定雄、椅子の足
に縛りつけられている静江の大腿あたりを
指で淫靡にさすり始める。
画面を見つめている静江の瞳がねっとり、
うるみ出す。

38 同・地下道

静江、猿轡をかまされ、緊縛された裸身を
耕次と朱美に追いたてられるようにして歩
いて来る。

39 同・地下倉庫

扉が開き、耕次と朱美に引き立てられた静
江、入って来る。

静江、ギョツとして、立ちすくむ。

天井から無気味に太いロープが数本、垂れ
下がり、その下に向う鉢巻し、半裸になっ
ている定雄と銀造が焼酎をくみ合いながら
待機しているのだ。

耕次 何してるんだよ。とっとと歩かねえ
か。

耕次と朱美、静江を押し立てて、ロープの
下まで連れていくと、静江を縛った縄尻に
ロープをつなぎ止める。

恐怖に全身を硬化させている静江。

定雄、立ち上って静江の猿轡を外すと。

定雄 さて、今日から調教だ。来月十日の

舞台に立てるよう徹底的に体を鍛え
てやるからな。

銀造 その舞台にや、俺達一家の生活がか

かっているんだよ。お前さんも命が
助かったのだから、そろそろやる気
になってくれなきゃ困るぜ。

静江 (わなわな唇を慄わせ) こわい、こ
わいわ。

定雄 (耕次に) 脱がしな。

耕次 へい。

耕次、体をかがめて、ビキニパンティのゴ
ムに手をかける。

羞恥に唇を噛みしめ、顔を伏せる静江。

耕次、それを静江の足元から外しとる。

定雄 さ、親父、始めようか。

少し、離れた所でバナナを噛んでいた定雄
新しい一本を手で弄びながら、静江の方へ
進み寄る。

スリッパ姿の朱美が、うしろから両手を廻
し、静江の両乳房を押さえる。

静江のけたたましい悲鳴。

40 同・旅館の庭(夜)

雨が降って――

41 同・地下の女中部屋

一糸まとわぬ姿をしごきで緊縛された静江
が、たった一人、立膝をして、部屋の隅に
座っている。精も根も尽き果てたように、
がっくり首を落している静江。

ドアの開く音。

静江、ハツとして一層、身をちぢませる。
ステテコ姿の定雄が、肩にタオルを巻いて
入って来る。

定雄、小机の前に行くと、義江の写真に向
って、

定雄 義江、一寸の間、眼をつむってくれ
よな。ニューフェイスの調教中なん
だから。

定雄、笑って、写真を裏返しにし、押入れ
から布団をだして、畳の上へ乱暴に敷き始
める。

静江、チラとその方を見ると、肩を慄わせ
てすすり泣く。

定雄、事務的な手つきで、鏡台を夜具の枕
元にまで引きずって来る。

どっこいしょ、と夜具の上に座った定雄、
手元の一升瓶を引き寄せ、茶碗に注ぎ一飲
みすると。

定雄 何時までそんな所にいるんだ。こっ
ちへ来ねえか。

静江 (身をすくませて、すすり上げてい



る)

定雄 世話のやける女だな。

定雄、舌打ちして立ち上り、静江の傍へ行く。縛っているしごきを解き、抱き上げる。

布団の上へ投げ出された静江、両手で顔を覆う。その手を強引に払いのけた定雄。

定雄 馬鹿野郎、顔を隠す奴があるけえ。

その辺で客が見てると思って、俺に抱かれるんだ。何もかも客の眼へ丸出しにするんだよ。

定雄、静江の肩に手をかけて引き起すと、背後からかかえるようにして、静江を鏡の方へ向けさせる。

鏡に写った自分の姿に狼狽して、思わず頬を背後の定雄の胸に押しつけてしまった静江に、

定雄

定雄

(頬ずりしながら) さ、勇気を出して自分の姿を眺めて見な。客の眼に自分が、どれ位悩ましく写るか。ハハハ、お互によく、研究して、みようじゃねえか。そら、見ろよ。

静江、次第に上気して、ねっとりした瞳になり、定雄に云われる通りのポーズを夢うつつにとり始める。

定雄

(鏡の中を見ながら) きれいな体だねえ。こりゃ、客が喜ぶぜ。

静江、自制し切れなくなったよう体を弓なりにして定雄の唇を求める。

定雄、静江を力一杯抱きしめ、夜具の上に倒れかかる。抱擁し合う二つの肉体――

(それが次のシーンの座敷ショーで演ずる実演にそのまますりかわる)

42 客 間

うねり舞う白い肌と黒い肌。静江と定雄の熱演だ。見物人達の煙草をスパスパ吸っている口、ピーナツをほうりこんでいる口。鳥の腿肉を噛んでいる口。それらの口がクローズアップされて。

床の間を背に黒眼 をかけた客人の岩田が

手に持ったコップを宙に浮かせるようにして見物している。菊島が近づいて、岩田のコップにビールを注ぎ、ショーの方をちらと見て、如何ですかという風にささやく。満足げにうなずく岩田。

43 同・旅館、洗面所

顔を洗う定雄のうしろに銀造、気弱な表情で立っている。

定雄

そりゃ駄目だよ、親父さん。見せ物に出すが、客と寝かすような真似はさせたくはねえ。

銀造

だがよ、相手は横浜の岩田親分で、静江を一眼見て気に入ったんだ。こんな事は滅多にねえ事なんだが、菊島親分が中に入ってるだけに――。

定雄

(手拭で顔を拭きながら) 相手が誰であれ、俺は不承知だ。俺は女房を殺された復讐で、仇の女房を今日の実演に立てたんだからな。今日で俺の復讐は終わったよ。

銀造

おめえ、菊島親分のいいつけにそむくと、俺達、ここにいるわけにやいかなくなるんだぞ。

定雄

出て行くさ。もうここには飽き飽きしたよ。

銀造

(おろおろして) 出て行くといったっておめえ――。

定雄 フィルムと写真の手持がかなりある

からな。あいつを土地土地の筋に売って歩きや当分、食っていけるさ。

気の抜けたような顔の銀造の肩をたたいて定雄、笑う。

定雄 親父さんも年をとったな。ま、これからの事は、息子の俺に任しておきな。

定雄、鼻唄を唄って出て行く。

44 同・地下の女中部屋

朱美や耕次達と一緒に浴衣を着、洗い髪した静江が食事している。

朱美と耕次、賑やかにしゃべり合う。

耕次 菊島の親分さん、今日は随分と気嫌が良かったぜ。実演が余程、気に入ったらしいな。

朱美 これで当分、風当たりが、良くなるわね。となりや、あたい達、お静さんに大いに感謝しなくちゃ。

静江、気弱な微笑して、箸を口に運んでい

る。ドアが少し開いて、定雄が首を出す。

定雄 静江、一寸。

45 同・地下倉庫

静江 今になってそんな。私、もう陽の当る所へ戻れる体じゃないわ。

定雄 俺の復讐は今日で終ったんだ。お前がこれ以上ここにいと俺は困るん



だ。——お前に俺は惚れちまいそうなんだよ。

ええ？

定雄 今夜、やくざの親分衆がお前を抱かせるといい出した。俺はカッとして断わったよ。へへ、妬ける所をみると、俺はやっぱりお前に惚れ出したのかな。

静江

——、もうここに俺達はいられねえ、流浪の旅としゃれこむわけさ。だからお前にはもう用はねえんだよ。帰りたい所へ帰りな。

静江

もう私は只の女じゃないのよ。一体どこへ帰れっていうのよ。

静江、定雄に抱きついて泣き出す。

定雄 悪かったな。お前を奈落の底にひきずりこんじまってよ。だが、今日でお前ともお別れだ。立ち直れるかどうか、もう一度娑婆へ出て、自分を試してみな。

静江 お願い、私も連れてって。

定雄 いやいよ地獄の底へ落ちるだけさ。ここで別れた方がいい。

静江 嫌っ、嫌。

46 ガード下夜

電車が轟音を立てて走って行く。

ガード下を悄然とした表情で歩いている静江。

47 谷村の家 玄関先

静かに戸が開いて、静江、そっと入ってくる。

48 同・寝室

足音を忍ばせて、やって来た静江、カーテンをそっと開いて、中をのぞく。ベッドの中で谷村が節子を抱擁している。

静江、冷淡な表情でそれを見ていたが、カーテンをかきわけて入って行く。

谷村、ふと首を上げて、静江に気づき、あっと上体を起す。

谷村 し、静江っ。

節子 (悲鳴を上げて谷村にしがみつく)

谷村 静江、お前、お前は、い、生きていたのか。

静江 (微笑して) 幽霊じゃないわ。

谷村と節子、しっかりと抱き合ったまま慄えている。

静江 死ねなかったのよ。死ぬより辛い思いをしてきたわ。

谷村 (慄えながら) 俺は、俺は、明日にでもお前の搜索願いを出そうと——

一体、一カ月もお前はどこに——。

静江 あら、お二人とも御存知じゃなかったの。

節子、スリッパ姿のまま、ベッドより飛び降り、次の間へ逃げ出そうとする。

静江、傍においてあったゴルフ道具のケースからクラブを抜き取ると、節子の腰をぶつ。

横転する節子。

静江、以前とはガラリと変った葉すっぱな口調で、這いつくばっている節子に。

静江 私が生きて帰ったからって、何もそう、うろたえる事は、ないじゃないの。

節子 (慄えながら) 私、私は何も——。

静江 心配しなくたっていいわよ。私はもう素人の女房には、なれない体になってるんだ。あんた達、仲良く暮し

ていきやいいんだよ。

谷村 (人間のかわった静江に啞然)

静江 (節子に) ちよいと、今、のぞかせてもらったけど、あんた、色で男を

ものにする女にしちゃ、カラミがまずいよ。もっとケツを振るんだよ。

静江、手にしたクラブで、節子の尻をぴしりと打つ。

節子、悲鳴をあげる。

静江 男を悦ばすにや、この腰だよ。わかんないのかい。

静江、節子の腰のあたりを更に一撃、二撃して、クラブを投げ出すと、外へ飛び出して行く。

虚脱したように口をあけている谷村。

49 田舎の白い一本道

山東莊を引揚げた四人、(銀造、定雄、朱美、耕次)のんびりした足どりで歩いてくる。

ふと、四人、前方を見て、立ち止る。

朱美 お静さんじゃない、ありや。

静江、かけて来る。

定雄 一体、どうしたんだ。

静江 ね、お願い、やっぱり私も連れて行って、

定雄 でも、お前。

耕次 看板スターが帰って来てくれりや、大助かりだ。これで当分、飯にあり

つけらあ。

静江 あんた達のいる世界の方が私の性に合うのよ。ね、私も仲間に入れておくれよ。

銀造 (嬉々として) な、定雄、皆で関西へ行こう。飛田の方じゃ俺の顔で商売のきく所があるんだ。

定雄、

じつと静江と視線を合わし。

定雄 よし、行こう。

50 ある座敷にて

真暗闇の中。抱擁し合う、静江と定雄だけに、スポットが当たって——。

柔軟にくねり舞うスポットの中の二つの肉塊。

とぼけた感じの関西弁(観客の)が、押し殺したような響きで流れて来る。

関西弁A 見い。ええ体しとるなあ。

関西弁B わい、もう辛抱たまらんわ。

関西弁C 泣かしよるぜ、全く。

スポットの中で、抱擁し合う静江と定雄。

くるりと一廻転し、上位になる静江。

ぐっと、そり身になり、首を持ち上げ、喜悦に歪む静江の表情——ストップモーションとなって。



マゾ女性に憧憬 園田 一

僕は今年の春、大学を卒業して目下、ある生産会社に勤務している青年ですが、奇クを始めて手にしたのは入試のために上京、大学で合格の発表のあった日、神田の一書店にてでした。この奇妙な雑誌を手にした時、僕はひどいショックを受け、買い求めたその雑誌を思わず抱きしめていました。

そこには僕が長い間、ほのかに夢見ていたメルヘンが見事に具象化されていたのです。僕がイメージの中に、そういった女性を描いていたのは中学の二年頃からで、想像の女性を裸にし翻弄している自分をうとましく思うよりも、その甘美で刺戟的なムードに酔っていたのです。

高校二年頃、異常愛というものを知り百科事典をひっきりかえして、サド、マゾ、フェチ、ナルシ

ス、ホモ、レズなどの項目を読んでは、わけのわからない感心をしたり、より詳しく調べたいと思つて図書館へ出かけてゆき、医学精神学的専門書を読んでは、自分自身の性向に当てはめてみたりしたものです。その結果、自分には多分にサド気とフェチ気があるように自覚したのもその頃でした。

やがて思春期を経て奇クのとういう恰好のテキストを得た僕は、その妖しい魅力の虜となり、文字として書かれた知識から、豊かな幻想を描くようになり、何か充実した人生というものを掴むことが出来たような気がしました。

現在、僕には可愛いガールフレンドがいます。彼女とデートする時は僕も真面目な人間として、彼女に信じて貰えるような態度をとっておりますが、それでも時々

彼女をいじめる空想に耽ることがあります。でも僕は彼女が憎くついじめるのではないのですから、彼女の肌に針を刺して血を出させたりするようなことは、よしそれが空想の中であつても、やりたいとは思いません。

僕はある意味では非常に寛大で只単に彼女を裸にして縛るだけでいいのです。彼女は僕を信じ愛してくれてくれるから恥しいけれども我慢してくれるという、そのいじらしさがたまらないのです。欲をいえば、彼女のお尻や内股を軽く打つと、彼女は許しを乞うて僕を見上げながら悶える。すると柔い肌に縄が喰い込んで非情に締めつけ彼女は解いてくれるように懇願しおびえた眼つきをする。そんないじらしい、彼女の姿に、僕は最高の美を感じ、いとしく思うのです。そんな彼女を見ると、僕は思わず抱きしめて「御免ね」と詫びることでしょう。

でも、もし彼女が「そんないやらしいことはやめて頂戴」と冷やかに拒否したならば、僕はそんなことは決してしないし、したくもありません。こんなプレイが異常なものを知りつつ、恥しさを抑えて僕に縛られるなら、僕は、彼女

をせいいっぱい愛せると思うのです。もしこういう女性をマゾと呼ぶのだったら、僕はマゾの女性に限りない憧憬の念を抱きたいと思っています。だが仮りに僕がそのことをいい出して、彼女に拒絶されたときのことを考えますと、僕は自分の心の中の欲望を申し出ること躊躇しております。

僕は血は好まないし、また愛情のないプレイも嫌いです。ですから僕は、いつも彼女が自分が想像している通りの理想的なマゾ女性であるというように夢みているのです。しかし現実の彼女は僕的心中の一向に知らないし、無邪気にデートを楽しんでいます。

奇クの読者の男性の多くは、マゾの女性に憧憬し、そういう素質のある女性や傾向のある女性に近づきたいと思っているのではないのでしょうか。自分でいうのもおかしいですが、僕は学校の成績もよかったですし、今の会社でも将来を嘱望されています。必ずやエリートコースを歩んでゆけるものと信じて日夜努力しております。しかしマゾ女性に対する憧憬だけは、前途有為の青年である僕にとってもどうすることも出来ないのです。



(第四十九回)

辻村 隆

編集長から連絡があつて、金原奈加子さんを撮ってみないかという嬉しい電話。早速、彼女の方へ電話した処、快諾を得たので、喜び勇んで行ったのはいいが、大失敗をやらかしてしまった。日頃愛用の一眼レフの方に、カラーフィルムが、装填されたままだったのだ、その日、余り使い馴れないミノルチーナという三五ミリ判の軽いカメラを持参した。金原さんも非常によく協力してくれて、三本許り撮ったが、その夜現像してみたら何と最初の四枚許り写って

るだけで、それもヌード。大ショックであつたが、原因を考えてみたら絞りを廻した時、ストロボ用のシンクロのX接点にしてあつたのが絞りと同時に動いてM接点になった結果である。暗いホテルの室内のこと、シンクロが同調しなければ、これはもうどうにも、仕様がな。自ら招いた失敗とはいへ、こんな不親切なカメラをつくったミノルタカメラに、当ること当ること。逸早く書くつもりであつた彼女のカメラ・ハントも肝心のフオートがなければ詮方なしで、改めて彼女の都合をきいて、もう一度撮り直しの上、発表する予定である。油断大敵の戒めである。

× × ×
かつて山原清子の懇談会にも出席されたことのある京都のS氏が徳永昭三氏を介して友好を求めてこられた。最近カメラに手を染められて、やっと愛人の方とのプレイを撮ったのはいいがDPE出来ないの頼まれたのである。ハーフサイズの二十枚撮りのフィルムであつたが、最初の経験とカメラ未熟とでアガっておられたのか、撮っているのは前半と後半で約十六、七枚。真中はどういふわけか消えてしまっている。それでもS

氏にとっては自作をものした喜びで、大いに感謝しておられた。これからドシンドシ撮りますと仰有つて張切っておられる。奇クファンの方は、何か私がベテランのようにならなう、遠慮されるのか敬遠されるのか、それともプレイ歴の浅さを卑下なさるのか、近頃新しい同好の方との交友がしばらく途絶えている。私も市井の一好き者に過ぎないのです。S的傾向の方なら大いに胸襟を開いて語り合いたいと思ひますから、どうぞ編集部へお便りなりご連絡なりして下さい。手紙は大抵回送してくれますし、都合によっては私の電話番号も知らせてくれます。お互いの秘密は守ります。

× × ×
新しい人をハントするのは、仲々容易でないが、過去の人なら連絡ある女性も多く、続篇を書きたい人もかなりいる。『優子の涙』の浅井優子さん。又『ケメ子早春譜』の佐々木真弓さん。久方振りに連絡のあつた、京都の魔子ちゃん。(私の場合、彼女をハントとして書いていないが、山本一章氏が発表済)『鬼六対談』で同行した左近麻里子さんなど、その気になれば多士済々である。執れ、こ

美人コンテストに想う

板橋 高志

毎月、奇クを購入し、大好きな団鬼六先生の「花と蛇」辻村隆先生の「SMカメラハント」を読む一方、何か新しい試みはないかと思ひながら愛読していますが五月号にすばらしい募集をしていることが目にとまりました。

それは美人モデルコンテストの募集です。それに読者に投票権があるのとこと二重の喜びです。すばらしい人が応募されんことを毎日夢見ています。

この企画を読み、考えたのですが、最近、辻村、山本両先生にハントされた美女達を対象にベストテンを作ってみました。

一位、三好留美(小生の好みにピッタリ)

二位、河村真理子(一目見てゾックと来ました)

三位、長井葉津子(新鮮!)

四位、左近麻里子(昨年九月号の開脚逆吊りのすばらしさ)

五位、金原奈加子(若さ+根性)

六位、佐々木真弓。七位、安井喜久子夫人。八位、須摩由美夫人。九位、浅井優子。十位、谷ナオミ。



.....<なにの跡?>.....

S M マンガ集 九美 淳

.....<ある夫婦>.....



これらの彼女達のその後を続篇として、書いてみたい気持ちしきりである。なお、未だに梨花悠紀子さんの消息を聞かれるが、正直いって私も知らない。結婚適齢期を過ぎているから、おそらく結婚したのではないかと思うが、伊吹真砂子さんにも、その後、梨花さんからは音沙汰ないそうである。鑑賞用女性だっただけに、いつ迄も記憶に残るひとである。

先日、徳永昭三氏が絵のモデルをしているという、素晴らしい若い娘を伴なって訪れてきた。趣旨を理解させるために、少しコレクションを、見せてやってくれという。よせばいいのに真に受けて、あれこれ開陳したら、くだんの女性すっかり、恐れをなしてしまった。散々口説いたが、どうもウンといわない。とどのつまり、顔を

見せなければいいということになったが、山本一章氏と違って、ハント用フォトには、あまり眼隠しなどは敬遠して使用しない私。これではどうも面白くない。美醜の面で、必要上顔を隠すのなら別だが、輝くようなN嬢だけに一入惜しい気がする。徳永氏になんとかしてくれよう依頼してあるが、まあ気長に口説くより、仕方あるまい。

以上ですが、如何でしょうか。なお、小生奇クを愛読し出してから日が浅いため、最近のハント美女を対象にしたわけです。また小生も多くの奇クファンと同様、この人達のカメラハント特集号が一刻も早く発刊されることを希望するしだいです。コンテスト発表の八月号が待ち遠しく、一日千秋の思いです。



— 感想文 —

S・Mエッセイ

加藤 真佐夫

「縛る悦び、縛られるたのしさ」
これは浅草ロック座の入口前にあった看板の文句である。そして後手に縛られた女の等身大の絵まである。てっきり私は、これは？と期待して入場券を買った。

期待したのである……四月十八日午後一時頃である。多分、あの日、あの看板につられてロック座へ入った人もいるだろう。

途中で入ったので、初め私はこれはもうS・Mシーンは終わったのかな？と思った。

この劇場は入れ替えでしたので（ストリップ劇場の入れ替えなどあまり聞いたことない）次の幕を

待った。が、やっぱりS・Mシーンはない。初めて私がストリップなる珍しい(?)ショーを見たのはこの浅草であつたし何度か足を運んで必死になって見ようとしたけど(何を見るかって？ わかっているくせに)ダンサー達は私の期待に一度も応じてくれないので、いつしか足も遠のいた。また私自身「いい年ぶっこいて、何がストリップ」という自意識も湧いてきたし、ほとんどこの二、三年この種のショーは、見なかった。それが、あの看板である。よく確かめずに入ってしまった私が悪いのか、だまされた向うが悪いのか……。

もう一度いう。私は期待して入ったのである。たとえ、それが、(ダンサー達が)お金もらって手前と割り切つて演じたショーであれ、私自身からいえば本物の縛られた女の姿を見たかつたのである。「どうせ浅草のヌードは脱がない」これはこの種のショーを研究？ してきた人の言葉である。私は、現在の私は、脱がなくともいいと思う。腸まで見せてしまつて何になる、後は何もないのだ。それはそれでよい。私自身、女性を縛った経験が皆無ではない。数年前、交際中の女性をやつと口説いて、何とか縄をかけたこともある。しかし、それは悲しい結末を招いた。だからこそ私は、ピンク映画であれ何であれ、S・Mシーンのありそうな時は吹っ飛んで行った。が、どれも私の期待した程のものではなかった。

あの日、私が、ショーを見ながら思ったことは、脱がなくともいい、S・Mシーンを見せてくれということと、見ていればやはり本物の裸身の女性であるから、ある連想を始めた。

ステージのダンサーに、花と蛇のヒロインを連想したのである。こう書くと「花と蛇」ファンの方

編集部だより

○団鬼六氏の映画シナリオ『肉の飼育』は花と蛇シリーズ映画の連作として、すでにロケ隊は群馬県に出発したと四月二十二日に連絡があった。この映画には辻村氏のカメラハント「真白き柔肌の甘き香り」(五月号)に出た谷ナオミが主演となって活躍している。すなわち谷ナオミが祝マリ(朱美)に責められるという趣向である。

五月下旬封切ということなので本誌が発売になる頃には劇場で見られることと思う。乞ご期待。

○安井喜久子夫人に対する夫婦プレイのアイデアを送付下さった方々には折返し同夫人の緊縛フォトをお送りしたが今回を以て一応アイデアの募集は中止する。

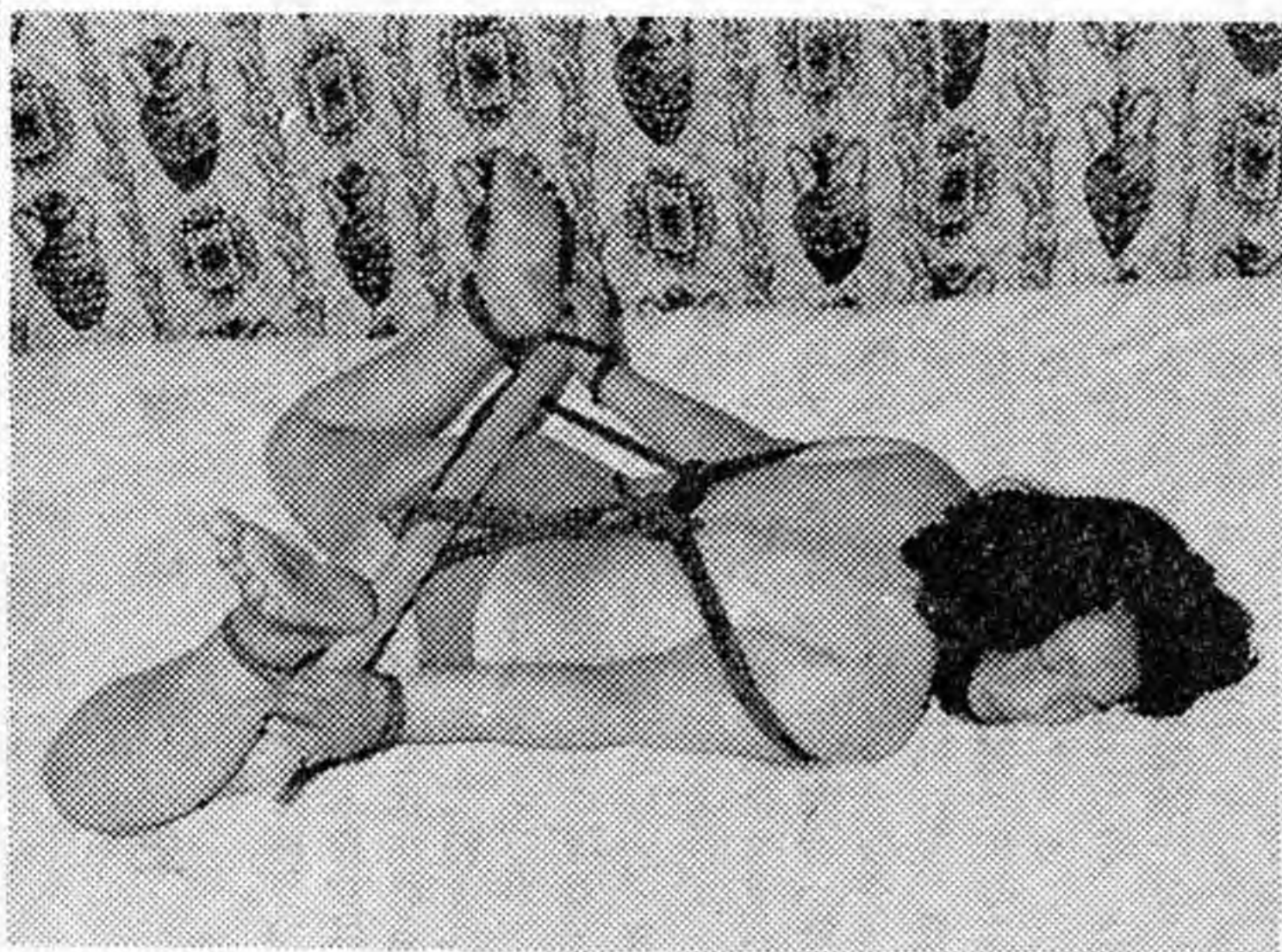
○八奇クサロンVの原稿は投稿者全員に対してフォト贈呈という規定改正もあってか、引続いて原稿が殺到の状態である。どうか奮ってご投稿あるようお願いする。

○嘗て本誌上に『ボクの責め方』なる一文で活躍された宝塚二三夫氏の遺稿並に多数の写真を頂戴した。いずれ整理の上、差支えない

ある・ポーズ 愛知葉子

真白きシートに投げ出されしわが姿、ヒトもし見なば何というならん。哀れ？ みじめ？ 無残？ されど、われ無言にて微笑せん、閉じし瞼の裏にて……。

ヒト驚きて問うならん、苦痛ならん……と。われ答えん、胸の裡にて。法悦なり……と。



から静子夫人や美津子、桂子とヌード・ダンスのごときを一緒にするなどお叱りを受けるかも知れない。とに角、私はグラマーなダンサーを見ては静子夫人を連想し、美人のダンス（は、あまりいなかっただが）を見ては、美津子、小夜子といったあの一大、悪徳小説

（団先生、ゴメンナサイ）の仮空のヒロインを連想したのである。あの豊かなバストは、あれは静子夫人か、ああ縄があったら……私は三百円の入場料は安いと思っ

たろう。

それにしても思うのは、現在は大分、S・Mに関して知識も広ま

り？ 男性諸氏の見目は柔かくなってきたと思うが、この種のショーの次にくるのは何であろうか？

自分がS・Mだからいうのではないが、単に成人男女が恋愛のプレイとして、合意の上で縛った、縛られたは、何ら法に触れはしないであろうし、この程度までなら人間的な軽度の異常さ、ですむであらう。

しかし、刺戟が刺戟を呼び、次第にエスカレートして行った場合それは、もはやS・Mといえるだろうか？ プレイといえるのだろうか？ 何の雑誌か忘れたが、ある有名人が外国（ラテン・アメリカ）に行つて白人女とグレートデンとの獣姦ショーを見せられ、その人はいたたまれなくなつてその場を出たが、土地の人？ は女の悲鳴を笑つて聞き、見ていたという。国民性の違いであろうか、私はその記事を読み背筋が寒くなつた。私は、自分が痛い目に逢うのは嫌だから他人に痛い目を逢わせるのも嫌う。したがって、私はS・Mファンといっても「縛り」以外はムチ打ちも嫌う。自分では変だが、きわめて常識的なS・Mファンと思つてゐる。

ものは誌上を飾りたいと思う。○毎月一回の休みもなく精力的な作業を続ける辻村隆が皆様すでにご存知の魔子を、とっておきの美女としてカメラ・ハントするといふ連絡を受けた。題して『魔子の呻く夜』これは大いに期待していただけることと思う。

○懸賞応募作品は勿論のこと、読者原稿にしても、採用の決定したものは出来るだけ早く連絡したいと考へて努力している。また掲載したものの稿料賞金も速かに送金するよう取計っている。但し原稿の返戻は原則として応じていないのでこの点ご諒解いただきたい。

○先月号で開設の予告をした弓削達人先生の八性問題相談室は愈々次号八月号より誌上掲載をすることにしてゐる。今月号でも開設の欄を設けているが、六月号の203頁をご参照の上なんなりとご遠慮なく相談を寄せられたいと思う。○五月号のこの欄で言及した探訪記者募集に応じて来られた方に応募モデルの写真撮影とルポを書いて貰つてゐる。よいものが届いたら誌上でごらんにいれたい。○いつものことながら編集参考資料として提供頂けるものがあれば詳細につきご一報あれば幸い。

映画通信

最近の縛り演劇、映画から

東山映史

最近の映画、演劇、テレビなどに縛り拷問などサジステイックな場面が多い。東京のアンガラ劇場のスター達も関西に流れてきて、ストリップ劇場などで強烈なシーンを披露し観客を喜ばせている。

トップバッターは忍妙子の「地獄絵ショー」だ。信州の山中で起った残酷事件という。まず洗髪妖艶な忍妙子が「仮名屋小梅」を踊る。そして場面がかわれば淋しい山中の墓場。雨傘をもった妙子がでてくると、セムシの醜い墓守の男が、彼女に「ヒヒヒ……」と奇妙な声を発して挑みかかる。

「いや、いや」と、彼女は逃げ廻るが、つかまり帯をとかれ、着物を脱がされ、長襦袢一枚に剥がれる。そして腰紐もほどかれ豊満な乳房や太股があらわれる。舞台のはしへ逃げると片足をもって引きずり戻す。そして、ついに失心する。腰にぶら下げた袋から蛇をつかみ出し、彼女の乳房の上を這わす。そして、彼女はうめく。正に「蛇責め」そして両手を前手縛り

にし、下ってきた滑車に縛りつけ引き上げる。ズルズルと彼女は吊り上げられ、足が床をはなれる。吊し責めである。そして犯されるが、男のもっていたカマで男を殺す。狂乱して全裸となり踊る。顔もきれいだし、身体もいい。マゾ的ストリップパーといえよう。

一緒にピンク映画の泉マリらの「ブルーキャッツ」の舞台「好色番外地」でも、ピンク女優をパンティー一枚のはだかに剥いで、豊満な乳房の上下、菱縄縛りにしていたぶるシーンがあった。

テレビでは高千穂ひづる、北条きく子共演の「幕末姉妹」が二人の捕手に捕えられて、こづかれながら引かれていくという情緒のあるシーンを、たんのうさせてくれた。また高千穂ひづるは、白洲で上半身を剥かれ、イレズミを見せたり、北条きく子は死罪の判決を受け、死刑の場へ白衣の上に緊縛されて歩んでいく姿を見せた。

映画では、やはり独立作品が多い。「肉魔」では桂奈美が縛られる。『蒼いフィルム・品さだめ』では「性犯」で拷問シーンを楽しませてくれた渚マリが、ブルーフィルムのスターとして監禁され吊り下げられ、サジステイックなシーンを見せた。また、一星ケミも誘かいされたスターとして逆さ吊りにされたりした。

「犯された白衣」では、林美樹が柱に縛りつけられ傷つけられて殺された。『好色番外地シリーズ色道仁義』では、清水世津がイカサマバクチにひっかかり、裸に剥がれて乳房の上下を縛られて、地下の密室に放りこまれたり、谷ナオミ、桂奈美、渚マリなどが裸の姿をたんのうさせた。



僕のイメージ画集『最期?』室井亜砂路

寸 感

ザックバラン時評

マニアテング

読む雑誌としての、奇譚クラブも未だ過渡期ではあるが、一般社会（出版界もふくめて）異常風俗混乱期のようなものはある。奇クを中心として、まことに内外共に奇妙な——ということが実状ではなからうか。六月号の津川博氏の告白を読んでますますその感が深い。とにかく彼の話によると異常というところに少しも苦しみや孤独感がないとれず、むしろ天国？のような楽しいものに思われてくるから奇妙である。絶対に空想の産物より他はないだろうと考えられる現役の清純女優の浅〇ル〇子さんのアレを大も小もホントに食べ飲んでたという。しかも津川氏は、そのヘンタン性を逆手に取ってアサヒ芸能社から謝礼まで載くというチャッカリさである。彼は最近、新橋に誕生した「SM」バーを紹介し、「僕、マダムのが飲みたい」と申し込んで、美しいマダムから微笑されたという。トルコ風呂、SMショー、酒場等々。

用い方によってはソロバンに合うという変な世の中になってきた。ご存知、梶山季之氏などは小説どころか、近頃は大上段に「スケベ人間」を自称？し、ルポも書けば手記も発表する。ヘンタイでゼニになれば本人までも切り売りするという勇ましきである。いや、不具者であることさえ、「アングラ」という前衛的なお芝居となつて、スター気取りでオマンマの種にして（寺山修司の「天井桟敷」）。ここには、陰など一つもなく、あるのはすべて、芸術家である。変態性欲者という言葉が、現実的になにかたくましい生産的な響きを持つてきたことは、どのように解釈すべきか。

夫婦プレイという問題も、当事者がいとも真面目にやっております、読者もその秘密をのぞきみることで、けっこう楽しんでる。ここでは必然性とか真実というよりプレイの行動そのものが事実のようでは他はない。かつて、ヘンタイという文字そのものが危機的な切迫

した影をはらみ、手記、また血が流れていた。ところが時流とか風潮を無視しようとしても、現実に変態であることをむしろ生きるスリルに転回させようとする、おかしい時代になってきたことはたしかだ。

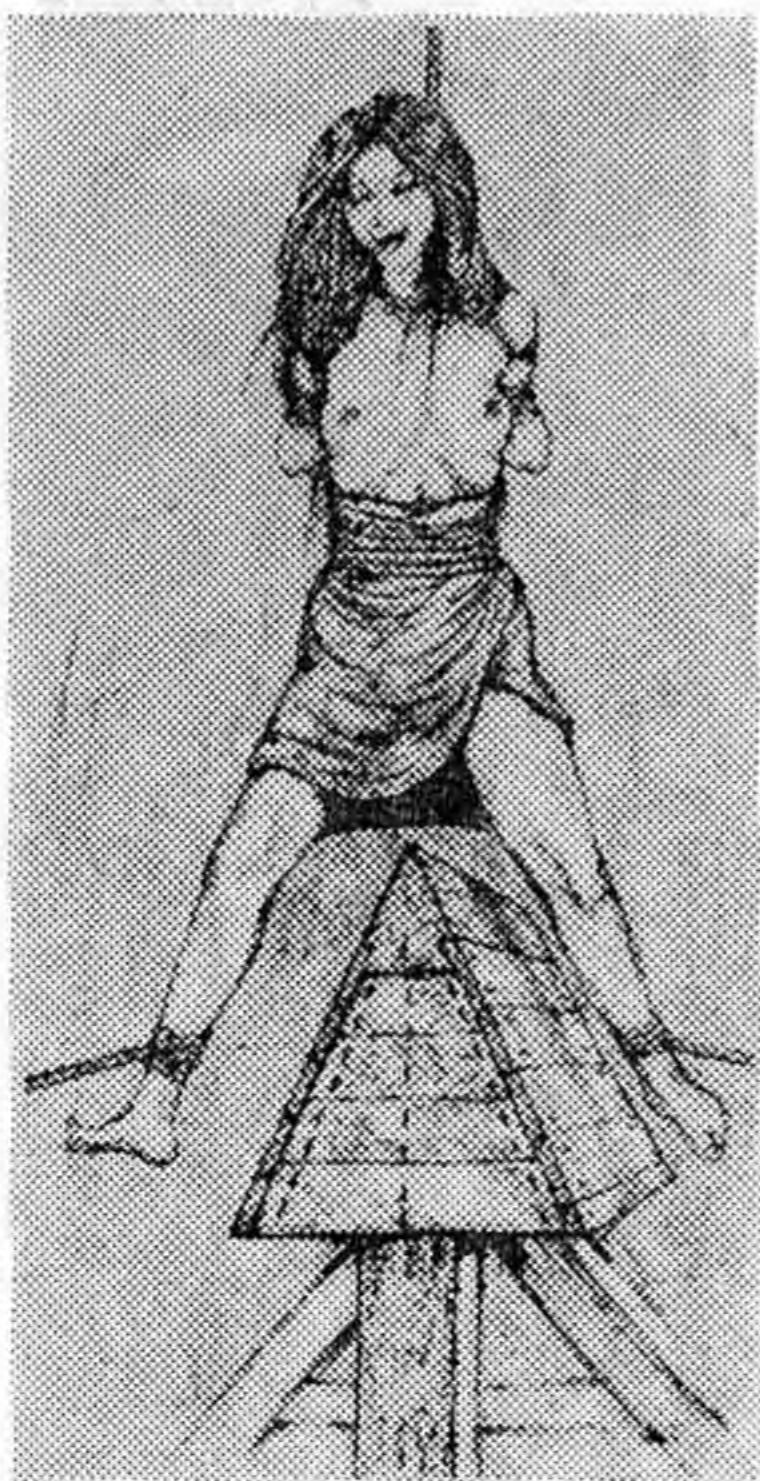
もう、こうなれば、何が真実で何が面白いことなのか、五里霧中というところが、ホントのところだろうか。

六月号に掲載された田中八郎氏の「愛する奇クよ、何処へ行く」の評論も、それが理路整然、実に名文であるだけに、孤高にのみ光

るといふ、ズレた位置を感じるのとは、これはだれの罪でもなく、昨今の奇妙なモラルの変化のせいであらうか。

といって、愛する奇クよ何処へ行くと、手ばなしで哀しんでばかりもいられない。やはり風俗文獻誌としての奇クは、この内外共に乱戦状態に答えを出さず、そのまま「記録」して欲しい。そのことが常に「新しい」という方向であり、むしろ忠実な記録が、後世になって評価の対象となるため、玉石混合のまま何処までもと前進して貰いたいのである。

僕のイメージ 『落し責め』 幻幸三郎



詩「ある檻懲」

菊池 淳子

△浣腸に魅せられた

女のうたえるうた▽

一、今宵湯殿に導かれ
女の契り無花果の
かたき乳首をふるわせて
姉と縋りぬ君の胸

二、とがめの視線わがうなじ
遺るしるしは唇づけと
黒髪攪む責め問いに
とくすべもなき身の証し

三、身調べ拒む抗らがいは
覚えやましき裏きりと
絡らむ濡れ肌細紐は
胸せつなくも迫りくる

四、股くぐる縄おぞましく
タイルに両手つくばいて
臀あさましくふりたてて
拷問受けるはかなさよ

五、裁き待つ間もうとましく
悶えもふざく猿ぐつわ

◆◆◆夫婦プレイフォト寸感◆◆◆
◆◆◆野 田 進◆◆◆

愛読者の一人としてカメラルポを真先に目を通す私は、六月号の『この女と』の山本先生の作品を見て相変らず感動しました。

結婚歴十年（妻三十四才。六才になる男児の母、私三十三才）早くして家業を継いだ私は、父の残した幾許かの資産のため、一通りの道楽も卒業し、極く平凡な社会人としての生活を送っておりますが、今以って二十才の胸のときめきを覚えさせてくれるのは奇くを開く時です。お蔭でさまざまな充実した生活を送ることが出来、あ



あ生れてきてよかったと、真実思うようになりました。

これは他の夫婦プレイの愛好家の方も同じことでしょうが、あくまで私と妻の二人だけの秘めごとであって、公開するだけの勇気は持ち合せていませんでした。その点、山本先生のルポに登場した谷山久美子さんの姿は美しかったと思います。編集部の方達の努力から著名な女優さんのハントも行なわれ、大いに目を楽しませて頂きましたが、やはり読者として、手にとり胸を打たれるのは、平凡な一般の読者の中から切羽詰った末赤裸々な姿を写真にしたとき、共鳴を覚えるものだと思います。淡

くて悲しい性（さが）を持った者だけが、わかる青い鳥の姿なのです。

谷山さんが目かくしと口の絆創膏だけの姿で（文中写真(5)）読者の前に現れた時は、多分頭の中はじいんとした恍惚感と不安感とでいたたまれなかったことと思います。昨年、妻の要望からM市の旅館で五十年輩の店主と二人でクリスマスに使用するマスクを掛けて、男性用貞操帯を着用の上、妻を責めたときのこと、谷山さんのフォトを見て、ゆくりなくも思い出されました。



悲しき鏡くび縄に
背負う十字の手首縄

六、口にのぼすも羞かしき
つぼみ慄く筒の名を

身くねりそりて聴くなれば
浣腸かけてやるといふ

七、揉まるるアヌスやわ紙に
あわれルツボと鳴るお腹

罪の認めは声高く
きびしく糺すいま一度

八、甘きリスリン注がれて
臀のくぼみをおしひらき

果すおマルもあられにて
喘ぐ息のみ荒々し

九、貴き操守するため
枷にまさるは剃毛と

女の得度受けし身は
いま観念の座にいます

十、不義の穢れのつぐないに
清めの薬ヒマシ油を

襦袢の折り檻懲は
看とどけ待ちて正座さす

十一、せまる身もじり慈悲乞えど
情容赦もあらばこそ

お仕置とかれ伏す膝に
涙しとどと流るのみ

その時、全裸で後手錠のままの妻を正面にすえて、あらゆる責めを加えてゆきました。三人三様にその責めの過程に強い喜びを感じたものです。ここに同封しました写真は、その時の妻の姿です。拙いものですが、読者の皆さまにごらん頂ければ幸いです。

憧れの妊婦ヌード

瀬沼 四郎

近頃、週刊誌などで人妻の売春記事を散見する。興味本位に書かれる程に、そういうことがあるのかどうか知らないが、現代のように無限に消費欲望がかき立てられて、家事労働が軽減され、主婦が働きに出ることも当然のようになってきた時代には、手とり早い収入方法として、そういうことを考える人もないことはないだろう。

いろいろ問題もあるうが、妊娠して不恰好になった女房に魅力を感じなくなる男もあるだろうから相手にされなくなつた妻の欲求不満もあるであろう。そこでついという事にならないとは限らない。小生などは、妊娠中の人妻などから誘われれば、一も二もなく応ずるだろうし、妊娠七カ月以上なら眺めさせて貰うだけで有難い。

温泉マークなどに妊婦と行ったら、女中の好奇心ばかりでなく、

尚、六月号で「その後の奴隷妻」を載せられた山本武男様、お呼びかけ頂いた野田和江の夫です。文通願えたら幸いに存じます。

どうしてこんなに魅力を感じるのか、それは実は小生自身にもわからない。とにかく憧れるのだ。

奇クでは今や、辻村氏などのカメラハントで、ハント風景やスナップが毎月、分譲品と共に発表されているが、妊婦フォトとなるとみゆき夫人の場合を幾らかの例外として、モデルとされる人のプライベートの制約もあるうが、誌上に紹介されることはほとんどない。もっと発表されてもよいと思う。……これは奇クに対してのお願いである。

四月号、塚本記者の「SM一〇〇問」で、

——妊娠中のプレーの経験は？
(答) お腹が大きくなってからは大儀なので余り外出せず、室内での撮影が多かったです。勿論妊娠中のフォトは十カ月まで写しましたわ。

——奇クへは提供されなかったのですか？

(答) なんとなく恥しくて——。とあるのは如何にも惜しい。

緑魔子の引廻し 佐原陽一郎

犬の首輪を脚にはめられ、鎖につながれて銀座通りを引き立てられているのは、グラマー女優の緑のP.D. 魔子

これは東宝映画『カモとネギ』のPRとして行なわれた△緑魔子の



『カモとネギ』
はわれた△緑魔子
とボーイハント
の腕を競おう▽
というショッキ
ングな催しのス
ナップだが、彼
女はハントした
学生（十九歳）
に自分の脚につ
けた鎖を持たせ
るといふ「女囚
スタイル」を見
せ、銀座マンタ
ちをニヤニヤさ
せた。

下着が透けて
見えるピンクの
ワンピース、し
かもヒザ上二十
センチのミニス
カートなので学
生がグイと鎖を
引っぱるとスト
ッキングの上の
方までちらちら

◆◆—愛する奇クよ何処までも—◆◆
手記、告白について思う

太田三郎

六月号の田中八郎さんの「愛する奇クよ、何処へ行く」は、近頃まれにみる大論文であった。私のことについても触れて頂き、光栄に思つてゐるが、些かむずかしいと云われながらも議論？を買つて

いう日蔭の部分のペーソスと都会に生きるマニアの悲劇が漂つてくる——そんなデカダンの物語も期待したのである。そのような要素が風俗誌としての特色ではなかつたろうか。

よく耳にする悪書という言葉は好きではないが、「毒」の効用が薄れて「昼」の雑誌になってしまふことは、淋しいことでもある。とは云え、真実ということがなんらかの意味でカムフラージュされる姿勢をとらざるを得ない、そんなジャーナリスト的な姿勢は、奇クもまぬがれることは出来ない。そのカネアイの河岸に、読者の良

このすごい大論文に、刺戟されて、このへんでドカンと一丁、おれは変態だ！ という、変態と真ッ正面から体当りしたような文章が現われなければウソである。誌面のすべてに要求するのではないが、陰気、結構。変態、結構。その世界に、なんとも云えない身につまされる、変態哀しからずやと

識という問題も附加されてくるわけだが、せめて、その挿絵を見ることで、その文章を読むことで、SMの妖しき深淵にのめり込むような「異常」な感動にも、少しは触れさせて頂き度い。

独走せる奇クの編集部に「夢」をすてたくはないからである。

とのぞけ、昼下がりの銀座街頭は
ときならぬ、黒山の人だかりだっ
た。
こんな姿を人目にさらして面白
がっているところをみると緑魔子

はマゾヒストなのかもね。
どなたか彼女の豊富な肉体をギ
ュッという目にあわせるような、
すばらしい映画をつくってくれま
せんか。



詩 公園

青井 松造

ベンチに寄り添うカップル。嬉
しそうに話してる。何を？ 縛り
方の相談？ いじめ方の相談？
エエイ、勝手にしろ！

犬を散歩させてるお嬢さん。鎖
の端を持って引張ってる。可哀想
に、犬のオシッコの間ぐらいの待
ってやれば？ 駄目？ 我慢させ
るの？ エエイ、勝手にしろ！
自転車のお嬢さん。走らなきゃ
転ぶよ。走るために乗ってるんじ
やない？ エエイ、勝手にしろ！

夫婦プレイなど支持する

三 木 谷 三

田中八郎さんの『愛する奇クよ
何処へ行く』を読んだ。そして、
「哀歌」的な、ある意味では「極
論」的なものを感じた。夫婦プレ
イを「何が面白いのか」と嘲言する
まえに、書き送られて来たものを
奇クが採り上げ、一つの分野とし
て、あまりにも独善的で、変態即
孤独という暗い世界に和ごやかさ
を見出させるのでは？ として、
紹介されたものと評価するべきだ
と思うのである。

慣れ合いであろうと、茶番劇で
あるうと、こういう発散のしかた
もあるという意味での「夫婦プレ
イ」論が出るべきで、キメつける
だけでは余りに独善であろう。

「大挙してSMの世界に」刹那的
な享楽を求めて読者が流れこんで
きて、新しい風俗文献誌である
故に、これまた一つの風俗として
笑って迎える広さが、本誌には必
要なのではなからうか。

私としては「約十五年間、奇ク
を愛読してきた」といわれる「読

むだけ」の田中氏より（私も同様
ではあるが）理由はどうあれ、書
き、発表し続けるといふシンドイ
作業をしてくれている「常連」の
方達の肩を持ちたいのだ。常連と
いう碌でもない者の筆が、大方の
好評を得ているものも少くない筈
である。私は、結婚後四年目にな
るが、まだ一度も夫婦プレイをし
たこともないし、奇クに投稿らし
いものもしたことはない。お蔭で
「碌でもない者」にはなっていない
と思うが、夫婦プレイの誌上公
開には興味もあるし、「常連」の
発表文にも、惹かれるものも多く
ある。

満足しきっているとはいえない
までも、極論には同調しかねる気
持だ。

私も、もっと書くことが好きだ
ったら、下らない常連になってい
たかも知れないが、文才がないの
で、反駁はお引受けしかねる。常
連にならないよう、投稿も、この
一回だけにしようと思う。



雑誌 紹介

山田風太郎

「天の川を斬る」

和田平助

週刊文春の連載小説「天の川を斬る」山田風太郎原作に種々の責め道具が紹介されている。読者諸氏のなんらかの参考になればと思いい、箇条書きにしてみました。

「小説のあらましは、大阪方くノ一『朱鷺』が、徳川方に捕われて拷問にかけられ、白状を強いられる云々……」

魔女のくつばみⅡ仮面の内側に男根の形をしたまるい棒が突き出ている。この仮面をつければ、その棒が口中に入り舌を押えつけ、いかなる責め苦にあわされても、わめき声一つたてられない。ペリカンⅡ閉じた時は鉄の梨の

ようなかたちをしている。口に押し込みねじをひねると口も同時にひらく。顎の裂ける迄ひらき、仰向かせて、上から腹のはち切れる迄水を注ぐ。

キャタナイン・ティルズ（九尾の猫鞭）Ⅱ九本の皮鞭のさきに瘤が作ってあり、これで打てば傷はつかない。しかもその苦痛は息もつまらせる。

クラブⅡ鞭打たれて傷が出来たとき、その傷口に熱蠟をまるく盛りあがるまでおとし、その蠟のたまをはじき飛ばす遊戯用の棒。やっこⅡ瞼の上から、眼球を挟む。

エストラパド（吊し刑）Ⅱ足首に25ポンドの鉄球をくくりつけ、からだを天井の錨から鎖で吊るし滑車ではげしく、あげたりおとしたりする。

けられ、回転するようになっていく。この棒に、人間の四肢を上下に、ひきのばしてくくりつける。人間のからだは台の中に宙に浮かんで横たわることになる。これだけでなくも相当な苦痛をとまうのだが、更にこの二本の棒がテコで動かされると、縛りつけられた人間の四肢の関節が、一つずつはずれてゆくという仕掛けである。

スコットランドの深靴Ⅱ雪沓に似ている。木で作ってあり、しかも板が二重になっている。これをはかせて外側に鉄の環をはめ、板と板のあいだにくさびを槌で打ち込む。八個のくさびを打ちこむと胫の骨の髄まではみ出るが、四個でたいていのものが音をあげる。

アイアン・ヴァージン（鉄の処女）Ⅱ人間のかたちをした怪奇な立像で、手らしいものがついていて、像のある力所を押すと、その両腕がぶきみな軋みをたててあがってひらく。この腕の内側には沢山の疣が植えつけられていて、人間を抱きしめると、胸の前で閉じられるようになっていく。無数の疣に全身の肉が圧迫され、その人間はこの像にしがみつき、世にもあさましい狂態をさらす。

ダッキング・ストウールⅡ四つの小さな車のついた厚い台の中央に太い高い柱を一本立てる。柱の上に水平の棒をとりつける。棒のさきには一コの椅子が鎖でぶら下げられている。水平の棒が上下に動くことにより、椅子が下がり水の満たしてある大桶に入る。椅子に縛りつけられた者は、水に沈められたり、空中に吊りあげられたりする。

その他種々の責め道具が紹介されているが省略します。尚、小説の中のくノ一『朱鷺』は一糸残らず、剥ぎとられ磔台に乗せられ手足をそれぞれにくくりつけられ、女体の白い弓と化した朱鷺が四人の愛妾によって、テコでまわされていく過程が描かれている。

ラック（磔台）Ⅱ四方を囲む枠はちょうど人間の背丈の二倍程。その前後に一本ずつ丸太がとりつ

「小さな目」など 麻生 保

六月号拝見。まず、佐野寿氏の「新女性乗馬考」にブラヴォーを送ります。

写真、どれもこれも美しいものです。泉鏡花の表現を借りれば「胸のあたりがキヤキヤする」というやつです。また佐野氏が直接に見聞されたらしい記事、たのしく拝読いたしました。今後この種の写真、またインタビューやルポルタージュ記事など、もっともっと寄せられるようお願いして止みません。

三原寛氏の発表された「最初のマゾヒスト」は、決して耳あたらしいものではありませんが、こういった基礎的資料はまことに貴重なもの。氏にマゾッホの作品の翻訳などもお願いしたいもの。愛読した「贗作イーリアス」、（黒淵嬰一氏）めでたく完結。次作を期待しています。

ところで、サロンにのった麻生の短信中「拍車」が「拍手」と誤植されていました。アア、やんなっちゃった。キイつけてください

いネ。ほんとに。

四月十六日づけ朝日新聞の東京版の「小さな目」に、ちよいとおだやかでないのがのっていた。小学校六年生の男の子の作った詩である。

女

このごろの女は強い
一日一回は おたれ けられ
ぺっちゃんこに つぶされる
「いてて」

どういふことで
こんなに強くなったのか
疑問だ

ちよいと、どうかと思わない？
いくらなんでも小学校六年生のオ
トコノコ全員が、一日一回こんな
目にあつてるとも考えられない。
だから、この子の個人的(?)体
験がうたわれているとみてよいだ
ろう。「おたれ、けられ、つぶさ
れる」というと、まず「お馬ごっ
こ」を想像するのが自然である。
詩から受ける印象は、決して暗
くなく、むしろ楽しそうでさえあ

る。大体、子供、とくにこの年頃の男の子は、いやなこと、不愉快なことは、なるべくかくしたがる。ものだから、これは麻生の我田引水的印象ではない。なんだかこの子、末恐ろしいような気もする。



イメージ 画集

「鬼ゴツコもわるかあねえ」

遠藤 春一

趣味の合成フォト

桐葉 功生

われながら奇妙な趣味にとりつかれたものと思いますが、合成と

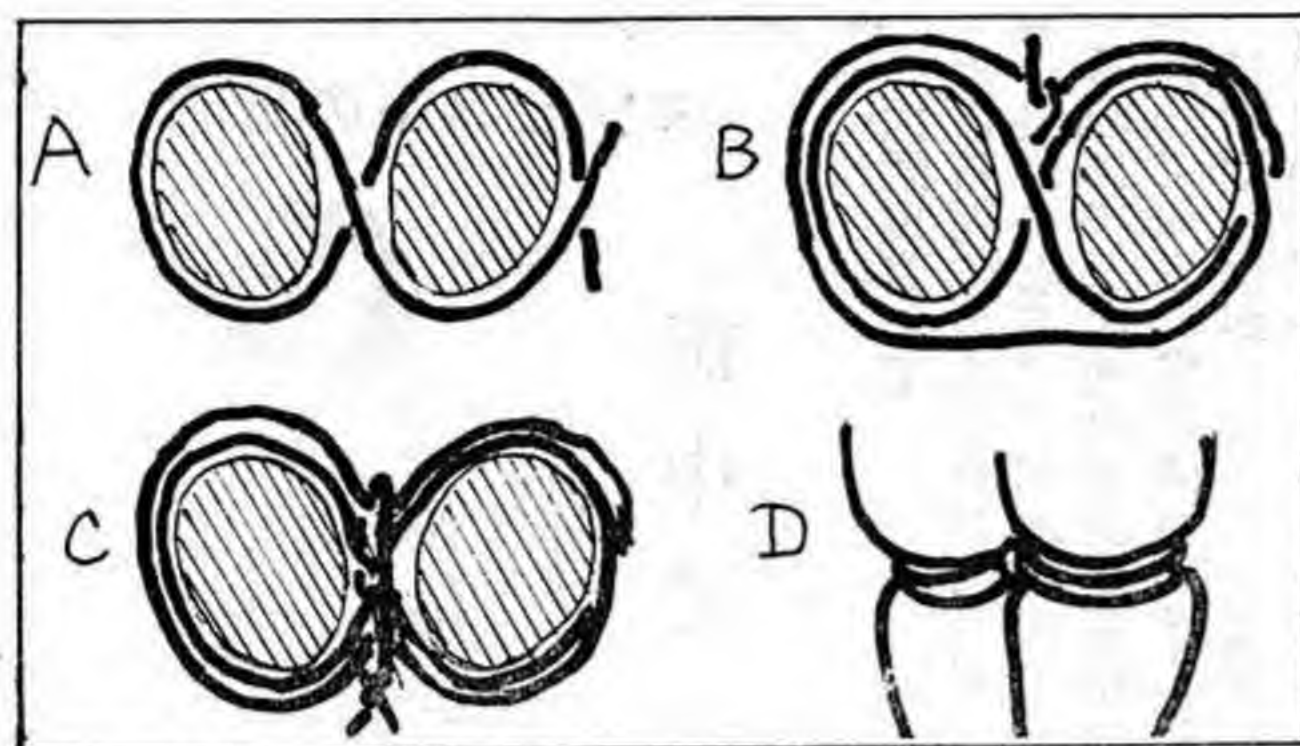
いうやっかいな仕事も独り楽しむ分には、なかなか面白い。

私の好みは時代調の髪型とさるぐつわにありますが、色々の髪型と、色々の角度、そしてそのモデルの顔形に合うような色々な大きさ……などを集めることは大変な苦勞で、簡単にはゆきません。私の場合、何年もかかっています。

自分の好み通りで、不自然さのないものとなると随分な根気を必要としますが、『好きこそものの上手なれ』のことわざ通り、まあまあ線まで上達？ したと思っています。同封の写真はそのごく一部ですがご覧下さい。

これは、あくまで私自身の趣味で、私には何らの野心もありませんし、至って真面目な男ですが、この方法を応用しての、時代調コスチューム髪型の緊縛姿体フォト製作なども可能です。尚、写真の元はすべて洋髪女性。





考案実験レポ

「8文字方式」

芝利好

私がプレイするとき、いつも苦
 労していたのが太腿である。殊に
 両腿を合わせて一緒に縛る場合は
 一層難しい。K誌上で従来も度々
 太腿縛りのポーズを見かけたが本

当に緊縛感を満足させるものは少
 なかったように思う。私は縄数を
 多くして太腿の上から下までを幾
 巻きも締め上げてみたこともあつ
 たが、一寸身体を動かすと何処か
 に緩みができてきて、縄がたるん
 でしまった。その点同じ脚でも膝
 頭、膝下、足首などは最も縛り易
 く縄馴染が良いのだが、私として
 は物足りない。踊り子達がステー
 ジで太腿にガーターをはめて踊る
 のは、只単に色彩的なアクセント
 をつけるだけとその目的ではない
 と思う。それは明らかに太腿の緊
 縛美を意識的に誇示することによ
 ってSM感覚を刺激しようとする
 作為の現われではなからうか。
 さてそこで、その方式として、
 私の考え出したのが、以下に述べ
 る8文字方式なのである。

(一) 片腿(右でも左でもよい)
 の外側から縄を巻いて内側で一度
 交叉させ、

(二) この縄を他の片方の腿の内
 側から外側に巻いて締める。つま

りこの(一)(二)によって両腿は8文字
 の形状に縄掛けされたことになる
 のでそう名付けた。(A)

(三) 続いてこの縄を、今度は両
 腿を一緒にして、8文字縛りを施
 した同じ部位に巻き締める。その
 上で前に記した中締め方式によつ
 て両腿の間に縄を入れて縛り、縄
 止めする。(B図C図)

(四) 8文字縄は単に交叉させる
 だけでもよいが、一層緊縛度を高
 めるために片腿を巻き締める毎に
 固く括り上げておいた方が効果的
 であるし、8文字縛りの後に施こ
 す両腿一本縛りの縄も一筋よりも
 二筋、三筋と数を増やした方がよ
 いようだ。

(五) 中締めは、締めつけられる
 横縄の前後中央部が腿の中間で密
 着する、つまり8文字縄の交点に
 接触するくらいまで締め上げる。

(六) 腿縛りはこの中締めの完成
 によって両腿に非常な緊縛度が加
 えられるわけだ。それ故腿縛りの
 最初に締められる8文字縄は、予
 じめ充分に力を加えてキツク締め
 上げて置かないと縄たるみができ
 て、8文字縛りの効果が全くなく
 なることも経験した。

(七) 中締めが理想的に行われた
 場合は、縄止めの部分が両腿の中

間深く入り込んで、外側から見え
 ないくらいになる。何処で何うい
 う具合に縛りつけられているのか
 一見、分らない。(D図)

実験上、以上のようにして縛つ
 た腿縛りならば、一寸やそつとで
 は縛り目は緩まないし、縄たるみ
 や縄ずれの心配もないことを確認
 した。普通の巻き縛りだと、縄目
 の跡が縄に接した腿の外側だけに
 しか残らないが、この8文字縛り
 と中締め方式を併用すれば、縄目
 の跡が内側にもクッキリ残り、あ
 たかも単独で両腿を別々に縛った
 ように見える。

女性は普段でさえもズロース、
 ブルマー、ガードル、ガーターな
 どでいつも太腿をキツク締めつけ
 ることに慣れているから、特別な
 異和感は少いようである。そんな
 訳で、ある一日、女の高腿にこの
 縛りを施した上で、夕暮れ時の散
 歩としゃれてみた。和服ならば無
 論のこと、洋装の場合でも超ミニ
 スカートでない限り見やぶられる
 心配は先ずなからうと思えた。し
 かしソゾロ歩く腰付きや脚の運び
 にはどうしても不自然さが伴うの
 だから、それが被縛者に心理的不
 安をもたらし、傍目辱かしい思い
 に心が戦っていたようだ。

マゾヒストの日記



街 中 で の 受 感

押 敷 好 三

大衆食堂にて

とある街角の大衆食堂に入り、遅い昼食をとる。注文品を待っている間に、五人連れの女子高校生が入ってくる。私の隣のテーブルに陣取ったが、テーブルは四人掛けなので、一人あふれる。その一人が片すみから補助の丸椅子を持って来てお尻を下した。丸椅子はスカートの中にすっぽりと包まれてしまった。

彼女らはいずれもすばらしい体格をしていたが、その娘はとくに肉づきがよく、はちきれんばかりのヒップをしていた。その巨大なヒップの下にしかれた丸椅子は、彼女が体を動かす毎にギイギイと悲鳴あげる。丸椅子は今、スカ

ートの中の暗闇で、強烈な臭氣にむせび、たくましい重みを受けてあえいでいる。

私は限りなき羨望の眼を、その丸椅子に送りつつその店を出た。

銀行にて

××銀行にゆく。月末の土曜日とあって、相当混んでいた。三十才位の女性が子供を一人連れて入ってくる。窓口で手続をすませて私の坐っている横の空席に腰を下した。そこにはあるスポーツ週刊誌がおいてあったが、その半分程が下じきにされた。彼女氣づいてかどうか、しきりに子供をかまっている。そのうち、彼女は窓口と呼ばれて立って行った。

その間に私は、その週刊誌を少し横に押して丁度椅子の真中の所においた。彼女はすぐ席にもどって来て、後も見ずにどしん！週刊誌は今度はまともに彼女の大きなお尻の下にしかれてしまい、見えなくなった。その週刊誌の表紙には、有名な野球選手の写真がのっていたが、勿論その顔は完全にお尻の下じきにされた。

私の方がひまどって、約五分ほどしてその奥さんが先に呼ばれて立って行った。私は今まで彼女のお尻の下にしかれていた週刊誌をそっととりあげる。なま温かさが残っているのが感じられた。

私は人に気づかれぬように、そっと匂いをかいでみた。印刷インキの匂いにまじって、ツーンと鼻をつくような臭氣。わずかの時間であったが、それは大変私を悦ばせてくれた。

女性の強烈な移り香を今更のようには知らされ、その週刊誌の表紙にのっていた有名な野球選手が、写真とはいえ若い女性の巨大なお尻の下にしかれたことに胸おどらせて、私も銀行を出た。

アルバム作り

三月のある日、用があつて某幼稚園に行く。丁度、先生方総動員で、卒園児に渡す記念アルバムの作成に大わらわ。

ただ貼るだけだが、仲々手間のかかる仕事である。写真がそりかえっているのうまうま貼れない。

私は、しばらく興味深く先生方の仕事をみていたが、そのうちの一人の先生がアルバムの一頁に何枚かの写真をはると、それをたたんで立ち上り、今まで自分の坐っていた椅子の上におくと、その上から腰を下した。そして次のアルバムにとりかかる。アルバムは、その先生の、大きなお尻の重石をかけられる。

次のアルバムをはり終ると、又立ち上って前のアルバムの上に重ねてお尻を据える。

こうして数冊のアルバムが順々に重ねられて上からお尻の重石をかけられる。

しばらくして先生のお尻の下から取り出されたアルバムの写真は完全にびったりと貼りつけられていた。

卒園児たちの記念アルバムは、こうして、先生たちのお尻の愛の重石をかけられて、次々と作られていったのである。

〔最近作緊縛傑作フオト〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円

鼻責めと鼻孔大寫し

大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円

首縛後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」 五〇〇円

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円

竹棒開股苦打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円

後手吊りにもかく女体

大手札四枚一組 略号「くて」 五〇〇円

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」 五〇〇円

愛知 葉子

大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つや」 五〇〇円

愛知 葉子

大手札四枚一組 略号「つく」 五〇〇円

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

麻里子の裸身をあばく

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」 五〇〇円

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つめ」 五〇〇円

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」 五〇〇円

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」 五〇〇円

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」 五〇〇円

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」 五〇〇円

両手万歳吊りにもかく

大手札四枚一組 略号「くむ」 五〇〇円

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」 五〇〇円

雁字搦目縛りにうめく

大手札四枚一組 略号「くと」 五〇〇円

川越美佐子

大手札四枚一組 略号「へね」 五〇〇円

九力月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号「への」 五〇〇円

増田みゆき

大手札四枚一組 略号「への」 五〇〇円

激痛に耐える鞭打ち表情

大手札四枚一組 略号「への」 五〇〇円

印画紙焼付極鮮明写真
〔美人モデル緊縛フォト〕

鞭打ちによる感溺の表情 大手札四枚一組 略号 (めち) 五〇〇円 関谷富佐子	股裂縛りで痛打する 大手札四枚一組 略号 (めの) 五〇〇円 関谷富佐子	海老縛りの鞭打地獄 大手札四枚一組 略号 (めぬ) 五〇〇円 関谷富佐子	尻立縛りで強打に泣く 大手札四枚一組 略号 (めし) 五〇〇円 関谷富佐子	ムチは臀部の双丘に炸裂 大手札四枚一組 略号 (めけ) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭に悶える鉄砲責め女体 大手札四枚一組 略号 (めま) 五〇〇円 関谷富佐子	逆手吊りて晒す臀部 大手札四枚一組 略号 (めむ) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭の縛りに夢心地表情 大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭は美体にからみつく 大手札四枚一組 略号 (めも) 五〇〇円 関谷富佐子	狂う鞭に狂い泣く女体 大手札四枚一組 略号 (める) 五〇〇円 関谷富佐子	両手吊りの女体に強打 大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円 関谷富佐子
鞭打ちに示す感泣の極致 大手札四枚一組 略号 (めて) 五〇〇円 関谷富佐子	逆海老開股縛りに鞭打ち 大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円 関谷富佐子	ムチに悶絶した美夫人 大手札四枚一組 略号 (めへ) 五〇〇円 関谷富佐子	のけぞる悦虐表情の露呈 大手札四枚一組 略号 (めふ) 五〇〇円 関谷富佐子	責めによる美的法悦表情 大手札四枚一組 略号 (めら) 五〇〇円 関谷富佐子	妊婦開股縛り哀歎 大手札四枚一組 略号 (わう) 五〇〇円 中河 恵子	八カ月の妊婦開股責め 大手札四枚一組 略号 (わの) 五〇〇円 中河 恵子	妊婦太鼓腹開股縛り 大手札四枚一組 略号 (わの) 五〇〇円 中河 恵子	妊婦美人媚態の立像 大手札四枚一組 略号 (わえ) 五〇〇円 中河 恵子	妊婦美人媚態坐像 大手札四枚一組 略号 (わお) 五〇〇円 中河 恵子	両手吊り片足挙げ妊婦 大手札四枚一組 略号 (わき) 五〇〇円 中河 恵子
突き出た腹部の妊孕美 大手札四枚一組 略号 (わし) 五〇〇円 中河 恵子	両手吊りの妊婦正面 大手札四枚一組 略号 (わす) 五〇〇円 中河 恵子	縛られた妊婦の艶姿 大手札四枚一組 略号 (わせ) 五〇〇円 中河 恵子	両手一本吊りの妊婦 大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円 中河 恵子	恵子の妊孕美緊縛 大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円 中河 恵子	初妊娠の太鼓腹の美 大手札四枚一組 略号 (おに) 五〇〇円 中河 恵子	裸身縛りの妊孕美 大手札四枚一組 略号 (おぬ) 五〇〇円 中河 恵子	身籠った裸身責め 大手札四枚一組 略号 (おす) 五〇〇円 中河 恵子	麗わしの妊婦縛り 大手札四枚一組 略号 (おも) 五〇〇円 中河 恵子	膨満の腹部緊縛美 大手札四枚一組 略号 (おひ) 五〇〇円 中河 恵子	立縛り髪責め引回し 大手札四枚一組 略号 (おみ) 五〇〇円 中河 恵子
安井喜久子 大手札四枚一組 略号 (おけ) 五〇〇円	後手縛りて引回す 大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円 安井喜久子	片足吊り上げ責め 大手札四枚一組 略号 (おく) 五〇〇円 安井喜久子	憂愁夫人の菱縄縛り 大手札四枚一組 略号 (おて) 五〇〇円 安井喜久子	柱対向立ち縛りの夫人 大手札四枚一組 略号 (おや) 五〇〇円 安井喜久子	片足吊り股裂き責め 大手札四枚一組 略号 (おあ) 五〇〇円 安井喜久子	逆エビ責めに泣く女 大手札四枚一組 略号 (およ) 五〇〇円 安井喜久子	柱正面立ち縛り媚態 大手札四枚一組 略号 (おわ) 五〇〇円 安井喜久子	股間縛りにもかく女体 大手札四枚一組 略号 (おの) 五〇〇円 安井喜久子	豊満の女体をくびる 大手札四枚一組 略号 (おう) 五〇〇円 安井喜久子	開股前屈愛撫責め 大手札三枚一組 略号 (おれ) 五〇〇円 安井喜久子
愛知 葉子 大手札三枚一組 略号 (おね) 四〇〇円	逆エビ縛りの愛撫 大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円 愛知 葉子									

印画紙焼付極鮮明写真

「新しいモデル強烈縛り」

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちねV

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちてV

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちやV

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちみV

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちつV

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちなV

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちすV

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちさV

豊満な体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちにV

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちこV

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちくV

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
左近麻里子 略号 八ちけV

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちるV

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちれV

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちきV

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八なたV

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八なあV

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八なちV

臀部に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八なつV

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八なてV

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せきV

強烈猿ぐつわ哀歓

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せかV

息づくポリウムを縛る

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せもV

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せみV

ゴムカバの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八せなV

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せけV

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せこV

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
木村 洋子 略号 八せまV

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
木村 洋子 略号 八せむV

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
木村 洋子 略号 八せえV

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せろV

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せれV

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せりV

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せとV

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せてV

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せゆV

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せいV

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せたV

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せのV

逞ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せねV

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せにV

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わりV

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わもV

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わめV

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わみV

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わまV

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わとV

読者通信



本欄に敢然と呼びかけ、あるいは生々しい体験談を投書してきた各地の奇クファン諸兄姉に、かねがね一種の尊敬を（多少、羨望の念も感じながら）内攻性の小生は抱いておりました。しかし号を重ねるたびに、小生も自分自身を叱咤督促して、ここに意を決してペンを手にしたことでした。小生は九十五パーセントS派と自認しておりますが、昨年読んだフランス地下文学の傑作「O嬢の物語」に衝撃的感動を受け、以来、O嬢の如き女性が現世に在れかしと、心中ひそかに祈りつづけている者です。確かにこの祈願は、大それたことであり、現実には叶えられ得べくもないでしょうが、O嬢ほどでなくても、M派の女性の存在は信じたいのです。もし、そのようなMの欲びに全身を浸すことのできる女性がおられるなら、小生は

欣然としてその女性の裸身にクサリと鞭の洗礼を浴びせ、メス犬に化身させてあげたいと思います。年令は問いません。勇気を出して小生の切なる呼びかけに応じて下さい。（仙台市 みちのく生）

○ 私は二十四才、独身で公務員です。数年前からSMプレイに興味を持ちはじめ、今では写真、本と色々持っています。実際の体験がありません。今回、思い切って同好者を求めたいと思います。浣腸、縛りなど花と蛇の小説のように、静子夫人と川田、鬼源になり切って、思い切りプレイを楽しみたいと思います。条件は、ただ一つ、お互いの秘密は固く守ることです。勇気ある女性の方の便りを待ちます。（豊川市・芳村弘）

○ 前田容子様へ。五月号の貴女の文を拝見して、大きな驚きと感激

を覚えました。かくいう私も貴方ご夫婦とそっくり同じような推移により、妻から強制的に毎日、女性用の下着をつけさせられている者です。あの日、血相まで交えて興奮している妻を、何とかなだめて妥協させることのできたのも、実は浮気はもう二度としないからという証に、私の鼻先につきつけられた妻の、その可愛いパンティを、その場から直ちに穿いてみせたことによるのです。一口に婦人用のパンティといっても男では後向きに穿かなければ到底、着用などできたものではありません。しかし後向きでは、お尻の部分に刺繍がくるので何とも妙な気分です。で色々苦情を申しますと「何を言っているの。別に人に見せるわけじゃないし、もともとパンティはお尻を飾るために穿くものなのよ」と無理矢理、穿かせられてしまいました。そして「どうやらお気に召したようね。折角だからこれから毎日、貴方の専用にしてやるわ」とはやしたて、その恰好がおかしいと笑いこけて溜飲を下げるのでした。それ以後、だんだんと今日までブラジャーからスリップ、ガーター・ベルトからストッキングへと発展しました。巾

の広いガーター・ベルトはコルセットみたいな感じで、初めの中は苦しくてそれこそ昼飯も咽喉に通らないほどでしたが、今ではもうすっかり馴れて、腹部をきっちり締め、反って心持よささえ覚えるようになりました。たまに外ずしたりすると腹の締めがなくなったようでもういけません。ストッキングが意外に暖かいものだとかわかったのは収穫で、とうとうこの冬はズボン下なしで通してしまいました。しかしスリップは大して保温には役立たないようです。今では常時、鴨居羊子のチャイビネイションを着用させられることになったのです。このシロモノはスリップとステテコが一しょになったようなもので、いくら暑くても裸にならなければ脱ぐことはできません。毎朝、妻の点検を受けてからでないとは出勤させてもらえませんが、こんな私の姿に今の妻は、もうすっかり満足しきっているようです。ブラジャーにパンティ、ガーター・ベルトにストッキングと、五点の女性用下着を一日とて欠かすことなく身につけさせられて、私のウエストと太股の部分にはくっきりと紫色のアザがつき、一見して何を着用したかわか

ってしまいます。そしてそれが、今では嬉しいような恥かしいような何とも言えない被虐的な気分私をかりたてるのです。元来、私にその素質が多分にあったからでしょう。こうしていつしか一人前のマゾに、仕立てられてしまった私です。この道の先輩たる前田容子様、事実は小説よりも奇なりとか申します。私はこれから一体どうなるのか、果して将来は、貴女と同じようになるのでしょうか。貴女が少しでも興味をお持ちになるようだったら、一年ほど経ってまたお便りしましょうか。

(埼玉県越谷市・小野寺秀二)

ここに私の近況をお知らせいたします。元々便秘がちな私でしたが、最近特にひどくなっております。四、五日もないときがあります。薬はくせになるとのことと飲みま

◎分譲品総目録◎

多数の方々から御予約を頂いておりますが作成が大変おくれにて申し訳ありません。完成次第必ずお送りいたしますから、今しばらくお待ち願います。尚予約お申込

食べ物を多くとっておりますが、いっこう効果がありません。何日も通じがなく、お腹が重くはってひどく苦しいときが多くなりまして。私は、こんな時いそいで歩いたりすると、お腹がひびいてすぐ苦しい感じですので、ゆっくり足を引きずるように歩きます。それでなくても大きなお腹が五日も通じがないときはパンパンにはって重く、苦しくて肩で息をしております。ねておりまして横に体をすると、お腹が床に落ちて上下に息をするたびにふくらむ私の大鼓腹は、まるで妊娠した白豚が昼寝でもしているように動物的で自分ながらうらめしくなります。私はこんな時、お腹の苦しさになえかねて自分で静かにマッサージをします。誰か若い男の人にでもこのお腹をもんでもらいたいと思いつながら、張りに張ったお腹をもて余し苦しんでいるのです。私は、

みの方は切手五十円同封の上、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社箕田京二宛へお便りして下さい。分譲品満載の豪華なカタログを出来次第お送りいたします。尚、分譲写真のお申込みも、箕田京二宛にお願いいたします。

記事のをせて下さい。

(仙台・美川美美子)

名古屋の川村順子様、お便り拝見いたしました。私は奇クを愛読するようになりました。私は貴女のような方が現われるのを待ちしております。私は名古屋市内に勤務するサラリーマンですが月の半分ぐらいは自由になる時間がありますので昼間の数時間でもご交際ねがえな

(豊橋・与志田五郎)

私はSMにすることが大好きです。奇クを愛読するようになっています。SMに関する雑誌は他にもありますが、奇クが一番永く続いております。又記事内容も都会的に洗練されていきますので、安心して読んで行くことができます。最近内容は益々充実してくるようで大変うれしく思っています。申しおくれましたが小生は堂島に勤める二十四才の青年です。今後とも本誌が末永く発刊されることをおねがいいたします。

(大阪・渡辺生)

山本広子さん、あなたのたより嬉しく拝見いたしました。小生は奇クの四年前からの愛読者です。小生は三十五才の公務員で現在、数名の部下を持つ管理職の立場にある者ですが、不幸今まであなたのような理解のある女性にめぐり逢えず、独身をかこっています。身長は一メートル六五、体重は六五キロで日舞の愛好者です。自分の職業的立場から秘密は絶対に厳守いたします。ぜひ一度お逢い出来る機会を持ちたいものです。

(静岡・永島生)

○ 私ども女斗美愛好者には、東映で今回製作されている「徳川女系図」の中に予定された女相撲は全く興味深々たるものがあります。七月号が出る頃は丁度、上映されていることと思いますが、週刊誌などの紹介によりますと、非常なオーソドックスな出で立ちであり取組その他の立居振舞いも、いわゆるイカモノ的でなく輝のしめ方もしっかりしていて、中々期待できるものです。女相撲がスクリーンに登場しないかということは、愛好者ならひとしく皆考えることでしょうが、おそらく実現するとは思っていません。従

って今度のような比較的満足すべき仕様でこれが実現することは、もう二度とありますまい。もっとも、そのシーンがどれほどの長さであるのか、又映倫がどのぐらいまで認めるのか、あるいは取り組むといったも冗談めかしたコミックのようなものなのか、など色々ありますが、とにかくつつがなく克蘭クアウトして、我々の目を楽しませてほしいものです。以上のように、めったにない機会ですから、この映画をコピーされる方も多いと思うのですが、これはカラー映画のようですから、カラーフィルムを用いれば白の女禪、赤の女禪をしめこんだところもハッキリと出るでしょう。しかし映画はきわめて暗いので、スチールカメラによるコピーではカラーを犠牲にしてトライXかSSS級のフィルムを用い、超増感でASA800以上はいると思いますが、F18でとして、どれぐらいのシャッタースピードがよいものか、又カラーは増感はききませんが最も高感度のエクタクロームハイスピードASA160を用いるとして露出はどれぐらいか、奇クは写真術の超ベテランが揃っておりますから、ご教示ねがいたいものです。

安井・中河・金原緊縛写真

安井・中河・金原緊縛写真	
大手札印画紙極鮮明焼付フォト	開股羞恥責めの姿態
安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
髪吊りて強烈ムチ打ち	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
片足首引きつけ縛り	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
尻立て鞭打ち艶姿	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
柔肌に炸裂するムチ	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
エビ縛りの鞭打ち	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
貞操帯着用鞭打ち	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
痛打にもかく美女体	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
あぐら縛りの羞恥責	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
片脚挙げて晒す裸身	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
強烈エビ縛りて苦悶	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
膝頭縛り開股竹棒責め	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
竹棒開股足首縛り	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
股間縛りの裸身表情	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
菱縄縛り猿ぐつわの表情	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
乱痴戯騒ぎの結末	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
菱縄縛りて床に喘ぐ	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸責めの甘い恐怖	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸液の注入直後	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
強制浣腸の各姿態	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸責めの美態開陳	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸を待つポーズ	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

そして出来れば、そういうスチールを作成、又は入手して頒布していただけると多数の女相撲愛好者は喜ぶでしょう。江戸城大奥とか田沼意次とかいう女相撲は、いわゆるショー的なものですが、このようにスクリーンに堂々と登場して、我々限られた一握りの愛好家のものだったのが一躍、国民の目にさらされるといのは驚くべきことです。実物ではないにせよ、これは動く女相撲を見ることのできる、きわめて稀なチャンスになるでしょう。しかも下着など一切つけず裸に渾一本のいで立ちですから、ますます珍重すべきものとなるでしょう。二、三の雑誌のスクールでみますと、髪型もきわめて優雅であり、古典趣味愛好の方々にもうけるでしょう。全国の女相撲愛好家と共に、この映画のつつがない完成を心から祈るものです。

(雄松比良彦)

○ 奇クは毎月楽しく愛読しています。私はプレイをする相手もなく奇クを開いて自分であれこれ想像し、いつの間にか興奮して秘かな楽しみにふけるといふ日々を送っています。つぎに思いつくままに「謎かけ」を書いてみました。つ

たないものですがご一見いただければ幸いです。奇クとかけて、国会中継ととく。その心は、恥かしくて子供には見せられません。辻村隆氏とかけて、將軍吉宗ととく。その心は、文武ともに巧みです。同じく、ロッククライマーととく。その心は、綱が頼りです。団鬼六氏とかけて、皇室ととく。その心は、キクとは切り離されません。静子夫人とかけて、南ア共和国ととく。その心は、白の理想です。京子とかけて、ロデオ競技ととく。その心は、ジャジャ馬ならしの魅力です。同じく、大学入試ととく。その心は、裏口入門もできます。小夜子とかけて、高野豆腐ととく。その心は、濡らすだけで好きな時にいただけます。

(大阪・米沢茂)

○ 女性のふんどし姿の写真、画をもっと多く掲載下さい。私達女性ふんどしマニアにとりましては、奇クのみがたよりです。他の類似誌には、男性のふんどし姿がありますが、私たち女性とでは六尺ふんどしのしめ方もちがいますし、第一、男性の六尺ふんどしなど物足りない気がします。昨年の十月頃でしたかに、モデル左近麻里子

可憐表情の全裸縛り	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	強制全裸開股責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆめ	金原奈加子	略号 八ゆみ
立縛り正面裸晒し	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	股間縛りで悶える	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆえ	金原奈加子	略号 八ゆる
両手吊り全裸晒し	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	全裸縛りに羞らう	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆひ	金原奈加子	略号 八ゆへ
雁字搦目後手縛り	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	私の妊娠腹を見てね	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆあ	中河恵子	略号 八ゆわ
股間縛り柔肌責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	縛られた妊婦横臥す	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆも	中河恵子	略号 八ゆよ
猿ぐつわ開股責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	被虐に燃える全裸妊婦	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆに	中河恵子	略号 八ゆぬ
豊満な臀部強烈責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	尚も見せたい妊婦腹	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆほ	中河恵子	略号 八ゆる

○ さんの輝美、表と裏の二態という分譲写真を購入しましたが、スタイルもいいし下腹部にキリリとしめこまれた写真を見ていますと私自身、妙に興奮してまいります。ただ欲を申しますとふんどしの前の部分が余り巾広く思われます。このような巾広いふんどしは男性向きで、私達女性の場合ですと、ふんどしは緊縛感と露出感を満足するためのものですので、できる

川村順子様、私の趣味は、どち

(愛媛県・越智かおり)

らかといえは緊縛一本というより緊縛のみの経験しかありません。秘密保持については貴女より私の方が気になる方ですから心配はありませんが、緊縛すれば身体に縄の跡がつきますが、その方はよいのですか。私は当年四十三才のネズミ年です。もしご主人に具合が悪かったら、跡のつきにくい柔らかい腰ひもを用意して下さい。

(神戸・太田徹次)

○ 安井喜久子様、私は数年にわたる奇クの一愛読者です。貴女様には、いつも献身的努力で誌面を飾って下さり、大変うれしく思っております。さて四月号にて夫婦プレイのアイデアを募集しておりましたが、私が日頃ペットに用いています中の一つを紹介してみます。先ず貴女を全裸開股正面椅子縛りにし、前面を完全の無防備にします。御主人は輪ゴムと三十センチのスケールを用意し、輪ゴムをこのスケールの片端へ引っかけてもう一方の端まで引きのばし、ひっつけた方を夫人の体に目掛けてはなしますと、輪ゴムは小さなムチとなって、次第に貴女の肌を心よく可愛がってくれます。この時、目かくしをしようと、どこ

へ飛んでくるか分らないので面白と思います。又、輪ゴムのかわりに射的場で人形を倒すのに使っているコルクの玉と銃を用いて責めるのもよいでしょう。そして、この責めが終わったら、身の回りに散らばっている輪ゴムやコルク玉を、あなたは四つん這いになってお尻を高く上げ、手を使わず口でそれを拾うのです。この時、御主人は高く上がっている尻をムチ打つのも、よいのではないのでしょうか。私達はこれを、前者は射撃訓練、又は射撃責め、と呼び、後者を四つん這いで玉を拾っていると尻をムチ打つため、ウシ追い責め、と呼んでいます。いかがですか。いずれ私達のプレーを告白手記として、書くつもりであります。が、先ずは貴女様のご活躍を祈って失礼します。

(神奈川・千部宇智夫)

○ 奇クを読み始めてから八年になります。今日までひそかに愛読しており、読者通信欄にて交信を望んでいました。なかなか決心できず、今日初めて投稿する次第です。SMは小から大まであり、少なくとも恋愛から結婚生活の中にどんなカタ物でも一度や二度行っ

ている自然的行為？ かもしれない。SMに興味ある女性と交信を希望していますが、実際に勇気を出して名乗ってこられる方がいらっしやれば夢のように楽しいことと思います。どなたかお便り下さい。小生は三十三才、小さいながらも会社経営をしております。

(神奈川・新田好夫)

○ 城山ほずみ様、貴女のような方が横におられると知った私は、大変うれしくなりました。私は自分はSだと思っております。貴女の望んでおられる、たくましいハンサムな男ではありませんが、それでも良ければ私とプレイしてくれませんか。私は二十一才の大学生です。

(横浜市・赤松正)

○ 川村順子様、四月号の記事、拝読いたしました。名古屋に同好の女性のおられるのを見て、心からうれしく思います。小生は三十五才、名古屋近郊に仕事を持つ者です。一度お逢いしてSMプレイについて語り合い、事情が許されるならばプレイも行ないたいと存じます。小生は縛り、その他、責めのことに色々興味を持っています。がなかなかプレイのパートナーに

は恵まれません。良識を以てお互いの秘密を守り合わねば、こうしたことは続けられないもの、信じますし、経済的にもご心配は不要と存じます。お互いにほどほどということを守りながら、その中で野獣のように荒々しく、自由に人生を味わいたいと存じます。

(名古屋・ドクター倉田)

○ 美美子お姉様、五月号うれしく読ませていただきました。私のつたない文を読んでもいただけただけでも光栄ですのに、やさしい言葉でご返事をたまわり、心からお礼申し上げます。私は一日も早くお姉様にお会いしてお話しして、一層お互いに理解を深め、そしてプレイのチャンスのおとずれる日を待っております。私のお姉様への思慕は日ごとにつり、今ではお姉様のいない人生など、とうてい考えられません。大きな乳房、大きなお腹、きつとすばらしいでしょうね。いつかきつと、お姉様を思う存分いじめて差し上げ、又子供のようにあまえて、お姉様のお乳を吸いながら、やがて夢の世界に遊ぶ私を考えると、いてもたってもいられます。私からのお願ひですが、ご自分のことを動物

のような身体などとおっしゃらないで下さい。私にとっては何ものにもかえがたいお乳やお腹なのです。もしそのような思われるときがありましたら、私を思い出して下さい。そして、お姉様のお乳やお腹が最も美しいのだと自信を

持つて下さい。プレイのときは、大きな乳房、お腹を中心に色々な責めを行ない、お姉様のマゾ性が満足ゆくまでいじめてあげます。

(新潟・竹本雅敏)

僕は二十二才の早稲田大学の学

秋山夫妻残酷ショー写真

逆エビに狂い泣く女

大手札四枚一組 略号 (たな) 五〇〇円

髪吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号 (たに) 五〇〇円

黒髪をふり乱して

大手札四枚一組 略号 (たぬ) 五〇〇円

股間縛りを熱演する

大手札四枚一組 略号 (たの) 五〇〇円

女馬を調教する男

大手札四枚一組 略号 (たか) 五〇〇円

尻帆立て縛りの実演

大手札四枚一組 略号 (たき) 五〇〇円

秋山式縛りに喘ぐ女

大手札四枚一組 略号 (たけ) 五〇〇円

熱帯は柔肌を焦す

大手札四枚一組 五〇〇円

鞭と羽毛の搾り責め

大手札四枚一組 略号 (たあ) 五〇〇円

早縄術を披露する

大手札四枚一組 略号 (たお) 五〇〇円

急所縄に慟哭する女

大手札四枚一組 略号 (たそ) 五〇〇円

熱気を帯びた実演

大手札四枚一組 略号 (たさ) 五〇〇円

強烈な緊縛プレイ

大手札四枚一組 略号 (たし) 五〇〇円

弄られる緊縛女体

大手札四枚一組 略号 (たす) 五〇〇円

鞭と縄に追われて

大手札四枚一組 略号 (たむ) 五〇〇円

◎お申込みは、大阪市阿部野局

私書箱第14号 箕田京二へ

生です。神田の古書屋街を歩いて
いる中に英文のSM雑誌を見つけ
ました。そして日本にも、このよ
うな雑誌はあるだろうと思ってさ
がしたところ、本誌をみつけれな
いことが出来ました。この世界に興
味を持ってから一年近くなりますが
英語ではどうしても判読不能な箇
所がでてくるのは、あながち自分
の語学力の不足だけではないと考
えるようになり、思いきって投稿す
ることにしました。人間が知的に
訓練されれば、されるほど、高度
に人間性からの疎外が進むほどそ
の反対の傾向である素朴で原始的
な感情の発露を求めるようになる
のは、自然のことだと思います。し
かし、その自然な願望が、かえつ
て人間性を破壊するものとなった
時、他の人格を無視することはそ
れだけ自己の人格を無視すること
となり、そこには決定的な崩壊の
世界しかないように思われます。
自分が生きて行くことを引き受け
ている以上、そのような人間性を
破壊することには否定的にならざ
るを得ません。だが、そこにSM
世界の真髄があるのだとしたら、
僕は、悲観的にならざるをえませ
ん。同好の諸士の反論を期待しま
す。僕は、以上のような意見を持

っています。好みのタイプとして
は、安井喜久子夫人、長井葉津子
さんのような女性とプレイをして
みたいと思います。美青年に縛ら
れてみたい女性の方のお手紙をお
待ちしています。このようなプレ
イとアムールは峻別すべきだと思
いますが、その点で辻村隆先生の
潔癖主義には敬意を表します。僕
はできれば、M的世界に理解ある
女性と結婚したく思います。私の
天使の現われんことを祈って……
(埼玉春日部市・山部澄)

私は家庭の事情で或るお屋敷へ
身売りされました。そして今日か
ら奴隷として衣食住を始め、その
他一切のことは、人格を無視した
取り扱いを受け、主人の言うこと
はどんなことでも服従することを
誓わせられました。先ず全裸にさ
れると、手錠、足枷、首枷などを
かけられ、鏡の前に自分の哀れな
姿を見せられながら身体検査を受
けます。そして毎日、荷物のよう
に縛られて転がされ責められます
ので、私は泣いて許しを乞います
が、私が失神するまで決して許し
てはくれません。あらゆる拘束具
を使って悲鳴をあげさせられ屈辱
的なお仕置を加えられるのです。

そして脱走防止のために、髪の毛は勿論、体中の毛は全部そり落とされます。又、食事は、犬のように床に四つん這いになって頂きます。ねるときも横になることは許されず、坐ったままねることを強制されます。以上は私の空想ですが、現実こんな素晴らしい奴隷生活が過ごせたらと思ひ、お便りいたしました。私の夢をかなえて下さる方がおられましたらお便り下さい。

(福岡県直方市・緒方則子)

ご無沙汰いたしました。早いもので一昔前になりましたからね、拙作「恋する夫人への手紙」を貴誌にのせていただいたのは。その間、この世界のことを忘れたわけでもなく、田舎暮らしのこととて意にまかせず、連絡も途だえてしまった次第ですが、私の人生からこの道だけは離れることはできません。あの頃、欽義先生に「マンガ」と評された絵が随分たまりました。奇クのお蔭で、多少は絵らしくなったようです。一度お見せして酷評をお願いしたいと思っております。今まで数人の方々と文通もし、プレイも試してみました。が、余り珍奇な対象を求めるために、語る人もなく、よいパートナ

ーにも出くわしません。今なお続いているのは三重のY氏で、プレイは十数回に及んでいます。その様子は、又、稿を改めて発表したいと思ひます。今度、故あって尼崎へ参りましたので、貴誌にも触れる機会が多くなるものと喜んでおります。問題作「花と蛇」は通読したくて、たまらない作品です。絶世の美女、静子夫人の高貴な豊富な姿がたまらない魅力なのですが、映画の「花と蛇」を見て少々落胆しました。余りにも小説のイメージから、静子夫人の豊富な姿に期待が大きすぎたのでしょうが、鬼源のかわりにサジストの良人か、娘が運転手とくんで財産を狙うというのでは、「花と蛇」の価値がないと思ひます。後作の「鞭と肌」「縄と乳房」も見ましたが、「縄と乳房」の後半、倉庫の中から床の間のある座敷、浴室で女が女を責めるあのシーンは、中々迫力があつたと記憶しています。美川美子さん、貴女の一文で奇クを買ったようなものです。以前、安斎けい子さんという女性に一の望みを託して浅はかにも便りをしたことがあつたのですが……貴女は一人ではないでしょう

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
後手裸身柱縛り	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
縄目にあえぐ裸女	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
豊麗な裸身をくびる縄目	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
後手高小手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
長襦袢の緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
緋の腰巻緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
猿ぐつわに呻く女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
柱宙吊り強烈縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
ポリウムを縛りあげる	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
縄に苦悶する裸女を狙う	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号一〇〇〇円
真紅の腰巻着用姿態	大手札二枚一組 略号八〇〇円
縄に悶える緊縛色模様	大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚	略号八〇〇円
真紅の腰巻着用縛り	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
華麗なる緊縛裸身	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
みだらな開股縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
責めに疲れた諦観	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
真紅の腰巻姿で緊縛	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
羞らいの真正面縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
若肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
高手小手後手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
股間縛りの開股姿態	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
羞らいの股間縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子	略号一〇〇〇円

か。肥え太った太鼓腹には、大いに興味があります。しかし妊婦の腹は好みません。SでもMでも、豊満な肥った中年婦人にたまらない魅力を感じるのです。年令も四十才前後という年輪を重ねた分別のある、物事の経験の多い一種のたくましさ、豊麗さが自然ににじみでる中年こそ、本当に美しいと思うのです。一般的な美醜は問題ではありません。そうした意味で「花と蛇」の社長夫人にも、豊満な中年婦人の美を求めているのです。作者がきたいら苦笑をするでしょうし、読者はゲンメツと言うでしょう。(尼崎市・池尻満六)

六月号では評論、感想風の作品が多かったようだが、山中氏のごとく具体的提案もあって、結構たのしかった。建設的な意見は、どしどし実現させてほしいものだ。ただ、この種の論議は(小生を含めて)自己の好みに偏した主張になりやすく、その点の配慮も必要かと思う。これは小生の思いつきだが、掲載作品に対する一般読者の反応をみるため「感想欄」なるコーナーを、読者通信欄の一部に設けてはどうか。各号の面白かった作品名だけ挙げてもらうもので

ある。一人三行程度のスペースで充分であろう。文章や議論の不得手な読者(そのような人が本誌読者の大多数であろう)にも喜ばれるのではなからうか。一般の雑誌がよくやるように、読者からのアンケートをとるのも面白い。前号のサロンで「花と蛇」に苦情を呈したが、六月号では話の筋に進展を見せた。久方ぶりに美津子が登場し、唯一の男性役、文夫を軸に新趣向が企画されそうなので、大いに期待している。

(立町 老海)

若葉萌えいずる季節となりましたが、編集部の皆様、ご苦労さんです。六月号、大変たのしく読ませていただきました。特に私は、ロマンス、文芸的なものよりも、レポート並びにドキュメンタリーなものに読みがいを感じておりますので、カメラ・ハント、カメラルポ、いずれも自分の嗜好と一致しますところから、むしろこの記事拝読のため購入していると申し上げても、決して過言ではございません。六月号のカメラ・ハントは特に読みごたえ十分で、辻村氏の責め、並びに文章の能力、いずれも申し分なく、ベテラン健在の

双胎臨月蛙腹鮮烈写真	大手札六枚一組 略号二〇〇〇円	増田みゆき	略号八れや	双胎臨月腹強烈縛り	大手札六枚一組 略号二〇〇〇円	増田みゆき	略号八れゆ	臨月腹裸身の媚態	大手札六枚一組 略号二〇〇〇円	増田みゆき	略号八れえ	黒縄縦縛りの媚態	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	中河 恵子	略号八れぬ	立縛りにあうの裸女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	木村 洋子	略号八れね	開設された股間縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	木村 洋子	略号八れの	豆絞りの猿ぐつわ縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	木村 洋子	略号八れむ	柱宙縛りに喘ぐ刺青女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	山原 清子	略号八やか	高手小手に悶える全裸	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	山原 清子	略号八やき	緊縛に映える入墨の肌	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	山原 清子	略号八やく	脱がされた緊縛刺青女体	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	山原 清子	略号八やも	縄にのたうつ入墨裸身	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	山原 清子	略号八やし	腰巻一つで縛られる刺青女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	山原 清子	略号八やみ	女相撲迫力投業連続動作	大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円	大塚・東浦	略号八なる	恵子の妊孕美観賞	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円	中河 恵子	略号八ぬめ	孕み若妻の羞らい	大手札四枚一組 略号一〇〇〇円	中河 恵子	略号八ぬね	八の字の開股責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しい	足枷強制開股責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しみ	全裸強烈逆エビ責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しけ	両手吊り足枷責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しこ	両腕逆手吊り責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しら	豊満なる臀部責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しれ	大の字縛りと足挙げ責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しわ	お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号箕田京二宛へ願います。	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しわ
------------	-----------------	-------	-------	-----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	-----------	-----------------	-------	-------	-----------	-----------------	-------	-------	------------	-----------------	-------	-------	------------	-----------------	-------	-------	------------	-----------------	-------	-------	------------	-----------------	-------	-------	-------------	-----------------	-------	-------	------------	-----------------	-------	-------	--------------	-----------------	-------	-------	-------------	------------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	-----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	----------	-----------------	-------	-------	-------------	-----------------	-------	-------	-------------------------------	-----------------	-------	-------

感さえいたします。又、カメラ・ルポに於ては、谷山久美子氏はアマチュアの方ようですが、プロのモデルとは違った独特の雰囲気、雑誌面から感じられ非常に自然な気持ちで読ませていただきました。今後も、できることならカメラ・ルポは、アマチュアの方をプレイの対象としていただけたら、プロの人のように演出臭さがなく貴誌と読者が一体の感がいたします。今後も同様の記事をお待ちいたします。最後に、読者の好みも多岐にわたると思いますが、一愛読者の希望を左記に付しておきましたので、日々編集、企画の際は十分お含み下されたく、お願いいたします。一、性書ではないのですから、六月号の「探奇考料」は余りちょっと考えさせられます。二、連載の「贗作イリアス」戦記ものは、この本に少し場違いな感じがしないでもない。三、六月号のSMカメラ・ハントに於て、流腸プレイの記事があったが、私も当プレイには関心も強いので、今後もカメラ・ハントかカメラ・ルポのどちらかに流腸の記事を挿入してほしい。四、読者通信欄は互いに全国の同好の士がいるのを知って心強くもなる読み応えのある

ページであるので、もう二―三ページ増ページできないものか。以上、勝手なことを並べましたが、読者からの一言としてお含みの上編集下されたく、おねがいいたします。
(東京 一読者)

最近、奇クを読み始めた読者です。私は三十九才の流腸ファンですが妻は全く理解がなく、独り隠れて流腸を楽しみます。いく分かSMの傾向があると思いますが、緊縛、鞭打ちのようなハードなのについて行けません。流腸のように医学的でソフトで重苦しい感じが好きです。私は女性の体験による告白記事が、短文であっても真実味があって、創作や小説より興味があります。六月号の東京の鮎川幸子様の御意見のように、流腸関係の記事を短文でよろしいから掲載して下さい。
(東京大森・森一郎)

私は古い頃からの一読者で、女相撲マニアです。女相撲、女格闘関係の記事、絵画が見たくて本誌を購入します。しかし裸女血斗の類は好みません。最近の号では海野美津男、奮斗士好太氏の「花の女斗美たち」などは文章の内容は

大手札印画紙焼付

「緊縛女体美のシリーズ」

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂いまくる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げたす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

とも角として、海野美津男氏の絵雪崎氏提供の絵は価値のあるものだと思えます。私は、いく分マゾ傾向もあるようで、古い号では、沼正三氏の「手帖」山本節夫氏の「私のキタ・セクスアリス」鞍良人氏の馬化狂通信などに興味を持っており、近時では万田不仁氏の一連の作、姫島痴人氏、馬場好男氏のものなどもよかったと思います。須渾朔氏、文津部三郎氏と同一人か？の潤一郎、乱歩を論じた文章。斎藤夜居氏の軟文獻紹介なども価値のあるものでしょう。以上、ざっと感想を、述べましたが、私のような者にとっては、やはり上述のような系統の記事類には執着がありますので、今後とも御高配をねがいたいと思います。

(東京都・無名居士)

島根県の上井草雄さん、あなたのような人がまだおられるのは嬉しい限りです。ネルの赤い腰巻を愛好される由。多分あの、しっとりした感触からでしょうが。小生の住む都市の一角にも、洗い立てで滴が垂れんばかりの厚手の少々毛ば立った真赤な腰巻が干してあるのを時折、見かけます。確かに世をあげてパンティはやりになり

ましたが、日本の言葉がある限り赤い腰巻は、まだまだすたりません。むしろ若いあなたがたの手で卒先して保存するよう呼びかけて下さい。東京の浅草の仲見世に行くと、店によっては「蹴出し」といった「お腰し」と書いたりして、さまざまですが、そんなことより、およそ時代演劇になくはならぬ赤い湯文字こと真紅の腰巻に、そこはかとなく郷愁を感じる女性には案外、多いものです。小生の知人にも、奥さんと共通の下着を昼間はし寸のパンティを、夜は真赤な腰巻（冬なら当然ネルということになりました）を夫婦仲よく愛用している、よき家庭？があります。一つ憂さ晴らしに政党ではありませんが「日本腰巻党」でも組織してみましようか。

(東京都・牧高志)

全国の奇ク愛読者の皆様、お元気ですか。私は本誌を愛読してから六年になります。毎日の生活に張りがあり、楽しく過ごしています。毎月の奇クの発売日が遅く感じられてなりません。六月号でプレイを希望されていました横浜市横山はずみ様、近郊に同好の方があることに気がつき、早速ペン

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円

柱に立縛りてさらす

大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△へもV 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△へさV 四〇〇円

両手吊りて痛める女身

大手札四枚一組 略号△へしV 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△へすV 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△へせV 四〇〇円

両手吊りてあえぐ女体

大手札四枚一組 略号△へゆV 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△へたV 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△へちV 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△へつV 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△へてV 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△へとV 五〇〇円

次号(八月号)は六月二十五日に発売いたします

をとりました。私も緊縛の実行を夢見てきた者ですが、今まで軽い後手縛り等は行なったことがありません。しかし本心から相手の方がMでありませんので、長く続きませんでした。最も私の努力が不足だったことも原因と思われます。しかし近くに同好の方がおり、Sの方であるので早速プレイを申し込んだ次第です。私は二十四才、体重七十五キロ、身長一メートル七〇センチ、割と良い方と思っております。緊縛プレイが実現できません時はSMについて語り合いたいと思います。公務員ですので秘密は厳守いたします。城山ほずみ様、勇気を出して二人でSMを研究しようではありませんか。

(川崎市・寺本孝二)

貴社、益々御隆昌にてお喜び申し上げます。五月号の六角京之介先生の「創作、月影千浪」は文章が誠に麗筆そのものです。写真もこの度は大変よい出来栄えです。千浪の女性も仲々美人で、申し分がありません。つきましては次のことを切望します。「女性自刃」

ということとは、特に日本人のみのものと思います。麗人の女性が死斗の上自刃という場合は、最も魅力的なものがあります。したがって今後、たとえば「女長兵衛、女団七、女弁天小僧」あるいは女賊と称せられる女性が、最後に自刃するような創作とともに、出来のよい写真を一緒に掲載して頂きたいと思ひます。六角京之介先生も大変ご多忙と存じますが、ご麗筆と写真とを一緒にご配慮ねがいます。(東京・愛読者会代表)

鮎川幸子様、あなたは浣腸ファンとのことですが、実は私もあなたと同様、浣腸に対して非常に興味を持っています。今まで何回かこの欄に投書しようと考えましたが、なかなかその勇気がなく、今日まで来てしまいました。しかしあなたのような方がおられるのを知り感激し、お便りいたします。グリセリンがあなたの腸内をかけるめぐり、それが頂点に達したときついに羞恥に堪えながら元氣よく激しい排水の音が私の耳を撃った。白濁から薄黄色に変じて、軟

かい固体が後半に交って落下し、特有の臭気が立ち竈め、私の鼻をつんとさす。今からこんなことを考えてばかりいるんです。初めてのお便りに失礼なことを書いてごめんなさいね。同じ関東の空の下にいる我々に、きつと素晴らしい明日が待っているでしょう。

(川崎・高山英雄)

現在の女性は、大なり小なりフンドシというものに魅力を感じていると思う。フンドシ・マニアの方、どしどしと通信欄に文通を寄せて下さい。女斗彦様の気持は、よくわかります。もし私のような者でもよろしかったら、目の前でマワシなりフンドシを締めてお希望にそのような動きを参考に、よき作品を書いて下さい。心からお願ひします。モデルという大それた考えはありません。フンドシ、マワシファンの方の希望がかなえられればと思っております。私は仕事の都合で東京を離れ熱海にきています。勿論マワシは二本、持参しております。フンドシも同じです。女斗彦様の今後の発展を祈ります。「私の希望」の伊藤ますみ様、貴女は幸福な人です。ぜひともフンドシ旅行をして下さい。

そして、その思い出を又の機会に書いて下さい。貴女の御主人のお話も合わせて載せて下さい。揮フアンとして心から結婚をお祝い申し上げます。奮斗士好太様「美女力士に期待する」嬉しく拝読いたしました。良き作品をお待ちしております。女相撲ファン、フンドシマニアの方々の活躍を祈ります。(東京・間和志締男)

前々から一度お便りをすると思いながら、なかなか思いついて出ずことはできませんでした。小生は子供の頃から浣腸と聴診器に興味を持って二十三年の男子です。一度、浣腸器、聴診器を使って女の方とプレイしてみたく毎日のように思っています。私はひどいことは好みません。お互いに軽い程度のプレイを、楽しみたいものです。(大阪・田中好雄)

私は国鉄に勤めている二十七才の妻子ある男です。私が女性の責めを意識したのは、六、七年前ですが、初めは全部の女性が責めを楽しむものとはばかり思っておりましたが、間違いとわかり非常にがっかりしました。私の妻はプレイをすることを、とても嫌がりま

ので、夜もつまらない時が殆んどです。そして今では奇クを読んで楽しんでます。前々からお便りを出そうと思いつながら、恥ずかしいような気がして勇気が出ませんでした。今回は思いきって皆様の仲間に入れていただく決心をつけました。城山ほずみ様、貴女を六月号で知り、私のような者でもよろしければと思いつ、ペンをとった次第です。私は身長一六四センチ、体重五十五キロです。早く貴女とプレイをしたいと思っています。

(大磯・伊藤生)

最近の奇クは、作品の内容が充実しています。しかしSM画(特

にM画)や写真がなくなってきたことは残念です。毎月、買い求めると、先ず、それらの載っているページを開いて、女性に緊縛されて虐げられている男を自分自身と置きかえることによって精神的被虐を味わい、更には自分に直接働きかけてくれる若い女王様の出現を夢見たものです。最近春川ナミオ氏のM画に期待をつないでおりますが、何か寂しさや物足りなさを感じ、その欲求を自分で満たすことによって補うべく、自ら描いて近頃は投稿してみたりしています。私も奇クのお蔭で、自分の潜在的M性の芽を大いに伸ばせて頂き、SM的知識もある程度、身

につきました。が、今までは作品としては主に小説、随筆等に興味を示してきたのでまだまだ専門的な論文を読むほどには達していません。ここで提案があるのですが、我々初心者向きに「性語解説特集」といったものを企画して頂き、初歩的な性語の定義などから解説してほしいと思います。また作品としては、日本の時代ものは余り好まないで、挿画を添えた現代ものを、どしどし載せてほしいと思います。現代ものであればあるほど更に挿画があればあるほどエクスナシーに達する過程ではないかと思うのですが……。辻村氏、山本氏のフोटにも期待しています。

でハントに精を出して下さい。

鮎川幸子様。どうしても貴女のお話を伺いたいと思い、筆をとりました。私は東京に住む二十一才の男性です。私は幼時、浣腸の洗礼を受けて以来、浣腸が持つ妖しい魅力のとりこになってしまいました。最近、叔母と近所の病院の看護婦さんにされた恥しい浣腸のため、ますます浣腸への憧憬が強くなりました。そしてどなたか理解ある話し相手さがして下さる友達になりたいと思っています。

(東京・五十嵐)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円(御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送申し上げます。

昭和40年6月号	昭和40年5月号	昭和40年4月号	昭和40年3月号	昭和40年2月号	昭和39年12月号	昭和39年11月号	昭和39年10月号	昭和39年9月号	昭和39年8月号	昭和39年7月号	既刊雑誌在庫案内
送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	送共三三	
〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇	
円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	円円円円	

昭和
--

☆編集後記☆

○異色ある読物として今月号では牧高志氏の「腰元物語」と能美積氏の「データーと筆拔けのはなし」を推したい。千草忠夫氏から久しぶりに「縛り映画のことなど」の小品を頂いた。歯ごたえのある読切を期待する。

○力作「花と蛇」の向うをはって白鳥大蔵氏の「緋縮緬地獄」は滑りだしも好調に愈々佳境に入って第三回を迎えた。御声援をお願いしたい。団鬼六氏の「肉の飼育」はロケ地の群馬県から撮影中のスナップを急送して貰ったので誌上を飾ることが出来た。

○巻頭を飾った予世場良三氏の一文は、マニアの真情がにじみ出て妙。御意見があればお待ちしたい。千葉青鬼氏の「復讐」が今月号

で完結した。淋しく思われるファンも多いことと思うが、次回作を楽しみに力作の労をねぎらおう。佐野寿氏の「マリアン」の思い出は女性乗馬ファンにとっては絶対見逃すことの出来ない一作と思う。

○軽快な読物「ちいさな奔流」は香川泳三氏の才筆によって嫌味なく読ませてくれる。同じく水沢登氏の「あぶらぶす・こんと」も引続いてあとが読みたくなる小品。芳野眉美氏の「浮気の手紙」と共に、一ぶくの清涼剤を飲ませられた気持ちにさせてくれる。

○緊縛撮影行の裏面を描いて絶妙の筆を揮う辻村隆氏の「連縛無残像」、息もつかせぬ粘っこいタッチの「花と蛇」、文献紹介では間然とするところのない斎藤夜居氏の「探奇考料」と新緑の一夜をお楽しみ願いたい。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限りません。若し引用する部分があります。採用原稿に對しては賞金十萬円迄贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構です。又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に對する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円(送20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたします。が、御手配が間に合わない場合は、直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

七月号 〔第二十二巻第八号〕
昭和四十三年六月二十日 印刷
昭和四十三年七月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 北村 俊夫
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番△
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されたように充分に注意して編集いたしております。すが、本誌成人向として発行を企図しております。関係上、十八才未満の方には絶対販売下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。